

俺と家元（かのじよ）と巨砲主義

ターキーX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車道の試合での昂りを抑えきれない家元と、とある事情で失恋直後の戦車道シヨップの学生。

そんな二人と一人がハメ倒す。それだけのお話。

本編完結。特別編「俺と家元（かのじよ）と先輩後輩」更新

目次

俺と家元（かのじよ）と巨砲主義

第一話 1

第二話 13

第三話 26

第四話 40

俺と家元（かのじよ）と学園艦

第一話 54

第二話 68

第三話 80

幕間

「三人で」前編 91

「三人で」後編 103

俺と家元（かのじよ）と南国の島

第一話 113

第二話 126

第三話 140

俺と家元（かのじよ）と夏の嵐

第一話 152

第二話 167

第三話 179

番外編

俺と???と理髪店（前編） 193

俺と???と理髪店（中編） 206

俺と???と理髪店（後編） 219

俺と家元（かのじよ）と娘と母と

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

俺と家元（かのじよ）と天才少女

第一話

第二話

第三話

俺と家元（かのじよ）と決戦前夜

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

俺と家元（かのじよ）と夏の終わり

第一話

第二話

第三話

第四話

番外編・5 years after

第一話

第二話

第三話

495 482 471

455 441 428 416

400 387 373 359 345

333 320 306

290 277 263 250 236

第四話	508
番外編	
シヨート番外編・俺と先輩（かのじよ）と晩秋の酒	521
番外編・俺と家元（かのじよ）と中華街	
第一話	534
第二話	548
第三話	561
制服家元・公式実装記念	
特別編・俺と家元（かのじよ）と先輩後輩	575

俺と家元（かのじよ）と巨砲主義 第一話

横浜港からの微かに潮の香りを含んだ風が鼻をくすぐる。

「よい……しよつとー」

ベイサイドの商業エリア、「戦車道ショッピング」と書かれた大きな看板を掲げた店舗の搬入口。

小型トラックから新商品の段ボールの山を下ろし切り、「しのはら」と書かれた名札をエプロンに付けた青年が大きく息をついた。前ポケットからタオルを取り出し、顔の汗を拭く。

「お疲れ様ですー。あと、ハンコだけ貰っていいですか？」

「ああ、そのスタンプ置きにあるので押しておいてください」

受領証を出してくるドライバーの中年に、青年は箱を改めて抱えつつ顔の動きで近くの小さな机に置かれたスタンプ台を示した。ひとつひとつの箱の重さもそれなりだが、店頭陳列用の分も含めてなかなか数が多し。これを運びきるのは一仕事になりそうだ。

「篠原くん、すまないねえ」

店内から、店長の名札を付けた壮年の男性が腰を少し曲げた状態で顔を出した。篠原と呼ばれた青年は首を振る。

「休んでいてくださいよ、店長。まだ立つのも辛いですよね？」

「まあ……まあね。でも、篠原君も無理はしないでくれよ？ 僕が動けない分でお願ひしたとはいえ、連勤になるんだし」

「大丈夫ですよ。その、今月、割とヒマになったんで」

店長の気遣いに彼、篠原しのはら和明かずあきは答えつつ苦笑を返した。

実際のところ、大学一年の夏休みというこの時期において和明の予定は当初は色々埋まっていた。その予定が全て白紙となったのはつい一週間前の事だ。この夏、高校時代からの彼女との仲を深めるために練っていた様々なプランが“ちよつとした事情”によるトラブルからの交際解消によって雲散霧消——要は、振られてヒマになったのだ。

「……はあ」

段ボールを抱えつつ和明はため息をついた。仕事に専念して忘れようとしても、どうしても先週の出来事が思い起こされてしまう。

どうにもまだ失恋のトラウマを克服できてはいない。このバイトにしても戦車道をやっていた彼女の紹介で始めたものだ。

戦車道というマイナースポーツ（こう言うと彼女は怒ったものだったが）を当初は和明もロクに知らなかった。女性専門のスポーツで男子禁制、その程度の認識だ。

しかしこの戦車道ショップ——戦車から各種パーツ、パンツァージャケット等の服飾品、関連書籍やレーション等のミリタリーグッズも扱う戦車道専門店——で働くようになり、そうでもないという事を和明は知った。

選手こそ女性のみだが、その裏方である整備スタッフや戦車道連盟の役員には少なからず男性がおり、試合を支えていること。こういった専門店では男手が必要なこと、戦車道を古くからやっている年配女性などには男性スタッフの方がウケがいいこと等だ。

「ふう……これで、よしと。店長！ 陳列終わったんで、カウンターに戻ります」

商品の陳列と収納を終え、和明はカウンターにいた店長に声をかけた。ギックリ腰の後遺症か、まだやや前傾姿勢なのが痛々しい。

「ありがとう。少しだけ書類仕事をするから、それが終わったら休憩に入って」

「はーい」

事務室に向かう店長に代わりカウンターに戻り、和明は店内をざっと俯瞰した。

高校も既に夏休みに入っているからか、制服姿の女子が多い。壁に設置された大型モニターの映像を眺めている少女もいる。放映されているのはケーブルTVの戦車道チャンネル。先日行われた、戦車道社会人リーグの映像が解説と実況付きで流れている。

「はあ……」

しつかりしろ俺。失恋なんて珍しくもない。ただ彼女とは「合わな

かった」それだけの事だ。

そう内心に言い聞かせながらも、戦車道に努める少女たちが目に入るとどうしても元彼女の事を連想してしまう。店長には悪いが、この勤務を続けるのも難しいかもしれない。

和明がそんな事を考えていると、入店チャイムと共に自動ドアが開いた。思考を接客モードに切り替え、挨拶を入り口に向ける。

「おっと、いらっしや……!?!」

だが、その言葉は途中で途切れた。

入ってきたのは二人の女性客。年の程はおそらく30代か、40代。

連れで来る中年の女性客などは確かに珍しくない。しかし、その客は何というか——明らかに纏う雰囲気は違っていた。

一人は身体のラインがくつきりと浮き出るようなワインレッドのドレスを着た、亜麻色の髪の女性。同色のベレーを頭に乗せ、この暑さにも関わらず白い手袋をはめた姿は、まるで高級な立食パーティーの帰りにそのまま立ち寄ったような風情だ。

化粧は薄く、口紅も薄めのくどさを感じさせない自然な色。柔らかな微笑みと少し大きめの瞳が温和な印象を与えてくると同時に、おそらくは彼女を実年齢から何歳かは若く見せている。

また、その浮き出た身体のラインが描く曲線も見事なものだった。ひょうたん型と言うのだろうか、「出る」ところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる」という陳腐な表現しか和明には思い浮かばなかった。

「あの、ちよつといいかしらっ。」

「は、はい!?!」

「忙しいところ申し訳ないのだけど、店長さんはおられる?」

二人は和明のいるカウンターまで足を向け、亜麻色の髪の女性が透明感のある声でこちらに尋ねてきた。咄嗟にどう返事をしたものか和明が答えられないでいると、もう一人の女性が張りのある声で言った。

「怪しい者ではないわ。『島田と西住が来た』と言えば分かります」

「は……はいー」

そのもう一人の女性も亜麻色の髪的女性とは対照的な、しかし強烈な印象を和明に与えた。

化粧気のない女性であった。亜麻色の髪的女性も薄化粧だったが、こちらはファンデーションを塗った程度で口紅も付けてはいまい。服装も服装で飾りも一切ない黒スーツに白ワイシャツ。自分を綺麗に見せようとか、お洒落をしようとかの発想が一切介入していない、機能美や効率だけを気にしたかのような出で立ち。

しかし、その化粧気の無さが逆に彼女を美しく見せていた。亜麻色の髪的女性とは対照的な切れ長な瞳と薄い眉、一本の跳ねも無く切り揃えられた長い黒髪が与える鋭利な印象は男性的な服装とマッチしており、全体として凜とした空気を彼女に帯びさせている。

また、その顔立ちも下手な化粧を施す必要が無い程に整っていた。目元の僅かな皺さえ隠せば、まだ20代でも通用するのではなからうか。その肌は瑞々しく、きゅつと引き締められた口元にもくすみ一つ無い。

それに加えて彼女の印象を際立たせていたのは、その男性的な服装でも隠しきれしていない豊満な身体であった。

全体的に肉が付いているという訳ではない。腰回りは細く、それでいて布地に十分なゆとりを持たせている筈のスラックスは豊かな尻の張りを浮かべている。上も上で、スーツの下の白いワイシャツは胸元のボタンが弾けそうな程に薄い布を張り詰めさせており、うっすらと見える黒いブラは否応なくその内側の豊かな乳房を和明に想像させた。

「しよ、少々お待ちくださいー」

顔に血が昇り、自分の顔が赤面しているのを自覚しつつも和明は何とか接客モードを維持して事務室に向かった。

事務室の店長は和明の様子に最初は怪訝な表情を浮かべていたが、黒髪の女性の言葉をそのまま伝えると弾けるように席を立ち、和明以上に慌てた様子で売り場に向かっていった。

「どうも『家元』！ 本当にお世話になっております、ご連絡いただけ

ればお迎えしましたのに……!」

「そんな仰々しい用事ではないわ。この近くで彼女と揃っての仕事があったから、寄ってみただけです」

「ふふっ、お元氣それで何よりですわ」

「いやいや、この前に砲弾を抱えようとして腰を……」

そのまま土下座しそうな勢いで店長は二人に頭を下げる。普段から物腰の低い方ではあるのだが、それにしても来賓めいた対応だ。

「(家元?)」

その言葉に和明は引っ掛かりを覚えた。彼女らとは和明も初対面の筈だが、確かに何処かで二人を見たことがある。

何かヒントは無いかと和明は店内に視線を巡らせ——あっさりとその答えに辿り着いた。

『——さて、それではこの試合、お二人はどのように見られましたでしょうか? 島田さん、如何でしたか?』

『そうですね……くろがね重工は、先の大学選抜との試合での敗北を良い材料として練度を上げてきたと思います。ただ、今回の戦術がその練度の方向性とかみ合っていなかったのが敗因のひとつではないかと……』

『なるほど。西住さんは、どう思われましたか?』

『私として注目したいのは、試合中盤のブラック・デューク社チームが挟撃された際の迎撃の迅速さです。あの時……』

「……あ」

モニターに流れる、戦車道チャンネルの試合解説映像。

そこでアナウンサーに答える二人の女性は、眼前の二人と一致していた。亜麻色の髪の女性の前には「島田流家元・島田千代」と書かれたボードが、黒髪の女性の前には「西住流家元・西住しほ」と書かれた同じものが置かれている。

「(戦車道家元……!)」

戦車道は古くからある武道のひとつであり、様々な流派があること程度は和明も知っていた。確か、その中でも西住流と島田流といえば諸流派の中でもトップかそれに次ぐ名門だった筈だ。もちろん、本物

を生で見るのは和明も初めてである。

他のお客の対応をしつつも、和明はどことなく気になり店長と二人の様子から意識を離せないでいた。

「どうやら二人が店長に何か頼み事をして、それに店長が困っているようだ。」

「やがて、こちらの接客が終わったのを確認すると和明のところに店長が歩み寄り、小声で言ってきた。」

「篠原くん、確か君、戦車の公道免許を持ってるって言ってたよね?」
「え? ええ、まあ」

「その……お二人が、新商品のオイルを使った戦車の具合を実際に乗って確かめてみたいと言うんだ。レジは見ておくから、裏の試乗スペースにあるティーガーの運転をお願いできないかな?」
「ええっ!?!」

戦車道シヨップはその名の通り、戦車道に関する商品を一通り扱っている。無論、戦車自体もだ。そういった戦車の試乗や砲撃テストをしてもらう為の試乗スペースも店の裏手に用意してある。

しかし、本来はお客と同乗するのは戦車道経験者のパート女性などの筈だ。流石に即答できかね、和明は店長に尋ねた。

「パートの吉田さん、確かあとちよつとで出勤でしたよね? 家元さんに少し待ってもらって彼女に……」

「それが……さつき裏に居た時に連絡があつてね。お子さんが熱を出して、病院に寄ってから来るとかで遅くなりそうなんだよ」

「……………」

ちらりと二人の方を見て、和明は小さくため息をつくと言った。

「言っておきますけど……免許を持ってるって言っても俺、素人の素人ですよ?」

「大丈夫だよ、お二人とも優しい方だから」

「……………信じますよ、店長?」

「何だか西住流家元の方は粗相をすると斬られそうな雰囲気なんだが、本当に大丈夫なんだろうか。」

そんな事を思いつつも和明はエプロン姿のまま二人のところまで

行き、頭を下げた。

「ええと、お待たせしてすみません。俺……じゃなかった、自分が運転をやらせてもらいます。篠原和明です、よろしくお願いします」

「ふふ、そんな緊張しなくつても大丈夫です。軽く乗せてもらうだけですから」

こちらの緊張を解くように島田流家元が柔らかい微笑みを向ける。胸に手をあて、今度は彼女から言葉を返す。

「篠原さん……篠原くんがいいのかしら？ 改めて、島田流で家元をさせていただいている島田千代と申します。こちらの店長さんには学生の頃からお世話になっていて、寄らせてもらったの。こちらこそお願いするわね」

「は、はい！ え、ええつと……」

「西住流家元、西住しほ……よろしく頼むわ。学生さん？ 男性で戦車の公道免許を持っているとは珍しいわね」

「そう……ですよね。ちよつと、色々あつて」

和明の視線を受けた西住流家元が静かに言った。口調こそ穏やかだが、その面持ちは無表情に近い。イメージ通り、あまり感情を表に出さない人ようだ。彼女からの質問に、和明はあいまいな返事をした。

実際、この免許は元彼女のために取ったものだ。戦車道を履修してただけに彼女は戦車自体も好きだった。その戦車を自分が操縦し、海まで連れてゆく。そんなシチュエーションを想定していたのだが

「(……泣く事は無いよなア)」

辛いことを思い出しそうになり、慌ててそれを振り払うと和明は二人に言った。

「それじゃ、今から戦車の立ち上げをします。お二人はパンツァージャケットに着替えて……」

「私は大丈夫、このままで乗らせてもらおうわ」

「西住流はそういう所が無頓着ね……私は着替えさせていただくわ。更衣室はどこかしら？」

和明の言葉にしほが首を横に振る。千代は少し呆れたように、しかしいつもの事なのかそれ以上は言う事無く和明に尋ねてくる。千代に場所を教え、和明は一礼すると裏手へと向かった。

この暑さだ。戦車の中の暑さ——いや、「熱さ」と言うべきか、多少の覚悟はしておくべきだろう。搬入口を開けると、外の潮の香りの混じった夏の空気が流れ込んでくる。まだ曇り空なのがせめてもの救いか。

幌がかけられたガレージに並ぶ数台の戦車。その中から指示されたティーガーを見つけ、状態を確認する。オイルは確か店長が納品時にそれと交換していたはずだ。これならすぐに動かせそうだ。

「……もう、動かしても大丈夫みたいね」

「あ、はい、西住さ……」

背後からの凜とした声。振り向いた和明は思わず言葉を失った。

別にしほが奇抜な格好をしていた訳ではない。着ていたジャケットを脱ぎ、スラックスとワイシャツだけの姿になっただけである。

しかしそれだけで彼女から放たれるフェロモンは何倍にもなったように和明には感じられた。あれでもジャケットで押さえつけていたのだろう。ワイシャツの胸回りの布地はぴんと張り詰め、うっすらと——否、既にブラの形状が分かる程に透けてしまっている——しほの乳房は重そうに揺れていた。

「あ……」

「基本的な操縦はお願いします。途中で操縦を代わってもらう事があると思うけど、その時は車長席に座って」

言葉が出てこない和明にそう言うと、しほは先に手慣れた所作でティーガーに手を置き、ハッチへと向かった。

「は、はいー」

ようやく我に返り、和明はしほの後を追った。搬入口からは店舗レインタルの深緑のパンツァージャケットに着替えた千代も来ている。

「ティーガーは久しぶりね。篠原くん、よろしく」

こちらはこちらで先ほどのドレスとは打って変わって無骨なジャケット姿だが、全く印象の違う格好でありながら恐ろしく似合っている。

た。髪は後ろで簡単に束ねられ、隠れていたうなじが露わになっている。

「こちらこそ……その、あんまりティーガーは慣れてないんですけど、頑張ります」

操縦席のシートにエプロン姿のまま身を置きつつ、和明は自分の心の動きに動揺を感じていた。

「(何で緊張してんだよ……落ち着け、確かに美人だけど、どっちも学生の子供がいるくらいの年なんだから)」

彼女らが既婚者で、同時にそれぞれに娘がいる事は戦車道二ユースなどで知っていた。確か西住流の方は高校生の年子の姉妹、島田流には13歳にして飛び級で大学に入った天才がいた筈だ。

それこそ、この夏で19歳になったばかりの和明からしてみれば二人の家元は母親とさして変わらない年の差があるのだ。緊張だとか興奮だとかとは無縁の存在であるはずだった。

「……………」

興奮。そう、先ほどしほのワイシャツ越しの乳房を見たとき、和明の股間は確かに反応した。してしまった。

自分に中年女性に興奮する性癖があると思った事はない。それ故に和明は自身の中の感情や衝動を持て余した。

「…………準備はいいかしら？」

「はっ!? あ、は、はいっ! 大丈夫です。行きます!」

車長席に座るしほからの言葉に我に返った和明は、慌ててエンジンを点けるとクラッチを繋げ、ゆっくりとアクセルを踏んだ。重々しい履帯音と共にティーガーが動き始める。

「ええと、どう動きますか?」

エンジン音によって車内は大きな声を出さないと届かない。和明は首を傾けてしほに言った。

「とりあえず試乗用のコースを二周ほど回って」

「うん……確かに少し音が静かになってる。高額になっただけはあるわ」

対して、しほの声はさほど大声でも無いのに和明の耳にしつかりと

届いた。戦車の中での伝達の仕方や、通る声の出し方を心得ているのだろう。流石は家元と言ったところか。

もう一人の千代は砲手席に座り、オイルの潤滑の具合がどれほどかを確認しているようだった。

しほの言葉に従い、和明は操縦桿を握るとティーガーを低速でコースに入れた。ゆるやかな曲線を描き、ゆるやかな凹凸が作られたコースを丁寧に超えてゆく。

「……………」

「……………」

後方の二人は音や稼働の具合を見ているようだ。運転に集中している事もあり、和明の中にあつた緊張も少しずつ解けてゆく。

そう、美人の家元と言つても自分とは店員と客以外の何者でもないのだ。向こうはこれが終われば自分の顔も忘れるだろうし、自分は「ウチの店に家元が来た」程度の話のタネになって、それだけだ。

ようやく和明の内心の重みが軽くなったところで一周目を終えた。再びコースの入り口に向かう。

「……………ん？」

車長席のしほの気配が動いた。席から立ったようだ。

どうしたのかと思っていると、その気配はそのまま和明の背後まで近づき——そつと、操縦桿を握る和明の手に自身の手を重ねた。

「え!! に、西住さん!!」

「篠原くん。貴方、初心者としては筋のいい動かし方をしているわ。ただ、曲がる時の捌き方に少し雑なところがあるわね。手の力を抜いて、私の動きに合わせてみて」

「は……………はい……………」

言われた通りに体の力を抜く。和明の鼻孔に、しほの体からであるう甘さとうつすらと汗が混じった香りが届く。

「(うつ……………)」

「(ここ、ここ)から動かしてみなさい」

その香りに、和明の股間がぴくりと反応する。和明の手に重ねられたしほの手が動き、操縦桿を巧みに動かしてゆく。どことなくぎこち

なさを覚える和明の操縦とはまるで別物の、滑らかな動き。

その動きに任せて操縦桿を動かすと、ティーガーは一周目よりも遙かに静かにカーブを曲がった。

「……この位の力の入れ方で十分に動いてくれるわ。力任せでなく、流れを意識すればもつと楽に操縦できるはずよ」

「あ、ありがとうございます……」

「お疲れ様、ここからは私が操縦するわ。篠原くんは車長席で休んでいて」

その言葉に和明は頷くと、操縦席から身を起こして車長席へと向かった。操縦者がしほに変わったただけで車内の揺れが無くなったようにも思える。

車長席に腰かけた和明に、砲手席の千代が立ち上がり声をかけてきた。

「お疲れ様、篠原くん」

「いえ……すみません、下手な運転で……」

何となく、自分に操縦が振られた理由が和明にも分かってきた。一周目は、初心者が操縦した時で既存のオイルとどの程度違うのかを確認したかったのだろう。

「そんな事はないわ。いい運転だったわよ?」

そう言うと千代は車長席の和明に身を寄せてきた。

「どうかしましたか? 島田さん」

「……ちよつと、失礼するわね」

「えっ? んっ!?!」

首筋にぴとつと千代の指が触れた。くにくにと指が動き、和明の体の筋肉のつき具合などを見ているようだ。

「し、島田さん?」

「……うん、体つきも悪くないわね」

何が満足したのか、今度は千代は和明に言った。

「ねえ、篠原くん。貴方……彼女のこと、どう思うかしら?」

「彼女?」

「西住しほさん」

千代は微笑みを浮かべたまま和明に聞いてくる。彼女の真意を測れないまま、和明は素直に答えた。

「え、ええつと……き、綺麗だと、思います」

「本当に？」

「本当ですよ。そりやテレビで見た事はありませんけど……それ以上、だったって言うか……」

「……そう」

お世辞のつもりは無かった。千代はもちろん、しほは綺麗で、同時に——煽情的だと思った。

その答えは千代を満足させるものだったのだろう。頷くと、今度は彼女は和明の耳元に口を寄せ、言った。

「それじゃ……彼女とセックスしたいって、思う？」

第二話

「それじゃ……彼女とセックスしたいって、思う？」

その島田千代の言葉の意味が和明には一瞬理解できず、やがて急激に顔を赤くすると操縦席の西住しほに届かない程度の声で返した。

「な……何言ってるんですか島田さん!? からかうのは止めてくださいよー!」

流石に冗談にしても悪趣味に過ぎる。少し怒った風に答えた和明の反応に千代は気を悪くする風でもなく頷いた。

「……うん、合格。真面目さも十分ね」

「だから、そんな……」

「いきなり変な事を言っただけ悪かったわ。でも……これは結構真面目な話なの」

そう言うと千代は懐からメモ帳とペンを出し、さらさらと何かを書くくと和明に手渡した。

「詳しい話を聞いてくれる気があるなら、今日のお仕事が終わったらここに電話を頂戴」

そこには携帯番号が書かれていた。どう反応して良いか分からず、とりあえずメモをポケットに入れる。

その時、ティーガーが減速した。千代と話をしている内に二周目の終わりに近づいたようだ。

「このままガレージまで行くわ」

下の操縦席からのしほの声。千代は意味深な視線を投げかけたまま砲手席に戻る。

一方的に言われたままの和明は、そのまま車長席から動けずいた。

その後はあっさりと試乗は終了した。新商品のオイルの性能は家元二人にとつて満足に足るものだったらしく、その後で店長と大口の注文を行っていたようだ。腰をさすりつつも店長のテンションが気持ち高そうだったのがその証明だろう。

二人はそれから店の中を一通り見回り、その場にいた戦車道履修者の少女たちからの黄色い歓声を受け、そして帰っていった。和明に対しても簡単な挨拶をしてきた程度だ。

やがて、次第に西日が店内に差すようになってきた。そろそろ今日のシフトも終わりだ。

「店長、それじゃ上がりますね」

「お疲れ様。今日は家元の試乗の操縦ありがとうね。助かったよ。家元たちも篠原君の事を褒めてた」

「そ、そうなんですか?」

「ああ。『男にしておくのは惜しい』ってね」

「それ、流石に嘘ですよね?」

苦笑いを浮かべる和明に店長は笑い、言った。

「ハハッ、まあね……篠原君こそ、何か言われなかったかい?」

「……いいえ、特に何も」

『セックスしたいか』と聞かれた事は流石に言えなかった。

「ああ、そうそう。明日の急をお願いしていたシフトだけど、パートの西田さんが午前から入れる事になったから。篠原君は予定通り休んでくれていいよ」

「え、いいんですか?」

「ああ、大丈夫。もともと無理言っただけをお願いしていたしね」

「分かりました。それじゃ明後日、またよろしくお願いします」

タイムカードを押し、エプロンを外す。ロッカーにエプロンを戻すとき、和明はポケットの中のメモに触れた。

「……………」

悪趣味なジョークと考えるのが普通だろう。この番号にかけて誰が出るやら。

そんな考えもあつたが和明は何となくそれを捨てる事ができず、そのメモをジーンズのポケットへと移した。

「お疲れ様です」

「お疲れ様ー」

鞆を手にして事務室を出る。気持ち、鞆が出勤時より重くなった気

がした。

店を出て、夕日に照らされたベイサイドを眺める。この町はここからも賑わいが続く。ランドマークタワーに大型ショッピングモールに中華街に赤レンガ、家族で楽しむにも恋人同士で思い出を作るにももってこいの場所ばかりだ。

和明は携帯を取り出し、少し迷い、やはり電話画面にするとメモの番号を打ち込んだ。

「……………」

三度の発信音で相手が出た。先ほど聞いたばかりの柔らかい声が和明の耳に届く。

『はい、島田です』

「あ…………え、えつと、すいません。さつき戦車道シヨップで…………」

『ああ、篠原くんね。ありがとう、只の悪戯と思われたんじゃないかと心配だったの』

そう言う千代の声には本当に安心したような響きがあった。

どうやら彼女の行為は本当に悪戯という訳では無いようだ。では一体、どんな考えで千代はあんな事を言ってきたのか。

和明がそう考える内に、千代は言葉を重ねてきた。

『この後の予定は、何かあるかしら？』

「いいえ。特に無いですけど……………」

『それじゃ、ちよつとご足労願える？ 今から言うホテルに泊まっているから……………』

「ええつと、待ってください。メモ取ります」

携帯を肩で挟み、彼女の言うホテルについてメモを取る。さほど離れた場所ではない。歩いて10分ほどだ。

「…………分かりました。あと15分くらいで行っても大丈夫ですか？」

『分かったわ。篠原くん、夕食はもう食べた？』

「え？ いいえ……………」

『それじゃ、ルームサービスを取っておくわね。そのままの格好でいいから来て頂戴。また後で……………』

そう言う千代は電話を切った。

夏の暑さは夕方になっても簡単に下がるものではない。早くも汗ばみ始めた額の汗を拭い、和明は歩き始めた。道中、無意識にカップルの姿を目で追ってしまふ。

やがて、和明はホテルに辿り着いた。家族旅行程度でしかホテルを利用した事も無い身だが、立派なホテルである事はその外観からも理解できた。

フロントを抜け、エレベーターへ。家族連れや修学旅行などでも使われているホテルのようで和明のような大学生も普通に見かけるが、どうにも落ち着かない。

エレベーターが止まり、フロントとは打って変わって人気のない廊下に出た。電話で言われた部屋番をゆっくりと探す。

「ええつと……ここか」

部屋番を確認し、ノックする。少しの時間の後、ドアのロックが開けられる音が鳴った。

「……篠原くん？」

「は、はい」

「迷わなかった？ そのまま入って」

中からの千代の声。和明は言われるままに部屋に入った。

「……………」

和明は思わず硬直した。千代がナイトガウン一枚の姿だったからだ。

「…………… ああ、この格好ね？ 今日は結構汗をかいたから、早いけどシャワーを浴びていたの」

まだ火照りを残したままの肌を隠すでもなく、千代はさらりと言った。本当に下着も着けていないのか、緩く絞められたガウンの前から豊かな乳房が形作る谷間が覗いている。

「は……入っつていいんですか？」

「ええ、どうぞ。簡単だけど、夕食の用意もできているわよ」

そう言うと千代は室内に視線を移した。大きなダブルベッドにテレビに冷蔵庫、高級そうなソファが幾つか。そのソファの中央のテーブルにはサンドイッチとドリンクが置かれている。

「ぎ、座って」

千代に促され、和明はソファのひとつに座った。体をふわりと受け止めるソファの柔らかさに驚く。本当に高級なソファとはこういうものか。

和明が座ったのを確認すると千代はその正面のソファに座った。足の位置を整えようと動いた際、ガウンの内側の太ももの辺りまで見えた。つい視線で追ってしまうのは、男の悲しい性だ。

「それじゃあ、食べながら話をしましょうか。学生さんには足りなかったかしら？」

「いえ、そんな事は……いただきます」

頭を下げ、和明は氷が揺れるグラスを取り中のコーラを飲んで喉を潤し、次いでサンドイッチの一つを口に含んだ。何というか、コンビニのサンドイッチとは色々な意味で格が違う味がする。

和明が食べ始めたのに続き、千代は音もたてずにサンドイッチに手を伸ばした。皿に添えられたナプキンで丁寧に指を拭く姿が何とも様になっている。

「……まず最初に言っておくと、あの時に篠原くんと言った言葉はその通りの意味に取ってもらっていいわ」

いきなり話の本質に踏み込んできた。サンドイッチを呑み込み、和明が言った。

「どういう事なんですか？」

「戦車道という競技については、どの程度ご存じ？」

「まあ……ルールとか、どんな競技かとかは、大体」

「戦車免許も持っていたものね……ひよつとすると、彼女さんとかが戦車道を？」

千代の言葉に和明はびっくりと反応を示し、少しの沈黙の後に言った。

「そんなところです。もう、その、振られちゃいましたけど」

「……悪い事を聞いたわね」

千代は頭を下げ、話を続ける。

「戦車道って競技は、草創期に比べて遥かに簡略化、軽量化が進んだと

はいえ女性がやるスポーツとしてはハードな部類に入るわ。試合展開によっては何時間も鉄と油の匂いに包まれ、砂漠なら暑さ、雪原なら寒さに耐えて重さ数kgの砲弾を抱え、撃ち合う」

「……………」

実際、映像などで試合を見ている中で和明もそう感じた事もある。

しかし、島田流家元の口から語られる言葉にはそういった感覚に依るものでない重みと説得力があった。「女子供のスポーツ」と揶揄される事もある戦車道だが、その厳しさは男性専門のスポーツに負けるものではないだろう。

「それに耐えうるだけの強さが、戦車道の選手には求められるの。フィジカルな強さだけでなくメンタル面……精神力の強さや、闘争心の激しさ。疲労や焦燥すら忘れさせる程の敵への闘争心が、より強かった方が勝つ。戦車のスペックなんて、そのメンタルを十全に働かせるために必要なツールに過ぎないわ」

「なんか……凄い世界ですね」

「ふふつ、そうね……凄い世界よ。私も家元とか呼ばれてはいるけど、まだまだ極めたとはとても言えない、深い世界」

千代はそう言うのと微笑み、和明をまっすぐ見た。

「問題はその闘争心……それが試合だけで発散できたなら良いのだけど、多くの場合、発散できずに強い欲求不満を生むの。優れた選手ほどね」

「欲求不満……ですか？」

「ええ。遠回りな話になってしまったけど、それが貴方をお願いしたいこと。西住しほ、彼女は今、郊外の演習場で試合に近い形の演習を行っているんだけど……帰ってきた彼女の、欲求不満の解消相手になっほしいのよ」

「……………」

戦車道の話からいきなり自分の話に戻り、和明は咄嗟に言葉が出てこなかった。気持ちを落ち着かせるためにコーラを一口飲み、言葉を返す。

「ちよ、ちよつと待ってください！ その、西住さんってお子さんもい

て、当然旦那さんも……！」

「ええ、居るわ。だからこれは浮気って事になるわね」

誤魔化す気配もなく、あっさりと言った。どうやらそこは彼女にとつて深い問題では無いらしい。

「当然、貴方には迷惑はかけないわ。これは私たちと貴方だけの秘密」
「……他の方法で、どうにかならないんですか？」

「精神安定剤とかで和らげる事は出来るけど……不健康だし、あまり良い方法では無いのよね」

「それなら、そういった事のプロの人に頼めば……」

「そういうのは足が着くわ。今、戦車道はメディアからの注目も高まってきている。『戦車道家元の男漁り』とかで週刊誌の記事にされたら、それこそ一大事」

なるほど。立場的にも世間から気にされず、後腐れも無い和明のような学生が適役という事か。

事情は分かってきたが、和明にはまだ別の「引っ掛かり」があった。迷いを顔に浮かべながらも、千代に向き合う。

「話は分かりました。でも……すみません、その話は、俺には無理です」

「倫理的な話？」

「いいえ、そういうんじゃないで、物理的な話って言うか……その、これは見栄とかじゃなくて……」

皿に残った最後のサンドイッチを食べ終わると、和明は千代に説明した。

「――」
「――！」

千代の目が大きく開かれた。

「だから……俺、適役じゃないと思うんです」

「……それは、逆に興味があるわね」

千代は静かに言った。彼女の纏う空気が、僅かに変わったようにも思える。

「篠原くん、もう食事はいいかしらっ？」

「え？ は、はい」

「それじゃ、ちよつと椅子から立って貰っていい？」

千代の意図が読めないまま、和明は素直に立ち上がった。千代も同様にガウン姿のまま立ち上がり、こちらに歩み寄る。

「し、島田さん？」

「失礼するわね」

「うっ……!？」

おもむろに千代はその手を和明の股間に伸ばし、ジーンズの上から撫でてきた。下から上に撫でるような動きに腰がびくりと反応する。

「何を……!？」

「痛くはしないわ。力を抜いて……」

「そんな事、言われても……ううっ!」

千代の指がジッパーを引き下ろす。そのまま流れるように彼女の指はジーンズの中に入り込んできた。厚手の布地越しだった千代の指の感触がトランクス薄い布地越しに代わり、より直接的な快感を和明の肉棒へと与えてくる。

「ま、待って……ください。本当に……」

「まだよ、もう少し……」

むくむくと海綿体に血液が滾り、千代の指の中でそれは肥大化してゆく。

「……そろそろ、かしらね」

「そろそろって……島田さん！ それは……」

『千代』でいいわ

和明の股間を弄っていた指がするすると戻り、ガウン姿の千代は腰を落とすと和明の前に腰を落とした。

ちよつと跪くような姿勢で和明のジーンズの留め具を外すと、亀頭が引つかかっていたトランクス個所も外し、一緒に引き下ろす。

「……!？」

「ああ……」

跳ねるように、缶コーラの500ml缶を思わせるサイズの肉棒が千代の顔を叩かんとする勢いで露わになる。

思わず息を呑む千代の気配と視線を感じつつ、観念したように和明は言った。

「……これが、俺が彼女に振られた原因です。先週、彼女と初めてしようとした時、彼女が怖がって泣き出して……それで」

「まあ……確かに、初めてでこの大きさは怯えても仕方ないわね……」
「……………」

実際、彼女を抱く寸前だった。「裂けるー」と彼女が本気で怯えてしまったのだ。正直、アレでよくEDにならなかつたものだと思明自身も思う。

そして——それから数日、お互いの気まずさを解消する事もできず、彼女から別れを切り出された。シヨックではあつたが、仕方ないと諦めている自分もいた。

「大は小を兼ねる」と言うように男性器は大きい方が良いという考えが男性間では主流だが、その使う相手が居なければ何の意味も無いのだ。

「だから……その、俺が西住さんの相手をするのは、出来ないと思います」

千代の視線に反応してビクビクと跳ねる肉棒に苦渋の視線を送りつつ、和明は言った。全く、自分の体の一部と言うのに呑気なものだ。

和明の言葉を受け、千代は顔を俯かせ——

「……フフツ、フフツ」

——笑った。

「し、島田さん？」

「……『千代』と言ってもらつていいかしら？」

「え？ えっと……千代、さん……？」

「フフツ、笑うのは失礼だったわね……確かに驚いたわ。篠原くんが思った以上の『掘り出し物』だった事にね」

「『掘り出し物』？ 千代さん、それって……うあつ!？」

亀頭に暖かく、柔らかい感触がいきなり押し当てられた。

「ちゅっ……んっ……はあっ……」

「ちっ、千代さんっ!?! んんっ!？」

何が起きたのかはすぐに分かった。千代が亀頭にキスをしたかと思うと、舌を這わせてきたのだ。

彼女との初めてのセックスでは互いにいっぱいっばいで、前戯もロクにできないままの挿入であった。無論、フェラチオをされるのも初めてだ。

まだ湿り気の残る亜麻色の髪をかき上げ、千代は和明の反応を楽しむように亀頭に唇を押し当て、カリ首に舌を絡め、太い肉棒の竿の部分に細い指を絡めてくる。

「こんな凶悪なのを持つているのに、反応は初々しいのね……何だか、楽しくなってくるわ……はむっ」

「ああっ!？」

和明は背を反らし悶えた。千代がその口を一杯まで広げたかと思うと、赤黒くひくつく亀頭を口に含んだのだ。

腰がビクビクと震え、初めての刺激に次第に射精感がこみ上げてくる。かろうじて残っていた理性で和明は訴えた。

「ち、千代、さん……そんな、汚いです……俺、仕事で、汗をかいたまままでっ……!？」

「ぶあっ……そうね、凄い匂い……汗臭くって、それに篠原くんの汁の匂いが合わさって……」

口を離れた千代の唇と亀頭の間、唾液と先走りの混じった粘液の橋がかかる。その淫猥さに和明は言いようのない支配感を覚えた。

唇の端を手の甲で拭い、千代はそう言う——

「……素敵な、雄オスの匂い」

「く、くうっ!？」

——再び和明の肉棒を啜えこんだ。

先ほどまで柔らかな微笑みで自分と接していた大人の女性が、自分の前に跪いて肉棒を舐めしやぶり、熱い吐息を浴びせてくる。

それは和明にとって余りに非現実的であり、そしてそれ故に自分の知る自慰行為などとは比べ物にならない快感を覚えさせた。

「んっ、んんっ……凄い、全然、収まりきらない……んむう……」

「あああっ、千代、さんっ! それ以上は、ほ、本当につ!？」

「射精しそうなものね？ 構わないわ。このまま、我慢せずに射精して……」

吐息混じりの甘い声。

見下ろせば、彼女のガウンの前は完全に緩んでおり、千代の白い肌、揺れる豊かな乳房と朱鷺色の乳首、そして下半身の陰りまでも和明の視界に映る。

まだ初対面から半日ほどというのに、恋人めいた囁きと共に和明の巨根に手を添え、根元から素早く、しかし痛くない程度の柔らかさを添えて扱ってくる。

優しさと淫らさを兼ね備えた愛撫に、何とか彼女の顔への射精は堪えようと思っていた和明の我慢は容易に決壊した。

「うああっ、千代さんっ！ で、出るっ、出ま、すうっ！」
「っ……っ！」

和明の叫びが終わるのを待たず、亀頭から粘りある精液が噴出した。我慢していた分もあり、その強烈な射精は和明の視界が白くなる程の快感を伴った。

「はあっ……熱い……それに、凄い量……っ！」

ドロドロとした白濁液の噴水を、千代は恍惚とした表情で嫌がりもせず受け止めた。彼女の綺麗な肌を、整った鼻筋を、形良い唇を、容赦なく和明の精液が汚してゆく。

「あっ……ああっ……っ！」

腰の震えが止まらない。たつぷり数十秒の射精感を経て、ようやく和明は射精を終えた。ぐったりと傍らのソファに、ジーンズを半脱ぎにした下半身丸出しの状態で倒れこむように腰を落とす。

荒い吐息の中、彼女の名を呼ぶ。

「ち、千代、さん……っ！」

「……ごめんなさいね。射精までさせるつもりは無かったのだけど……貴方を見せられて、私も少し興奮してしまったわ」

一方の千代は早くも先ほどまでの、優しく柔らかい口調に戻っていた。ガウンの前を完全に広げて乳房が覗き、精液塗れの顔でこちらに謝ってくるのは何とも奇妙な感覚だった。

まだ射精の余韻が収まらず、言葉が出てこない和明に千代は立ち上がりつつ言った。

「篠原くん……いいえ、ここまでしてしまったら『和明くん』と呼んだ方が良いかもしれないわね。貴方は自分のソレにもっと自信を持っているわ。確かに初めての子は怯えるでしょうけど、貴方のなら西住さんの相手をするには十分……いいえ、彼女を屈服させる事が出来るかもしれないわね」

「そんな、事は……」

「それに……私も西住さんも、ソレより大きなものを出しているのよ？ 西住さんは二回もね」

「……………」

どきり、と和明の心臓が跳ねた。改めて自分の肉棒に奉仕したのが他人の男性の妻であり、子を産んだ事のある女性なのだと思慮なく実感させる言葉だった。

千代はテーブルに残っていた紙ナプキンで顔を拭いっつ言った。

「それとも、やっぱり私や西住さんのような、お母さんくらいの年齢の女性の相手は嫌だったかしら？」

「い、いいえ。そんな事は……無いです」

そこだけは和明ははっきりと否定した。本当に千代の行為に嫌悪感を抱いていたなら、行為の最中でも和明は抵抗できたらう。千代が魅力的で、彼女に「してほしい」という気持ちがあったからこそ、和明はそれを受け入れ、射精したのだから。

「……………」

和明の言葉に千代は微笑んだ。気のせいかな、今までの微笑みよりも嬉しそうに見える。

顔の精液を拭き終え、彼女は改めて和明に言った。

「それじゃ、改めて聞くわね」

「……………」

「彼女の——西住しほの、セックスの相手になってくれる？」

彼女が何を問いかけてくるかは分かっていた。そして、それに自分がどう答えるのかも。

「……はい」

羨みかけていた和明の肉棒が、ぴくりと反応を示した。

第三話

スーツを着たビジネスマンや旅行と思わしき家族連れ、外国人の宿泊客の姿も散見される。

ホテルのロビーの椅子に座りつつ、和明はそんな人の流れを何となく眺めていた。壁に掛けられた大時計の針を見る。短針は「8」を過ぎ、長針は「4」の辺りを指している。

島田千代から洗礼めいたフェラチオを受けてから一時間ほど経つた今、和明は千代の部屋を出てロビーで「彼女」を待っていた。千代の話ではもう少しの筈だ。

「……喉、乾いたな」

考えてみれば千代の部屋で食事中にコーラを飲んだきりだ。バイト中の水分補給用を買っておいたお茶がまだ残っていないかったかと思ひ、和明は傍らの鞆を探った。

「ん？」

外側のポケットに何かが入っている。

出してみると薬局のロゴが入った小さな紙袋。中には生薬入りの精力剤と小さな紙が入っていた。CMなどで見たこともある、確か割と高額な商品のはず。

和明は折りたたまれた紙を広げてみた。

『頑張って 店長』

「(店長、こうなるのを知ってたのか!?)」

おそらく和明の勤務中、パートの人が来たタイミングで近くの薬局に買いに行き、鞆を開けなくても入れられる外ポケットに忍ばせておいたのだろう。

色々と疑問は増えたが実際ありがたいプレゼントであった。パキツと音がするまで開け、精力剤の小瓶を傾ける。強い苦みと甘みが口腔内に流れ込み、吸収される前にも関わらず体が熱くなってくるようだ。

「家元、本日はありがとうございます！」

『ありがとうございます！』

ふと、ホテル入り口の方から揃った声での女性たちの挨拶が聞こえた。そちらの方に目を向けると、揃いのパンツァージャケットに身を包んだ幾人もの女性がぴしりと並び、その前に立つ黒スーツの女性に頭を下げている。

「お疲れ様。色々と反省点や問題点が今回の演習で見えてきました。明日総括を行います、各車長は搭乗員の意見や反省をまとめておくように」

『はいー』

淡々と言う黒スーツの女性、西住しほの言葉にパンツァージャケットの女性たち——おそらくは、西住流の門下生——は規律の取れた返事を返す。

「では、本日はここで解散します」

『はいー。家元、お疲れ様でした！』

深々と頭を下げる門下生たち。その姿勢はしほがホテルの中に入り、自動ドアが完全に閉まるまで続いていた。

「(……まるでVIP扱いだ)」

——いや、間違いなく彼女はVIPなのだ。数ある戦車道の諸流派の中でも頂点に立つ、熊本を拠点とした国内戦車道の最大流派、西住流。その頂点に立つ家元は、言わば日本戦車道の頂点に立つ人物と言っても過言ではないだろう。

千代の部屋で彼女に言われた言葉を反芻する。果たして自分のような一介の学生バイト程度が、本当に彼女の相手に足りるのだろうか。

「(ここまで来たら、やるしか無いよな)」

とはいえ、彼女に「西住しほのセックスの相手をする」と約束した上でここで逃げては臆病者にも程がある。和明は覚悟を決めると、椅子から立ち上がりしほに歩み寄った。

「あの、西住さん」

「……貴方は？」

突然声をかけてきた和明に、しほは怪訝な反応を返した。

「あ、あの、今日の昼、戦車道シヨップで……」

「ああ、思い出したわ。確か……篠原くんだったわね。どうしたの、こんな所で？」

和明の言葉にしほはこちらの事を思い出し、逆に問いかけてきた。

「ええっと、その……」

流石に大勢の人の居るロビーで「貴女とセックスするために待っていた」とは言えない。

どう言ったものか思案する和明に、どうやらしほは事情を察したようだった。鋭さを増した視線で和明を射貫くように見ると、彼女は言った。

「……島田さんに、何か言われたのね」

「は……はい」

「フウ……」

しほの言葉に和明が頷くと、しほは苦み混じりのため息をついた。

「全く、彼女には困ったものだわ……篠原くん」

「はいっ!?!」

「ここで立ち話できる用件でも無いから、部屋に行きましょう」

そう言うとしほは和明に背を向け、気遣う気配も無しにエレベーターへと向かってゆく。和明は慌ててその後を追った。

閉まりかけのドアに滑り込むように入り、しほと共にエレベーターで上に向かう。しほは和明の方を見ようともしない。まるでこちらの存在自体に気付いていないのではと思うほどだ。

やがて、エレベーターは千代の部屋とは別の階に止まった。スツとエレベーターを出て部屋に向かうしほに置いて行かれないように、和明もそれに続く。

幾つかの角を曲がり、しほはある部屋の前で止まった。鍵を差し込み、ドアを開ける。

「入りなさい」

「は、はい……」

何だか、しほの言うがままに「はい」という反応する以外出来なく

なっている。それだけ彼女の言葉には、相手に有無を言わせない鋭さと重さがあった。まるで言葉自体が日本刀の如き切れ味を持っているようだ。

先に部屋に入ったしほが部屋の明かりを点ける。

「うお……」

和明の口から、思わず驚嘆の声が漏れた。千代の部屋も大概高級感があったが、それを更にワンランク格上げしたような部屋。間取りは広く、大きなダブルベッドやソファやテーブルが置かれていてもなおゆとりを感じさせる。

テレビは無いのかと思いきや、壁にプロジェクターがあるのを和明は確認した。奥には浴室があるようで、そちらも相応に広いのだろう。

「……座りなさい」

しほの言葉に従い、和明はソファに腰を落とした。しほは立ったままこちらを見下ろしている。その視線は酷く冷たい。

「大体は分かっているわ……島田さんから、私が欲求不満を起こしている、それを何とかして欲しい。そんな事を言われたんじゃないかしら？」

「……はい、そう言われました」

「結論から言うと、それは単なる彼女のおせっかいよ」

素直に答えた和明に、しほは切り捨てるように言った。ベッドに腰掛け、言葉を続ける。

「単純に『自分がそうだから西住さんもそうなのだろう』と、勝手に思っているだけ。正直、迷惑しているの」

「迷惑……ですか」

「ええ。こう言っては何だけど篠原くん、貴方も話を受ける前に疑問に思うべきではなかったかしら？ 私には子供も、夫もいて、加えて貴方とは母親ほどに歳も離れている。それが学生の貴方に相手をして欲しいと頼むなんて、それこそ荒唐無稽な話。そう思わない？」

「それは……」

「つまり、そういう事よ」

しほはそう言い切ると、懐から財布を取り出した。ベッドに置かれた便せん一枚を破り、財布から出した数枚の札をそれに包む。

「島田さんには、今後こういう事をしないように言っておくわ。迷惑料と言っては何だけど、これを持って帰りなさい」

「……！」

そう言っ、しほはその簡素な包みをテーブルに置く。

和明はその表情に驚きを浮かべ、思った。

「(驚いたな……本当に千代さんの言った通りだ)」

一時間前の、千代の部屋。

『強く拒絶されたらOKのサイン』?」

千代にそう言われた和明は顔に疑問符を浮かべた。

「ええ、彼女……西住さんは意地っぱりと言うか、強がりと言うか……多分、弱いところを他人に見せたくないのね。弱っている時ほど、強くあろうとするの」

ナイトガウンの前を締めなおした千代が言う。

「もし彼女の内面の欲求不満が弱ければ、貴方を拒絶するにしても比較的柔らかく断ろうとするわ。でも、もし和明くんを強く否定して、手短かに貴方を帰らせようとするなら……そうね、彼女らしくなく、お金か何かを持たせてでも帰らせようとするなら、ほぼ確実に限界に近いはずよ。長時間一緒に居れば、我慢できなくなると分かっているの」

「そうなんですか? でも、内心がそうだとしても表向き拒絶されたら、それ以上進まないんじゃないや……俺に、西住さんを襲えって言うんですか?」

「そうは言わないわ。多分そうなっても、西住さんの強いでしょうし」

千代はそう言う人と人差し指を立て、くいつとそれを曲げた。和明程度なら一撃で沈むと言いたいらしい。

「北風と太陽の話は知ってる? 要はそれ。我慢できなくさせればいいのよ」

「そう言われても……」

「大丈夫、貴方なら簡単よ」

曲げた人差し指を、今度は和明の股間へ向ける。

「少しガビガビするかと思うけど、洗わない方がいいわね。その方が多分よく『効く』わ」

「(つて千代さんは言ってたけど……大丈夫なのかなあ)」

「……？ どうしたの？ それを持って、帰りなさい」

何もしアクションを示さない和明に、しほが有無を言わせない口調で言う。

「(……ああもう、毒も食わらばか！)」

和明は僅かの不安を抱えつつも腹を決めた。こっそりとジーンズの留め具を外し、無言でソファから立ち上がり、ベッドに腰かけているしほに歩み寄る。

しほの身体から警戒の気配が増す。向かい風のようなしほの「圧」に、和明は耐えつつ更に距離を詰める。

「篠原くん……それ以上は、冗談では済まなくなるわよ」

しほの視線はあくまで鋭い。しかし、覚悟を決めた和明の体は熱く滾っていた。効き始めた精力剤の効果も後押ししてくれているようだ。

「……西住さん」

ベッドに腰かけたままのしほの眼前に和明は立ち、彼女の刺すような視線を正面から受けつつ言った。

「俺は……その、お金とか、西住さんの年がどうか、そんなので島田さんの話を受けた訳じゃありません」

「だから、それは只のおせっかい……!」

「俺の気持ちは……!」

その言葉と共に、和明は事前に緩めていたジーンズを下着ごと引き下げた。

「っ!」

警戒から怒りに変わりかけていたしほの表情は、眼前に突きつけら

れた巨大な怒張を前に完全に固まった。

太い幹のような竿には血管が浮かび、びくびくと脈動して和明の興奮を示している。赤黒い亀頭の先端の鈴口はぱくぱくと小さく開閉し、僅かに粘液を滲ませている。先ほどの千代との行為で乾いた精液の匂いと和明の汗の匂い、新鮮なカウパーが混じったむせるような匂いが解放され、その淫臭は和明の顔にまで届く程だ。

「……………」

「……………」

下半身を露出した和明と、硬直したままのしほ。完全な静寂が部屋を支配し、そのまま時間だけが過ぎる。

「……………だ、ダメ、だった?」

和明は内心で冷や汗をかいていた。千代はこの方法がベストと言ったが、これは明らかに公然わいせつ罪。警察を呼ばれても文句は言えまい。

おずおずとしほの顔を見る。その視線は和明の肉棒に向けられたまま固まり、唇が僅かに震えている。

「(お、怒ってる? 怒ってる、よな…………?)」

次第に不安が膨れ上がってくる。このままでは、激怒したしほに股間を殴られるのでは? あるいは泣きだされて警察沙汰になるのでは?

5秒、10秒——状況は動かない。和明の中の不安は怯えに、怯えは恐怖へと変わってゆく。

そして、それは遂に限界に達した。

「(もっ、もう駄目だっ!)」
「ご、ごめんなさい、西住さ……………んふおうあっ!」

既に手遅れかもしれないが土下座して謝ろうとしたその瞬間、反り返っていた肉棒が突如として熱い粥に突っ込まれたかのような滑りと熱さに包まれ、思わず和明は背を反らし悶えた。

何が起きたのか一瞬分ならず、和明は視線を股間に落とすとその光景に息を呑んだ。

「ンツ、ンツ、んはあ……………! じゆるっ、んんっ……………!」

しほが、和明の肉棒を喉奥まで啞えていた。潤んだ瞳で、鼻息も荒く口を全開まで大きくして、缶コーラのロング缶ほどの太さと長さまで膨らんだ怒張を自ら呑み込んでいる。

「に、西住さん……うっ、うあっ!？」

「んくっ！　んっ！　んんっ！」

和明が言葉をかけるのも待たず、しほはそのまま頭を前後させ始めた。口の端から唾液と和明の先走りが混じったものが溢れて、粘液の泡を作っている。

じゅぽじゅぽと音が聞こえそうな程の激しさでしほは頭を動かし、また同時に舌を肉棒に絡めてきていた。時折亀頭が喉奥に当たり、こつんという感触を和明が感じる度にしほは苦しそうに眉をひそめるが、それでも肉棒から口を離そうとしない。

「はあっ、ああ……ちよ、待っ……ぐうっ！」

「フウツ……はあっ、んぷっ……！」

その口淫は直前に千代からされたものとは全く違っていた。千代の口淫はまだこちらへの遠慮というか気遣いがあったが、しほの荒々しい口淫にはそういった遠慮は全く無かった。

和明の肉棒を痛みと快感のギリギリのラインまで責め、肉棒の滾りとやがて来る射精への期待を込めて快感を引き出そうとする、獣の捕食めいた口淫。

既にしほの両手は和明の裸の腰に回され、逃げられないように掴まれていた。よりしほの動きは激しくなってゆく。それに合わせ、強烈な射精感が和明の腰の奥からもこみ上げてきていた。

腰を震わせつつ、和明は射精が近い事を訴えた。

「んぶっ！　んっ！　んむうっ！」

「あぐっ！　うっああっ！　に、西住さんっ！　口、離してっ！　出るっ！」

「……！　ふうっ、んんっ！」

「ああっ！」

しほは口を離すどころか、鼻息を更に荒くすると喉奥まで肉棒を迎え入れた。息苦しかりうに、精液をねだるように舌先で鈴口をつつ

き、絞るように和明の尻に回した手を強く握る。

「だっ、ダメっ！ ああああっ！」

「っ！」

しほの口腔内の肉棒がひと際膨れ、直後に射精が始まった。熱い奔流が容赦なくしほの口の中に吐き出されてゆく。

「あっ……ああ……！」

「ふぁ……んくっ……んぶう……」

今にも腰が抜けそうな快感の中、しほの抱き着きでそれも許されず和明は射精の快感に震える。どくん、どくんと肉棒が脈動する度に精液は吐き出され、それをしほは迷う事すらなく、喉を鳴らして嚥下してゆく。

やがて射精が完全に止まり和明が大きく息をつくとき、しほはようやく腰に回していた手を緩め、口を離れた。赤黒い龟头としほの艶めいた唇の間に精液が糸を引き、そして床に落ちる。

「ハアッ……ハアッ……！」

「……コホッ、コホッ」

和明の荒い呼吸と、しほの咽る音だけが部屋に響く。やがて、それは完全な沈黙に変わった。

「……」

和明は何も言わず、しほを見た。

「……」

しほは和明を見上げ、何か自分の行為を正当化するための言葉を探すように瞳に戸惑いを浮かべ——そして、観念したように目を伏せた。

和明はしほを呼んだ。

「西住さん」

「……だわ」

「え？」

しほが小声で言った。

「卑怯……だわ」

「卑怯？」

そうやって、再びしほは和明を見上げ睨みつけた。

「卑怯だわ……こんな、こんな……のを、突きつけられて……」

しかしその頬は紅潮し、瞳は潤んでいる。

どくん、と和明の心臓が鳴った。

「……卑怯なのは、西住さんですよね？」

そう言うと和明はしほの肩を軽く押した。抵抗する素振りすら無く、しほはその身体をベッドにおお向けに倒れさせる。

元彼女との交際があったとはいえ、和明の女性経験は皆無に近い。しかし、生来備わった男性の本能と言うべきであろうか、ひとつの確信が和明の中に生まれていた。

シャツを脱ぎ、半脱ぎになっていたジーンズとトランクスを脱ぎ捨て、そのまましほを組み伏せるように彼女の上に体を置く。

「俺の……俺のチンポを見ただけで、いきなりしやぶりついて……それでよく『欲求不満じゃない』なんて言えましたね」

「それは……あぁっ！」

ジャケツトの隙間に手を差し入れ、ワイシャツ越しに和明はしほの乳房を揉んだ。シャツとブラの二枚の布地を重ねた上からでも、和明の手に収まり切らないボリュームある乳房の大きさと弾力が伝わってくる。しほはそれだけで甘い声を出し、背を反らせる。

「それで、俺が口を離すように言っても聞かずに、全部飲んで……そんなに、俺の精液が欲しかったんですか？」

「……」

「……」

「ごめん、なさい……」

あえて下品な言葉でしほを責める。震える唇で、しほは謝罪を口にした。

和明の中の確信が強まる。西住しほ、日本戦車道の諸流派の頂点に立つ女傑にして、戦車道界の重鎮。対して自分はただの戦車道シヨツプの学生バイト。彼女と比べれば、吹けば飛ぶような存在だ。

だが――

「まだ……足りてないですよね？」

「……………」

こくん、としほが頷く。

だが、少なくとも今のこの瞬間、自分は彼女を支配している。その確信があった。

そして、その確信が与える支配感や興奮は和明の中に興奮と攻撃性を湧きあがらせつつあった。

「……………いきますよ、『西住さん』？」

「あ、ああ……………」

あえて苗字呼びを強調する。反応を待つ。

和明が何を求めているか、しほは気づいたのだろう。先ほどまでの凛とした姿とはかけ離れた、少女めいた恥じらいと共に唇を動かし、声にならない言葉を発する。

「……………」

『しほ』と、呼んで』

「……………しほさんっ！」

「はあっ！ あ、ああっ！」

和明としても我慢の限界だった。むしやぶりつくように彼女のジャケットを脱がせ、シャツのボタンの幾つかを外すと弾けるように露わになったしほの胸の谷間に顔を埋める。しほはそれを拒絶する事もなく受け入れ、嬌声をあげた。

先ほど射精したばかりというのに和明の肉棒は再び怒張を取り戻し、凶悪なまでの存在感を放っていた。腰をもじつかせるしほの腰に手を回し、ストラップスを下ろそうとする。

「んっ……………あ、あれ……………」

しかし、やはり興奮だけでは思うように体は付いてゆかないようだ。指がすべり、上手く脱がせられない。

「し、篠原くん……………脱ぐ、から……………」

「……………俺の事も、『和明』って呼んでください、しほさん」

「わ、分かったわ、和明……………くん、待って……………」

それに気づいたのか、しほは少し腰を曲げ、自分からストラックスのベルトを緩め、ホックを外した。もどかしくずり下げると、レースに彩られた黒い下着が露わになる。

和明がそこに指を這わせると、「にちゃり」という水っぽい感触が伝わってきた。

「もう、こんなに……俺のを舐めてた時から、ですよね」

「……言わないで」

紅潮した顔を更に赤らめ、しほは顔を反らす。

可愛い。親ほど離れた女性の初めて見せる反応に、和明は素直に思った。

もつと見てみたい。この女性ひとがどんな風に乱れるのか、どんな風に感じてくれるのか。

しほのシャツのボタンを全て外し、ショーツと同じくレース付きの黒いブラが和明の眼前に現れる。

「ま、待って、今……」

しほが自分からブラの前ホックを外す。弾けるように露わになった両の乳房に、思わず和明は喉を鳴らした。

正に「双丘」と呼ぶべき綺麗で、そして淫猥な乳房だった。和明の手に余る程の大きさでありながらその胸は張りを保っており、あお向けにも関わらず形を崩すことなく、揉みしだく和明の手に確かな弾力を返してくる。先端の乳首は朱色で既に硬く尖り、彼女が感じている快感の度合いを和明に伝えてくる。

「あはあ……か、和明、くん……ほ、欲しい、の……!」

「う、ううっ!」

しほの手が和明の股間に伸びてきた。竿の根元に指を絡め、愛おしそうに扱いてくる。

和明は呻き、その手に自分の手を添えて制止した。

「しほさん……分かった。えっと、ゴムを……」

ソファの横に置かれた自分の鞆を和明は見た。国内市販品だと入りきらないため、元彼女のために取り寄せた海外品だ。未練で鞆に入れたままにしていたのが、こんな所で役立つとは正直思っていないな

かった。

「……………んっ」

「っ!？」

しかし、しほはベッドから離れようとする和明の背に手を回すとそれを引き留めた。

「し、しほさん？」

「構わないわ。ゴム無しで、挿入して……………!」

「いや、でも、それって」

「大丈夫……………今は、安全、だから……………」

「ぐくり、と和明の喉が鳴った。

「わ……………分かり、ました……………」

濡れたショーツの両端に手をかけ、くるくると丸めるように脱がす。

「これが、しほさんの……………綺麗、です……………」

「ああ……………じ、じつくり見ないで……………汚いわ……………」

「そんなこと、無いです」

「ンンッ!」

愛液に濡れる陰毛に彩られた、乳首と同じ朱色の秘唇がテラテラと照り光っていた。じゅくじゅくとその孔からは更に愛液が溢れ、肉棒の挿入を期待するようにひくつき和明を誘う。

それを見ただけで和明は危うく射精しそうになった。自身の太い幹に手を添え、秘唇に押し当てる。

「……………」

和明の脳裏に、「あの時」の記憶が蘇る。十分に濡れそぼっているとはいえ、その孔はコーラ缶ほどの自身の肉棒を受け入れるには余りに小さく思えた。

「……………和明くん」

和明の不安がしほにも分かったのだろう。しほは自分から秘唇を押し広げ、脚を広げると和明を見上げた。

「お願い……………壊すくらいの勢いで、それを……………挿れて」

「しほさん……………分かりました。行きます……………!」

亀頭を押し当て、そのまま腰を突き入れる。

「うっ！ くうっ！ し、しほ、さんっ！」

「和明っ、くんっ！ んあぁっ！ す、凄、いいっ！」

長い黒髪を振り乱し、しほが悶える。

彼女の膣内は、和明の凶器を完全に呑み込んでいた。

第四話

ホテル上階の一室、エコノミールーム数部屋分の宿泊費を一晚で費やすスイートルーム。窓からの夜景は見事なもので、水上展示された帆船「日本丸」にデコレーションされたライトアップや、ランドマークタワーの明かりが夜の街を照らす。

「うっ……ぐっ、ああっ！」

「ンッ！ き、来てる、和明くん、のっ！ 奥までっ……！」

しかし、ベッドの上で体を重ねる二人にそんな夜景を堪能する余裕は無かった。和明は初めて挿入した女陰の中うねるような熱いぬめりと締め付けに呻き、しほは和明の凶悪なまでに怒張した肉棒が与えてくる快感に悶えていた。

「はあっ……い！ す、凄……これが、女の、人のっ……！」

腰をびくびくと震えさせながらも、より深くまで和明は肉棒をしほの秘唇へ突き入れてゆく。一杯に広がった孔はひくひくと蠢き、更に奥まで肉棒を迎え入れようとしているように愛液を溢れさせる。

和明も健全な男子としてオナニーはしていた。女陰の感覚がどんなものなのか、イメージ程度はしていた。

「ああっ……しほさんっ……しほさんっ！」

しかし、しほの膣内はそんなイメージを容易に吹き飛ばした。熱く濡れそぼった膣内の壁はまるでひとつひとつが別の生き物のように肉棒の竿を、カリ首を、亀頭を愛撫してくる。

同時に和明が驚いたのは、その締め付けであった。濡れた肉の中を分け入る感覚はあったが、窮屈さや痛みなどは全く無い。彼女は——西住しほの秘唇は、自分の肉棒の全てを受け入れた上でなお締め付けてきている。根元から絞るように、同時に全体を柔らかくもしっかりと包み込み、射精を促してくる。

和明の反応に、しほは喘ぎつつも言った。

「和明、くん……んっ！ ひよっとして、貴方……！」

「はっ……はいっ……初めて、ですっ！ 彼女は、いましたけど……コレに、怯えてっ……ぐうっ！」

「んっ、ああっ！」

その時、亀頭がこつんと何かに当たった。和明の20cmほどもあった肉棒は完全にしほの柔肉に包まれ、堪らない快感を和明に与えてくる。

「(これ、しほさんの、子宮口……!?)」

「よ……良かったの？」

「え？」

しほの問いかけに、和明は彼女を見た。紅潮し喘ぎながらも、そこに何か申し訳なさを浮かべ、しほは言葉を続ける。

「初めての相手が、わ、私で……良かったの？ 貴方からすれば、んはっ、お、おばさんみたいなの、色気とかも無い、私で……」

「……っ！」

「ひうっ!？」

和明は無言で腰を引き、再びしほの奥まで突き入れた。

「そんな事……無いですっ！」

「はあっ、ああんっ！」

「しほさん、綺麗でっ！ 凄い、エロくてっ！ 本当に、可愛くってっ！」

言いながら和明は懸命に腰を振る。自分の言葉が嘘でない事を示すように、はち切れそうな程に勃起した肉棒を何度もしほの一番奥まで突き入れてゆく。

「俺、今日っ！ 戦車の中で、しほさんにつ！ 操縦桿、握ってもらった時、につ！」

「ンッ！ ああっ！ か、和明君っ！ 凄いつ、こんな、奥っ！」

「勃起、しましたっ！ この人と、しほさんとセックスしたいっって、思いましたっ！」

「……………」

「うおっ！」

しほの膣内がきゅっと締まった。和明の言葉に、感激を示したように。

同時に和明も感激を覚えていた。あの日以来、コンプレックスの対

象となっていた自身の肉棒がこうして最高の身体を持つ、大人の女性を悦ばせている。

「だから……俺、今、凄い嬉しい、ですっ！ しほさんが初めての相手ですっ！ 本当に、嬉しいですっ！」

「和明、くん……！」

しほの腕が和明の背に回される。そのまま和明の身体はしほの煽情的な身体と密着した。豊満な乳房が和明の胸板に押し当てられ、間で淫らに歪む。

「ンツ……！」

「っ!？」

しほの唇が優しく和明の唇に押し当てられた。熱い吐息に、先ほど彼女の口腔内に吐き出したばかりの和明自身の性臭が混じり、くらくらするような感覚を和明は覚えた。

「……ありがとう、和明くん」

「しほさ……くっ！ あ、ああっ!？」

まるで恋人と交わすような甘い声。和明はその言葉に返そうとしたが、腰から急激にこみ上げる射精感に動揺の声を漏らした。

「ちよ、嘘、だろ!？ し、しほさんっ、出っ！ う、ああっ!？」

「和明くんっ！ ひあっ！ あ、熱いっ!？」

我慢しようと思う暇すらなかった。しほの膣内で和明の肉棒はどくんと脈打ち、直後に精液を大量に放出した。

「あ、ああ……！」

「ん、ンンツ……凄い、まだ、止まらない……！」

しほは熱く滾った精液の奔流を受け身を震わせる。しかし、まだ絶頂には至らなかつたようだ。

彼女を満足させられず、一方的に達してしまった事実には和明は情けなさで恥ずかしさを覚え、顔を伏せる。

「……！」

「和明くん……大丈夫だから、気にしないで……！」

「……しほさんっ!？」

「んっ!？ そんなっ、また、中っ!？」

強く歯を食いしばり、和明は腰に力を込めた。射精直後で硬度を衰えさせかけていた肉棒は再び血脈を早め、堅さと大きさを取り戻してゆく。

「大丈夫です、しほさんっ！俺、しほさんを、必ず、満足させっ、ますからっ！」

「ああっ！ンッンッ！」

精液によってより抽送が容易になったしほの膣内を、抉るように和明は肉棒を打ちこんでゆく。引き抜く時には愛液と精液に塗れた太い竿がテラテラと照り光り、それを突き入れればしほの嬌声と共に溢れた精液がベッドのシーツを汚してゆく。

「しほさんっ……んっ、んむっ……！」

「ちゅ、はあっ……！こんな、中、まだっ！はあっ、あ、ああ……！」

まるで子供がいよいよやをするように、しほは髪を振り乱して悶える。和明は今度は自分からしほの唇を求めた。豊満な乳房の先端の朱色の乳首が、汗を浮かばせる和明の胸板を擦る。

互いに荒い呼吸の中、舌を絡め、吐息を交える。その密着した状態でなお和明は腰を動かして、しほの身体を絶頂に押し上げようとする。

もはや和明の意識には、自分の肉棒を打ちこむことに何の躊躇も無くなっていた。

「うっ、ううっ！」

「んああっ！か、和明、くんっ！もっど！もっど来てっ、もうすぐ、私もっ……！」

正常位で上から打ちこむように肉棒を荒々しく挿入するたび、しほは嬌声と共に更なる快感をねだる。抽送の動きに合わせて両の大きな乳房は重く揺れ、溜まらなくなった和明はその胸を揉みしだいだ。

「しほさん……この胸も、素敵です……！んっ、はむっ……！」

「い、言わないで、そんな……あんっ！そこっ、んうっ！」

和明はしほの豊満な乳房に顔を埋め、朱色の乳首に唇を押し当てた。固く尖り、感度を増していた乳首は舐めしやぶる舌の動きに合わ

せてビクビクと反応し、しほは一層悶える。

また、顔に感じるしほの乳房の感触も素晴らしいものだった。ふつくと和明の顔を受け止めつつも、確かな弾力で押し返してくる。

「あっ！ん、んはあ……ああっ！」

しほの反応が、次第にビクビクと震えるようなものに変わってきた。軽い絶頂を感じているのだ。

同時に和明の身体の奥からも強い射精感がこみ上げてきていた。しかし、二度に渡って自分だけ勝手に達してしまうのは和明としても絶対に避けたかった。

「……………」

「か、和明、くん……………」

「しほさん……………一気に行きます！」

「え……………んあっ！んっああっ!?こ、こんなっ！あ、あはあっ！」

しほの乳首から口を離し、痛みを覚える程に歯を強く食いしぼり、和明は思い切り腰を突き入れた。ひと突きする程にしほの中はより熱く、より締め付けてくる。

「こ、このままっ、出しますっ！」

「来てっ！全部、全部、私につ！和明、くんのを、注いでっ……………」

「うぐっ！しほさんっ！あ、ぐああっ！」

獣めいた叫びと共に、和明はとどめとばかりにしほの膣内に肉棒を突き入れた。

「かず、あき、く……………あっ、あああっ！」

今までに無かったほどの強烈さで、しほの膣は和明の肉棒を締め付けた。直後、和明自身にも信じられない程の勢いで精液がしほの膣内に再び放たれる。

「うああっ！しほ、さんっ！しほ、しほおっ！」

目が眩む程の快感の中、和明はしほの豊満な乳房を強く揉みつつ絶頂に達した。片手に収まりきれない大きな乳房はしほの絶頂と共に、より一層張りを増して和明の指を押し返す。気持ちの昂ぶりから、思わず彼女を呼び捨てていることにも気付いていない。

「ああっ、和明くんっ！　こんなに、沢山っ！　んあああっ！」

同時にしほはシーツを強く掴みつつ絶頂に達した。どくどくと肉棒から溢れ出る精液を取り込もうと、無数の襞が肉棒を絞り上げてゆく。

「うっ、くっ、ぐうっ……！」

「はあっ、ふうっ……あ、はあっ……！」

射精が完全に止まるまで、二人は繋がったままベッドで身体を重ねていた。

戦車道の日々の鍛錬によるものだろうか、脱力から回復しきつていない和明の身体をしほは息苦しさを感じるでもなく受け止め、やがてころんと互いの身体を転がすと上下を逆にした。

「しほさんっ！」

「和明くん、頑張ってくれたから……」

そう言うとしほは身を起こした。肉棒が半勃起で彼女の中から抜け落ちる。

「……今度は、私にさせて頂戴」

和明の胴を挟むように膝を置き、大きく脚を広げた体勢でしほは片手を粘液に塗れた肉棒に添えた。汗に塗れた巨乳はゆきりと揺れ、しほの脚の間からは和明の精液としほの愛液の混じり合ったものがごぼりと零れ、未だひくつく和明の亀頭に降りかかる。

照り光る陰毛が貼り付くしほの秘所は、二度の射精を受けたというのに更なる快感を求めて陰唇を震わせていた。

「う、おおお……!?」

西住流家元としてTVや人前では凛とした姿を崩さないしほの、余りにも淫らな姿。それはあっさりとしほの肉棒を奮い立たせ、肉の槍のように屹立させた。

「ンッ……」

しほは肉棒と自身の腰の位置を僅かに変え、自身の秘唇に位置を合わせる。くちゆりと亀頭と陰唇が触れ、その熱さとぬめりの感触に和明はそれだけで先走りを滲ませてしまう。

「全部、私に体を預けて……はあっ、あっ、あああっ！」

「あ、ぐ、ぐあっ！ し、しほさんっ！」

そのまま一気にしほは腰を落とし、怒張した和明の肉の槍を全て呑み込んだ。和明は腰を中心に広がる強烈な快感と心地よいしほの重みを感じ呻く。

しほは和明の胸板に手を置くと、そのまま腰を上下に動かし始めた。

「ああっ！ 素敵、よ、和明っ、くんっ！ 凄い、届いてるっ！」

「うああっ！ ああっ、ううっ！」

じゅぽじゅぽと秘所から淫らな水音が響く。和明は何か言おうとする余裕すら無く、しほが与えてくる快樂に悶える事しか出来なかった。

二度の射精によつて十分な滑らかさを得ているというのに、しほの膣内はそれでも和明の肉棒を一秒でも中に留めて射精させようと無数の襞で舐め上げてくる。

和明は自身の上で腰を上下し、時折くねらせ、肉棒の太さと大きさを堪能するしほを見上げた。

「しほ、さん……！」

整っていた黒髪は紅潮した首筋に汗で貼りつき、鋭利な細い瞳は淫蕩な光を帯びて和明を見下ろし、男性的な服装に隠れていた豊満な乳房や肉付き良い尻や濃い陰毛に彩られた秘所は全て曝け出されている。

その姿は和明の知る「女性」という存在の中で初めて見るほどに淫猥で——同時に美しかった。

しほの腰の動きに合わせ、重そうにゆさゆさと揺れる両の乳房に和明は迷うことなく手を伸ばし、揉みしだいた。

「しほさんっ！ しほさんっ！」

「あああっ！ 和明くんっ！ それっ、それ、いいっ！ もっと、もっと揉んでっ！」

「は、はいっ！ くううっ！」

テクニクなど男性雑誌の胡乱な記事でしか知らない、欲望に任せたままの乱暴な愛撫。しかしそれをしほは喜々として受け入れてく

れる。

乳房を強く揉むたびに、彼女の膣内の締め付けは強くなってくるようだった。片手では収まり切らない大きさの乳房を掴む指の間から汗の雫が滲む。

「んっ！ ああっ！ あはあっ！」

「し、しほさんっ！ 俺、もうっ！」

「構わないわっ！ わ、私もお……ンツ！ はっ、あっ！ ああああっ！」

「しほっ、さん……ぐううっ！」

しほの淫らな腰の動きは、容易に和明を三度目の射精へと導いた。肉棒が膨れ上がり、噴水めいた勢いで下からしほの子宮へと精液を叩きつける。同時にしほも絶頂に達したようで、体を硬直させたかと思うとそのまま和明の胸板に倒れこんだ。

「はあっ……はあっ……」

「んっ……ハアツ……すご、かったわ……和明くん……んっ、んちゅ……」

「し、しほさん……俺も、です……んっ……」

しほと和明は互いに舌を伸ばし、それを絡み合わせた。

しばらくそうしていた後、しほは舌を戻すと言った。

「ありがとう……だいぶ、治まったわ。ふっ、ふうっ……」

射精を終えた肉棒がしほの中から押し出され、溢れた精液がシートに新たな染みを作る。

「（……あ、そうか）」

その時、和明は自分がこの行為の意味を完全に忘れていた事に気付いた。

これは恋人同士のセックスではない——あくまで戦車道の試合で解消できなかった西住しほの感情の昂りを鎮めるために、偶然見込まれた和明が頼まれた「行為」に過ぎないのだ。

明日になれば彼女は「西住流家元・西住しほ」に戻り、自分は「戦車道シヨップでバイトする大学生・篠原和明」に戻る。その人生が再び交わる事は無いだろう。

「……………」

「……今日は此処でこのままお休みなさい。ただ、シャワーは寝る前に浴びた方がいいわ。乾くと取れにくくなるから……先に、失礼するわね」

しほは身を起こし、浴室へと向かう。

「……………」

和明は無言で天井を見上げた。

「千代さん、ああ言っただけ……結局、勝てなかったな」

最初こそ奇襲めいた方法でしほから主導権を奪えたが、初体験の自分が優勢だったのはそこまで。結局はしほに終始ペースを持っていかれてしまった。やはり経験が違う。そう思えた。

「(……経験か)」

しほは——当然、これが初めてではないのだろう。そして、これからも。

浴室のシャワーの音が耳に届く。和明は無言で体を起こすと、まだしほが使用中の浴室へと向かい、ドアを開けた。

「どうしたの、篠原くん？」

しほは突然の入室に驚く風でもなく言った。シャワーの湯が張りのある肌弾かっている。

和明はシャワーの水音で声が消されない距離まで歩み寄ると、言った。

「しほ……いえ、西住さん」

今の彼女を名前で自分は呼んではいけない。そんな気がした。

「俺がここに来た理由は……自分でも分かっています。西住さんが、もう俺が必要でない事も」

「……………」

「それでも……あと少しだけ、俺としてくれませんか？」

数秒、浴室にはシャワーの水音だけが響いた。

やがて、しほは口を開いた。

「明日の7時にはチェックアウトをしなければいけないわ。明日も戦車道関連で色々と朝からあるから、6時間は睡眠を取らないと厳しく

なる」

しほは浴室に設置された耐水時計を見た。23時30分。和明は顔を伏せる。

「……はい」

「30分……そこから私をどれだけ寝かさないでいるかは、貴方次第よ。和明くん」

「っー」

和明は顔を上げた。シャワーを浴びたまま、しほはこちらを見ている。

「……しほさん」

「ンツ……」

和明はしほに唇を重ね、湯に火照るその肌に手を伸ばした。

——結局、30分で和明は二度の射精を許し、そのまま眠りへと誘われた。

目が覚めたとき、既に部屋にしほは居なかった。

机の上にルームキーと、チェックアウトのやり方について細かく説明された書置き、あとおそらくは下の売店で買ってくれたのだろうパンと飲み物が置かれていた。アンパンと白牛乳というのが、如何にも彼女らしいと思った。

フロントに向かう途中、念のため千代の部屋も訪れてみたが既に退出していたのか、ノックしてもガウン姿の彼女が出てくる事はなかった。

階下に降り、フロントで鍵を返す。時計を見れば既に昼前。随分と寝てしまっていたようだ。

『——それでは次は戦車道の話題です。プロリーグ発足を目前に控え、国内最大規模の流派、西住流の大規模な演習が昨日横浜にて——』壁のモニターからニュースが流れる。

そこに映る「西住流家元・西住しほ」はいつも通りに凛々しく、そして美しかった。

『——という訳で近年の戦車道復興事業の一環として、かつて行われていた伊勢神宮の奉納試合が今年度より再開される事となったんだけど——』

翌日、戦車道ショップ。店内放送も戦車道関連の放送が主となっており、今は戦車道界隈の元人気選手にして現自衛官・蝶野亜美がパーソナリティを務めるラジオ放送が流れている。

「店長、休憩貰いまーす」

「はい、お疲れ様。ゆっくり取ってね」

カウンター裏の事務室。スタッフの休憩所も兼ねた部屋で和明は店長に休憩の確認を取った。相変わらずの低い物腰で店長が答える。

出勤中に買ってきたおにぎりとお茶を鞆から取り出しつつ、和明は店長に言った。

「あの、店長……」

「何だい？」

「ドリンク、ありがとうございます。高かったですよね、アレ」

「……本当にお疲れ様」

店長は変わらぬ口調で言う。和明は更に尋ねた。

「知ってたんですか、家元の……アレ」

「この仕事も長いからね。まあ、まあね」

「……ありがとうございます」

「礼は言わないでくれよ。他人ひとの浮気の片棒を担いでいるんだ。褒められた事じゃない」

「……」

「篠原君、仮に同じ事がこの先にあったとしても……あまり本気になるんじゃないよ。彼女らは君の嫁ものじゃないんだから」

「……分かってますよ」

口調こそ穏やかだが、店長の声には重さがあった。気を紛らせようと、鞆にマナーモードで入れていた携帯を探る。

「あれ？」

着信あり、時刻はつい今さつき。番号は電話帳に登録されていない

もの——いや、確かにこの番号には見覚えがあった。この番号は——
「……島田流、家元!？」

「ええっ!？」

和明の声に店長も反応を示す。慌てて和明は着信履歴からリダイヤルをした。

数度の着信音の後、電話が繋がる。

「もしもし、篠原です!」

「……篠原くん?」

「っ!?! ちよ、え? しほさ、じやなかった、西住さん!?!」

何故か電話に出たのは千代ではなくしほで、和明は更に混乱した。何故しほが千代の携帯で自分に電話を?

『篠原くん……今、私と島田さんは伊勢に来ているの』

「え? ええっと、はい、知ってます。奉納試合が今年から再開なんですよね」

『ええ』

「……」

『……』

「……」

『……西住さん、多分それでは篠原くんにも何も伝わってないわ。代わってもらつていいかしら?』

その時、しほの横から声が出た。鋭く、張りのあるしほの声とは対照的な柔らかな声。やがて電話を替わったのか、よりはっきりと彼女、島田千代の声が耳に届いた。

『もしもし、島田です。篠原くん、いきなり電話してごめんなさいね。今は大丈夫?』

「は、はい。一体、どうしたんですか?」

『それが、その……聞いた通り私たちは今、伊勢神宮での親善奉納試合の準備をしているんだけど……これがなかなか大規模なものになりそうなの』

「は、はあ」

『ただ……こっちの戦車道関連の人で男手がなくなつて、宮司さんに

頼める事でも無いから……篠原くんの都合が合うようなら、『例の要件』で来てくれないかと思つて。立て替えにはなるけど、交通費やこちらでの宿泊費は用意するから……』

「え……ええっ!? ああ、伊勢つて、あの伊勢ですよね!?!」

伊勢、要は三重県である。横浜から東京や鎌倉程度ならともかく、「ちよつと行く」程度で行ける場所ではない。

戸惑いを隠せないまま和明は言った。

「どういう事ですか？ その……お二人なら、そういった事でも現地でどうにか出来るように、俺には思ふんですけど」

『まあ、本来はそうなのだけど……』

「?」

『これを言つてしまうと、篠原くんは断りづらくなると思うので言いたくはなかつただけ……』

そこまで言つと、千代は声を小さくして言った。

『……西住さん、貴方の事をかなり気に入つたみたい』

「っ!?!」

『こつちで適当な相手が見つからない事が分かってきたら、私が貴方の連絡先を知っているか聞いてきて、着信履歴から電話をしようとしたのよ』

「西住……さんが?」

顔に血が昇つてゆくのを感ずる。店長から見れば既に自分の顔は真っ赤だろう。

『正直、かなり珍しいわね……でも、私個人としても篠原くんには興味があるわ』

「え……!?!」

『もし良ければだけど……急なお願いのお返しに、伊勢に来てくれたら「三人で」というのはどうかしら?』

「!?!」

咄嗟に和明は携帯をあてたまま顔を上に向けた。今の千代の一言だけで強烈なイメージが頭に浮かび、危うく鼻血が出そうになつたらだ。

『とはいえ、無茶なお願いなのは分かっているわ。無理はしないで……』

「いえっ！ えっと、あの、行きます！ 絶対に今晚までに、そっち行きます！ 伊勢駅に着いたら、また電話しますから！」

和明は即答し、電話を切った。

「……あ」

苦笑いを浮かべる店長と顔が合う。今はバイトの休憩中で、しかも明日はシフトが入っているのだ。

「あ、あの、店長……」

「……家元の頼みだからね。まあこの後は重い納品もないし、僕ひとりで何とかするよ。明日の穴は他の子に頼んでみるさ」

「本当、すみません店長！ お土産、持って帰ります！」

「……いいねエ、若いつてのは」

店長の言葉を背に受け、エプロンを外すのももどかしく和明は鞆を手に事務室を飛び出す。

失恋で始まったこの夏は、どうやら思った以上に鮮烈なものになるようだった。

俺と家元（かのじよ）と学園艦 第一話

「ん、ちゅっ……ふふ、まだまだ元気ね」

「れるっ、はあっ……ど、どうかしら、和明くん？」

「ううっ！ さ、最高……ですっ……！」

屹立する自身の肉棒に絡みつく二枚の舌。島田千代と西住しほの同時フェラで、先ほどの射精で一度萎えていた和明の肉棒は再び硬さを取り戻してビクビクと脈動する。

完全に勃起が戻ったのを確認すると、千代は舌を離して蠱惑的な微笑みを向けた。

「さて……しほ、やるとしましょうか」

「……千代、どうしてもするの？」

「元々はしほが我が儘を言って和明くんに来てもらったのでしよう？
なら、お返ししてあげないと」

「……！」

千代の言葉にしほの顔に朱が差す。

二人がどうするつもりなのか和明が分からないまましていると、二人は体を反転させるとうつ伏せになり、そのまま腰を持ち上げ尻を和明に向けた。

「……！」

既に全裸となっていた二人がそういう姿勢をすれば、当然ながら和明の眼前には濡れた二つの秘所が並ぶ事になる。しほに比べ千代の方がやや陰唇の色が薄く、陰毛の茂りも薄いようだ。興奮に麻痺しかけた和明の脳裏にそんな事が浮かぶ。千代は和明の方を向き言った。

「さあ、和明くん？ 好きな方から召し上がれ」

「……思った以上に、恥ずかしいわね」

一方のしほは顔をシートに埋めたままだ。赤面した顔を和明に見せたくないらしい。

「あ、ああっ……！」

和明の巨根は臍に貼りつかんばかりに反り返った。挿入を待ち望むように両の秘唇は艶やかにひくつき、ぱくぱくと孔が蠢く様まではつきりと見えている。

激しい動悸を抑えつつ、和明は自身の竿に手を添えた。

「それじゃ、い、行きます……！」

——電話が鳴っている。

「……あ、あれ？」

覚醒した和明は、自分がテーブルに突っ伏した姿勢で寝ていた事に気が付いた。顔を上げ、周囲を見回す。見慣れた戦車道ショッピングの事務室だ。

「ああ、大丈夫。休んでて」

カウンターから店長が駆け込んできて受話器を取った。「そのまま休憩を続けて」とジエスチャーでこちらに言ってくる。

そこでようやく、和明は自分が休憩中に寝てしまっていたのだと理解した。真昼から見るとは何とも不向きな夢に、思わず額を押さえる。

「(この夢、当分は見そうだなあ……)」

伊勢神宮から和明が赤福餅をおみやげに横浜に帰ってきたのは、数日前の事だ。

西住流家元・西住しほ、島田流家元・島田千代の二人に急な呼び出しを受け、和明は彼女らの試合後の昂りを抑えるために店長に詫びて遙々三重県まで飛んでいった。

試合は彼女らが言った通りに、仮に神様が観戦していたとしても大盛り上がりであったろう熾烈なもので——同時に、夜も激しかった。まだ初体験から二度目となる和明にしてみれば、余りに鮮烈であり、強烈だった。その辺りについては、また別の機会に語ることになる。

そして、戻ってきてから今までは特に同様の呼び出しがされる事はなく、こうしてバイトに明け暮れる日々和明は戻っていた。

「ええ、はい、はい……はい、それは勿論。では午後2時頃に伺わせていただきます。はい、それでは……」

店長はメモに何かを書き込み、通話を終わると大きく息をついた。「やれやれ……篠原君、悪いが明日は忙しくなるよ」

嬉しき半分、困り半分といった表情で和明に言う店長に和明は尋ねた。

「団体さんですか、店長？」

「うん。明日、横浜港に学園艦が寄港するそうだ」

「聖グロですか？」

横浜港は戦車道名門校のひとつ、聖グロリアーナ女学院（通称聖グロ）が拠点としている港である。そのため聖グロ学園艦の寄港時には華やかな赤いパンツァージャケットを着こんだ同校の戦車道履修者が店に多く訪れ、店内を優雅に彩る。

しかし店長は首を横に振ると言った。

「いや、聖グロは今では確か北海道あたりを航行しているはずだ。今回来るのは黒森峰だよ」

「黒森峰……って、確か」

「ああ、西住流家元・しほさんの娘さんの西住まほさんが隊長を務める戦車道エリート校。熊本へ戻る途中にここで補給をするそうだね、今回は直接学園艦に持っていったの納品になる。トラックで行くから、篠原君も一緒に来てもらっていいかな？」

「分かりました。倉庫からもう出しておきますか？」

「そうだね。とりあえず砲弾や燃料はもう積んでおこうか」

「じゃあ、休憩上がったら始めます」

黒森峰女学園。高校戦車道の強豪校や強化選手の話になるとほぼ必ず名が挙がる、ドイツ戦車を中心とした編成と履修者の練度の高さで知られる名門校。戦車道大学リーグや社会人リーグなどの名選手にも何人もの黒森峰出身者が居る。「履修者」と言ったが、もはや彼女らまで行けば「選択科目のひとつ」という範疇に収まるものではないのかもしれない。

そして、もう一つ和明が気にかかる事があった。

「……やっぱり、西住流の影響下って事は家元が直接指導しているんですか？」

「流石に出ずっぱりって事は無く、普段は生徒間で指導や訓練は行っているそうだけど、それでも結構な頻度で視察には訪れているようだね」

「……………」

またしほに会えるかもしれない。

淡い期待が和明の中に浮かぶが、同時に今回はそういった事にならなそうな予感もしていた。

ベッドの上ではともかく、平時のしほは「厳格」「厳粛」を擬人化したかのような厳しさと自律心を備えた女傑である。ましてや同校にはその娘さんが隊長として居るのだ。

「……………これじゃ、俺の方が欲求不満みたいだな」

そう呟き、和明は休憩を終えると倉庫へと向かっていった。

——翌日、昼下がりの横浜港を走る一台の軽トラックがあった。

側面には「戦車道シヨップヨコハマ・品揃え第一主義」という宣伝文句が書かれている。

「それにしても……………」

助手席に座る和明は、海側の景色を遮る巨大な物体を眺めつつ言った。

「本当にデカいですね……………黒森峰の学園艦って」

既に側面を眺めつつ数kmを走らせているはずだが、未だに車両搬入口が見えてこない。見上げると、艦上に広がる街がうっすらと確認できる。

「学園艦の中でもトップクラスだからねえ。まあ、あとちよつとで着くよ」

そう言いつつ店長は法定速度で軽トラックをのんびりと走らせる。荷台に積まれているのは依頼された砲弾と燃料、あと装填用軍手やゴーグルなどの新商品サンプルだ。

やがてトラックは、同様の学園艦への納品用トラックの並びの最後尾へとたどり着いた。

生徒やその家族、教職員、更にその生活を支えるための商業施設などに関連する人々を含む数万人が生活する移動都市である。海上輸送も頻繁に行われてライフラインは維持されているが、やはり地続きでないを受け渡しできない物も多い。それらの搬入出が一斉に行われるのだ。

少し待った後にゲートに到着し、簡単な荷物検査を受ける。戦車道に使われるものとはいえ砲弾はちゃんと火薬が込められた本物だ。警備員から許可証を貰い、幾つもの坂を経て艦上へと向かってゆく。

「お、おお……」

薄暗い大型駐車場めいた場所から光差す場所に急に出て、和明は思わず声を漏らした。

まず目に入ったのは広大な森だった。全長10km程もある黒森峰学園艦において結構な割合で森が広がっており、一部は丘陵となっている。その森に沿うようにこれまた巨大な校舎がそびえ、そして広大な街並みが広がっている。

「篠原君も去年までは高校生だろう。学園艦とか珍しくないんじゃない？」

「いや、ウチはもつと小型で、小さな田舎町みたいのがあるだけだったんで……この演習場に向かうんですよね、何処なんです？」

「演習場ならもう見えてるよ」

「え？」

ハンドルを握る店長に軽く言われ、改めて和明は眼前の光景を見渡した。フェンスに囲まれたそれっぽい場所があるかと思っただが、そんな所は見当たらない。

「……どれです？」

「全部だよ。この森や丘、全部」

「ええっ!？」

「黒森峰にとって、戦車道ってのは同校の看板だからね。それだけ注力しているのさ」

「はあく……」

和明が感心している内にトラックは進み、やがて森の近く建物のひとつに到着した。無骨だが頑丈そうなレンガ造りの建物を見上げつつトラックから降りる。

やがて、中から二人の人物がこちらに向かってきた。思わず和明は声を漏らす。

「あ……！」

「どうも家元、お世話になっております。ご乗船されていたんですね」「ちようど今日、視察に寄らせてもらった所です。先日の腰の方は如何ですか？」

「ああ、お陰様で……」

黒いスーツに白ワイシャツ姿のしほと、その横に立つひとりの少女。

和明は頭を下げる店長の横に行くと同様に礼をした。

「すみません、今日はよろしくお願いします」

「……篠原くん、だったわね。こちらこそ」

実際は名前を思い出す必要が無い程にこの一週間ほどで深い仲になってしまっているが、流石にそれをこの場で出すような人ではない。他人行儀なしほの言葉に和明は礼を返すと、その横の少女を見た。

「黒森峰戦車道隊長、西住まほです。急な依頼への対応、感謝します」

「(西住……って事は、この子がしほさんの……?)」

なるほど、確かに「西住しほの娘」と言われて納得してしまう雰囲気を感じた少女だった。やや釣り目がちな瞳と細い眉が確かに似ている。

何より、和明と比べて年下の筈だが彼女から感じる落ち着きと風格——と言って良いのかは分からないが——は、下手な大人以上であった。こうして前にしているだけで無意識に背筋が伸びる。

「ご注文のあった砲弾と燃料、資材はご指定通り用意できています。あと、これは良ければなんです。新商品の装填手用の手袋を試供品でご利用しました。是非、黒森峰の選手の方の使った意見を伺えればと

……」

「ありがとうございます。使わせていただきます。商品ですが……」
店長は営業トークに余念が無い。聖グロ以外に黒森峰とのパイプも持ちたいのだろう。

まほと店長が話をしている間、和明はそれとなくしほに視線を送っていた。

「……………」

しほは何も言わず、スツと視線を逸らした。あくまで今日は「顧客と販売者」というスタンスを崩さない。それが当然ではあるのだが、仕方ないなと和明は思った。

「篠原君、もう一度乗ってもらっていいかい？ 置き場はここからちよつと距離があるみたいだ」

「あ、はい」

その言葉に従い、和明もトラックに乗る。

「私たちは後から向かいます。既に待機しているメンバーに説明して誘導してもらってください」

まほはそう言うのと頭を下げ、しほと共に建物横に置かれたジープへと足を向けた。

彼女らが離れたのを確認し、キーを入れなおすと店長が言った。

「うーん……家元、今日はどうも機嫌が悪いなあ」

「え？ そうなんですか？」

和明はさっぱり分からなかったが、店長にしか気づけないサインがあつたのかもしれない。

そんな事を思いつつ、トラックの外を眺める。前方には幾両もの戦車が並ぶ広場が見える。その横には大きな常設テントが設置されているようだ。テント近くに再度トラックを止め、その場に居たメンバーの指示でトラックの中身を運んでゆく。

「よいつ……しよつとー！」

砲弾の詰まった箱の重さはいっつ抱えてもずっしりと感じる。これを軽々と扱うのだから、戦車道を修めている少女というのは大したものだ。

運びつつ横目で戦車の方を見てみれば、軍服めいた黒森峰のパンツアージャケットに身を包んだ少女たちが整列している。先頭に立つ灰色髪の少女は和明にも見覚えがあった。確か現在の黒森峰戦車道でNo. 2を務めている、逸見エリカという少女だったはずだ。

やがてその少女たちの前にジープが到着し、そこからしほとまほが降り立った。それだけで並ぶ少女たちが僅かの乱れもなく直立不動の体勢になる。

まほはしほに一礼すると少女たちの先頭に立ち、もう一度礼をした。

「家元、本日はよろしくお願ひします」

『よろしくお願ひします！』

まほの礼に合わせ、少女たちも一斉に頭を下げる。

「……凄いい空気だな」

燃料缶を抱えながら和明は思った。確かにこれは「選択科目の課外授業」という雰囲気ではない。

しほは彼女らが頭を上げるのを待ち、口を開いた。

「決勝までの試合は一通り見させて貰いました……結果どうこうを今更に言うつもりはありません」

静かな、しかし通る声でしほは言葉を続ける。

「ただ、貴女たちが『黒森峰』という名と戦車の性能に頼り切っていた事だけは分かりました」

「……申し訳ありません」

しほの言葉に一同が凍り付く。その中で先頭のまほは頭を下げる。「事前に告知したように、本日の演習は全車両Ⅲ号戦車での紅白戦とします。火力や装甲が全く同じ条件でどう戦うのか、それを見せてもらった上で今後の演習の方針について考えます。では、始めて頂戴」
「はい……皆、今回は横浜の戦車道ショップの方からのご厚意で、急な注文にも関わらずⅢ号用の砲弾等を用意していただいた。あちらの方々にも礼をするように」

『ありがとうございます！』

「よし、総員発進準備！」

しほがそう言い終わるとまほは背筋を伸ばして振り返り、メンバーに号令をかけた。納品中の店長と和明に一齐に頭を下げる少女たちに、店長は礼を返す。

それとほほ同じタイミングで和明は最後の燃料缶を下ろし終え、やはり同様に頭を下げた。

千々にそれぞれの戦車へと向かってゆくメンバーを見届けることなく、しほは彼女らに背を向けるとテントへと歩み寄ってきた。

「改めて感謝します。もし良ければ、ご一緒に演習を見ていかれては如何ですか？」

「いいんですか？ 黒森峰の演習と言えば門外不出だったんじや……」

「販売する側から見られて気づいた事などがあれば、彼女たちに教えていただければと」

「いや、そんな……では、お言葉に甘えて」

しほの言葉に店長は意外そうだったが、言葉を重ねられてまんざらでも無さそうに提案を受け入れた。戦車道の店を長年経営しているだけあり、店長も無類の戦車道好きなのだ。

「篠原くん、貴方も良ければ」

「あ、はい、お願いします」

和明としても断る理由はない。言われるままにテントの一角に設置された椅子と大型モニターまで誘導され、そこに座る。エアコンも常設されており、なかなか快適だ。

椅子に座って待っている内に紅白戦の戦車はそれぞれの試合開始位置に移動したようだった。しほはモニター横に置かれた通信機のマイクを取ると、スイッチを入れつつ言った。

「……それでは、試合開始」

彼女の声スピーカーから流れ、僅かにハウリングを起こす。

それを合図に映像上の戦車が一齐に動き始めた。公式ではない紅白戦とはいえ、十数両もの戦車が走り始めるのはカメラ越しでもなかなかの迫力だ。

どうやら戦いの舞台はゆるやかな丘陵を中心としたものになるよ

うだった。次第に互いの戦線が接近し、やがて撃ち合いが始まった。テントの中からでも遠雷めいた砲声が聞こえてくる。

「……………」

しほは手を膝に置いたまま、じつくりと映像を見ていた。一見微動だにしていないがその視線は幾つかに分かれた画面上の戦車にくまなく向けられており、店長を挟んで座っていた和明にも迫力が伝わってくる。

「ううん……………」

店長は腕を組み、まるで野球の試合を前のめりに観戦するように上体を曲げてモニターを見ている。

「今のは……………良くないですねえ」

「ええ、装填が遅すぎます」

唸るように出た店長の言葉にしほが同意する。和明にはさっぱり分からなかったが、やはり玄人にしか分からない違いがあるのだろう。

「……………おつと？ 家元、失礼致します」

その時、店長のポケットの携帯が震えた。しほに断りを入れ、携帯を取り出しつつテントの外へ出てゆく。

結果、テント内にはしほと和明が残された。静かな空間に、モニターからの砲声だけが響く。

「(なんか……………気まずいな)」

「……………和明くん」

どこことなく居心地の悪さを感じ始めた時、しほが和明を「名前で」呼んだ。

「え、は、はい?」

「……………」

「ンンッ!」

突然、襟首を掴まれたような勢いで和明の頭は横に引き寄せられ、そこまましほに唇を重ねられた。何が起きたのか理解する間もなく、そのまま和明の口腔内にしほの熱い舌が入り込んでくる。

「!? はあっ、しほさ、んんっ!」

「ンツ……ちゅっ、ふぁ……んむう……!」

驚くほどの熱さを伴ったしほの吐息に、和明は思わず眩暈を覚えた。動揺しつつもこちら舌を動かし、しほの舌に絡め返す。

「ふうっ……れろっ、んちゅ……!」

「ンンツ……!?!」

しほは更に和明の歯茎を舐め上げるように舌を這わす。たつぷり数十秒の間しほは和明の口腔内を蹂躪すると、やがて唇を離した。

「……ふう」

「はぁ、はぁ……ちよ、まずいですよしほさん!」

勝手にひと息つくしほに、思わず和明は彼女を名前呼びしつつ言った。

外で電話中の店長は自分としほの関係を知っているにしても、黒森峰の女生徒が全員演習に出ている訳ではないのだ。二軍のメンバーなどにはテントの周囲で別の訓練を行っている者もいる。彼女らがテントの中に入ってきたら一発アウトなのは確実だ。

焦る和明とは対照的に、しほは静かに答えた。

「……ありがとう、少し落ち着いたわ」

「いや、その……」

「大丈夫、私がテントの中に居る時にわざわざ入ってくる生徒はいません。私は彼女たちには怖がられていますから」

そう言われ、和明は外の様子を気持ち伺った。確かに近くに居る気配はない。

やがて、店長は携帯を戻しつつ申し訳なさそうな顔で帰ってくると言った。

「申し訳ありません、家元。店でトラブルがあつたようで、ちよつと戻らせていただいで良いでしょうか?」

「いいえ、こちらこそ足止めしてしまって申し訳ありません」

「あ、じゃあ、自分も……」

「いや、篠原君は残ってもらっていいかな?」

席を立とうとする和明を店長は止めると、エプロンのポケットから封筒を取り出した。

「まだ今回の納品内容の確認と印鑑を貰ってないんだ。書類と帰りのタクシー代を渡しておくから、後から確認を済ませて戻ってきて貰えないかな？　書類は読んでもらってハンコを貰ってくれるだけでいいし、もちろん戻ってきた時間までで勤怠は打つからさ」

「そう、ですか？　……分かりました」

横のしほをチラツと見て、和明は頷いた。

彼女の行動が読み切れない事への不安はあったが、店のトラブルは店長でないと解決は難しい。そうなれば自分がこちらの現場の対応をするのは妥当と言えた。店長から書類の束とタクシー代を受け取る。

「本当にすまないね……それでは家元、失礼致します」

「お疲れさまでした、お氣をつけて」

頭を下げる店長にしほが礼を返す。そのまま店長はテントを出てゆき、そして中には和明としほが残された。

一方、モニター上の紅白戦は佳境に入りつつあるようだった。幾つかの車両は走行不能を示す白旗を上げており、両陣営共に残った戦車は僅かのようにだ。

「……続きを見るとしましょうか」

「あ……は、はい」

再び家元の顔に戻ったしほの言葉に、和明は戸惑いつつ椅子に座り直した。しほと隣り合いつつ試合の続きを見守る。

画面には紅組の隊長車であるⅢ号戦車と白組のⅢ号戦車3両が対峙する様子が映っていた。白組の奇襲を受け、紅組の方が戦力は損耗している。そこを突かれた形だ。

和明が戦車の公道免許を取得する際に受けた講習では、戦車道においてこういった状況に陥った場合は何とか退避して身を隠し、側面を狙う——だったように思う。

「……!?!」

しかし、紅組隊長車はそこで正面から突撃を敢行した。砲塔からは西住まほが身を出し、車内に指示を出しつつ周囲の敵戦車の位置を把握しようとしているようだ。

当然ながら白組側はまほ車に砲身を向け、狙いを定める。堅牢なティーガーならばともかく、Ⅲ号戦車では集中砲火を受ければひとたまりも無い。

「うお………」

思わず和明は声を漏らした。相手側の砲撃のタイミングを読んでいたのか、まほ車は砲塔を回しつつ急停止した。その直前を砲弾が通過する。まほはその撃ってきた側の戦車でなく反対側の戦車を狙った。こちらは正確に命中し、一両から白旗が上がる。

車内は強化カーボンで守られているとはいえ、砲塔から身を出しているまほは無防備だ。だが画面上のまほは全く怯える風もなく指揮を続けている。見ているだけだと言うのに、和明は自分の肝が冷えるのを感じた。

「遅い………」

しかし、対照的にしほは眩きと共に眉を僅かにひそめさせた。膝に置かれた手に力が籠る。どうやら、この戦いぶりでも戦車道家元から見れば満点にはほど遠いようだ。

一方の白組の隊長車からも車長のエリカが身を出した。まほ程ではなく、半分ほどは車内に身を隠している。残った一両と合わせて前後から挟もうと動く。それに対しまほ車は踊るような軽快な動きで自身の位置を変えてゆく。

「……？」

ふと、和明は違和感を覚えた。横のしほの呼吸が次第に荒くなっているように思える。

こちらの視線に気づいたのだろう。しほは画面に顔を向けたまま目線だけをこちらに少し向けた。その瞳が潤んでいるように見える。

「まさか、この演習の不甲斐なさで……感情が昂ってきているのか!?!」

しほの顔がこちらに向けられた。その顔は先ほどより紅潮している。

「和明くん……もう一度、いいかしら?」

「え、あ、は……ンンッ!」

返事を言い切る前に和明の唇が再び塞がれる。
果たして自分は穩便にこの学園艦を出られるのだろうか。そんな予感が和明の脳裏によぎった。

第二話

「次に4号車。ここの登攀中に受けた攻撃に対して、状況的には十分反撃ができた筈です。退避を優先した理由は？」

「は……はいっ！ 先の攻撃で搭乗員が動揺し、また、周辺の僚機との距離が離れていた事も考えそちらとの合流を優先しました」

「その動揺を抑え、攻撃に転じさせるのが車長の役割ではないの？」

「……はい」

「車長が搭乗員の動揺をそのまま受けてしまっっては話になりません。紅白戦で勇敢になれなかった者が、公式戦で臆病にならずに戦えますか？」

「……いいえ」

「今後も車長としての責務を背負う覚悟があるならば、勇敢で有り続けなさい。次、5号車……」

重々しい空気がテント内に満ちている。

ずらりと並んだ椅子に座る黒森峰メンバーと、その前でモニターを横に感想戦を行っているしほ。演習中の指摘点を素早く、かつ容赦なく行ってゆく様は確かに厳格な西住流家元そのものだ。少なくとも、その演習中に和明に熱い吐息でキスを何度も求めてきた女性と同一人物とは思えない。

「(……凄いな)」

彼女らから少し離れた椅子に座り様子を眺めていた和明は、二つの意味で感心した。ひとつは選択科目の課外授業と言うよりは軍隊の訓練めいた感のある黒森峰の演習の空気。もう一つは、しほが和明とキスしていた最中に行われていた演習の個所についても的確に指摘点を見出し、それに対して注意をしていた事だ。確かに舌を絡めている最中も時折モニターに視線を向けていたが、それだけで把握していたのだとしたら見事な洞察力である。

結局、あの後のしほはもう二度ほど和明にデープキスを求め、それを和明も抗う事も出来ずに受け入れた。一度などはテント外に近づいていた黒森峰メンバーの声が耳に届き、心臓が跳ねたりもした。

正直なところ既に和明の股間は度重なる刺激で半勃起し、エプロンでそれを何とか誤魔化している状態だ。これを何とかしたい気持ちもあつたが、同時にこれ以上の行為をこの学園艦内で行う事も危険性も理解していた。

「俺はともかく、しほさんは平気なのか……？」

仮に二人の関係がバレたとしても、一介の学生バイトである和明が受ける損害は——個人的に見れば確かに痛い——世間からすれば大したものではない。

しかし彼女、西住流家元にして高校戦車道連盟理事長であるしほにとってスキヤンダルは色々な意味で致命的だ。下手をすれば話が広がり、戦車道界限全体に悪いイメージを持たれる事態にもなりかねない。

あるいはこういったケースが初めてではなく、これ以前にも、おそらくは和明以外の男性とそういう事をしていたのかもしれない。それなら肝が据わっている事も理解できる。

「……………」

ちくりと胸が痛む。自分でも理不尽だと理解できる、筋違いの嫉妬。

当然、和明はしほや千代にとって「初めて」の人ではない。彼女らは今まで戦車道を歩む中で様々な戦いを繰り広げ、その中で昂り——様々な男性に抱かれてきた筈だ。

それを彼女らは話さない。和明としても、聞きたいとは思わない。

「……………はあ」

それは独占欲と呼ぶには余りに幼稚な感情だ。そんな感情を抱いている自分に、和明は自己嫌悪を覚えてしまう。

和明がため息をつく間にも感想戦は続き、終わりに近づいたようであつた。

「……………現在の貴女たちがどれだけの課題を乗り越える必要があるか、これで分かったと思いたいわね。現在、過去に開催されていた冬季大会・無限軌道杯の再開も連盟では検討されています。三年生メンバーは後輩たちに誇りを残すのか屈辱を残すのか。二年、一年は三年生を

安心して卒業させられるのか不安を抱えたまま卒業させるのか。二度の取返しは効かない事を自覚し、各自努めなさい……隊長、号令を」
『はい！…ありがとうございます！』

緊張した面持ちのまま、最前列に座っていたまほが起立するのに合わせてメンバーは一斉に立ち上がり、しほに向かって礼をした。一同が顔を上げると同時にしほがまほに言った。

「業者の方との仕入れの確認と、今後の事を含めて話をします。隊長、あとは各自解散を」

「はい。家元、ありがとうございます」

まほは恭しくしほに礼をした。その様子はおおよそ実母に向かって娘がする姿勢ではない。しほに視線で促され、席を立ちつつ和明は思った。起立したままの黒森峰メンバーの何人かの視線を受けつつ、歩き出すしほの後を追う。

演習場まではまほが運転していたジープを、今度はしほが運転するようだ。彼女に促され、和明は助手席に乗った。

「……………」

「……………」

キーを回し、エンジンをかける。走り出すジープの中、しほは和明に言った。

『『本当に母娘おやこなのか』……そんな顔をしているわね』

「えっ!」

内心で思っていた事を突然見透かされ、和明は驚いた。しほは言葉を続ける。

「そう思われても仕方ないでしょう……私はあの子の母であると同時に、西住流の後継となる彼女の『師匠』でもあります」

「師匠……師弟関係って事ですか?」

「ええ。ひと度、西住家の敷居を越えれば私と彼女は母娘でなく西住流の師弟。そこに肉親としての甘さを含めれば、それは彼女のためにならず、周囲の者も不満を覚えます」

「……………」

理屈では分かる。しかし――

「……納得して貰えるとは、思っていないわ」

和明の気配からその感情を読み取ったのだろうか。しほはこちらの思いを汲んだかのように言った。

正直なところ、それが正しい親子の関係とは思えなかった。ただ、それを言い出したら自分としほとの関係の方がよっぽど正しくないのだ。彼女とまほの関係をどうこう言う資格がないことも、和明は理解していた。

それ以上の言葉を交わすことなく、ジープは最初のレンガ造りの建物に到着した。ここが屋内訓練や休憩所を兼ねた、黒森峰戦車道の拠点なのだろう。

「……こちらへ」

「あ、はい」

建物の周囲をジャージ姿で走る少女達が、しほに走りつつ頭を下げる。体力づくりをしている2軍以下の戦車道メンバーなのだろう。

そのまましほと和明は建物の二階奥、「特別室」と書かれた札が掲げられた部屋まで来た。廊下にあった他の扉に比べて、この扉だけ装飾が施されている。

しほはスーツのポケットから鍵を出すと、それをノブに差し込んで回した。何だか解錠の音まで違うように思える。

「し……失礼します」

少し緊張しつつ、和明は部屋に入った。

書齋めいた部屋であった。正面には大机が設置され、その机上にはペン立てとティーガールの形をした置物がある。リアルな造形のティーガールの砲塔は、まるで和明を狙うかのようにぴたりとドアに向けられている。

向かって右手の壁には扉付きのやはり大きな書棚。ガラス越しに本をざっと見てみれば、全て戦車や戦車道に関する書籍だ。中には「西住しほ 著」と書かれている本もある。

逆に向かって左には戸棚があり、数々のトロフィーや盾が飾られている。やはりこれも全て戦車道関連のものだ。中には二十年以上前のトロフィーなどもあり、この黒森峰女学園が築いてきた戦車道の歴

史を堂々と示していた。

大机の更に後ろには窓があり、今はブラインドがかけられているようだ。

「……店長さんから預かった書類は？」

「え!?! あ、は、はい。こちらです」

物珍しそうにきよろきよろと部屋を眺める和明にしほが言った。慌ててポケットから封筒を取り出し、彼女に渡す。大机に負けないサイズの革張りの椅子にしほは腰かけ、中の書類に目を通し始めた。

この部屋にはしほの座っている以外の椅子は無い。「特別室」という名の通り、西住流家元専用の執務室なのだろう。ホテルのスイートルームの時もそうだったが、こういう常人とは異なる待遇を受けている彼女を見ていると、改めて住む世界が違うと思わされてしまう。

やがて、しほは何枚かの書類に目を通し終わると引き出しから印鑑を取り出し、その全てに判を押した。

「把握しました。この金額と数量で問題ないと店長さんには伝えてください。急な要望にも関わらず良質な物を用意していただき感謝していました」

「ありがとうございます。多分店長、凄く喜びます」

スツとしほは判を押した書類を和明の側に差し出した。それを取ろうと和明も机に手を伸ばす。

「……貴男にも、悪いことをしたわ!?!」

その手にしほの指が絡みついた。年齢を感じさせない瑞々しい張りのある肌の感触と、彼女の温もりが伝わってくる。熱いほどの温もりが。

音もなくしほは椅子から立ち、指を絡めたまま和明に身を寄せてきた。

「に、西住さ……うっ!?!」

「……ずっと、固くしていたわよね」

もう片方のしほの手が、エプロン越しに和明の股間を撫でた。それだけでびくりと半勃起のままだった肉棒は反応し、更に充血してゆ

く。

「あそこでああしてないと、必要以上に彼女たちを叱咤してしまいうるから……こんな苦しさ、今、楽に……」

エプロンの裾から差し入れられたしほの手が和明のジーンズの前
に届き、ジッパーを下ろしてゆく。

「ちよ、ちよと待ってください、いいっ！」

和明が止める間もなくジッパーは下ろし切られ、できた隙間からし
なやかな指が入り込んできた。厚手の布地に押されこまれた肉棒が
ビクビクと解放を求めている。

「ま、まずいですって、しほ、さんっ……！」

今にも蕩けそうな理性を何とか奮い起こし、和明はしほに言った。

先日のホテルや伊勢の旅館などならともかく、ここは防音設備もさ
れていない施設の一室だ。今も建物の周囲を走る少女の掛け声が僅
かに聞こえてくる。何よりそれに加えて、しほはこの部屋の鍵もかけ
ていないのだ。行為の最中にドアを開けられれば一発でアウトであ
る。それは鍵を開けたしほ自身も分かっているはずだ。

この行為が中途半端で終わる事への残念さはあったが、和明はそれ
でも言った。

「し、しほさんこそ……俺を楽にするとか言って、まだ、満足していな
いんじゃないんですか……？」

和明の方からしほとこの行為を拒絶するのはこれが初めてだ。果た
して効果があったのか、和明の股間を責めていたしほの指の動きが止
まる。

しほは潤んだ瞳で和明を見つめ——熱い吐息と共に言った。

「……そうよ。まだ、奥の方が切なくて……和明くん、貴男のでない
と……届かないの」

「っ！」

その言葉だけで肉棒が跳ねた。否応なくしほの膣肉の感触が思い
起こされ、和明の理性を押し流してゆく。

「……そういう言い方、ずるいですよ」

「んっ……」

和明はしほと唇を重ねた。甘い声を漏らしつつ、しほも舌を絡めてくる。

「こうなったらどうにでもなれ」という自棄めいた気持ちも確かにあった。しかし、それ以上に彼女を抱きたいという衝動があった。

互いの舌を絡ませつつ、和明はしほのジャケツトのボタンを外した。白いワイシャツの上から掬うように乳房を揉み上げると、掌にずっしりとした重みと心地よい弾力が伝わってくる。

「んんっ……し、心配、しないで……この部屋は、私が許可しないと、んくっ……は、入れない、決まり、だから……っ！」

声を殺しつつしほが言う。確かにこの黒森峰戦車道の実質的な管理者である彼女の命令なら、それをわざわざ破る者は居ないだろう。とはいえ流石に喘ぎ声が聞かれれば不審に思われ入ってくる可能性は高い。

そんな不安感があったが、もはやここから手を引く事は互いに無理だ。和明は片手でしほの重い乳房を揉みしだきつつ、空いた手で彼女のストラックスの留め具を外すと中に差し込んだ。むわつとした熱気を感じる。

「しほさん、もう、濡れて……ううっ！」

「い、言わないで……ああ……！」

ストッキングは着けていない。和明がショーツに指を這わせると、ステッチ付近に強い湿り気を感じた。

同時にしほも和明のジーンズの前を完全に開放させ、トランクスをずり下げると巨大な怒張を露出させた。愛おしそうに竿を擦るしほの手に和明は思わず声を漏らす。

「ふうっ……少し、待ってなさい……」

乱れた服装のまましほは一旦体を離すと、そのまま和明の前に腰を落とした。棍棒めいた太さと長さを併せ持つ和明の巨根の前にちようど顔が来る位置になり、形良い唇をその亀頭に寄せてゆく。

「う、うくっ……！」

「ふあ……ちゅっ、んむう……！」

和明は歯を噛み締め、何とか声を抑える。しほは何度か和明の赤黒

い亀頭にキスをする、大きく口を広げ肉棒を呑み込んだ。熱く滑るしほの口腔内に肉棒が包まれただけで、和明は危うく射精しそうになった。

「んぶっ、ふっ、じゆるっ……」

「ああ……し、しほさんっ、それ、凄いつ……!」

しほは長い黒髪をかき上げつつ、緩やかに頭を前後させて肉棒全体を刺激してくる。唾液に塗れた肉棒が濡れ光り、再びしほの口の中に包まれてゆく。

口淫を続けながらしほは自分でジャケットを脱ぐと、ワイシャツのボタンを外した。レースに彩られた黒いブラに包まれた白い乳房が露わになる。

和明はごくりと喉を鳴らし、衝動のままにしほに言った。

「し、しほ、さん……胸で、うっ、し、してくれませんか……?」

「んっ……?」

和明の要望に、しほは少し動きを止めると口を離した。先走りと唾液に濡れる唇が何とも艶っぽい。

「……いいわ、和明くんには私のわがままに付き合ってもらったもの。聞いてあげないと、いけないわね」

そう言いつつも、しほの声の響きが少し嬉しそうに和明には聞こえる。

ブラの前ホックを外すと、弾けるようにしほの両の豊満な乳房が露わになった。先端の朱色の乳首は既に勃起し始めており、彼女の感じている興奮を和明に示している。

「んっ……」

しほは口を閉じると、モゴモゴと中で舌を動かした。唾液を溜めているようだ。

腰を落としていた彼女は今度は膝立ちの姿勢になり、和明の肉棒に身を寄せると乳房に手を添え、谷間を大きく広げた。

「あ、ありがとうございます、しほさん……うあっ!」

むっちりとした乳圧に肉棒を包まれ、和明は思わず声をあげた。慌てて口に手をやり、今の声が外に聞こえたか警戒する。

「……………」

しほはまだ唾液を溜めているのか、口を閉じたまま目線だけを上に向けて和明を見た。責める風ではない、「仕方ないわね」という窘めるような目線。耳を澄ますが、人の気配は無いようだ。

「す、すみません、しほさっ……………」

「っば……………本当に、凄いだきさね……………挟みきれない……………声は、我慢して……………はあっ……………」

「うっ、くううっ!」

しほが口を開けると、ローションめいた粘度の高い唾液が亀頭に降り注いだ。濡れそぼり滑らかになった和明の肉棒を、両の乳房でしっかりと挟んだまましほは体を揺すり扱き始めた。彼女が身体を上げると亀頭が乳房の谷間に呑み込まれ、下がると赤黒くひくつく亀頭が再び現れ、竿がにゆるにゆると扱かれる。固く尖った乳首は和明の身体をくすぐり、熱い吐息が吹きかけられる。

「ああ……………しほさんのっ、お、おっばい……………こんなっ……………」

男性雑誌などで「パイズリはイメージほど気持ちよくはない」とあったのを知識で知ってはいたが、それが少なくともしほには当てはまらない事を和明は知った。

きめ細かな、それでいてしつかりとした張りと弾力を兼ね備えたしほの巨乳は手や口以上に和明の肉棒にむっちりと密着し、膣内とはまた異なる弾力ある乳肉で肉棒全体を優しく締め付けてくる。

「はあ、はあ……………はぶっ……………」

「ふあ……………」

しほはパイズリを続けたまま口を広げ、亀頭を含んだ。体の上下を止め、亀頭を舐めしゃぶりつつ乳房に添えた手で緩急をつけて肉棒に刺激を与えてくる。

「んっ……………じゆるっ……………んぶっ……………」

「うぐっ、くっ、ううっ……………」

大きな声を出して悶えたい。遠慮なくしほの奉仕を堪能したい。そんな気持ちを堪えつつ、和明は声を抑える。

戦車道の功績を示す豪華な部屋の中で、その主である女性が自分の

肉棒に夢中で奉仕してくれている。その事実は和明の中にぞくぞくした支配感を湧きあがらせる。

更にしほの乳房の張りが増してきた。彼女も奉仕の中で感じてきているのだ。見下ろしてみれば、しほの腰はもどかしそうに揺れていた。

「じゅるっ……ちゅうう……」

「うあっ……しほ、さんっ、それヤバっ……!」

頬をすぼめ、しほは亀頭を強く吸った。同時に両の乳房を強く寄せ、ぎゅつと和明の肉棒を締め上げる。

「だ、だめ、ですっ! 射精るっ!」

「んはっ……構わないわ。和明くんの、精液……全部、飲ませて……んむっ」

「うあっ、はっ、ああっ……し、しほ、さんっ……!」

潤んだ瞳でしほは懇願し、再び亀頭を口に含んだ。

こみ上げる射精感に既に限界に近づいていたが、和明は少しでも堪えたかった。もつと彼女の、西住しほの奉仕を受けていたかった。

しほの手が緩むと、肉棒を包む乳肉の拘束が弱まる。しかし亀頭は熱い口腔内で舐め続けられている。

再びしほの手が両の乳房を寄せる。竿全体がむちむちとした乳肉に包まれ、射精を促すように堪らない弾力を与えてくる。

「あ、ああっ! イクッ、イキ、ますっ! ぐううっ!」

「ンッ、ンンッ!」

思わずしほの頭を押さえつつ、和明は絶頂に達した。抑えてきた射精感を一気に解放すると同時に、大量の精液が奥から昇ってゆくの分かる。

そのまま和明はしほの口の中に容赦なく射精した。

「あ……ああ……」

「ンッ、んぶっ、んむう……」

腰を震わせ、何度も訪れる射精感に和明は震えた。しほは吐き出される精液を、嫌な顔ひとつせずには嚥下してゆく。

やがて数回の腰の震えが止まり、ようやくしほは和明の亀頭から口

を離した。

「ゴホッ……」

「す、すみません、しほさん……」

「大丈夫……こんなに出して、気持ちよくなってくれたのね」

「……………」

せき込むしほに和明が気遣いを向けると、彼女は紅潮した顔で微笑みを返した。

乳房も露わに、ストラックスも半分脱げかけた状態でしほは立ち上がり、傍らの書棚に手を置いて和明に背を向けた。

「今度は……私にもお願い」

「……………」

ストラックスを完全に下ろすと、同様に黒いレースに包まれた肉付きよい尻が和明の眼前に露わになる。躊躇なくそれを引き下ろすと、和明はまだ勃起したままの肉棒に手を添えしほの背後に覆いかぶさった。

「こ、このまま……挿れて。もう、濡れてるから……」

「んっ……ほ、本当、ですね。こんなに……」

尻の谷間から亀頭をしほの秘唇に擦らせると、「くちゅり」と柔らかく湿った感触が伝わってきた。精液としほの唾液に塗れたそれを陰唇に押し当て、ゆつくりと腰を進めてゆく。

「し、しほさん、挿れますよ……くうっ！」

「ああ……和明、くん……！」

『家元、ご在室でしょうか？』

その時、ノックと共に少女の声がドア越しに鈍く届いた。

「!?」

「な……!?」

声には聞き覚えがあった。隊長の西住まほ。つまり——今こうして、半裸で和明の肉棒の挿入を待ち望んでいた——しほの実娘だ。

咄嗟に和明としほは視線を交わした。しほは小さく頷くと、口の中

に残っていたらしき和明の精液を飲み切り口を開いた。

「……………どうしました、隊長？」

『はい、本日の演習の結果と今後の事でご相談したい事があり、伺ったのですが』

「……………少し疲れました。今は休憩を取らせてもらっています。重要な要件なのですか？」

驚くべきことに、しほは先ほどまでの嬌声を上げていた姿のままに平時と変わらない凜とした声でまほと対応していた。和明は勃起のもどかしさを覚えつつも、二人の会話が終わるのを待つ。

「……………ん、んんっ？」

一旦離れたはずの亀頭に、濡れる秘唇の感触が再び当てられる。

「分かりました……………寝ているままになりますから、このまま、で、話をしましょう」

見れば、しほはまほと話しつつも腰を突き出し、和明の亀頭に物欲しそうに秘唇を押し当てていた。その頬は紅潮したままで、何かに堪えるように僅かに震えている。

「(しほさんも、我慢してるんだ……………!)」

「それで、どういった……………ンンッ！」

『……………家元？』

「……………大丈夫です、話を」

和明は溜まらず、話を続けるしほの膣内に肉棒を挿入させた。戸惑うように振り返るしほに、和明は小声で言った。

「(ごめんなさい、しほさん……………俺、我慢できないです)」

「(そんな、和明く……………んあっ!)」

ずぶずぶと巨根めいた肉棒がしほの奥まで押し入ってゆく。

口を押さえ、懸命に喘ぎを抑えるしほの姿に堪らない愛おしさを覚えつつ、和明は腰を振り始めた。

第三話

『……では、彼女は？』

「前回の視察から、一番の伸びを見せていました、た……自信を無くしているようであれば『期待している』と私が言っていたと、伝えなさい……」

『ありがとうございます。お疲れかと思うのですが、あと一件、よろしいでしょうか？』

「構いませ、んんっ……！」

懸命に嬌声を抑えつつ、扉の外のまほの問いに答えてゆくしほ。

その一方で彼女の膣内は何度も突き入れられる和明の肉棒を強く締め付け、射精を促してくる。

「くっ……締まるっ……！」

やはり声を上げないように声を殺しつつ、歯を食いしばりながら和明は腰をゆっくりと突き出した。思い切り肉棒を動かしてしほの膣内を堪能したかったが、それをすれば流石に彼女も自分も声を抑え切れないのは確実だ。

戸棚に手を置き、扉に顔を向けたままのしほの背に身を寄せる、いわゆる立ちバツクと呼ばれる体位で二人は繋がっていた。時折、彼女の身体が小さく震えると和明の肉棒の根元がきゅっと締められる。彼女も軽い絶頂に何度か達しているようだ。

『……という意見が出ており、次の対外試合の方針が割れています。ご意見を伺いたいのですが』

「対戦相手は……ヨーグルト学園、んくっ……でしたね」

『はい。練度は低いですが、島田流の支援を受けるようになってから強力な戦車を複数用意するようになりました』

「練度に大きな差があるならば、電撃戦が、良い、でしょう……っ！」
しほは時折、責めるように和明を見る。

しかし和明は、彼女の抗議が本気でない事に気づいていた。戦車道の日々の鍛錬で磨かれているしほのフィジカルは大学生の和明以上だ。その気になれば、難なく自分を引きはがし、まほと対応に専念

出来るはずである。

では何故彼女は本気の抵抗をしないのか？

「(しほさんも……興奮してるんだ……!)」

「で、ですから、次の試合はティーガーⅡや、エレファントの運用は抑え、Ⅳ号や駆逐、戦車で、編成、を……!」

『……家元、お薬をお持ちしますか?』

次第にしほの言葉が途切れがちになってきた。本気の絶頂が近いのだ。扉の向こうのまほの言葉に気遣いが混じる。そこに不審の響きは無い。それはそうだろう。自分の母親が、ドアひとつ隔てた場所で戦車道シヨップの学生に犯されているなど通常的环境下で出てくる発想ではない。

そう考えていた和明も、自身のこみ上げてくる射精感に我慢できなくなってきた。少し抽送のペースを上げ、濡れそぼるしほの膣内をコーラ缶サイズまで膨れ上がった肉棒が擦り上げてゆく。

しほはびくんと体を一瞬跳ねさせたが、呼吸を整えるとまほに言った。

「……大丈夫、です。あと少し休めば、元の調子に、戻ります」

『そうですか……失礼しました』

「もう……大丈夫ですか?」

『……』

しほが尋ねる。しかし、扉の向こうのまほの気配は動かない。

怪訝に思いつつも、和明は腰を使いつつしほに囁いた。

「(ごめんなさい、しほさん……俺、もう……!)」

「(いい、いいわ……私、も……)」

『……お母様』

その時、まほがしほをそう呼んだ。

「っ!」

「(うっ!?! く、くうっ!)」

急にしほの締め付けが強くなり、危うく和明は呻きを漏らしそうになった。

しほは顔を更に赤くし、戸惑いを浮かべつつも彼女に答えた。

「……どうしましたか、まほ」

『今日は……皆への指導の際、今まで以上に氣遣いをいただき、ありがとうございました』

まほの声に柔らかさが混じる。

「いいえ……んっ、思った通りの事を、述べたまでです」

『今日の演習内容であれば、以前のお母様であればメンバーを全員二軍に下ろす程の事を言われたかと思えます。メンバーも指導を真摯に受け止め、反省していました』

「……」

和明からすればアレでも十分に厳しいものであったが、それでも相対に抑えていたという事か。ならばテントの中でのしほの求め方も理解できる。

また、同時に和明はしほの反応の変化に気づいていた。まほから「お母様」と言われる度に膣圧が上がり、締め付けが強くなる。

おそらくは——「お母様」と言われる事で、彼女は気づかされているのだ。自分が只の一人の女性ではなく、母親なのだという事に。同時に、その母親である自分が夫以外の男性に犯されているという事実に、興奮しているのだ。

『……それだけです。お母様、ありがとうございます』

言葉を残し、まほの気配が遠ざかってゆくのを足音と共に感じる。

しほは泣きそうな顔で扉に目を向けていたが、やがて、和明を見た。

「お、お願い……和明くん」

「……」

「このまま……射精して」

「……しほさんっ！」

和明としても既に我慢の限界だった。荒々しく肉棒を突き入れると、待ち望んでいたように膣内の無数の襞が肉棒全体を弄ってくる。

「ぐうっ！ し、しほ、さんっ！ く、あああっ！」

「来て、来てっ！ んっ、あ、ふああっ！」

しほの一番奥まで突き入れた瞬間、精液が迸る。堪らない射精感と共に、他人の妻である女性の膣内に白濁液が注がれてゆく。

「ぐっ……はあっ……！」

「あ、ああ……」

「……はああ」

腰が震える度に精液が吐き出されると、それに合わせてしほの背が震える。やがて長い射精を終えると、和明は大きく息をついた。

「その……すみません、でした」

我ながら今更と思ったが、それでも和明は荒い呼吸の中で言った。

「俺、我慢できなくて……」

「……」

「う、ううっ!？」

射精を終え萎えかけていた肉棒が再度柔らかく締め付けられ、和明は小さく呻いた。

汗を浮かべ、紅潮した顔でしほは和明の方に振り向くと言った。

「もつと……もつと、して」

「……」

涙に濡れたしほの瞳にはまだ強い欲情の光があった。先ほどまでの搾り取るような動きとは打って変わった、優しく撫でるような襞の動きに和明の肉棒は再び大きさと硬さを取り戻してゆく。

しほの腰が震え、しなやかな脚はがくがくと震えている。快感の強さに立つのが難しくなってきたようだ。

自分の娘の間近で隠れて行うセックスに、しほは和明が思っていた以上に昂っていた。和明はしほの手を取り、その身体を支えた。

「しほさん、床に……」

「……え、ええ」

少し恥じらいながらもしほは一度肉棒を抜き、半裸のまま厚手の絨毯に膝を下ろし、手をつけた。もともと大ききさを見せつけていた豊かな乳房は重力を受けて更に重そうに揺れ、精液と愛液で濡れる秘所は淫猥に照り光っている。

汗に濡れる黒髪はうなじに貼りつき、白い彼女の肌に艶めかしい色彩を加えている。

四つん這いになったしほに、和明は覆いかぶさるように身を寄せる

と、豊満な尻に手を置いた。

「……挿れますよ」

「来て、そのまま、奥、まで……ンンツッ！」

「ああ……凄い、熱っ……！」

しほは絨毯に顔を埋め、嬌声を抑えながら悶える。和明はそのままの姿勢で一気に奥まで突き入れ、再び腰を引き、やはり奥まで突き入れた。

最初の射精で更にどろどろになった膣内を、滑らかに怒張が抽送されてゆく。

「あ、あっ！ ああんっ！」

「ぐっ、し、締まるっ……！」

突かれる度に甘い声を漏らすしほの痴態。我を忘れたかのような乱れ方にも関わらず、和明の肉棒は滑らかなながらも強い締め付けを受け続けていた。

「全部、見えています……しほさんと、繋がっている、ところ……！」

「い、言わないで……ンツッ！」

和明は結合部に視線をやった。愛液と精液に濡れた陰毛に彩られた朱色の秘唇が一杯に広がり、血管が浮き上がった凶悪な和明の巨根を受け入れている。その上でひくつく尻穴まで丸見えだ。和明は堪らなくなり、薄茶色のそのすばまりに指を這わした。

「っ！ か、和明くん、そこは……ひうっ！」

しほは和明の行為に思わず声を高くしたが、それだけで締め付けはより強くなった。

今までの行為でもそんな気配はあったが、しほには被虐欲があるようだ。日ごろ他者の上に立ち指導者としてプレッシャーを負う側であるが故に、その反動として誰かに支配され、依存したい願望があるのかもしれない。

「し、しほさんっ……しほさんっ……！」

「ああっ！ か、和明くんの、来てるっ、奥……もっと、もっと……！」

尻穴を弄る手を止めず、和明は更に腰を振った。それに応じるようにしほも体を前後させ、肉棒の与えてくる快感をより強く貪ろうとす

る。

もはや和明には、そしておそらくはしほも、声を殺そうという意識は無くなっていった。和明はしほの肉体が与えてくれる快感を、しほは和明の肉棒が与えてくれる快感を、夢中で求めあっていた。

既にしほは上体を支える事が出来なくなっており、尻だけを上げた体勢へと変わっていた。和明はより結合を深くするために上体を伏せ、獣の交尾めいた体位に移した。

「あああつ！ か、和明、くんっ！ と、届いてるっ！ ふああつ！」「うぐっ……やば、これっ……！」

尻穴を弄っていた手をゆさゆさと揺れる乳房に移し、掌に余るサイズの豊かな乳肉を揉みしだく。先端の乳首は固く尖り、優しく弄るとしほは嬌声と共に反応してくれる。

確かな弾力で手を押し返してくる乳房の感触を堪能しつつ、和明は更に腰を動かす。

部屋に入ってから二度の射精をしているというのに、早くも三度目の射精感がこみ上げてきた。

「ま、また、出ますっ！ 出るっ！」

「ひい、あ、はああつ！」

もはやしほは返事を返す余裕もなく、獣めいた喘ぎと強烈な締め付けで和明に応えた。半開きの口から喘ぎを漏らし、黒髪を頬に貼りつかせて悶えるしほの姿に和明はとどめの一突きと共に達した。

「出っ……！」

「あ、ああ、んああつ！」

しほの乳房を掴むように揉みつつ、和明は腰を止めるとしほの子宮に精液を叩きつけた。もう出し切ったと思っていたが、自分でも驚くほどの量が彼女の膣内に注ぎ込まれてゆくのが分かる。

「はあっ……と、止まらなっ、しほさっ……！」

「あ、ああ……こんな、溢れっ……！」

溢れた精液が逆流し、結合部に戻り、零れてゆく。上体を伏せたままのしほに体重を乗せたまま、和明は射精感が治まるまで余韻を味わう。

やがて射精が止まると和明は肉棒を引き抜き、そのまま腰を抜かしたように床に尻をついた。

「はあっ……はあっ……」

「んっ、はあ……」

一方のしほも、腰を突き上げた姿勢のまま余韻を味わっているようだった。秘唇から溢れた精液が絨毯に落ち、染みを作る。

「しほさん……凄いい、良かったです……」

「和明、くん……」

ゆつくりと身を起こし、しほは和明に向き直った。精液と愛液に塗れた半勃起の肉棒が彼女の視線を受けて揺れている。

しほはその肉棒に、改めて口を寄せた。

「え!?! し、しほさん!?!」

「このまま帰す訳にもいかないわ。今、綺麗にするから……」

「ちよ、そんな……うあっ!?!」

かぷりと汁塗れの亀頭を口に含まれ、和明は思わず背を反らした。

「んっ、んんっ……じゅるっ……んぷう……」

そのまましほは竿を喉奥まで呑み込み、丁寧に肉棒を舐め始めた。自分の愛液も混じっているというのに、眉ひとつ寄せることなく和明の肉棒に舌を這わせてゆく。

それは最初の、和明から精液を搾り取ろうとする口淫とは明らかに違っていた。汚れた肉棒を綺麗にしようという気遣いの籠った、細やかな舌使い。

絶頂した直後の肉棒は、その奉仕にも如実に反応を示して再び充血してゆく。しかし、口腔内で膨れ上がる肉棒にもしほは舌を止めず、カリの裏に残った精液まで吸い上げてくる。

「しほ、さん……これじゃ、またっ……!?!」

「れろっ……んんっ、んふあ……ふい、ふいふあ。ふおのまま……」

黒髪をかき上げつつ、肉棒を呑み込んだまましほはくぐもった声で言った。「射精しそうなら、このまま射精して」と言ってくれているようだ。

「あっ、ああっ!?! ご、ごめんなさい、もうっ!?!」

「ふうっ、ん、んんっ……！」

どくんと和明の腰が跳ねた。流石に四度目で勢いはさほどでは無かったが、しほの口の中に結構な量の精液が放たれる。

「ぐ、ぐうっ……！」

「んぷっ……んっ、んくっ……！」

しほは口を離すことなく、そのまま精液を受け入れた。その間も舌は止まらず、和明の肉棒を綺麗にしようとする動きを続けている。

「はっ、はあっ……！」

「……ふっ、ふうっ」

鼻息を荒くしつつも、最後までしほは口を離さずに肉棒を舐め続けた。

——和明が戦車道ショップに戻ってこれたのは、夏至直後の日の遅さでなお暗くなってからの事だった。

しほは精液塗れの秘所を部屋のティッシュで申し訳程度に拭くとショーツを履きなおし、和明に退室を勧めた。

「ありがとう、和明くん……後始末は私がしておくから、もう帰りなさい。余り遅くなると店長さんが心配するわ」

そう言い、まだ精液と愛液の匂いが残るキスを交わすと、乱れた服装のまましほは和明を見送った。

体液の付いたエプロンは畳み、和明は出来るだけ自然な風に建物を出るとタクシーを呼んだ。

「……あ」

「今日は、お世話になりました」

「いいえ、こちらこそ」

タクシーを待つ途中、建物から出てきた西住まほと挨拶を交わした。

出来るだけ自然な態度をしたつもりだったが——「お世話になりました」に商談以外の響きを感じたのは思い過ごしだろうか。

彼女は西住流の後継者として育てられていると、和明は聞いた。という事は、彼女も将来はプロの戦車道の選手となるのだろうか。

だとすれば——まほも将来、欲求不満を覚えて男性を求めるようになつたりするのだろうか。

「……………」

先ほどのしほの様に男性を受け入れ悶える姿のまほを想像し、和明は軽い自己嫌悪を覚えた。

「それはまた、大変だったねえ」

戦車道シヨツプの事務室で、和明の話を聞いた店長はさほど大変そうでない口調で言った。

そんな風な店長に対し、和明はふと頭に浮かんだ疑問を投げかけた。

「…………店長。ひよつとして先に帰ったの、家元がああなるのを把握してたんじやないんですか？」

「いや、それは無いよ。その話だと、家元は相当我慢して黒森峰のメンバーへの指導をしていたんだらう？　今までの家元なら、そんな遠慮はしなかったからね」

「え、そうなんですか？」

「ああ。僕も何度か見た事があつたけど苛烈というか熾烈と言うか…………一言でいうなら『鬼』だったね」

店長の話に嘘は無さそうだ。だとすれば、何故しほはそんなに抑えて指導していたのだろうか？

そう問いかけると、店長は少し考えてから答えた。

「あるいは…………この前の大会の決勝での黒森峰の敗北で、彼女も思う所があつたのかも」

「決勝？」

「ああ。優勝した大洗女子学園だけど…………あっちの隊長も、家元の娘さんだったんだよ」

「ええっ!？」

「まあ、そっちの娘さんとは、その、上手くいってないみたいなんだけどね」

「……………」

色々と彼女も抱えているという事なんだろうか。そして、自分の行

為は——世間から見れば、浮気以外の何物でもない行為は——少しでも彼女の助けになつてゐるのだろうか。

そんな事を和明が考へてゐると、ふと事務室の電話が鳴つた。

「おっと、こんな時間に……はい、戦車道シヨップヨコハマ……ああ！
どうも、お世話になつております！」

夜になつての電話は実際珍しい。怪訝な表情で電話をとつた店長は、驚きと共に突然姿勢を正した。

「……？」

「いいえ、大丈夫です。はい……はい、明後日ですね。数は……」

根拠はないが、和明は嫌な予感を覚えた。慌ただしく店長はメモを取りつつ対応を続けている。

「え？ あ、はい……大丈夫です。今もおりますが、代わりますか？
はい、ああ、分かりました」

ちらりと店長は和明を見た。だが、先方が断つたのだろう。そのまま電話を回す事無く受話器を下ろす。

電話を終えた店長は、困り半分、嬉しさ半分の表情で言った。
「やれやれ、千客万来だねえ……すまない篠原君、また忙しくなりそう
だ」

「え？」

「明後日なんだが、また大型発注が入つたよ。今度は大学選抜の演習
艦が寄港するそうだ」

「……大学選抜？」

その名前は和明にも聞き覚えがあつた。各大学の大学戦車道の優秀なメンバーを揃へた、社会人によるセミプロ戦車道にも匹敵する強さを誇るエリートチーム。確か代表者は、13歳にして飛び級で大学入りした島田流の天才少女——

「ひよつとして、今の電話の相手つて……？」

「ああ、島田流家元だよ。ちょうど今、視察も含めてその船に居るんだ
そうだ」

「……」

「篠原君に伝言があつたよ。『よろしく』と伝えてくれ、だそうだ」

「……………」

果たして大学演習艦には防音設備のある部屋はあるだろうか。それだけが和明には気がかりだった。

幕間

「三人で」前編

「はあ〜……」

旅館の窓から望む夜景の見事さに、水色の浴衣姿の和明は思わずため息をついた。横浜の近代的な夜景とはまた異なる、風情と歴史を感じさせる景色。

ふと目線を夜景から下に移す。木造の旅館の前には何両もの傷ついた戦車が並び、整備班が夜通しの修繕作業を行っている。今日、伊勢神宮にて行われた奉納試合による損傷だ。

『では、本日の奉納試合のハイライトを再び見てみましょう。この本堂の直前で両家元が正面から向き合う形になったわけですが……』

背後のテレビはケーブルTVの戦車道専門チャンネルに合わせられ、その試合についての特別番組が流れている。振り向いてみれば、ティーガーに乗った西住流家元・西住しほとセンチリオンに乗った島田流家元・島田千代が互いに砲身を向け合い、激しく撃ち合っている姿が映されている。

「あらあら……ここで焼夷徹甲弾を使わなかった辺り、焦りが見えますね」

「貴女の方こそ、ここで操縦手への指示を誤っていたのでは？　こここの履帯の動き、余りに不自然よ」

その映像を前にして、猪口を傾けつつ互いの問題点を指摘し合う和明と同じ柄の浴衣姿の二人の女性。島田千代と西住しほ、その本人である。

——現在、彼女らと和明は伊勢神宮を近くに臨む旅館の一室、それも一般の宿泊客が利用できない来賓用の部屋に宿を取っていた。無論これは和明によるものでなく、戦車道で名を馳せる二流派の家元を迎えるにあたり用意されたものだ。

横浜の戦車道ショップで午後には電話を受けた和明が飛ぶような勢いで新幹線と電車を乗り継ぎ、駅に着いてこの旅館を案内されたのは

つい二、三時間前の事になる。ちょうど試合を終えたばかりだったし、ほと千代は流石に疲れを見せていたが、温泉に浸かり汚れを落とし、浴衣に着替え——今はこうして、和明の横で今日の試合内容を肴に酒を酌み交わしている。

映像上のセンチユリオンが角を曲がろうとして石灯籠を倒した。しほがすかさず千代に言う。

「……随分と派手に石灯籠を壊したわね。これ、操縦手の運転ミス？」
「僚機の敵機撃破報告を受けていて、少し反応が遅れました。この時そちらにも走行不能の報告が入っていたのでなくて？」

「……………」

「まあ、この勝負も……………」

映像上で宮司が手を掲げ、試合の終了を宣言する。酒に唇を濡らしつつ千代が言葉が続けた。

「……………これで水入り」

「どちらの流派にも角を立たせない為に明確な決着はなし。時間制限あり……………最初からの聞いていた話ではあったけど、やはり消化不良で終わったわね」

「まあ、それでも全体としてはこちらが勝ったと言えると思うのだけど……………如何かしら、西住さん？」

「島田流の自信過剰は相変わらずね。全体の損耗率ではそちらが上回っていたはずよ」

「……………」

「……………」

「……………」

無言で視線を交わす二人を横目に何を言っつてよいか分からず、和明は無言で自身の前に置かれた膳のホタテの刺身を摘まんた。魚介類の新鮮さには定評ある伊勢だけに、瑞々しさは別格だ。手元のウーロン茶（二人からは酒を勧められたが、あくまで未成年という事で断つた）を口に含む。

しばし睨み合いを続けていた二人だったが、ふと千代が和明の方を見た。

「……和明君はどう思うかしら？」

「ツ!? ん、んぐつ……プハツ!？」

危うくウーロン茶を気管に詰まらせそうになり、せき込みつつ和明はそれを飲み切った。

和明の動揺には二つの意味があった。ひとつは急に話を振られた事について、もう一つは千代が自分を「名前呼び」してきた事だ。

「そ、そうですね……俺は素人だから、その、どっちがどうか、って言うのは……」

言葉を濁しつつ、具体的にどちらかの肩を持つのを避ける。しほがこちらに刺さるような視線を向けている事に気づいたからだ。

「その、それにしても、凄い料理ですね……俺、こんなの食べたの初めてですよ」

「ふふつ、急な話で来てもらったしね。足りないようなら、私たちの分もどうぞ」

露骨な話のそらし方だったが、千代もしつこく引つ張るつもりは無かったのかそれに乗り、微笑みを返す。箸を進めつつ和明は答えた。

「いや、それは悪いですよ……自分ので十分です」
「遠慮する事はないわ。しっかり食べておきなさい」

刺さるような視線を解きつつしほが言った。
「貴男にはこの後、頑張ってもらうのだから」

「……………」

「……全く、西住流は風情が無いわね」

思わず言葉に詰まる和明の様子に、千代が呆れたように言った。

そう——和明がわざわざ横浜から伊勢まで呼ばれたのは、こうして共に夕食を食べつつ談笑する事ではない。

戦車道の試合だけでは鎮まらない彼女らの「昂り」。そのの相手をするため、和明は名指しで指名を受けて呼ばれたのだ。まあ、それに喜々として乗ってしまったのは和明自身なのだが。

「ふう……………」馳走様でした」

その後は言葉少なに、戦車道チャンネルの番組を見つつ食事は進んだ。TVの中で活躍している女性が目の前で浴衣姿で居るとい

は、何とも奇妙な感覚だ。膳の料理を全て綺麗に食べ終え、和明は手を合わせて礼をした。

「どうぞ、食後のお茶よ」

「ありがとうございます……っ!? うわ……これ、凄いですね」

千代がそう言いつつ湯のみを差し出す。口に含んだ和明は、その苦みに顔をしかめた。

「漢方入りのお茶よ。消化を助けて、精力を強めるわ」

「……そうですか」

ややひきつった笑みを浮かべた和明に、千代は柔らかい微笑みのまま視線を再びTVに移す。

軽い気持ちで伊勢まで来た訳ではなかったが——どうやら今晚は二人とも「本気」のようだ。まだしほどの経験しか無い和明ではあったが、彼女らの帯びる雰囲気を感じさせた。

やがて旅館の仲居が膳を下げに来た。丁寧に頭を下げ、音もたてずに膳を持ち上げる。

「ありがとうございます、美味しかったわ」

「恐縮です……家元、本日は本当にお疲れ様でした」

落ち着いた姿勢で仲居と言葉を交わすしほ。欲求不満の解消の為に呼ばれた和明から見ても、彼女がそういったものを溜めているとはとても思えない様子だ。家元としてどう在るべきか、それを知り、身に着けているからこそその姿なのだろう。

一方の和明は隠れる風でもなく仲居に頭を下げた。最初は自分が家元らと同室に居るのはまずかろうと思いついたのだが、千代から「そんな必要はない。部屋で当たり前のように寛いでいなさい」と言われたのだ。

確かに仲居はこちらに不審そうな視線を向ける事もなく、自分が居るのが当たり前のような風に仕事をを行っている。

「今も戦車には乗られていますの?」

「ええ。ただ、流石に装填手を続けるのは難しくなってきました……戦車道クラブの若い奥さんに装填手はお願いして、今は砲手でやっています」

千代の言葉に仲居が微笑みつつ答える。なるほど、彼女らもかつては戦車道を志す少女で——古くからしほや千代とも知り合いという事か。

和明が納得している内に膳の片づけが終わり、再び部屋には和明と家元二人が居るだけとなった。

戦車道チャンネルの番組も気が付けば奉納試合の特集を終え、静かな音楽が流れる戦車道の歴史ドキュメンタリーに変わっている。

「……………」

「……………」

「……………」

無言で千代がしほを見た。しほはその視線を一旦受け止め、今度は和明の方に目を向ける。和明はごくりと喉を鳴らした。

「……………和明くんも準備はいいみたいね」

「そろそろ、始めましょうか」

「は……………はい」

千代がスツと立ち上がった。しほがそれに続き、一拍遅れて和明も座椅子から身を起こした。初体験でもあった前回は、和明の勃起した肉棒に我慢できなくなったしほが急に口淫を始めたところから半ばなし崩しに始まった。今回のように合図をして事を始めようとする空気には、当然ながらまだ慣れていない。

奥の部屋を見てみれば、シンプルな内装の和室に大きな敷布団と三つの枕が置かれていた。掛布団は避けるように畳んで置かれており、汚した時のためか替えの敷布団も用意されている。

「それじゃあ……………まずは急な頼みでここまで来てくれた和明くんにお礼”をしないとね。さ、座って」

千代はそう言うのと、するすると浴衣の帯を緩めた。衣擦れの音と共に前が開き、千代の白い肌とふつくらとした乳房、そして股間の茂みが露わになる。

てつきり下着を着けていると思っていた和明は、いきなり眼前に晒された千代の肢体に顔を赤らめつつ言った。

「ち、千代さん、下着は……………!?!」

「あら、浴衣に下着は風情が無いというものよ？　しほもそう思うでしょう？」

「……………」

しほは無言で自身の帯を緩めた。浴衣の上からでもくつきりと曲線を描いていた豊満な乳房が重そうに和明の眼前で揺れ、黒い陰毛に彩られた秘所が布地の隙間から覗く。

それだけで早くも和明の股間は充血を始め、トランクス（下着）の布地をぴんと張り詰めさせた。

言われるままに和明が先に掛布団の上に腰を落とすと、千代が和明の右に、しほが左に寄りそうように座った。

「しほは上をお願い。私は下から始めるわ」

「……………分かったわ、千代」

「え？　あの、上とか下って……………うっ！」

千代の細い指が浴衣の中に分け入り、トランクスを手慣れた様子で脱がせてくる。

「和明くん……………貴男は何もしなくていいわ。私たちに任せて……………」

「そ、そんな、悪い、です……………んっ……………」

「んっ、はあ……………ちゅ、ンンツ……………」

右からの千代の声に何とか和明は答えようとしたが、ふと顎に指を添えられ、しほの唇で口を塞がれる。熱い吐息と共にしほの舌が和明の口腔内に入り込み、菌茎を丁寧に舐め上げてくる。

「ふうっ……………はあっ、しほ、さん……………くうっ！」

「もうこんなに固くなってる……………それにしても、本当に凄いわね。しほが気に入るのも分かるわ……………ちゅっ」

「うっ、ううっ！」

千代の指が今度は肉棒に絡みついてきた。撫でるように上下に手を動かしつつ和明の浴衣の裾を上げ、顔を伏せると露出した肉棒の先端に軽くキスをする。それだけで和明の腰は跳ね、赤黒い亀頭から先走りを滲ませてしまう。

「んっ……………和明くん……………もっと、舌、出して……………」

「ふあ、は、はい……………」

「じゅるっ……んっ、あ、はあっ……!」

まるで捕食しようとするかのような、しほの貪欲な舌の動き。
なるほど、上と下というのは二人で――

「んうっ!」

そんな事を考える余裕もなく、和明は自分の肉棒がぬるりとした温かな感触に包まれた刺激に思わず腰を浮かせた。

しほとのカスを続けたまま目線だけを股間に向けると、身を伏せるようにした千代が肉棒を呑み込んでいた。整った唇は血管の浮かぶ怒張を啜え込むために一杯に広げられ、その舌はカリの部分を丁寧に舐め上げてくる。

「ふっ、ふうっ……んちゅ……」

亜麻色の髪をかき上げつつ、千代は頭を上下に動かし始めた。動きに合わせて緩んでいた浴衣は更に着崩れ、肩口から乳房にかけて露出してしまっている。

和明は腿の辺りに柔らかい突起が当たるのを感じていた。勃起した千代の乳首が頭の上下に合わせて擦れているのだ。

その時、しほが不意に唇を離した。

「ふう……それでは、こっちも攻めるとしましょうか」

「え? しほさ……んっ!」

「はっ、れろっ、はあっ……!」

彼女の言葉の意味を確かめる間もなく、和明は首筋に当てられたしほの焼けるような舌の熱さに声を漏らした。その舌は首筋から更に下へ向かい胸板へ、そして和明の乳首を啜え込んだ。

「んっ、ふう……ちゅうう……」

「くあっ! しっ、しほさっ! それっ……!」

愛おしそうに和明の乳首にしほの舌が絡みつく。男にとって乳首というのは無用の長物と思っていた和明だったが、それは間違いだった。しほの舌の動きに合わせて、痺れるような快感が乳首から全身に広がってゆく。

更にそれは千代の肉棒を舐めしやぶる刺激と合わさり、目眩がしそうな程の強烈な恍惚を和明に与えてきた。まだ始まったばかりとい

うのに、早くも射精感がこみ上げてくる。

「ンツ、ンツ、じゅるっ……」

「はあっ、んっ、ちゅうう……」

「ああっ！ ちよ、二人とも、駄目っ！」

和明の反応から射精が近いのを察したのだろう。千代はひとときわ深く亀頭を咥え、しほは和明の乳首を吸う。

先ほどまで勝ち負けを言い合っていた者同士とは思えないほど呼吸の合った責めに、和明はあっさり和白旗を上げた。

「あっ、ああっ！ ち、千代さん、射精るっ！」

「……！」

「あああっ！」

腰をびくびくと震わせ、和明は熱く滾った精液を千代の口腔内に迸らせた。千代は少し苦しそうに眉を動かしたが、口を離す事無くそのまま嚙下してゆく。

「ちゅ、ちゅっ、はあ……」

「ぐうっ！ し、しほさん！ 今されたら、またっ！」

射精している間もしほは和明の胸を責め続ける。和明が腰を浮かせると、更なる精液が吐き出されてゆく。

「ンツ……ンツ……ふう、凄い量ね……」

こくんと喉を鳴らし、千代がようやく口を離した。唾液と精液が入り混じった淫液が唇の端から零れ、敷き布団に新たな染みを作る。

その口元を見ているだけで和明は自身の内から熱いものが滾るのを感じた。萎えかけていた肉棒は再びむくむくと膨れ上がり、長さ20cm超の巨根の姿を取り戻す。先ほどの食事や千代の漢方茶には、確かに精力増強の効能もあったようだ。

「素敵だったわ、和明くん……じゃあ、今度はお互いに気持ちよくなりましょう」

「……そこに、横になってもらっついていいかしら？」

しほに言われるまでもなく、まだ射精後の余韻を残していた和明は二人の手が離れるのと同時に仰向けに布団に倒れ込んだ。屹立した肉棒が、まるで柱のように存在感を示す。

「ふふっ、今度は貴女に譲るわ」

「……和明くん、重かったら言いなさい」

「え……んむっ!？」

突如、和明の視界が塞がれた。何か覆い被さってきたのだ。暗い視界の中、戸惑うように首を振る。

「ンッ……!？」

しほの甘い声が耳に届く。和明は改めて自分の視界を覆う物体の正体を探った。

石鹸の匂いとチーズめいた微かな刺激臭。鼻を擦る、少しちくちくとした陰毛の感触。そして口周りに感じるむわっとした湿気と他とは明らかに異なる熱く、そして柔らかいぬめり。

「(これ、まさかしほさんの……)ンンッ!？」

身体の上のしほの重心が動いた。ちょうど和明の身体の上にしほが腹這いになるような形になり、今はしほの頭が和明の股間の位置に来ているようだ。熱い吐息が肉棒に吹きかけられているのが分かる。

「ふうっ!？ う、ふうっ!？」

そのまま和明の肉棒はしほの口に包まれた。千代の柔らかい舌使いと異なる貪欲な、雄の滾りを味わうような舌の動き。鈴口をつつき、同時に亀頭を吸い上げてくる。

「……和明くん、貴男も舐めてあげて」

顔にかかる浴衣の布地越しに千代の声が届く。和明は手探りで自分の顔の横に置かれたしほの太腿に手を回して固定すると、舌を伸ばしてしほの秘唇を舐めた。

「はあっ、はあっ……しほ、さん……!？」

「はあっ!？ んっ、ふうっ……!？」

少し舐めただけでしほの体は敏感に反応を示した。太腿の震えが、彼女の興奮を和明に伝えてくる。

しほは負けじと和明の肉棒を更に舐めしやぶった。頭を動かし竿の根元まで舌を届かせると、それを下から上へと走らせる。肉棒はびくびくと脈動し、先走りを滲ませる。

「うっ、うあ……!？ れろっ、んんっ、じゅるっ……!？」

「ふあ、はあっ！ か、和明くんっ！ そこっ……！」

和明は顔を持ち上げ、しほの秘所に自分の顔を密着させると舌を更に奥まで差し入れると陰唇を舐めまわした。舌尖に感じていた愛液の粘りが増してゆくの分かる。しほは和明からの快感に耐えかねたのか口を肉棒から離し、喘ぎを漏らす。

ふと、しほの太腿に回していた右手が細い指に包まれた。その指は和明の手をそのまま押し下げると別の場所へと導いてきた。浴衣の布地の感触を経て、やはり湿気と熱気を帯びた陰毛と秘唇の感触。

「和明くん……私の、ここも……好きなだけ弄って、いいから……」

先ほどよりも近くからの千代の声。おそらく、シックスナインの体位にあるしほと和明の横に寄りそうように座り、自身の秘所に和明の手を引き入れている。

和明がおおずと指を伸ばすと、くちゆりとした湿った感触。既に千代も先ほどのフェラの時から感じていたのだ。

「千代さん……！」

「ああ……い、いいわ、和明くん……！」

テクニクなど胡乱な男性雑誌の記事でしか知らないし、その知識もこんな非日常極まる状況で忘れてしまった。ただ本能のままに和明は指を動かした。傷つけないように丁寧に、しかしより奥まで。

少し闇に眼が慣れてきた。眼前には愛液と和明の唾液に濡れた陰毛が照り光り、それに彩られたしほの陰唇がひくひくと蠢いている。それは和明の今までの人生で最も淫猥な景色だった。

堪らなくなり、和明はむしやぶりつくようにしほの秘所に更に舌を這わせた。その奥からは際限なく愛液が滲んでくる。

「あっ、ああっ！ んちゅ、ンツ、んむう……！」

しほは快感に悶えつつも、再び肉棒を啜えこんだ。舌の動きが激しさを増し、頭の動きが速くなってくる。ホテルの時も味わった、射精を求めるしほの本気の動きだ。

和明は彼女に対抗するかのよう舌を尖らせると奥まで差し入れた。侵入してきた舌尖を褰が包み、まるで無数の舌で舐め返すように反応を示す。

「か、和明くん……もつと、激しく動かして、いいから……ああんっ！」
同時に千代の秘所を弄る指を、彼女の要望に合わせて不器用なりに動かす。布地越しの千代の声は艶が増し、言葉が途切れがちになってゆく。

「ンッ！　ンッ！　ンンッ！」

一方でじゅぽじゅぽと音が聞こえてきそうなしほの口の動き。鼻孔からそのまま脳に届きそうな淫臭が頭を痺れさせ、和明の理性を押し流してゆく。

「うっ、あ、ああっ！　しほ、さん……！」

「ンンッ！」

「このまま出して」と言わんばかりに、しほは巨根を喉奥まで呑み込んだ。

「ああっ！　ま、またっ！　うああっ！」

「ふうっ!?　ん、んうっ……！」

その瞬間、和明は二度目の精をしほの口腔内に放った。同時に彼女も達したのか秘唇は収縮し、和明の顔に愛液の飛沫が降りかかる。

「あらあら……しほったら、そんな美味しそうに……」

「んっ、こくっ、んむう……」

千代の声に、肉棒を啜えたまましほが呻きで返す。何か言い返そうとしたのだろうか。

やがて射精を終え、和明はしほの腿に回していた手と千代の秘所を弄っていた手を同時に脱力させ、布団に下ろした。にちやりとした音と共にしほの腰が持ち上がり、視界が開ける。

和明は軽い眩暈を覚えつつ身を起こした。見てみれば激しい動きで既に浴衣が半分以上脱げているしほと、浴衣の裾を乱して濡れた秘所が丸見えになっている千代が、どちらも頬を紅潮させて和明に視線を向けている。

千代が値踏みするように言った。

「……まだ、出来るわよね？」

「……………」

こちらを気遣うようなしほの視線を感じる。和明は自分の体の調

子を測った。まだ十分に活力は満ちている。

「だ……大丈夫、です……！」

そう言っていると和明は股間に意識を向けた。唾液塗れの肉棒はむくりと首を起こし、三度の射精を期待するように勃起してゆく。

肉棒への視線を潤ませつつ、千代は言った。

「これなら、まだまだやれそうね……今回の試合、本当に消化不良だったから……」

「……………」

無言でしほは和明の腰に顔を落とす。

「……朝まで、涸れるまで付き合ってもらおうよ？」

そう言って千代は蠱惑的に微笑むと、しほに続いて和明の股間へと舌を伸ばした。

「三人で」後編

二匹の赤い蛇が、血管を浮かべた巨根の竿を這いまわる。

「ぐっ、くうっ……ち、千代さん、しほさん、俺っ……！」

「んっ……まだ我慢して、もつとしてあげるから……」

「れろっ……ふぁふおひよっほ……」

「ああっ！ し、しほさんっ！ 啜えたままっ、喋っちゃー！」

龟头を口に含んだまま何かを言おうとする西住しほの口の動きに、和明は思わず背を反らして悶えた。

しほと島田千代。二人の家元の口の中に精を吐き出した和明は、今度は二人同時の奉仕を受けていた。上体を起こして腰を落とす和明に左右から這いよるような姿勢でしほが肉棒の先端からカリ周辺にかけて、千代が根元から竿にかけてを担当して、それぞれが怒張に舌を伸ばし、あるいは啜えてくる。

戦車道流派の事では絶対に譲らない二人だったが、こういう事に関しては呼吸が合うのだろう。互いが互いの口淫の動きを邪魔しないように頭の位置を調整し、それでいて休むことなく和明に刺激を送り続ける。二度の射精を経ているから何とか堪えられているが、これが初手であれば早々に和明は射精していただろう。今も和明の睾丸は精液を作り続けているらしく、既に次の射精感がこみ上げてきているのを堪えている状態だ。

和明は手を伸ばし、気崩れた浴衣の間に差し入れると二人の乳房を揉んだ。

「んっ！ こ、こら、和明くん……」

「お返し、です……ぐうっ！」

「んっ、んちゅ、ふうっ……！」

ずっしりとした重みが伝わってくるしほの乳房の感触。

柔らかくも張りのある弾力が伝わってくる千代の乳房の感触。

火照る肌に滲む汗がしっとりとしほの掌を湿らせる。二人の乳房の感触を堪能していた和明は股間からの刺激の強まりに思わず声をあげた。しほがより深く肉棒を啜えこんだのだ。千代はそれを察し

たのか、顔を下げると根元から袋にかけてを舐め上げ始めた。

「ンツ、ンツ、んくっ……!」

「あつ、くっ、ううっ! それ、強いっ!」

リズムカルにしほの頭が動く。口の端から零れた唾液が先走りど混ざり合い、照り光りながら千代の舌へと垂れ落ちてゆく。

しほは口を一杯に広げ、唇で肉棒を締め付けるようにしながら快感を与えてくる。その強烈な刺激に和明は呻きつつも二人の乳房を揉む手を止めず、先端の尖った乳首を柔らかく捏ねるように弄った。

「ああ……い、いいわ、和明くん……はあつ……」

胸を弄られる千代が甘い吐息を肉棒に吹きかける。体温とは思えない熱さに、それだけで和明の腰は軽く浮いてしまう。

しほは更に口淫を続ける。水音が聞こえてきそうな程に彼女の口腔内は潤み、舌は頭の動きに合わせてるように鈴口をつつき、時折亀頭全体を舐めまわす。

日本戦車道を代表する二人の美しい女傑。それが恍惚とした表情で自分の肉棒に奉仕しているという事実は和明の中に堪えようもない支配感を覚えさせた。

「うっ……し、しほさん、そろそろっ……!」

射精感の強まりと共に腰が震える。和明はしほに声をかけた。

「フツ、ふうっ……!」

「しほ、独り占めは駄目よ? 一緒に和明くんの精液を浴びましょう?」

「んむう……っば……わ、分かっているわ、千代」

それでも口を離そうとしないしほに、千代が窘めるように言った。名残惜しそうにしほが口を離すと。唾液と先走りに塗れた赤黒い龟头が露わとなる。

「遠慮しないでいいわ。和明くん……ちゅっ」

「うっ!」

「そ、そのまま……思い切り、私たちに、かけて……んっ」

「くっ、ああっ!」

しほと千代は再び左右に分かれると、肉棒にキスを繰り返してき

た。濡れた唇が血管を浮かび上がらせる肉棒に触れ、離れ、また触れる。愛おしそうに柔らかに触れるキスもあれば、吸い付くような強いキスも交え、それが幾度も繰り返される。

二人の肉棒への接吻という視覚的な刺激と未体験の快感に、和明の我慢も限界に達した。

「で、射精ますっ！ ああああっ！」

「……………」

「んっ、熱い……………」

噴水のように精液が迸り、肉棒への接吻を繰り返していた二人の顔へと降りかかる。整った顔を汚す精液を、しほも千代も喜々として受け止め、舐めとってゆく。

千代は肉棒の竿に手を添え、更に絞り出そうと丁寧に扱ってきた。

「あっ、ああ……………」

強烈な射精感を覚えつつ、和明は呻いた。勢いを弱めた精液が千代の手に垂れてゆく。

「まだ固いまま……………やっぱり、若い子は違うわね」

「……………」

千代の言葉通り、射精を終えた和明の肉棒は固さを保ったまま彼女の手に包まれていた。一方のしほは、潤んだ瞳でひくつく亀頭に視線を注いでいる。

「はあっ、はあっ……………凄かった、です……………」

「和明くん、どう？ 少し休む？」

「……………いいえ、大丈夫です」

大きく息をつく和明にしほが言った。彼女の気遣いに内心で感謝しつつも、首を横に振る。

この伊勢の神前試合には彼女ら家元だけが来ている訳ではない。それぞれの流派の門下生も同行してきている。明日の朝イチには西住流・島田流ともに集まりチェックアウトとなる。それとは時間をずらして和明も横浜に戻る予定だ。

そう考えると、二人と交わる時間はせいぜい数時間程度。その時間を休憩で費やすのは和明としても惜しかった。今晚の後、もう一度

しほや千代とセックスできる機会が来るとは限らないのだ。

「うんうん、和明くんもやる気満々って所ね……それじゃ、今度は和明くんに『選んで』貰おうかしら？」

肉棒に添えていた手を放し、布団横に用意されていたティッシュで顔を拭きつつ千代が言った。

「選ぶ？」

「……千代、本当にアレをやるの？」

小首を傾げる和明の様子に、しほが珍しく遠慮がちに言った。その反応は予想済みだったのか、千代は悪戯っぽく微笑みつつ答えた。

「しほ、そもそも和明くんは貴女の我が儘を聞いて来てくれたのよ？ それなら、相応のお返しはしないと」

「……分かったわ」

しほは少し頬に朱を差しつつ頷くと、少し和明から体を離れた。

何が起きるのか読めないままの和明に二人は背を向け、四つん這いの姿勢になると浴衣の裾を捲り、尻を持ち上げた。

当然ながらそんな事をすれば――

「あ、ああ……！」

和明は思わず言葉を失った。股間の肉棒がびくと跳ね、臍に当たりそうな程まで反り返る。

肉付きの良さと瑞々しい張りを両立させた堪らない尻の谷間から肉棒を求めてひくつく女陰が二つ、眼前で濡れていた。右が千代、左がしほ。

「さあ、和明くん。召し上がれ」

「……思った以上に、恥ずかしいわね」

こちらに顔を向けつつ誘う千代。枕に埋めるようにして照れた顔を隠すしほ。

くらくらするような眩暈を覚えつつ、和明は二人の女陰から目を離せずにいた。千代の方がしほに比べて色はやや淡く、陰毛も多くはないようだ。

「(千代さんの髪の色、地毛だったんだ……)」

愛液に濡れる亜麻色の陰毛を見つつ、和明の脳裏にそんな事が浮か

んだ。ゆっくりと体を起こし、反り返る肉棒に自身の手を添えるとやや角度を下げる。

和明の熱気の近づきに千代も気づいたのだろう。蠱惑的な微笑みと共に彼女は言った。

「どちらから挿れるかは和明くんの自由だけど……できれば、私の方から来て欲しいわね」

そう言いつつ、千代は緩やかに尻を左右に振った。

「私はまだ和明くんのソレを挿れてもらった事も無いし、しほがここまで気に入る貴方の太さと硬さ……味わいたいわ」

「うっ……！」

浴衣を着崩して尻を揺らし挿入を誘う千代の姿はこの上無く煽情的で、それだけで和明の肉棒は先走りを滲ませそうになった。肉棒の挿入を求める千代の膺孔に、そのまま誘われるように和明は足を向けた。

「……………」

その時、枕に顔を埋めたままのしほが千代に視線を向けた。千代は横目でしほを見ると言った。

「どうしたの？ ちゃんとおねだりしないと、和明くんは私の方に先に挿れてしまうわよ？」

「……………」

更にしほの顔が赤くなる。

和明は千代の意図を悟った。千代は先に誘うことで、普段のしほが間違っても見せないような姿をさせたいのだ。

しほはまだ恥じらいを残しつつも、枕から顔を離すと和明の方に顔を向けた。

「……………か、和明、くん」

「は、はい」

「その……こんな格好で言う事ではないけど、私のお願いを聞いてくれて、嬉しかったわ」

ぐぐくりと和明は喉を鳴らした。

「一度会っただけの、それも横浜に住んでいる貴方をいきなり呼ぶの

は、非常識だと思ったけど……」

「……………」

「……………」ここで試合をすると決まった時、真っ先に浮かんだのが、貴男だったの」

しほの視線が和明の肉棒に向けられる。それだけで股間はぴくりと反応してしまう。

「お願い、和明くん……………もう、ここが切なくて、我慢できないの……………貴男の、その、固くて太いので、私の中を、思い切り、突いて……………」
そう言いつつ、しほは自身の尻に手を回すと脚を広げ、尻肉を掴むと和明の眼前で秘唇を大きく開かせた。

にちやりとした粘りある粘液に塗れた朱色の秘唇は熱く潤み、内腿に垂れるほどに愛液を溢れさせていた。

「……………しほさんっ!」

頭で判断する前に、身体が動いていた。

和明は夢中でしほの背面に覆いかぶさるように迫ると彼女の腰に左手を伸ばし、右手を肉棒に添えて女陰に位置を定め、そのまま一気に奥まで突き入れた。

「ああんっ! か、和明くんっ! これっ、が、ああっ!」

「うあっ! しほ、さんっ! 中、熱っ!」

「ふふっ、お熱いわね……………んっ!」

悶えるしほの様子を横目に見ていた千代の身体がびくんと跳ねた。

「ンンッ!? か、和明、くんっ!」

「だ、大丈夫、ですっ! 千代さんも、俺、満足させます、からっ!」

挿入前に竿から離していた右手で、今度は千代の秘唇を弄る。テクニクなどを知っている訳ではない、荒々しい指使い。しかしそれを千代の女陰は受け入れ、膣内に入り込んできた指を締め付けてくる。

「ぐうっ! し、しほさん、締まるっ!」

「もつと、もつと突いて! かずあき、くんっ!」

無論、しほの膣内に押し入った肉棒はそれどころではない締め付けと熱さと滑りに包まれていた。無数の褻が竿の根元から亀頭に至るまでの全体を撫で、絞るように締め付け、無数の舌のように舐め上げ

て射精を促してくる。数度の射精を経ているというのに、それは和明の射精感を否応なく湧きあがらせてくる。

和明はあっさり到達さないように歯を食いしばり、そのまま腰を大きく引き、そして打ち付けるように再び奥まで突き入れた。

「くひいっ！」

「ううっ！ す、凄いですっ、前より、もつと熱くて、締め付けて、くるっ！」

無意識によるものだろうか。獣めいた喘ぎを漏らすしほは、自身も夢中で腰を振りつつも締め付けを緩めない。腰の動きと共に引き出される肉棒を惜しむように引つ張る動きを見せたかと思えば、子宮口を叩く勢いで入ってきた肉棒を喜々として受け入れてくる。

「あ、はあんっ！ 和明くんっ！ いいっ、いいっ！」

「んっ……凄いい、乱れっぷりね、しほ……ああ……！」

和明の腰の動きに合わせ、しほの豊満な乳房が揺れているのが背中越しからでも分かる。和明は少し上体を曲げると、しほの腰にあてていた左手を彼女の乳房へと移した。四つん這いになった事で一層の存在感を増した乳房は和明の手に余る程の大きさと重さを備えつつも、同時にしつかりとした弾力で和明の指を押し返してくる。

しほの膣内がびくびくと震える。彼女も絶頂が近いのだ。前回の交わりでの彼女の様子からそれを察した和明は身を起こすと、名残惜しくはあったがしほの膣内から肉棒を引き抜いた。同時に千代の秘所を弄っていた指を離す。

「あ、はあ……！」

「千代さんっ！ 次、いきますっ！」

「お願い、和明く……んんっ！」

今度は左手でしほの開いたままの膣孔を弄り、千代の秘所に挿入する。

「くっ……な、なんだ、これっ……!?!」

「んあっ！ お、思ったた、以上ね……和明くん、のっ、凄く、太くて、熱い……！」

千代の膣内の感触はしほのそれとはまた異なる、しかし負けず劣ら

ずの快感を和明に与えてきた。

しほほど全体を強烈に締め付けてくる訳ではないが、そこには緩急があった。竿の根元を強く締め付けながらも中は柔らかく撫でるように褻が亀頭を包み、同時に竿の部分はより奥へと肉棒を誘うように下から上へと蠢いてくる。

「ど、どうかしら、私の膣内……んっ」

「す、凄い、ですっ!」

「ああんっ! い、いいわっ! 奥、来てる……っ!」

「和明、くん……こっちも、もつと……ああっ!」

切なそうに快感を求めてくるしほに応えるように左手も使う。落ち着きある風情の和室に、ぐちよぐちよと淫らな水音が響く。

和明は更に腰を振った。汗に塗れ、亜麻色の髪を振り乱して悶える様は新鮮で、そして淫らだった。

「ああっ! た、堪らないわ、和明、くんっ! しほが、夢中になるのも分か……んはあっ!」

「千代さんっ! 千代、さんっ!」

ぱんぱんと互いの肉を打ち付け合う音と共に、強烈な快感が腰からこみ上げてきていた。ひと突きするごとに千代の膣内はその締め方や強さを変えてくる。「変幻自在の島田流」とは島田流の戦車道を示す代表的な言葉だが、男女の交わりでもそうなのだろう。しほの締め方が正面から射精を求めてくるものだったのとは対照的だ。大半の理性を飛ばし、ほぼ本能で腰を動かしつつ和明はそんな事を考えた。

「くうっ! 俺も、そろそろっ!」

「んんっ! で、射精そうなのね……!」

「お、お願い……和明くん、私の、方に……!」

射精感が強まってきた。和明の訴えに、しほは指を挿れられたまま腰をくねらせ膣内射精を求めてくる。

母子ほども離れた年齢の美女が自分の射精を望んでくる。それは和明の滾りをより昂らせた。

「わ、分かり、ましたっ!」

「んっ……し、仕方、ないわね……譲るわ、しほ」

和明は千代の膣内から肉棒を引き抜くと、限界まで膨れ上がった怒張をしほの膣内に再び突き入れた。

そのまま和明は腰の動きを速めた。しほもそれに応えるように腰を振る。結合部から溢れた愛液と先走りが布団に滴り落ち、染みを幾つも作ってゆく。

「あつ、ひいっ！ か、和明くんっ！ 私も、もうっ！」

「ううっ！ 俺も、もう、うあああっ！」

「あ、あ、あああっ！」

しほの膣内がひと際強く締め付けてきた。絶頂に達したのだ。それと同時に和明の我慢も限界に達し、しほの子宮に容赦なく精液を放つ。

「ぐうっ！ しほさんっ！ しほ、さんっ！ 射精るっ！」

「ふああっ！ き、来てるっ！ 和明くんの、一杯っ！」

射精が止まらない。それまでも結構な量を射精したと思っていたのだが、それとは比べ物にならない程の量が迸るのが和明にも分かった。

「あ、ああ……溢れ、ちやう……！」

「うああ……と、止まら、ない……！」

たっぷり数十秒はそうしていただろうか。力尽きるようにしほが上体をくたたりと伏せさせると、肉棒が膣内から抜き出る。

まだ開いたままの彼女の膣口からは、射精したばかりの白濁液がどろりと溢れ出してきていた。

「はあっ、はあっ……！」

腰が抜けそうな余韻の中、和明は大きく息をついた。しほから千代に視線を移そうと首を動かす。

「えっ!？」

ふと、その身体が押し倒された。仰向けになった和明に、重みがかかる。

「ち、千代さん!？」

「……お疲れ様、和明くん」

既に身を包む用途を為していない程に崩れた浴衣から乳房も秘唇

も露出させた千代が、頬を紅潮させつつ和明に跨っていた。

普段の柔らかい表情のまま、しかしその瞳を情欲に潤ませた千代が言った。

「しほに頑張って貰った直後に悪いのだけど……私の方が、まだ中途半端なの。このまま、お願い……ンンッ！」

「ああっ！ ちよ、くうっ！」

そう言うなり千代は和明の勃起したままの肉棒に手を添えると直立させ、ずぶずぶと自身の秘孔へと導いてきた。射精直後で敏感になつていた亀頭が再び快感に包まれ、和明は思わず呻いた。

「ああっ！ これ、いいわっ！ 届いてる、こんな、深い……っ！」

和明の胸板に手を置き、千代はそのまま腰を振り始めた。時折捏ねるように腰をくねらせ、桜色の乳首を尖らせて豊かな乳房を揺らす。

一方で、横のしほも再び身を起こした。寄り添うように和明の横に来ると、耳元に囁く。

「良かったわ、和明くん……千代が済んだら、もう一度、お願いね」

「は、はい……ぐうっ！」

「ああっ！ だ、ダメっ！ こんな、イクツ……！」

どうやらこの淫らな夜は、本当に朝まで続くようであった。

俺と家元（かのじよ）と南国の島 第一話

夏と言えば、海。それは夏のレジャーの不文律であろう。

前の彼女と別れる前の和明は当然のようにそう考え、彼女とお盆前には海に行けるようにバイトのシフトも調整し、二泊三日の泊まりを想定して完全にフリーな日を作っていた。彼の持つ巨根に彼女が怯え、行為を中断せざるを得なかった日のほんの数日前の事だ。

故に8月に入ってからのその三日間は、和明にとって暇なだけの日になる予定だったのだが――

『赤・ティーガー！、走行不能！』

視界一面に広がる砂浜、照りつける太陽、透き通る程に青い海。そしてそこで戯れる、水着姿の人々。

その砂浜の一角に設置されたプロジェクターに、戦車同士が撃ち合う光景が流れている。

海の家の子エアに腰かけつつ、トランクスタイルの水着姿の和明はそれを眺めていた。具の少ない焼きそばに箸を差し、それを口に入れる。

『白・パーシング、走行不能！』

遠くで砲声が聞こえる。プロジェクターに流れている試合は現在、和明の居るこの南の島でリアルタイムで行われているものだ。遠雷めいた砲声は立て続けに鳴り、試合が激しい打ち合いになった事を物語っている。

「……………」

白のマーキングが施されたセンチュリオン。その砲塔からパンツァージャケット姿の亜麻色の髪の女性が身を出し、何か指示を出している。その表情は凜々しく、映像からでも島田流家元・島田千代としてのあるべき姿を示しているのが伝わってくる。

映像が別ポイントの中継カメラに切り替わった。やはり白いマー

キングが施されたセンチュリオン、こちらからは小柄な少女が身を出し、状況を伺っているようだ。千代の娘にして13歳にして大学選抜チーム隊長を務める天才、島田愛里寿である。

「凄いよなあ、13歳で……」

氷が解け、少し薄くなったコーラを飲む。勇敢に戦う彼女らの姿を眺めつつ、和明は自分がここに来ている状況を振り返った。

そもそもの発端は、和明の携帯にかかってきた千代からの電話だった。

『篠原くん、ちょっと伺いたいのだけど……今から言う日って空いてないかしら?』

挨拶もそこそこにそう言うと、彼女は8月上旬の纏まった日を挙げてきた。

「ええつと……はい、そこならもともと空いてたんで、大丈夫です」

『良かったわ。それじゃあ航空券を送るから、そこに来て貰える?』

「こ、航空券? 何処に行くんですか?」

『ふふつ、それはお愉しみって事にしましょう。パスポートは要らないけど、水着だけは持ってきてね』

そう言うと千代は電話を切った。和明の自宅に書留が届いたのはその翌日のことだ。中には千代の言った通り、複数の航空券が入っていた。どうやら沖縄まで国内線で行き、更にそこからローカル線を使って南に行くようだ。

島名も聞きなれないものだったが、何はともあれ和明は水着や肌着などの身の周りのものを揃え、初めての飛行機に乗った。

『向こうでの宿は用意してあるわ。そこにチェックインして、あとは夕方まで海とかで楽しんで。まあ、海以外に楽しむ場所も無いところだけど……』

早朝、搭乗前に連絡した際の千代はそう言っていたが——彼女の言葉通り、その通りの島だった。小さな町に、広がる砂浜。夏はレジャーで、それ以外の季節は農業で賄っているようだ。海沿いになるにつれて建物が立派になり、観光客向けの宿泊所も目立つ。

しかしそれ以上に目立ったのは、空港からでも見える大学選抜の戦車道演習艦だった。学園艦サイズの、艦上で戦車道の大規模演習も可能なフィールドと施設を備えた巨大艦である。

そんな演習艦を横目に、和明はとりあえず千代に指示されたホテルにチエツクインして、折角なので海に出た。そしてひと泳ぎする前に腹拵えと思い、海の家で焼きそばを注文したところで——ここで戦車道の試合が行われている事を知ったのだ。

なるほど、夕方まで待つよう言われたのはそういう事か。

遠浅の海を泳いで堪能しつつ、そんなことを和明は考えた。

「ん？」

ふと砂浜の方を見る。何やら水着姿の女性の団体がビーチに来たようだ。和明は泳ぐのを止め、砂浜へと向かった。緩やかな波が身体を軽く浮き上がらせる。

どうやら彼女らはビーチパラソルなどを設置して、本格的に海を楽しむ用意をしているようだ。

やがて、幾つかのビーチチェアを広げ終わると一人が声をあげた。

「……よし。家元、準備できました！」

「ありがとう、お疲れ様」

彼女の言葉に、映像でのパンツァージャケット姿から打って変わった水着姿となった千代が答えた。

（おお……）

砂浜に戻り、海の家シャワールームに向かいながら和明は横目で千代を見た。

紫色のビキニタイプの上下に花柄のパレオを腰に巻き、頭にはつば広の麦わら帽子。胸の豊かな膨らみから引き締まった腰回り、そして再び肉付きよい尻へと描かれる千代の身体の曲線を映えさせるお洒落さを感じさせる出で立ちだ。

（しほさんなら、競泳用水着でも着てきそうだな）

そして、それはそれで彼女には似合うのだろう。そんな事を和明は想像した。

千代の傍らには頭ふたつほど小柄な、やはりこちらにも水着姿の少女——否、童女と言うべきか——がビーチボールを抱えて立っていた。フリル付きのクリーム色のワンピースに包まれたその身体は千代とは対照的に全くと言ってよい程に凹凸がなく、同時に余分な肉も一切付いていないようであった。戦車道ニユースなどにも頻繁に取り上げられる島田流の天才少女・島田愛里寿だ。
(本当に小さいな……)

戦車道ショップの店内放送や戦車道チャンネルで「飛び級で大学入りした、大学選抜の隊長も務める13歳」と和明も聞いて知ってはいたが、実物を改めて見ると13歳とも思えない幼い姿だった。小学校低学年と言っても通用するのではなからうか。

シャワーを浴び終え、和明はテラスでコーラを片手に砂浜を眺める。戦車道を修める女子大生の一団が来たことで、浜辺の華やかさが一段と増したようにも思える。

海で泳ぐ者、ビーチバレーを楽しむ者、サンオイルを塗りビーチチェアで寛ぐ者。各大学から選出されたエリート揃いとはいえ、こうやって眺めている範囲では普通の女子大生と変わるものではない。
「……………」

思えば奇妙な縁でここに居るものだ。

改めて和明は思った。本来であれば今浜辺で遊んでいるような同世代の彼女とこの夏を堪能する予定だったのが、偶々戦車道ショップに務めていた事で二人の家元と出逢い、肉体関係を結び、こうして南の島まで遙々と来るまでになっている。

「おっ……………」

ふと、その視界に影がかかった。

見上げてみると、大きく上がったビーチボールがこちらに飛んできている。

やがて、そのままビーチボールは和明の手前で落ちた。飛んできた方向を見ると、とことこと小柄な少女がこちらに向かってきている。

和明は椅子から立ち、ビーチボールを拾うと彼女、愛里寿にそれを手渡した。

「はい、これ」

「……!?!」

拾ってくれると思っていなかったのだろうか。和明の行動に愛里寿はびっくりと反応を示すと、おどおどとビーチボールを受け取り、ぺこりと頭を下げた小走りに去った。

あまり男性というものに免疫が無いのだろう。彼女の反応に逆に微笑まじさを覚えつつも和明は椅子に戻った。

「……あれ?」

再び愛里寿がこちらに戻ってきている。それも今度は傍らに千代が一緒だ。

和明が怪訝に思っている内に、二人は自分の座るチェアまで近づいてきた。

「すみません、うちの子がお礼も言わずに貰ってしまつて……」

「え? あ、いえ……!」

いきなりの他人行儀な千代の言葉に和明は一瞬戸惑ったが、何とかそれに返した。愛里寿が横にいる以上、確かに初対面として振舞わねばならない。

少しぎこちなさを残す和明に対し、千代は本当に初対面かのような態度で愛里寿に言った。

「ほら愛里寿、ちゃんとお礼を」

「……あ、ありがとう、ございしました」

ワンピース姿の愛里寿は顔を俯かせ、視線を合わせないままではあったが和明に礼を言った。

「ごめんなさい、あまり男の人と接する事が無くて……ちようど休憩するところでしたので、良ければ相席させて貰えないかしら? 少し、奢らせてくださいいな」

「あ、は、はい。大丈夫、です……」

そのまま千代と愛里寿は和明の前に座り、海の家従業員の注文を取った。程なくして和明にはカレー、千代には焼きそば、愛里寿の手前にはかき氷が届けられた。

「学生さん? 地元の方ではなさそうだけど……」

「ええっと、はい、あの、横浜から来ました」

「それはまた……遠くから来られたのね。まあ、場所で言えば私たちも似たようなものだけど」

千代の思惑が読めないまま、和明は他愛ない会話を続ける。

肉体関係を含めた付き合いが始まってからしばらくになるが、彼女がしほ以上に「読めない」人物であることが和明にも分かってきた。しほは単純に喜怒哀楽を表に出さないだけで、行動そのものは直情径行というかストレートだ。

しかし千代はその逆で、常に落ち着いた雰囲気微笑みを絶やさないが——本音を出さない。

「戦車道の方……ですよね。そちらの、その、娘さんも」

もう少し男としての経験を積めば、そういつた彼女の内面も窺えるようになるのだろうか。そんなことを考えつつ、和明は千代に話を合わせる。

「っ!？」

こちらに話が振られると思っていなかったのだろう。黙々とかき氷を口に運んでいた愛里寿は和明の言葉にビクツと反応した。本当に人見知りする性格のようだ。

「ふふ、お恥ずかしい戦いを見せたわね」

「そんな事はないですよ。本当に、凄いなと思いました」

これはお世辞でなく、心からの言葉だった。友人とゲームや漫画の事しか話をしていなかったような13歳の頃の自分と比べて、本人より二回りほど年上の大学生に囲まれて彼女らの隊長を務める愛里寿は素直に凄いなと思えた。

「あ、ありが、とう……ございます」

赤面しつつ愛里寿は言った。頬を染め、顔を俯かせながらも赤いシロップがかけられたかき氷を口に運ぶ様子が何とも可愛らしい。

やがて、そんな話を交わしつつも和明たちは食事を終えた。スツと千代が立ち上がる。

「会計はこちらに持たせて頂戴」

「いや、それは……」

「いいから、いいから」

そのまま流れるような所作で千代は和明の横を通り過ぎる。

「……………」

パレオから財布を取り出す千代の手が和明の手前の皿の下に一瞬滑り込む。気付いた時にはそこには一枚のメモが挟まれ、千代は確認する事無く会計に進む、

「……………」

ちらりと愛里寿の様子を伺う。その視線は千代に向いており、自分とは視線を合わせようとしていない。和明はメモを開いた。

そこには何処かの住所と、

『20時に』

とだけが書かれている。

視線を上げると、ちょうどこちらを見ようとしていた愛里寿と目が合った。

「……………」

愛里寿は再び赤面して顔を伏せた。

「……………昼のアレ、メモを渡すためだけにやったんですか？」

——指定された時間の10分前にメモにあった場所に来てみれば、そこにあつたのは一軒のコテージだった。

『私有地・許可なき者の立ち入りを禁じます』と書かれた立て札と柵に仕切られた砂浜に建てられた、高級感を感じさせる木造建築。広いテラスをカンテラの柔らかい光が照らしている。

テラスの丸テーブルから夜の海を臨みつつ水着姿の和明が言うと、向かいに座る、やはりこちらも水着姿の千代が答えた。

「目的のひとつ……………ってところかしら」

テーブルの下に小型のクーラーボックス、上には二つのグラスにボトルにサンドイッチ。飲酒を断り続けている和明を気遣ってか用意されたノンアルコールワインは、まだ冷えたまままだ。

「うちの娘に会って欲しかったというのが、むしろ大きいわね。母親

が言うのも何だけど、可愛いかったでしょ?」

「テレビでは何度か見た事ありましたけど……普段はあんな感じなんですね。インタビュートかにも堂々と答えていたから、もっと大人っぽい、ハキハキした子だと思ってました」

「ふふつ、あの子なりに結構無理してるのよ。島田流継承者として、西住流の西住まほさんとも比較されがちだし」

「……………」

自分には想像もできない世界だが、やはり名門の娘というプレッシャーなども日々背負い、戦車に乗っているのだろう。ワインを傾けつつ和明は思った。ノンアルコールとは思えない、芳醇な風味が口の中に広がる。

しかし、今の千代の説明には肝心な「自分に会わせなかった」という理由が含まれていない。彼女は言葉を続ける。

「この界限は、どうしても男性と関係する機会が少なくなるわ。戦車道連盟の役員さんとかはご年配ばかりだし、大学連盟の選手は年上の女性ばかり……だから些細ではあっても、今回みたいに知らない男性とも話せるようになってほしいと思ったの」

そう言う千代の表情は娘を氣遣う母親そのものだ。彼女の纏う雰囲気、和明は違和感を覚えた。

今の彼女は——これまでの逢瀬の時のような、試合などでの欲求不満の氣配を帯びていない。

「何だか……今日の千代さ、いえ、島田さん、すつきりしてますよね」「あら、分かる? 今日演習だけど、愛里寿を含めてみんな良い戦いをしてくれてね。次の海外交流戦でも期待できる、満足な仕上がりがだったわ」

和明の言葉に千代は小さく驚くと、嬉しそうに微笑んだ。自分とは親子ほどに年の離れた女性のはずだが、こういう時の彼女はまるで少女のように素直な笑顔を見せる。

しかし、彼女がそういった欲求不満を抱えていないという事は——「……………」

おそらく千代は、ここでの演習で強い欲求不満を覚えなにかの備

えとして自分を呼んだのだろう。島民の狭いコミュニティでは、島の誰かが関係を持ったなどはすぐに広まりかねない。

少しの寂しさを覚えつつ和明はサンドイッチに手を伸ばした。

「……………」

音も無く千代が立ち上がった。サンドイッチを掴む前の和明の手に触れ、そのまま身を寄せてくる。

「それは……………どうかしら?」

「!?」

和明は座ったまま千代を見上げた。悪戯っぽい光が瞳に宿っている。やはり欲求不満を抑え込んでいるような、欲情の光ではない。

「い、いや、でも……………千代さん、溜まってはないんですよね」

「ええ。久々に試合を終えて、すつきりしているわ」

千代の指が和明の指に絡みつく。

「そういうのを抜きで、貴男としたい……………そう思っては、駄目?」

「……………」

千代の手を柔らかく握り返し、和明も椅子から立ち上がった。苦笑いを浮かべつつ、千代に顔を寄せる。

「千代さん……………そういうの、男は本気にしますよ?」

「……………随分と慣れてきたわね。もっと焦ってくれるかと思ったのだけど」

『教官』が優秀なんですよ、きつと」

「ふふつ……………それじゃ、和明くんの本気を頂戴。ンツ……………」

「んっ……………」

寄せてきた千代の唇を自身の唇で塞ぐ。熱帯夜の湿度を伴う暑さは夜でも汗ばむほどで、和明の胸板に千代の豊かな乳房が押し当てられる。

「ふうっ……………ち、千代さん、中で……………」

「大丈夫よ。こここの一角はうちのプライベートビーチだから……………声を出して、聞く人は居ないわ」

「うっ……………」

千代の手が水着越しに和明の股間を撫でた。ゆとりあるトランク

スタイプの水着の中で、肉棒がびくりと反応を示す。

南風が砂浜のヤシの木の葉を揺らす。その音を耳に聞きながら、和明は千代の愛撫に腰を震わせた。

「もう、こんなに元気……」

和明の唇から離れた千代は腰を落とし、和明の前に跪いた。早くも水着の布地を張り詰めさせている和明の肉棒を自身の正面に来るように座り、テーブル下のクーラーボックスに手を伸ばす。

そこから取り出したのは、見覚えのあるドレッシング入れめいた半透明の容器だった。中にはとろりとした透明のローションが入っている。

「千代さん？」

「水着だと、ちよつと面白いこともできるから……んっ」

そう言うと、千代は容器を傾けて自分の胸に垂らした。千代の白い肌を粘りある液体が濡らし、カンテラの灯りを照り返す。紫色のビキニは濡れた事で千代の肌に密着し、豊かさと張りを備えた彼女の乳房の形をくつきりと浮かび上がらせる。

千代は十分な量のローションを自身の乳房の谷間に垂らすと、容器を置いて和明の股間に手を伸ばしジッパーを引き下げた。むわつとした熱気と共に、勃起した和明の肉棒が露わになる。

「それじゃ、始めるわね」

「え？ 千代さ……ううっ!？」

千代は体を密着させたまま和明の腰に手を回し、そのまま体をずり下げた。振り返っていた肉棒は唐突にローションの冷たい滑りと千代の乳房の温もり、そして圧迫感に包まれ和明は思わず声を漏らす。

「ああ……熱いわ、和明くんの、ちんぼ……動く、わね……」

「くうっ！ ち、千代さんっ!」

膝立ちのまま、千代は体を上下させ始める。見下ろせば水着で締め付けられた乳房の谷間に和明の肉棒はすっぽりと挟まれており、彼女が身体を下げる際には時折亀頭が谷間から除く。

「うあっ！ こ、これ、強っ……!」

同時に和明の腰に回された手はしっかりと固定され、体が離れない

ようにされている。

なるほど、確かに通常のパイズリであればそちらに回さなければいけない両手が、これなら自由に――

「はあっ、んっ、はふっ……」

「くっ、くううっ！」

そう考える間にも千代は顔を俯かせ、舌尖を伸ばして和明の亀頭を舐めてくる。先走りが滲み、ローションに混ざり合う。

腰が痺れるような快感を覚えつつ、和明は千代の身体の動きに合わせて腰を振った。水着によってぎゅっと寄せられた豊かな谷間の乳肉の感触は膣内とは異なる、しかし堪らない快感を和明に与えてくる。

やがてローションの冷たさを肉棒と乳房の熱さが上回り、和明の肉棒全体を温もりが包み込んだ。和明は夢中で腰を振り、千代の双丘を堪能する。ローションが泡立つほどの動き、しかし、千代の両手は和明の腰から離れず、肉棒が抜ける事を許さない。

「ちゅ、んはっ、ど、どうかしら、和明くん……っ」

「ううっ……す、凄い、です……千代さんの、おっぱい……こんな……！」

「ふふっありがとう……もつと、してあげる……」

「ああっ！」

腰を深く落とし、完全に露出した和明の肉棒を千代はかぷりと咥えた。そのまま小刻みに体を揺らし、乳肉の奉仕と口淫を同時に行っていく。

千代の奉仕は、互いが互いを貪るようなしほの奉仕とは異なるところがある。何というか、自身には多少の余裕を残しながら、こちらを気持ちよくさせようという奉仕。

特に今回は欲求不満を覚えていないのも大きいのだろう。熱心に和明の肉棒に奉仕を続ける様は、まるで彼女が自分の性奴隷になったかと思えるほどに従順だ。

やがてビクビクとした射精感が腰の奥からこみ上げてきた。千代の頭に手を置き、和明が呻いた。

「ち、千代さん、そろそろ……！」

「構わないわ。このまま、和明くんの好きな時に、思い切り、出して……」

千代は顔を離そうとしない。より熱心に乳房での奉仕を行いつつ、舌を亀頭に伸ばしてくる。熱い吐息が鈴口に吹きかけられ、張りを増した乳房は一層左右から竿を締め付けてくる。

「ああっ！ ち、千代さんっ！ 射精るっ！」

「いいわ、頂戴……和明くんの熱いの……！」

「うっ、あああっ！」

「……！」

和明の腰がどくんと跳ね、亀頭から濃い精液が迸った。どろどろの白濁液が何度も放出され、千代の顔を、水着を、乳房を汚してゆく。

「あ、ああ……」

「凄い……こんな、一杯……！」

乳房の深い谷間に精液の溜まりが出来るほどに和明は射精し、大きく息をついた。

生臭いその液を浴びつつ、千代は恍惚とした表情で呟く。

更に数回の腰の震えを経て、ようやく和明は射精を終えた。

まだ半勃起状態の肉棒を見下ろし、千代が言った。

「まだ元気なまま……和明くんも出したりないでしょ？ このまま、私の胸でもう一回……してみる？」

「千代、さん……うっ、お、お願い、します……！」

ローションと汗と先走り、それに精液が混じり白く濁った液が谷間の奥に届き、より強い滑りと快感を伴ったパイズリが和明の肉棒に与えられる。

和明が頷き、千代が動きを再開しようとした時——ふと、千代の動きが止まった。

「ど、どうしました？」

「……和明くん、ちよっと待ってね」

千代はそう言うのと体を上げ、乳房の谷間から和明の肉棒を開放するとそのまま立ち上がった。コテージの背面、町側に顔を向ける。

「出てきなさい！」

先ほどまでうつとりと睦言を囁いていたとは思えない程の鋭さが込められた言葉が、夜の闇に投げかけられる。

「……………」

和明は思わず息を呑み、声の向けられた方向からの反応を待った。

「……………」

——何も返ってこない。

千代の勘違いだろうか？ そう思った時、千代が言った。

「逃げたわね。和明くん、ちよつと……………」

「え？ あ、はい！」

カンテラを持ち、こちらの返事を待たずに小走りで向かう千代を慌てて和明は追う。

その足はさほど遠くない、あるヤシの木の木陰で止まった。カンテラの光に照らされたそれを見る。

「これは……………」

ヤシの木の幹に、誰かが手を置いていたと思われる跡。その位置は低い。

次いで砂浜、小さな足跡が、まるで足踏みしたかのように細かく残っている。

「千代さん、これって、もしかして……………」

その足跡の主が誰であるのか、和明にも推理する事は難しくなかった。

島田流のプライベートビーチに、わざわざ島民の子供が夜に侵入するだろうか？ 残る可能性は——

「……………参ったわね。いずれ来るとは思っていたけど」

そう言う千代の言葉には、和明が今まで聞いた千代の声には無かった『戸惑い』が込められていた。

第二話

「娘の『相手』になつてほしいの」
「……………」

海岸近くの喫茶店。昼下がりの激しい照り付けはカーテンによつて和らげられ、店内に爽やかな陽光として注いでいる。

しかし今こうして和明と千代が交わす言葉の内容は、そんな爽やかさとは程遠いものであつた。

和明は手前に置かれたアイスカフェオレをひと口飲むと、ゆっくりと千代に言った。

「ええつと……………それつて『遊び相手』つて意味ですよね？」
「……………」

千代は無言で首を横に振る。

「いや、千代さん？」

「あの子のセックスの相手をして欲しいの」

まっすぐに千代は和明を見た。思わず額を押さえ、和明が言った。

「いやいやいやいや……………千代さん、ちよつと落ち着きましよう？」

「考えた上での話よ」

「いや、流石にそれは……………」

声が大きくなりそうになり、和明は一度口を閉じて周囲を見た。水着姿のままに入店している客などもいる店内は賑やかで、こちらの話に耳を傾ける者はいない。

改めて声を抑えて和明は言った。

「それは無茶苦茶ですよ！ 彼女、まだ13歳で彼氏どころかボーイフレンドも居ないんですよ？」

「……………ええ」

「そんな子に、昨日ちよつと会つただけの俺が出てきて『君の欲求不満は俺が解消するからセックスしよう』つて言つて、納得してくれる訳が……………」

「あの子が……………愛里寿が性徴期をそろそろ迎えるとは分かつていたわ。それに伴つて、戦車道の優秀な選手として欲求不満が発生する事

も。予想より早くて、昨晩は動揺してしまっただけ」

あくまで落ち着いた口調で千代は言う。ストローを咥え、手元のレモネードを飲む。

昨晩プライベートビーチへの侵入者の痕跡を発見した後、和明と千代はシャワーを浴び、なし崩しにその場で別れた。明けた翌日、和明はこうして喫茶店に呼び出され——今に至る。

「正直なところ、あまり時間の余裕がない問題なの。あの子もオナニーで自分を慰める程度はできるでしょうけど……同じ苦しみが分かる母親として、それは健康な状態とは呼べないわ」

「そ、そうかもしれないですけど……それなら、もつと年齢とか、立場とかで近い相手を……」

「それが居ないから、信頼できる貴男に頼みたいの。和明くん」

千代はあえて和明を名前呼びすると、言葉が続ける。

「愛里寿は既にゼミも受講している大学生で、身近に同世代の男の子は居ないわ。戦車道関連の男性は大人ばかりだし、当然、そんな人たちに愛里寿の相手は頼めない」

「……」

どうも千代の話には形になっていない「焦り」があるように思える。和明は尋ねた。

「それだけじゃ、ないですよね?」

「……本当に勘が良くなったわね」

小さなため息をつく、千代は言った。

「これは身内の恥になってしまっただけ……正直なところ、戦車道の競技者にはレスビアンも少なくないわ。大学選抜選手にもね」

「……!?!」

確かに女性専門競技だけに、そういう人も中にはいるだろうが——それをはつきりと認めた千代の言葉に和明は驚いた。そして同時に、千代が本気で愛里寿の相手を自分にしようと考えている事を理解した。

「性癖は個人の自由だから流派としてどうこうは言えないわ。ただ……大学選抜のチームメイトの中に、うちの娘に目をつけている者も

いる。それが愛里寿の欲求不満に気づいたら……」

「……………」

パンツアージュジャケット姿の女性に押し倒される愛里寿を危うく想像しかけ、和明は頭を振った。

なるほど、確かに自分の娘の初体験が同性相手というのは千代としては避けたいだろう。

だが――

「……………それでも、やっぱりこういうのは、間違っていると思います」

少しの逡巡があつたが、はつきりと和明は言つた。

「愛里寿ちゃん……………って、呼んでいいでしょうか。どんな理由があるにせよ、俺たちが今こうして話をしている事って、結局のところ……………彼女の意思を無視して言っているだけじゃないですか」

「……………」

千代は答えない。和明は言葉を続ける。

「そりゃ、俺は子供を持った事も無いですけど……………例えそれが相手を心から思つての事だつたとしても、踏み込んだじゃない領域つてあると思うんです。ましてやそれが、愛里寿ちゃんの初体験に関わってくるなら、猶更」

「……………」

「だから……………愛里寿ちゃんに相応しい相手が見つかるまで待つてくれるか、頼むにしても俺以外にしてください」

「……………和明くんらしい答えだと思つて」

レモネードをひと口飲み、千代は言つた。

そのまま視線を、自分の後ろに向ける。

「……………どう思う、愛里寿？」

「え？」

和明が疑問に思う間もなく、千代の背後の席に座っていた小さな影がぴよこんと椅子を降り、こちらに向き直つた。

余所行きの服なのだろうか。黒いエプロンドレス姿の愛里寿がそこには居た。白いシャツと黒白ツートンのニーソックスが何とも似合っている。

あどけなさを残す顔を少し緊張させつつ、愛里寿は和明を見ていた。

「あ、愛里寿ちゃん……!?!」

まさか、最初から千代が同席させていた?

千代の意図を測る間もなく、愛里寿が口を開いた。

「篠原さん」

「え!?! あ、その……」

「……私の身体が今までと違ってきていたのは、気付いていました」

そう言くと、愛里寿は自分の席にあつたメロンソーダをこちらのテーブルに移し、飛び乗るように空いた席に座った。

「母上……いえ、お母様からそれを聞いたのは、今朝の話です」

「(千代さん、全部彼女に話したのか!?!)」

何とも思い切った事をする。呆れるべきか感心すべきか分からぬまま、愛里寿が更に言った。

「試合や演習の後に体が熱くなり、それを持って余すようになったのはつい最近の事です。最初は単なるパンツァー・ハイの残渣だと思っていました、それが……」

そこまで言くと、愛里寿は頬を少し赤くすると小声で続けた。

「それが……股間や、胸を中心に疼く事から、違うと気づきました」
「……!?!」

誰も気に留めてないとはいえ、昼下がりの喫茶店で思い切った事まで言う。戦車道で隊長を務めるだけあり、恥ずかしがり屋でも肝は据わっているということか。

「昨晚コテージに行ったのは、何となくでした。お母様が夜によく涼みに外に行かれていたのは知っていましたし、私も、自身の火照りを冷まそうと思っただけ……」

「そして、そこで私と和明くんのアレを見たという訳」

千代が補足する。

「お母様に気付かれて、思わずその場から逃げて……自分の火照りの原因が、篠原さんとお母様がされていた事と深く関係するものだから……」

「いや、分かったって言っても……」

「翌朝、泣きそうなこの子に全部説明したわ。今の愛里寿に何が起こっているのか、その解消にはどうすれば良いか」

まだ早い、そう言おうとした和明を遮るように千代は言った。愛里寿が頷いて同意する。

俯きがちだった顔を上げ、愛里寿は和明を見た。

「お母様は『長い付き合いではないが、信頼できる人』と篠原さんの事を言われていました。それに対して私は『この話をしたとき、どういう反応をされるか確認したい』と答えました」

「……それで、隠れて？」

「二つ返事で引き受けるような方であれば、お断りするつもりでした」
辛うじて返事をした和明に、愛里寿はペこりと頭を下げた。

「こちらの事を大切におもんばか慮れる方だと思いました。私からもお願いします」

「……………!?!」

「今日の本格的な演習はこれからなの。夕方には総括を含めて終わる予定よ」

そう言うと、千代はスツとテーブルの上に小さな鍵を置いた。

「コテージの鍵のスペアよ。受けてくれるなら、昨日と同じところで待っていて。内容が内容だもの、断られても気を悪くはしないわ」

——伏兵からの、こちらの体勢が整うのを待たない二正面作戦。

「……………考えさせて下さい」

最初から自分が千代の作戦通りの反応を返していた事を理解しつつ、和明はその鍵を受け取った。

——数時間後。

「やつぱり今からでも無かった事にした方がいい、かなあ……………」
夕闇迫るコテージのテラスで、落ち着かずうろろと動く和明の姿がそこにあった。

演習に向かう千代らと別れた後、考えた末にコテージへと足を向けたのは間違いないと和明は思っていた。しかし、どうしても様々

な問題が頭に浮かび、その決断が揺らぐ。

愛里寿とセックスしたくないのかと問われれば、まあ——したくないと言えば嘘になる。母親譲りの美少女で、しかも自分が自分を抱いてくれと頼んできているのだ。男冥利に尽きる据え膳である。

しかし13才の彼女を抱くということは、しほや千代の浮気相手をするのとは話が違う。未成年淫行、他者に知られば完全アウトである。

それに加え、今回は自分が愛里寿をリードしなければならぬ。多少の経験を積んだとはいえ、今までは経験豊富な人妻相手に翻弄されてきた自分にそれが出来るだろうか。

「……でもなア」

ため息が漏れる。

千代の態度からおそらく、ここで和明がこの話を断ったとしても彼女は別の男性を手配するだろう。それは確かに愛里寿を思っている事だろうが、だとすれば結局のところ早い遅いかだけの違いではない。

「いや、だからって……」

そこで再び和明は迷う。この堂々めぐりをコテージに来てから延々と繰り返して、もう何十回目になるか分からない。

「……いや、腹を決めろ俺」

大きく息を吐き、和明は呟く。そう決めて、この場所に来たのだから。

「どうやら、心の準備は出来たみたいね」

「うわっ!？」

突然に後ろから声をかけられ、思わず和明は声を上げた。

振り返ってみると、演習からそのまま来たのだろうか。パンツァージャケツト姿の千代と愛里寿が並んで立っている。

「い、何時から居たんですか?」

「そうね……『いやいや』って10回くらい聞いたかしら?」

「はい、声をかけづらかったので……」

「……そうですか」

どうやら彼女らに気づかないほど考えに没頭していたらしい。

千代は和明が落ち着いたのを確認すると、その横を過ぎて屋内へ向かった。

「それじゃ、中に入って。私は先にシャワーを浴びるから」

「え？ あ、はい」

「……………？ お母様、一緒ではなくて良いのですか？」

「……………ちよつとね。和明君と話をして、待っていて」

小首を傾げる愛里寿に千代は微笑みつつ言うと、ドアを開けて中に入った。和明も彼女らに続く。

入ってすぐに大部屋があり、家族で眠れる程の大きさのダブルベッドがまず目につく。ベッドの近くには幾つかの椅子が置かれた丸テーブル。海に向けて作られた大窓からは夕闇に沈む水平線が見える。あとは簡単な料理のためのキッチン、風呂、トイレといったところか。

「それじゃ和明くん、ゆつくりしてね」

そう言い残し、千代は重そうなパンツァージャケットを脱ぐと浴室へと向かった。あとには和明と愛里寿が残される。

愛里寿は自身のジャケットを脱ぐと、シャツとミニスカート姿になりちよこんと椅子に座った。見上げるように和明を促す。

「どうぞ、篠原さん……………和明さんの方がいいですか？」

「へ？ あ、ああ……………和明でいいよ」

「分かりました」

そう言われ和明も座る。

「……………」

「……………」

沈黙が部屋を支配した。

「……………」

「……………」

浴室からは千代の浴びるシャワー音が聞こえてくる。

「(ううん…………)」

和明は向かい側に座る愛里寿を見た。顔を俯かせ、こちらを見よう

としない。

まあ、その反応自体は昨日と変わらないのだが——問題は、そんな彼女とこれからセックスするということ事実だ。

「……あの、愛里寿ちゃん」

「っー」

ビクツと愛里寿は反応し、少し頬を染めておずおずと和明を見た。

「……は、はい」

「その……演習、お疲れ様」

「あ、ありがとうございます……ごじます」

「……………」

「……………」

やはり会話が続かない。喫茶店では度胸ある姿勢も見せたが、やはり実際にコトが近づいている中で彼女も緊張しているのだろうか。

「(さて、どうしたもんだか…………)」

13歳の少女にして大学戦車道で隊長を務める天才にして、島田流次期後継者。

こういった場合は共通の話題から話を広げるべきなのだろうが、和明の話題の引き出しの中で彼女と共有できそうなものが見当たらない。

そんな風に和明が場の空気を持って余している間に浴室のシャワーの音は止み、やがて火照る身体をガウンに包んだ千代が戻ってきた。髪を拭きつつ、千代は和明に言った。

「ふう……お待ちせ」

「いえ、そんな事は。それじゃ愛里寿ちゃん、先に…………」

「いいえ。二人とも一緒に浴びてきて」

「え!？」

和明は思わず愛里寿を見た。愛里寿にとっても突然の提案だったのか、少しの驚きを顔に浮かべて千代を見ている。

「お母様?」

「これから大事なことをするんだもの、お互いの身体をちゃんと確認しておかないと」

「いや、そうかもですけど……」

流石に急すぎるのでは、和明がそう言おうとした時、愛里寿が椅子から降りた。

「そう、ですね。和明さん、一緒に入りましょう」

「……分かりました」

思い切りが良いのは戦車道を修めている女性の共通項目なのだろうか。

愛里寿が良いと言うのであれば、和明がそれを拒否できる理由はない。ここで和明が反対すれば、愛里寿よりも覚悟ができてないという事になる。

「行つてらっしゃい」

こちらを見送る千代の微笑みが、やけに意味深に見える。

ドアを開け、脱衣所に入る。愛里寿はてきぱきと自分の服を脱いでゆくが、やはり恥ずかしさはあるのか和明の方を見ようとはしない。

和明も彼女に遅れないよう服を脱ぐ。とはいえ上はTシャツで下もジーンズなのであつという間だ。

「よっ……」

ジーンズを下ろし、畳んで棚に入れる。ふと横を見ると、こちらも既に下着姿になっている愛里寿と目が合った。

「あ……」

「……」

こくん、と愛里寿の喉が鳴る。何故か包帯を巻いたクマがプリントされたフリル付きのブラに背を回し、ホックを外すと小ぶりの乳房が露わになった。

慌てて和明は視線を逸らし、彼女に背を向けるとトランクスを脱いだ。愛里寿がショーツを脱ぐところを直視するのは、流石に憚られた。

「えーと……それじゃ、入ろうか」

「……はい」

衣擦れの音で愛里寿がショーツを脱いだのを確認し、和明が声をかける。

浴室を開けてみると、まだ千代がシャワーを浴びた名残の湯気と温もりが残っていた。家族で入るのも想定していたであろう浴室は広く、シャワー周辺にも十分なスペースが用意されている。

「んっ……」

温度を適温にして、蛇口を回す。程よい熱さの湯が降りかかってきた。

「愛里寿ちゃんのが汗をかいてるだろ？ 先に浴びて」

「はい」

短く答え、一步引いた和明に代わりシャワーノズルの下に愛里寿が歩み出る。

自分の臍ほどの高さしかない彼女の身長と細い肩に、和明は改めて彼女が幼さを残した「少女」である事を理解した。

——そんな彼女を、おそらくはその母親の前で汚すのだ。

「(うっ……)」

否応なく湧きあがる背徳感に、股間に血が集まるのを感じる。

何とか意識を反らそうとした時、愛里寿が言った。

「和明さん」

「え？」

「その……ありがとうございます。お母様の無理な話も引き受けてもらって……その上、私のような子供の相手をしてくれて」

「いや、そんな事は……それより、その、愛里寿ちゃんは大丈夫なのか？ 俺とは昨日会ったばかりで……」

「お昼に言った通りです。お母様は和明さんの事を『信頼できる人』と言ってくれましたし、私もそう思いました」

愛里寿の言葉には迷いが無い。つくづく真つすぐな少女だ。

濡れる頭に手を置き、和明は柔らかく愛里寿の頭を撫でた。

「お母さんの事、信用してるんだ」

「はい、いつも私の事を大事に思ってくれています。まだ一緒にお風呂に入ろうとする事だけは、困ってますけど」

「……ははっ、そんなもんだよ」

目に湯が入らない程度に愛里寿が顔を上げ、和明の方を向いて言っ

た。

他愛ない彼女の困りごとに和明は顔をほころばせた。こういう所は、年相応の少女と変わらないのだろう。

「……あ」

ふと愛里寿の声が自分の股間に向けられ、和明は視線を下げた。

「あ……」

和明の肉棒が半勃起状態で、ちょうど愛里寿の顔の位置に屹立していた。先ほどの意識反らしが中途半端だった結果だ。

半勃ちとはいえ男性の平均基準から大幅に上回るそれを、愛里寿は驚くでもなく興味深そうに見ていた。

「……凄い、ですね」

「あ、愛里寿ちゃん、これは……」

「お父様のとは、全然違います……和明さん、この大きなものは、普段からこういうのですか？」

「ええっと、それは……と、とりあえず、もう少し顔を……うっ！」

愛里寿にじつと見られている状況。それだけで肉棒は更に充血しようとしている。

「あ、愛里寿ちゃん、その、コレを見るのは……？」

「お父様とお風呂に入っていた頃には、少し……でも、その時はこんな風に反り返っていませんでしたし、熱くもなっていませんでした」

亜麻色の髪を濡らし、愛里寿は更に肉棒に顔を近づける。嫌悪感を覚える様子はない。むしろ強い興味を抱いたようだ。

和明を見上げて愛里寿が言った。

「あの……触ってみても、いいですか？」

「へ？ あ、まあ……くうっ!」

細い指が肉棒の竿に触れ、思わず和明は声を漏らした。それに合わせて肉棒がびくりと反応を示す。

「い、痛かったですか？」

「いや、その、痛くはないんだ。逆に、気持ちよくて……っ！」

「どんどん大きくなってきています。男性の方は、興奮するとこういうるんですね……」

両手の指が肉棒に絡みつき、まるでマイクを握るように愛里寿の指に包まれる。

愛里寿は握ったまま、肉棒の反応を確かめるように指を動かす。次第に先走りが滲み、愛里寿の手に零れ、シャワーに流されてゆく。

「何か滲んできました。これは……っ」

「それは……その、愛里寿ちゃんも、興奮すると……ええと、股とかから、何か滲んだりするだろ？ それと同じというか……」

「……私は、上手くできていますね。嬉しいです」

どうやら、自分が和明を気持ちよくさせられている事に満足しているらしい。

「和明さん。この場合、普通はどうすれば良いですか？」

「へ!? ふ、普通は……手を、擦るように動かしたり、舐めたり……ふあっ！」

「ンツ、はあっ、ペろっ……こ、こうでしょうか？」

言い終える前に亀頭に小さな舌が触れ、和明は腰を震わせた。

同時に愛里寿は柔らかく握っていた両手をそのまま前後に動かし始めた。シャワーで滑らかになった竿を、小さな手がリズムカルに前後する。

既にエナジードリンク缶ほどの大きさにまで勃起した和明の肉棒の反応が、愛里寿にはどうやら面白いらしい。まるで手乗りの愛玩動物が自身の手の中にあるように丁寧に撫で、同時に舐めてくる。

それは千代やしほの熟練した手淫に比べれば拙くたどたどしいものであったが、自分の腰ほどの背丈の美少女が献身的に肉棒に奉仕する様は、その拙さ故に更に興奮を煽るものであった。

「……はむっ」

「うああっ！」

口での責めが効果的だと分かったのだろうか。愛里寿は口を一杯にまで広げると和明の亀頭を口に含んだ。

「おくち」とでも言うべきサイズの愛里寿の口腔内はそれだけで一杯のようだが、亀頭が敏感なものであると理解したのだろう。頑張って歯を立てないようにペろペろと舌を絡めてくる。

「(ま、マズい!)」

腰の辺りからびくびくとした刺激が昇ってきた。射精感がこみ上げてきているのだ。

「あ、愛里寿ちゃん! それ以上は……」

「? ふはっ……どうされたのですか?」

「いや、その、それ以上されると、出ると言うか……」

「『出る?』」

小首を傾げる愛里寿に、和明は荒い息を整えつつ言った。

「ああ。男の人つてのは、気持ちよさが一定までいくと、ココの先端から汗が出るんだ」

「……それは、毒なのですか?」

「ど、毒って訳ではないけど……っ!?! ちょ、愛里寿ちゃん?」

「毒でないのであれば……後学のため、見せてください。あむっ……」

「ううっ!?!」

逆に彼女の興味を引いてしまったようだ。手の動きが速くなり、再び舌で亀頭を舐めてくる。

「素直に引き下がってくれろ」と思っていた和明に、この攻撃の再開は余りに強烈だった。何とか尻に力を込めて堪えようとするが、その我慢は僅かに遅かった。

「っ! 愛里寿、ちゃん! 顔、離してっ! う、ぐうっ!」

「ンッ、あぁっ……!?!」

白濁液が愛里寿の整った顔に迸る。

その多くはシャワーで流れていったが、僅かに残った汗が彼女の唇に垂れる。

それを愛里寿は躊躇なく舐めとった。

「……苦くて、生臭いですね」

「あ、ああ……」

「これが……男性の方の味なのでしょうか?」

肌を火照らせ、半ば恍惚とした表情で愛里寿が尋ねる。

ひよっとすると、戦車道の天才少女はこっちでも天才なのだろうか。

射精後の余韻を味わいつつ、和明はそんな事を考えた。

第三話

「どうやら、多少は仲良くなれたみたいね」

浴室から戻ってきたバスタオル姿の和明と愛里寿の様子を見て、ガウンを緩く羽織った千代は言った。

「まあ、何というか」

「はい。お父様のとは全く違って、興味深かったです」
「……………」

言葉を濁す和明に対し、はきはきと愛里寿が言う。

どうも既にペースを握られている気がする。和明はそんな事を考えたが、その反応も千代の想定内だったのだろう。満足そうに頷くと彼女は椅子から立ち上がった。

「それじゃ…………和明くん、お願いできる?」

「…………はい」

とはいえ、ここからは完全にリードを任せる訳にはいかない。初体験の愛里寿をこちらが先導してゆかなくては。

和明は腰に巻いていたバスタオルを外し、ベッドへと上がった。愛里寿の顔に射精した直後ではあったが、それは既に半ば勃起した状態で和明の股間で存在感を放っている。

「愛里寿ちゃんも」

「…………お願いします」

シャワーを浴びつつ和明を射精させたとはいえ、やはり自分の身体が責められる側に回るのには緊張があるのだろうか。僅かの沈黙の後、愛里寿は胸まで巻いていたバスタオルを外した。

まだ第二性徴期を迎えきっていない、華奢な裸体が露わになる。膨らみかけの小ぶりの乳房の先端では薄桃色の乳首が震え、下を見れば陰毛がまだ生えそろうていないのが分かる。

「…………」

浴室でははつきりと確認できなかった愛里寿の裸体に和明の股間は反応し、びくりと跳ねる。

「ふふ、和明くんもやる気十分みたいね」

「……千代さん、何だか楽しんでませんか？」

満足そうに千代が微笑む。

どうも彼女にいいように扱われている気がする。些かの引っかけりを覚えつつも、和明はベッドに上がってきた愛里寿の手を取り、引き寄せた。

ベッドの上で胡坐をかき、そこに彼女を乗せるように迎える。

「……あまり、見ないでください」

照れつつ、和明の胸板に手を添えて愛里寿は言った。

「大丈夫、凄く綺麗だ」

触れる肌が熱い。それはシャワーによるものだけではないだろう。今日の演習で、彼女は内に抑えがたい欲求不満を感じている筈だ。

初体験の相手をするのは、自分にとってはトラウマとなっている元彼女の時だけが——触れるだけで壊れそうな彼女を、優しく、丁寧に扱い、そして気持ちよくなってもらいたい。その気持ちに嘘は無かった。

腿にかかる彼女の身体は軽い。和明は愛里寿の背に手を回し、整った背筋を優しく撫でた。

「ンツ……ー」

ぴくりと愛里寿は反応を示す。

「愛里寿ちゃん……顔、上げて」

「……はい」

まだ化粧も覚えていない、幼さを残す顔。和明はその淡い唇に自身の唇を軽く押し当てる。彼女が抵抗を見せないことを確かめて、もう一度。

愛里寿は和明の首後ろに手を回し、抱き着くように体を支える。

「んっ……」

「ふうっ……ン、ンンツ……」

「……キスは、初めて？」

「お父様や、お母様と、挨拶程度のキスはありました。こんなキスは……初めてです」

囁くように愛里寿が答える。返事代わりに和明はもう一度キスを

する。今度は少し長く、互いの吐息を交換するように。

背中を撫でる指で、彼女の反応を伺う。緊張は緩んできている。それは自分を信じて身体を任せてくれている証拠だ。

和明は今度はゆっくりと舌を伸ばし、愛里寿の歯茎に触れてみた。「!?」

初めてのディープキスに愛里寿は驚いたようにびくりと身体を震わせたが、やがて再び脱力し、柔らかく口を広げると和明の舌を迎え入れた。

「ふっ、ハアッ……愛里寿ちゃんも……」

「ふあっ、ふあい……ンツ、んはっ……」

「おずおず」という感じで出してきた愛里寿の柔らかな舌に和明は自身の舌を絡め、丁寧に彼女の舌を愛撫する。更に愛里寿の呼吸が荒くなり、吐息が熱を増してゆく。

同時に和明自身も昂りつつあった。無垢な少女の体を自分が目覚めさせているという、新雪に足跡を残す時のような快感。それは愛里寿と和明の身体の間でビクビクと脈動する肉棒を更に充血させ、血管を浮き上がらせてゆく。

愛里寿の汗ばむ臍下を亀頭が擦る。愛里寿は和明の首に回していた両手を片手にすると、肉棒に触れた。

「ああ……さ、さつきより、もっと大きくなっています……!」

「ああ。俺も、愛里寿ちゃんに興奮してるんだ」

愛里寿の小さな手が竿に触れ、ぎこちなくもそれを扱く。

それに応えるように和明は愛里寿にキスを重ね、片手を彼女の背に回したまま、もう一方の手を愛里寿の股間へと伸ばす。

「ンツ!? ンンーツ!」

無毛に近い鼠径部に手を伸ばし、クリトリスに触れると愛里寿は唇を離さないまま悶えた。自身が感じている未知の衝動に困惑しているのが伝わってくる。

「はあっ……か、和明さん、これって……?」

「それが『感じる』って事だ。悪いことじゃない」

「あんっ……わ、分かり、ました……っ!」

潤んだ瞳で問いかけてくる愛里寿に優しく答え、和明は再び彼女の股間に触れると今度は陰唇を撫でる。まだぴったりと閉じた襞に指を添え、くにくにと弄る。愛里寿は律儀に答えつつも背を反らし嬌声を上げた。

実際のところ、13歳の少女相手にセックスしている時点で良いも悪いもないのだが——まあ、それを言っても仕方ない。

愛里寿への刺激が快感から痛みに変わらないように加減をしつつ、和明は彼女の首筋にキスをする。跡が残らない程度に軽く、続けて小ぶりの乳房の先端で揺れる薄桃色の乳首へ。

「あ、んああっ！　そ、そこっ、ダメ、ですっ……！」

「……可愛いよ、愛里寿ちゃん」

「そんな、事、言わないで、下さ……ひうつ！」

乳首を唇に含むと、愛里寿の声がひと際高くなる。いやいやをするように首を振る彼女に和明は嘸くと、再び乳首を舌先で弄る。固く尖った乳頭が、愛里寿の感じている快感の度合いを伝えてくる。

一方で愛里寿の股間を弄っていた指に汗とは異なる粘りある汁が絡み始める。未成熟な身体は和明の愛撫によって快感を知り、愛液を滲ませ始めていた。

「(もうちよつと……)」

「んっ、はっ、はあっ……！」

再び顔を上げて唇を重ねる。舌を差し入れると、先ほどよりも大胆に愛里寿は舌を絡ませてくる。

流石は13歳で飛び級で大学入りした天才少女と言ったところか。早くも彼女は和明のキスにどう返せば良いのか理解したようだ。

キスを重ねてゆくにつれ、愛里寿の腰がもどかしそうに揺れる。自分の快感をどう扱って良いのか、持て余しているのだ。

「ああ……か、和明、さん……何だか、腰の辺りが、凄く、切ないですっ……ふわふわ、してっ……！」

「あ、ああ、それは……」

「そういう時はね、愛里寿。『おまんこが切ない』って言ってあげれば、和明くんは悦ぶわよ?」

「え!？」

愛里寿の背後から聞きなれた声。驚いて和明が視線を移すと、いつの間にもベッドに上がってきたのかガウンを脱いだ千代が愛里寿の後ろに回り込んでいた。

「ち、千代さん!？」

「え……お母、様?」

「ごめんなさいね、和明くん。二人が楽しんでいるのを横で見ているだけなのが、寂しくなってきたきちゃって」

「あつ! お、お母様つ……!」

亜麻色の髪をかき上げつつ千代は言う、愛里寿の後ろから手を回し、彼女の膨らみかけの乳房を優しく揉み上げた。母親である千代の急な責めに愛里寿は戸惑い一つも喘ぎを漏らす。

和明としてもいわゆる「親子丼」の展開になるとは思っていないかったが、ここで行為を中断して水を差せば愛里寿も不完全燃焼となってしまう。

このまま進めると決め、胸への責めを千代に任せると和明は愛里寿の股間を弄りつつ更にキスを重ねた。

「愛里寿、ちゃん……もつと、舌、出して……」

「ふあ、はあつ……ちゅ、んんつ……!」

愛里寿の身体が震え、身体を支えられなくなってきたのか和明の胸板に体重を預けてくる。

千代はそんな愛里寿の首筋に舌を這わせ、更に娘の快感を引き出すとする。

「れろつ……愛里寿、気にしなくていいわ。自分を抑えず、素直に……」

「おかあ、さまっ! あ、あ、は、ああつ!」

堪らず愛里寿は口を離し悶えた。初めてで二人同時に責められるのは、彼女にとっては余りに強烈だったようだ。

「やつ!?! あつ! ふあ、あああつ!」

間もなく愛里寿は身体を大きく震わせると和明の身体を強く掴み、やがて脱力した。陰部を弄っていた和明の指に愛液の飛沫がかかる。

「…………どうやら、達したみたいね」

「ハアツ、ハアツ……そうなの、ですか？　体が、弾けたみたい、です……」

千代はそう言うと手を胸から細い肩に移し、愛里寿を優しく撫でた。大きく息を吐きつつ愛里寿が言う。

眼前で絶頂に達した愛里寿の艶姿に肉棒を滾らせつつも、和明は汗ばむ彼女の身体の重みを感じながら尋ねた。

「どう、愛里寿ちゃん？　溜まっていたモノは無くなった？」

「和明、さん……？」

まだ靄がかかったような瞳で愛里寿は和明を見た。目を閉じ、自分の身体の状態を確かめるように少し体を揺らし——再び和明を見る。

「うっ……………」

和明は少し呻いた。愛里寿が肉棒に下腹を擦りつけたのだ。

「あ、愛里寿、ちゃん？」

「すみません、和明さん……まだ、切ないのが、治まりません。それに……」

くいくいと腰を前後に揺らす愛里寿。その動きに合わせて時折亀頭が彼女の臍辺りに触れる。

「そ、それに？」

「んっ……和明さん、先ほどのように精液を出されていません。ああ……す、すみません、私だけ先に……」

「いや、それは……」

和明としては元々そのつもりであった。浴室で射精した事の方がイレギュラーだった位だ。

同世代の少女と比べても小柄な方に入る愛里寿に和明の長さ20cm以上、太さがコーラ缶並みの肉棒が挿入できるとは到底思わなかったし、実際に彼女の秘所を弄っていても、指一本を挿れる事も困難だった。無理に挿入しようとすれば本当に裂けかねない。

何より——愛里寿の処女を奪うのは、和明としても本意ではなかった。昨日会ったばかりの恋人でもない自分が破瓜させるのは、余りに無法に思えた。

「私も……和明さんに、気持ちよくなって欲しいです。だから……」
「ぐっ、愛里寿ちゃん……!」

愛里寿はそう言うと、和明の肩に回していた手の力を再び籠め、体を上下に揺らし始めた。ほぼ垂直にそそり立つ肉棒に自身の下腹部を密着させ、汗と先走りに、そして自身の愛液に塗れた秘所を健気に擦り付ける。

「あっ、ああんっ!」

「あらあら……愛里寿ったら、こっちの方でも前途有望ね」

再び喘ぎ始めた愛里寿の様子に、千代はどこか満足そうに言うと彼女の後ろから離れ、今度は和明の後ろに回り込んできた。千代の張りのある豊満な乳房が背中に押し当てられるのが分かる。

「ち、千代さん?」

「娘が健気に頑張っているんですもの。母親として、応援してあげないかね」

「いや、ちよ、待つ……ううっ!」

「愛里寿はそのまま動いて、和明くんの先の方を……」

「は、はい、お母様……ふうっ……!」

和明の太い竿に千代の指が絡みつく。後ろから抱き着くような姿勢で千代は体を密着させ、そのまま肉棒を扱き始めた。

一方、千代の指示に従い和明を前から擦る愛里寿は、早くもコツを掴んだようであった。腰を浮かせたまま腰をくねらせ、くちくちと未熟な陰唇を龟头に押し当ててくる。挿入は出来ずにその筋を滑るばかりだが、自身のために腰を振る愛里寿の姿は十分に煽情的で和明の興奮を否応なく煽り立ててゆく。

千代は扱く手を止めないまま、和明の耳元で囁いた。

「どう、和明くん? 愛里寿のこと気に入ってくれた?」

「はあっ……は、はいっ……愛里寿ちゃん、凄く、吸収が、早くて……!」

「嬉しいわ。もっと、してあげる……愛里寿も一緒に……」

「は、はい……和明、さん。もっと、気持ちよくなって、ください……!」

美しい母娘に挟まれ、肉棒を同時に奉仕される。

堪らない快感を堪能しつつ和明も愛里寿の身体を支え、彼女の身体に唇を幾度も押し当てた。

「ん、あぁっ！ 和明さんっ！ 和明、さんっ！」

「そろそろイキそうね。和明くん、遠慮しないで、出して……」

「ううっ！ くっ、うぁっ！」

獣めいた声と共に和明は達した。膨れ上がった赤黒い亀頭から精液が噴出し、愛里寿の白い肌を汚してゆく。

「あぁっ！ 熱い、ですっ……！」

「う、ふうっ……ハアツ、ハアツ……！」

精液を受け、愛里寿の身体がびくりと跳ねた。彼女も軽い絶頂に達したようだ。荒い吐息と共に腰が震え、更に幾度も精液が漏れる。

射精が治まったのを確認し、千代はようやく和明から体を離れた。

「……お疲れ様、和明くん」

「千代、さん……」

結局、彼女のペースで事を進められてしまった。どうにも此処に来てからやられっ放しだ。

「……」

ふと、和明の中である思いつきが生まれた。自分に身体を預けてくる愛里寿の耳元に口を寄せる。

「なあ、愛里寿ちゃん……」

「……!?!」

千代に聞こえない程の囁き声。

愛里寿は少し驚いたような反応を見せたが、やがてこくと頷いた。和明の上から降り、ベッドに腰を落とす。

それを合図に和明は、少し落ち着いた風だった千代の手を取った。

「……千代さん」

「えっ」

どうやら上手く不意をつけたようだ。スツと手を引き、彼女の身体を引き寄せる。

しかし千代は涼しい口調で言った。

「んっ……あら、『まだ足りない』ってところかしら？」

「……千代さん。ちよつと今回の千代さん、自分のペースで進め過ぎです」

和明は千代の背後に回り、彼女の腰を掴んだ。そのまま千代の背に体重をかけ、ベッドの上で四つん這いにさせる。

「和明くん？」

どうやらこちらの意図を察したのだろう。千代の声のトーンが変わる。

「だから……『おしおき』をします」

「え……ん、んんっ!？」

和明は千代の尻に手を添え、その張りある尻肉の感触を堪能した後、秘唇に触れた。既にそこは濡れそぼり、和明の指には熱い愛液が滴ってくる。

「もう、こんなに濡れて……愛里寿ちゃんと俺とのセックスを見ただけで、こんなに感じてたんですか？」

「え、ええ……凄く、興奮して……あ、愛里寿？ ああつ!？」

「お母様……はむっ」

和明が責め始めたのに合わせ、愛里寿がその小柄な身体を千代の下に潜りこませた。うつ伏せになった事で更に存在感を示す千代の巨乳に顔を寄せ、揺れる乳首を咥える。

「だ、駄目よ、愛里寿……ああんっ!？」

「ちゅ、ちゅぷっ……お母様だって、私にされたじゃないですか……あむっ」

「そっ、それは……くひいっ!？」

潤んだ瞳で愛里寿を見下ろしていた千代は、突然悲鳴めいた嬌声を上げた。十分に濡れている事を確認した和明が一気に挿入したのだ。

「ふあ、ああっ! 和明、くんっ!？」

「くうっ、締まる……っ! いきますよ、千代さんっ!？」

「待って、ひいっ! 今、そんな、されたらっ!？」

「愛里寿ちゃん、よく見てあげて。お母さんの、感じているところ!？」

「……はい、和明さん。見えます、和明さんの大きいのが、お母様の中

に全部、入って……!」

そのまま和明は荒々しく腰を振り始めた。淫らな水音と共に結合部からは愛液と先走りが混ざった淫液の飛沫が跳ねる。

「ひうっ!」

大きく腰を引いてからの一撃に千代の身体が跳ねる。愛里寿は激しく揺れる千代の乳房を追い、朱鷺色の乳首を口に含み、吸い、舐める。

「れろっ……お母様、素敵、です……ふうっ……」

「ああんっ! か、和明くんっ! 待つて、待つ……」

「待ちません!」

「ンツ! あ、はあっ!」

頬を紅潮させ、快楽に溺れる千代の顔を愛里寿は乳首を責めつつも恍惚とした瞳で見上げる。

その視線を受け、千代は戸惑いながらも自身も腰を振り、和明の肉棒が与えてくる快感を貪欲に求めてくる。

「ああ……見ないで、愛里寿……お母さんの、みつともない、顔……!」

「お母様……みつともなく、ありません。私の知ってるお母様の顔の中で、一番、綺麗です……ちゅうっ!」

「あ、ひいっ! あ、愛里寿……ンツ! ん、くうっ!?!」

乳首を強く吸われ、千代が悶える。それに合わせて和明が肉棒を突き入ると、膣内の無数の襞は肉棒から精液を搾り取ろうと柔らかくもしつかりと締め付けてくる。

和明は腰に力を込めて射精感を堪えると、角度を微妙に変えつつ抽送行為を繰り返してゆく。二度の射精を行った後で多少の余裕ができたのが幸いであった。

「あ、あ、あああっ!」

全身を震わせ、千代が絶頂に達した。自分の娘の方から責められるというのは、彼女にとって予想外だったようだ。それがより快感を煽ったのだろう。

彼女が達したのは締め付けからも和明は察したが、それで腰の動きを止めず、愛里寿も千代の胸を責めるのを止めなかった。

「ふあ……！ か、和明くん、愛里寿……少し、待って……今、お母さん、イツた、からあ……！」

「言いましたよね、これは『おしおき』だって……愛里寿ちゃんも、もつと、見たいよね？」

「はい……お母様。見せてください。私の生まれたところ、和明さんので、ずぼずぼ、されているの……」

「っ！ い、言わないで、あり、す……んああっ！」

どうやら、千代の自慢の娘は早くも言葉責めを覚えたようだ。

「今晚は、本当に千代さんが気絶するまで、しますからっ！」

「あ、ひいっ！」

再び始まった荒々しいピストンに、千代は汗に濡れる亜麻色の髪を揺らし、激しく悶えた。

そこからは何度彼女を絶頂に誘い、自身も何発射精したかは覚えていない。

結局夜明けまで和明と千代、そして愛里寿はまるでひとつの生き物であるかのように絡み合い、悶え、快楽を貪った。

最後の方は千代も意識が半分飛んでいたのか、既に言葉ではなく「あー」という獣のような声だけで和明の肉棒の蹂躪を受け入れていた。

愛里寿は途中までは千代を共に責めていたが、やはり肉体的には子供なのだろう。シャワーを浴びる事もなく、汗塗れのシーツの上で気が付けば寝息を立てていた。

和明自身も気力の限界まで千代をはめ倒し、半ば気絶するように眠りに落ちた。

—— 本当にお疲れ様。

そんな声を聴いたような気がした。

「篠原くん、また焼けたねエー！」

休み明けの戦車道ショップ初出勤の日、数日ぶりに会った店長は驚いたように言った。

「そ、そうですか？ ちょっと南の方に遊びに行つてたんで」

和明的には自覚は無かったが、確かに肌の色が一段階くらい濃くなつた気がする。

「南に？ ひよつとして、また例の件かい？」

「……いいえ、今回は本当に仲間内での遊びで。これ、お土産のマカダミアナッツです」

家元の事情を知っている店長は、和明にだけ分かる表現で尋ねた。それに対し首を横に振り、誤魔化すようにお土産の紙袋を差し出す。別れの時に千代から貰つたものだ。

流石に、今回の件は店長にも言えない。

「おお、ありがとうございます！ やっぱり南の島と言えよこれ……あれ？ 篠原君、このカードは？」

「え？」

店長に言われ、初めて和明は袋の中、お土産の下に入っていた二つ折りのカードに気が付いた。表面には何も書いていない。おそらくは元々は上に乗っていたのが下に回り込み、隠れてしまつていたのだろう。

和明はそのカードを取り、広げ――

「!？」

――慌てて閉じた。

「どうしたんだい？ 何か大事な事でも書いてあつた？」

「い、いえ！ 友達が『また会おうな』って書いていただけです！」

そう、この件だけは誰にも秘密なのだ。

『――次はちゃんと挿いるように頑張ります。 島田 愛里寿』

俺と家元（かのじよ）と夏の嵐 第一話

「……そう、やはり満室なのね」

『申し訳ありません、奥方様』

「仕方ないわ。ここまで強くなるとは思っていなかったもの……今日明日の予定のキャンセルを先方にお伝えして。復旧次第、熊本に戻ります」

『それまでは、どうされるのですか？』

「幸い知人がいます。その人に当たってみて、駄目なら……連盟会館のソファでも借りるわ」

『続いて、横浜市全域に大雨・洪水・波浪警報、川崎市に大雨・洪水警報が発令されています。東海道新幹線は終日運転見合わせ……』

チャンネルを変える。

『……とまあこのように発達した前線が北上して、ちょうど日本列島を横断するように強い雲がかかっている訳ですね』

チャンネルを変える。

『はい！ こちらレポーターの大石です！ 現在の波の高さは……！』

チャンネルを変える。

『面白え、ボツコボコにしてやるぜ！ 覚悟しろよーっ！』

「……はあ」

軽いため息をつき、和明はテレビを消した。屋根を打つ雨音がやけに耳に響く。カタカタと風が窓を揺らし、時折遠雷が聞こえる。

エアコンで取り切れない湿気が肌に纏わり付く。和明はごろりと布団の上で寝返りを打った。昼過ぎだというのに、窓の外は夜のように暗い。サツと降ってサツと止むのが夏の雨の定番だが、この雨はそうもいかないらしい。

「ううん……」

もう一度寝返り、天井を見る。

戦車道シヨップのバイトもこの雨で臨時休業となり、今日はお休みだ。まあ、車を持たない和明では出勤するだけでズブ濡れは確実だったので、正直助かってはいた。

「止まないな、こりゃ」

和明は独り暮らした。大学のために横浜に出てきて、仕送りとバイトでのアパート住まい。風呂・トイレ・キッチン付きのワンルームを我が城とする、至って標準的な学生である。

そしてそんな城の中で、和明は暇をもてあましていた。出かけるにも外を見れば滝のような豪雨。これでは買い物にも遊びにも行けはしない。

そんな事を思っているうちに、ぐうと腹が鳴った。そういえば、ゴロゴロしているだけで昼飯も食っていない。

「飯、まだ残ってたかな……?」

和明は起き上がり、キッチンへと足を向けた。炊飯器にまだご飯あり。買い置きのカップ麺まだあり。卵と納豆なし。冷蔵庫にお新香とヨーグルト、バター、実家から送ってきたハムと味噌あり。インスタントコーヒーあり。

ラーメンライスで済ませようか、そう和明が思った時、ふとインターホンが鳴った。

「ん?」

わざわざこの大雨の中を和明に会いに来る知り合いに心当たりは無かったし、特に誰から連絡も無かった。

訪問販売だろうか? 雨の日は在宅者が多いため、セールスマンなどは雨の日にむしろ積極的に動くと聞くが――

そんな事を考えている内にもう一度インターホンが鳴った。何となく息をひそめつつ、和明はインターホンカメラの画像を見た。

ずぶ濡れの西住しほが立っている。

「……………」

一瞬、思考が停止する。

長い黒髪をびっしりと濡らしたしほは、反応が無いのを留守と

思ったのかため息をつき、ドアから離れようとした。

「っ!？」

そこでようやく和明は自分の見ているものが現実であると気づき、慌てて受信ボタンを押した。

「は、はい！ 篠原です！」

『……良かった、留守ではなかったのね』

上ずり気味の和明の声に、しほは足を止めるといつも通りの落ち着いた口調で言った。全身ずぶ濡れなのをまるで気にしていないかのようだ。

「いや、ええっと、どうしたんですか!？」

『詳しい話は後でするわ……上がらせて貰ってもいいかしら?』

「え!?! あ、はい！」

訳が分からない状況であったが、確かに優先すべきは濡れ鼠の彼女を何とかする事だ。和明は押入れの衣装ケースからバスタオルを取り出すと、急いで玄関に向かった。鍵を外し、ドアを開ける。

「フウ……お邪魔するわね」

「西住さん!?! と、とりあえずこれを……」

安心したようにしほは息を吐き、静かに入ってきた。カメラでは詳しくは確認できなかったが、直接見てみればジャケットからストラップに至るまでじつとりと濡れている。

和明が驚きつつバスタオルを差し出すとしほは素直にそれを受け取り、まず靴を脱いで揃え、それから髪を拭いた。こんな時でも彼女は折り目正しい。

「ありがとう。それで、ここに来させて貰った理由のだけど……」

「いや、それより先にシャワーでも浴びてください！ そのままじゃ風邪ひきますよー!」

「……お言葉に甘えるわ」

平然と振舞っているが、やはり体は冷えるのだろう。和明の言葉にしほは頷き、部屋の間取りを確認するとそのまま浴室に入っていた。半透明のガラス戸越しに彼女の姿が見える。

「服は、ここのカゴに入れていいかしら?」

「え、ええ。洗っておきますから……」

水を吸った服がカゴに入れられたのか、重そうな音が聞こえる。和明が視線を向けると、服のために大半が黒かったしほのシルエツトが肌色に変わっている。

何度も直接見た彼女の身体ではあったが、自室というシチュエーションによるものか和明は少し照れを覚えて顔を逸らした。

「篠原くん、悪いのだけど……何か着るものはあるかしら？」

「え!? あ、はい。ちよつと待ってください」

少し戸が開き彼女の顔が覗く。和明は咄嗟に手近な自身の服を渡した。男性用だが、しほの長身なら合うはずだ。

外の雨音は止むことはない。浴室からのシャワーの水音が雨に混じる。

「……………」

ようやく一息つき、和明は改めて今の状況を振り返った。

嵐が来ている最中に、何故か突然ずぶ濡れのしほが（住所までは知らないはずの）和明の家に来て、シャワーを浴びている。

「……………」

駄目だ。さっぱり分からない。

確かしほの家は熊本のはずだが、それがわざわざ自分の家に遊びに来た？

「いやいや」

思わず自分にツツコミを入れる。流石にそれはあり得ないだろう。やはり後でしほに聞くしかないか。

そんな事を思っている内にシャワーの音が止んだ。湯上りの彼女が冷えないよう、少しエアコンを弱める。

さほどの間を置かず、着替えたしほが出てきた。

「すまないわね。これ、クリーニングして送り返すから……」

「いや、そんな……っ!？」

律儀に言ってくるしほに言葉を返そうとして、和明は彼女の格好に息を呑んだ。

「思っていた以上に冷えていたみたい。助かったわ」

そう言いつつ、裸にワイシャツ一枚を着ただけのしほが部屋に置かれた卓袱台に歩いてくる。

慌てつつ和明が渡したのは、どうやらよりによって男物のワイシャツだったらしい。濡れていたストラックスもカゴに入れたからか、下半身には何も履いていない。

それだけでも十分に刺激的であったが、更に彼女は下着もつけていなかった。ワイシャツの胸の辺りはしほの重そうな乳房によってぴんと張り詰め、その艶やかな曲線のラインや、乳首の浮き上がりまでも分かる程だ。下は下でショーツを履いておらず、ワイシャツの裾から彼女の茂みが時折覗いている。

「し、しほさん？ 下着はどうしたんですか!？」

「ここに来る途中で傘を飛ばされたんだけど、下着までびつしよりだったの。悪いけど、全部カゴに入れられてもらったわ」

和明の動揺をよそにしほは卓袱台に腰を落とした。恥じらう様子もなく、むしろ堂々とした姿勢に和明は何も言えなくなる。

「えっと、それじゃコーヒー淹れますから、待っていてください」「ブラックでお願い」

早くも反応を示し始めていた股間から意識を逸らしつつ、和明はキッチンからマグカップを二つ用意し、手早くインスタントコーヒーを用意する。しほは座ったまま窓の外の雨の具合を見ており、時折和明に視線を向ける。

「どうぞ……」

「ありがとう、いただくわね」

「……！ は、はい」

座ったまま和明からマグカップを受け取る。必然的に和明からは見下ろす姿勢になり、双丘が形作る深い谷間が目に入る。動悸を抑えつつ、和明はしほの正面に座った。自分用に淹れたコーヒーをひと口含む。

和明がひと息ついたのを確かめ、しほは口を開いた。

「それで、ここに来させてもらった訳だけど……帰れなくなったのよ」「帰れなくなった、って……熊本にですか?」

「ええ。横浜で戦車道関連の大きな集まりがあつてそこに招待されたのだけど……予報ではここまで強い降りになるとは言っていないかつたから、ホテルを用意せず日帰りのつもりで来ていたの」

そう言いつつ、しほは手元のマグカップを傾けた。

「……案の定、周辺のホテルは満杯。正直、戦車道シヨップのシャツターが下りていた時は連盟会館のソファで寝るしかないと考えたわ」
「それで……でも、どうして俺の家が分かつたんですか？」

「お店にそれでも電話してみたら、店長さん、万一に備えて店内に居たの。そこでこの住所を聞いたわ。店長さんも『自分のところで』と言ってくれたけど、ご家族のいる所にいきなり転がり込むのも悪いと思つたから」

「はあ……」

この雨の中を事務室で一人で有事に備える店長の姿を想像し、和明は感心した。

「悪いけど、今日は店は閉めるから」と電話で言っていた時にはそんな雰囲気は全く見せていなかったが、やはり店のオーナーとしてこういう時は色々と大変なのだろう。

ともあれ、状況は理解できた。しほは続けて和明に言った。

「既に着替えやシャワーまでお世話になつて言う事ではないけど……篠原くん、明日には新幹線も復旧するはずだから、それまで此処で休ませてもらえないかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ。その、汚い部屋ですけど、それで良ければ」
「そんな事はないわ。ちゃんと片付けもされていて、良い部屋よ……恩に着るわ」

しほはそう答えると、深々と頭を下げた。感謝を示しているのだろうが、ワイシャツの下でゆきりと揺れる乳房に視線が吸い寄せられ、どうにも目と股間に悪い。

「ま、まあ、遠慮無くゆつくりしてください」

気を紛らわすように和明は言うのとテレビを付け直した。最後に合わせていた、何やら包帯を巻いたクマが主人公と思われるアニメが画面に映る。

「これは……」

ふと、顔を上げたしほが画面に反応を示し、和明はチャンネルを変えようとしていた手を止めた。

「西住さん、このアニメ知ってるんですか？」

「娘が好きな作品ね。確か、『ボコられクマのボコ』だったかしら？」

「……なんか、シユールなタイトルですね」

『うおおー！ ボッコボコにしてやるぜー！』

画面の方では、そのボコと思われるクマが別のクマに喧嘩を仕掛けているようであった。腕を振り回しながら突撃し——あっさりと返り討ちに遭う。

『おらおら、どーしたんだよ！』

『ちつくしよー！ まだまだ、負けねえぞー！』

何とか反撃しようとするが、再びカウンターパンチを食らう。腰の捻りが入った一撃に文字通り吹き飛ばされるボコ。

『ぐはあ！ い、いい一撃じゃねえか……』

「……」

「……娘さん、独特な趣味をされてますね」

『何度負けても立ち上がる所が格好いい』らしいわ」

なんともコメントしかねる内容に和明が感想を漏らすと、しほが画面を見つつ答える。

「でも……なんか、意外ですね。まほさんがこういうアニメが好きとか」

「まほではないわ。その下の娘」

「その下って、ええつと……西住みほさん、でしたっけ？」

黒森峰の学園艦に行った際に店長から聞いた話を思い出す。確か高校戦車道の全国大会において、戦車道を復活させた大洗女子学園を初出場・初優勝に導いた立役者。ネット界限などでは「戦神」とも呼ばれていたはずだ。

和明の言葉に、しほは少しだけ眉を動かして返す。

「……ええ」

「その、店長からも聞きました。今年の高校生大会の決勝で、姉妹で

戦ったって」

「そうね……随分と界限では話題になったわ」

画面上では再びボコがボコられている。視線をテレビに向けたまま、しほは静かに言った。

「……勘当するつもりだったのよ」

「え？」

「みほの事。西住流から飛び出して、戦車に乗るのを辞めたかと思えば……聞いたこともないような茨城の学校で戦車道の隊長を務めていた」

「それで勘当……ですか？」

「あの子自身に自覚は無くても、注目されれば世間は否応なく『西住流の家元の娘』として扱う。それで『西住流』として好き勝手される事が何を意味するか、篠原くんにも判るでしょう？」

「それは……まあ」

世間のイメージというのは一括りにされがちだ。確かに本来の西住流とかけ離れた戦い方をされて「それが西住流」と思われれば、流派にとってはマイナスでしかないだろう。

しかし、だからといって成人もしていない実の娘を勘当とは――

「……でも、あの子は勝った」

しほはそう言うと、微笑を浮かべた。それは苦笑いのようでもあり、娘の勝利を喜んでいようでもあった。

「西住流は勝つことをもって良しとする……凶らずも、みほはそれを証明したわ。娘の素質を見込み、私なりに磨き上げてきたつもりだったけど……間違っていたのかもしれない」

「そのことは……もう、彼女に？」

「あの子……去年の大会後に私が酷く叱ったのが原因でしょうね。家を出てから一度も帰省していないの」

「！」

『ち、ちつくしよー！ みんなー、オイラにパワーをくれー！』

空気を読まないボコの声が室内に響く。

「去年の高校生大会の決勝戦、知っているかしら？」

「ええと……確か黒森峰が負けたんでしたよね？ 戦車の水没だかがあつて……」

「そう。その時にフラッグ車の車長をしていたみほは、水没した戦車の乗員を咄嗟に助けようと、着衣のまま激流に飛び込んだ」

「っ!? それ、飛び込んだ方が危ないんじゃない!?」

いくら咄嗟の行動としても無茶苦茶である。驚きを浮かべる和明にしほは言葉を続けた。

「ええ。試合会場周辺には戦車の引き上げも可能な救助班も待機していたわ。むしろ溺れかねなかったのはあの子の方」

「……」

「でも、みほは自分のしたことの危険を全く分かっていなかった……正直、自分でもカッしていたと思うわ。感情で、思い切り叱りつけた。『仲間が水没しても試合を優先しなさい』とね」

どちらの気持ちも分かるが故に、和明は何も言えなかった。仮に自分の目の前で家族や友人が危険に遭ったら自分は後先考えず動くだろうし、それで逆に危険になったら自分を想ってくれている人は当然和明を叱るだろう。

ボコのアニメは本編が終わり、エンディングテーマが流れ始めていた。しほは目を伏せ、呟いた。

「……戦車道の家元としての自覚はあつても、私は母親としての自覚が足りなかったのかもしれない。そう思うの」

「……」

大人であるしほに言うべきか和明は少し考え、それでも彼女に向き直つて言った。

「その……西住さんは、どうしたいんですか？」

「私が？」

「いや、あの、今の話つて……今までがどうか、家元としてどうかばかりで『これからどうしたい』っていうのが、全く無かったから……」

「……」

和明の言葉にしほは僅かに表情を変えた。驚いたのかもしれない。

「そりゃ、俺はまだしほさんから見れば子供みたいな年ですけど……しほさんがそうやって、ちゃんと自分を反省できるって事は凄いことだと思っんです。母親としてみほさんと仲直りしたいって西住さんが思うなら、メールでも、手紙でも、会いに行っても……『おめでどう、ごめんなさい』って言ってあげるだけでも、違うんじゃないかなって」

「篠原くん……」

「……すみません、偉そうな事言って」

そこまで言うと、和明は謝った。母親ほど年の離れた相手に、随分な事を言ったと思った。

しかし——しほは怒る風でもなく、和明に視線を向けて言った。

「……優しいのね、篠原くんは」

「優しい、ですか？」

「ええ。素敵だと思うわ」

「……っ!？」

そう言うと、しほは微笑んだ。予想外の反応に和明はどきりとするのと、思わず視線を逸らした。

「カップ、流しに置いておくわね」

スツとしほはカップを手に立ち上がった。ワイシャツの白い布地越しに浮かぶ乳房はそれだけで重そうに揺れ、裾から伸びる肉付きよい両の太ももと、その間で覗く秘所について視線が引つ張られる。否応なく反応を示す股間を持て余し、和明はあえてごろりと横になった。

まずい。非常にまずい。真面目な話をしていた後だというのに、あの凄く——しほとしたい。

もともと裸ワイシャツ状態の彼女を前にしていたのだ。そういった衝動は当然、和明の中にあった。それが治まりかけていた所で再び再燃した形だ。

しかし、彼女はこの豪雨の中を傘無しで来たのだ。休ませてあげたい気持ちも当然あった。

「(うう……)」

しほが仮眠にでも入ったらトイレか風呂でオナニーでもして発散

しようか。そう思った時、しほがキッチンから戻ってきた。

「……？」

しほの気配が離れない。そのまま彼女の気配は横になっている和明に近づき――

「!？」

「和明くん……眠い？」

和明の背中に寄り添うように横になった。背中に彼女の乳房が当たっているのが分かる。

突然の彼女の行動に戸惑いつつも、和明は答えた。

「い、いえ、眠くは……ないです」

「そう……」

スツとしほの手が和明の肩越しに伸びてくる。後ろから抱き着くしほの体温を感じる。

「ねえ、和明くん……いいかしら？」

「何を……ですか？」

「……したいの」

しほに聞こえそうな程の音で、ごくりと喉が鳴る。

「いや、でも、しほさん。この雨の中歩いてきて、疲れてるんじゃない？」

「そうね、多少は疲れてる……だけど、さつき和明くんと話をしている中で、何だか切なくなってきた、和明くんの温もりが欲しくなってきた……」

そういう間にも、しほの手が和明の股間へと伸びてくる。

「ねえ……ししよう？」

「っー」

ワイシャツ一枚の豊満な美女にここまで言われ、理性を保てる男が居るだろうか？

「……しほさんっー」

「ああ……んッ、んんッ……」

和明は身体を回してしほに正面から向き直ると、夢中で彼女の身体を抱きしめ、唇を重ねた。遠慮なくしほの唇を分け入り舌を口腔内に

差し込むと、既に十分な熱を持った彼女の舌が喜々として絡んでくる。

片手をしほの背に回したまま、和明はもう片方を彼女の胸へと伸ばし、ワイシャツの上から強く揉んだ。

「しほさんっ……ふうっ、はあっ……し、しほさんっ……！」

「和明くん！ んむう……ちゅ、和明くんっ……！」

互いの名を呼ぶだけで、互いの身体が熱くなってゆくのを感じる。和明は掌に伝わってくる、しほの乳房の感触と重さを堪能する。何というか——しほの乳房は色々と「別格」だ。ずっしりとした重みと手に余る程の大きさを持ちながら、40歳前後とは思えないほどにその肌は瑞々しく張りつめ、しっかりとした弾力で和明の指を押し返してくる。

一方でしほも和明とのキスを重ねつつ、もどかしそうに和明のジーンズの留め具を外し、ジッパを下ろすと下着越しに既に勃起している肉棒に触れてくる。

「ふあ、あ、はあっ！ か、和明、くん……素敵よ、もうこんなに……！」

「し、しほさん、だって……！」

「ンツ、ああっ！」

お返しとばかりに、何も隠すものが無い彼女の秘唇に触れる。艶やかな黒い陰毛に彩られた陰唇に指が届くと、既にそこは熱く滑っている。

悶えるしほの反応を見る度、彼女を感じさせているという満足感が湧きあがってくるのが分かる。

彼女の秘所を弄りつつ和明はしほから唇を離すと、今度は締めきれしていないワイシャツの胸元が形づくる深い谷間に顔を埋めた。大きく息を吸うと、シャワーを浴びたばかりの石鹸と彼女の甘い匂いと汗が混じった淫臭が鼻孔を直撃し、くらくらするような刺激を覚える。

「ふっ、ふうっ、すうう……！」

「はあっ……そ、そんな、吸わないで……んくっ！」

恥ずかしそうにしほは頬を染める。しかしその手は和明の頭に回

り、より乳房へと和明の顔を埋めさせる。和明は夢中でしほの乳房を吸い、舐め、揉む。

もぞもぞとしほが太腿を擦り合わせ始めた。自分の張りつめた肉棒の挿入を求めているのだ。トランクスから解放された肉棒は血管を浮かび上げらせ、既に限界まで怒張している。

一旦しほの乳房から顔を離し、和明は瞳を潤ませこちらを見る彼女を正面から見た。濡れた唇でしほが言う。

「お、お願い、和明くん……欲しいの」

「……しほさん」

しほが今までに無い程に興奮しているのが分かる。それは和明も同じだ。

その自身から湧きあがる欲望は、しほに対してある欲求を生まれさせた。

「しほさん、ひとつ……お願いしても、いいですか？」

「何、かしら？」

吐息混じりにしほが聞き返す。

喉を鳴らし、和明は言った。

「今だけ……しほさんの事、呼び捨てても、いいですか？」

「……いいわ。早く……頂戴」

脚を広げ、切なそうにしほは答えた。

彼女の身体を仰向けに変え、その身体にのしかかるように体位を変えらる。

「……しほっ！」

「あ、あああっ！ 和明、くんっ！」

荒い吐息と共に、和明は孔に狙いを定めると一気に奥まで突き入れた。

既に熱く潤んでいた膣内は凶悪なまでに膨らんだ肉棒を受け止め、締め付け、無数の鬣が射精を求めて蠢き始める。

「しほっ……しほっ！ うっ、ああっ！」

「ふああっ！ こ、こんな、凄いつ！」

一切の遠慮なくしほの膣を突き、大きく腰を引き、再び突き入れる。

相手を壊さんばかりの激しい抽送をしほは喜々として受け入れ、恍惚とした表情で和明の肉棒に嬌声をあげる。

パンパンと肉同士が打ち合う音が室内に響き、そこに荒々しい吐息と喘ぎが混じる。

突き込む度に重く揺れる乳房に堪らなくなり、和明はちぎるようにワイシャツのボタンを外すとゆきりと露わになったしほの胸を直接揉んだ。手に収まらないサイズの、ぐにぐにと形を変える乳房の先端では朱色の乳首が固く尖り、掌にコリコリとした感触を伝えてくる。

「しほのも、凄いつ！　こんな、熱いのは、初めて……っ！」

「んあぁっ！　和明、くん……和明、さんっ！」

「……！」

ただ、下の呼び方が変わっただけ。

それだけだというのに、和明の中でどくんと更に激しい欲情が湧きあがってきた。

「しほっ、しほっ、しほおっ！」

「あぁあっ！　す、素敵、よ、和明さんっ！　和明、さんっ！」

彼女の名を呼びつつ、夢中で腰を振る。和明の名を呼びつつ、しほは自分の背に手を回し、より強い密着と挿入を求めてくる。

互いが互いの快感を乱暴に引き出そうとする獣めいた交合は、早くも絶頂へと近づきつつあった。和明は迫る射精感を覚えたつ言った。

「く、くうっ！　だ、出すぞ、しほっ！」

「んひっ！　か、和明さんっ！　は、はいっ！　出してっ！　和明さ

ん、のっ、精液！　ぜんぶっ！」

「ううっ！　し、しほおっ！」

「和明っ、さんっ！　あ、あ、あぁあっ！」

しほの締め付けが急に強まり、和明は堪らず精液を彼女の膣内に放った。怒涛の奔流が吐き出され、しほの子宮を、膣内を汚してゆく。

「あ、は、あぁ……！」

「和明、さん……ふぁ、あ……！」

そのまま倒れるように和明は身体をしほの上に重ね、しほはそれを受け止める。外の雨は更に強まり、弱まる気配は無い。

これが後の和明の記憶に鮮明に残ることになる、一泊二日だけの同棲の始まりだったのだ。

第二話

「ん……」

強い気怠さと共に和明は目を覚ました。体がやけにべたつき、重い。

「んっ、んん……？」

寝返りをうち、体が目覚めるのを待つ。次第に手足まで意識が届き始める。

和明は身を起こし、薄ぼんやりとした視界を頭を振って振り払う。

「あ、あれ？」

自分が自室の絨毯の上で、全裸のまま横になっていた事に和明は気づいた。股間を見てみれば乾燥した精液や他の体液によつてか、やけにガビガビになっている。

そこでようやく和明は、自分が何故こんな状態になっているのかを思い出した。自分はしほと何度も交わり——そのまま寝てしまったのだ。

全国規模の大雨で熊本の自宅に戻れなくなった彼女は突然に和明の自宅を訪れ、シャワーを浴び、ワイシャツ一枚の姿で翌朝までの休息を求めてきた。

そして——温もりを求めてきたしほと、理性をあつさりど吹き飛ばした和明は獣のように交わった。彼女の豊満な乳房を吸い、秘唇を赤黒く怒張した亀頭でこじ開け、血管の浮かぶ肉棒で膣内を荒々しく抽送した。

「えつと……今、何時だ？」

壁の時計を見れば、時刻は7時過ぎを指している。確か昼過ぎにしが訪れ、その後でボコのアニメを見てから彼女と少なくとも三時間くらいは交わったから——大体、二時間前後は寝ていた事になるだろうか。

やけに腹が減っている。そういえば昼を取ろうとしてしほの一件で食べるのを忘れ、そのままだ。

「しほ……さん？」

そういえば、しほが部屋にいない。横を見てみれば汗をすっかり吸って重くなつたワイシャツが脱ぎ捨てられている。確かにこれを着たままではいられないだろう。

「トイレかな?」

気怠い体を無理矢理に起こし、和明は立ちあがった。自分も何か着なくてはい。

「……ん?」

ふと足を止め、スンスンと鼻を鳴らす。

——味噌汁と、肉の焼ける匂いがする。

匂いに吸い寄せられるように和明の足はキッチンへ向かう。

「……あら」

リビングのドアを開けそちらの方に顔を向けると、フライパンを手にハムステーキを焼いているしほが居た。二つあるコンロの奥側には鍋があり、そちらでは味噌汁が既に作られているようだ。

しほも和明に気づいたのか、こちらを向いて言った。

「起きたのね、和明くん」

「ええ、今さつき。しほさ……」

「悪いけど、冷蔵庫の中身で夕食を作らせて貰っているわ。普段は使用人にお願いしているから、料理なんて久しぶりだけど……」

「……」

「……和明くん?」

言葉を失い硬直した和明に、しほが怪訝な表情を浮かべる。

決して、しほが勝手に冷蔵庫の中の食材を使った事に対して言葉を失っている訳ではない。彼女の姿が、裸にエプロン一枚を着けただけだったからだ。

「し、しほさん……それは?」

「え? ああ、これね」

和明の視線が自分のエプロンに注がれているのに気づいたのか、しほはエプロンの淵を摘まんで言った。布地を膨らませている豊満な横乳が丸見えになる。

「申し訳ないとは思ったのだけど油を使うから、貸してもらったわ。」

和明くん、ぐっすり眠っていたし」

「いや、その、そうじゃなくて……！」

しほは本当に意識せずにその恰好を選んだのだろうか？ だとしたら、彼女はある意味『天然』であり『本物』だ。

本来ならば膝上くらいまで届くはずのエプロンは彼女の巨大な乳房によって押し上げられ、太腿の辺りまで露出している。当然ながら背面は丸出しで、長い黒髪から覗くうなじから姿勢のよい背筋、そして引き締まった腰回りを経てむっちりと肉付きよい尻、そこからすらりと伸びる素足まで全て見えている状態だ。

和明の喉が鳴る。

「……！」

しほの頬に朱が差す。裸エプロンのしほの姿を見ただけで股間にぶら下がっていた和明の肉棒はたちまち充血し、体から平行に持ち上がり、そして臍に届かんばかりに屹立したのだ。

こちらに背を向けた状態のしほに和明は勃起させたまま近づき、その肩に触れた。

「しほさん……！」

「んっ……だ、駄目よ、和明くん。火を使ってるんだから……！」

「そう言われても、しほさんのこの格好、反則ですよ……！」

彼女の耳元に口を寄せ、熱い吐息と共に和明は言った。おそらく、和明が寝ている間にシャワーを浴びなおしたのだろう。汗臭いままの和明とは違う良い香りが鼻をくすぐる。

腹は減っている、体も怠さが残っている——しかし、今のしほとしたいという性欲は、容易にそれらを抑え込んだ。

「ああ……あ、危ない、わ……ンンッ！」

エプロンの側面から両手を差し込み、しほの乳房を直接揉む。心地よい重みと弾力が掌から伝わってくる。更に揉みしだくと次第に乳房に汗が滲み始め、先端の乳首が固さを増してゆく。

同時に和明はしほの尻の谷間に自身の肉棒をあてると、腰を動かして擦り始めた。張りのある豊かな尻肉に龟头を押し当て腰を揺すると、しほの腰も刺激を受けてか小刻みに震える。

「はあっ……か、和明くん……わ、分かった、から……」

紅潮した顔でしほはいうと、コン口の火を止めて肩越しにキスを交わした。

「んっ……ちゅっ、んんっ……」

「フウツ……しほさんも、熱く、なつてきて……」

「ん、くうっ!？」

キスを交わしつつ和明は片手を胸から離すと、自身の竿に添え角度を下げてしほの股の間に位置を合わせて腰を突き出した。先走りの滲む亀頭を彼女の秘唇にこすり付ける。しほが腰を浮かせると、エプロン越しにくつきりと形が浮かぶ彼女の乳房が重く揺れる。

「しほさん……ここ、濡れてきて、ますよ……!？」

「和明くん、のも、こんな、固く、熱くなつて……んひいつ!？」

クリトリスを強く擦られ、しほは悲鳴めいた嬌声をあげた。

もっと彼女の感じている、乱れている姿を見たい。その欲望のまま、和明は再び両手でしほの豊かな乳房を揉むと同時に腰を振り始めた。

「しほさん……ううっ! しほさんっ!？」

「あ、んっ、んくうっ!？」

エプロンの裾を揺らしつつしほが喘ぐ。次第に滲んできたしほの愛液は和明の肉棒を濡らし、素股をより滑らかにしてゆく。

腰を震わせつつ、しほが言った。

「お、お願い、和明くん、そろそろ……!？」

「『そろそろ』何、ですか……くっ!？」

「んっ、ああっ!？」

少し角度を変え、膣孔のあたりを亀頭で穿るように擦る。潤んだ瞳でしほは再び懇願した。

「お願い……入り口だけじゃなくて、奥まで、和明くんの太いのを、頂戴っ……!？」

「『ダメ』って言っていたのに……んっ! じ、自分からおねだりですか、しほさん?？」

「だ、だって……こんな、熱くて固いの、擦られたらっ! お願い、意

地悪しないで……！」

艶やかな黒髪を頬に張り付かせつつしほを挿入をねだり、腰をくねらせる。

「分かり……ましたっ！」

実際、和明も我慢の限界が近づいていた。胸から手を離し、彼女の尻に手を添え、狙いを定める。

切なそうに身体を震わせる母親ほどに年の離れたしほを素直に可愛いと思いつつ、和明はそのまま腰を突き出した。

「ふあ、あ、あああっ！」

「ぐ、くうっ！ しほさん、締まる……っ！」

待ち望んでいた極太の肉棒の挿入に、しほの膣内は十分な潤みと強烈な締め付けをもって迎え入れてきた。蕩けるような熱さと快感に、和明も思わず呻きを漏らす。

そのまま動けば一気に射精してしまいそうな感覚を覚え、和明は一旦腰を止めた。大きく息を吸い、改めてしほの腰を掴む。

「しほさん、いき、ますよっ！ くっ、ううっ！」

「ひうっ！ 和明、くんっ！ んっ、ああんっ！」

何度も身体を重ねてゆく内に分かってきた事がある。しほとの一対一のセックスは——『勝負』に近い。

例えば島田千代の場合は、自身が快感を覚える以上に和明の反応を見て楽しんでいる節がある。故に彼女が混じるセックスは多少なりとも余裕があり、色々と考えたり、ちよつとした話をする余裕もある。

しかし、しほが相手となると話が違う。まるで火打ち石を打ち合うが如くに互いの欲望をぶつけ合い、貪欲に求め合い、少しでも気を抜けば達してしまうような交わり。それが彼女とのセックスだ。実際、初体験の時にペースを持って行かれた和明はしほの肉欲のままに搾り取られるばかりだった。

「ハアッ、ハアッ……ぐうっ！」

「あ、ひいっ！ 和明くん、待って！ そこっ、弱っ……んくうっ！」

しかし、幾つもの鮮烈な経験を経て次第に和明にもしほの弱い所が

分かってきた。例えば膣内の、上寄りのあたりの膣壁だ。この辺りを強く擦るようになると、しほは脚に力が入らなくなる。

だがそれでも無数の襲は和明の肉棒を逃がすまいと蠢き、締め付けは弱まることはない。日々の戦車道の修練で鍛えられたフィジカルあつてのものだ。

「く、うあつ！ し、しほさんっ！ 俺、そろそろっ……！」

「ひっ！ い、いいっ、いいっ！ 和明、くんっ！ あと、ちよつと、我慢して……！」

ぱんぱんと彼女の豊かな尻に激しく腰を打ち付ける。

流しに手を起き身体を支えるしほは、足に力が入らなくなってきたのか上体が崩れ、同時に腰をより和明に密着させる姿勢になった。汗を吸ったエプロンは胸の谷間に寄り、両の豊満な乳房が外気に触れる。

「ああ……しほさんの、おっぱい……こんな、揺れて……！」

「は、ああつ！ もつと、もつと強く、してっ！ ああつ！」

突く度にゆさゆさと揺れる乳房に堪らなくなり、和明はしほの腰にあてていた手をそのまま上に滑らせ、下から捏ねあげるように揉んだ。指の跡が残りそうな程の和明の胸への責めを、むしろ嬉々としてしほは受け入れる。

先端の固く尖った乳首を指の谷間で弄りつつ、和明は手に余るしほの乳房の弾力を、重さを、そして揉むことに喘ぎを漏らすしほの反応を堪能する。

次第に結合部からこみ上げる射精感が強まってきた。そろそろ限界か。

和明は歯を食いしばり、しほを先に絶頂に導こうとする。結合部から愛液の飛沫が散るほどに激しく腰を打ち付け、汗ばむ首筋に口を寄せ、更に胸を揉む。

「ふあ、あ、はあつ！ 和明くんっ！ 私、もうっ！」

「うあつ！ しほさんっ！ 俺も、で、出るっ……！」

「あ、あ、あああつ！」

しほが激しく身体を震わせ、ひと際強く肉棒を締め付ける。それと

ほぼ同時に和明は達し、しほの膣内に精液を注ぎこむ。

「ぐ、ぐうつ、絞られるっ……………」

「はあ……………凄く、熱い……………和明くんの、精液……………」

結合部からボタボタと零れた精液がキツチンの床を汚してゆく。

がくがくと脚を震わせながらもしほは和明の射精を、最後の一滴まで受け止めてゆく。

腰の震えが止まり、和明は大きく息をついた。

「はあ、ふう……………しほ、さん……………」

「……………夕食の前に、シャワーを浴びましょう」

荒い吐息と共にしほは言った。

「……………っ！」

「ひうつ!？」

しかし、和明は射精直後の半勃起状態の肉棒を引き抜く手前で止め、再びしほの最奥まで突き入れた。

絶頂の余韻を味わっていたしほは、戸惑いを浮かべて和明を見る。和明は欲情に溺れた瞳で彼女の視線に返す。もう一度ギリギリまで抜き、一気に奥まで。

「んはっ! か、和明くん!？」

「すみません、しほさんっ! 俺、全然……………治まりません……………あと、一回だけ……………」

「和明くん、ちよつと、待ちなさい……………ンンッ! ま、まだ、私、敏感で……………んひいっ!」

「しほさん……………ああ、しほさんっ!」

エプロンを着崩したしほと、キツチンでのセックス。それは和明の劣情を今までに無い程に高めさせていた。

彼女が高校生にもなる子供を二人持つ、他人の妻である事は嫌と言うほど知っている。

だが——自室でのセックスを経て、何も着替えずにエプロンだけを着けて自分のために料理を作ってくれていたしほに、和明はまるで彼女が自分の新妻であるかのような錯覚を覚えていた。

その錯覚は、どんな媚薬よりも強烈な刺激となって——和明の射精

直後の肉棒をあつさり復活させ、しほの膣内で膨れ上がり、容赦なく彼女への蹂躪を再開させた。

「はっ、ひいっ！ んあっ、あ、ああっ！」

「ううっ、ぐっ、しほっ、しほおっ！」

もはや普通の言葉すら出てこない。ギンギンとシンク全体を揺らすほどの激しい抽送にしほは叫びに近い嬌声をあげ、和明は彼女の名を呼びつつ夢中で腰を振る。

しほの胸を無茶苦茶に揉みつつ、肩口に無数のキスをして、休むことなく肉棒を角度を微妙に変えつつ突き込む。そして、しほの肉体は和明の欲望を完全に受け止め、自身も欲望を貪らんとうねうねと膣全体で肉棒を包み、絞り、締め付けてくる。荒々しく揉みしだく手を弾力を増した乳房は押し返し、乱暴な腰使いに自らも腰をくねらせてくる。

「ふっ、ふひっ！ か、かずあき、さんっ！ も、もうっ、もうっ！」

「あうっ！ うっ、うおっ、うおっ！」

獣めいた喘ぎと共に和明は子宮口にまで亀頭を届かせ、そのまま一気に自分を解放した。先ほどの射精で一杯になっていたしほの膣内に、子宮に、先ほど以上の量の精液が迸る。

「あ、あぁあっ！」

「ぐ、ぐうっ……！」

汗と愛液と精液の匂いがキッチンに広がる。

視界が霞む程の強烈な絶頂に、和明は後ろから抱き着くようにしほと身体を重ね、しばらく動くことができなかつた。

30分後。

「……いただきます」

「いただきます」

卓袱台に置かれた料理を前に和明が手を合わせると、しほも同じく手を合わせて礼をする。

ハムステーキに冷凍ブロッコリー、味噌汁にご飯。簡素ながら日頃の和明の食生活からすれば十分すぎる程にしつかりとした夕食だ。

流石に全裸で食事をするのも抵抗があったので、現在は和明はTシャツとジーンズ、しほはTシャツとトレパン（やはりノーパンノーブラ）姿である。

和明が箸をつける様子を、しほはじっと見ている。どこか落ち着かなさを感じつつも、和明はハムステーキをひと口齧った。

「うん、美味しいです」

「……安心したわ。本当に久しぶりだし、すっかり冷めてて途中で焼き直したから」

「いや、そうは言ってもしほさんだって……」

「……………」

「……すいませんでした。そ、そういえば、天気はどうになりましたかね？」

自分が欲望に流されてしほを犯した事をチクリと言われ、素直に頭を下げる。流石に二度目はやりすぎだったと自分でも思う。

誤魔化すように和明はリモコンに手を伸ばすと、テレビを点けた。

『……………このように日本列島を横断した強い雲はその勢力を弱め、前線は南下する見込みです。ですが交通機関については各社、線路確認のため復旧は翌朝以降になると見られており……………』

ニュースキャスターが気象の回復について語っている。言われてみれば、屋根を打つ雨音が随分と弱まってきているようだ。

「これなら、明日には帰れそうですね」

「そうですね……………あとは服と下着をどうするか、かしら」

「うーん。部屋干しだと朝までに乾かないかもですし、コインランドリーに行く方が良さそうですね」

現在、雨を吸っていたしほの着ていた一式は洗濯機にかけられている。とはいえ一般的な大学生である和明にとって乾燥機などは贅沢の極みだ。幸い近所にランドリーはあるので、脱水が終わったらそこに行くことになるだろう。

味噌汁を啜りつつ、和明はしほの食事する様を伺う。ガツガツと咀嚼する和明と異なり、静かに、しかし決して遅くもなく食事を進めてゆく様は昔からそういったマナーを教えられてきた人間のそれだ。

セックス中はともかく、平時の彼女はよくよく自分と住む世界が違っていると痛感する。

「そういえば篠原くん、学校の方は何時からなの？」

「あと三週間ってトコですね。西住さんとかは……やっぱり、休みとか無いんですよ」

「一応、『高校戦車道連盟代表』としては今は大会を終えて休みを頂いているのよ。おかげで普段よりは多少の余裕ができているわ。時々スケジュールが空いてくれる」

他愛ない会話を交わしつつ、しほとん食事続ける。

考えてみれば、こうやってセックス以外で彼女と時間を共有するのは初めてかもしれない。

「ご飯、まだありましたっけ？」

「あるわよ。おかわり？」

「お願いします」

茶碗を差し出すとしほは受け取り、炊飯器の残り少ないご飯をよそう。Tシャツとトレパンという部屋着にも程がある格好だが、それでも様になっているのは流石と言うべきか。

気が付けば食事も先にしほが終えている。自分よりゆっくり食べているように見えていたが、無駄のない動きによるものだろうか。

「……ふう、ご馳走様でした」

「お粗末様」

やがて和明も食事を終え、食後の合掌。しほは皿を片付け流しに持ってゆく。

ピーというアラーム音が耳に届く。洗濯機の脱水が終わった音だ。和明は押入れからランドリー用のトートバッグを探し取り出す。洗濯機まで行き、それをバッグにつめてゆく。

キッチンからはしほが皿を洗う水音が聞こえてくる。腹が膨らんだ直後でもあり、流石にここで彼女を抱く気持ちは起こらなかった。というか多分、先ほどのような激しいセックスを今すると吐く。

「西住さん、洗濯物の用意できました」

「ごっちももうすぐ終わるわ。そうしたら行きましょう」

「はい……あ、そういえば」

和明は玄関まで行くと、彼女の靴を確認した。

「あー……」

案の定、彼女の靴も水を吸ってグシヨグシヨになっていた。朝までに新聞紙を詰め込んでおかないと駄目だろう。

「靴も駄目になってますね。俺だけで行きましようか？」

「いえ、私も一緒に行くわ。サンダルでもいいから、何か履物を借りてもいいかしら？」

「分かりました。それくらいならあつたと思います」

履き古しのスニーカーなどは流石に彼女に履かせられない。靴箱から彼女の足でも入りそうなサンダルを探し、玄関に置く。

ちようどしほも皿洗いを終えたようだった。手を拭い、玄関に来る。

「それじゃ、早めに行くとしましょう」

「そうですね。じゃ、出ましようか」

傘を取り、和明は玄関のドアを開けた。しほが出たのを確認して鍵をかける。

雨の熱帯夜は暑く、同時に湿っぽい。じっとりした空気がまとわりつく。それを払うように和明は歩き出し、アパートの階段を降りた。しほも後ろについてきているのが分かる。

外の雨は確かに小降りになっていたが、それでも傘は必要な感じだ。和明は傘を広げた。

「……え!？」

その横を、しほはまるで晴天であるかのように歩き出した。早速雨にTシャツが濡れてゆく。慌てて和明はしほを止めた。

「ちよ、ちよつと西住さん、傘は!？」

そう言われ、しほは不思議そうに振り返った。

「……? この程度なら、傘は要らないでしろう?」

「いや、要りますよー!」

「戦車道の試合では雨天の中で風雨に晒されつつ指揮を執るのも珍しくはないわ。それに比べれば……」

「風邪ひきますすって！」

こういう所でも彼女はどこか浮世離れしている。彼女の分の傘を取りに帰ろうとした時、スツとしほが戻ってくると和明の横に来た。

「え？ え？」

「部屋に戻るのも手間ですし、このまま行きましよう」

そのまましほは和明が動くのを待つ。

——これが狙ったものなのか、果たして天然なのか。和明がもつと経験を積みれば分かるようになるのだろうか。

ともあれ、戻るつもりが無いのであれば仕方ない。和明は傘を差し、しほと並んで歩き出した。

パラパラと傘に雨粒が当たる。人通りは少なく、周りの家も雨戸をはめて家の灯りも見えない。そんな中を相合傘で和明たちは歩く。

「……………」

「……………」

言葉を交わす事はない。しかし、この静かさを心地よいと和明は感じている。

身を寄せてくるしほの肩の温もりが伝わってくる。ランドリーまでの時間が少しでも長くなるようにと、和明は少しだけ歩調を緩めた。

第三話

ゴトゴトと乾燥機のドラムの回る音がする。

外の雨は静かながらも振り続けており、夜が深まるにつれ涼しくなってきた空気に湿気を含ませる。

「……………」

「……………」

誰も居ないコインランドリーの店内で、和明としほは寄り添いつつ無言で乾燥を待っていた。

和明は雑誌ラックにあった週刊コミック誌、しほは戦車道専門誌を読んでいる。マイナー競技として扱われていた戦車道の雑誌がこうして置かれるようになったのも文科省を上げての復興取り組みの成果だろうか。

「……………」

ふと、和明は横目でしほを見た。

Tシャツにトレパンにサンダルという、今まで見てきた中で最もラフな彼女の格好はそれでも似合っており、下着を上下とも着けていないからか、普段よりもより身体のラインがくつきり浮き上がっているように見える。

「(うつ…………)」

昼下がりに何時間も彼女を抱き、起きてからキッチンでエプロン姿の彼女に二度射精したというのに、またしほを抱きたくなってきた。

「(いやいや…………流石にこれ以上はダメだろ、俺)」

明日の朝イチでしほは急いで熊本に戻らなければいけないし、和明は和明で明日はバイトの早番だ。これ以上はしほも受け入れてはくれないだろう。

とはいえ、それだけしほの身体が魅惑的であり、蠱惑的なのは事実だった。全く着飾ったり化粧したりという気配は無いのだが、日々の戦車道家元としての務めと鍛錬によって瑞々しさを保ちつつも成熟した女性の豊満さを併せ持つその肉体は、それだけで強烈な色気を放っている。今も実際、和明の肉棒はその色気だけで疼く程だ。

「……恵まれてるよな、実際」

戦車道シヨップに偶々勤めていて、偶々戦車の公道免許を持ってたことで和明は二人の家元と接点を持ち、こうして関係を持つことができた。二人の美女に加えて千代の娘である13才の島田愛里寿とさえ肉体関係を持てた事も含め、世の男からすれば十二分に果報者と言えるだろう。

しかし——同時に思うこともある。

この関係はどこまで続くのだろう。それこそ出会った時のように、ある日突然に終わってしまうのではないか。そんな形無き不安を覚える事がある。

もう一つは、自分は彼女らにとってどう思われているのだろうかという疑問だ。都合の良いセックスの相手とだけ思われているのだろうか。

そしてそれは和明自身にも言える。果たして自分にとって、今の二人の家元は単に性欲の矛先でしかないのか。あるいは——

「……篠原くん、乾燥終わっているわよ?」

「え!」

その時、横からのしほの声で和明は我に返った。見てみれば洗濯物を入れたドラムは停止しアラームを鳴らしている。どうやら思った以上に考えに没頭してしまっていたようだ。

「す、すみません! よっ……と」

慌てて和明はトートバッグを取り、洗濯物を移した。乾燥直後の温もりと独特の香りを感じる。

一方、しほは和明の読んでいたものを含めてラックに戻してからこちらに寄ってきた。バッグの中の自身の服や下着を確認する。

「……やっぱり、皺になっているわね。篠原くん、アイロンは持ってる?」

「アイロンが要りそうなのはクリーニングに出すんで……大丈夫ですか?」

「仕方ないわ。これで帰るとしましょう」

そんな事を言いつつ二人はバッグに詰め終え、ランドリーを出た。

まだ外は雨模様だ。

「……帰りもお願いでできるかしら？」

「え？ ええ」

しほの言葉に和明は立てかけていた傘を差すと、彼女を促した。スツと横にしほが来る。

蒸し暑さを残していた夏の空気は随分と涼しくなってきた。今夜は冷房無しでも眠れそうだ。そんな事を考えつつ、和明はできるだけ傘をしほに寄せて歩く。

やがて二人は和明のアパートに帰り着いた。鍵を開け、部屋に入る。

「……ふう」

「ありがとう、助かったわ」

「いえ、そんな……」

傘を玄関に差し、バッグを置いてひと息ついた和明にしほは礼を言った。最初は傘無しで行くつもりだった彼女にとってはおせっかいだったかもしれないが、結果的には良かったようだ。

「んっ……ふああ」

落ち着いたからか、和明は急に眠気を覚えて大きくあくびをした。時計を見れば10時を過ぎたところだ。

「眠いの、篠原くん？」

「ちよつと……っていうか、しほさんもそろそろ寝る頃ですよ。お客様用とか無いんで、俺の布団で良ければ使ってください」

「篠原くんはどうするの？」

「冬用の毛布とかがあるんで、それで」

本来ならば洗い立ての布団のひとつでも用意すべきところではあったが、何分いきなりの訪問だったために寝具の用意などはない。一旦畳んでいた布団を広げつつ和明が言うと、しほが首を横に振った。

「今晚はかなり涼しいわ。一緒に寝ましょう」

「え!? いや、それは……!」

「構わないから」

有無を言わさぬ口調でしほが言う。

駄目だ、こうなつては彼女は引き下がらない。おそらく和明が折れるまでしほも眠らないだろう。和明はそう理解し、頷いた。

「……分かりました」

「私はこのまま眠らせてもらうわ。篠原くんは？」

「あ、俺もジーンズだけ脱いで、このままで」

実際女もののパジャマなどは持っていない。しほは和明と共に布団を敷くと、Tシャツとトレパン姿のまま中に潜り込んだ。和明もジーンズだけ脱ぎ、Tシャツとトランクス姿で逆側から入る。

「灯り……消しますね」

「お願い」

電灯の紐を引き、常夜灯だけにする。

ナツメ球の柔らかい光だけが薄暗い部屋を照らす中、和明は掛布団を緩めに被った。しほの側がより覆えるようにだ。

「……お休みなさい」

「お、お休みなさい」

落ち着いたしほの声に、やや動揺を含めて和明が返す。和明は目を閉じ、眠りにつこうとした。

「……」

大きく息を吐き、緊張を解こうとする。

「……」

もぞもぞと身体を動かし、寝心地の良い位置を探る。

「……駄目だ」

小さく和明は呟いた。

傍らのしほの体温や気配、そこから連鎖的に今日の昼からの幾度も
の交わりが思い起こされ、寝るどころではない。

「眠れないの？」

「えっ？」

傍らからしほの声。すぐに眠りに落ちたと思っていた彼女だったが、
どうやらまだ起きていたらしい。

「す、すみません……眠かった筈なんですけど、何だか逆に目が冴えて

きて」

「……何か、話でもする？ その内に眠くなるでしょう」

「そう……ですね」

そうは言うが、何を話したものやら。

「……」

あれこれ考え、ふと思いついた質問をしほに投げた。

「あの……西住さん」

「何かしら？」

「その、今更なんですけど……西住さんや島田さんの言う『欲求不満』って、どんな状態なんですか？」

本当に今更な質問だ。言った後に和明は思った。

しかし、しほはその質問を真面目に受け止めたのか少しの推敲を経て答えた。

「そうね……例えば篠原くんは、スポーツとかはする？」

「……まあ、多少は」

「その中で試合とかもするわよね？ 試合の後って、勝ったにせよ負けたにせよ、何か残るものがない？」

しほの言葉に、和明は自分の記憶を思い返した。確かに試合の興奮や緊張、口惜しさや嬉しさ、そういったものが余韻として残る。

そう和明が答えると、しほは言った。

「その状態が、試合を終えて何時間経っても治まらない状態……とでも言えばいいかしら？ 熱い滾りが身体の奥で残ったまま、ずっと身体が火照ってしまつて……堪らなくなってくる。そんな感じね」

「やつぱり、辛いんですか？」

千代は「薬を使う方法もある」と言っていた。あまりその手には頼りたくないとも言っていたが――

「……そうね。集中力も落ちるし、酷い時には眠れなくなる」

「それは……」

「だから、こうして和明くんにも助けられている」

「……」

そう言われ、和明の中に別の「今更な質問」が浮かんだ。言おうか

どうか迷い、やはりそれを口に出す。

「……あの、しほさん」

「何?」

「今までも、ずっとその欲求不満はあったんですよ。いつ頃から?」

「18, 9の頃ね。ちょうど今のまほと同じくらい」

やはり20年前くらいからか。

それを確認し、本当に聞きたかった事を和明は言った。

「それじゃ……今までも、『そういう相手』は居たんですよ?」

「ええ。居たわ」

「……!」

しほは澀みなく答える。

当然と言えば当然だが、やはり直接言われると堪えるものがある。

「その……何人くらい?」

「分からないわ。最初は数えていたけど、この20年ほどで少なくとも100人以上は居たと思う」

「ひゃつ……!?!」

思った以上の数が出てきた。和明の動揺を知ってか知らずか、しほは言葉が続ける。

「一度だけの人も居れば、何度か身体を重ねた人もいた……適当な男性が居なくて、女性が相手の時もあったわ」
「……」

和明の脳裏に、しほと他の男性が交わる様が否応なく浮かぶ。心の中に沸きあがる「苦さ」を吐き出すように和明は尋ねた。

「家の人は……それについては?」

「古くから付き合いのある、使用人頭の菊代というのが家にいるのだけど……彼女は知っているわ。熊本での手配は菊代がやってくれて
いる」

「それじゃ、その……旦那さんは?」

「……どうなのかしらね」

そで初めてしほは曖昧な返事をした。

「隠してはいるわ。家でそれについて口に出す事も無い」

「……………」

「でも……気づいてはいると思う。察しの良い人だし、口に出していいだけかも」

だとすればそれは酷く歪な関係だ。

だが——その事に和明が何か言う資格は無いだろう。そもそも自分も、しほのそれに乗っかっているのだ。

「しほさんにとって、旦那さんは……えっと、何て方でしたっけ」
「常夫さん」

「その……常夫さんは、それでも大事な方なんですよね」

「勿論よ。大好きだし、大事に思ってる」

「……………」

思った以上にはつきりと返事が返ってきた。言葉の出てこない和明を他所に、しほは言葉を続ける。

「でも……あの人を、私の都合だけで四六時中付き合わせる事はできない。お互い多忙だから、家の中で会える事も少ないし」

「それで……現地で？」

「……まともでは、ないでしょうね」

しほは抑揚なく言う。そこに自嘲が混じっているように思えたのは、和明の気のせいだろうか。

「先代の家元……母に言われたわ。『戦車道家元としての務めを、そしてその務めを十全で行う為に必要な事を何を捨てても優先せよ』」

「それを……守ってきたんですね」

「……………ええ」

苦し気に和明は言った。静かにしほが答える。

傍らに居るしほが先ほどよりも遠くに感じる。一介の学生に過ぎない和明にとって余りに想像の外の世界だ。そしてその世界で、和明はしほの家元としての道程の小石のひとつに過ぎない。

彼女の社会での存在に比べ自分は余りに小さく、弱い。その事実を痛感せざるを得なかった。

しほの側に背を向けたままの和明の背に、しほの声がかけられる。
「……………」

「……何故、ここまで話したと思う?」
「え?」

「和明くんの質問の答え。私は適当に誤魔化すことも出来たわ」
「……?」

そう言われ、改めて和明は考えた。

——言われてみれば確かにそうだ。彼女が黙ったままなら、和明は必要以上に聞こうとはしなかったろう。

しかし、しほは和明が思っていた以上の事を口にした。現にそれを聞いた自分はかなり堪えている。彼女の意図を読めないまま、和明は素直に聞いた。

「どうして……ですか?」

「貴方には、全部知って貰いたかったから」
「!?!」

予想外の言葉に、和明は寝たまましほの側を向いた。

しほはこちらを見ている。その瞳には、幾らかの戸惑いと、迷いと、寂しさが混じっていた。

和明は、ここまでの話で聞くまいと思った質問を口に出した。

「しほさん」

「……何?」

「俺は……今のしほさんにとって、どんな存在ですか?」

和明の言葉に、しほはじっと視線を変えないまま、口を開いた。

「特別な人になりかけている……そう言えばいいかしら」

「なり……かけ?」

「戸惑っているのよ、私も。こう見えてね」

薄暗がりの中、しほが苦笑したのが分かる。

「和明くん、覚えてるかしら? あの、最初の夜」

「……はい」

忘れる筈も無い。和明にとっては初めての体験であり、今でもはつきりと思い出せる鮮烈な記憶だ。

「貴方にとってどうだったかは分からないけど……私にとってあの時ほどの昂ぶりは、今まで無かった」

「……！」

「ホテルから出て、帰路についている最中も余韻が残っていたわ。そして、伊勢での演習内容が分かった時に真っ先に浮かんだのが、貴方の顔だった」

布団の中の手が温もりに包まれる。しほが握ってきたのだ。

「こんなことは今まで無かった。だから、私も何が正解なのかは分からない。でも……どこかで折を見て、全部話そうと思っていた」

「……しほさん」

「その上で、私からも和明くんに聞きたかった」

握ってくる手に、少しだけ力が入る。

「今、全部話した通り……私の身体は、自分でも分からない程の人に抱かれてきた」

「……！」

「その上で……和明くん、貴方は私をまだ抱いてくれる？」

しほの言葉に和明は無言で彼女の視線を受け止め、その手を握り返す。

そのまま和明は、手を下へと導き――

「しほさん、これが俺の答えです」

「……！」

――熱く反り返る、自身の肉棒に触れさせた。

自分には彼女と肩を並べるに足りる社会的な地位は無い、責任も、立場も、財力も無い。

しかし――巨根これだけはあつある。これで戦車道を努める中で抱える欲求不満を鎮め、しほを悦ばせる事ができる。それは誇るべき事だ。

和明にも次第に理解できてきた。しほは自分を「只の欲求不満解消係」から次の段階に踏み込めるかを確かめるために、言いづらかったであろう事まで言ってくれたのだ。

元々がセックスから始まった関係だ。和明自身もしほに向ける自身の感情が性欲なのか、愛おしさなのか分からない。おそらくは二つ

が入り混じったもので、境界線など無いのだろう。

それでも、今こうして彼女を抱きたいを思う気持ちと滾りは本物だ。それは何より、和明の股間の怒張が証明していた。

「……和明くん」

「しほさん……んっ」

「んっ、んんっ……」

横になったまましほは和明に身を寄せ、唇を重ねてきた。

「ふぁ……ん、ふうっ……」

「はあっ……かずあき、くん……!」

身体を密着させ、唇を強く重ね、舌を激しく絡ませる。

解かれたしほの両手はそのまま和明の肉棒に移り、ずり下がったトランクスから露出した肉棒を両手で擦り始める。彼女のしなやかな指が竿に絡みつき、絶妙な加減で上下に動かされる。

互いの吐息が熱く、荒くなってゆくのが分かる。和明がしほの舌を強く吸うと、お返しとばかりにしほは解放された舌で和明の口腔内を自分のものだとはばかりに舐め回す。

「しほさん、しほさんっ……!」

「和明くん、いいわ、もつと……ああっ!」

キスを繰り返しつつ、しほのノーブラの胸をTシャツ越しに揉む。揉みしだくうちに、シャツの薄い布地を持ち上げるように乳首が固くなってゆくのが分かる。

「ぶはっ……しほさん、脱がしますね」

「え、ええ……」

次第に堪らなくなってきた。和明は一旦口を離し、二人にかかつていた掛布団をどかすとしほのトレパンに手を添えた。そのままずり下げて脱がせる。

下も下でノーパンだったので、それだけでしほの何も着けていない下半身は解放され、彼女から発せられる雌の香りが一層強くなったように感じる。

和明はそのまましほの陰唇に触れた。シヨリシヨリとした陰毛の感触に混じり、愛液が滲み始めているのが分かる。

「くっ……し、しほさん、ちよつと、強い……！」

その間もしほの手は和明の肉棒から離れる事はなかった。和明の亀頭からも先走りが滲み始めており、それがしほの手の動きを更に滑らかにさせてゆく。

和明の声に、しほは潤んだ瞳で言った。

「ごめんなさい、和明くん……つい、嬉しくて……」

「……！」

「ンンッ……！」

和明は再びしほにキスをした。唇を重ねつつ互いの秘所を弄り合う。

「ふうっ……ちゅ、あふっ……！」

「うっ……んっ、ハアッ……！」

言葉を交わさずしほは和明の肉棒を、和明はしほの乳房と秘所を愛撫する。

次第にしほの奥から溢れる愛液が増してきた。指先を濡らすその感触を確かめつつ、和明は膣孔に一本差し込んだ。きゅうと襞が強く締め付けてくる。傷つけないように注意しながら和明はその指をゆっくり出し入れする。

「あ、あうっ！」

「しほさん、もう、こんなに……」

とはいえ、和明の方もしほの丹念な愛撫で昂りを増していた。血管を浮き上がらせた肉棒はしほの手の中でビクビクと跳ね、興奮を示している。

和明は乳房を揉んでいた手を離すと、肉棒を擦る彼女の手を柔らかく止めた。

「んっ……しほさん、その、最初は……」

「そ、そうね……和明くんは、そのまま寝ていて。私が……」

このまましほの手で射精するのも嫌ではなかったが、この射精は彼女の膣内に放ちたかった。

それを察したしほは和明の胸板に手を添えてゆっくりと布団に仰向けにすると、大きく脚を広げてその胴に跨った。

艶やかな長い黒髪を揺らし、汗を吸ったTシャツを肌に貼りつかせ、下半身には何も着けずにその秘所に自ら指を添え、秘唇を押し広げる。

常夜灯の弱い光に浮かび上がるそのしほの姿はとても淫らで、同時に美しいと和明は思った。

片手を自身の秘所に、もう片手は和明の肉棒に添えて位置を定めつつ、しほはそのまま腰を落とした。

「ん……あ、あぁっ！」

「うっ、くうっ！」

熱い潤みが和明の屹立した肉棒を包んでゆく。肉厚な膣内は太く長い怒張をゆつくりと呑み込み、無数の襞が更に奥に引き込もうとうねうねと蠢く。

今までよりもしほの中が熱く感じる。和明は呻きつつもしほを見上げた。秘所から手を離れたしほは再び和明の手に触れた。

「あ、んっ……に、握っていて、和明くん」

「……はい」

「う、動く、わね……んっ、あ、あぁんっ！」

その手を握り返す。決して離れないように。

完全に挿入しきつたのを確認すると、しほは腰を上下に振り始めた。ノーブラの乳房が重く、しかし激しく揺れる。

「はっ、ひうっ！ あんっ！ か、和明、くんっ！」

「うぐっ!? し、しほさんっ、締まるっ……！」

踊るようにしほは腰をくねらせつつ、亀頭が抜けるギリギリまで腰を持ち上げ、直後に腰を落とす。彼女の心地よい重みと共に肉棒が根元から絞られるように締め付けられ、和明の射精感を引き出してゆく。

外で静かに降る雨の音はパンパンと互いの肉を打ち付け合う音に上書きされ、更にそれは互いの嬌声で消されてゆく。

「ふっ、あひっ！ あぁっ！」

「うっ、く、くうっ！」

乱れるしほの姿に興奮を煽られ、早くも和明の腰の奥から滾りがこ

み上げてきた。気を抜くとすぐにでも射精してしまいそうだ。

それを齒の食いしぼりで堪え、和明は自分も腰を下から突き上げた。長い黒髪を振り乱し、しほが悶える。

「く、ひいつ！ 和明くんっ、も、もうっ！」

「いっ……いいですよ、しほさんっ！ 好きな、時に……！」

「あっ、あ、ひうっ！ そんな、まだ、感じたい、のにつ……！」

和明の手をしほが強く握る。

「そ……それならっ！」

ずん、と和明が腰を突き上げた。

「あひいつ！」

「何度でも、俺っ、相手しますっ！ しほさんが、イきたいだけ、何度、でもっ！」

「ふああっ！ あふっ、あ、あああっ！」

和明の肉棒が強烈に締め付けられる。しほが絶頂に達したのを確認し、和明は自分の射精感を開放した。

「お、俺も……ぐ、ううっ！」

「あっ熱っ！ あひっ！ んああっ！」

下から上へと熱いものが噴き上がり、しほの膣内へと吐き出されてゆく。

和明の手を握ったまま、しほは和明の胸板に自分の身体を重ねた。豊満な乳房が弾力と共に押し当てられる。

「ハアッ、ハアッ……！」

「んっ……！」

結合部から溢れた白濁液が垂れてくる。しほの髪を撫でつつ、和明は大きく息を吐いた。

「ふう……！」

「……ねえ、和明くん」

しほが頬を紅潮させたまま和明を見た。

「何ですか、しほさん？」

「もう一度……いいかしら？」

「……ええ、しほさんが満足するまで」

そう答え、和明はしほの中に挿入されたままの肉棒に再び力を込めた。

——結局、そのまま和明としほは明け方まで交わった。申し訳程度の仮眠は取ったが、今日のバイトは眠気と戦う辛いものになるだろう。

外を見れば夏の朝日が高く昇っていた。ニュースによると既に大半のインフラが復旧したようだ。

「新幹線も出てます。横浜線も復旧してますから行けますね」

「そうね……ありがとう、世話になったわ」

昨晚の睦言が嘘のようにしほは凜とした姿勢で言おうと、皺の残ったスーツ姿で玄関のドアを開けた。

「駅まで行きましようか？」

「ここでいいわ。今日は仕事なのでしょう？　それまであと少しは寝ておきなさい」

そう言っしてしほは玄関を出た。和明は見送りの言葉を送った。

「西住さん、気をつけて」

「……ええ。またね、和明くん」

「……！」

ドアが閉まる。

和明は部屋に戻り、窓を開けた。部屋に籠っていた二人の湿気を朝の風が払ってゆく。

「しほさん……」

風が少し涼しくなった気がする。

8月が終わり少しすれば大学も再開する。そうなれば今のようにしほや千代の都合に合わせて自由に動ける事は少なくなるし、彼女らも学業を優先させようとするだろう。それまでに、自分はあとどれだけ二人の家元たちと逢えるのだろうか。

この夏も、あと半分である。

番外編

俺と??と理髪店（前編）

茨城県立大洗女子学園。

名の通り茨城県大洗町を寄港地とする中等部と高等部合わせて生徒総数18000人、民間人を合わせた総乗人数約30000人の中型学園艦である。

今年に入り、この学校の名は戦車道界限でちょっとした話題になっていた。近年は行わなくなっていた選択科目の戦車道を復活させ、更に初年で高校戦車道の全国大会に参加し、そのまま優勝したのだ。

その全国大会からそろそろ一ヶ月ほどが経つが、未だにその熱気は衰えていない。商店街のアーケードには「エキシビジョンマッチ、近日開催！」の垂れ幕が掛けられている。

「ええっと……」

その垂れ幕から手元のメモへと視線を移し、和明はそこに書かれた店を探していた。

ここに和明が来たのは例によって家元——今回は島田千代の依頼によってである。

「和明くん、大洗女子学園は分かる？」

「ええ、確かしほさんの娘さんが居る学校ですよね？」

横浜近くで行われた試合での千代の欲求不満の解消を終え、ひと息ついていた時に千代が尋ねた。少し前のしほの話を思い出しつつ答える。

「その大洗なんだけど、私やしほの学生時代の戦車道仲間も住んでいるの」

「しほさんや千代さんの……って事は、その人も何処かの流派の家元なんですか？」

「ふふっ、家元ではないわ。普通に結婚して、今はその学園艦で旦那さんと一緒に理容室をやっているそうよ」

千代は微笑むと、ベッド脇の小机に置かれたメモにサラサラと住所

と、幾つかの日にちを書いた。

「この前、彼女と会ったときに和明くんの事を話したら興味を持ったみたいなの。都合が合うようなら、行ってみて貰っていいかしら？」

——人妻の浮気話に自分の話題が挙がるのは面はゆくもあり、同時に自分の知らぬところで話が広がっているという不安感を覚える。

とはいえ、千代の紹介する人物であればそう胡乱な女性でもなからう。そういう安心感はあった。

「……………」

「秋山理髪店」と書かれた看板を見上げ、和明は呟いた。町並みに合った小さな美容店で、ドアの横にはお馴染みの三色のサインポールが回っている。

ガラス戸にはカーテンがかけられ、「close」と書かれた札が揺れている。これは千代から聞いていた通りだ。昼のピークを終え、今は中休みなのだろう。

「……………」

呼ばれたとはいえ、見知らぬ人の家の戸を叩くのは少し緊張する。和明は呼吸を整え、ガラス戸を軽く叩いた。

「……………」

待つこと数十秒。反応はない。もう一度和明はガラス戸を叩いた。

「……………」

更に数十秒待つ。反応はない。

——留守なのだろうか？ 和明がそう思った時、屋内から女性の声が聞こえた。

「……………はい！」

やがて奥の方からパタパタという足音が近づき、ガラス戸が少し開けられる。

「すみません。今はお休みをいただいています……………」

そこから顔を覗かせたのは、少し癖のある栗色の髪を肩口まで伸ばした、エプロン姿の女性だった。上はおそらくは仕事着を兼ねているのであろう白いシャツ。下は黒いパンツを履いている。

こちらを客と思っているらしき女性に和明は言った。

「いえ、あの、そうじゃなくって……」

「はい？」

「千代さんから、その、話を聞いて」

そう言われ、女性は軽い驚きを浮かべた。

「あらあら……島田さん、本当にお話していたのね」

「あ、迷惑でしたか？」

「いえ、迷惑って訳じゃないのよ。横浜から来たんでしょ？ 折角だから、上がって休んでいってくださいな」

予想外の反応に戸惑う和明に、女性は優しく微笑むとガラス戸を開けて入室を促した。年の程は千代やしほと同じ位の筈だが、その笑顔には少女めいたあどけなさが窺える。

中は一般的な理髪店のそれであった。幾つかの整髪用の椅子に鏡台が並んでいる。奥は座間になっており、そのまま居間に直結しているようだ。

「さあさ、上がって上がって」

「あ、はい」

言われるままに和明は靴を脱ぎ、座間から居間に向かった。畳敷きの部屋に、箆笥にちやぶ台に座布団にテレビ。なんとも絵に描いたような庶民的な居間だ。

「今お茶を煎れますから、くつろいで下さいね」

そう言うとき女性は隣のキッチン——どちらかと言えば『台所』という表現のがしつくりと来るが——へと向かった。

改めて部屋を見回す。戸棚には家族の写真が飾られており、今の女性と共に夫らしき眼鏡をかけた痩せ気味の男性と、娘であろうパンチパーマ頭の少女が並んでいる。

「パ、パンチパーマ？」

和明は思わず言葉を漏らした。写真の少女はその髪型にも関わらずどこか誇らしげだ。

「ああ、その写真ですか？ うちの子、小さい頃にお父さんの髪型がカッコいいって言って、同じ髪型に……はい、どうぞ」

台所から戻ってきた女性が盆に置いた湯飲みを置きつつ言った。

和明の反対側にもう一つ置き、そこに座る。

頭を下げ、和明は彼女に尋ねた。

「ありがとうございます。ええっと……」

「ああ、そういえばまだ名前も言っていないなかったわね。私、秋山好子よしこと言います。島田さんや西住さんとは昔、少し付き合いがあって。篠原さん……でいいのかしら？」

「あ、はい。篠原和明です」

「さつきはごめんなさいね？ 確かに彼女とそんなお話はしたけど、まさか本当に貴方にお願ひするとは思っていなかったから」

「いえ、そんな……それを言ったら、俺の方こそ千代さ……島田さんに確認すべきでした」

答えつつ和明は手元の茶を飲む。柔らかな微笑みを浮かべたまま、好子は言った。

「学生さん……だったかしら？ 戦車道ショップで働いているとも聞いたけど、大変ね」

「いえ、まあ、慣れたもんで……」

言葉を交わす内に、和明はふと違和感を覚えた。

夏休みの昼下がりだというのに、どうもこの家の中に好子以外の人気配が無い。視線を店内から階段へと移しつつ、和明は尋ねた。

「あの、他の家の方は……？」

「今は私だけなんです。お父さんは町内会の寄り合いに行っていて、酒の入る席になるそうだから戻りは夜になるかも。娘は……あの、篠原さん。大洗女子の戦車道で隊長をやっている西住みほさんはご存じ？」

「え？ ええ、まあ、名前程度は」

「うちの娘、その西住みほさんの戦車で装填手をやっているんです。それで、来週開催されるエキシビジョンマッチに備えて夏休みの間も演習を……」

まるで自分の事のように好子は嬉しそうに言うところをコロコロと笑う。なるほど、だから今は好子しか家に居ないという事か。

「(……ん?)」

和明の脳裏に疑問符が浮かぶ。という事は――

「……でも、ごめんなさいね。わざわざ来てもらったのに」

その時、和明の表情の変化を落胆と受け止めたのか好子が申し訳なきように言った。

「え？」

「島田さんからどう言われたかは知らないけど、がっかりしたでしょ？ 出てきたのがこんなおばさんで」

「いや、そんな」

「あんまり島田さんが篠原さんの事を言うものだから、その場ではつい受け答えしてしまっただけ……その、本気にしないでくださいね」

「……」

「まあまあ、ゆっくりして下さいな。せっかくだから、横浜のお話でも聞かせてもらえろ？」

そう言うと好子は手元のお茶を静かに飲んだ。

「……」

和明の女性経験は多いとは言えない。しかし、しほや千代との密度の高い関係は和明の中で確かな経験として積み重ねてきた。

その経験と男性としての本能が和明に理解させた。おそらく――このまま話を続けている限り、これ以上は状況は進まない。無難な世間話をして、挨拶をして帰る。それだけで終わる。

では、そんな展開を好子は本当に望んでいるか？

「……嘘、ですよね？」

和明はそう言うと、座ったままスツと好子との距離を縮めた。湯呑を戻した手に、自分の手を重ねる。

「ど、どうしたんですか、篠原さん？ 嘘なんて……」

「島田さん……千代さんと話をした時の答えが勢いだって話、嘘ですよね？」

好子の指に和明は自分の指を絡めてゆく。緊張で好子の手が固くなるが、振り払う気配はない。

戸惑いながらも、好子は困ったように言った。

「本当ですよ。だから……」

「勢いで答えただけ」なら、なんで千代さんに家に誰もいない時間を幾つも伝えたんですか？」

「……！」

好子の顔から笑顔が消えた。恥じらいからか頬が赤くなってゆく。和明は更に好子との距離を縮め、ちやぶ台を回り込んでほぼ密着する程まで近づいた。

和明の視線を正面から受け止められなくなったのか、好子は視線を逸らしつつ言った。

「そ、それは……」

「期待したから、ですよね？」

更に好子の顔が赤くなる。今にも泣きだしそうだ。

「ですから、そんな事は……意地悪な事を言わないでください。篠原さん、落ち着いて……」

「……奥さん、ここ、触ってみてください」

和明は指を絡めた好子の手を、そのまま自身の股間へと引いた。抵抗はない。

「え……!?!」

「俺、もうこんなになってます。奥さんと、したくて……」

和明の肉棒は、既にジーンズ越しでもはつきりと分かるくらいに勃起していた。形に添うように、その手を上下させる。

「嘘……こんな、大きい……!」

『おばさん』って言いましたけど……そんな事、全然ないです」

確かに好子にはしほや千代のような匂い立つような色気や、強烈な存在感がある訳ではない。日々の仕事でエステなどにも行けてはいないだろう、若干ほうれい線も浮かんでいる。

しかし、それでも好子の顔立ちは愛らしく——何より、家元たちとは異なる「生々しさ」が和明を今までになく興奮させていた。

しほや千代らは本来なら和明が直接会う事すら難しい世界の人間であり、安い言い方をするならばセレブである。それ故か彼女らとのセックスには（何度抱いても飽きがこない程の素晴らしいものではあるのだが）常にどこか浮世離れた感があった。

しかし今こうして畳敷きの居間で肌を紅潮させているエプロン姿の好子の様子は、学生である自分と地続きの存在である事が——夫と、娘がいる人妻であるという事が——はつきりと和明にも感じられた。

「ああ……凄いい、熱い……!」

ゆっくりと和明は好子に重ねていた手を離れた。解放されたにも関わらず、好子の手は和明の股間から離れないでいる。

「……欲しいんですね」

「え？ あ……!」

声をかけられ、初めて好子は和明の手が離れている事に気づいたようだった。驚きを顔に浮かべるものの、まるで貼りついたように手はジーンズの上から肉棒を撫で続けている。

和明はゆっくりと手をエプロンに添えると、好子の胸を柔らかく揉んだ。

「ソツ……そんな、駄目っ……!」

「駄目、ですか？」

吐息を漏らす好子に、和明は揉む手を止めると問いかけた。

「……!」

「……!」

二人の視線が一瞬だけ絡み合い——観念したように好子は目を伏せると、小さな声で言った。

「内緒に、してくださいね」

「奥さん……!」

「あふっ! あ、ああ、篠原さん……!」

「OK」のサインを出されたのを合図に、和明は好子に唇を重ねた。同時にエプロンの上から彼女の胸を揉みしだく。

「……!」

和明は手に伝わる感触に小さな驚きを覚えた。思った以上の弾力と大きさだ。着やせする方なのだろうか。

手をずらし、エプロンの横から差し込むとシャツ越しに乳房を更に揉む。一方の好子もジーンズの留め具を外し、トランクス越しに掴む

ように和明の肉棒に触れてきた。好子の手の中で肉棒は更に膨れ上がり、ビクビクと脈動する。

「んっ……ちよつと、いいですか？」

「え？ はい……」

和明は一旦好子の手を柔らかく止め、腰を落としたままの彼女の前で立ち上がった。脱げかけていたジーンズから足を抜き、更にトランクスを脱ぎ捨てる。

「あ……」

好子の更に熱くなった吐息が、和明の股間に吹きかけられる。

臍近くまで反り返った、血管を浮かび上がらせた凶悪なまでに怒張した肉棒。和明はそれを好子の眼前に突きつけた。

「これが……篠原さんの……」

「……お願いします」

『何を』とは言わない。和明が何を望んでいるかは、好子は既に理解しているからだ。

「は……はい」

好子は従順に頷くと、エプロン姿のまま肉棒に手を添え擦り始めた。同時に顔を亀頭に近づける。

「んっ、い、いいですよ、奥さん……」

「そんな……言わないで、ください」

素直な感想を漏らす和明の言葉に、好子は赤面しつつも手を止めず、肉棒に快感を与えてくる。

好子の手淫は丁寧で、かつ手慣れたものだった。痛みを与えない程度に握る強さも絶妙に調節されており、好子の人柄を表すかのように優しい。

好子を見下ろしつつ和明は言った。

「くっ、うう……旦那さんにも、こうやって、いるんですか？」

「……」

「教えて、くれませんか？」

「……あの人は、その、手でされるのが好きなんです。だから、最初は……」
「ういう、風に」

恥じらいつつも好子は答える。嗜虐的な欲情が溢れてくるのを感じつつ、和明は好子の奉仕に身を任せる。

「その……後は？」

「そこから、その、口で……でも、こんなに大きくなって……」

「無理しなくていいですよ。その、啜えられる程度で」

「分かりました、ふあ、ああ……」

好子は形良い口を一杯に開け、赤黒くひくつく亀頭を啜えこんだ。息苦しいだろうに喉奥までそのまま呑み込み、体全体を前後させて肉棒への奉仕を始める。

「んぷっ……ンツ……フウツ……」

「は、うあっ……いい、です……!」

「ンンツ……」

和明の言葉に好子は啜えたまま目を細め、体を前後させる速度を気持ち上げてくる。

時折コツコツと亀頭が彼女の喉奥に当たっているのが分かる。その度に好子は眉をひそめるが、それでも口を離さない。

献身的な奉仕に和明は立ったまま好子の栗色のくせつ毛に手を置き、緩やかに彼女が奥まで啜え過ぎないように加減する。

「フツ、ふうっ、んんっ……!」

好子の口の端から涎が溢れ、畳に零れ落ちる。

奉仕を続けながら好子は自分の身体をくねらせ、時折腰をひくつかせる。和明の肉棒への奉仕をすることで彼女自身も感じているのだ。

「んっ、んうっ、じゅるっ……ど、どうですか、篠原さん」

「ええ、気持ちいいです……一度、射精しても、いいですか？」

「……はい。あ、でも」

濡れた唇で尋ねてくる好子に和明が確認する。一度は頷くも、好子は何かに気づいたように言った。

「畳が汚れるといけないので、私の、その、口に……あむっ」

どうやら、床に落ちた自分の涎のことが気になったようだ。再び啜えこむ好子の口の動きに、和明は身を任せることにした。

唾液で滑らかになった好子の口腔内は暑く潤んでいた。好子も和

明の射精を早めようとしているのか、頬をすぼめ、より速い前後で肉棒を刺激してゆく。

蝉時雨が外から聞こえてくる。真夏の昼下がりにエプロン姿の人妻に肉棒を咥えさせているという背徳的な状況は和明の理性を、そしておそらくは好子の理性も溶かしてゆくようだった。

「ふうっ、んっ、んふっ……………」

「ああ……………いいいです、奥さん……………そろそろっ……………」

「ん、あふっ、ンンッ！」

射精感が強まってきた。和明が声を漏らすと、好子は自ら奥まで咥えこんだ。

「うっ、ぐうっ！ で、出るっ！」

「ンンッ！」

思わず和明は好子の頭を押さえ、そのまま彼女の口の中に白濁液を逆らせた。

「あ、う、はあっ……………」

「うぶっ、んっ、んう……………」

苦し気に好子は呻くが、和明の手に抵抗しようとはしなかった。

和明の腰の震えが治まり、最初の射精が完全に終わるのを待ち——
ようやく好子は口から肉棒を開放し、せき込んだ。

「けほっ、けほっ……………」

「す、すみません、奥さん！」

「けほっ……………いい、いいえ、篠原さん。その、口を離したら零れちやいますし、それに……………」

口の端から精液の雫を垂らしつつ、好子は顔を赤らめつつ言った。

「それに？」

「その……………篠原さんのを咥えていたら、私も堪らなく、なって……………」

「……………」

その言葉だけで、半勃ちになっていた和明の肉棒は再びどくんと充血を再開した。

「じゃあ、今度は俺の番ですね」

「え……………いい、いいえ、そんな」

「俺だけ気持ちよくしてもらっては、不公平ですから」

下半身を露出させたまま和明は腰を落とし、好子の身体に触れた。好子は何故か恥じらいつつ、遠慮する素振りを見せる。

和明はそのまま好子の肩に手を置き、ゆつくりとその身体を畳に横たえさせた。エプロンの裾をめくり、パンツの留め具を外す。

「いえ、本当に……あの、一度脱いでから……」

「……？」

身体こそ抵抗を見せないが、やはり好子は自分の行動を止めようとする。彼女も奉仕の最中を感じていて、今はもどかしい筈なのだが。そんな疑問を感じつつ和明は好子のパンツを緩め、彼女の股間へと指を進めた。

「……あれ？」

「……！」

和明の口から声が漏れる。好子は顔を真っ赤にして、横に逸らす。パンツに差し込んだ和明の指は、本来あるはずのショーツの感触を通り越していきなり好子の陰毛に触れた。

「奥さん……下着、着けてないんですか？」

「いえ、その、ええつと……ああっ！」

更に指を奥へ進め、陰唇に届かせる。

「……んん？」

愛液が滲み始めているが、何かおかしい。

指に触れる陰毛は実際湿っているが——微妙にベタついている。

「乾きかけ」とでも言うべきだろうか。

和明はある発想に思い至り、顔をそむけたままの好子に尋ねた。

「これ……奥さん、ひよっとして」

「い、言わないで……」

「俺が戸を叩いた時、オナニーしてました？」

「っ！」

好子の身体が跳ね、息を呑む気配が伝わってくる。

それだけで和明は自分の想像通りの事が起きていたのを確信した。「だから、あんなに時間がかかったんですね」

「ああ……」

観念したように好子が吐息を漏らす。ここまで条件が揃えば、彼女の行動を想像するのは難しくない。

和明は指を更に進め、瞳孔に優しく触れた。

「あ、あんっ！」

「溜まってたんですか？」

「それは、その……夏休みに入って、忙しい日が多くて……ここ一か月、あの人も相手を、してくれなくなってる……」

「その時に、千代さんの話を聞いたんですね」

くちゆくちゆと好子の秘唇を弄りつつ和明は尋ねた。瞳を潤ませつつ、好子が答える。

「は、はい……凄く遅しくて、太くて、固くて、素敵だったって……んっ！」

「それで……欲しくなった？」

「……」

こくん、と好子が頷く。

その仕草を可愛いと思いつつ、和明は好子の頬に触れるとこちらを向かせた。

「そんな事を言われたら、俺も……」

既に股間の肉棒は完全に復活し、鈴口からは新たな先走りを滲ませている。

好子は赤面しつつ、和明と視線を合わせて言った。

「あの……今日、危ない日なので、ゴムだけ着けて、くださいね」

「……奥さんっ！」

「あ、ああっ！」

おそらく、これが彼女なりの「おねだり」なのだろう。

和明は堪らず、好子に覆いかぶさった。

「……むむっ？」

戦車道演習場、丘陵を回り込むIV号戦車の車内。

砲弾を抱えていたくせつ毛が特徴的な少女がふと顔を上げた。車

長席に座るショートカットの少女がそれを気にかける。

「どうしたの、秋山さん？」

「あ、いえ、今、家族の声が聞こえたような……大丈夫です西住殿、気のせいです！」

「ゆかりん、大丈夫？ 疲れてない？」

通信手席の少女もくせつ毛の少女を気にかける。

実際、夏の暑さの中での戦車道は厳しい。特に今日は酷暑と呼んでよい程の気温で彼女に限らず、全員の消耗が一段と激しいようだ。

「うーん……今日は予定を早めた方がいいかな……？」

大洗戦車道隊長、西住みほは額に汗を浮かべつつそう考えた。

俺と???と理髪店（中編）

アスファルトに陽炎が立つ程の暑気の中、蝉時雨が昼下がりの街に喧しく鳴る。無数の蝉たちが求愛行動として鳴いているのだ。

俗説では蝉の寿命は一週間程度と言われているが、実際は一か月弱程度。しかし地中で数年間過ごす事を考えれば、それでも長い寿命とは言えない。その短い成虫としての期間で、蝉たちは交配相手を求め、交わる。

「奥さん……脱がしますね」

「……はい」

そんな蝉時雨が遠くに聞こえる「秋山理髪店」の居間で、二人の男女が身体を重ねていた。

好子の背中を少し浮かせてもらい、和明は彼女の背に手を回してエプロンの結び目を解く。既にパンツは半ば脱がされ、汗を吸った白いシャツはうつつすらと好子の肌を透けさせている。

続いて和明が彼女のパンツを下ろしている内に、好子は自分から少し身を起こしシャツのボタンを外し、後ろに手を回してブラのホックを外した。

「（うお……）」

ブラの拘束から解放された好子の乳房が大きく揺れた。和明は思わず息を呑む。

本来のカップより小さなブラを着けていたのだろうか？ 大きき的にはしほ程ではないにせよ、千代と同程度はあるかもしれない。

「押さえていたんですか、胸？」

「え、ええ……仕事中にお客さんの視線が気になったり、顔剃りとかの時に邪魔だったり、しますから……」

和明の質問に好子は答える。恥ずかしがりながらも律儀に答えてくれるのが何とも愛らしい。

会って間もない女性ではあったが、彼女がこの店の「看板」で、ご近所でも人気であろう事は十分に察する事ができた。彼女のパンツを脱がしきり、和明は好子の胸に触れた。

「んっ……」

ぴくりと好子が反応を示す。

柔らかな乳房だった。ふっくらとした焼きたてのパンのように熱い乳房は和明の指が沈む程に柔らかく、それでいて優しい弾力で和明の手のひらを押し返してくる。

先端で揺れる桜色の乳首は既に固くなっており、彼女の興奮の度合いを如実に示していた。

大きさとしてはやはり千代と同等か、あるいはやや上回るか。柔らかな巨乳の感触を堪能しつつ、和明は好子の胸を鷲掴みにして揉みしだいだ。

「ああんっ！ し、篠原、さん……！」

好子の反応を伺いつつ、もう片方の手を彼女の股間へと向かわせる。湿った陰毛をかき分け、秘唇につぷりと指を差し込む。

「んっああっ！」

「……やっぱり、奥さん可愛いですよ」

「やつ！ そ、そんな事、言わないで下さ……ああっ！」

いやいやをするように好子は赤面しつつ首を横に振る。しかし、彼女の秘所はその言葉とは裏腹に侵入してきた和明の指を強く締め付けた。

「んっ、あっ！ ああんっ！」

和明は彼女の膣内を傷つけないように注意しつつ、ゆっくりと中に入れた指を出し入れする。日々の立ち仕事によるものだろうか？ その締め付けはしほや千代のそれに劣るものではない。

この膣内に挿入すれば、どれだけ気持ちよいだろうか。その期待に和明の肉棒もビクビクと跳ねる。

「ああ……和明、さんのも、こんな……」

「ええ、奥さんの中に挿れたくて、興奮してるんです……あ、ちよつと、待って下さい」

好子の秘所を弄りつつ、和明は傍らに置いていた自分の鞆に手を伸ばした。中を探り、持ってきていたコンドームを取り出す。

「んっ……」

「これを……っ」と

好子の秘所から指を抜き、和明は袋の口を切るとスキンを取り出し、自身の肉棒に被せた。

国内製では太さが足りないために取り寄せた海外製のものだ。元彼女の時にも使ったが結局挿入には至らなかったため、本当の意味で使うのは今日が初めてである。

和明は身体を好子の腰辺りに移した。彼女の脚に手を添えると、自ら挿入しやすいようにしなやかな脚を広げ、濡れた栗色の陰毛に彩られた女性器を露わにする。

その淫らかな様に、和明は思わず声を漏らした。

「……綺麗です」

「そんな……じつと、見ないで……」

震える声で好子が言う。しかしその震えは怒りに依るものでなく、この後来る挿入の快感への期待によるものだ。

和明は自身の肉棒に手を添え、コーラ缶ほどもあるそれを好子の膣孔にあてがった。

「……いきますよっ」

「は……はい」

好子は紅潮しつつも、視線を和明の肉棒から離せないでいる。

和明はそのまま腰を突き出した。僅かな抵抗感を越え、亀頭が、竿が、肉棒全体が好子の膣内に呑み込まれてゆく。

「うっ……」

「えっ、あっ、あああっ!?!」

秘唇を押し広げズブズブと更に奥に進む。焼けそうな程の熱い潤みが肉棒全体を包んでゆく。肉を割け入る快感に和明は呻いたが、好子の刺激はそれ以上のものようだ。口を大きく開き、びくびくと身を震わせている。

やがて、亀頭が最奥までたどり着いた。

「くっ!? な、何だ……これ……うっ!」

亀頭がゴム越しに突起のようなものに触れた。その突起は待ち望んでいたように亀頭を襲とは違う動きで撫で、くすぐる。

急激に射精を促してくる未知の感覚に、和明は思わず腰を止めて堪えた。

「お、奥さん、これっ……っ！」

「ひぐっ！ ひっ、ああああっ！」

これが俗に言う「名器」というものなのだろうか。それを彼女に問いかけようとした瞬間、好子は全身をびくんと跳ねさせた。強烈な締め付けが肉棒を襲う。

「うぐっ！」

「あ、は、ああ……っ！」

「……え？」

そのまま好子はくたりと脱力した。

「……奥さん」

何が起きたのかは、大凡理解できた。好子は和明の肉棒のひと突きで達してしまったのだ。

「え？ あ……」

「その、ひよっとして、もう……？」

「篠原、さん……っ！」

半分呆けているような状態の好子に声をかける。

すると次第に意識が戻ってきたのか、彼女は驚いたような声をあげると恥ずかしそうに顔を手で隠した。

「す、すみません、私……ひうっ！」

腰を引き、再度突き入れる。それだけで好子の身体は再び跳ねる。

「いえ、そんな……でも、何で……」

「こ、こんな奥まで、届いた事が、なくて……んんっ！ いちばん奥、突かれたら、我慢が……っ！」

「……っ！」

和明は無言で再度突いた。

「んはっ!? ま、待って下さい、篠原さん！ 私、まだ……ああんっ！」
絶頂の余韻からまだ抜けきっていない好子が制止を求める。

しかし、彼女の膣内は早くも更なる快感を求め、肉棒を締め付けてくる。奥の突起は亀頭を刺激し、無数の襞は竿を絞り上げるように包

む。

「ん、ひいつ！ あんっ！ ああっ！」

「ここが、いいんですねっ！ 奥、さんっ！」

次第に腰の動きが大きくなってゆく。より深く、好子の膣内を荒々しく擦りながら奥まで突き込む。

快感が強まり、顔を隠せなくなってきた好子は堪らず和明の背に手を回した。その表情は快感に蕩け、半開きの口からは絶えず喘ぎが漏れ続ける。

「は、はいっ！ こんなっ、はじ、めてっ！ あひっ、し、篠原、さんっ！ 篠原さんっ！ 凄い、凄いいっ！」

「もつと、もつと乱れてください、奥さんっ！ ぐ、うっ！」

和明の心の中で、どす黒い感情が湧きあがってきていた。

つい先ほどまで朗らかな笑みを浮かべていた人妻が、今こうして自分の肉棒に完全に屈服し、激しく悶えている。

その事実を和明に堪らない支配感を覚えさせ、同時にある欲求を芽生えさせた。

「(ヤバいな、これ……！)」

この女性を、もつと乱れさせたい。自分の肉棒で狂わせたい。自分の虜にさせたい。

——奪いたい。この人妻の理性を、肉体を、心を、全てを奪い、自分の所有物にしたい！

その欲望は酷く背徳的で、身勝手に、爛れている。

しかしそれ故に抗いがたく、和明の理性を押し流してゆく。

「……………う、おおっ！」

「ふあっ！ し、篠原さんっ！ いいっ、いいっ！」

獣めいた唸り声と共に、和明は好子の脚を持つと膝立ちの姿勢になり、激しく腰を打ち付け始めた。互いの肉が打ち合い、結合部から愛液の飛沫が飛ぶほどの動き。

「あ、ああんっ！ し、篠原、さんっ！ そんな、され、たらっ！」

「されたら!? されたら、どう、なりますかっ!?!」
「ひうっ! か、変わっちゃい、ますっ! 私なの、膣内なっ! 篠原さん
の、太いの、形にっ! 変えられ、てえっ! お父さんのっ、お父
さんの形! 忘れ、ちやうっ!」
「なって、くださいっ! 俺の、俺、専用の形にっ!」
「ひ、あ、あああっ!」

和明は夢中で腰を振った。言葉通り、好子の膣の形を自分のものとするように。

そんな激しい抽送を、下半身を固定された好子は近所に聞こえそう
な程の嬌声をあげつつ喜々として受け入れてゆく。

「う、ぐうっ! で、出ますっ、奥さん、出るっ!」

「あひっ! あ、あ、あああっ!」

「うああっ!」

叫びと共に和明は達した。ゴムの中に精液が吐き出され、逆流して
くるのが分かる。

同時に好子も絶頂に達したようだった。半ば意識が飛んだのか、身
体を張り詰めさせたかと思うと肉棒を挿入されたまま横たわる。

「んっ……………」

「あう、ん、ああ……………」

和明は自身の肉棒を引き抜いた。愛液に塗れたコンドームの先端
は水風船のように膨れ上がり、吐き出されたばかりの白濁液を湛えて
いる。それを肉棒から抜き、口元を軽く結ぶ。

「はあっ……………はあっ……………」

好子が大きく呼吸する度に、豊かな胸が上下する。肉棒が引き抜か
れた秘孔はぽっくりと開き、愛液を奥から滲ませる。

その秘唇のひくつきを見ているだけで和明の肉棒は再びむくりと
起き上がり、竿に血管を浮かび上がらせた。

「ええっ……………」

和明は自身の鞆を見た。ゴムはまだ三つ残っている。その内の一
つを取り、口を切る。

それを肉棒に付け直し、和明は再度好子の孔に擦り付けた。

「あ……」

和明の行動を理解し、好子の口元から吐息が漏れる。その瞳に光るのは、更なる行為への期待だ。

「奥さん……ここでも止めますか？」

無論、和明も止めたくはない。ただ——それを言わせたいのだ。

好子にもそれは伝わったのだろう。彼女は快感に蕩けたままの、淫蕩な表情で言った。

「や……やめないで。篠原さんの、その……太いので、おばさんの中、もつと、掻き回して、ください……！」

「……おばさんじゃ、ないですよ。奥さんは本当に、可愛いです……う、く、くうっ！」

「あ、あ、あはあっ！ 来てる、また、奥っ！」

再びの挿入に、好子は和明の背に手を回して嬌声をあげた。

「う……ん……」

陽炎が立つほどの熱気の中、秋山優花里は少しふらつきつつ帰路に就いていた。

この暑気の中での夕方までの演習は体調不良に繋がると判断した西住みほの決定で、今日の演習は半ドンとなったのが——どうも調子がおかしい。

「風邪でしょうか……でも、咳も鼻水も、寒気も無いですし、何でしょう……？」

何とか体の奥によく分からない熱源があり、それが身体を火照らせているような感じだ。

あるいはみほの心配していたように暑気あたりかもしれない。それなら早々に帰宅し、冷えた麦茶でもたっぷり飲んで横になれば治るだろう。

来るエキシビジョンマッチではあの強敵、プラウダ高校と聖グロの連合相手に戦わねばならない。こんなところで体調を崩してはいられないのだ。

「うん、そうです！ 頑張らなくては……！」

優花里はそう自分に喝を入れつつ歩く。やがてその先に、見慣れた自宅の看板が見えてきた。

この時間は中休み。父は町内会の集まりに行くと言っていたから、母も今頃は昼寝している頃であろう。

自宅の前に着き、優花里は制服のポケットから出した鍵を差し込んだ。気持ちゆっくりと回し、鍵を戻す。

「(起こさないように……)」

母の好子は最近、随分と疲れが溜まっているようだった。ぼーっとして時折ため息をつく様を優花里も見ている。それだけに仕事の合間のひと時を邪魔したくはなかった。

音をたてないようにノブを回し、静かにドアを開ける。少しの隙間を作り、そこに滑り込む。後ろ手で再びドアを戻し、静かに閉める。

「……おや？」

家の奥から母の声が聞こえる。だが——どうも様子がおかしい。怒声だろうか？ 優花里の知る中で、好子がそんな激しく感情を見せる事は無かったが——？

「何でしょうか……？」

優花里は足音を忍ばせつつ、座間へ上がった。

——帰宅した秋山優花里が好子の声に疑問を抱く、少し前。

「あひつ、だ、駄目っ！ 和明さんっ、私、またっ！ ああんっ！」

「う、ぐ、うあっ！」

「ああああっ！」

いつの間にか和明の事を名前前で呼ぶようになり、もう何度目か分からない絶頂を迎えた好子の一番奥まで肉棒を突き入れた和明は4度目の射精を放った。不思議な程に精力が漲り、もっと好子を汚したいという気持ちはまるで治まらない。

「あは、あ、はあ……」

呆けたような表情で絶頂の余韻に浸る好子の膣内から肉棒を引き抜き、ゴムを取り、床が精液で汚れないように——既に汗や愛液や先走りで、十分に畳は汚れてしまっているが——結んで部屋の隅に置

く。

「()まで……ですね」

和明としても名残惜しかったが、今のでコンドームは使い切った。ほぼ快樂に溺れ切っていた和明だったが、危険日と言っている相手にゴム無し挿入する事を我慢する程度の理性は辛うじて残っていた。

「え……？」

荒い吐息の中、好子は戸惑い混じりの声で問いかけてくる。和明は首を振った。

「その……ゴム、使い切っちゃったんで。これ以上は」

「そ、それなら、家にあるお父さんので……」

「俺の、市販のじゃ入らないんです」

「……」

それに、随分と時間も経っている。太陽も西に傾いてきた。そろそろお暇しなくては、彼女の娘さんや旦那さんも帰ってくるかもしれない。

和明はそう思い、シャワーを借りてから退出しようと腰を上げた。

「……和明さんっ！」

「え？」

仰向けになっていた好子が驚くほどの速さで和明の腰にしがみついていた。彼女の動きに反応できず思わず硬直した和明の股間に好子は躊躇せず顔を近づけ、半勃起状態の肉棒を咥えこんだ。

「はっ、はむっ、ンツ、じゅるっ……！」

「ちよ、お、奥さん!? うあっ！」

「んんっ、ちゅっ、んはっ……！」

止める間もなく好子は和明の肉棒を舐め、吸い、しゃぶる。尿道に残った精液を吸引し、嚙下するかのような貪欲なフェラ。否、それはフェラチオと言うよりは捕食行為に近かった。違うのは歯を立てているか、いないか、その程度だ。

「んぱっ、ふうっ、ちゅうう……！」

「く、くうっ！ そんな、吸ったらっ！」

萎みかけていた和明の肉棒は好子の情欲に反応したかのように彼

女の口の中で膨れ上がり、やがて完全に勃起した。

好子は肉棒の固さが十分になったのを唇で確かめると、口を離れた。唾液が亀頭と唇の間に淫らな橋をかける。

「はあっ……奥、さん……」

「……お願い」

そう呟くと好子は四つん這いのまま和明に尻を向け、腰を突き上げた。

「お願い、します……和明さん、もっと、して……!」

「い、いや、『して』って言っても、もうゴムが」

戸惑う和明に、好子は顔を向けつつ小声で言った。

「……から」

「え?」

「ゴム無しで、いい、から……!」

「……!」

どくん、と和明の心臓が大きく脈動した。彼女の言葉の意味が分からないほど、和明は鈍感ではない。

喉を鳴らし、和明は言った。

「奥さん……言ってる意味、分かってますか?」

「……初めて、だったんです……和明さんので、あんな、奥のところまで擦られて、挟られて……まだ、そこが、切ないまま、なんです……!」

そう言いつつ、好子は淫らに腰を振った。むっちりとした尻肉が和明の眼前で揺れ、栗色の陰毛から愛液が滴り落ちる。

「お願い……和明さんの、ち、ちんぽで、私の奥まで、もっと、挟ってください……孕んでも、いい、からっ……!」

泣きそうな顔で尻をゆすり、挿入を懇願する美しい人妻。その姿は和明の僅かに残っていた理性を完全に吹き飛ばした。

治まりかけていた支配感と攻撃性が抑えようもなく湧き出てくる。声にもならない呻きと共に和明は好子の尻を荒々しく掴んだ。指の跡が残りそうな程の強さにも関わらず、好子は恍惚の吐息を漏らす。

「ああ……あ、ありがとう、ごい、ます……んっ!」

「……知りませんよ、どうなっても！」

赤黒い亀頭を生のまま好子の尻に擦り付ける。それだけで我慢できないのか、まるで挿入をせがむように陰唇はひくつき、愛液を照り光らせる。

くちくちと亀頭を愛液で湿らせ、和明は狙いを定めると遠慮なく一気に奥まで突き入れた。

「あひっ！ い、いいっ！ これっ、これ、いいのっ！」

「そんなにっ！ これがっ！ 欲しかったんですかっ!?!」

「ほしっ！ 欲しかった、のっ！ 和明さんのじゃ、ないとっ！ 届かない、のおっ！」

くせのある髪を振り乱し、好子は夢中で腰を前後に振り始めた。彼女の動きに合わせて和明も、一番結合が深くなるように腰を使う。

「はっ、はひっ！ ひっ、ひうっ！」

「奥、さんっ！ なんて声、出してるん、ですかっ！」

「ふああっ！ あ、はひいっ！」

「ぐ、ううっ！ 凄く、締まるっ……うおおっ！」

もはやそれは、二匹の獣の支配だった。上体を支えられずぺたりと上半身を伏せ、尻だけを持ち上げたような状態の好子を上から組み伏せるように和明は彼女の尻を抱え、まるで杭を打ち込むかのように巨根を抜いては突き込んでゆく。

「あ、あ、あひいっ！ かずあき、さんっ！ 凄いつ、ちんぽっ、凄いつ！」

和明が理性を捨てたように、既に好子にも理性は残っていないようだった。会った当初の落ち着いた様子からは想像もつかない淫らな言葉を発しつつ、顔を汗と涙と涎で汚し、舌を出して悶える様は「女性」ではなく「雌」だった。

自分の中の衝動を抑えようともせず、和明は肉付きよい好子の尻を手でたたいた。

「んひいっ！」

「こんなに俺のを欲しがって、よく『本気にしないで』とか、言えました、ねっ！」

「ご、ごめん、らしいい！ 本当は、本当は最初から、和明さんを見てっ、うずうず、して、ひいつ！ まし、たあっ！」

更に尻を叩く。好子の尻が赤くなるにつれ、膣内は愛液でより滑らかになり、同時に締め付けも強くなってゆく。彼女は感じているのだ。

ぞくぞくと和明の身体に嗜虐的な快感が昇ってくる。それは好子の膣からの快感と合わさり、強烈な射精感となって肉棒を昇ってきた。

「だし、ますよっ！ 奥さんっ！」

「らしっ！ 出し、てっ！ 和明さんのっ、熱いの、でっ！ はらっ、孕ませて、くださいいっ！」

その時、どさりという音が襖の向こうから響いた。

「っ!？」

射精寸前だった和明は思わず腰の動きを止め、様子を伺った。

「あ……ああ……」

一方、挿入されたままの好子は音の正体を察したようだった。力の入らない手を伸ばし、襖を横にずらす。

「え、あ、え……？ お母……さん？」

大洗女子学園の制服を着た、好子に似たくせつ毛の少女が呆然と立っている。

「(お母さん……って事は、この子、例の大洗戦車道の……!?)」

和明は自分の体温が急速に冷えてゆくのが分かった。戦車道の演習は夕方までではなかったのか？

だが、焦り慌てて好子から引き抜こうとした肉棒は好子の締め付けによって引き留められた。

「ああ……和明さん、このまま、構わず……んんっ！」

「いや、奥さん、そんな……!？」

「お母さん……え？ え？」

どうやら眼前の少女はパニックに陥っているようだ。無理もないだろう。帰宅してみれば自分の母親が知らない男性と眼前でセック

スしているのだ。現実のものとも思えまい。

しかし、そんな彼女に好子は汗塗れの顔で微笑んで言った。

「ごめんね、優花里……お、お母さん、この人と、大事な、んひいつ！
こ、事を、してるの……！」

「だ……誰、ですか？」

「お母さんの、友達が、紹介、ああんっ！ して、くれた人よ……凄く、固くて、太くてえ、す、素敵な……あ、ひいつ！」

へたへたと少女は床に座り込んだ。腰が抜けたのかもしれない。

そんな彼女の様子に構わず、好子は言葉を続ける。

「もう一つ、ごめんね、優花里……んはっ！ お、お母さん、優花里の弟か、妹、産んじやう、んんっ！ か、かも……でも、いい、わよね？ 優花里、一緒に戦車に乗る、妹、欲しがってた、からあ……あ、あ、あああっ！」

「ぐ、ぐうっ！」

強烈な締め付けに和明は我慢できず、子宮に精液を吐き出す。

少女の眼前で、結合部から溢れた精液がボトボトと床に落ちた。

俺と???と理髪店（後編）

——最初に感じたのは、香ばしい匂いだった。

「ん……」

嗅ぎ慣れた、食欲を誘う匂い。

何かはすぐに分かった。母がハンバーグを焼いている時の匂いだ。今晚の夕食の準備をしているのだろう。

——母が？

「お、お母さん!？」

「おお、やっと起きたか！ 母さん、優花里が起きたよ！」

布団を飛ばす勢いで跳ね起きた秋山優花里の傍らに座っていた男性が、台所でフライパンを手にしていた好子に声をかける。

「あ、あれ？ お父……さん？」

状況を把握できず、優花里は周囲を見回した。

そこは見慣れた自宅の居間だった。その居間の隅に敷かれた布団で、自分は寝ていたようだ。身体を見下ろすと、制服ではなくパジャマに着替えさせられている。

「え？ え？」

「どうした優花里、まだ寝ぼけてるのか？」

傍らの男性——眼鏡とパンチパーマが特徴の自分の父、秋山淳五郎が自分を安心させるようにポンポンと頭に触れてきた。

「びっくりしたわよ、優花里。汗だくで帰ってきたと思ったらそのまま倒れるように眠っちゃうんだもの。母さん、熱中症かと心配したんだから」

火を止め、エプロン姿の好子が居間に入ってきた。こちらを気遣いつつ優しく語りかけてくる様は、いつもの母だ。

『はひっ、ふひいっ！ 和明さんのちんぽ、凄いいっ！』

「!？」

見知らぬ男性と裸で絡み合い、想像もできないような痴態を晒す母親の姿がフラッシュバックする。優花里は母を見上げつつ尋ねた。

「お、お母さん！ あの人は!？」

「……『あの人』？」

好子は小首を傾げた。淳五郎が逆に問い返す。

『あの人』って……誰も居ないぞ？ 父さん、母さんから優花里の調子が悪いって電話を受けて五分も経たずに帰ってきたけど、居たのは母さんと優花里だけだった」

「……え？」

好子は身をかがめ、呆然とする優花里を優しく抱くと背中をあやすように叩いた。

「何だかうなされていたもの……嫌な夢を見たのね。もうちよつとで夕飯も出来上がるから、食べて忘れましょ」

「ゆ……夢？」

優花里は自分の見たものの痕跡を居間を見回して探した。男性の姿も、濡れた畳の跡も、どろりとした液体が入ったゴム袋のようなものも——何も無い。

「そんな……でも、確かに私は……」

何かにすぎるように優花里は胸に手をやり——

「あ、あれ？」

——自分の身体の調子が戻っていることに気付いた。胸の奥で熱く疼いていた「何か」が完全に無くなっている。眠気を脱した頭はすつきりとしており、今日の演習中に感じていた動悸や目まいも無い。

「まさか……」

本当に、体調不良が見せた夢だったのか？

「ほら、着替えて夕食にしましょ？ お母さんもお父さんも、優花里が起きるのを待っていたからお腹ペコペコなの」

好子はそう言うと、優花里に微笑んだ。

——秋山優花里が目を覚ます数時間前。

「ああ……で、出てるう……和明、さんの、溢れてっ……！」

「ぐ、うう……！」

搾り取るような好子の膺の動きに和明は呻いた。既に何度も射精

したというのに、自分でも驚くほどの量が彼女の子宮へと注がれてゆく。

「お、奥、さん……ちよつと、緩めて……!」

「ンンッ! そ、そんな事言つても、和明さんの精液、欲しくて、んはっ、か、勝手に、は、はへえ……!」

上体を伏せるような姿勢で舌を出し、蕩け切った表情で好子は和明の精液を受け止める。

和明の腰が震える度にどくどくと放たれる精液は彼女の膣内から溢れ、結合部からボタボタと零れ落ちる。

「あ……あ……」

その眼前、開けられた襖の向こうで腰を抜かした優花里が呆然とこちらを見ていた。

「うっ……はあっ……!」

ようやく射精が治まり、同時に思考力が戻ってくる。和明は考えた。

「(ど、どうする……!?)」

夫が外出中の人妻に全裸で絡み合い、娘の眼前で中出し。言い訳不可能にも程がある状況だ。

このまま逃げる? 全裸で、しかも好子を残して? 論外だ。何より狭いコミュニティである学園艦の町内で、余所者の自分が逃げおおせられるとは思えない。

では、優花里を介抱して一切合切を打ち明けて土下座する? これも論外だ。状況はもはや土下座ひとつで収まるものではない。

何より、仮にこの中出しで好子が妊娠したとしたら間違いなく責任を問われる。そして一介の大学生である和明に子供を育てるような財力も甲斐性も有りはしない。人妻を妊娠させたとなれば実家からも勘当、大学も辞めなければならぬかもしれない。

「(あれ、これ……俺、詰んでる?)」

「んっ……」

萎えた肉棒が好子の中から自然と抜け落ちる。精液と愛液が混じった淫液に照り光る肉棒は、和明の懊悩を無視してビクビクと射精

の余韻を味わっている。

「ん、ふうっ……和明さん、その、いいかしら？」

むくりと身体を起こし、好子が言った。

「え？」

「お願いのだけど……優花里を気絶するまで犯してあげて」

「なっ……!?!」

余りにも無茶苦茶な彼女の提案に和明は絶句した。この状況に自棄になったのか？ あるいはまだ肉欲に溺れて、正常な判断が出来ないでいるのか？

そんな和明の動揺が伝わったのだろう。汗に濡れる髪をかき上げつつ好子は更に言った。

「別に自棄になってる訳ではないわ。それが、和明さんと私がこの場を切り抜ける唯一の方法……だと思う」

「『思う』って……」

好子の態度はどこまでも落ち着いていた。この状況で窮地にあるのは和明以上に彼女だろうに、随分と肝が据わっている。かつてしほや千代と並んで戦車道を修めていただけはあるということか。

「時間が無いわ。今の状況だけど……」

そして好子は手短に自分の提案の意味を説明した。

最初は驚愕した表情で話を聞いていた和明も、やがてその内容を聞くにつれ落ち着きを取り戻し、彼女の話に聞き入った。

「……そういう事よ」

「確かに……それしか無いですね」

和明は迷いはしたが、彼女の言葉に頷いた。どのみち他の選択肢は人生のバッドエンドに繋がっている。

——となれば、取るべき行動はひとつだ。

「お願いね。和明さんなら出来ると思うわ」

そう言うと好子は優花里に視線を向けた。未だに身体に力が入らないのか、ガタガタと震えつつ優花里は股の間から精液を溢れさせたままの実母を見た。

「お母、さん……」

「大丈夫よ、優花里。この人が優花里の事もちゃんと気持ちよくしてあげるから」

好子はそう言いつつ優花里に微笑んだ。その微笑みは娘に対する愛情が伝わる、優しいもので——それ故に和明はどこか寒気を覚えた。

とはいえ、そういう話になったのであれば和明も棒立ちではられない。襖を開けたまま廊下に出ると、和明は優花里の前で屈んだ。

「えっと、その……なんて言っていないか。まあ、よろしく」

「ひつ、や、やめ……!」

逃げようと優花里は何とか身をずり下がり、退こうとする。それはそうだろう。眼前で母親を犯していた初対面の男が、今度は自分の方に迫ってきているのだ。恐怖を感じるなど言うのが無理な話である。

和明は彼女を引き留めようと、その二の腕を掴んだ。

「ん?」

その時、和明は激しい違和感を覚えた。彼女の身体が、酷く熱い。通常、緊張や恐怖に陥った時、人間の体温は低下する。血管が収縮して血の巡りが緩やかになるからだ。しかし今の由花里の身体は、真逆に熱く火照っている。

「奥さん……えっと、優花里さんって、風邪引いてました?」

「え? いいえ、家を出るときはそんな風でも無かったけど……」

和明の問いかけに、好子は全裸のまま畳を拭きつつ答える。

だとすれば、これは——

「……まさか」

その時、和明はある可能性に思い至った。改めて優花里の顔を見る。

その表情こそ恐怖が浮かんでいるが、瞳は潤み、頬は紅潮していた。そして、それが如何なる状態かを和明は知っている。

「その、優花里さん。今、体が熱くて、中に焼けるような塊を感じてたりしないか?」

「え?」

「大事な事なんだ。どうだ?」

全裸の男に腕を掴まれた状態で大凡する会話ではない。しかし、和明の真剣な様子につられてか優花里は律儀に答えた。

「は……はい」

「……やっぱりか」

以前、しほが自宅に泊まった時の事を思い出す。あの時に「戦車道の優秀な選手ほど抱える欲求不満」について感覚や状態について聞いたが——おそらくは、それだ。

「ちよつと、ごめんな」

「は、はい？ やつ、ちよ……」

一応の詫びを入れてから、和明はその手を優花里のスカートの中に差し入れた。驚きつつ優花里は脚を閉じようとするが、力が入らないようだ。

やがて和明の指は優花里のスカートの中、ショーツのステッチの部分に触れた。にちやりとした、湿った布地の感触が伝わってくる。尿にしては、粘り気が強い。

「んっ、あ、ああ……！」

「……濡らしてたんだな。俺と、奥さんのを見て」

「っ!」

びくんと優花里の体が跳ねる。

「な……」

「ん？」

「なんなんですか、これえ……！」

優花里の潤んでいた瞳から涙が零れる。

無理もない。本人からしてみれば親の浮気現場で発情してしまった事になる。勝手知ったるはずの自分の身体がそんな反応を示したのだ。泣き出したくもなるだろう。

「何で、何でお母さんがそんな風になつてて、私、一体……！」

「……大丈夫。君のそれは、治せるやつだ」

「な、何を、ていうか貴方は……!」

問いかけようとした優花里の声が途中で途切れる。立ち上がった和明が、おもむろに彼女の眼前に半勃起状態の肉棒を突きつけたから

だ。

「ひっ!? は、離してください……」

「……………」

和明は応えない。自分の今までの経験を信じ、彼女の顔面に触れれば十分に近づける。

「……………え?」

優花里の口から戸惑いの声が漏れる。

彼女は顔を背けるどころかスンスンと鼻を鳴らし、肉棒から漂うむせかえるような淫臭を嗅ぎ、身を震わせた。

「そんな、な、何で……………?」

優花里が激しく混乱しているのが分かる。自覚なく、体調不良を起こすまでに鬱積した自身の欲求不満が和明の肉棒によって呼び起こされ、発散せんと反応しているのだ。

彼女からしてみれば、自分の思考と正反対の行動を取ってしまったている、まさしく夢の中のような状態だろう。

「んっ……………」

和明はそのまま、優花里の鼻先に亀頭を押し当てた。粘液が彼女の小鼻を濡らす。

「ふはっ!? はっ、あ、ああ……」

ちよつと驚いた反応を見せた優花里だったが、やがて吊り上がっていた目がとろんと下がり、濡れた舌が自然と垂れてきた。

「嘘……………わらひ、何で……………!?!」

「大丈夫。それは優花里さんの身体が自分を助けようとしてるんだ。抵抗せず、それに身を任せてくれ」

できるだけ優しく、優花里に語りかける。ある意味、彼女の状態がこんな様子だったのは幸いだ。素の状態だったなら、嫌がる相手無理矢理に犯す形になっていただろう。

「優花里さん……………これ、欲しくなってきたるだろ?」

「っ!? そ、そんな事、ないです……………!」

「……………そっか」

和明の問いかけに、口を半開きにしながら優花里は否定する。

その言葉に対して、和明はあっさりと言を引いた。

「あ……」

不意を突かれたのか、優花里は離れてゆく肉棒を顔で追った。その動きを予測していた和明は途中で腰を止める。

「ンツ!? あ、ああっ……」

必然的に優花里の顔は肉棒と正面衝突した。少女らしい瑞々しい頬にぬるりと赤黒い亀頭が擦りつけられる。

「その、俺も詳しくは知らないんだけど……その症状って、我慢するほど良くないらしい」

「……」

優花里は肉棒から目が離せないでいる。

「……我慢しないでいいのよ、優花里」

ふと、傍らから優しい声が届く。

和明が視線を落としてみれば、居間から出てきた好子が腰を落とし、和明の肉棒に同様に顔を寄せていた。

「お、奥さん!?!」

「ごめんなさい、和明さん。うちの子があと一步を踏み出せないみたいで……優花里、安心して。この人は貴女を痛くしたりしないわ。だから……あむっ」

「ううっ!」

まるで子供をあやすように好子は言うのと、眼前で屹立する和明の肉棒の竿の部分を笛を吹くように啞えた。びくりと肉棒が反応を示す。

「さ、優花里もやってみて」

「お母、さん……」

和明と好子のまぐわいを見た直後の優花里であれば、母の言葉にも従えなかったろう。しかし彼女の昂ぶりを押さえていた栓は既に外れ掛けている。今なら――

「んっ、ちゅ、んはっ……こ、こう、ですか?」

優花里は好子が啞えている反対側から、和明の肉棒にキスをした。最初はおおずといった感じだったが、二度目はより強く、三度目はより大胆になってゆく。

「はふっ、んっ、ちゅうう……ンンッ、はっ、れろっ……」

「ふふっ、やっぱり欲しかったのね……どう、優花里？ 初めての男の人のちんぽの味は？」

「あふっ……お、お母さん、変……です。こんなの、美味しい訳がないのに、んちゅ……口が、勝手に……止まら、なくって……！」

「いいのよ。優花里の本心が、そうしたがっているんだから……ちゅっ、じゅるっ……」

「うっ、くううっ！」

肉棒を左右から母娘にしゃぶられるという状況に、和明の欲情は否応なしに昂ぶってゆく。

右からの好子の手慣れた舌の動きも、左からの拙くも熱心に舐めてくる優花里の舌の動きも、どちらも堪らないものだった。勃起しきつた肉棒は血管を浮かべ、赤黒い亀頭からは先走りが滲む。

「優花里、今度は先の方を啜えてみて。母さんはこっちをするから……」

「ふあ、ふあい……あむっ、んむう……！」

「ふふっ、すっかり素直になってくれたわね、優花里……じゅるっ、ン、ンンッ……」

「ああ……いい、いいです、二人、ともっ……！」

好子に言われるがままに優花里は口を一杯に開けて、和明の亀頭を啜えた。制服姿のまま和明に奉仕する様は非常に倒錯的だ。

一方の好子は伏せるように身体を下げつつ顔を上げ、和明の竿の根元の袋を優しく啜えた。まるで大粒のナッツを転がすかのように口腔内で舐められ、舌先で踊らせる。今までのフェラとは異なる未知の刺激に、和明は思わず呻いた。

「はふっ、ンッ、んんっ……こ、これで、いいんでしょうか……？」

「あ、ああ……いいよ、優花里、さん。堪らない……」

「あ……ありがとうございます……ちゅ、あむっ……」

ただたとしくも優花里は和明の亀頭を舐め、具合を尋ねてきた。よくよく律儀というか真面目な娘だ。

和明が素直に感想を言うと、優花里は少し嬉しそうに礼を言って再

び奉仕を再開する。

「本当にいい子ね、優花里……じゅるっ、ちゅうう……」

「うあっ!? お、奥さん、そんな、吸っちゃー!」

そんな娘の様子に目を細めつつ、好子は和明の袋を啜えたまま強く吸った。

和明の腰がびくびくと震える。母娘の同時フェラで十分に高まっていたところに、この連携攻撃は強力すぎた。

「ま、まずい、です! このままだと、射精るっ……!」

「……! んぱっ……優花里、ちよつと口を止めて」

「ふあ、ふあい……」

和明の絶頂が近いのを察した好子が口を止め、優花里を制する。

「優花里、ちよつと服を脱ぎましょう」

「は……はい……」

口の端を唾液と先走りで汚したまま優花里は母の言葉に従順に従い、彼女が脱がせるに任せる。和明は射精感が治まるのを待つ間にも、瞬く間に好子は由花里の下着までを脱がし切った。

「……凄いですね」

「大したことはありませんよ。この子の着替えなんて、何千回やったか分かりませんもの。さ、和明さん。優花里をこのまま気持ちよくしてあげてください」

「……あの、それなんですけど」

優花里へと促す好子に、和明は言った。

「どうしたの?」

「その……優花里さんの処女を奪うのは、無しにしてもいいですか?」
浮気に加えて準強姦罪——今は準強制性交罪だったか——までしてしまっている現状、処女を奪うどうこうで踏みとどまるのも奇妙な話ではある。

しかし欲求不満のたがが外れ、半ば意識が飛んでいる今の優花里の「初めて」を自分が奪うのは余りに卑怯に思えた。

その言葉を受けた好子は少し沈黙し、「困ったひとね」とでも言うように苦笑した。

「それはいいけれど……挿入せずに、優花里をどうするの？」

「そこは、まあ……頑張ります」

「……ふふっ」

抽象的にも程がある和明の返事に、好子は思わず吹き出す。

「いいわ。それじゃ、こうしましょう」

そう言うのと好子は廊下の床板に自身を横たえさせた。

「さ、優花里。私の上に……」

「え？ は、はい……」

仰向けに寝そべる好子の身体の上に重なるように、優花里が横になった。脚を絡め合い、位置を調節する。

「優花里、ンッ！、そ、そうよ……その辺りで、もっと腰を前に出す感じ……」

「んはっ……は、はい……こう、でしょうか……ああっ！」

「んっ……和明くん、準備、できたわ……この間で、思い切り擦って……」

「……！」

身体を重ねる母娘の脚が広げられ、濡れた秘所が密着した様が露わになる。濃い桜色の好子の秘唇と、未だ誰も侵入を許していない優花里の桃色の秘唇。それぞれが愛液を滲ませ、ひくつきつつ和明の肉棒が与えてくれるであろう快感を待ち望んでいる。

その淫らな様を見るだけで和明の肉棒は臍まで反り返った。

「わ。分かりました……いききます」

和明のサイズであれば、少し身を引いていても十分に擦る事ができる。彼女らがあまり無理な姿勢にならないよう和明は正座のように足を揃えたまま肉棒の位置を直し、重なった二人の秘唇に亀頭を押し当てた。

「ふあっ！ あ、熱い……！」

「これが男の人よ……優花里も、分かるようになるわ……んんっ！」

「く、ううっ！」

そのまま腰を突き出し、和明の肉棒は熱い滑りに挟まれた。

膣内のような締め付けこそ無いが上下から押し当てられる濡れた

女陰の感触と愛液の熱さは十分に刺激的で、腰を突き出せば二人の突起したクリトリスの感触が亀頭をくすぐる。

何より自分の肉棒の感触に眼下で悶える好子と優花里の美しい母娘の姿は、それだけで和明の中に堪らない支配感を覚えさせる。

しかし、今回は先ほどのように我を忘れて行うセックスではいけない。好子の提案通りに優花里を意識が飛ぶまで絶頂させねばならないのだ。

「ンンッ！ ひうっ！ 熱くて、固いのが、擦れてっ…………！」

「いいのよ、優花里…………もつと押し付けて…………ん、ちゅっ…………」

「ふあ、ああ…………お母、さん…………ちゅ、れろっ…………」

悶える優花里と愛おしそうに見つつ、好子は優花里にキスをした。突き出された好子の舌と優花里の舌が絡み合う。

和明はできるだけ優花里の側に強く擦れるように腰を振る。にちやにちやという水音が結合部から響き、蝉時雨が聞こえる廊下の床板がギンギシと鳴った。

「あ、ひっ、ひうっ！」

優花里の身体が細かく震え始めた。和明と好子のセックスを見ていた時点で既に昂り、それを限界まで理性で抑えていたのだ。その反動で絶頂が近いのだろう。

和明は腰の動きに少し振りを加え、亀頭でクリトリスを擦った。

「ふああ！ お、お母さんっ！ 何か、なにか来ますうっ！」

「いい子ね、優花里…………それが『イク』って事なの、あんっ、そのままっ、イキ、なさいっ！ お母さんが、見てて、あげるからっ…………！」

「ううっ…………俺も、そろそろっ…………！」

再び和明の射精感も高まってきた。一気に優花里を絶頂に導こうと、腰の動きを速める。

「ひっ！ んっ、あ、ああああっ！」

「ぐっ、うあっ！」

「…………っ！」

優花里は全身を激しく震わせ、そのまま好子の胸に顔をうずめるようにして脱力した。同時に和明の亀頭が膨れ上がり、二人の身体に挟

まれたまま精液を迸らせる。

たっぷり十数秒は続いた射精を終え、和明は大きく息をついた。

「ふうっ、はあっ……」

「……ありがとう、和明さん」

優花里の頭を撫でつつ好子が言った。

「……すう」

汗と精液に塗れた優花里が寝息をたてる。どうやら、今の絶頂で絶対に近い眠りに落ちたようだ。

そのままの姿勢で好子は言った。

「和明さん。今のうちに浴室のタオルを濡らして身体を拭いて、そのまま玄関から出て行ってください。裏口からだ逆に怪しまれるわ」

「よ、好子さんは？」

「大丈夫、後始末は私がしておくから」

優花里を起こさないようにゆっくりと身体を起こし、彼女を居間に寝かし直し好子は言葉が続けた。

『『ここには私と優花里以外居なかった』って事にするのにお父さんにも電話しないといけないわ。だから、急いで』

「……すみません」

詫びを言う和明に、好子は最後に言った。

「――」

「……うーん」

「どうした優花里？ まだ食欲が沸かないのか？」

「へ？ い、いいえ！」

卓袱台を囲む秋山家の夕食。本日はハンバーグにポテトサラダ、味噌汁といった組み合わせだ。

脂ののったハンバーグに箸を入れつつ、優花里は考えていた。

母は夢だと言った。父は自分と母以外は居なかったと言っている。言われてみれば、自分の身体が自分のものでなかったような感覚は確かに夢の中のそれだ。記憶もあやふやで、男の顔も十分に思い出せない。

「……………」

しかし、アレは夢で片付けるには余りに生々しいものだった。乱れる母の姿も、我を忘れて男性の怒張を舐めしゃぶる自分自身も。

優花里はご飯を食べつつ好子に視線を向けた。

「優花里、おかわり?」

いつもの笑顔で聞いてくる母。優花里はご飯を呑み込むと口を開いた。

「お母さん、あ、あの……………」

「どうしたの?」

尋ねてくる母に、優花里は問い詰めようとする言葉を喉元まで出し

「……………いえ、おかわり、ください」

「はい、山盛りね」

——それを呑み込んだ。

現実かもしれない。しかし、夢の可能性も否定しきれない。

もし優花里の記憶が夢であったなら、自分は「夢で見た内容を現実と誤解し、自分の母が浮気したと責める最低な娘」となる。それは今まで愛情を注いで育ててくれた父母への酷い親不孝だ。

「それにしても、今日のハンバーグ本当に美味しいです!」

「ふふっ。まだお肉も残ってるから、そっちのお替りもできるわよ?」

好子は優花里の茶碗にご飯をよそい、手渡すと言った。

「……………良かった、本当に。優花里が喜んでくれて」

『つまり下手に現実に戻すのではなく、本当に現実であり得ない程の状況にした上で意識を飛ばして、夢だと思わせようとしたって事かしらっ。』

「まあ……………そんな感じですよ」

翌日。

昨日の事を千代に電話で報告して件の部分に差し掛かった時、千代はそう尋ねてきた。頭をかきつつ和明が答える。

『何とも思い切った事をしたわね……………彼女、戦車道をやっていた頃か

ら「ごぞ」という場面では肝が据わってたけど。でも、それで夢だと信じるかしら』

「半信半疑で十分って言ってました。痕跡も全部消しておくって」

『何か、彼女は他に言っていた？』

千代の何気ない問いかけ。

和明はその問いに少し苦い顔をすると言った。

「……『私がお願いした事だから、気にしないで』だそうです」

——正直、責められるよりも堪えた。

「お願い」には和明を呼んだ事と同時に、膣内射精を懇願した事も含まれるのだろう。それを全部ひとりで背負い込もうとする好子の言葉に、和明は何も言えなかった。

「何ていうか、俺……守られていたんだなって」

正直、今回の件は和明としてもかなり痛い、しかし身に刻まれた経験となった。

襖を開けた時の優花里の反応を思い出す。衝撃と混乱と絶望が入り混じった、あの反応。

他人の妻との浮気がバレるといふ事はそういう事なのだ。そして仮にバレた時、一介の学生である和明に背負える責任は何一つ無いのだ。今まで二人の家元との関係では彼女らの地位や立場に多分に守られていた事を、和明は痛感した。

「……………」

『どうしたの？』

「いえ、何て言うか……その、こういう時に責任をちゃんと背負える大人になりたいなって」

『その気持ちは大事にしておきなさい。世の中には、自分勝手なセックスをした上でそんな責任から逃げる事しか考えない大人が沢山いるわ。和明くんには、そんな最低のセックスをする大人になって欲しくないから』

「……………はい」

本来、浮気そのものが世間から許されるものではないのだろう。しかし、それでも求めたり、求められたりした時には——それを全て背

負える男になろう。和明はそう思った。

好子には今回、結果的に随分と迷惑をかけてしまった。改めてお詫びに伺いたくもあつたが、もう逢わない方が良いだろうという気持ちもあつた。

彼女とのセックスは和明自身も耽溺してしまう危険なものだった。次に逢つて誘われれば、やはり自分は断れないだろう。それは確信めいた予感だった。

「……あれ？」

その時、通話中の耳にアラーム音が届いた。別の誰かからの着信が入つたようだ

『着信みたいね。これ以上は大丈夫。それじゃ和明くん、また』

「ええ、また」

千代との電話を切り、通話を切り替える。着信欄には「西住しほ」の文字。

「(しほさん?)」

怪訝に思いつつ和明は通話ボタンを押した。落ち着いたしほの声が聞こえてくる。

「もしもし、篠原です」

『和明くん？ 今、大丈夫かしら?』

「ええ、大丈夫ですが……」

『ちよつと、都合が合うか確認したいのだけど……今から言う日って、空いてないかしら?』

そう言うと、しほは8月下旬のある日と言ってきた。シフト表を確認すると、ちよつと空いている日だ。

「ええ、そこなら空いています。演習とかですか?」

『演習ではないのだけど……高校戦車道大会のエキシビジョンマッチが開催されるのは、知っているかしら?』

「え? ええ、ニュースで見た程度には」

『その大会のだけど、私も高校戦車道連盟の理事長として向かう予定なの。そこに一緒に居て貰えればと思うのだけど……』

ふと、嫌な予感がした。

「あの、しほさん。そのエキシビジョンマッチの開催場所って……」
『大洗よ。茨城だからちよつと遠いけど、日帰りはできると思うわ』
「……………」

『和明くん?』

——どうやら、好子との再会はそう遠くないものになりそうだ。

俺と家元（かのじよ）と娘と母と 第一話

広い畳敷きの部屋に敷かれた布団、その上で絡み合う二人の男女。
「んっ、あふっ……ああっ！」

十代の少女らしい瑞々しく引き締まった身体。しかしその曲線は豊かな乳房からくびれた腰、そこから女性らしい膨らみを見せる尻から脚にかけての美しいラインを描いている。

「し、篠原さん……熱くて、体の中から、焼けそう……ああんっ！」
「くっううっ！ まほさんのも、凄くキツくて、熱いっ……！」

白い肌に汗を浮かべ、黒森峰戦車道隊長にして西住家長女、次期家元後継者筆頭である西住まほは和明の巨根の一撃に悶えた。一方で肉棒を受け入れて間もない彼女の膣は強烈に竿を締め付けてくる。快感と痛みの境界線ギリギリのところ、和明は腰を引き、再びまほの膣内を蹂躪する。

「ンンッ！ あ、ああ、こんな、広がっ……あうっ！」
「ハアッ、ハアッ……！」

荒々しく息を吐き、正常位の姿勢で和明はまほの背に手を伸ばし、強く抱きながら腰を更に動かす。

「……………」
その視線を、少しだけ布団の横に移す。

「……………」
西住流家元、西住しほ。黒いスーツ姿のままの彼女は座布団に座り、興奮するでもなく和明とまほの交わりを見つめている。その顔に表情は浮かんでおらず、まるで退屈な観測実験を眺めているかのようだ。

「…………怒ってる、よな。アレ」
まほの身体が与えてくる快感を覚えつつ、和明は体の中に冷たいものを感じる。

だが、最早ここで止まれないのも事実だった。和明はしほの視線を

振り払うようにまほに向き直り、唇を重ねる。

「んっ、んはっ……まほ、さん。もつと舌を、絡めて……」

「あふっ、ンッ、ちゅ……こ、こう、ですか？」

和明以外の男性を受け入れた事の無いまほの口腔内。歯茎をくすぐるように舐める和明の舌の動きに、まほは慣れないなりに応えようと舌を絡みつかせる。熱い彼女の吐息が和明の中に流れ込み、くらくらするような興奮を覚える。

「ひうっ！ ま、まだ、大きく……っ！」

「大丈夫か、まほさん？ その、まだ痛いんじゃない？」

「ンッ、ちゅ、ふうっ……！」

膨らむ怒張にまほが背を反らす。処女喪失して間もない彼女の事を氣遣う和明の言葉に、まほは口吻で返してきた。

「んはっ……も、もつと、動いてください。お母様の事は気にせず、篠原さんをもつと、感じ、させて……あぁっ！」

「……！」

ショートカットの髪を振り乱しつつも、まほは和明に懇願する。その健気な様子に、まほの柔肉に包まれていた肉棒はビクリと反応した。

「分かりました。思い切り……いきますっ！」

「アッ！ ンンッ！ あ、はぁっ！」

張り詰めた水風船のようなまほの乳房を強く揉みつつ、和明は抽送行為を再開する。傍らに座るしほは無表情のままだ。

おそらく寝室の外では使用人頭の菊代が待機しており、事が終わるのを待っているのだろう。果たしてこの状況も、彼女の想定内なのだろうか。

「あ、あぁっ！ 篠原、さんっ！ な、何か……！」

早くも順応してきたのだろう。和明の腰の動きにまほは腰をくねらせ、自身の強く感じる箇所を亀頭が擦るように調節し、激しく悶える。

——熊本・西住流家元本宅。そこに和明は居た。

「失礼致します。こちらに篠原様という方はお勤めでしょうか？」

黒髪を簡素に束ねた和服姿の女性が戦車道シヨップに現れたのは、少し日が早くなり始めた感のある8月下旬の夕方少し前だった。テレビが上空取材でもしているのか、ヘリの音が遠くでする。

「ああ、井手上さん。家元にはいつもお世話になっております」

「いえいえ、店長様もお変わりなく」

同じくカウンターに居た店長が彼女に礼をした。どうやら顔見知りのようだ。

互いの挨拶が終わったところで、和明は名乗り出た。

「え？ ええっと……篠原は自分ですけど」

「あら……失礼致しました。お話は伺っていましたが、容姿を存じませんでしたので」

えらく丁寧な言葉使いをする女性だった。二十代後半から三十代前半くらいだろうか。

整った顔立ちを形作る個々のパーツはどこか幼さを残しつつも、その落ち着いた姿勢は大人のそれでもうにも年齢を読み取れない。

和服の女性は手を膝前で重ね、こちらに深々と頭を下げた。

「私、西住家にて使用人頭をしております井手上菊代と申します」

「西住家？」

「はい。お会いするのは初めてですが、家元がお世話になっておられる事は聞き知っております」

「え、ええ……」

戸惑いつつも作業用エプロン姿の和明は頭を下げる。やはり自分が彼女らの相手をしている事は知っているようだ。

「(菊代……確か、しほさんが以前に……)」

全国的な豪雨の日、西住しほが和明宅に寝泊まりした時の事を思い出す。確か西住流の拠点である熊本での欲求不満の解消相手の手配は、菊代という使用人頭がやっていると言っていたが、この人なのだろうか。

しかし和明の頭からは疑問符が取れなかった。だとしたら、何故そんな女性がわざわざ横浜の戦車道シヨップに来て、和明を名指して探

しにきたのか？

「その……しほさ、いえ、西住さんから何か？」

「そのようなものと申しますか……篠原様、本日のお勤めは何時頃までになりますでしょうか？」

「今日ですか？ もうちょっとで終わりですけど……」

とりあえずの推測に菊代は曖昧に返し、和明に尋ねてきた。時計を確認すれば、既に退勤まで一時間を切っている。

和明の答えに、菊代は安心したように言った。

「それは良うございました。この後のご予定などはありますか？ 宜しければ、ひとつご足労願いたいのですが」

「ご足労？」

「ええ、篠原様に会っていただきたい方がおられました」
にこやかに菊代は言う。

今ひとつ状況は把握できないものの、しほからの要請であれば無下にもできない。和明は頷いた。

「分かりました。じゃあ、仕事が終わったら……」

「いや、篠原君。それだったら、もう上がって大丈夫だよ。勤務は定時で打っておくから」

「え、いいんですか？」

「家元はうちの上得意だからね。それも仕事の内さ」

和明が呼ばれた事に店長も察したのだろう。有難い申し出を和明は素直に受け取ることにした。バックルームに向かい、エプロンを外して手早く身支度を済ませる。

鞆を手にして裏から出てきた和明は菊代に言った。

「すみません、待たせました」

「いいえ、こちらこそ急な話にお付き合いただき助かります。では店長様、ご機嫌よう」

「はい、家元にもよろしくお伝えください」

店長と菊代は互いに頭を深く下げ、別れる。

「さて、では参りましょうか」

「あの……そういえばまだ何処へ行くとか聞いてませんでしたけど、

行き先は？」

「熊本です」

「はあ、熊本……」

さざらりと菊代は答える。

危うく聞き流しそうになった和明は思わず足を止めた。

「ちよ、ちよっと待ってください。熊本って、あの熊本ですか？」

「はい、九州の熊本でございます」

「いやいや！ 今から九州って!?!」

横浜から都心程度の移動は想定していたが、それが熊本となると話が違う。新幹線でも裕に半日、飛行機で向かうにしてもここから羽田まで向かうだけでも何時間かかるやら。少なくとも泊まり前提での移動になるのは確実だ。

そう慌てる和明に、菊代はあくまで穏やかに言った。

「大丈夫で……」

その時、遠くで聞こえていた筈のヘリの音が急激に近づいてきた。

「な、なんだ？」

「どうやら来たようです。店長様、店舗裏の戦車試乗場を少しお借り致します」

「へ？ あ、はい、どうぞ」

激しい音にも動ずる事無く、菊代は店長に言うのと裏口へと向かう。釣られて和明もそれを追った。

「えっと、井手上さん！ 何処に……なっ!?!」

裏口から出た和明は、そこに有るものに絶句した。

大型ヘリが試乗用スペースに着地しており、ローターを回転させている。左右の支柱めいたローター基部などは和明もニュースなどで見たことがある。確かこれは――

「V-22、最高速度565 km/h。積荷は私と篠原様だけですし、二時間もあれば熊本です」

ローターの風が着物の袖を激しく揺らす。

そんな風の中でも、菊代は当たり前のように言った。

「……………」

和明は改めて、自分が肌を重ねている相手が日本戦車道の重鎮なのだという事を知った。

そして、それに仕えている人物が平凡な人物である訳がない事も。

——そこから移動に使った二時間は、あつと言う間だった。

軍用ヘリに乗るのなど初めてで、更に本来はもっと大人数を搭載して移動するであろう客室には自分と菊代の二人だけで、激しい音と文字通りの飛ぶような勢いで後ろに消えてゆく窓の外の風景に戸惑う内に到着したような感覚だった。

「……そろそろ、ですね」

菊代がそう言うと、それが合図だったかのようにヘリが減速を始めた。更にもう少しヘリは飛び、やがて降下を始める。

完全に着地し、操縦士の女性がハッチを開けた。何だか足下がふわふわする錯覚を覚える。

「お、おお……」

ヘリポートに降り立った和明は、周囲の光景に息をのんだ。

周囲は高い白壁に囲われ、そこそこの広さのヘリポートですらその壁に覆われた区画のほんの一角なのが分かる。

壁を背にして視点を変えると、純和風の造りの広い屋敷。一部は二階建てになっているが、基本は平屋のようだ。

そしてその白砂が撒かれた庭には、幾つもの戦車が並んでいた。和明も知っているティーガーやパンター、IV号戦車から戦車黎明期の古典的なものまであり、ちよつとした独戦車の展示会のようだ。

「ようこそ西住家へ。歓迎致します、篠原様」

菊代はそう言うと、和明を先導するように歩き始めた。物珍しそうに周囲を見回しつつ彼女の後を追う。

夏の盛りを越えたとはいえ、西日が与えてくる暑気は強い。しかし屋敷の陰に入った途端にその熱気は弱まり、むしろ木々の香りと共にひんやりとした空気が漂ってくる。エアコンに頼らずとも空気が通りよく、暑気や湿気が籠もりにくい造りになっているのだろう。

人気の無い廊下を菊代と二人で歩く。時折、丁稚めいた年若い使用

人がすれ違い、菊代と和明に丁寧な頭を下げる。菊代は彼らと二、三の言葉を交わして、再び歩き始める。

「……凄いお屋敷ですね」

「西住家は流鏑馬やぶさめの時代から続く伝統ある家系でございます。これでもまだ、全盛期に比べれば随分と小さくなったとか」

素直な感想を口にする和明に、菊代は振り向かずには答える。

やがて菊代は、ある大きな障子戸の前で立ち止まった。腰を落とし、戸に手を添え、中に向けて言う。

「お嬢様、篠原様をお連れしました」

「……ありがとうございます、菊代さん。お通ししてください」

中からの少女の声。ややハスキーなその声に、和明は聞き覚えがあった。確かこれは――

菊代は少女の声に頭を下げると音も無く障子戸を引いた。畳が敷き詰められた広い部屋。そこに一人の少女が座布団に座り、佇んでいる。

黒森峰女学園のパンツァージャケットに身を包んだ彼女、西住まほは静かに言った。

「……遠方からのご足労、ありがとうございます。どうぞお座りください」

「え？ あ……はい」

よく見れば、まほの向かい側にもう一つの座布団が敷かれている。和明は戸惑いつつもそこに正座した。何というか、彼女を前にすると年下だというのに背筋が伸びる。

「ごゆっくり。茶を煎れて参りますので、お待ちくださいませ」

そう言うとき菊代は深々と和明とまほに頭を下げ、スッと立ち上がるとそのまま退出していった。

「……………」

「……………」

室内に残された和明は、正座したまま眼前のまほを見た。まほは無表情に、姿勢正しくこちらを見ている。

さて、何から聞いたものやら。和明はまほの視線を受けつつ考え

た。自分をここまで呼んだのは彼女、西住まほで間違いないのだろう。ではその用件とは何か。

「(しほさんの事……だろうなあ)」

とりあえず心当たりとしてはそのくらいだ。と言うか、和明とまほの接点はそこしか無い。

和明はまほに問いかけようと口を開こうとした。

「あの……」

「先日は、お世話になりました」

ほぼ同時に、しかし和明以上にハキハキとまほは挨拶してきた。夕イミングを逃し、和明は言葉を引っ込める。

「い、いえ、そんな……アレは店長の手伝いをしていただけです」

「そうではなく、お母様についてです」

「……！」

思った以上にまほはあっさり和本題に踏み込んできた。少し緊張しつつ、和明は答えた。

「……何の話ですか？」

「そう緊張しないでください。篠原さん、貴方を詰問するために呼んだ訳ではありません。貴方とお母様が……その、男女関係にあることは知っています」

言葉を選びつつまほは言った。18才の少女が口にするには抵抗ある話題ではあろう。

しかし、やはり知っていて呼んだのか。和明はこれ以上隠すことを諦め、まほに言った。

「……それは、黒森峰の学園艦に俺が行った時ですか？」

「いいえ、その時は全く」

「え？ それじゃ……」

「お待ち致しました」

その時、障子戸の向こうから菊代の声が出た。

音も無く戸を開けて盆を手に入ってくると、菓子入りの小皿と茶托に乗せられた椀を二人の手前にそれぞれ置く。

「ちようど良いお話をされていたようで……篠原様、お嬢様が家元と

篠原様のご関係について知ったのは、つい先日、私がお教えしてからです」

そのまま菊代は腰を落とし、盆を横に置くとまほと並ぶように座った。

和明は驚くと同時に疑問を抱いた。何故そんな話を、わざわざ彼女にしたのか？

「……篠原さん。今週、北海道にて開催される大学選抜と大洗女子学園との模擬戦についてはご存じですか？」

その時、まほが唐突に尋ねてきた。いきなり飛んだ話に戸惑いつつも和明は答える。

「へ？ え、ええ。結構ニュースにもなってますし」

「その試合なのですが……表向きこそ『プロリーグの試合を想定した、高校戦車道優勝校との模擬戦』となっていますが、実際は大洗女子学園の廃校を賭けたものとなっています」

「ええっ!？」

ニュースにもなっていない突然の情報に和明は驚いた。

大洗女子学園を初出場・初優勝に導いた“軍神”西住みほ。若干13才にして大学選抜を指揮する“天才少女”島田愛里寿。この2人の若き才能の激突は、戦車道新聞や戦車道ニュースでもちよつとした話題となっていた。しかしそんな裏事情があったとは。

「既に発効している大洗廃校についての処分の撤回条件は、大学選抜に勝ち、大洗女子学園の優勝がまぐれでないと証明すること……しかし、このままでは大洗に勝ち目はありません」

「……そんなに強いんですか？」

「確かに大学選抜は強敵ですが、それだけではありません。文科省側は当日の試合ルールを変更し、30対8の殲滅戦を強制的に行おうとしています」

「!？」

何とも無茶苦茶というか、大人げないと言うか――

絶句する和明にまほは言葉を続けた。

「そのため現在、大洗と交流のあった各高校が水面下で連携をとり、大

洗への短期転校という形で助勢する作戦が進んでいます」

「それは……また」

想像もつかないような策謀の応酬に上手い言葉が出てこない。

「私も、明日には黒森峰の同胞と共に数両の戦車で加勢に向かいます………については篠原さん、貴方を急にお呼びした理由がそれです」

「いや、そう言われても俺には助言とかは……」

「ふふっ。勿論ですが篠原様にそのような事を期待してはおりません」

戸惑う和明の言葉に菊代はそう言いつつ笑う。

一方、まほは自身の決意を固めるように大きく呼吸すると前に手を置き、ゆっくりと頭を下げた。

「……篠原さん。初対面に近い貴方にこんな事を頼むのは非常識にも程があると思うが……私の伽ときの相手をしてもらえないだろうか？」

「と、伽？」

聞き慣れない言葉に返事に困る和明に、菊代が言った。

「つまりお嬢様はこう言っておられるのです。『貴男に初めてのセツクスの相手になって欲しい』と」

「……!？」

「菊代さん……もう少し、言葉を」

「殿方というのは明確に言わないと伝わらないものです。お嬢様」

顔を上げ、遠慮がちに菊代に言うまほ。それに涼しい顔で返答する菊代。

「ここに来てから驚き通しだが、その中でも今のまほの言葉は衝撃的だった。和明は菊代に言った。

「ちよ、ちよっと待った！ 井手上さん、今まほさんの事を『初めて』って……」

「……はい」

「いや、その、大事な試合があるってのは分かりました。でもそれが、何で俺が西住さんの処女を……」

「そこまで言ってから、和明はある事に思い至った。

「まさか、しほさんや千代さんと同様の……?」

「……はい。私は最近になり……戦車道の試合を重ねる度に強い欲求不満と、体調の不調を覚えるようになりました」

「優れた戦車道の選手ほど陥る、闘争心の不完全燃焼からの性的な欲求不満の発生……お嬢様に表れた症状が家元のそれと同様のものがある事は、すぐに分かりました」

菊代がまほの言葉を補足する。

確かに以前、しほがそういった体調不良を起こす程の欲求不満を覚えたのは今のまほと同じ頃だと言っていた。戦車道エリート校である黒森峰の隊長を二年生の頃から務めている程の彼女ならば納得できる話だ。

しかしそれでもまだ疑問は残る。和明は菊代に聞いた。

「でも……何故わざわざ横浜にいた俺を呼んでまで？ 確か、熊本でのしほさんへのそういった『手配』は井手上さんがやられていると聞きましたけど……」

「確かに本来はそうなのですが……理由は三つあります。ひとつは今回の大学選抜戦の決定から開催までの期間が極めて短く、お嬢様に相応しい相手を探すのが困難であること」

細い指を立て、菊代が言った。更にもう一本指を立てる。

「二つには篠原様と家元の身体の相性が極めて良いと思われること。お嬢様は顔立ちだけでなく、体つきも若いころの家元に非常に似ております。篠原様ならばお嬢様の身体の中の『火』を鎮めていただけるかと判断しました」

「は、はあ……」

他人から「相性が良い」と言われてもピンと来ないものだ。曖昧な返事をする和明に、菊代はもう一本指を立てて見せた。

「そして三つ目。これが最も重要な点なのですが……篠原様の事を家元も、また島田流家元も秘匿性、人間性共に深く信頼されているという事です。何でも、島田流家元の娘様とも関係されたとか」

「な、何でそれを!？」

いや、しほと千代の関係からすれば筒抜けでも不思議ではないか。

和明がそう察したのを知ってか知らずか、菊代は和明の言葉をス

ルーして話を続ける。

「……とはいえ、これはあくまで手前勝手な都合に他なりません。篠原様が気が進まぬと言うのであれば、このまま横浜までお送り致します」

「……………」

和明はまほを見た。

「西住さんは……その、それでいいのか？」

「いいのか……とは？」

「いや、ほら、そりや俺からすれば西住さん……まほさん、でいいかな？ 君みたいな綺麗な子の相手ができて嫌な訳はないさ。でも、その、初めての相手が俺つてのはまほさんからすれば、嫌なんじゃないのか？ 君のお母さんの相手をしていた訳だし……」

「……………ふふっ」

そう問われ、まほは少し笑った。

「成程、お母様が信頼されるのも分かる気がします」

「え？」

「この夏に入り……正確には篠原さん、貴方と逢うようになりそうだった不満を抱かなくなったからか、お母様は戦車道の試合や演習においてより強く精彩を放つようになりました。確かに娘として一言では表せないものもありますが……それでも篠原さん、私は貴方に感謝しています」

18歳にして随分と肝が据わっている。流石は西住家次期家元といったところか。まほは言葉が続けた。

「この大学選抜戦、私は大洗を……みほを、何としても助けたい。そう思っています。ですが……この体の耐えがたい熱さを抱えている今のコンディションのままでは、十全では戦えません」

そう言つてまほは自身の胸に手をあてた。表面上はクールそのものだが、実際は中からの衝動に耐えているのだろう。

改めてまほは和明に言った。

「お願いします、篠原さん。助けると思い、私を……抱いてもらえますか？」

「……………」

本心からの頼みである事が彼女の瞳から伝わってきた。ここで断つては男とは言えない。そんな状況である。

しかし、だからこそ和明の中にはある一つの疑問が浮かんだ。

——何故、この場にしほが居ないのか？

家元として多忙を極める彼女である。確かに都合が合わない事もあるだろう。しかし娘が処女を捧げようとしている状況で、言伝もな使用人である菊代に任せるだろうか。和明は尋ねた。

「この事を……………しほさんは？」

「っ！」

まほはそこで初めて言葉に詰まり、菊代に視線を向けた。菊代は澀みなく答える。

「……………この件について、家元は存じておりません」

「知らない？」

「はい。この件は私とお嬢様しか把握しておりません」

「そんな！ 横浜ではしほさんからの……………」

『『そのようなもの』と申しました』

なるほど、返事が曖昧だったのはそういう訳か。

しかし感心してもらえない。和明は更に聞いた。

「じゃあ、これってしほさんに秘密って事ですよね、何で？」

「……………反対されているからです」

菊代は静かに言った。

「反対って……………まほさんの処女を俺が奪う事を？」

「半分正解と言いますか……………家元はお嬢様の状態を理解しておりません。しかし、篠原様を紹介する事は避けられていました」

「母親を抱えている男を娘に紹介できないとか、そういった理由ですか？」

和明の言葉に菊代は首を横に振った。

「そんな複雑な話ではありません。単純に家元が貴方を他人に紹介し

た・く・な・い・と・言・っ・て・い・る。それだけの事です」

「それって……う？」

「……独占したいのですよ。篠原様、貴方を。ああ見えて独占欲の強い方ですから」

「!？」

まさか——しほが？

驚きを隠せない和明に、菊代は言った。

「……お嬢様のためにもお願い致します、篠原様」

第二話

高い白壁が長く続く、戦車道西住流家元・西住家本宅。正面玄関にはつい先ほど停車したばかりの送迎車が再発進してゆく。

「お帰りなさいませ、家元。予定よりも随分とお早いお帰りです……」

「柳眉を逆立てる」とはこのような表情を言うのだろうか。にこやかに主人を出迎える菊代に、しほは刺さるような視線を向けつつ言った。

「……何のつもりなの、菊代？」

「何のつもり……とは」

「彼の勤めているところの店長さんが教えてくれたわ。居るのでしょ、ここに」

「……そうでしたか」

菊代は笑みを崩さず答える。しほは視線を逸らさずに更に言った。

「もう一度聞いわ。何のつもり？」

「何のつもりも何も……既に分かっておられる事を、今更言うこともないかと」

「……！」

これ以上はらちが開かないと踏んだか、しほは菊代の横を足音も荒く過ぎようとした。

菊代はそんなしほに視線だけを向け、静かに言った。

「どうされたのですか家元？ 貴女様らしくもない」

「……何が言いたいの、菊代？」

「少年ひとりに入れ込み過ぎておられるかと……たかだか竿の一本、お嬢様にくれてやれば良いではないですか」

「っー」

しほの目が見開かれた。

彼女の激情を更に煽るように菊代は主人であるしほへの言葉を続ける。

「正直なところ近頃の家元の、まるで未通娘おぼこのような様は見えておれま

せん。お嬢様も呆れておられます」

「菊代っ……！」

しほの手に力が入る。菊代は目を閉じ、あえてしほが叩きやすい位置に自身の身を置く。

「……………」

「……………すう」

「……………」

「フウ……………」

しかししほは大きく息を吸い、吐き、全身の力を抜いた。

余りにも露骨な菊代の煽りであった。それはしほを激昂させるのが目的でなく、逆に怒りのラインを超えさせ、冷静さを取り戻させるための煽りだったのだろう。しほは振り上げかけた手を戻し、今度こそ菊代を無視して廊下を歩く。

幾つかの角を曲がり、ある部屋へとたどり着く。まほの自室では始めまい。家人に声を聞かれずに事を進めるならば、来客を寝泊まりさせる時に使うこの床の間が最も適している。

「……………！」

しほは襖に手を掛け、一瞬だけ開けるかを迷い——そのまま開け放した。

しほが襖に手を掛ける二時間ほど前。

布団が敷かれた小さな和室。壁の掛け軸には「疾風迅雷」と墨痕鮮やかに書かれており、天井近くに掛けられた額縁には戦車黎明期のI号戦車のモノクロ写真が飾られている。

そんな床の間の布団の上で、ゆったりとした寝間着姿の和明は落ち着かなげに独りでいた。

「……………はあ」

現在、西住まほは支度として湯浴みを行っている。

——結局のところ、和明はまほの頼みを引き受けた。まほは静かに礼をすると立ち上がり「準備してきます」と言って部屋を出て行った。残された和明は菊代から別の浴室——おそらくは客人用か使用人

用に、複数の浴室があるのだろう——に案内され、床の間の場所を示されて別れた。そして簡単に体を流し、用意されていた寝間着に着替え、今に至る。

「……………」

和明の胸中には、奇妙な後ろめたさと罪悪感があつた。どちらもこの場には居ない西住しほに対してのものだ。

本来、しほの事実上の浮気相手である和明が他の女性と関係を持つたとしても、それを責められる筋は無いはずである。

しかし和明の脳裏には嵐の夜に「特別なひとになりかかっている」と言つたしほの姿が浮かぶ。あの時の彼女の事を考えると、しほ以外の女性と秘密に関係を持つのは彼女への裏切りになるのではないか。そんな気がしてならないのだ。

更に問題なのは、その相手がしほの実の娘であるまほだという事だ。それも今回は愛里寿や秋山優花里の時とは違って、まほは処女喪失まで願っているのだ。この夏に濃厚かつ様々な経験をしてきた和明だが、処女を奪うのは初めてになる。

果たしてそれが自分に——

「ああもう、悩むな俺！」

自分の頭にかかる不安の雲を払うように和明は言つた。

愛里寿の時もそうだったが、こういう時に後から悩むのは自分の悪い癖だと自身でも思う。今は「まほの溜まったものを解消させる」ことだけを考えればいい。しほには——まあ、バレるのは確実だから後で謝ろう。そう思った。

『篠原さん？』

その時、襖の向こうからまほの声がした。慌ててそちらに返事をする。

「え？ あ、ああ。もう中に居るよ」

「……………失礼します」

音も無く襖が開き、和明と同じ寝間着に身を包んだまほが入ってきた。客人用に造られた床の間は外部からの光が最小限になるように調整されており、読書用のルームライトの弱い光だけが室内を照らし

ている。

襖を閉じ、まほは布団の上に腰を落とすと正座して和明の正面に向き直り、三つ指を手前に置いて深々と頭を下げた。

「……改めて感謝します、篠原さん。初めてで至らないところも多いかと思いますが、よろしくお願いします」

「いや、その、頭を上げて。そんな堅苦しい事するんじゃないんだから」

慌てて和明はそう言い、まほの頭を上げさせた。

「す、すみません……」

彼女なりに緊張しているのだろうか。少しの戸惑いを見せつつまほは顔を上げた。風呂上りの濡れた髪と火照ったうなじが何とも艶っぽい。

また、厚い生地のパンツアージャケットに包まれていた時に比べ、寝間着になったことでまほの身体のラインがくつきりと浮かび上がっていた。菊代の言っていた通り、顔立ちもしほと似ているが身体もそうなのだろう。布地を押し上げる乳房の豊かさも、そこから腰への引き締まったくびれも見事なもので、それを見ているだけで和明の中には「これからこの身体を好きにして良いのだ」という興奮が湧きあがってくる。

とはいえ、彼女はこれが初めての経験になる。こちらの欲望に任せて一方的に犯すような体験ではあんまりだ。和明はまほの肩に手を回し、優しく寄せた。

「あっ……」

「正直、俺もかなり緊張してる……まほさん。こちらこそよろしくだ」

「……はい」

まほの緊張を解こうと軽い口調で語りかける和明の気持ちが伝わったのだろう。彼女は微笑み、和明に体重を預ける。

「んっ……」

「ん!? ん、んふっ……」

軽いキスをまほと交わす。少しの緊張を残しながらもまほは抵抗せず、和明の唇を受け入れる。

彼女の肩に置いた手がやけに熱かった。やはり冷静に振舞っていたその内面には結構な欲求が溜まっているようだ。

「んはっ、あ……篠原、さん」

そのまま次の段階に進めようとした時、唇を離してまほが呼びかけてきた。

「どうしたの？ やっぱり、実際にやってみると俺じゃ嫌だった？」

「い、いえ、そうではなくて……」

まほを気遣う和明の言葉に、まほは顔を赤くさせた。

「その……先に言った通り、私は今まで男性経験とかはありません。でも、それは戦車道を修める中でそういつた事にまで気を回す余裕が無かったというだけで、私自身が恋愛をしたくないと思っていた訳では、なくて……」

「……………」

ここまでの彼女の姿からすれば、やけに回りくどい言い回しだ。

しかしそれがまほの「照れ」から来るものであることは、そこに含まれた意味も含めて和明に伝わってきた。

和明はもう一度キスすると、まほに問いかけた。

「だから……どうしてほしい？」

「厚かましいお願いなのですが……今だけ、私を恋人のように抱いてくれませんか？」

和明を見上げつつ、潤んだ瞳でまほは言った。

黒森峰学園艦で、大人数の戦車道履修者を前に凜とした姿勢で指示を飛ばすまほの姿を思い出す。大人顔負けの鋭利さと冷静さ、落ち着きを併せ持つ黒森峰戦車道隊長——それでも、彼女はひとりの少女なのだ。

まほの可愛らしい懇願に和明は答えた。

「……………それは、無理だな」

「そう……ですか」

「俺『だけ』が恋人と思ったとしても、君が俺の事をそう思ってくれなければ……それは恋人同士のセックスにはならない」

「……………」

ぴくりとまほの背が震える。和明は彼女の背を優しく撫でつつ言葉が続けた。

「俺はまほさんの事を好きになる。だから……まほさんも、俺の事を恋人だと思ってく……んむっ?」

「ん、んんん……」

まほは自分から和明に顔を寄せ、唇を重ねてきた。彼女の熱い吐息が和明の中に流れ込み、こちらの体温も上がってくるようだ。

たっぷり数十秒ほど経ち、まほは唇を離して言った。

「ぶはっ……分かり、ました。篠原さん。それでは……恋人にしてみたくった事を、全部貴方にさせてください」

「……喜んで」

再度唇を重ね、身を寄せてくるまほの寝間着の襟元のボタンを外し和明は手を差し込んだ。下着は着けておらず、湯上がりの彼女の、張りのある乳房の感触と重みが直接伝わってくる。

「んっ、んくっ……!」

まほは体を震わせつつも唇を離すことなく和明の愛撫に身を任せる。自分を信頼してくれているまほの反応に悦びを覚えつつ、和明は柔らかく彼女の乳房を揉んだ。

瑞々しさと強い張りを保ちつつ、同時に手に余る大きさとしつかりした重みを備えた素晴らしい乳房だった。

流星に大きさではしほに譲るが、日々の戦車道の鍛錬で磨かれた余分な脂肪を持たない肌は和明の指を弾かんばかりに押し返してくる。

「はあっ……んちゅ……あ、あの……もつと、キスにしても、いいですか……?」

「ちゅ……ああ、まほさんの、好きナだけ……んっ」

和明の言葉に、まほは嬉しそうにキスを重ねてくる。

しほには強く責められたという被虐欲めいた所があつたが、どうやらまほには誰かに甘えたいという依存的なセックスを望む傾向があるようだ。親であるしほとも師弟関係めいた緊張感ある空気が漂う彼女にとつて、確かに甘えられる相手は居ないだろう。

それなら、とことん自分に甘えて貰おう。和明はそう思い、キスを

しながら胸を揉んでいた手を一旦抜くと寝間着のボタンを更に外して再度差し入れ、そのまま下に移動させてゆく。

「っ！　そ、そこは……！」

「大丈夫。力を抜いて、俺に任せて……」

和明の指の行き先を察したまほが吐息混じりに言う。和明はまほの耳元で囁きつつ、更に指を進める。

指はまほの豊かな乳房から臍へ、臍から下腹部へと進む。やがてむわっとした熱を伴う湿気が指先に伝わってきた。

「んくっ……！」

上と同様に、まほはショーツも履いていなかった。風呂から上がり、寝間着だけを着けてきていたようだ。

薄い陰毛をかき分け、他人に初めて触れられるであろう秘唇に指が到達し、まほは小さく喘いだ。

和明は壊れものを扱うかのように陰唇を丁寧に弄り、まほの反応を伺う。

「ああ……篠原さん……あ、はあっ……」

「可愛いよ、まほさん……んっ」

「んっ……ちゅ、はふっ……！」

同時に、キスを重ねる中でまほの緊張が和らいだのを確認して和明は舌を伸ばし、まほの舌に触れた。一瞬だけまほは戸惑うように舌を引っ込めたが、和明の意図が分かったのか自分からも進んで舌を伸ばし応えてくれる。

「はっ、あふっ、れろっ……し、篠原さん……もっ……」

その舌の動きは積極的で、熱が籠もった舌尖を蛇のように和明の舌に絡ませ、吸い、舐めてくる。どうやら自分が相手を興奮させている事が嬉しいようだ。

実際自分の愛撫に如実に反応してくれるまほの様子は、平時の鉄の淑女めいた凜とした姿とのギャップも相まって和明の中から興奮を湧き上がらせていた。それに加え、自分しかこんな彼女の姿を知らないという事実は和明に堪らない独占感を覚えさせた。

「あ……」

まほの手が和明の股間に触れた。既に肉棒は寝間着越しでもはつきり分かるほどに勃起しており、巨根の存在感を否応なく示していた。

「これが、あんっ、し、篠原、さんの……!?!」

「ああ。まほさんに興奮して、こうなってるんだ」

「こんな……こんな大きいものが、お母様に……?」

本能的なものだろうか。まほは布地の上から和明の肉棒への愛撫を始めた。下から上へ、撫で上げるように手を繰り返して動かしてゆく。

まほの与えてくる快感に竿がビクリと跳ねる。それに負けじと和明はまほの秘唇を弄っていた指の動きを少しだけ強くした。ヒクヒクと蠢く陰唇の震えが指先に伝わりと共に、とろりとした液体が絡みついてくる。

「んああっ！ ど、どうですか？ ンンツ！」

「ううっ……あ、ああ、上手いよ、まほ、さん……堪らない……まほさんこそ、どうだい？」

「ふ、不思議な、感じがします……自分で、触っている時より、全然……」

「オナニーはしてるんだ」

「……っ！」

和明の言葉にまほは顔を赤くし、誤魔化すように再びキスを求め唇を重ねてきた。覚えたてのデュープキスだというのに懸命に舌を絡めてくるのが何とも愛らしい。

まほの身体を抱き寄せつつ、和明は指の動きを更に大胆にしてみた。感触で孔を探り当て、そこに指を一本挿入してみる。

「んっんはっ、ああっ！」

まほの反応がひと際強くなる。初めて異物を受け入れた秘所の中は狭く、和明の指を強く締め付けてくる。その中を解ほぐそうと和明はゆっくりと指を出し入れしつつ、肩に回していた片手を胸まで下げ、まほの乳房を先ほどよりもやや強めに揉む。強い弾力が掌に伝わりと同時に、彼女の乳首が固く突起してきているのが分かる。

「くっ、ああっ！ そんな、胸と、一緒にっ…………！」

「(このくらい…………かな?)」

「ふああっ！」

ベッドの上でも百戦錬磨のしほや千代と同じように扱ってはいけない。すぐにでもまほに挿入したいという衝動を堪えつつ、和明は粘り強く彼女の身体を責める。まほの身体の震えはより小刻みなものになり、吐息が荒くなってゆく。

指を動かすのも難しかった膣内も、奥から溢れてきた愛液によって次第に滑らかになってきた。まほの感じやすいポイントを探りつつ、指の抽送を次第に早めてゆく。

「あ、ああっ！ し、篠原さ…………んっ、あああっ！」

びくんとまほの身体が大きく跳ね、同時に指の締め付けが強まる。くたりと脱力したまほの身体を受け止めつつ、和明は言った。

「…………大丈夫、まほさん？」

「え…………？ あ、い、今の…………？」

どうやら自分がイッたという自覚が無いようだ。まだ半ば意識が飛んだような状態のまほの秘所に挿入したままの指を、再び動かし始める。

「ひうつ!? し、篠原、さんっ、待って…………！」

「まほさん、もっと感じて…………俺も、まほさんを痛くしたくないから…………」

「あふっ、あ、ああんっ！」

脱力した事でより抽送が用意になった膣内を指で拵げてゆく。多少解れてきたのを確かめ、和明は指をもう一本増やしてみた。指先に絡みつく愛液の粘りが強くなってきた気がする。

「篠原さん…………わ、私、も…………」

まほも次第に意識が戻ってきたようだ。潤んだ瞳が和明の股間に向けられ、ズボンをずり下げようとする。和明はそれに合わせて腰を少し浮かし、より脱がしやすいようにする。

やがてズボンはトランクスごと脱がされ、和明の巨根が露わになった。

「……！」

息を呑むまほの気配が伝わってくる。

「これが、男の人の……ンンッ！」

喘ぎつつもまほは血管を浮かべる肉棒から視線を離さない。

和明の脳裏に、この巨根を見て怯えてしまった元彼女の記憶が浮かぶ。

「大丈夫。ちゃんと解せば、まほさんを痛くしないで……ううっ!？」

「んっ、はっ、ああ……」

和明の言葉を待たず、まほはその指を肉棒に絡め柔らかく握った。そのまま、和明の反応を伺うようにその手を上下させてくる。

「ま、まほさん……くうっ!」

「あ! い、痛かった、ですか?」

「いや、そ、そうじゃなくって……気持ち、良くて……」

「……良かった」

和明がそう素直に答えると、まほは汗に濡れた顔で嬉しそうに微笑んだ。

「篠原さん……んっ、わ、私だけでなく、篠原さんも、気持ちよくなって、ください……ああんっ!」

膣内を蠢く指の動きに喘ぎつつも、まほは更に手を動かす。亀頭から滲む先走りが彼女の綺麗な手を汚してゆく。

おそらく、それが彼女の「恋人としたかったセックス」——互いが互いを気持ちよくさせ合い、高め合う。そんなセックスだったのだろう。

ならば、そんな彼女の期待に応えねば男ではあるまい。和明は再びまほにキスをする、肉棒への愛撫をまほに任せたまま指の抽送を速くしてゆく。痛みを感じさせないように丁寧に、しかし迅速に。

「はあっ、じゅるっ、ふあ、ああ……!」

「ちゅ、う、くうっ……!」

名を呼ぶこともなく互いの秘所を弄り合い、同時に舌を絡ませ、吐息を、唾液を交換する。

薄暗い室内には和明とまほの喘ぎと、くちゅくちゅと粘りある水音

だけが響く。

「ふう、はあ……あ、あんっ！」

「ううっ、くっ、ぐうっ……！」

まほの手の動きは次第に大胆さを増してきた。小さな動きだったものが竿の根元から亀頭手前までを抜く大きな動きに変わり、それでいて強く握りすぎないよう絶妙に加減をしてくる。おそらくは彼女はそれら全てを計算ずくではやってしまい。相手を気遣いながらも気持ちよくなつて欲しいというまほの気遣いが、そのまま所作に表れているのだ。

初見の際にはどこか陰しい印象を覚えた西住まほという少女。彼女が実際は相手の事をどこまでも気遣う事ができる優しい少女である事を、和明は快感の中で理解した。

膣内の二本の指を少し抜けてみる。最初に指を挿れた時よりもまほの中は柔らかさを増し、締め付けつつも指がより動かしやすいように愛液をより滲ませて抽送を願うように陰唇をひくつかせる。

「あふっ！ し、篠原、さんっ！ 私っ！」

「あ、ああ、俺も……まほさん、もっと手を、速くっ……！」

再びまほの反応が強まってきた。同時に和明の中からも堪えがたい射精感がこみ上げてくる。

和明の言葉に従い、まほは肉棒を抜く動きを速める。赤黒く膨れ上がった亀頭の先端で鈴口はぱくぱくと開閉し、射精が近いことを訴えてくる。

同時に彼女と達しようとして、和明も指の出し入れを速めてゆく。

「あ、あ、あああっ！」

「ぐうっ！ で、射精るっ！」

まほの身体が大きく震えた。同時に和明も腰を震わせ、精液を迸らせる。

白くドロドロとした液体がまほの手を、彼女の汗が染みた寝間着を汚してゆく。

「んっ、は、ああ……！」

「ふう、はあ……よ、良かったよ、まほさん……！」

「あ、ありがとうございます……」

和明の言葉に、まほは照れつつも素直に礼を言った。

——そろそろいけるだろうか。

「まほさん、服、脱いで……俺も脱ぐから……」

「は……はい」

和明の意図を察したのだろう。まほは和明から身を離し、既に寝間着としての用を足さない程に濡れたそれを脱いでゆく。汗に濡れた豊かな乳房が揺れる様を見つつ、和明は自身の寝間着も下着ごと完全に脱ぎ捨てる。

さほどの間もなく、和明とまほは生まれたままの姿になった。まほの思った以上に細い肩に触れ、和明は彼女をゆつくりと布団に横たえさせた。

「綺麗だ。まほさん」

「……」

賞賛に対して、恥ずかしそうに視線を逸らす。

「素晴らしく均整の取れたしなやかな肢体」。そんな陳腐な表現しかできないほどに美しい裸体だった。仰向けになつていてというのに重く揺れる乳房は全く形を崩しておらず、その先端では桃色の突起した乳首が揺れている。

またそこから腰へと引き締まってゆく曲線には一切の無駄な肉が無く、それでいて尻にかけては女性的なふつくらしたラインを描き、しなやかな太腿へと続いていた。薄い陰毛に彩られた陰唇は乳首と同じ桃色で、二度の絶頂で愛液に塗れ、未知の肉棒の挿入に備えるようにひくひくと震え、和明を誘う。

これからこの美しい身体に自分の肉棒を挿入し、射精する。それを想像しただけでも射精したばかりの肉棒は再び充血し、和明の臍まで届かんばかりに反り返る。

「あつ……」

「ゆつくり行くから。まほさん、出来るだけ力を抜いて……」

彼女の脚を抱え、ゆつくりと広げる。暴れる肉棒に手を添え、まほの膣孔に狙いを定める、

自身の結合部に視線を向けていたまほは、ふと和明を見た。

「篠原、さん……あの……」

「どうしたの？」

「お願い、します……キスしながら、挿れて、ください……」

「……分かった。んっ」

「んっ、んんっ……!」

上体を倒し、もう何度目か分からないキスを交わす。そのまま舌を絡め合うと、まほの身体の緊張が解けてゆくのが伝わってくる。

「ちゅ、ふうっ……いくよ、まほさん……」

「んっ、や、もつと、キス……!」

「……ああ」

ヤバいな、そう和明は思った。

あくまでこの場限りの恋人のふりをするだけのセックスだった筈だが、頬を紅潮させ、キスをせがむまほは本当に可愛らしく、愛らしく——本気になってしまいそうな自分がいる。

そのまま和明はゆっくりと腰を突き出した。僅かな抵抗の感触。そこから、熱く潤む肉を押し広げてゆく感触が龟头から伝わってくる。

「うっ、く、ぐうっ!」

「あ、ひっ、し、篠原、さんっ、あああっ!」

——襖はまだ、開かれない。

第三話

「あ、う、あぁっ！」

「ぐっ、き、キツイ…………！」

小さな和室の布団の上で身体を重ねる二つの影。

自らの中に巨根が押し入ってくる圧迫感に西住まほは背を反らし、悶え、和明は彼女の未踏の秘所の強烈な締め付けに呻きつつも腰を突き出す。

「しっ、篠原、さんっ！」

「まほさん、くうっ！」が、頑張つて。あと、少し…………！」

まほの手を強く握り、更に腰を進める。分厚く重ねられた濡れた肉の間を、固く勃起した肉棒がゆっくりと押し広げてゆく。

それは和明が今まで経験した女陰とは明らかに違っていた。誰の侵入も許してこなかった子宮に繋がる道を自分が広げ、本当にまほの「初めて」を奪っているのだという事実。それだけで和明の背にはぞくぞくと興奮が湧き上がってくる。

やがて彼女の最奥、子宮口に亀頭が触れた感触を覚え、和明は大きく息をついた。

「うっ、ハッ、はぁ…………！」

「あっ、あぁ…………！」

同様に大きく息を吐いたまほの体に浮かぶ、玉のような汗が胸の谷間を滑り落ちる。

和明は自分とまほの結合部に視線をやった。僅かに引き抜いてみるが、十分にほぐしたお陰か出血は最小限に抑えられたようだ。

とはいえ、和明の肉棒のサイズは平均より大幅に上回る。まほが逃げずに堪えてくれたからの挿入だ。和明は労るようにまほの頭を撫でた。

「ま…………まほさん、もう、大丈夫。全部挿いった…………！」

「あぁ…………わ、分かり、ます…………太いものが、私の奥まで…………！」

「まほさん、無理はしないでくれよ…………早めに終わらせよう」

苦しそうに顔を歪ませつつも、まほは答える。

挿入した肉棒をここで終わりにはできない。といって、まほに過剰な負担はかけさせたくない。

とりあえず最初の交合は早めに済ませよう。そう思い浅い所で速く擦ろうとして引こうとした和明の腰に、まほの脚が絡みついていた。

「え？」

きゅつとまほの脚が締まり、和明の腰を押さえる。

見下ろしてみると、まほは潤んだ瞳で和明を見上げていた。

「ま、まほさん、脚が……」

「……いします」

「え？」

「お願い、します……『早く』と言わず、もつと、時間をかけて、いいですから……」

まほの言葉と共に、彼女の膺が肉棒を締め付けてきた。戸惑いつつも和明は言った。

「うっ!? い、いや、でも、まほさん……!」

「分かって、きました……体が、篠原さんのを、欲しがって、いるんです……」

「……体が？」

まほの言葉に問い返す。まほは荒い吐息と共に答えた。

「今まで、ずっと……菊代さんから説明を、受けても……んっ、じ、自分の中の燻りの正体が、ああっ!　じ、実感が、出来ないでいました……」

「……………」

「でも……篠原さんが入ってきた時に、私の体が訴えたんです……『ずっとコレが欲しかった』って」

「まほさん……!」

「今も、自分の中に籠もっていた熱が、散ってゆくのを、あんっ、か、感じます……だから、遠慮せず……っ!」

しがみつくようにまほは和明の背に手を回し、耳元で囁いた。

「私を、感じて……今だけ、恋人になってくれると言うなら……膺内^{なか}

に、篠原さんのを、出して、くださいっ……！」

「……分かった。くっ、ううっ！」

「ああんっ！」

破瓜したばかりというのに、更に挿入を求め、射精を懇願するまほ。それは和明の彼女への遠慮を忘れさせるには十分過ぎるほどに刺激的だった。

まほの脚が絡んだままの腰を少しだけ引き、再び突き入れる。

「んはっ！」

まほのしなやかな身体が跳ねる。彼女の中から溢れる蜜と、和明の亀頭から滲む先走りが次第に抽送を容易にしてゆく。

和明の胸板にまほの乳房が押し当てられ、淫らに形を歪ませる。先端の桃色の乳首は固く突起して、腰の動きに合わせて和明の胸をくすぐる。

「あふっ、んっ！ ど、どうですか、篠原さんっ!? わ、私の、中……っ！」

「あ、ああっ、凄く……気持ち、いい！ 俺のを、凄い締め付けて……！」

「あっ、ありがとうっ、ごぎ、いますっ！ もっと、もっと来て、くださいっ……ああっ！」

苦しげだったまほの声に、時折甘い喘ぎが混じり始めた。彼女の言葉通り欲求不満を強く溜め込んでいた身体が一気に開放され、痛みを弱め、感度を高めているようだ。

和明は歯を食いしばり、今にも達しそうな射精感を堪えつつ肉棒を突き入れ、まほの乳房に口を寄せた。ゆさゆさと激しく揺れる乳房に吸い付き、舐め、尖った乳首を優しく口に含む。

「あっああっ！ 篠原さんっ！ そっつ、そんな、吸っては……っ！」

「んっ、ちゅ、じゅるっ……！」

びくびくと反応しつつ、まほは汗に濡れたショートカットを振り乱しつつ悶える。和明はその張りつめた水風船を思わせる弾力ある乳房に顔を埋め、舌先で丁寧にまほの乳首を舐る。

湯上がりの石鹸の香りとまほの匂い、それに彼女の汗が入り混じっ

た淫臭を思い切り吸うと、興奮の余り和明は軽い目まいを覚えた。

射精感がより強まってきているのを感じる。和明はまほの乳房から顔を離して言った。

「ぐっ、ま、まほさんっ！ そろそろ……！」

「んはっ！ わ、私、もっ……篠原さんっ、お願い、しまっ……んっ、ちゅ、ちゅうう……！」

何が「お願い」なのかは和明にも理解できた。再びまほの唇に自分の唇を重ねると、彼女の方から激しく吸ってくる。

「(ヤバいな……まほさん、本当に可愛い……！)」

浮気相手の娘である事は知っている。あくまでこの行為の目的はまほの欲求不満の解消で、彼女の希望に合わせて恋人の「ふり」をしているだけなのも理解している。

しかし理解していてなお——まほへの愛おしさを覚えつつある自分を、和明は否定できなかった。

「くっ、ちゅ、ああっ！ ま、まほ、さんっ！」

「あ、あ、ああっ！」

腰に回されたまほの脚がぴんと張る。ほぼ同時に和明はまほの一番奥まで肉棒を突き込み、腰を震わせた。

「うっ、うあっ！ で、出るっ！」

「……っ！」

切なそうに瞳を閉じ、まほは背を反らす。竿を根元から絞り上げるような締め付けに和明も限界に達し、彼女の中に大量の精液を迸らせる。

結構な我慢をしていただけに精液の奔流は留まらず、ビクンと腰が跳ねる度にまほの中に注がれてゆく。

「ひう……あ、熱い、篠原さんの、広がって……！」

「はあっ、はあっ……ま、まほさん、止まらない。まだ、出るっ……！」
恍惚とした口調でまほが呟く。逆流してきた白濁液が溢れ、布団に染みを作ってゆく。

たっぷり数十秒続いた射精感がようやく治まり、和明はようやく脱力した。

「ふう、はあ……!」

「んっ、まだ、溢れて……!」

秘唇の震えと共に、更に精液が零れる。絶頂の余韻に震えるまほに和明は言った。

「……まほさん、お疲れ様」

「……」

微笑みを浮かべる和明の瞳を、まほは無言で真っ直ぐに受け止め――

「え、ううっ!」

――挿入されたままの肉棒を締め付けてきた。

「え? ちょ……」

「……ごめんなさい」

汗と涙に濡れる頬を染め、まほが口を開く。

「まだ……体の中の熱が、治まりません……」

「……まほさん」

「お願いします、篠原さん……あと少しだけ、『恋人』になってもらえますか?」

まほは遠慮がちにそう言うと、切なそうに腰をもじつかせた。

「……っ!」

「んっ!? ん、んはっ……!」

射精を終えひと息ついて肉棒に、再び血流が巡る。

まほの膣内で肉棒を膨れ上がらせつつ、和明は堪らずまほにキスをした。嬉しそうに彼女は反応を返してくる。

「ああ、まほさん。俺で良ければ、喜んでっ!」

「あ、あふっ、んあぁっ!」

まだ熱を残す精液でより滑らかになったまほの膣内を、再び勃起しきつた怒張が蹂躪してゆく。

和明はまほの脚を抱え、より深く交わろうと腰を大きく、しかし快感が痛みにならないようゆっくりと抽送を始めた。ぐちゅぐちゅという淫らな水音が結合部から発せられ、そこに互いの荒い吐息が混じる。

「まほさん……まほ、さんっ！ ううっ、くっ、ああっ！」

「篠原、さんっ！ いいっ、いい、ですっ！ 私は、大丈夫、あんっ、で、ですから……もつと、動いて……んあっ！」

和明の抽送に合わせてまほが腰をくねらせる。自分の一番感じやすい所を探り、そこに肉棒が来るように調整しているのだ。

その腰のくねりに合わせ、肉棒の締め付けが絶妙な加減で変わってゆく。和明は初めてとは思えぬまほの反応に堪らない快感を覚えつつ更に腰を振った。

「う、うおっ！ まほさん、それ、ヤバっ……！」

「ああっ！ 篠原さん、のもっ！ 奥、奥までっ！」

ぱんぱんと肉を打ち合う音が響く。まほは涙を浮かべつつ悶えるが、その涙は痛みでなく快感の涙だ。

和明の肩を抱くように手を回し、まほは喘ぎつつ言った。

「篠原、さん……んっくうっ！ こ、この『解消』以外に、んっ、こ、交際されている方は、おられますか……？」

「え？ ううっ……いい、居ない、かな……っ！」

突然の交わりながらの問いかけに、和明は腰の動きを止めないまま答えた。肉体関係こそあれ、しほや千代との関係は「恋愛関係」と呼べるものではないだろう。

そう言われ、和明の動きに合わせてきゅっとならば肉棒を締め付けつつまほは言葉を続けた。

「そっ、それっ、なら……んんっ！ こ、恋人の『ふり』でなく、あふっ、本当に、私と……！」

「……！」

ぐぐくりと和明の喉が鳴った。

既に今の自分が「ふり」でしているのか、あるいは本気になっているのかの境界線が不確かになっていた和明にとって、これは効いた。

「まほ……さんっ！」

「ああんっ！ ちゅ、んっ、んはっ……！」

堪らなくなつた和明はまほにキスをすると、舌を彼女の口腔内に差し入れた。まだディープキスに慣れていないながら、自身の悦びと喜

びを示すように和明の舌の動きに合わせてようと舌の動きで返してくる。

「まほ、さん……ちゅ、はあっ、ふうっ……！」

「しのはら、さん……あふっ、ちゅ、ふぁ……！」

たん、と襦が開く音と共に、床の間に外の光が差し込んだ。

「えっ？」

肉棒に絡みつくまほの柔肉の感触に腰を止められないまま、和明は菊代かと思いきやそちらを見た。

「……………」

夕闇迫るあかね色の光を背に、長い黒髪をなびかせたスーツ姿の女性が無言で立っている。

「あ」

「……………」

思わず声が漏れ、思考が停止する。

逆光で顔こそ影になつていたが、その女性から発せられる静かな怒気はそれだけで何者かを雄弁に語っていた。

「あふっ……お、お母……様？」

和明の下で喘ぎを漏らすまほも、そちらに気付いたのだろう。流石に腰をくねらせるのを止め、そちらに視線を向ける。

「……………」

襦を開けた彼女、西住しほは無言のまま一歩踏み出して床の間に入ると、後ろ手で襦を閉めた。締めきりなかつた隙間から差し込む夕焼けの光と、ルームライトの淡い光が交ざりあう室内に、しほは腰を下ろす。

「え、あ……」

和明はまだ言葉を出すことができなかった。いずれ彼女にも伝わると思つてはいたし、会つた際には謝るつもりでもあった。

しかしこの状況は余りにも突然であり、同時に最も不味いタイミングでもあった。何か言うべきなのは分かっているが、何について、ど

う弁明すればよいのか全く頭に浮かんでこない。

「……何をしているの？」

その質問は酷く場違いなようできて、同時にもっともらしい問いかけだった。

眼前で自分の娘とセックスをしているのだ。何が起きているか分からない筈が無い。だからこそしほは、この一切の言い訳が通じない状況下でどういった返事が返ってくるか、それを確かめようとしているのだ。

「……………」

具体的な問いかけを受けたことで多少の理性を取り戻し、まほに挿入したまま和明は考えた。

先ほどとは別の意味で和明の喉が鳴る。半ば騙されたような形で連れて来られたのは事実だ。一応の弁明はできよう。

だが、この状況でまほや菊代に責任転嫁するのは男として最低だ。それならば、和明に選べる選択肢はひとつしか無い。

「……見ての通りです。しほさん」

「見ての通り、とは？」

首を上げ、しほの刺すような視線を正面で受け止める。彼女に下手な言い訳や逃げ口上は通用しない。

和明の脳裏に、夏の嵐の一夜の出来事が思い浮かぶ。あの時、しほは言いにくい事も含めて全て話をしてくれた。ここで嘘をつけば、あの時の彼女を裏切る事になる。和明は言葉を続けた。

「今のまほさんは……いつものしほさんより酷く溜まっている状態でした。だから俺が……まほさんが、処女なのは知ってましたが……楽にするために、手を貸しました」

「篠原、さん……………」

「……………」

和明の身体の下で横になったままのまほの表情に、少しの寂しさが浮かんだ。

ここからが勝負だ。和明は腹に力を込めて言った。

「その中で、俺は彼女も好きになりました」

「……!?!」

「っ！」

入室してから鉄面皮に徹していたしほの表情に、初めて驚きが浮かんだ。まほが息を呑む気配も伝わってくる。

「ほぼ初対面の俺に『初めて』を奪われる事にも、俺のモノの大きさにも、不安や怯えを見せる事無く受け入れてくれました。本当に恋人になれるのならなりたい。そう思ってしまう程、好きになりました！」

「和明、くん……」

「でも、俺がまほさんにそう思えたのは……しほさんが居て、俺が、しほさんの事を大好きだからです」

「……!?!」

言葉を失いそうになったしほに、和明は更に言葉を続けた。自分の気持ちは一切偽らず、彼女に届くように。

「不完全燃焼の時のしほさんがどれだけ苦しいかを知っていたから、俺はまほさんの苦しみも分かりました。しほさんが俺を求めてくれたから、俺はここに呼ばれました。俺がしほさんの事が大好きだから、しほさんも大好きな、まほさんの事を俺も好きになりました！」

夫が健在な人妻と幾人も体を交え、初潮を迎えたかも怪しい13才の少女とも関係を持ち、こうして浮気相手の前でその娘を抱いている。世間からしてみれば和明の行為は「不貞」以外の何物でもない。

——では、人間は本当に、生涯において一人の異性しか愛してはいけないのか？

それならば、しほが夫以外の男性に体を許すことは無かったろう。千代が自分に声をかける事も無かったろう。

確かに誰かを好きになったのなら、その相手に自分だけを好きになって欲しいのは当然だ。だが、それでも心が動いてしまうから——「浮気」なのだ。

常人の倫理観からすれば戯言もいいところである。それは和明にも分かる。しかし——夫や家族を愛しつつも自分を求めてくれたし

ほならば通じてくれる。和明はそれを信じた。

しほは暫くの沈黙の後、静かに言った。

「まさか、自分の娘を抱いている男性ひとに告白されるとは思っていなかったわ」

「……あ」

そう言われ、和明は今更ながら自分がまほに半勃起状態の肉棒を挿入したままだった事に気付いた。まほの膣内の快感に、萎みきる事もできず留まっている。

しほは正座の姿勢で膝に手を置き、裸で絡み合ったままの和明とまほに視線を向け、目を閉じた。

「まほ」

「……はい、お母様」

「この件は私が悪かったわ。貴女の状態を知らながら具体的な行動に移れなかった私の落ち度ね」

そう言うと、しほは深く頭を下げた。再び頭を上げ、まほに言う。

「もう、治まったの？」

「は、はい、それは……」

曖昧な返事をしつつ、まほは和明をちらりと見た。彼女がまだ治まっていないこと、それは今も和明の肉棒を包む襞の動きが何より物語っている。

それはしほにも分かったのだろう。小さなため息をひとつつくと、しほは和明の方に向いた。

「……仕方ありません。そのまま続けなさい」

そう言うと、しほは無表情にこちらを見つめたまま何も言わなくなった。

彼女の行動の意図が読み取れず、和明は思わず尋ねた。

「えっと……しほさん、何で、そこに？」

「見届けさせて貰います。初めてとはいえ、まほが和明くんに失礼が無い。また、和明くんが今言ったようにまほを想っているのかを」「な……!?!」

今度は和明が言葉を失う方であった。確かに島田愛里寿との時も

横に千代は居たが、あれは愛里寿も和明も同意の上だった。

抗議できる立場ではないとはいえ、それが今回はいきなり割って入ってきた母親が娘とセックスを見届けるというのだ。今までも大概無茶苦茶なシチュエーションを経験してきた和明だが——これはその中でも群を抜いている。

「……篠原さん」

まほの手が和明の背に周り、耳に彼女の口元が寄せられる。

「篠原さんもご存じかと思いますが……あんなったお母様は、絶対に引き下がりません」

「……だよな」

「だから、このまま私を……」

「うっ……！」

まほはそう言いつつ、挿入されたままの肉棒の根元をきゅつと締め付けた。びくんと和明の腰が震える。

確かにまほの言うとおり、この状況を収めるにはそれしかなさそうだ。

——何より、しほの許しを得たからか萎えかけていた和明の肉棒は再び固さを取り戻し、まほの中をもっと味わいたいとドクドクと脈動していた。自分の愚息ながら気楽なものだ。

「……分かった。いくよ、まほさん！」

「ふあっ！ あ、あうっ！ し、篠原さんっ！」

そうまほに言うと、和明は中断していた抽送を再開した。ぐちよぐちよと粘り気のある水音がやけに大きく聞こえ、そこにまほの喘ぎが混じる。

その光景を、しほは静かに見ていた。

——斯くして、冒頭の状況に至る。

「あっああっ！ し、篠原、さんっ！ また、何か……！」

「ああ、俺も、も、もう、すぐっ！」

絶頂が近づく。和明は傍らのしほの視線も忘れ、まほの膣を押し広

げて肉棒を挿入し、亀頭で子宮口にキスをする。

「んんっ！ あ、は、あああっ！」

「ぐうっ！ で、射精るっ！」

まほの一番奥まで突き込んだところで、和明は尻に込めていた力を抜いた。堪らない射精感と共に、和明以外の精を知らないまほの膣内を精液が汚してゆく。

「あうっ、あ、はああ……」

和明は大きく息をつきつつ更にまほに注ぐ。彼女の無数の襞は絞り上げるように肉棒に絡みつき、一滴でも多く和明から精液を得ようと蠢く。処女を失ったばかりの強烈な締め付けと、まるで熟練者のような襞の動きが合わさったまほの膣に、和明は恍惚の吐息を漏らした。

「あ、ああ……まほさんの、凄い……！」

「はあ、んっ、あふっ……し、篠原、さん……！」

「……」

しほは何も言わず、和明とまほの絶頂を眺めている。

射精感が弱まると共に、まほの膣から肉棒が排出された。先走りと精液と愛液、そして僅かの血が混じった汁が照り光る亀頭は、確かにまほの処女を奪った証だった。

「(流石に……ここまで、だよな)」

和明はちらりとしほに視線を向けた。母親を前にして、このまま四回戦は――

「篠原さん……」

「へ？」

自分の下に居たまほがするりと抜け出すと、ついと和明の腕を引いた。射精直後で脱力していた事もあり、そのまま和明はころりと仰向けになる。

「まだ……いいですか？」

「……？」

その仰向けになった和明の身体にまほが乗ってきた。乳房を押しつけ、肉棒を自身の秘唇に沿わせると小刻みに腰を揺すり、亀頭をク

リトリスに擦りつけてくる。

「うおっ!?! ま、まほさん……!?!」

「あふっ、ンツ、ンンツ……!?!」

和明の言葉を聞いているのかいないのか、まほは快感に身を震わせる。自分からキスを求めてきたまほに唇を重ねつつも、和明は小声で言った。

「ん、ちゅっ……ま、まほさん、まずいって……流石に、これ以上しほさんの前で……」

「ちゅ、あむっ……まだ、治まらないんです……多分、これで最後ですから。あの、篠原さん」

まほも小声で答えてくる。確かに彼女の身体から感じる火照りはまだ治まっていない。だが、どうやらそれだけでは無いようだ。

「な、何?」

「そんなにお母様が……気になりますか?」

「……!?!」

気のせいだろうか、まほの帯びる空気が変わったように和明は感じた。

「篠原さんは、お母様と何度もこんな事を、されていたんですね?」

「いや、そりや気にするって……逆に聞くけど、まほさんは平気なのか?」

「私は平気です。だから……」

「うっ……!?!」

囁きと共にまほの手が肉棒に添えられ、しこしこ上下に扱かれる。たちまち回復した肉棒をそのまま屹立させ、まほは和明の上に跨った。

「お母様の事を忘れるくらい、私で気持ちよくなってください。しの……和明、さん」

「まほ、さん……!?!」

和明に跨ったまま、まほはしほに言った。

「お母様……あと少し、続けさせてください」

「私に聞かなくていいわ。貴方の中の不満が解消されるまで続けなさい。まほ」

「はい……私だけでなく、和明さんをお母様より気持ちよくさせられるよう頑張ります」

「……………」

何だかしほからの「圧」がより強くなったように思える。

そしてまほの母親に対しての挑発的な発言、これは一体何を意味しているのか。混乱する和明の頭に、菊代の言葉が思い浮かんだ。

——お嬢様は顔立ちだけでなく、体つきも若いころの家元に非常に似ております。

——（しほは）ああ見えて、独占欲の強い方ですから。

もし、まほが似ているのが外面だけでなく内面も含めてだとしたら。

そして、先ほどの和明の言葉で自分への独占欲が生まれたとしたら、取る行動は——

「うっ、あ、熱いっ……………」

しかしそれ以上の思考は、腰を落としたまほの熱い膣内に肉棒が包まれた事で遮られた。

「う、動き、ますね。和明、さん…………んっ、あっ、ああっ！」

和明の胸板に手を置き、リズムカルに腰を振り始めるまほ。それを未だ静かに見つめるしほ。

どうやらこの交わりは、まほの欲求不満の解消だけで終わるものではないようだ。確信に近い予感を覚えつつ、和明は自分からも腰を動かし、まほを下から突き上げた。

第四話

「これと……これ」

製氷機から氷を器に移し、冷凍庫で冷やしていたグラスを二つ、それに加えて麦茶入りの水差しを用意する。

続いて冷蔵庫を開け、中に並ぶ小瓶を眺めつつ吟味する。

「篠原様には……家元あの様子だと、それなりに強いものが必要そうだから……」

ひよいひよいと何本かの瓶を出す。

それらを盆に置き、あらかじめ用意していた濡れタオルを入れた袋を腕に通すと井手上菊代は廊下に出た。

「……ああ、忘れていました」

別の戸棚からとろりとした液体の入った化粧品を取り出し、濡れタオルと一緒に入れる。

「さて、行きましようか」

小さな和室。そこに敷かれた布団の上で男の上に跨る少女と、傍らで正座でそれを見つめる女性。

「うっ……はあっ……か、和明さん、どうですか……？」

「くうっ！ まほさんの、凄い、締まるっ……！」

垂直に立てた怒張に女陰の位置を合わせ、西住まほはそのまま腰を落とす。先の射精で彼女の中に注がれた精液がごぼりと零れ、亀頭に降りかかる。

多少は滑らかになったとはいえそれでも狭いまほの膣内の締め付けに、和明は呻きつつ言った。

「う、動き、ますね……んっ、ああっ！」

「うおっ!？」

和明の答えにまほは嬉しそうに目を細めると、和明の胸板に手を置いて腰を振り始めた。処女を失った直後で痛みが全くないという訳でもなからう。それでもまほは自分から積極的に性交を求めてくる。

和明は出来るだけまほの痛みに繋がる箇所を避けようと意識しつ

つ、自分からも腰を動かし始めた。

「ふあ、あつ、あうんっ！」

「……………」

布団の傍らで座ったままの西住しほは何も言わない。ただ静かに、和明とまほの交わりを見つめている。

「ううっ、ま、まほ、さんっ！」

その視線を感じつつも和明は腰の動きを止められなかった。空いた手をまほの乳房に伸ばし、揺れる豊かな双丘を下から揉みしだく。こりこりとした乳首の感触が掌をくすぐり、確かな弾力が指を押し返してくる。

「あふっ、あ、ああっ！」

和明の指が乳房を弄る度にまほは喘ぎ、肉棒を包む愛液が粘りを増す。その間もまほは腰の動きを止めず、屹立した和明の肉棒を呑み込んでゆく。

日々の戦車道の修練で鍛えられたまほの引き締まった肢体が和明の上で踊る。時折彼女が身体に力を込めると膣内全体がきゅつと引き締まり、無数の襞が竿全体を締め付けると同時に強烈に扱き上げる。

既に三度射精しているというのに、早くも和明の腰の奥からは強い射精感が昇ってきた。

「くっ、ぐうっ！ ま、まほさんっ！ ごめっ、そろそろっ！」

「はっ、はいっ！ 私も……………んひっ！ か、和明さんので……………ああっ！」

まほの身体がビクビクと震えを見せる。軽い絶頂が既に来ているようだ。その震えに合わせて肉棒の締め付けも断続的に強まる。

やがて下から支えるようにまほの胸を揉みつつ、和明の我慢も限界に達した。

「うあっ！ で、出るっ！」

「ふあ、あああっ！」

まほが和明の上で背を反らし、そのままくたりと脱力する。乳房にあてていた手を彼女の肩に回し、和明はまほを柔らかく受け止めた。

「ふう、ふう……くっ、はあ……！」

「あ、んんっ……かずあき、さん……」

荒い呼吸を吐き出しつつ、絶頂の余韻に浸る。

「……………」

スツとしほが腰を上げようとした時、襖の向こうから声が飛んできた。

「失礼致します」

続けて静かに襖が開けられると、盆と袋を傍らに置いた菊代が座っていた。横の荷物を室内に入れてから座った姿勢のまま入室し、やはり静かに襖を閉め直す。

「ふうっ……ええ？ 菊代さん？」

「……………どうしたの、菊代？」

顔の汗を拭いしつつ尋ねる和明と同様に、座り直したしほが菊代に尋ねる。菊代は平時のままの微笑みを浮かべて答えた。

「皆様、一度は水分補給をされた方が良くかと思ひまして。お嬢様も篠原様も、ご自覚は無いかと思ひますが相当に水分を失っております」

菊代にそう言われ、和明は自分の喉がカラカラに渴いているのに今更ながら気付いた。自身の秘所から肉棒を引き抜き、和明の上から退いたまほが言う。

「んっ……それで、支度を？」

「欲求不満が解消されたとしても、それでお身体を壊されては何にもなりませんので……家元にしても急ぎで戻られて、喉が渴かれていますのでは？」

そう言いつつ菊代は慣れた手つきで二つのグラスに氷を入れ、麦茶をそれに注ぐとしほとまほに差し出した。

「あとこちら……篠原様、お嬢様、一度身体をお拭きになつて下さい」

「え？ あ、どうも……」

袋の中に入っていた濡れタオルを二枚差し出す。戸惑いつつも和明はそれを受け取った。

「ありがとうございます、菊代さん」

肌を火照らせたまま、まほは菊代に言う。麦茶を傾けた。氷がカランと鳴る音が何とも涼しさを感じさせる。

そこでふと、麦茶のグラスがしほとまほの分しか無いことに和明は気付いた。自分の分は無いのだろうか。

「篠原様はこちらをお飲みください」

視線の動きから和明の考えを察したのだろう。菊代は和明に液体入りの小瓶を差し出した。市販の60ml栄養剤ほどのサイズで、何やら難しい文字のラベルが貼られている。

「ああ、いただきます……っ!? コホッ、コホッ!」

ご当地の栄養剤だろうか。その程度の意識で封を切り、瓶を傾けた和明は喉を襲った激しい苦みと辛さ、同時に舌を襲う激しい甘みに咽せた。危うく吐き出しかけたが、何とか飲みきる。

「コホッ、コホッ……き、菊代さん！ 何ですかコレ？」

「篠原様には本日はご負担をおかけしていますので……お客様用にご用意しております中でも、特別に強いものをお持ちしました」

「いや、『強い』って……」

確かに、成分こそ分からないがコンビニや薬局などで買える市販の精力剤とは別格の中身だったようだ。まだ胃に流れ込んだばかりというのに、もう体が熱くなってきているように感じる。

もう一本差し出された小瓶を受け取り、今度は慎重に飲む。渴していた身体に、水分と活力が行き渡ってゆくのを感じる。和明はふう、と息をついた。

「……あ」

「……あ」

ちようど麦茶を飲み終えたしほと目が合う。緊張感と淫蕩さが混ざり合っていた場の空気は、菊代の文字通りの水入りによってその緊張を薄めていた。

しほに改めて謝るなら今か。和明は飲み終えた小瓶を盆に戻し、しほに裸のまま向き合った。

「どうしたの、和明くん」

「……一切、言い訳はしません」

そう言うと和明は前に手をつき、深々と頭を下げた。土下座である。

「……事情はどうあれ、まほさんをキズ物にしたのは俺の決断です。謝って済むことでないのは分かっています。煮るなり焼くなり、好きにしてください」

「和明さん、それは……!」

まほが動揺の声を漏らす。

自分の浮気相手に娘の処女を奪われたのだ。しほの怒りや動揺は当然だと和明も感じていた。ある意味、この最悪なタイミングでしほが帰参したのも必然だったのだろう。そう思えた。

無限にも感じる数秒の静寂。頭を下げたままの和明に、しほの声が届いた。

「頭を上げて、和明くん。西住流家元として、謝らなければいけないのは私の方」

「……家元として?」

予想外の言葉に顔を上げてみれば、しほは落ち着いた表情のまま和明を見ていた。

「先ほども言った通り、まほが私と同様の鬱屈に悩まされていたのは知っていたわ。戦車道家元として最優先されるべきは、娘の操や個人の拘りではなく『戦車道を修める者として、常に十全の実力を発揮できる状態』にあること。それを私は、個人の感情で判断を遅らせた」

「……」

和明にとっては想像外の信念である。どう答えて良いか分からぬまま、しほは言葉を続ける。

「明日には北海道に行かなければならない中、まほがこういった決断をしたのは理解できるし、それに和明くんが応えたのも分かる。だから……家元として反省すべきは、私なのよ」

「しほさん、そんな事は……!」

今にもこちらに頭を下げそうなしほに、和明は膝立ちのまま身を寄せた。

「……え？」

妙な浮遊感。

次の瞬間、畳の感触を背中に覚えると共に和明の視界は180度回転した。

「え？ あ、あれ？」

何が起きたかを理解するのに数秒を要した。

しほに触れようとした瞬間、彼女の方から腕をそつと握られ——投げられた。

そう、しほはまるで柔術の当て身のように和明の身体を引き、回転させ、痛みの無いように畳に投げたのだ。

「……でも、それはあくまで家元としての話」

しほの声。その響きは先ほどまでと変わらない。和明は慌てて顔を起こし、彼女の姿を探した。

「母親としては勿論、納得できていないわ。そして……」

「ちよ、しほさ……！」

身体の下の方から聞こえる。和明はそちらを見た。

「……女としては、怒り心頭と言ったところね」

まほととの連戦を終え、しかし菊代の精力剤によって再び活力を取り戻しつつある半勃起状態の肉棒。

和明の太ももに手を添えるようにして、しほはその肉棒を眼前まで近づけさせていた。

「しほ……さん」

一見、その表情は平時と変わらない。

しかし亀頭に吹きかけられる熱い吐息が、肉棒から立ち昇る生臭い匂いを嗅ごうとひくつく小鼻が、瞳の奥で揺らぐ欲情の炎がしほの内面の滾りを表している。

「ヤバい。これ、本当に……ヤバい」

驚きや興奮よりも先に和明が覚えたのは、戦慄だった。

この一か月弱の間、和明はしほと何度も肌を重ね欲求不満状態の彼女とも接してきた。だからこそ分かる。

部屋に入ってきてから——あるいは、その前から——しほは「公の

場における家元」の姿に徹する事で、自分の内面の激情やら欲情やらに蓋をしていたのだ。

そして、その噴火直前のマグマめいた状態まで溜め込まれた状態から蓋を外そうとしている今の彼女は——和明が今まで見た事が無い程に「火」が点いていた。

肉棒に目を据わらせたまま、しほは言った。

「和明くん、私が来る前を含めて、まほには何度射精したの？」

「へ？ え、あ……よ、四回、です」

「そう……それなら、私にその倍は射精だしなさい。でないと言えないわ」

「ば、倍ってそれは、うあつ!?!」

しほの言葉に何とか反論しようとした和明だったが、直後に股間が熱い滑りに包まれ思わず腰を跳ねさせた。

「んっ、じゅるっ、んぶっ!」

スーツ姿のまま、しほは和明の肉棒を一気に根元まで呑み込んだ。亀頭が喉奥にこつんと当たったのが分かる。そのまましほは頭を大きく上下させ、肉棒を貪り始める。

「じゅるっ、んっ、んっ! んはっ、ちゅうう……!」

「あうっ、ぐっ、ちよ、しほさっ!」

貪欲な、しかしそれでいて決して痛みを越えずに和明に快感を与えてくる激しい口淫を何とか一旦止めようとするが、しほは止める気配はない。時折亀頭が喉奥に当たると苦しそうに眉をひそめるが、それでも口を離す事無く唇をすぼめて締め付けつつ、舌を絡ませ、唾液で竿を濡らしてゆく。

「お母様……!」

突然のしほの挙動にまほは驚き、腰を浮かせた。しかしそれを横の菊代が制する。

「お待ちください、お嬢様。家元は決して篠原様を壊したりは致しません」

「菊代さん?」

「むしろ、後学の為にも座ってご覧になられた方が良いかと思えます。

雄と雌のまぐわいと言うものを」

随分と勝手な事を言ってくれる。あるいはしほが彼女らの行動に気づき、昂って和明を求めてくるのまで菊代の思惑だったのでは。和明の脳裏にそんな考えが浮かぶ。

「んはっ、ちゅ、ンンッ！」

「くうっ！」

しかし、そんな考えもしほの激しい口淫によって吹き飛ばされてゆく。

半勃起状態だった肉棒はたちまち充血し、血管を浮かび上がらせ赤黒く膨れ上がった。しほは瞳を潤ませ、口をいっぱい広げながら奉仕を続ける。

「んちゅ、はっ、あむっ……！」

時折、まるで水泳の息継ぎのように一瞬だけ肉棒から口を離し、再び啜えこむ。頭の動きを止めないまま彼女はもどかしそうにジャケットを脱ぎ、シャツのボタンを外す。和明が視線を向けると、しほの頭越しに淫らにくねる腰周りが見える。

「じゅるっ、ちゅうう……！」

「うあっ！ しほさん、そんな、強く吸っちゃ！」

整った黒髪をかき上げつつ、今度は亀頭に吸い付くように唇を押し当てキスを繰り返す。鈴口から滲む先走りがしほの唇を汚すが、それを彼女はむしろ喜々として舐めとってゆく。

一方でシャツはボタンが全て外され、レースに彩られた黒いブラ、そしてそれに包まれたしほの豊満な乳房が露わになった。肉棒への奉仕で頭を動かすたびに重そうに揺れる乳房は和明の視線を否応なく吸い寄せ、より昂らせてくる。

「あっ、あうっ！ し、しほさんっ！ もう、出るっ！」

「んはっ……まだよ。射精するなら、全部、ああ……ンッ！」

「うおっ!？」

再びしほは口を一杯に広げ、既にコーラ缶ほどまで怒張した肉棒を一気に啜えこみ、激しく頭を上下させる。口の端から泡が立つ程の責めに、和明は容易に絶頂に達した。

「うあつ！　で、出る、しほさん、出るうっ！」
「ンンッ！　んぶっ、ふっ、んぐっ……！」

精力剤の効果だろうか。和明の中で早くも増産された精液が腰の奥から迸り、しほの口腔内へと容赦なく放たれた。

喉奥に精液が直撃している筈だが、しほは肉棒を根元まで咥えこんだまま迷わずそれを嚙下してゆく。

「ああっ、はっ、ああ……しほ、さんっ……！」

「ちゅうう」

「くっああっ！」

ようやく射精感が治まりかけたところで、しほは尿道に残っている精液まで吸い取ってきた。腰を跳ねさせ、和明は悶絶する。

「ハアツ、ハアツ……うっ、か、ああ……」

「……っば」

更に十数秒経ち、完全に射精が治まり――

「……じゅるっ、はむっ」

「うあつ！　ちよ、し、しほさんっ!？」

――再び口淫を再開した。

射精直後で敏感になっているところへの休みない責め。流石に和明は堪らず、彼女が頭を上げたタイミングに合わせて腰を引いた。ちゅぽんと唾液に塗れた肉棒が唇から解放される。

「あ……！」

「い、いや、しほさん。幾ら何でもまほさんの前でがっつき過ぎですって！」

まるで「おあずけ」を食らった犬のように舌を出して肉棒を追うしほに和明は言った。

「まほの前」という言葉が効いたのか、ようやくしほは一旦肉棒を追うのを止めた。しかしその視線は赤黒くひくつく龟头へと注がれたままだ。

「仕方ない……でしょう？　貴方とまほのセックスを間近で見ている、あと少しでおかしくなる程だったもの。あと7回は相手をして貰わないと……」

「駄目だ……本気でしほさん、俺にまほさんの倍、射精させる気だ」
幾ら和明でも、今のペースのフェラで連発されては快感より痛みが勝る。とはいえ今のしほに理屈が通用するとは――

そこまで考えた時に、和明の中にある案が浮かんだ。

「あの……それならしほさん。次は胸でしてもらっても、いいですか？」

そう言われ、しほは少しまほの方を見てから頷いた。

「……構わないわ。和明くん、胸が好きだものね」

「よし、これで多少は落ち着けるか？」

しほの巨乳による奉仕は強力だが、それでも捕食行為に近い口淫に比べれば刺激は緩やかだ。今のままのペースで搾り取られる事態はこれで避けられるかもしれない。

背中に手を回し、しほはブラのホックを外した。拘束を解かれた二つの乳房がゆきりと重そうに揺れる。朱色の乳首は既に固く突起しており、彼女の興奮の度合いが和明にも伝わってくる。

「ふむ……やはり、こちらもお持ちして正解だったようですね」

その時、菊代が進み出たかと思うと化粧品の容器のようなものを差し出した。中には粘りある透明な液体が入っているようだ。和明もそれには見覚えがあった。

「どうぞ、家元」

「……使わせてもらおうわ」

「ど……どうも」

つくづく菊代は用意がいい。少しひきつった顔で和明は一応の礼を返す。

これは分からなくなってきた。実際今までしほのパイズリを受けた事は何度かあるが――ローションを使う事になるのは初めてだ。

「んっ……」

容器を傾け、しほは自身の胸にローションを垂らした。微かに良い香りがする液体がねっとり乳房を濡らし、照り光らせる。

その様子だけで、この後に待ち受ける快樂への期待で和明の肉棒は反応を示した。むくりと鎌首をもたげた亀頭にしほは視線を送り、あ

お向けになつてゐる和明の足元から身体をすり寄せる。

「そろそろ『お預け』も辛くなつてきたから……始めるわよ、和明くん？」

そう言いつつ、しほは自分の乳房に手を添えて左右に広げると和明の肉棒の位置を定めた。

「え？ あ、お願いしま……すうっ!!」

和明が返事を返す間もなく屹立させられた肉棒は左右から滑りある乳肉に挟まれ、そのまま扱かれ始めた。

手に余るサイズのしほの乳房だが、和明の巨根はそれでも包み切れず谷間から亀頭が覗いている。しほは乳房に添えた手を自在に動かしつつ、首を傾けて亀頭に舌を伸ばす。

「うあっ、はっ、くううっ!」

「ンツ、ちゅ、れろっ……ど、どう、和明くん。私のおっぱいは……?」

「ううっ! さ、最高、ですっ……!」

亀頭を舐めつつ問いかけてくるしほに、和明は素直に答えるしかなかった。

褻などを有しない乳房での奉仕は、本来は二の腕などで擦るのと変わらない筈である。しかし竿を包み込むしほの乳房は柔らかくも芯に弾力を備え、堪らない乳圧で肉棒を扱いてくる。

それに加えてローションで滑らかなになつたことも大きかった。ローションにしほの汗、和明の先走りが混じり、緩急をつけたしほの手の動きに合わせて竿全体が擦られ堪らない快感を和明に送ってくる。

「んはっ……あむっ」

「うあっ!」

和明の反応にしほは楽しみを覚えたのか、今度は乳房の位置をやや下げ、竿の根元辺りから扱く動きに変わった。必然的に亀頭がよりしほの顔に近づき、そのままかぷりと口に含まれる。カリの裏側をチロチロと舐められると、両の乳房に挟まれる感触と熱い舌で舐められる刺激が相まって更なる快感が湧きあがってくる。

「ンツ……ンンツ……」

しほは更に乳房での奉仕と口での奉仕を続ける。

しまった、結局これではフェラとパイズリが合わさっただけで彼女のペースのままなのは変わっていない。そんな事を考えつつ和明は視線を横に逸らした。

「ああ……お母様……あんな、熱心に……！」

少し離れた場所で座ったまま、こちらを凝視するまほが見える。自分の処女を奪った男と実母との交わりは、彼女に嫌悪感でなく興奮を感じさせたらしい。切なそうに腰をもじつかせつつ、亀頭を啜えこむしほから視線を逸らせないでいる。

「うっ、うおっ!？」

亀頭に冷たい液体がかかる。しほが一旦口を離し、ローションを追加で垂らしたのだ。より滑らかさを増した深い乳房の谷間で、限界まで怒張した和明の肉棒は粘り気を帯びた水音と共に更に扱かれ、擦られ、挟まれてゆく。

同時に和明の身体の奥からは熱いものが滾り始めていた。先ほどの精力剤が本格的に体に回ってきたのだ。自分の中でドクドクと精液が凄い勢いで作られてゆくの分かる。

「あ、はっ、ちゅ……びくびくしてきた。和明くん、もう……そろそろなんじゃないの？」

「うぐっ……は、はい。もう……射精しそうですっ……！」

「構わないわ。好きな時に、出して……れろっ」

しほはペロペロと亀頭を舐め、とどめとばかりに乳房を両側から寄せ、強烈な乳圧を肉棒に与えてくる。

「あぐっ、し、しほさんっ！」

和明は呻きと共に精液を放った。噴水のように白濁液が亀頭から溢れ、しほの乳房を、舌を、顔を汚してゆく。

「……っ！」

竿の根元の方の乳圧が上がった。下から上へ絞り上げるようにしほは手を動かしてゆく。

巨乳の谷間に拘束された肉棒は射精を終えてからも解放されず、亀頭を舌先で綺麗にされてようやく自由になった。

「ああ……ふう、はあ……！」

大きく息をつく和明に、しほの言葉が投げかけられる。

「和明くん。まだ……大丈夫よね？」

「……ええ、勿論です」

ここで弱音は吐けない。何より、和明としてもここまで来たら最後までしほと交わりたかった。

和明の返事にしほは口元を濡らしたまま微笑むと、首を傾けてまほに言った。

「まほ、和明くんが貴方に遠慮して、腰の動きを我慢していたのには気づいていた？」

「え？」

まほが驚きの声を漏らす。

「本気の彼はこんなものでは無いわ……今、それを見せてあげる」

そう言いつつ、しほは肉棒を優しく撫でる。

それだけで和明の肉棒はびくと震え、再び勃起を取り戻し始めていた。

第五話

小さな和室の中、絡み合う二人の男女と、それを傍らで眺める二人の女性。

「……うわ。しほさん、凄いことになってますよ?」

上半身裸の西住しほのスカートを外した和明は思わず声を漏らした。

彼女の黒いショーツとストッキングの鼠径部周辺には既にじつとりと染みが出来ており、触ってみればにちゃりとした粘り気が伝わってくる。

「……………」

和明の言葉に、しほは頬を染めて視線を逸らした。

貪欲な彼女のローションパイズリを経て、今はしほの下半身を脱がせている状況だ。「(和明の本気を)見せてあげる」としほは言ったが、恥ずかしいものは恥ずかしい。

そのまま和明はストッキングに手をかけ、しほの腰を上げた動きに合わせて引き下ろした。むわっとした熱気と湿気が強まる。くるくると丸めて横に置き、続けてショーツへ。

「こんな……俺とまほさんがしている間から、こうなっていたんですか?」

「……………聞かないで」

小声でしほが答えた。

ショーツを脱がせると、ステッチと秘所の間で愛液の橋がかかる。テラテラと濡れた陰毛が朱色の秘唇を彩り、ひくつく陰唇が和明の眼前に広がる。

「……………」

ごくりと和明の喉が鳴る。

未成熟なまほのそれと異なる、熟れたしほの秘唇。幾度見てもその淫らさは和明の中から強い欲情を引き出してくる。菊代の精力剤が回ってきたこともあり、既に和明の肉棒はしほの膣内の快感への期待でビクビクと脈動している。

「か、和明くん……」

切なそうな瞳で、しほは和明を見た。

「どうしました、しほさん？」

「最初だけど……後ろから、いいかしら？」

「……分かりました」

確かにまほに和明の「本気」を見せるのであれば、その体位が一番見せやすいだろう。

しほは身体を回し、四つん這いになると和明に尻を向けた。豊かな肉付きの尻が和明の眼前で揺れ、その間からは愛液に濡れた陰唇が照り光る。

「こんなに濡れて……これなら、下準備は要りませんね」

「え、ええ……だから、早くきて……!」

そう言いつつ、しほは和明に向けて尻を振った。淫らな誘いに和明はごくりと喉を鳴らし、竿に手を添えると彼女の腰にそれを寄せた。

「……いきますよ、しほさん」

「お願い……奥が、凄く切なくて、早く……んっ、ああっ!」

「くっ、くうっ……!」

しほの腰に手をあて、膣孔に龟头を定めると和明はそのまま腰を突き出した。濡れそぼったしほの膣内は待ち望んでいたように侵入してきた肉棒に襲を絡ませ、押し広げてくる巨根から快樂を得ようと締め付けてくる。

「あ、熱っ! しほさん、ちよつと、これっ……!」

「ふあっ、あ、あはあっ!」

切り揃えられた艶やかな黒髪を振り乱し、膣内の熱さに和明が驚くのも待たずしほは腰を振り始めた。本当に挿入を求めていたのだろう。きゆうきゆうと締め付けつつも内側からは更に愛液が溢れ、抽送を滑らかにしてゆく。

「ぐっ……なら、遠慮無くいきますよっ!」

「き、来てっ、あううっ! き、来てる、奥までっ! 和明くんの、太

い、のっ!」

「うおっ!?! んっ、凄い、締まるっ……!」

しほの締め付けに呻きを漏らしつつも、和明は彼女の腰を強く掴み腰を大きく引き、そのまま一気に奥まで突き込んだ。大きな嬌声と共にしほが悶える。

やはりしほの膣内は色々と格が違う。処女であったまほの未踏地の強烈な締め付けは確かに素晴らしいものだったが、強い抵抗感もあった。

それに対してしほの秘所は、和明のコーラ缶程もある怒張を完全に呑み込み、受け入れ、締め付けながらも同時に包み込んでくる。今も竿の根元は強く締め付けつつも、竿全体は無数の鬚が舌のように蠢き、優しく肉棒に対して射精を促してくる。

「はあっ、はあっ……し、しほさん、やっぱり、凄いつ……！」

「んんっ……か、和明くんのも、素敵よ……いっぱい、広がって、奥っ、届いてっ！ ああっ！」

「うっ……くううっ！」

早くもこみ上げる射精感を歯を食いしばって堪えつつ、和明はしほの動きに合わせて腰を使い始めた。互いの肉がパンパンと打ち合う度に背中越しにも見える豊満な乳房はゆきゆきと揺れ、ひくつく肛門までもが和明からは丸見えとなっている。

「うっ、くっ、うおおっ！」

「あっ、あひっ、あっああっ！」

和明の獣のような呻りに応えるように、しほは日頃の凜とした姿を投げ捨て舌を出し、時折びくりと体を震わせる。その度に膣内はきゅと締めまり、和明の肉棒を逃がすまいと鬚が竿全体を撫でてくる。

和明の中からは、既にまほや菊代が横で眺めているという遠慮は失われていた。ただ目の前のしほの蠱惑的な肉体を余すところなく味わいたい。その衝動だけがあった。

まほから数えて既に六回の射精を行っている肉棒は、まるで萎える気配がない。活力が体の奥から湧いてきて、熱を増した血脈が股間に集中してゆくようだ。

「もっど、もっどよ、和明くんっ！ 奥、もっど、ンンツ、っ、突いてっ！」

「ぐっ、こう、ですかっ!？」

「ふあっ、あ、ひいっ! 凄いつ、和明、くんっ、凄いつ!」

「お母様……こんな、激しい……んっ、んんっ……!」

傍らからのまほの喘ぎ声。視線を横に向けてみれば、和明のしほの交わりを見つめたまま彼女は自身の股間を弄り初めていた。どうやら興奮を抑えられなくなってきたようだ。

ならばもつとまほにも感じて貰おう。痺れる頭で和明はそう思い、腰を振りつつしほに覆いかぶさると、揺れる乳房を強く掴んだ。

「んっああっ! そこ、ああんっ!」

「しほさん、胸、前より大きくなって、ませんか……うっ、くうっ!」
手に余る大きさのしほの胸を激しく揉みしだく。ずっしりとした重みと弾力が伝わり、しほを自分のものにしていくという支配感を和明に覚えさせる。

和明は指の谷間で固く尖ったしほの乳首を柔らかく挟み、くりくりと弄った。

「んああっ! か、和明、くんっ! そこっ、そんな、弄るの……ああっ!」

胸と股からの同時の刺激にしほが嬌声をあげる。言葉こそ拒絶を表しているが、膣内の締め付けと乳房の張りは尚も増し、更なる行為を求めていることを和明に伝えてくる。

堪えていた射精感が強まってきた。和明は乳房から手を離し、再びしほの腰を掴むと止めとばかりに腰を叩きつけた。

「し、しほさんっ、そろそろ、出しますよっ!」

「いつ、いいわっ! 和明くんの、んっ、好きなとき、に! んっ、ああんっ!」

「ぐっ、う、ああっ!」

和明は更に夢中で腰を振った。パンパンと肉が激しく打ち合う音と共に、結合部から愛液と先走りが混ざり合った飛沫が散る。

「あっ、あひっ、んっ、あああっ!」

「うおおっ! で、出ますっ! 出るっ……!」

「……………っ!」

どくんと和明の腰が震えるのと共に、大量の精液がしほの膣内に放出されてゆく。しほは熱い迸りを子宮に受け、ぴんと体を張ったかと思うとそのまま上体が崩れ落ち、組み伏せられた姿勢のまま更なる射精を受け止めてゆく。

「うっ……あ、ああ……！」

「ひうっ……まだ、出てっ……！」

止まらない射精に和明が息を漏らすと、しほも同様の恍惚の声を漏らす。結合部から溢れた精液がボタボタと零れ、布団に染みを作つてゆく。

「ああ……お母、様っ……んっ！」

その光景を見つつオナニーを行っていたまほも絶頂に達したようだ。股間を弄っていた指の動きが止まり、びくりと体を震わせる。

「うっ……ふう……！」

次第に射精感が治まってきた。心地よい余韻を感じつつ、和明は肉棒をしほの膣内から引き抜こうとした。

「……いや、待てよ！」

「んっ……和明くん？」

ふと、その動きが止まる。

息を吸い、自分の身体を確かめる。熱い滾りはまだ和明の中で燃えたままだ。これなら――

「ひうっ!？」

しほの身体が跳ねた。半ば挿入されたままの肉棒が膨れ上がり、勃起を取り戻してゆく。

そのまま抜かれると思っていたであろうしほは、和明の行動に悲鳴めいた嬌声をあげた。

「あうっ！　かつ、和明、くんっ!?　そんな、まだ、中っ！」

「このまま四発目いきますよ、しほさんっ！」

「ああ……ま、待って、んひいっ！」

有難いことに菊代がくれた二本の精力剤は思った以上に和明に精力を湧き上がらせていた。後遺症が残らないか、少し心配になるほどだ。

絶頂直後の脱力感から戻りきっていないしほの膣内を、和明は荒々しく蹂躪してゆく。更なる抽送によって結合部からは愛液と精液が零れ落ち、室内の淫臭を強めさせる。

「あつ、あひつ、ああつー！」

「ああつー！ しほさん、しほさんっ！」

しほの名を呼びつつ、喘ぎが止まらない彼女を後ろから幾度も突く。

快感で上体を支えられなくなってきたのか、しほは体を伏せ、尻だけを突き上げたような姿勢に変わった。その肉付きよい尻を掴み、和明はその弾力ある尻肉の感触と肉棒への締め付けを堪能する。

視線をまほの方に向けてみる。絶頂を経てなお、まほの興奮も治まっていないようだ。潤んだ瞳でこちらを見続けている。横で涼しい顔で眺めている菊代とは対照的だ。

「うっ、くっ……まほさん。ちよつと、こっちへ……！」

「えっ……!?!」

「見てあげて、しほさんが今、どんな顔をしているか……」

「ひあつ！ だ、駄目っ、和明くんっ！ まほに、そんな……んああっ！」

いやいやをするようにしほは首を振るが、力が入らないのかそれ以上の抵抗は見せない。

「……どうぞ、お嬢様」

まほの横の菊代が彼女の背を軽く叩く。肌を火照らせながらも、まほはおずおずと身を這わせ、猫のような姿勢でしほに正面から近づいた。

「しほさん、ぐっ、も、もっと顔を、上げて……くうっ！」

「んんっ！ か、和明、くんっ！ そこ、擦っちや……んああつ！」

汗に濡れた髪を貼り付かせつつ、和明の肉棒が与えてくる快感にしほは喘ぎを抑えられないでいる。背中から覗くその表情は快楽に蕩けきった「雌」の顔だ。

まほはそんな状態のしほに寄り、彼女の頬に手を添えるとその顔を見た。

和明は腰の動きを止めないまま尋ねた。

「ど、どうだい、まほさん……！」

「……だらしない、顔です。生まれて初めて見ます。こんな、だらしく蕩けた、お母様の顔は……涙と、涎と、汗に塗れた……これが、お母様の『雌』の顔」

「ま、まほ……ああっ！」

声にこそ絶望の響きが含まれているが、まほの言葉を受けたしほの体は更に熱を帯び、断続的な締め付けで肉棒を刺激してくる。しほの内側の被虐的な面が顔を出しているのだ。

しほの顔に視線を注いだまま、まほは言った。

「でも……私の知る中で最も美しい顔です。お母様……んっ」

「んっ!? んはっ……ま、まほっ……んっ……！」

「ん、ちゅ、おかあ、さま……あむっ……」

潤んだ瞳でそう言うと、まほはしほの唇に自身の唇を重ねた。親子の親愛のキスでない、発情した雌と雌のキス。

突然の実娘からのキスにしほは最初こそ驚いたようだが、和明が肉棒をひと突きすると欲情をその瞳に宿し、まほが差し込んだ舌に自分の舌を絡ませ始めた。

日頃、凜とした姿を崩さない母娘が雌となつて濃厚な口吻を交わす。その光景は和明の中から快感を更に湧き上がらせた。

「ま、まほさん、そのままっ、しほさんの、顔っ！ 見ていて、あげて……そろそろ、出る、からっ……！」

「んはっ……は、はい、見せて、ください……んっ、お母様の、達する時の、顔……！」

「ちゅ……ま、待って、和明くん。今、出され、たらっ！」

「すみません、俺も、限界……くっ、ああっ！」

腰に籠めていた力を抜き、引き締めていた精管を開放する。腰の奥から駆け昇るような快感がこみ上げ、そのまましほの膣内に放たれる。

「あ、ひっ、あああっ！」

「ああ、お母、様……！」

もはや声とも呼べない悶えと共に、しほは同時に達した。その恍惚の表情をまほは彼女の顔に手を添えたままうっとり見つめる。

「はっ、んっ、ああ……」

休まず二度の絶頂を味わったのが堪えたのか、しほはくたりと脱力した。ずるりと精液と愛液に塗れた和明の肉棒が、勃起したまま露わになる。

「あっ、んんっ……はあ……凄かったわ、和明くん……」

「……しほさんが、俺をここまで鍛えてくれたんですよ」

大きく息を吐き、しほが言う。和明は少し照れながら答えた。膝立ちの姿勢からすつくと立ち上がり、勃起した肉棒に手を添え、角度をやや下げる。

「しほさん……綺麗にして、貰えますか？」

「……ええ、気持ちよくしてくれた、お礼をしないとね」

和明の言葉に、しほは濡れた唇に微笑みを浮かべて答える。四つん這いの姿勢から膝立ちに変わり、肉棒に跪くかのように顔の間近まで龟头を近づける。

「……え？」

和明の口から声が漏れる。

しほの横から、もう一つの影が肉棒にすり寄ってきた。

「和明さん、私も……」

潤んだ瞳で、まほが鼻先に龟头が触れそうなところまで顔を近づけてきた。

「……まほ、貴女はもう十分解消されたでしょう」

絶頂まで見せておいて母の威厳も無かろうが、一転した静かな口調でしほがまほに言った。

「お母様と和明さんの姿を見ていたら、また熱くなってきました……それに、私はまだ口では和明さんにしてあげられていません」

「今は私と和明くんの二人だけでの行為の最中です。一步下がらない、まほ」

「お言葉ですがお母様、和明さんがお母様に謝罪しようとした際に勢いで始めただけの行為に後も先も無いかと思うのですが」

「……ええと、その」

肉棒を挟んで視線をぶつけ合うしほとまほに、和明が困ったように言った。両者の視線が和明の顔に注がれる。

「その……俺としては、二人ともにしてくると、嬉しいかなって」
数秒の沈黙。

やがて、しほは小さくため息をつくと言った。

「分かりました。まほ、和明くん……!?!」

「んっ、あふっ、ちゅっ……」

しかし、その言葉は途中で途切れた。しほの言葉を待たず、まほが亀頭を咥えこんだからだ。

「まほ、貴女……!」

「んはっ、れろっ、んふう……!」

「ううっ、ま、まほ、さんっ! いきなりは、ちよっ!」

生臭い精液と愛液に塗れ、つい先ほどまで自身の中を蹂躪していた凶悪な怒張。それをまほは嫌な顔ひとつせず口腔内に包み、ペロペロと舐め始めた。まさか急にまほから責めてくるとは思っていなかった和明は口元を歪ませ快感の声を漏らす。

一方、娘に先手を取られたしほはまほに何か言おうとしたが、まほは口を肉棒から離す事なく挑戦的な視線をしほに向けた。

「……!」

どうやら、母親が相手だろうと譲るつもりは無いようだ。

「……迂闊だったわね。電撃戦において、先手を取るのは勝利の常道。まほ、貴女にそこは譲ります」

意外にも落ち着いた様子でしほは言うど、膝立ちのまま和明の後ろに回り込んだ。

「和明くん、まほと始める前にシャワーは浴びた?」

「ぐっ……え? あ、はい……風呂にも入って、じっくりと洗いましたけど……」

とはいえ、ここまで汗をかいてはその時に入浴していても意味はあるまい。和明はそう思ったが――

「そう……それなら、ここも綺麗のようね。んっ、ンンツ……」

「うっ、うあっ!? し、しほ、さんっ!? あうっ!」

——ぬるりとした彼女の舌の感触を尻穴に感じ、思わず叫びに近い声をあげた。

「ふっ、ふうっ、じゆるっ……………」

「ぐ、くうっ! しほさんっ、そこっ、ま、待って……………」

「ちゅ、ンツ、れろっ……………」

「くあっ! まほさん、もっ!」

尖らせたしほの舌が和明の尻穴を広げ、そこに押し入ってくる。

前立腺。直腸に一部が接しており、指などで刺激する事ができる男性にのみ存在する臓器で、精液の製造や勃起に関する機能を有する。

和明も知識では知っていたが、それを実際に、しかも指でなく舌で責められるのは初めてだ。熱いしほの舌が自分の中に入り込んで弄ってくるという未知の快感は和明の全身を震えさせる程の刺激を与えてきた。それに加えて、前からはまほが健気なフェラチオを続けてくる。

美貌の母娘による前後からの同時責め。それは和明自身が思っていた以上に早く、まほが肉棒を綺麗に舐め終えるのも待たず射精へと導いた。

「ま、まほさんっ! ちょっと、ヤバイ。口、離してっ!」

「……………んむう」

「うおっ……………」

和明の言葉に反し、まほは更に肉棒を口の奥まで咥えこんだ。不慣れながらも懸命に口をいっばいに広げ、精液を受け止めようと舌先で鈴口をくすぐる。一方の後ろに回ったしほは和明の尻に顔を埋めるようにしっつ、舌先で直腸を弄ってくる。

「ああっ! で、出るっ!」

「ンンツ!? んっ、んむう……………」

「っば……………ふう」

和明は思わずまほの頭を押さえ、そのまま精を放った。ほんの数時間前まで男性を知らなかった少女の口腔内に、容赦なく精液が迸る。その勢いにまほは驚いたようだったが、それでも口を離すことなくそ

れを嚙下してゆく。

一方のしほは、和明が達したのを確認すると舌を引き抜いた。まだ挿いつているかのような感覚が尻に残っている。

「あ、ああ……」

「こくっ……んんっ、じゆるっ……」

幾度も和明の腰は震え、その度に精液がまほの口腔内に溢れる。それをまほは健気に、丁寧に肉棒を舐めてゆく。

やがて、完全に射精が治まるとまほは口を離した。唾液と精液が混じった粘液が、整った彼女の唇と亀頭の間を橋をかける。

口の端に白濁液の残差を残しつつ、まほは和明を見上げて言った。

「……ありがとうございます、和明さん」

「いや、その……こちらこそ」

律儀に礼を言うまほに、妙な照れくささを覚えつつ和明は答えた。

「言っておくけれど……今のは私の分にはカウントされないわよ。和明くん」

「お母様、それは……」

後ろから回り込みつつしほが言う。

「……分かっていますよ」

苦笑しつつ和明は答えた。普段家元として信賞必罰を徹して行う彼女とは思えない、娘に対して張り合う子供っぽさだ。

しかしそれは自分にしか見せない顔であり——それが可愛いと、和明は思った。

「んっ……!」

和明は体に力を込めた。むくりと肉棒が起き上がり、血管を浮かび上がらせる。

「……凄い」

「まだまだ、頑張れそうね」

驚きを浮かべるまほと、微笑むしほ。反応こそ違えど、肉棒に向ける発情の視線は同じだ。

和明は腰を落として視線を合わせると、二人に言った。

「ここまで来たら俺、二人が満足するまで頑張りますよ。だから、どっ

ちが先とかそういうのは無しで……」

「……分かりました、和明さん」

「頼もしい事を言うようになったわね、本当に……」

「だから、次は……」

和明は彼女らに自分の望みを言った。まほは恥じらいつつ、しほは従順に、その言葉に従う。

「こ……これで、良いのでしょうか、和明、さん？」

「んっ……こんな事をするのは、伊勢の時、以来ね……」

瑞々しい尻を向け、赤面しつつも正しく出来ているかを確認してくるまほ。男を知ったばかりの桃色の女陰は、切なそうにひくついている。

再び四つん這いになり、熟れた尻を淫らにくねらせるしほ。先ほどの精液を溢れさせながら、朱色の陰唇はぱくぱくと肉棒の挿入を求めている。

対照的な母娘の秘所が、どちらも自分の肉棒の挿入を求め尻を並べ喘ぐ。その様に和明の肉棒は限界まで勃起し、臍に付く程に反り返った。

「それじゃ、いきます……く、ううっ！」

「ンンッ……あ、はあっ！」

竿に手を添え、和明はまずはしほの膣孔に龟头を押し当て、そのまま腰を突き出した。長い黒髪を振り乱し、しほが悶える。

「か、和明さん……んあっ！」

「まほさん。ちよつと今、解すから……」

「あ、ああっ！」

一方のまほには片手を向け、指で彼女の秘唇を弄る。彼女も和明の「本気」を望んでいるが、流石に処女を失った今日の今日ではまだ膣内は狭い。まほは自分に心を許してくれているが、それでも痛みは与えたくなかった。

指先に愛液を絡ませ、陰唇周辺を少し弄ってから指を挿入する。

「んっ、はあっ……和明くん、和明、くんっ！」

「うっ！ ぐう……し、しほさん、全然ですねっ……！」

しほは早くも腰を振り、肉棒を貪り始めた。既に二度の射精を受けたというのに、しほの膣内はまだ足りないと言わんがばかりに襲を絡め、締め付けてくる。

負けじと和明はまほへの指の動きを止めないまま大きく腰を引き、一気に突き込んだ。

「ひうっ！」

ちようど息を吸うところで受けたのだろう。呼吸音と喘ぎが混じった声でしほが悶える。動きに合わせて豊かな乳房が釣り鐘のように揺れる様は何とも官能的だ。

しばらくしほの膣内を堪能した後、和明はまほの締め付けが少し柔らかくなってきたのを確認し、しほから肉棒を引き抜いた。

「やっ……か、和明くん、まだ……！」

「待っていてくださいね、しほさん……ちゃんと出すときは、しほさんにしますから」

「んっ、ンンッ！」

今度はしほの女陰に指を絡め、弄る。しほの愛液に濡れた肉棒を今度はまほの尻に向け、和明は腰を突き出した。

「ふああっ！ か、和明、さんっ！ お願ひ、しますっ……お母様みたいに、激しく……！」

「ああ。痛かったら、言ってくれよ……ううっ！」

「ああんっ！ 和明、さんっ！」

しほよりは窮屈な、しかし同時に母親以上に強烈な締め付けが肉棒を包む。ショートカットの髪を汗に濡らし、厳格な隊長としての姿を捨てて快感に溺れるまほの姿は否応なく和明に「彼女を支配している」という満足感を湧きあがらせる。

和明は先ほどよりも強くまほの膣内を擦った。既に僅かの痛みも感じていないのか、まほ自身も腰を前後に動かし、快感を求めてくる。

「ああっ！ 和明、さんっ！ 凄いつ、これ、凄いつ！」

「ま、まほさん、のもっ、凄く、締まるっ！」

「和明くんっ！ 早く……指じゃ、んはっ、た、足りないのっ……！」

早く、ちんぽ……和明くんの、ああっ！ 太い、ちんぽ、欲しいのっ

……！」

くちくちと秘所を弄る指の動きで満足できないのか、しほが腰をくねらせる。瞳を潤ませ肉棒を求めるその淫猥な姿から、彼女が「鬼」と呼ばれる日本最大級の戦車道流派の家元だと思ふ人は居ないだろう。

「あ、あひっ、か、和明、さんっ！」

「和明、くんっ！ 早く、早くうっ！」

「もう、ちよつと、もうちよつとでっ……！」

ぱんぱんとまほの膣内を肉棒が蹂躪してゆく。和明はこみ上げる射精感が限界まで高まるのを待ち、まほから肉棒を引き抜く。指を抜き、二人の愛液が混ざった肉棒を再びしほの膣内へ。

「んああっ！ これ、これなのっ！ これじゃないと、駄目、なのっ！」

「がつつき過ぎですよ、しほ、さんっ！ 今、出します、からっ！ う、おおっ！」

「ああっ！ きっ、来て、奥っ！ 奥に、和明くんの、濃い、の、いっばいっ！」

「はあっ、はあっ……あ、ああっ！」

獣めいた喘ぎと共に、和明は希望通りにしほの子宮に当たるまで龟头を押し込むと、そこで射精した。

「ふああっ！ あ、は、あああっ！」

「お母、様……ああっ！」

「まほさんっ、もっ！」

意識が飛びそうな程の快感の中、和明はまほの膣内に指を再び差し込むと今度は激しく出し入れた。親指で時折クリトリスを撫でつつ、まほを絶頂に導こうとする。

「いっ、ひいっ！ 和明、くんっ！ 熱いの、来てっ……！」

「ああんっ！ 和明さんっ、和明、さんっ！ ああああっ！」

「ぐっ……！」

汗塗れの布団の上で達する、三人の男女。

傍らでそれを見つめていた菊代は、壁にかかった時計を見て言った。

「篠原様、この時間ですと夜間に飛ばす事になりますし……横浜への

お戻りは、翌朝になりますね。寝所のご用意をしておきます。まあ……ご不要かもしれませんが」

返事はない。三者三葉の恍惚の吐息が返ってくるだけだ。

菊代はスツと立ち上がると、襖を開け、外に出た。

「――ごゆるりと」

そう微笑みつつ、襖を閉じる。

やがて、室内の恍惚の余韻は喘ぎと変わり、そして雄と雌の獣めいた嬌声へと変わっていった。

深夜の海を進む、一隻の巨大艦。

一見学園艦のように見えるそれには、大学戦車道の選抜である事を示すマークが刻まれている。

「横浜への到着は明日未明……思ったより時間がかかったわね。余裕をもって出発して良かったわ」

その艦の地上部に造られた屋敷の一室。高級なソファに腰かけ、島田千代が呟く。

「30対8の殲滅戦……勝率を計算するのも申し訳ないくらいの勝負だけど、相手は娘とはいえ西住流、油断せず、万全を期す。そうよね、愛里寿？」

「はっ……はい、お母様……んんっ！」

後方のベッドに声をかける。喘ぎ交じりの声で答えるのはその娘、若干13歳にて大学戦車道・選抜チームの隊長を務める天才少女、島田愛里寿。

「なんとか間に合って良かったわ。明日の開店時間になったら、戦車道ショップに行くとうましよう。楽しみね、愛里寿」

「んくっ……は、はい。和明さん、喜んで、くれるでしょうか……？」

「喜んでくれるわ。あの子なら」

そのベッドの上には、様々なものが散乱していた。ローション、ワセリン、グリセリン、アナルパール、生理用食塩水、アナルビーズ。

「……必ずね」

千代はそう微笑むと、ベッド上で一人悶える愛里寿を見た。

——次回エピソード「俺と家元（かのじよ）と娘と母と・2」に続く。

俺と家元（かのじよ）と天才少女 第一話

「……………ん？」

ヘリのローター音が、無機質な屋内に鈍く響いている。

どうやら、この喧しきだというのに眠ってしまったらしい。和明は固い長椅子から身を起こし、伸びをした。

「んんっ……………ふああ」

「起きられましたか、篠原様」

大きなあくびをすると、反対側の長椅子に座っていた菊代が何処からか水筒を取り出し、カップに冷えた緑茶を注ぐと手渡してきた。飲めばキンとした冷たさが体の中に流れ込んでくる。

「ふう……………おはようございます、菊代さん」

「もう少しでござ到着です。ふふ、よく眠っておられました」

そう言いつつ菊代は優しく微笑む。その様は昨晚、和明としほ、まほの三人の激しい交わりを眺めていた時のものと変わっていない。

「……………お疲れ様でした。私が思っていた以上に篠原様は頑張っていました」

「いえ、そんな……………その、俺も、疲れはしましたが……………いい思いをさせてもらったと、言うか……………」

丁寧に頭を下げてくる彼女に、照れを見せつつ和明は答えた。

菊代が部屋を退出した後も、あの部屋で嬌声と喘ぎが途切れる事はなかった。

和明はそれこそ起き上がれなくなるまで精力を絞り出し、しほとまほの膾内に交互に肉棒を突き入れ、豊満な四つの乳房を揉みしだき、精を放った。

日本戦車道を代表する美しい母娘は疲弊する様子もなくそれに応え、和明の巨根を舐め、擦り、締め付け、精を受けた。

結局そのまま夏の早い夜明け前までそれは続き——申し訳程度の

仮眠を取って、今に至る。

「本当に、ありがとうございました」

屋敷を出る時、既に黒森峰のパンツァージャケットに身を包んでいたまほは凜とした姿勢で和明に頭を下げた。その様子から、ほんの数時間前まで潤んだ瞳でキスを何度も求めてきた彼女の姿を想像できる者はいないだろう。

「私もまほと一緒に北海道に向かうわ……世話になったわね」

その横に立つ、やはり皺ひとつ無い黒のスーツ姿のしほは静かに言い、へりに乗る和明を見送った。

二人の様子は確かに中に溜まっていた鬱積が無くなったような気配で、それは和明に満足感を覚えさせた。

「……………」

和明は菊代の微笑みを眺め、ふと思った事を口にした。

「あの、菊代さん」

「何でしょうか？」

「えつと……ひよつとして菊代さん、今回の事は秘密って言ってましたけど……しほさんが気付いて戻ってくるのも、想定内だったんじゃないんですか？」

「何故、そう思われたのですか？」

微笑みを崩さないまま菊代は問い返す。和明は言った。

「何と言うか、イレギュラーな筈のしほさんの戻りにも当たり前のように対応してましたし……何より俺を横浜から連れ出す時、あそこまで派手にする必要は無かったですよね？」

「……………」

本当に秘密の要件で和明を横浜から熊本に連れ出そうとするなら、戦車道ショップの裏手に軍用へりを乗り付けるといふ真似事はしないはずだ。

しほは店長から和明の動向を聞いたようだが、あの場では内密にして店を離れてからへりに乗せ、店長に行き先を知らさないまま連れてゆく事も出来ただろう。

あくまで推測に過ぎないが――

「……家元は、自分を騙すのが得意な方ですから」

菊代は笑みを収め、そう言った。

「自分を騙す？」

「私は学生の頃から家元とはお付き合いしておりますが、あの方は常に『西住流次期家元』として自分をどう見せればよいか、そしてその為に自分自身をどう抑えればよいか、それに努めておられました」

「学生の頃から……ですか」

自分の中高生の頃を思い出す。年頃の少女ならば遊びたくもあろう、友人と交友を深めたくもあろう。そういったものを切り捨て、次期家元としての姿を求められる。

もし自分が同じ立場だったなら、果たして耐えられただろうか。和明はそう思った。

「私としては……篠原様には家元の滾りだけでなく、只のひとりの女としての心の疲れを癒せる存在になっていただきたいと思っております」

「なれますかね、俺に」

只の大学一年生に随分と荷の重い事を言う。和明の問いかけに菊代が言った。

「それは……」

その時、ヘリが減速を始めた。

「おや、もう近いようで」

菊代の言葉に釣られ、窓の外を見る。朝焼けが照らす横浜港が遠くに見える。この速度ならばあと10分もかかるまい。

「……ん？」

その横浜港にやけに巨大なシルエットが停泊している。全長数kmほどのそれは、学園艦にしてはやけに平べったい。

同じく窓の景色を見ていた菊代が眉を寄せた。

「あれは……大学戦車道選抜チームの移動演習艦でございます」

「大学演習艦……それって!？」

昨日のまほの話の思い出す。あと数日で北海道にて行われる、大洗

女子学園と大学選抜の大規模演習。それに向かう途中で停泊しているという事だろうか。

そして当然、大学選抜という事は——彼女らも、乗船している筈だ。「篠原様、これを」

菊代は着物の袖を探ると、見覚えのある小瓶を和明に手渡した。

「これって、昨日の……」

「念のため持参して正解でした。篠原様、おそらくあの艦には……」

「ええ、居ますよね」

「彼女らの目的は、私たちが篠原様にされた事と同じと思われます。これをお持ちになってください」

「……ありがとうございます」

どうやら、二日続けてのんびりとは眠れないようだ。

ぐくりと喉を鳴らし、和明は素直にそれを受け取った。

やがてへりは更に速度を落とし、市内に入った。眼下には見慣れた横浜の港町の景色。そしてやはり見慣れた戦車道シヨップの上空までたどり着くと、へりは下降を始めた。

「くっ……！」

内臓が浮き上がるような感触を覚える。揺れが起き、治まる。

「篠原様、こちらへ」

菊代の先導に従い、へりから降りる。

「……あ」

「おや、これは……」

へりの昇降口で待ち構えていた人物に、和明と菊代はそれぞれ声を漏らした。

「お久しぶりね、井手上さん」

「……」

へりのローター音が響く中だというのに、その声ははっきりと届く。

見慣れた葡萄酒色のドレス姿の島田千代と、大学選抜のパンツァー ジャケットに身を包んだ小柄な少女、島田愛里寿。

二人は並び、降り立った和明と菊代を出迎えた。

「ご無沙汰しております、千代様。愛里寿様もお元気そうで……」

ペこりと愛里寿が頭を下げた。礼を返し、菊代は千代に言った。

「こちらに乗船されていたという事は、千代様も北海道に？」

「ええ、大学選抜の演習の指導も兼ねて。それにしても……」

そこで千代は視線を和明に向けた。

「……何か、面白い事をされていたようね？」

「さて、何とも」

腹を探ってくる彼女の言葉を、菊代は涼しい顔で受け流す。

何とも二人の間に割り込みにくい空気が発生している。和明がどう切り出したら良いか分からないでいると、菊代がこちらに顔を向けた。

「それでは篠原様、お帰りもお気をつけて」

「……はい」

そう言うのと菊代は一礼し、そのままへりへと戻ってゆく。

改めて和明は島田親子に向き直った。

「ええっと……それで、わざわざ横浜まで何で来られたんです？」

まさか、自分のためだけに横浜港に寄港を？

流石にそれはあるまい、そう和明が思っていると彼女らの後ろから声が飛んできた。

「いやあ篠原君、それなんだけど……」

「店長？」

見慣れた戦車道ショップのエプロン姿の壮年が顔を出す。怪訝な表情を浮かべる和明に店長が言った。

「ちよつと家元から相談を貰ってね。今度の北海道のエキシビジョンマッチで、資材輸送を含めて出店してほしいって言うんだ」

「出店……ですか？」

「試合の決定から開催までが今回急で、地元の戦車道ショップでは賄い切れない砲弾や燃料、それに加えて普段は使わない特殊な車両も使わなければいけないの。それで、こちらの店長さんに協力をお願いしていたという訳」

千代がそう補足する。店長は頷き、言葉を続けた。

「ただ、僕ひとりではちよつと荷重でね……については、篠原君にも手伝って貰えないかと」

そう言つて、店長は和明に書類が挟まったバインダーを差し出した。細かい文字で商品名がびつしりと書かれている。

パーシング用の砲弾、予備装甲、履帯、燃料。同様にセンチリオンの装備一式。更にその下に視線を移したとき、和明は顔に驚きを浮かべた。

「T-28用砲弾及び燃料一式……自走白砲用の600mm弾2ダース!? 店長、こんなのウチにも……」

「いや、地下倉庫にあるのはあるんだ。海外からの受注用だね」

「はあ……」

店長の用意の良さに和明は思わず嘆息した。

だが、確かにこれは店長ひとりでは無理だろう。戦車道という女性中心の競技であることもあり、この店の男手は他は和明だけである。

「どうかな、篠原君？ 泊りにはなるけど、その分の手当ては乗せるよ」

「勿論、艦の居住区に宿も用意するわ」

店長と千代の言葉を受け、和明はその横の愛里寿に視線を向けた。

「……………」

無言で和明の視線を受け止めめる愛里寿。しかし、その瞳には言外のメッセージが込められている。

「……………分かりました、引き受けます」

おそらくは単に店の事だけで収まるまい。確信めいた予感と共に和明は頷いた。

倉庫から演習艦への運び込みは、大学選抜メンバーの協力もあり迅速に進んだ。

とはいえ資材の量が量である。一通りの搬入を終え、書類上の手続きも終わった頃には陽は西に傾き始めていた。

「10、11、12……と。店長、数は大丈夫です！」

「お疲れ様。とりあえずこれで積み終えたね」

和明の報告に店長は腰を叩きつつ答えた。

「ご苦労様でした。宿泊施設は用意してありますので、北海道まではそこでゆっくりして行って下さいな」

こちらの作業が終わったのに気付いたのか、千代が扇子を扇ぎつつ歩み寄ってきた。店長が深々と頭を下げる。

「いやいや、本当にお世話になります。では、そちらで休ませて頂きます。篠原君も……」

「あ、はい」

「いえ、それなのですけど……篠原君については、少しお借りしても良いかしら?」

スツと視線を店長から和明に移しつつ千代が言った。

「は……はい」

ただ搬入で終わるとは思っていなかったが、やはり改めて言われると緊張を覚える。妙な顔で答える和明の横で、場の流れを察した店長が言った。

「ええ、大丈夫です。僕の方では到着まで人手は要らないので……」

「じゃあ篠原君、お疲れ様」

「……お疲れ様です」

「お疲れ様」に言外の響きを感じつつ、和明は頷いた。その場を離れてゆく店長の背を見送り、再び千代に向き直る。

「ええと……千代さん、今回は?」

「……和明くんも慣れてきたわね。話が早くて助かるけど、少し寂しいかも」

和明の言葉に千代は少し笑うと、身を翻した。

「お昼、まだよね? 大学選抜の演習を観戦しながら食事でもどう?」

「え? いや、俺はいいですけど……」

千代の誘いに和明は思わずきよろきよろと周囲を見回した。幸い近くに他人はいなかったが、ここでの千代はVIP中のVIPだ。表向きはあくまで演習艦に便乗しただけの学生バイトに過ぎない和明と一緒に食事などをしていれば不審に思われまいだろうか。

そんな和明の反応も予測済みだったのだろう。千代は少し振り返り言った。

「大丈夫よ。この艦の中でも人目に着かない場所だから」

そして彼女は再び歩き始めた。これ以上の説明を千代がしない事を理解し、和明はその後を追う。

「半歩だけ後ろに付いて。それだけでこの子は疑わないわ」

「は、はい……」

言われるままに彼女のやや後ろを歩く。資材置き場を離れて、そのまま屋外へと千代は向かっているようだ。

すれ違う大学選抜メンバーがぴしりと直立し、彼女に深々と礼をする。

「家元、お疲れ様です！」

「お疲れ様。この後の演習も頑張つてね」

その度に千代は一度立ち止まり、労いの言葉をかけると再び歩き出す。頭を上げたメンバーはその後ろの和明にはちらりと視線を向け、軽い会釈を返すだけで不審な様子は見せない。

それが何人か続き、次第に和明にも千代の言葉の意味が分かってきた。

島田千代。島田流戦車道の家元であると同時に大学戦車道連盟理事長でもあり、大学選抜メンバー隊長を務める愛里寿の母でもある彼女はまさしくこの大学選抜演習艦においてトップの人物であり支配者だ。そんな千代が戦車道シヨップの学生ひとりをつれていくからといって、誰がその学生と肉体関係にあると想像するだろうか。流石に並んで談笑でもしていれば不審に思われるだろうが、千代の後ろを半歩遅れてついてゆく和明の姿は「業務的な用事で家元に連れられている学生」でしかないだろう。

「(……そうなんだよな)」

和明は今更ながら、自分の前を優雅に歩くドレス姿の女性が尋常ではない立場の人物である事を理解した。

やがて二人は建物を出た。果たしてその直前には一台の高級車が停まっている。左ハンドルの、ぱつと見ても分かる外国車だ。

千代がポケットからキーを取り出すと、車のライトが点灯して電子ロックが解除された。運転席側のドアを開けつつ、和明に顔を向ける。

「ぎ、乗って」

「千代さんが運転するんですか？」

「プライベートではね。不安？」

「い、いえ、そんな事はないですけど」

色々と圧倒されつつも和明は反対側から乗り込んだ。シートに身体を預けてみると上質なソファを思わせる柔らかさだ。シートベルトを装着し、慣れた仕草でキーを回す千代の様子を伺う。

「そんなに遠くはないわ」

千代は流れるような動きでクラッチを外し、ギアを入れる。車内には芳香剤が置かれているのか微かにラベンダーの香りがする。緩やかに車は走り出し、建物が後ろに流れてゆく。

「……悪かったわね、西住さんの処から戻ってきたばかりなのに付き合わせて」

ハンドルを緩やかに操りつつ千代が言った。和明は少し緊張しつつ答える。

「いえ、大丈夫です」

「しほに呼ばれたの？」

「まあ、そんな感じ……ですか」

言葉を濁す。実際にはまほと菊代に招かれたのだが、あまりまほの情報をも今の千代に与えるのは良くないことに思えた。

そんな和明の反応に、千代は気を悪くした風もなく言葉を続けた。「今回の北海道での試合、電波には乗らないものだけでも重要な戦いになるわ。かたや素人揃いの初出場校を優勝に導いた“大洗の軍神”西住みほ。かたや13歳にして大学選抜を率いる“天才少女”島田愛里寿。戦車道界隈を賑わせる二人の少女の激突。連盟の中でも非常に注目されている」

「でも……殲滅戦なんですよ。それも30対8の」

「だからといって『楽な勝負』なんてものは戦車道には無いわ。相手が

西住みほなら、尚のこと」

和明の問いかけに千代ははつきりと答えつつブレーキを柔らかく踏んだ。カーブを曲がり、身体が外周に引っ張られる。

「私も色々な戦車道の選手を見てきたけど……西住みほとまほ、あの二人は別格ね。正直、状況によってはうちの愛里寿でも勝てないかもしれない」

「……………」

一見、彼女にしては謙虚にすら思える言葉。しかしその表情には微笑みが浮かんでいる。

『状況によつては』……って事は、まともに戦ったなら勝てる？』

「まあね。母親の私が言うのと自慢話になってしまっけど、あの子は本当の天才だから」

そうして娘の事を語る千代の横顔はどこか嬉しそうだ。

「……………さて、着いたわ」

車の速度が落ちてゆく。和明は窓の外を見た。

「お……………おお……………」

和明の口から驚きの声が漏れる。

装飾が施された鉄柵に囲まれた、『豪奢』という表現しかできないような大きな洋風の屋敷がそびえている。演習艦にも搭乗員や職員のための居住区が用意されているが、その他の建物と比べても明らかに造りが違う。

千代が車を門の前で停止させると、自動で門戸が開かれてゆく。

「そんな驚く程ではないわ。演習艦で指導する時の仮の住まいといったところね」

『『仮』ですか……………』

これが仮宅だと言うなら、和明のアパートは仮宅の仮宅の更に仮くらいのものだろうか。

そんな事を思う間にも車は門を越え、屋敷の正面に辿り着いた。使用人と思われる洋装の女性が待機している。

「そのまま降りて。車は使用人が片付けてくれるから」

停車させ、慣れた仕草で千代はシートベルトを外しドアを開けた。

和明は慣れない仕草でそれを追う。

「お帰りなさいませ、家元。お二人分の昼食の用意はできております」
「ありがとう。鍵は預けるから、車庫に戻しておいて」

深々と頭を下げる使用人の女性に千代は車のキーを渡すと、そのまま屋内へと入っていった。自分にも頭を下げてくる使用人に会釈を返しつつ、和明もそれに続く。

西住家の純和風の屋敷とはまた対照的な、まるで貴族の住む洋館のような内装を珍し気に見回す。とはいえそこはやはり戦車道の家元としての誇りなのだろうか、額縁に飾られた油絵は戦車が敵の防衛線を超える様子を描いたものだし、ところどころに置かれているのは戦車の石膏像だ。

玄関をくぐった千代はそのまま奥へと向かってゆく。和明はきよろきよろと視線を巡らせながらも彼女を追う。やがて千代は開かれた大扉の前に来るとそこを抜けた。

「さ、座って」

「え？ あ、はい……うお」

パーティなどに使われるような広間に、白いクロスをかけられた大きな丸テーブルが設置されていた。卓上にはまだ湯気を立てるスープにパンにサラダ、何やら見慣れないソースがかけられたローストビーフにカナツペ、キツシユなどが置かれている。卓の近くの壁には壁一面を覆う程の大きさのモニターが設置されており、どこか威圧的な印象を与えてくる。

とりあえず適当な席に着き、手前にあつたナプキンで手を拭いていると千代が和明の向かい側に座った。

「どうぞ食べて頂戴。急な準備だったから、大したものも用意できなかったけど……」

「いやいや、こんな豪華なの、俺食べたこと無いですよ！ えっと、いただきます」

こういった席にはマナーなどが本来はあるのだろうが、和明にとっては多少見聞きした程度だ。とりあえず手を拭い、パンを手にとって手元の小さなボウルに入ったオリーブ油に付けて口に入れる。

和明が食事をとり始めるのを待っていたのか、千代はテーブルに置かれていたリモコンを取るとそれを操作した。モニターが点き、間もなく戦車の砲声が室内に響く。次いで画面が鮮明になると、四分割された戦車戦の様子が映し出される。何両かのパーシング重戦車が白旗を上げており、別モニターに映るセンチオンからは愛里寿が小さな身体を乗り出し、指揮を行っているようだ。

「食事の合間に、あの子の演習を見てあげて」

「これ、リアルタイムなんですか？」

「演習用のために造られた艦だから、こうして会食中に観戦できるようになっているの」

そう言いつつ、千代は切り分けたローストビーフを口に含んだ。音も無く優雅にナイフとフォークを操る姿が何とも様になっている。

「大したもんですよね。まだ13歳なのに」

砲弾の飛び交う中でああして生身を晒しているだけでも到底真似できない。一回り年下の愛里寿に、和明は心から感心しつづつ言った。汗を流しつづつも冷静に指揮を飛ばす姿は確かに大人顔負けだ。

「そうね。だからこそ……ああなるのも早かった」

「……」

千代は静かに答える。和明は千代の纏う空気が変わったのを察しつづつ尋ねた。

「愛里寿ちゃん……やっぱ、あれからも？」

「安心して。他の男性に愛里寿を抱かせたりはしていないわ。何とか自分で済ませてる」

「そう……ですか」

「でも……やっぱりそれだと完全には、ね。だからこうして、和明くんにも無理を言っただけで来てもらった」

やはり、戦車道ショップの出店というのはあくまでついだで、本命は自分だったか。

とはいえ、頼られる事そのものは悪い気はしない。まあ——相手が未成年の処女だという点において問題は無くはないのだが。和明は千代に言った。

「って事は、この後、愛里寿ちゃんですか。前と同じような感じで、いいんでしょうか？」

「……ちよつと、違ってくるわね」

予想に反し、千代は言葉を濁してきた。ちよつと意外に感じつつも更に尋ねる。

「と言いつつ…」

「あの子、前回の時に和明くんのが挿入できなかったのが悔しかったみたいなのよ。貴方を完全には気持ちよくさせられなかったのが、きつと不満だったのね」

「いや、そうは言っても……俺のが愛里寿ちゃんのに無理なのは、千代さんも分かっていますよね？」

南の島で抱いた時の愛里寿の華奢な身体を思い出す。コーラ缶並みのサイズの和明の肉棒を受け入れるには彼女の身体は余りに小さかった。だから和明も愛里寿には擦るだけにしたのだ。

それを傍らに居て全て見ていた筈の千代はカップの紅茶を飲むと言った。

「確かにそうね。少なくとも愛里寿の膺は和明君のの挿入には耐えられない。でも……『後ろ』なら可能性はあった」

「『後ろ』って……その」

「ええ、お尻」

何だか自分の尻穴までむず痒くなってきた錯覚を覚え、無意識に和明はジーンズの上から尻に手をやった。その反応が面白かったのか、千代はクスクスと笑いつつ言葉を続けた。

「二、三週間での急ピッチの拡張だったけど……あの子、そっちの方の吸収も早かったわ。何とか間に合ってくれた」

「いや、間に合ってくれたと言われても……」

今まで様々なプレイをしてきた和明ではあるが、アナルセックスとなると初めてである。戸惑いつつ返事をする和明の視線を千代は受け止め、モニターに視線を移した。

「……ねえ、和明くん。ローターって知ってる？」

「へ？ え、ええつと、アレですよ。小さい玉子みたいな奴で、震え

る……それが、どうかしたんですか？」

「愛里寿、それをお尻に挿れたまま演習しているのよ」

「ッ!？」

危うく飲みかけのスープを吹き出しそうになり、和明はどうか堪える。

視線を再びモニターに移す。先ほどまで戦場で凜とした姿で指揮しているように見えていた愛里寿の姿が、それを知ってしまったとまるで別の姿に見える。

紅潮した頬も、浮かぶ汗も、おそらくは演習の緊張によるものな
く――

「……楽しみにしていて頂戴」

千代はそう言うと、肉汁したたるローストビーフを口に含んだ。

第二話

「お母様、ただいま戻りました」

「お疲れ様。いい結果だったけれど、中盤の森林周辺での進軍で少し手間取ったみたいね」

大学選抜演習艦、島田流家元屋敷。

パンツァージャケット姿のまま帰ってきた島田愛里寿は、書齋に入るとデスクで書類作業をしていた千代に礼をした。にこやかに彼女を迎えつつも、千代は演習内容について指摘する。

「申し訳ありません、先日の嵐の影響がまだ残っていて、予想以上に足を取られました」

「西住みほならそれでも対応してくるかもしれない。気を引き締めなさい」

「はい、お母様」

しほとまほ程ではないが、やはり戦車道に関しては普段とは別の緊張感が彼女らの間にはあるように思える。

書齋のソファで寛ぎながらも和明は思った。今は愛里寿が戻るまで、彼女の過去の試合映像を見せてもらっていたところだ。千代からしてみれば、自分の娘が運動会で活躍しているホームビデオを見せているような感覚かもしれない。

しかしながら――

「(普通……だな)」

「篠原さん、先日はお世話になりました」

「え!? あ、い、いや、そんな……」

昼食中、千代は「愛里寿はローターを入れたまま戦場の指揮を執っている」と言っていたが、こうして和明にも丁寧な礼をする愛里寿はどう見ても平時の彼女だ。あれは千代なりの冗談だったのだろうか？

そんな事を和明が考えていると、ふと千代が口元に微笑を浮かべた。

「……まあ、今回は仕方ないかもしれないわね」

「え？」

「愛里寿、和明くんには私から説明したんだけど……どうも疑っているみたい。スイッチを入れ直して、彼に抜かせてあげて」

「ちよ……」

和明が疑問の声を挟むのも待たず愛里寿は頷いた。

「はい、お母様……んっ」

パンツアージャケットの襟を緩め、内ポケットに手を差し入れると何かを操作する。

すると、愛里寿の方から急に鈍い振動音が聞こえ始めた。ぴくりと小柄な身体を震わせ、口元から喘ぎが漏れる。

驚いたままの和明に千代が言った。

「意外とね、その振動音って大きいだよ。騒々しい戦車の中ですらともかく、普段いきなり鳴らせば周囲に一発で気付かれてしまうわ」

「まさか……本当に？」

「は、はい。和明……さん」

つい数秒前までの凜とした姿から打って変わり、愛里寿は頬を紅潮させ、身体を震わせつつも和明に歩み寄る。

ソファから身を起こせないままの和明の前まで来ると、愛里寿はくると背を向け、上体を屈伸するように曲げた。必然的に彼女の小ぶりなお尻が和明の前に来る姿勢になる。

そこまで距離を詰められ、既に彼女から発せられる振動音が丁度そこ——愛里寿の尻あたりから聞こえてくるのが和明にもはつきりと分かった。

「うお……」

無意識に声が漏れた。

愛里寿の子供らしいコットン製のショーツ。そこに一本のコードが伸びている。

「和明君、愛里寿のを抜いてあげて」

千代の言葉に和明は返事もできず、愛里寿の尻に手差し伸べた。

「んっ……」

和明の手の感触に愛里寿はぴくりと身体を震わせる。ぐくりと喉

を鳴らし、和明はそのまま愛里寿のショーツを下ろした。

「……！」

想像した通りの光景がそこにあった。上着から伸びていたコードは彼女の桜色の尻穴の中に続いており、振動音はそこから聞こえてくる。

「そ……そのまま、引っ張ってください。私は大丈夫、ですから……」
もぞもぞと腰をくねらせつつ愛里寿が言う。

和明はおずおずとコードを摘まんだ。指先に僅かの抵抗感を感じる。

「えっと、それじゃあ愛里寿ちゃん……いくよ？」

「はい……んんっ！」

指に引っ掛けるようにして和明はコードを引いた。その先の愛里寿の窄まりはヒクヒクと反応を示す。

「はあっ……み、見えますか、和明、さんっ……！」

「ああ、見えるよ。今、出てきた……！」

「ふあっ、ああっ！」

更に和明が引くと愛里寿の尻穴からピンク色の小さい卵のような物体が震えながら現れた。濡れたそれはにゅぽんと抜け、尚も振動を続けている。

愛里寿は全身をびくんと跳ねさせ、大きく喘いだ。細い脚はがくがくと震え、今にも腰が抜けそうにも見える。

しかし、そんな愛里寿の様子を見つつ千代は言った。

「……うん、具合は良いみたいね。それじゃ愛里寿。シャワーを浴びて、支度をして来なさい」

「は……はい、お母様」

「あ……」

愛里寿の動きに釣られて和明の指からコードが離れる。振動するローターをぶら下げたまま、愛里寿はおぼつかない足取りで退出しようとする。

果たして大丈夫なのだろうか。愛里寿の事が気になる和明だったが、千代は今度は傍らの卓に置かれた鈴を鳴らすと使用人の女性を呼

んだ。

「寝室にお湯とタオルを用意して頂戴」

「はい、奥方様」

音も無く女性が下がると、千代は和明に向き直り言った。

「和明君、寝室に行きましようか」

「え？ あ、はい！」

スツと立ち上がる千代を追うように和明は腰を上げた。そのまま千代は広間を出ると近くの階段から階上へと向かう。和明は彼女の背を見つつ尋ねた。

「あの、千代さん……どうして、あんな事を？」

「あんな事？」

「愛里寿ちゃんの事です。何でわざわざ、試合前の演習でローターを……」

それが正直なところ和明には疑問だった。これでは——まるで調教だ。

その質問は千代にとっては予想外のものだったようだ。階段を上る足を止め、少し考えるような仕草を見せる。

やがて千代は何かに気づいたように言った。

「……ああ、そういう事。和明君は、アレを私が指示して愛里寿にさせたいと思ってるのね」

「違うんですか？」

「ええ。お尻にローターを挿れながら演習に臨んだのは、あの子自身が望んだこと」

「!？」

今度は和明が足を止める番だった。

「な、何でそんな……!？」

千代は振り返り、流し目を和明の股間に送りつつ答えた。

「それは勿論、最も昂った状態で和明君のそれを受け入れるため」

「……………」

「……そして、最高のコンディションで試合に挑むため」

千代の口調はあくまで穏やかなままだが、和明はその奥に「圧」を

感じ喉を鳴らした。

そんな言葉を交わす内に、二人は階上の廊下に出た。広い廊下にはやはり高級そうな絨毯が引かれ、幾つものドアが並んでいる。千代は迷う風もなくその扉のひとつの前で足を止め、ノブを回した。

「さ、入って」

導かれるままに和明は部屋に入り、

「うわ……」

その景色に思わず声をあげた。

寝室と聞いてはいたが、それは和明の思っていた以上に広い部屋だった。中央にはホテルのスイートルームもかくやと言わんばかりの上質なダブルベッドが鎮座し、三面鏡の鏡台や食事用の卓、ソファなども用意されている。

そのベッドの先には和明の背丈ほどのサイズの大窓があり、大学演習艦の景色が一望できるようになっていた。

広大な森、丘陵、砂漠まで再現された大学選抜の演習場、そしてその向こうに見える一面の海は絶景と呼ぶに相応しいもので、和明がその景色に目を奪われていると背後から女性の声が届いた。

「奥方様、お待たせ致しました」

「ありがとうございます、そこに置いておいて」

振り返ってみると先ほどの使用人の女性が卓に湯気の立つ洗面器とタオルを置いていた。一礼し、部屋から退出してゆく。

ふと和明はある事に気づき、千代に言った。

「そういえば……今回は愛里寿ちゃんと一緒にシャワーを浴びないですね」

「和明君は和明君で、レクチャーしないといけない事があるから。服を脱いで、身体を拭きながら聞いてくれる？」

そう言うと千代は視線で和明を洗面器に促した。

それに応じて和明はベッドに腰かけ、服を脱ぎ始める。と言っても上はTシャツ一枚で、下は下で作業用のスラックスを脱げばあとは靴下とトランクスだけだ。手早く脱ぎ、タオルを洗面器の湯に浸すとそれを絞る。

和明がトランクスを脱ぎ始めた辺りで、千代は口を開いた。

「ねえ、和明君。アダルトビデオとか、そういった動画、あるいは漫画とかを見たりとかはする?」

「え? ええつと……まあ、人並みには」

唐突な質問に戸惑いつつ答える。しほや千代と関係を持つようになってからは頻度は大幅に減ったが、健全な男子として和明もAVとかを見たりはする。前の彼女との初体験——結局未遂で終わってしまったが——の前夜などは何本か処女ものを借りてイメージトレーニングをしたものだ。成人コミックとかもまあ、多少は読んだりはする。しかしそれが愛里寿との行為に何の関係があるのだろうか?

「そう。その中でアナル系のものを見たことは?」

「……興味がてら、少しはあります」

既に肉体関係にある女性に自分のAV視聴歴を話すのは何とも気恥ずかしいものだ。タオルで体の汗を拭いつつ和明は答えた。

しかし千代はからかいで尋ねているのではないようだ。表情こそ柔和なままだが、あくまで真面目に彼女は言葉が続ける。

「そういったのだと、割と見た目すんなりと挿入されていたと思うのだけど……実際は、決して簡単なものではないわ」

「まあ、そりやそう……ですよね」

「ええ。肛門や腸には血管が集中している。乱暴に扱って出血でもしたら、それこそ一大事。菌が血管に入って重症化するケースもある」
「……………」

何やら性教育の授業めいてきた。

「そして、注意しなければいけないのは和明君も同じ」

「俺も……ですか?」

「ええ。愛里寿には今、腸洗浄までしてもらっているけど……膣みたいに最初から和明君のソレを受け入れるように設計されている訳ではないわ。だから準備も周到にしておかないといけないし、和明君にも心構えが必要」

そう言うと千代は立ち上がり、鏡台の引き出しを開けると幾つかのものを取り出した。何度か見た事のあるローションの容器に、タバコ

めいた小さな箱。

千代は和明の近くにその小箱を置いた。腿を拭いていた手を止め、それを拾う。

「これは……」

何なのかは一目で分かった。コンドーム、それも海外製のものだ。

「ちゃんと和明君のに合うサイズの物よ」

続けて千代はベッドの枕近くにローションを置いた。

「勿論、お尻は膣と違って勝手に濡れたりはしてくれないわ。それでじっくりと滑らかに、解してあげて」

「……分かりました」

和明は再度タオルを湯に濡らすと股間から脚にかけて拭く。

今回の千代は今まで以上に慎重で、同時に本気だ。そしてそれは愛里寿も同じだろう。

「何もそこまでしなくても」という気持ちもあった。愛里寿はまだ成長途中の13歳なのだ。今は萎えているとはいえ、勃起すれば缶コーラ並みに膨れ上がる和明の肉棒を受け入れるには余りに早い。しかし——女性から本気で自分を受け入れようとしてくれているこの状況で、こちらが及び腰になつては男として失格だろう。

身体を拭き終え、コンドームの箱を開封しつつ和明はそう思った。

「……お待たせ、しました」

その時、小さなノック音と共に少女の声が聞こえた。千代が扉に向けて返事をする。

「入ってきなさい、愛里寿。こつちも準備が終わつたところよ」

きい、と扉が開き、愛里寿が入ってきた。華奢な身体にバスタオル一枚を巻いただけの格好だ。湯上りの白い肌が何とも艶めかしい。

愛里寿はそのまま和明の腰かけるベッドに歩み寄ってきた。千代はドレス姿のまま椅子に座っている。今回は自分は参加せず、見守るだけのようだ。

和明は深く息を吸うと、愛里寿に微笑んだ。

「……よろしく、愛里寿ちゃん」

「和明さん……この前は、すみませんでした」

愛里寿は和明の前に立つと、ぺこりと頭を下げた。座っている和明で、立っている愛里寿とほぼ同じくらいの身長だ。

「今日は、その……和明さんにもちゃんど、気持ちよくなって貰いますから」

「いや、そんな気負わなくても……愛里寿ちゃんがすつきりしてくれるのが、俺にとっては一番なんだから」

「……私は」

愛里寿は留めていたバスタオルを外し、床に落とした。南国の島で抱いた時と変わらない細身の、染みひとつ無い美しい肢体が露わになる。

薄桃色の乳首に膨らみかけの乳房、そしてまだ「茂み」とも言えない股間の薄い陰毛。それはまだ性徴期も迎え切っていない未成熟な肉体。しかしそれ故にその身体は倒錯的であり、そんな彼女を今から抱き、アナルを蹂躪する。それを想像しただけで和明の股間はびくりと反応を示した。

「和明さんが満足してくれないと、すつきりできませんから」

「……！」

そして、そんな倒錯的な期待は彼女の中にもあるのだろう。そう言って和明の肉棒に向けられる視線は、13歳の少女のそれとは思えない程に妖艶だった。

そのまま愛里寿は和明の足の間に跪くように腰を落とすと、半勃起状態の肉棒に顔を寄せた。吐息が亀頭にかかり、和明は僅かに身体を震わせる。

「何だか、前より逞しくなった気がします」

「そ、そうかな?」

「はい。あー……むっ」

「うっ!」

口を一杯に開き、愛里寿は躊躇なく和明の肉棒を口に含んだ。突然の刺激に和明が背を反らす。

「ちよ、愛里寿ちゃんっ……!」

「ンツ、れろっ、ふう……!」

「うおっ!？」

吸われつつ亀頭に小さな舌が絡む。同時に愛里寿は頭を緩やかに前後に動かし始めた。

片手は和明の太腿に添えられ、もう片方の手は自身の股間へと伸びている。

「(こ、これはっ……!?)」

その動きは、南の島での愛里寿とは全く違っていた。

シャワーを浴びつつ彼女からの奉仕を受けた際は、父親以外で初めて見る肉棒に対しての戸惑いやぎこちなさもあつた。しかし、今こうして和明の股間に顔を埋める愛里寿の所作にはそういったぎこちなさが全く無い。むしろより積極的に舌を絡め、頬をすぼめ、肉棒に快感を与えようとしてくる。

「ンンッ、ちゅうう……」

「ふおっー!」

前後の動きを止めないまま強く吸う。

半勃起から完全に勃起した肉棒は愛里寿の口の中で膨れ上がる。眉をひそめ、息苦しそうにしつつも愛里寿は動きを止めない。

「あ、愛里寿、ちゃん……凄く、いいっ……!」

「じゅるっ……ぷはっ、あ、ありがとう、ございます……」

「ふう……練習、したの?」

「はい。お母様の『持ち物』などで、和明さんにどう奉仕したら良いか教わって」

「……………」

「……和明さん以外には、してませんから」

和明の肉棒から口を離している最中も、愛里寿の小さな手は血管が浮かぶ竿を抜く。それは酷く背徳的な光景で、それ故に和明の中から堪らない快感を湧きあがらせる。

「スウ……ああ……んっ」

「くうっ、愛里寿ちゃん、それっー!」

深呼吸をしてから再び愛里寿は大きく口を開き、肉棒を啜えこむ。先ほどよりもより深く。こつんと亀頭が喉奥にあたる感触。

口腔内の温もりと滑りを感じる暇もなく愛里寿は大きく頭を引き、再び一気に前に出す。更にもう一度、もう一度。

「ぐっ、あ、あぁっ！」

じゅぼじゅぼと水音が聞こえそうな程に激しい動き。口の端から唾液を零しつつ、鼻で息をしながら愛里寿は奉仕を続ける。

「ふあふあひふあん、ふお、ふおうれふは……う？」

「ああ。す、凄いよ愛里寿ちゃん、堪らない……」

おそらくは「和明さん、ど、どうですか？」と聞いているのだろう。上目遣いに尋ねてくる愛里寿の頭に柔らかく手を添えつつ、和明は答えた。

「……♪」

その答えは彼女を満足させるものだったのだろう。嬉しそうに目を細めつつ、愛里寿は頭を揺らす。

「や、ヤバイ！・ 愛里寿ちゃんっ……！」

「……っば」

腰の奥から射精感がこみ上げてきた。肉棒の疼きから愛里寿にもそれが伝わったのだろう。先走り唾液が混じる粘液の糸を引きつつ、愛里寿は口を離す。

「うっ、はぁ……！」

「和明さん。今度は、私に……お願いします」

口元を拭いしつつ、愛里寿はスツと立ちベッドへと上がった。

「あ、ああ……」

和明は大きく息を吐くと傍らのコンドームの袋をひとつ破り、肉棒に嵌めた。千代の言う通り、和明のそれに丁度良いサイズだ。

「それじゃ愛里寿ちゃん、お尻、こっちに向けて」

「は……はい」

先ほどまで熱心にフェラチオをしていたというのに、愛里寿は視線を逸らしつつ和明に背を向け、四つん這いになると尻を上げた。それはそれとして恥ずかしいのだろう。

和明はローションの容器を手に取り、中のとろりとした液体を手に零した。香料の柔らかな匂いが鼻をくすぐる。

まだ肉付きも完全ではない、「女性」ではなく「少女」のお尻。すべての肌には和明は手を添えた。

「んっ……！」

ローションの感触に愛里寿が反応する。濡れた手で彼女の尻を撫でつつ、和明はその谷間を押し広げた。

「……綺麗だ」

「そ、そんな事、言わないでください……！」

顔を伏せつつ愛里寿が言う。乳首と同様の薄桃色の秘唇は既に愛液が滲み、未熟な陰唇をひくつかせている。

とはいえ今回の目的地はそこではない。和明はその上の、やはり淡い色をした窄まりへと指を向けた。

「……！」

ちらりと横に座る千代に視線を送る。その視線を受け、千代はこくりと頷いた。

自分を信じて愛里寿の身体を任せてくれているのだ。それに応えなければ。和明はそう思いつつ、ローションを愛里寿の尻に垂らした。

「んっ、んんっ……！」

ぴくりと愛里寿の身体が震える。和明は壊れ物に触れるように窄まりに指を添え、そのまま侵入させてゆく。

「あっ、ああっ……！」

「大丈夫よ、愛里寿。和明君は貴女を壊したりしない……大きく息を吐いて」

「は、はい、お母、様……はあっ……！」

千代の言葉に愛里寿は答え、息を吐いた。

指先に感じていた抵抗感が弱まる。和明は更に指を差し込み、ローションが奥まで届くように解しつつ広げる。

「これなら……！」

「ふあっ！」

指を二本に増やす。これで先ほどのローターと同程度の太さだ。和明の肉棒を受け入れるにはもう少し解す必要があるだろう。

ローションを断続的に垂らしつつ更に指を前後させる。丁寧に、しかし止めることなく。

「あ、あっひあっ！」

ビクビクと愛里寿の身体が跳ねる。触れていない秘唇からは愛液が更に滲み、彼女が痛みでなく快感を受け止めている事を伝えてくる。

「ちよつと、広げるよ」

「え……あひっ！ か、かずあき、さんっ！」

二本の指を窄まりの中で拡げる。奥まで丁寧に洗っていたのだろう。石鹸と汗が混じった匂い。ひくひくと震える愛里寿の尻穴の様子に、和明の肉棒はコンドームの中でびくりと反応する。

既に愛里寿の窄まりは周囲を含めてローション塗れになっていた。既にローターである程度解れていた事もあり、和明の指を今では抵抗なく呑み込んでいる。

「もう一本、増やすよ。愛里寿ちゃん、力を抜いて……」

「は、はい……くうっ、ンッ、ああっ！」

指を三本に増やし、それまでより少しだけ動きを荒くする。強い締め付けが指先を襲うが、痛みを覚える程ではない。

これなら——いけるだろうか？

和明は指を一旦抜くと、肉棒に手を添えた。

「そろそろ……かしらね」

和明がタイミングを測り始めたのを察したかのように千代が呟く。部屋に満ちる淫臭を気にする風でもなく、彼女は愛里寿に言った。

「愛里寿、和明君も準備が出来ているわ。練習していた『アレ』をしてあげなさい」

「……………」

「和明君のために、考えていたんでしょっ？」

愛里寿の顔に恥じらいが浮かぶ。しかし、千代が更に言葉を重ねると顔を上げ、和明に濡れた瞳を向けた。

「あ、あの、和明さん……」

片手を上げると自身の尻たぶを掴み、和明にはつきり見えるように

尻穴を晒す。

こちらに視線を向けたまま、震える口調で愛里寿は言った。

「せ、先日は、私の……お、おまんこで、気持ちよくさせられず、申し訳、ありません、でした……」

「……………」

ぐくりと和明の喉が鳴る。

「まだ、そちらでは和明さんの……」

「……………愛里寿」

言い淀む愛里寿に千代が言う。愛里寿は更に顔を赤くしつつ言葉を続ける。

「か、和明さんの……チンポを、受け入れる事はできませんが……」

「……………愛里寿ちゃん」

「きよ、今日は私の……愛里寿の、ケ、ケツ孔、で、気持ちよく……なつて、ください……!」

そう言い終えると愛里寿はにやりと自身で窄まりを広げ、和明の行動を待った。

若干13歳にして飛び級で大学に上がり、戦車道のエリートが揃う大学選抜で隊長を務める天才少女。

そんな彼女が尻穴を露わにして挿入をねだる。和明の肉棒はそのシチュエーションに激しく興奮を示し、コンドームを破らん程に勃起させた。

和明は無言で愛里寿の腰に手を添え、同時に肉棒を窄まりにあてた。

「……………いくよ」

「き、来てください、和明さっ……ひうつ!」

ずぶずぶと龟头が、カリが、そして竿が愛里寿の中に挿入されてゆく。

痛々しい程に押し広げられた少女の尻穴から視線を逸らすことなく、和明は更に腰を突き出した。

第三話

ダブルベッドの傍らで、優雅に座る島田千代。その視線はベッドの上で身体を重ねる和明と愛娘に注がれている。

それはつい昨晚、和明が熊本の西住邸で経験したシチュエーションと似てはいるが——同時に大きく異なっていた。

あの時の西住しほは様々な感情が渦巻き、怒りに近い思いで自分とまほの交合を見ていた。しかし今の千代の視線はあくまで穏やかで、自分と愛里寿のアナルセックスが成功するよう見守っている。

「ぐっ……ううっ！」

ローションと汗に濡れた愛里寿の尻穴に怒張した肉棒をゆっくりと挿入させつつ、和明は膣内とは全く異なる強烈な締め付けに呻いた。

「かっ……和明、さんっ……ひっ、はあっ……！」

だが、愛里寿の感じている圧迫感はそれ以上の上のようだった。亜麻色の髪を頬に貼りつかせ、過呼吸を起こしたかのように口をぱくぱくと開閉させている。

「頑張っ……もう、少しだから……！」

「は、はひっ、だ、大丈夫、です……ンンッ！」

荒い息を吐きつつ声をかける和明に、それ以上に苦しそうにしつつも愛里寿は答える。

大丈夫な筈はないのだ。前回の交わりから幾らアナル拡張に努めていたとはいえ、滾り切った和明の肉棒の長さは小柄な愛里寿の身長の一割近くまで達している。それを受け入れるのは尋常ではない。

和明は腰を止めぬまま視線を愛里寿の尻穴まで下げた。血管が浮かぶ赤黒い怒張が、彼女の窄まりを限界まで広げている。ローションを奥まで十分に浸透させた効果か幸いにして血は出ていないが、今にもはち切れそうだ。

「くっ……んうっ！」

しかし、愛里寿は唇を噛んでそれに耐えている。戦車道の演習での昂りが残っているのも当然あるだろう。だが——それだけではない

事は、和明にも伝わっていた。

島田愛里寿。彼女は本気で自分を受け入れ、そして自分に気持ちよくなつて貰いたいと思つている。でなければ愛里寿だけ快感を享受して欲求不満を解消すればいいだけの話だ。

その姿勢は健気であり、同時に和明の中の雄の本能を滾らせるに足りるものだった。

愛里寿が和明に、今使える自身の全てを使つて奉仕したいと言うのなら、それを全て貪りたい。同時に、自分も愛里寿に快感を覚えさせたい。和明は上体を伏せ、愛里寿に覆いかぶさるような姿勢になると耳元で囁いた。

「愛里寿ちゃん、顔、こつち向けて……」

「ふあ、はい……っ！」

うつ伏せのまま、愛里寿は顔を横に向けた。和明は彼女の淡い色の唇に自身の唇を押し当て、そのまま舌を愛里寿の口腔内に侵入させる。

「ンツ!? ふっ、ふうっ……!」

「はあっ、ちゅ、愛里寿、ちゃん……!」

「か、和明、さん……ちゅ、れろっ……」

突然のキスに愛里寿はびっくりしたような反応を見せたが、すぐに緊張を解くと入り込んできた和明の舌に自分の舌を絡ませてきた。愛里寿の甘く熱い吐息が和明の口腔内に流れ込んできて、彼女の興奮が伝わってくる。

和明はしばらく舌を絡ませ合った後、愛里寿の歯茎をくすぐるように舌を動かした。

「ンンッ! ん、くっ、ああ……!」

くすぐったいのか、愛里寿は戸惑い混じりの反応を見せる。しかし同時に身体の強張りも解けてきた。和明は手探りで傍らに転がったままのローションを取り、それを自分と愛里寿の結合部に垂らした。

「愛里寿ちゃん、あと、ちよつとだから……!」

「ひうつ! 冷た……あ、ああっ!」

緊張の緩みにローションの滑りが加わり、更に和明の怒張が愛里寿

の奥へと進む。

やがて和明の亀頭は強い抵抗を覚えた。どうやら愛里寿の肛門から直腸を経て、今の彼女に挿入できる最奥まで届いたようだ。結合部を見てみれば、コーラ缶並みの大きさと長さを備えた肉棒の2／3までが愛里寿の尻穴に呑み込まれている。

アナルを一杯に拵げて悶える愛里寿の姿は痛々しくも淫猥で、同時に可愛らしいと和明は素直に思った。

「ふぁ……は、挿りました、かつ……!?!」

「ああ。ちゃんと呑み込んで……気持ち、いいよ……」

苦しそうにしつつも問いかけてくる愛里寿に、和明は優しく答えた。

実際、愛里寿の尻穴は和明に未知の快感を覚えさせていた。アナルセックス自体が和明は初めての経験である。当然ながら他の女性のアナルがどのようなものは、しほ相手ですら知らない。

それは膣内とは全く別の強烈な締め付けであった。そして同時に温かく、また滑っていた。

「んはっ!?! あっ、あうっ!」

ほんの少しだけ前後に動かしてみる。それだけで愛里寿は大きく喘ぎ、背を反らす。

触れただけで壊れそうな繊細な島田流の天才少女が今、自分の肉棒を受け入れ、そして自分に屈服している。ぞくぞくとした支配感が快感と共に背筋を昇ってくる。

「(……まずいな、こりゃ)」

初めてのアナルセックスで悶える愛里寿は既に一杯一杯で、これ以上の刺激に耐えられないようにも見える。

だが——このまま彼女を無茶苦茶にしまいたい。そんな、和明の中からこみ上げる暴力的な衝動があった。

「スウ、ハア……」

「んっ……」

和明はその衝動を抑えようとするように大きく息を吸い、吐いた。色白の愛里寿の尻が震える。

とりあえずの目標であったアナルへの挿入は達したのだ。無理はさせたくはない。そう思い、和明は腰を引こうとした。

「……えっ?」

その動きの意図が愛里寿にも伝わったのだろう。戸惑いを浮かべる彼女に、和明は優しく言った。

「愛里寿ちゃん、大丈夫。今、一度抜くから……」

「……………」

その言葉に、愛里寿はほんのちよつとの不満を顔に浮かべ――

「愛里寿ちゃん?」

「……んんっ」

「うっ!?!」

直後、和明の肉棒を強く締め付けた。まるでそのまま引きちぎられそうな程の括約筋の動きに、和明は思わず肉棒を再び奥まで戻してしまふ。

「ちよ、愛里寿ちゃん?!」

「か……和明、さん」

まだ圧迫感を感じているのだろう。小刻みな呼吸と共に、愛里寿はおずおずと尻を動かす。

「まだ……まだです。まだ、和明さん……射精して、いません」

「い、いや、そう言っても」

「お願いします……このまま、私のお尻で気持ちよく、なって……んうっ!」

頭より先に反応を示した肉棒がビクンと愛里寿の腸内で跳ね、彼女は喘いだ。

戦車道を修める女性というのは、共通して意思が強いのだろうか?

つい先日、まほの処女を奪った時の様子が脳裏に浮かぶ。おそらくはここで和明が引き下がっては愛里寿は満足すまい。

「……………」

ベッドの傍らで椅子に腰かける千代に視線を向ける。柔和な表情のまま、千代はこくりと頷く。

「……分かった。痛かったら、言ってくれよ?」

ならば、とことんまで愛里寿を食ろう。和明は心を定めた。

親公認で据え膳を食えと言うのだ。少しでも残しては——愛里寿の中の滾りを完全燃焼させねば——呼ばれた甲斐も無い。

「愛里寿ちゃん。身体、力を抜いて……」

「はっ……はい」

四つん這いの姿勢だった愛里寿の身体を挿入したままうつ伏せへと変える。ペたりと横になった愛里寿に覆いかぶさるよう和明は身体を重ね、同時に彼女に体重がかからないように支える。

「うっ……ぐうっ！」

「んあぁっ！」

コンドームを破らん程に怒張した肉棒をずるりと引き、柱を打ち込むように愛里寿の尻穴に再び挿入する。ゆつくりと、しかし彼女の中を味わい尽くすように。

「す、凄いです、和明、さんっ！ お尻、焼けっ！」

「愛里寿、ちゃんっ！」

「ひうっ！」

肺の空気が全て押し出されたような声と共に愛里寿が悶える。

尻穴が広がったことでローションが奥まで浸透し、また汗や腸液の分泌も進んでいるようだ。強烈な締め付けはそのままに、少しずつだが抽送が滑らかになってゆく。

愛里寿は和明の肉棒を「焼けるよう」と言ったが、それは和明にとっても同じだった。愛里寿の肌の火照りの全てがそこに集中しているかのように、愛里寿のアナルは堪らない熱さで和明の肉棒を受け入れていた。

「愛里寿ちゃんっ！ く、くうっ！ 締まるっ！」

「あひっ！ ひっ、あぐっ！」

ゆつくり腰を上げ、組み伏せられたままの愛里寿の尻穴を更に蹂躪する。その度に愛里寿は悲鳴めいた喘ぎをあげ、痛々しくも押し広げられたアナルを脈動させる。

和明は膝で身体を支えつつ、片手を愛里寿の股間へと伸ばした。薄い陰毛の柔らかな感触を経て、彼女の秘唇へとたどり着く。

「ああんっ！　だ、駄目、です、そこはっ……ンンッ！」

果たして愛里寿の秘所は粘りある愛液を滲ませていた。彼女がアナルセックスで快感を覚えている証拠だ。恥じらいを浮かべる愛里寿だったが、クリトリス周辺を弄られ嬌声をあげる。

和明はそのまま、愛里寿の陰唇を弄りつつ肉棒を小刻みに動かした。

「あっんっああっ！　か、和明さんっ！　それ、んひいつ！」

「大丈夫、もつと、身体を預けて……」

がくがくと愛里寿の身体が揺れる。指を濡らす愛液の感触を覚えつつ、和明は彼女を前後から責め続ける。

「ンッ！　か、かずあき、さっ！　わ、わたっ！　私っ！」

「いいよ、愛里寿ちゃん。そのまま……」

「あうっ！　あ、あああっ！」

和明の身体の下でびくんと愛里寿が大きく跳ねた。股間を弄っていた指に愛液の飛沫がかかる。どうやら彼女を絶頂に導くことができたようだ。

直後、愛里寿の身体がくたりと脱力した。同時にアナルの締め付けが若干弱まる。

「あ、え、あう……？」

「俺も、あと、ちよつとだから……ごめん、愛里寿ちゃんっ！」

「ひぐっ!？」

絶頂の余韻から戻ってきていない愛里寿に和明は詫びにもならない言葉を投げ、大きく腰を持ち上げて一気に突き入れた。苦悶と喘ぎの入り混じった幼い声。

しかし、和明の中の昂りは愛里寿への気遣いを忘れかけさせていた。幼女と言っても通用するであろう小柄な身体で自分の肉棒に悶える愛里寿の姿は余りに背德的であり、嗜虐的であり、官能的だった。

「うっ！　ああっ！　熱いつ！」

「ひぎっ！　か、かずあっ!?　んああっ！」

「ああっ！　で、出る、出るうっ！」

腰の奥から強い射精感がこみ上げてきた。愛里寿の身体が脱力か

ら戻る前に達しようとして和明は腰を振り、挿入できる一番奥まで肉棒を突き込んだ。

「あああつ！ 愛里寿ちゃんっ！ ぐ、ああつ！」

どくんと肉棒が脈打ち、どくどくと精液が吐き出されてゆく。

「はあつ、あ、くうっ……！」

「和明、さん……お、お尻、溶け……ああつ！」

コンドームの中をたちまち満たし、溢れた白濁液が逆流して結合部から溢れ落ちる。

たっぷり数十秒ほど和明は射精の快感に浸り、やがてアナルから押し出されるように肉棒が吐き出された。ちゅぽんと後を追うようにコンドームの精液が溜まった先端がひり出される。

昨晚の西住邸で相当出したというのに全く衰えない射精量に自分でも驚きつつ、和明は大きく息を吐いた。

「ハア……ハア……」

「お疲れ様」

スツと水の入ったグラスが差し出される。

身を起こし、視線を上げてみるといつの間にか椅子から立ち上がっていた千代が横にいた。

「あ、ありがとうございます……」

途中から千代の存在を半ば忘れていた和明は少し気まずそうにグラスを受け取り、それを傾けた。レモンを少し加えているのだろうか、爽やかな香りのキンと冷えた水が火照った体に流れ込んでくる。

「ンツ……ンツ……ぷはっ」

「いい仕事をしてくれたわ。愛里寿もお疲れ様」

「あ……はい、お母様……」

身体に力が戻ってきたのか、うつ伏せの姿勢から愛里寿はころりと身体を転がした。白い肌に玉のような汗が浮かんでいる。

千代は彼女に手を差し伸べるとゆっくりと起こし、和明と同様にグラスを渡した。両手でグラスを持ち、こくんと水を飲む様子が何とも可愛らしい。

グラスをテーブルに戻し、愛里寿は改めて和明に向き直るとペこりと頭を下げた。

「和明さん、ありがとうございます。お陰でだいぶ楽になりました」
「え!!? いや、そんな……むしろ、俺は気持ちよくさせてもらった側で」

相手のアナルを蹂躪しておいて礼を言われるというのも、何とも奇妙な話だ。変な面映ゆさを覚えつつ和明は礼を返す。

そんな和明と愛里寿の様子を見つつ、千代が言った。

「今回はここまでかしらね」

「え? 俺ならまだ……」

「今日の演習はまだ終わりではないわ。この後、夜戦の演習も行うことになっているの。相手がゲリラ戦を展開して、長丁場になる可能性もあるから」

「はあ……」

何とも大変な話だ。感心の声を漏らす和明に、千代は付け加える。

「それに北海道に到着するまでの二日間、和明君には何度も愛里寿の相手をして貰わないといけないから」

「……はは」

思わず苦笑いを浮かべる和明に、愛里寿が不安そうに尋ねる。

「その……和明さんが嫌なら、私は無理には」

「え!!? いやいや、そんな訳ないって! むしろ、愛里寿ちゃんの方こそ」

「私は、和明さんでなければ嫌ですから」

「……………」

やはり戦車道を修めている女性は年齢問わず意思の強い女性が多いのだろうか。隠し立てない愛里寿の言葉に、和明は逆に照れを覚えた。

激しい行為の直後だというのにどこか弛緩した空気の中、千代は何げなく言った。

「和明君、ちよつと立って貰っていい?」

「え? あ、はい」

様々な液体に濡れたコンドームを外し、和明は言われるままに立ち上がった。ドレス姿の千代は和明の身体の状態を確認するように顔を寄せ、スツと腰を落とした。

「あむっ」

「うっ!？」

突然の刺激に和明は声を漏らした。半勃起状態の肉棒が暖かい滑りに包まれている。

「じゅるっ……ふっ、凄く生臭い。雄の匂いって感じね」

「え!?! あの、千代さん!？」

「お母様?」

精液と先走りに塗れた肉棒を当たり前のような顔で啜っていた千代はその唇を離し、和明を見上げつつ言った。唐突な実母の行為に愛里寿も驚いたのか目を丸くしている。

そんな驚いている愛里寿に視線を移しつつ千代は言った。

「愛里寿、貴女も一緒に……」

「いや、ま、待つてください千代さん! 今回はもう終わりって……!？」

「ええ。愛里寿の欲求不満を解消してもらおう『のは』終わりよ?」

「そ、それじゃ……んくっ!」

更に問いかけようとした和明の言葉は、千代の手袋をはめたままの手淫によって遮られた。シルクの滑らかな感触が肉棒を包み、再び血を滾らせてくる。

「……これはその『お礼』」

竿を抜く手を止めないまま千代は言った。

ふとベッドにかかっていた重みが消えた。和明が視線を巡らせると、愛里寿がベッドから降りて千代と同様に和明の肉棒に顔を寄せてきている。跪くような格好の千代に対し、身長の高い愛里寿は少し屈むような体勢だ。

「愛里寿、覚えておきなさい。前は貴女は先に寝てしまったけど……ちゃんと自分を気持ちよくしてくれた相手にお礼をして、綺麗に終わらせるのがマナーというものよ」

「……はい、お母様」

「よろしい。さ、もつと顔を近づけて……」

粘液に濡れる手袋を一旦離し、千代は愛里寿を促した。幼さを残す愛里寿の整った顔が凶悪な怒張へと寄せられる。

「良く見なさい。これがさつきまで貴方のお尻に挿入されていた、和明君のおちんちん」

「はい……凄いです。太くて、どくどくしています……」

「こんな以太くて固いもので、和明君は愛里寿を傷つけないように気遣ってくれていたわ。それに感謝を示さないと。私は右からするから、愛里寿は左からお願ひ。連携して攻めましょう」

「連携って……う、うおっ!?!」

肉棒に左右同時にキスをされ、和明の腰が跳ねた。

「ちゅ……そうよ。笛を吹くみたいに、少し吸いながら……」

「ふあ、はい……ンツ、ちゅ……ど、どうですか、和明さん？」

慣れた仕草で肉棒の右側から奉仕を行う千代。

千代にリードされつつも、肉棒の左側から愛おしそうに小さな唇を押し当てる愛里寿。

美貌の母娘からの同時の奉仕に、和明の肉棒はビクビクと反応してしまう。

「いいわ、上手よ愛里寿……今度は舌で、根元から舐め上げるように……」

「ちゅ、れろっ……こうですか？」

「もつとゆつくりと、丁寧……じゅるっ、んはっ……」

「くっ、くうっ! 二人とも、凄いですっ……!」

愛里寿に手本を示すようにねっとり舌を肉棒に絡めてゆく千代。平時のフォーマルな姿のまま和明に奉仕をする様は新鮮で、まるで家元としての彼女を支配しているかのような錯覚を覚えさせた。

腰が抑えようもなく快感に震え、再度の射精感が湧きあがってくる。和明の反応に千代は目を細めつつ言った。

「ま、待ってください! このままじゃ、また射精るっ……!」

「構わないわ、遠慮なく射精しなさい。愛里寿、貴女は先端を啜えて。」

和明君が射精したら全部呑んであげるのよ」

「いや、そんな……愛里寿ちゃん、そこまではしなくても、うあっ！」

「あー……はむっ」

「我慢しないで、和明君……ンッ」

「ああっ！　ち、千代さんっ！」

小さな口を一杯に広げ、愛里寿は和明の龟头を咥えこんだ。同時に千代は竿の根元からカリにかけて舌を這わせ、幾度も往復させてゆく。

「ンッ、はぶっ、ちゅうう……」

口腔内で暴れる肉棒に愛里寿は息苦しそうにしつつも口を離さない。吸うように頬をすぼめつつ、先走りを滲ませる鈴口を舐めしゃぶる。

「れろっ、んちゅ……いいわ、愛里寿。その調子よ」

「ぐうっ！　も、もうっ！　うっあああっ！」

思わず愛里寿の頭に手をやりつつ和明は背を反らし、限界に達した射精感を開放した。

「ンッ!?　んむうっ！」

「落ち着いて、愛里寿。鼻で呼吸して、ちよっとずつ呑むの」

頭を固定された愛里寿は突然の射精に一瞬身体を強張らせたが、すかさず千代が彼女の肩に触れた。

「んぶっ、ンッ……こくっ……」

こんな状況でも、母が横に居るといふ安心感を覚えたのだろうか。

愛里寿は呼吸を整えつつ、和明の精液を嚥下してゆく。

「ああ……愛里寿、ちゃん……ごめん、まだ、出るっ……！」

「……こくっ」

謝罪しつつも射精が止まらない。見下ろす和明に、愛里寿は濡れた瞳で応えつつ更なる射精を口で受ける。

「うっ、あ、うあっ……！」

「……」

和明の腰の震えが完全に治まるまで愛里寿は口を離すことなく、迸る精液を受け切った。

「……けほっ」

「偉いわ、愛里寿。ちゃんと全部呑んであげたのね……ちゅっ」

少し咳き込みつつ、愛里寿は口を離した。千代はそんな彼女に顔を寄せ、口の端に残った白濁液の残渣を舐めとる。

「お母、様……んっ……」

愛里寿はそんな千代の行為に応えるようにキスを返す。膝に力が入らなくなった和明はそのままベッドに腰を落とした。快感の余り、視界がチカチカする程だ。

そんな和明に千代は言った。

「それじゃあ今度こそ一休みとしましょうか。北海道までは、まだまだ時間があるわ。愛里寿、貴女も一度シャワーを浴びてきなさい」

「けほっ……は、はい、お母様。でも、和明さんは……？」

「彼なら大丈夫。すぐに回復して貴女を何度でも癒してくれるわ。そうよね、和明君？」

「……ど、努力します」

次の演習が終わるまでに菊代の精力剤に頼ることになりそうだ。そんな事を思いつつ、和明は何とか答えた。

俺と家元（かのじよ）と決戦前夜 第一話

早朝の函館港。もやが揺蕩う港に一隻の輸送船が停泊している。

その船の前に並ぶのは古びた数両の戦車。IV号戦車に描かれた鯨のマークを筆頭に、全ての戦車にデフォルメされた亀や兎、河馬などのマークが描かれている。

「フラッグ戦だと思ってたら、いきなり殲滅戦への変更……か。参ったね、どうも」

戦車の搬出が進む中、その光景を眺めていた小柄な少女が呟いた。

茶色の髪をツインテールに結わえた姿は中学生程度にも見えるが、大洗女子学園の生徒会長を務める彼女、角谷杏の視線は鋭い。

「それでも、諦める訳にはいきません」

その横に立つショートカットの少女が静かに言った。表情こそ穏やかだが、語調は強い。

杏は横目に彼女に言った。

「こういう時、西住ちゃんって強いよね」

「そ、そうですね?」

少女の声に戸惑いが混じる。

「まあ……あちらさんも到着したみたいだし、確かにどうこう言ってもらえないか」

杏の視線が今度は港の一角へと移る。学園艦とは微妙に外観が異なる大型艦、大学選抜の演習艦がそこには停泊していた。やはり同様に戦車の搬出を行っているようだ。

「現地に到着次第、部隊の展開と戦術を考えます」

「……頼んだよ」

「はい、何とか数を補えるように……?」

その時、ショートカットの少女の身体がぐらりと揺れた。

「あ、あれ?」

「ちよ、西住ちゃん!」

慌てて杏は彼女の身体を支えた。どうかバランスを戻しつつ少女が礼を返す。

「すみません……」

「大丈夫？　西住ちゃん、ちよつと休みなよ。試合が決まってから気を張りっぱなしなんだから」

「そう……ですね、ありがとうございます」

——こう言っではいるが、おそらく彼女は休むまい。

大洗女子学園戦車道隊長・西住みほの人となりを知る杏は心の中で呟いた。

「あれが大洗女子学園の戦車道チームですか？」

出店用の資材をトラックに乗せつつ、和明は港の一角に停泊する輸送船を見て言った。

「ああ、今年の大会で伝説を作ったチームさ。決勝戦は僕も生で観戦したけど、凄かったねえ。渡河中にエンストした車両を救うために隊長自ら牽引をしようとしたり、黒森峰の虎の子の超重戦車マウスを脆弱な戦力で撃破したりで」

「はあ……」

マウスの名前程度は和明も知っていた。おそらくは高校戦車道のレギュレーションにおいては最厚の装甲を誇る戦車の筈だ。そんな怪物にどうやって白旗を上げさせたのだろうか。

あれこれ想像しつつ和明は荷物を載せ終えた。ここからは陸路で北海道演習場まで移動となる。落ち着いて千代や愛里寿と会えるのは試合を終えてからになるだろう。

「おはようございます」

「あ、愛里寿ちゃ……おはようございます、島田さん」

背後からの少女の声。振り返ると、ベレー帽にパンツァージャケット姿の愛里寿が立っていた。店長も彼女に気づいたのか、エプロンの皺を伸ばしつつ挨拶を返す。

「どうも島田さん、この度はお世話になりました」

「いいえ、会場でもよろしくお願いします」

外見こそ幼い少女のそれだが、背筋をぴんと伸ばし落ち着いた態度で店長と話す姿は大人との対話に慣れた大学選抜隊長の名に恥じないものだ。13歳だった時の自分の様子を思い返して和明はそう思った。

「すぐに出られるのですか？」

「いいえ、積み込みはしましたが家元への挨拶もまだですし、朝食を摂って戦車などの搬出が終わった後から出る予定です」

「……そうですか」

ふと、愛里寿の視線が和明に向けられる。彼女は店長に言った。

「あの、店長さん。篠原さんを少しお借りしても良いですか？ 家元から男手が欲しい用事があり、助けて貰いたいとの事なのですが」「こちらは大丈夫ですが……篠原君、どうだい？」

尋ねてくる店長に和明は頷いた。

「分かりました。店長、それじゃあまた後で」

「ああ。僕はトラックの中で休んでるから、用事が済んだら戻ってきて」

「恐れ入ります。篠原さん、では一緒に……」

スツと身を翻す愛里寿。その小さな背中その後には和明は続く。

この艦内——と言っても、ちよつとした町程の広さはあるのだが——での二日間の中で、和明は愛里寿の二つの変化に気づき始めていた。

和明に背を向けたまま、愛里寿は言う。

「すみません、和明さん」

「いや、まあ……試合前はこれが最後になるし」

ひとつは、和明が思っていた以上にこの2日間の「回数」が多かったこと。初日のアナルセックス以降も、愛里寿とは何度も身体を重ねている。

ふと、愛里寿の足が廊下の途中で止まった。その横にはピンク色の扉に「Lady's」の文字。当然それが何を意味するのか和明も知っている。女子トイレだ。

愛里寿はくるつと振り向くと、和明に言った。

「それでは……」で、お願いします」

「うえっ!？」

「この後、試合前の最後の演習があつて……家に戻る時間が無いので」「いや、だからって」でつてのは……」

思わず声が出て、慌てて自分の口を塞ぐ。改めて小声で和明は答えた。

そんな和明の態度に、愛里寿は寂しそうな表情を浮かべる。

「……駄目ですか?」

「……」

もうひとつは——本来の目的である「戦車道の鍛錬の中で生まれた欲求不満の解消」を抜きにして、愛里寿が性行為に強い興味を持つようになったという事だ。

戦車道でもそうだが、おそらく彼女は一度興味を抱いたものに対して追及しないと気が済まないのだろう。どうすれば和明がより気持ちよくなれるのか、どうすれば自分がより興奮できるのか、そういった事を色々と試してみようとする。

そしてその中には今こうして、和明を動揺させるような発想も混じっているのだが——寂しそうな顔で懇願してくる愛里寿に対して素っ気なく断る事ができる男は、まず居ないだろう。

「大丈夫。それじゃ、やろうか」

「……ありがとうございます」

表情を寂しさから嬉しさに変えると愛里寿は先にトイレに入った。どうやら利用者が居ないかを確認していたようだ。数秒の後にドアを開け、和明を促す。和明は周囲を見回し、自分たち以外に廊下に居ない事を確かめて中に入る。

小便器と便器に分かれている男子トイレと異なり、女子トイレは全てが個室となっている。奥の方の和式便器が設置されている所を選び、愛里寿は戸を開けた。清掃が徹底されているのだろう、室内には清潔感があり、芳香剤のフローラルの香りが漂っている。

和明が入ってきたのを確認し、愛里寿は鍵をかけた。トイレの戸を

背に和明が立ち、その前に愛里寿が立つような格好だ。

「大丈夫です、この時間にここを使う人は選手でも少ないですから。和明さん、ズボンを……」

当然だが和明にとって女子トイレに入る事自体が初体験だ。もし此処にいる事や、あるいは出てくる所を確認されただけでも社会的に死ぬのは確実だろう。

そんなこちらの緊張をほぐすように愛里寿は言う、和明の前に跪いた。ベレー帽を取りポケットに入れ、ジーンズ越しに和明の股間へ顔を近づける。

「あ、ああ……っど？」

和明が自ら脱ごうとする前に愛里寿が動いていた。留め具を外し、流れるような所作でジッパを下ろす。

「んっ……」

愛里寿は手を止めないまま口を閉じ、もごもごと口腔内で舌を動かしている。唾液を溜めているようだ。

間もなく愛里寿の細い指が和明のトランクスの中まで入り込み、半勃起状態の肉棒が露出する。

「……………」

無言で愛里寿は和明を見上げた。

彼女が「許可」を求めている事に気付き、和明は答える。

「いいよ、愛里寿ちゃん。啜えても……」

「っば……いい、いふあふあひまふ……あむっ」

「ううっ！」

唾液を溜めたまま愛里寿は答え、そのまま小さな口を一杯に広げて亀頭を啜えこむ。彼女の口腔内の滑らかさと熱さに和明の腰が跳ねる。

更に愛里寿は頭を和明に寄せる。竿の半分ほどが呑み込まれ、こつんと喉奥に亀頭が当たったのが分かる。

「ンツ、んぶっ、ふうっ……………」

息苦しそうに眉をひそめ鼻を鳴らす愛里寿だったが、それでも口を離す事無く口淫を始めた。両手を和明の脚に添えて固定すると、緩や

かに頭を前後させつつ舌を肉棒に絡めさせてゆく。

「あ、愛里寿ちゃん、熱いつ……い！」

愛里寿は大丈夫と言っていたが、やはり女子トイレの中での行為というのは嫌が応にも利用者が来るかもという意識と緊張感を和明に覚えさせ——それがそのまま興奮へと変わってゆく。

そしてそれは愛里寿も同じのようであった。啜えている最中も腰がもぞもぞと動いており、彼女の快感を示している。

「んんっ、じゅるっ、んぷっ……」

口の端から零れる唾液を手の甲で拭いつつ、愛里寿は行為を続ける。股間に血液が集まり、肉棒がより大きく、固くなってゆくのが分かる。

自分の肉棒が十分に怒張するのを待ち、和明は愛里寿の頭を優しく撫でた。

「愛里寿ちゃん、そ、そろそろ……」

「ぶはっ……はい」

和明の行動を理解し、愛里寿は肉棒を口腔内から解放するとジャケットの別のポケットから小さなポリ容器とコンドームの袋を取り出した。封を切つてスキンを取り出し、唾液塗れの肉棒に被せる。

「今度は和明さんが……お願いします」

「ああ、分かってる」

ポリ容器の中に入っているのはローションだ。和明は愛里寿を立たせるとトイレの奥の壁に手を付けさせた。彼女の履くミニスカートをまくり上げると、熊がプリントされたコットン製のショーツが露わになる。

「あれ?」

それは普通のデフォルメされたクマとは明らかに違っていた。至る所を包帯や絆創膏で覆っており、何とも痛々しさを感じるデザインだ。そして、そんなクマに和明は見覚えがあった。

「これって『ボコられクマのボコ』だっけ?」

「知ってるんですか、和明さん?」

「まあ、その、名前程度だけど。好きなの?」

「はい、小さい頃から大好きです。あの、和明さん。今度でいいので自宅に来てください。未放送分の秘蔵映像とかお見せしますから」
「……………」

お尻をこちらに突き出すような姿勢に顔を赤らめつつも、愛里寿は意外なところで同じ趣味の人に会ったような嬉しさを見せた。こういう所は、やはり13歳の少女相応なのかもしれない。

そんな事を考えつつ和明は愛里寿のショーツに手を添え、そのままずり下げた。未成熟な果実を思わせる白く小ぶりな彼女の尻が露わになる。薄い陰毛に彩られた薄桃色の秘唇は微かに濡れており、フェラチオだけで彼女が感じていた事を物語っている。

和明は容器の蓋を開けるとローションを自分の手に垂らし、濡れた指で愛里寿のアナルに触れた。

「んあつ……………」

びくと彼女の身体が反応を見せる。下半身こそ丸出しだが上半身は大学戦車道隊長として務める時の格好と同じで、それがより倒錯的な印象を和明に与えてくる。

和明は窄まりの周辺を丁寧に濡らし、くにくいと指を動かして解してゆく。

「はあつ……………か、和明、さんっ、んんっ！」

「愛里寿ちゃん、ちよつと声、抑えて……………」

指の動きに合わせて愛里寿は喘ぎを漏らす。その声が大きくなってきている事を彼女に伝えつつも、和明は愛里寿のアナルが柔らかくなってきた事を確かめつつ更に指を奥へと進めた。

「ああつ、んっ、ひっ……………」

ひと際、反応が強くなる。汗ばみ始めた愛里寿の首筋から仄かに石鹸の匂いがする。シャワーを浴びてからすぐに和明の所に来たのだろう。

ローションの容器を握って温めつつ、今度は直接ローションを垂らす。この二日間で何度か和明の肉棒を受け入れた事でかなり滑らかになってきたが、それでもしつかりとした準備は必要だ。

指をゆつくりと、第二関節まで沈めてゆく。強い締め付けを感じつ

つも和明は指の出し入れを続ける。

「ふあっ！ あ、あうっ！」

もう片方の手で愛里寿の前方の方を弄る。未成熟な陰唇はひくつき、熱さを伴った湿り気が伝わってくる。

和明は愛里寿の窄まりにもう一本の指を挿れ、そこを広げた。

「いくよ、愛里寿ちゃん」

「は、はい……来っ、ひうっ!？」

あえて不意をつくのように、彼女の返事を待たずに愛里寿のアナルへと肉棒を突き入れてゆく。

彼女の耳元に口を近づけ、和明は聞いた。

「あと、時間はどのくらい？」

「あう……は、八時に集合なので、30分くらい、です……」

「分かった。それじゃ、そこまでに片付け込みで終わらせるから」

「えっ……んっはあんっ！」

軽く腰を引き、すぐに前に突き出す。それを何度も繰り返し、次第に抵抗が弱まってくるのを待ってより奥へと肉棒を進めてゆく。

奇襲を受けて最初は戸惑いが混じっていた愛里寿の嬌声だったが、次第にその声は甘みがかかり、お返しとばかりに緩急をつけて肉棒を尻穴で締め付けてくる。

「くっ……上手くなったね、愛里寿、ちゃんっ……堪らない……!」

「あ、ありがとう、ごぎっ、ああっ！」

荒い吐息の中、懸命に声を押し殺しつつも愛里寿は頬を紅潮させ、和明の肉棒が与えてくる快感に震えている。

「馴染む」と言えば良いのだろうか。驚くべきことに彼女の肉体はこの短期間でアナルセックスを受け入れ、また和明自身も愛里寿のアナルを蹂躪する事への抵抗が薄れていた。

膣内とは全く異なる、しかし熱く締め付けてくるうねり。それは今にも射精しそうな程の快感を和明に与えてきたが、歯を食いしばり、愛里寿を絶頂に導くまでは堪えようと腰を振る。

「ああっ、和明、さんっ！ 私、もうっ……!」

「ああ、俺も、そろそろっ！」

泣きそうな顔で近づく絶頂を訴える愛里寿を愛おしく思いつつ、和明はとどめとばかりに腰の動きを強めた。

「……!?!」

その時、ふと愛里寿の動きが止まった。

「愛里寿ちゃ……ンンッ!?!」

背中越しに彼女の挙動を訪ねようとした和明は、その口を小さな手で塞がれた。

「……………」

ふるふると首を振る。

直後、トイレのドアが開く音と共に幾人かの少女の声が飛び込んできた。

「ふう、お疲れ〜」

「やっぱ寄港のタイミングでの当番はキツイね〜。腕、パンパンになっちゃった」

「!?!」

和明の背に冷たいものが走る。どうやら会話の内容からして戦車道の選手ではなく、艦の運行に関わっている船舶科の大学生のようだ。

そんな状況把握をしている間にも、まさか女子トイレ内で誰かがセックスしているとも思わない彼女らはトイレに入室してきた。和式便器は不人気なのか、距離が遠い洋式を選んくれたのが幸いか。

愛里寿に口を塞がれたまま和明は彼女を見た。まだ挿入されたままという事もあり瞳は潤み、頬は赤いままだが「このまま黙ってやり過ぎしましょう」と視線が訴えてきている。

「ねえ、ところで今回の試合、どう思う?」

「どうって?」

どうやら入ってきた少女は二人組のようだった。隣り合わせで入っているのか、大きな声で言葉を交わしている。

「いや、ほら、聞いたけど高校生の方の戦力って戦車8両って言うじゃない。それをこっちは30両で相手するんでしょ? それってイジメじゃないかな?」

「まあ……ねえ。ちよつと酷いよね」

「……………」

口を閉じたまま、愛里寿の眉が八の字に変わる。

「アレじゃないかと思うの。大洗……だっけ？ あそこの隊長って、西住流の家元の娘なの。それでウチの戦車道の上は島田流だから……」

「記念演習って名目で、西住流の面子を潰そうとしてるって事？」

「結構あると思わない？ 今の隊長って家元の娘さんだしさ、楽な試合で手柄を取らせたいとか」

「…………言われてるなア」

何とも隠し立てのないトークの内容だ。和明は苛立ちを覚えるが、そう思われても仕方ない状況であると理解もできた。西住邸でまほが話した事が事実なら、これは元々大洗を潰すための試合なのだ。

そう和明が思っていると、ふと口を塞いでいた愛里寿の手が離れた。見下ろしてみると、眉は八の字にしたままで首を上げている。

「(ちよ……)」

和明が止める間もなく、愛里寿は言った。

「…………戦車道に楽な試合など無い」

「えっ？」

「え、嘘、隊長!？」

先ほどまでの嬌声とは打って変わった落ち着いた口調と重みある声。

トイレに先客が居たのは把握していても、それが愛里寿だとは思わなかったのだろう。向こうのトイレの中の少女たちの声に露骨に焦りが混じる。

「数の利を過信し、負けてきた連中を私は幾つも見てきた。私が1両で15両の戦車を撃破した話を知らない訳ではあるまい？」

「え、ええつと……」

「す、すみません隊長！ あの、そういうのじゃなくなつて……」

「……………」

愛里寿の幼くも威圧的な声に、一回り近く年上の少女が完全に屈服

している。

そんな様子を聞きながら、和明は未だ挿入されたままの結合部へと視線を移した。

——そしてそんな13歳の少女が、自分の肉棒に悶え、感じ、快楽を貪っている。

「(……試してみるか?)」

それは非常にリスクの高い行為と言えた。露呈すれば自分も只では済むまい。

だが——同時に堪らないスリルを、和明は確かに感じていた。

「根拠もない話を無作為に広めるな。今のは私も聞かなかった事にんああっ!」

「……え?」

「た、隊長、どうしたんですか?」

少女たちの戸惑う声。

「な、何でもない。ちよつと昨晚、冷やしたっ、だけっ、んんっ!」

「(ぐうっ、し、締まるっ……!)」

少女たちの不審を否定しつつ、愛里寿は突如として腰の動きを再開した和明に焦りの視線を送った。

声を出さず、口の動きだけで愛里寿は和明に言った。

「(和明さん!?! な、何を……) く、んくっ!」

「(そのまま、あの子達を追い返して。愛里寿ちゃん)」

「……!」

「あ、あの、隊長、大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫、だ……!」

「少女」としての島田愛里寿でなく「大学戦車道選抜隊長」である愛里寿を犯す。

それは和明に堪らない支配感を覚えさせると同時に、愛里寿にとっても新たな刺激になるという確信があった。現に今も、愛里寿は焦りと動揺を浮かべつつも和明の行為に抵抗することなく、きゆうと尻穴で肉棒を締め付け続けている。

少女たちは自分の用足しを終えたのか、普通にこちらを気遣ってい

るようだ。彼女らの言葉に愛里寿はあくまで「隊長」としての態度で返す。

「んあつ、あ、んうっ！」

「隊長、その、船医を呼びますか？」

「必要……ない。その、ふうっ！ す、少し、大きいのが……出そうな、だけ、だっ！」

口調こそ強いままだが、その表情は興奮と緊張で今にも泣きだしそうになっている。

そんな愛里寿が堪らなく可愛らしく——同時に、責めたくなる。和明は大きく腰を引き、ずんと前に出した。

「はうっ！」

「ほ、本当に大丈夫なんですか？」

「諄ととい。私なら……ンツ、平気だ。さっさと……ふうっ、い、行け、気が……散る！」

「わか、分かりました！ すみませんでした、隊長！ ほら、行くよー！」
「ちよ、ちよつと待ってよー！」

噂話を当人の側でしていたという負い目もあるのだろう。愛里寿の言葉に彼女らは委縮し、そそくさとトイレから退出してゆく。

ドアが閉まる音が響き、足音が遠ざかるのを待ち——愛里寿は涙を浮かべたまま、少し恨めしそうに和明を見た。

「……酷いです、和明さん」

「ごめんね、愛里寿ちゃん……でも、興奮したろ？」

「……………」

和明の言葉に愛里寿は更に顔を赤くし——こくと頷く。

「はい……怖いのに、凄くゾクゾクして、私と和明さんのしている所を気付かれたらって思ったら、余計に体が熱くなって……」

「変態さんだな、愛里寿ちゃんは」

「……………」

びくと愛里寿の身体が反応を示す。

最初のアナルセックスの時もそうだったが、まほが恋人めいたセックスを求めてきたのに対して愛里寿には被虐欲めいた傾向があるよ

うだ。日ごろ「島田流の天才少女」として人の上に立ち振舞う反動として、誰かに支配されたいという欲求があったのかもしれない。

「変態……ですか？」

「ああ、演習前にこうしてトイレでお尻で俺のを求めて夢中で腰を振って、他の人が入ってきてても止められない……可愛い変態さんだ」
「んっ、ああ……！」

愛里寿の口から吐息が漏れる。もじもじと尻をくねらせつつ、彼女は明らかに感じていた。

「か、和明さん……それでは、お願い、します……」

「何を？」

「ふああっ！へ、変態な、私に……和明さんの、ち、ちんぽで、お仕置きして、くださいっ……！」

「……喜んでっ！」

「ああんっ！い、いっつ、お尻、いっつ！」

和明の肉棒で尻穴を押し広げられ、愛里寿はそれを喜々として受け入れ、トイレ内に響く程の声で喘いだ。

「……青森上空を通過しました。間もなく北海道です」

早朝の空を泳ぐ、巨大な飛行船。その船体には黒森峰女学園の校章が大きく描かれている。

その船内の一室で、黒森峰戦車道隊長を務める西住まほは眼前の女性に報告した。

「良い運転だったわ。おかげでズレる事もなく全ての書類に捺印できた……ただ、ちよっと枚数が多かったわね。知波単の転校手続き書類が100枚近くあったけど、何故、あそこだけ22両分の戦車を用意しているの？」

「ちゃんと支援用の車両数は伝えておいたのですが……」

彼女、母であり師匠でもある西住しほの言葉にまほが困惑しつつも答える。

そして——しほとまほの関係には、それに「もう一つ」が最近は加

わっている。

「菊代さんから伺いました。『彼』が島田親子と共に向かっていると」
まほの言葉に、しほは周囲に自分たち以外の気配がない事を確かめ
つつ言った。

「おそらくは……予想通りの事が起こっているでしょうね」

「島田愛里寿は13歳です。そんな事には……」

「するわ。少なくとも『彼女』なら、それを出来るように準備してきて
いる筈」

「……………」

「勝ちなさい、まほ。全ての意味でね」

しほの言葉に、まほは少し考えて尋ねた。

「それには……お母様に勝つ事も含まれますか？」

飛行船の高度が下がってゆく。

しほは眼下に微かに見える大学戦車道選抜の演習艦を見つつ言っ
た。

「……………解釈は任せるわ」

第二話

「ふむ」

「な、何ですか？」

戦車道連盟公式・北海道演習場。

北海道の広大な大地を利用した、国内最大の演習場である。森林、草原、丘陵などの自然の地形に加え、テーマパーク跡地を含む市街戦を行う事もできるようになっていた。

現在、その演習場の観戦用スペースは喧噪に包まれていた。何両ものトラックから什器やテント用の建材が下ろされ、それが幾人ものスタッフによって迅速に組み上げられてゆく。

入口にあたるゲートには「プロリーグ発足記念演習・大洗女子学園対大学選抜チーム」と書かれた横断幕が掛けられ、その下をプロジェクトター機器を抱えた業者が丁寧に運ぶ。

「ちよつと失礼」

「え？　え？」

その一角、「売店（提供・戦車道ショップヨコハマ）」という看板が掲げられたテントの近く。

商品の搬入を進めていた和明は、自分に顔を寄せ鼻をスンスンと言わせて匂いを確かめてくる謎の少女に戸惑いを浮かべた。

チューリップハットめいた帽子を被り、見慣れない弦楽器を抱えたその少女は和明の横を通り過ぎようとした時にふと足を止め、物珍しそうに和明に視線を向けると急にそんな行動に出たのだ。無論、初対面である。

「……ああ、失礼したね」

更に数秒、彼女は和明の匂いを嗅いでいたが満足したように顔を離れた。年齢的には和明より年下の筈だが、どこか大人びた雰囲気は漂わせている。

「あの……何か、ありましたか？」

一応の接客モードで返す。大学選抜のユニフォームではないジャージ姿で、胸元には「継」という文字がプリントされている。大

洗の関係者だろうか。

そんな和明の混乱を楽しむように、帽子の少女は微笑んだ。

「いや、随分と幾つもの香りが混じっている人だと思ってね。気を悪くしたのなら申し訳ない」

「!？」

どきりと和明の心臓が跳ねる。

少女はポロンと手元の楽器を鳴らした。

「風というものは一方向から吹くものではない。幾つもの向きから吹く風が絡み合い、そして流れを作る」

「……………」

「風に流されるのも悪くはないと私は思う。でも、向かいたい場所があるなら…………その風に逆らうことも、時には必要だろうね」

「あなた…………何者だ？」

小声で和明は尋ねる。

少女はもう一度、楽器を鳴らした。

「ただの名無しの戦車乗りだよ。むしろ、私としては君の方が…………」

「あーっ！ こんな所に！」

その時、別の少女が駆け寄ってきた。帽子の少女と同じジャージを着た、亜麻色の髪を左右で小さくお下げにしているその少女は彼女の肩を掴むと強く引いた。

「ミカ、『到着しても明日までは隠れておくように』ってダージリンさんから言われてたよね!？」

「折角の祭りの支度の空気を味わおうかと思つてね」

「それで言い訳のつもり？ もう、行くよ！ すみません、作業のお邪魔をしまして」

帽子の少女を離すまいと彼女の肩を掴んだままお下げの少女が和明に頭を下げる。

「いや、大丈夫です。えっと、その子は…………」

「うちの隊ちよ…………いえ、一般客です！ 只の一般客ですから！ 『風がく』とか言っていたかもしれないけど、いつもの事なんで気にしないでください！ 行くよ、ミカ！」

「そんなに力を入れなくても、私は逃げない……」

「そう言って、すぐにフラッと消えるんだから！ ほら、こっち」

「……失礼」

ポロンと楽器を鳴らし、帽子の少女はそのまま連れて行かれた。

「篠原君、何かあったのかい？」

呆然と取り残された和明は、店長の声で我に返った。

「あ、いえ、大丈夫……です」

何とも奇妙な少女だった。こちらに対する敵意や悪意は感じなかったし、本当にからかい目的だったのかもしれない。

しかし――

「あの、店長。店長って戦車道連盟の職員さんとかの知り合いって居ますか？」

「また唐突な質問だねえ……まあ、僕もこの界限は長いから、職員をされている方なら何人か知ってるけど」

「そうですか……」

――彼女の言葉は的を得ていた。大学が始まるまであと半月も無い。そうなれば、こうやって戦車道ショップに専念することも難しくなる。考えなければならぬ事は多い。

「店長、それなら……」

和明がそう言いかけた時、会場の入り口方面でにわかに声があがった。審判を示すゴルケットを付けた女性や、スーツ姿の連盟職員らしき人物が小走りにそちらに向かってゆく。釣られて和明もそちらに視線を向ける。

「……あ」

声が漏れる。

豊満な肢体を黒いスーツに包み、切り揃えられた艶やかな黒髪をなびかせ凛とした姿勢で歩く姿。西住しほである。

そんな彼女と並んで歩き、汗をしきりに拭いつつ頭を下げる恰幅の良い和服姿の壮年には和明も見覚えがあった。確か戦車道連盟の理事長だった筈だ。

「いやいや西住さん、わざわざご足労いただいて……」

「いいえ、高校戦車道連盟としてもこの試合の重要性は理解しております」

そう答えるしほを遠方から撮影する様子も見える。腕には戦車道新聞の記者を示す腕章。表向きは演習とはいえ、やはり日本を代表する二流派の未来を担う二人の天才少女の激突は衆目を集めているようだ。

「篠原君、僕たちもお迎えしよう。ちょっと作業を止めて」

「あ、はい」

エプロンの埃を落とし店長と共にテントから出る。程なくして、しほと理事長が近くを通りかかった。

「どうも家元、いつもお世話になっております」

「お疲れ様です」

「西住さん。こちら、今回のご協力いただいている……」

「存じています。急な話で大変かと思いますが、よろしくお願いします」

理事長の言葉を待たず会釈するしほ。その態度はあくまで「現場のスタッフを形式的に労うVIP」の枠を出るものではない。

和明は頭を上げると、ほんの一瞬だけしほと視線を交わした。

「……………」

「……………」

「西住さん？」

「……………何でもありません、理事長。次に向かいます」

ほんの数日前に実娘も交えて激しく身体を重ねた相手が、こうして無関係のような態度で凜として振舞う。それが当然ではあるのだが、一抹の寂しさを和明に覚えさせる。

そのまま二人は和明たちのテントを過ぎ、次の場所の視察へと向かう。彼女の纏う緊張感から解放されたからか、無意識に大きく息を吐く。

「ふう……………」

「……………篠原君、本当に家元に気に入られたようだねえ」

「え？　そうですか？」

今のしほの態度でそんな言葉が出てくるものだろうか。驚く和明に店長が言った。

「ああ。僕の知っている家元は常に周囲を斬り付けるような空気を纏っていてね。あれだけ柔らかい空気の彼女は初めて見るよ」

「はあ……」

分かる人には分かるという事なのだろう。

そういえば店長は20代から数十年の間、戦車道に関する商売をしていると言っていた。若い頃や、あるいは幼い頃のしほ等も知っていたのだろうか。

「さて、仕上げといこうか。現地の協力してくれているスタッフさんに説明もしないといけないしね」

店長はそう言いつつ肩を鳴らし、段ボールに詰め込まれた商品を取り出してゆく。

入場ゲートの方では、到着した大学選抜の戦車の搬入作業が行われ始めていた。

「明日の天候は晴れ一時雨。所により雷雨……少し荒れそうね」

演習場のガレージに向かう米戦車パーシングの列。それを誘導しつつ島田千代は手元のタブレットで明日の天気予報を見る。

「問題ありません。その前に殲滅します」

その横に立つ島田愛里寿は落ち着いた表情で答える。

「……愛里寿、身体の調子はどう？」

「大丈夫です、母上。極めて良好です」

プライベートの二人と違い、公の場での千代と愛里寿は「島田流家元とその娘」という姿勢を崩さない。愛里寿は男言葉に近い口調で話し、千代にも「お母様」でなく「母上」と呼んでいる。

そんな様子の愛里寿に千代は、彼女だけに届く声量で言った。

「彼のお陰かしら」

「っ!？」

一瞬、愛里寿の身体が硬直する。ミニスカートに包まれた尻がきゅっと引き締まるのが千代にも見て取れる。

「母上、それは今は」

「大事なところよ？ 貴女の今後のためにも」

愛里寿は言葉を遮ろうとしたが、千代はあくまで真面目な表情で返す。前を通過するパーシングを静かに見つめつつ言う様は、「島田流家元」の名に恥じない優雅なものだ。愛里寿は数秒だけ沈黙したが、観念したように答えた。

「……はい。自分の中に溜まっていたもやもやした何かが、全て払拭されたような感覚です」

「気持ちよかった？」

「……」

ほんの少しだけ、愛里寿の頬に朱が差す。

その反応だけで千代は満足し、頷いた。

「困ったものね」

「母上？」

「いえ、こちらの話よ」

千代は小さくため息をついた。どうにも「欲」が出てきている。

篠原和明。正直なところ最初に横浜で声をかけた時は、しほの不調を補うための「その場しのぎ」のつもりだった。彼が常人以上の逸物持ちで、更にセックスに対して柔軟さを備えつつ吸収していったのは千代にとっても予想外だった。

九州の西住家に直接連れてゆかれたという事は、おそらくはしほの娘のまほとも彼は関係を持ったのだろう。和明自身には自覚は無いだろうが、既に彼の存在は島田・西住二流派にとって無視できないものになりつつある。

例えば——彼を島田流で独占できれば、それは西住だけでなく他の戦車道諸流派にとっても大きなアドバンテージになり得る。千代の中にそういった、彼を利用価値として扱いたくなる「欲」が生まれているのだ。

「……彼女は、どうするつもりかしらね」

小さく呟く。

夏休みを明け、和明の大学が再開するまであと一週間とちよつと。

彼が自由に動けるのはそこまでだ。

彼に強い興味を抱いたままの西住しほは、果たしてどのような行動に出るか。

演習場への戦車の搬入が完了した事を伝えにきた選手の姿を認めつつ、千代は考えた。

「ふああ……お疲れ様でした、店長」

「お疲れ様。明日は早起きになるから、今日はもう休みとしようか」

北海道演習場には長期滞在を想定した宿泊施設も備わっている。

30両対30両などの大規模戦の場合、戦車の搭乗員だけで軽く300人近くとなる。それに両チームの整備士や戦車道連盟の職員も含めれば400人〜500人ほどの人間が試合に関わることになるのだ。それを受け入れられるだけの規模の建物であり、その設備は一般的なホテルに劣るものではない。

千代の厚意で個室を与えられていた和明と店長は前日の準備を終え、沈みかけの夕日が照らす廊下を歩いていた。

「しかし、篠原君も大変だね」

「え？」

「いや……いきなり九州まで連れていかれて、戻ってきたと思えば今度は一緒に北海道。もう何日も家に戻れていないだろう？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。西住さんの屋敷でも栄養あるもの貰って、しっかり休ませて貰いましたし」

和明の言葉は半分は本当であり、半分は嘘である。九州では菊代の、演習艦においては千代が和明の体調を考えた食事やケアを行ってくれたので活力はまだまだ漲っている。ただ、如何せん睡眠時間の不足だけでもどうにもならず、少し瞼が重いのも事実だ。

そんな様子 of 和明に、店長は少し言い淀みつつも尋ねてきた。

「……篠原君は、どうするつもりだい？」

「え？」

「家元達との事だよ。このまま続けてゆくつもりかい？」

店長の表情は日ごろの穏やかなそれだが、和明に向けられる視線は

真剣だ。

「それなんですけど、今朝の話の続きで……」

和明はそう答え、自分の考えを伝えた。

店長は驚いたように目を丸くし、やがて困り顔に変わった。

「……篠原君、多分それは、君自身が思っている以上に大変だよ？」

「だと、思います」

「ううん……分かった。その件はまた、横浜に戻ってから詳しく話すとしようか」

やがて廊下の分岐に差し掛かり、二人はそれぞれの部屋へと別れた。

和明はフロアキーを手に自分の個室に入ると、既に敷かれていた布団にごろりと身体を横にする。

TVを付け、何となく戦車道専門チャンネルに合わせる。ちょうどニュースの時間のようで、画面ではアナウンサーがこの演習場の映像を前に原稿を読んでいた。

『また、明日の開催を控えた本日は西住流家元の西住しほ夫人、島田流家元の島田千代夫人の両者が会場の視察を行いました。それぞれのチームの隊長が……』

映像が切り替わり、設営中のテントなどを見回るしほや千代が映し出される。

その時、ふと和明の携帯が震えた。着信欄の名前は「西住しほ」。「っ!？」

慌てて和明はTVを消音に変え、携帯を取った。

「は、はい、篠原です！」

『西住です。今、電話は大丈夫かしら?』

「ええ、大丈夫です」

『……少し、散歩に付き合って貰えないかしら? 疲れているなら無理は言えないけど』

「散歩って……今からですか?」

部屋の時計を見る。既に七時を回っており、出歩くには聊か不自然な時間だ。それに加え、和明の中にひとつの懸念が浮かぶ。

「大丈夫っちゃ大丈夫ですが……俺とその、西住さんがこんな時間に一緒に出歩いているのって、見られたら不味くないですか？」

『そこは大丈夫。人の来ない場所だから』

「まあ……それなら」

時に衝動的な行動に出るしほだが、耳に届く彼女の声は落ち着いている。どうやら信じて良さそうだ。

「ええと、何処で待ち合わせればいいですか？」

『今は連盟の宿泊所よね？　そこを出て裏手の業者搬入口に回って、そこから……』

備え付けのメモ帳にしほの言う内容を書き写す。場所的には演習場の近くになるようだ。

「……分かりました。すぐ行きます」

『急がなくていいわ。ゆっくり来て』

千切ったメモをポケットに入れ、和明は携帯を切ると部屋を出た。人気の無い廊下を気持ち速足に歩き、ロビーを抜ける。大洗女子学園の制服を着た少女など数名とすれ違ったが、和明に奇異の目を向ける者はいない。

そのまま建物を出て宿舎の裏手に回ると、果たしてしほの言っていた通りに搬入口があり、トラックが通れる程度の道が造られていた。

和明は改めてメモを取り出し、薄暗い中で目を細めて読む。方向的には演習場内へ向かっているようだ。

「大丈夫、だよな？」

初めて来る見知らぬ場所というアウェー感を覚えつつ、和明はしばらく歩くこと数分、木々の間を抜けると和明は見晴らしの良い草原に出た。秋の訪れを感じさせるひんやりとした風が頬を撫でる。で、足元に気をつけつつ進む。

やがて歩くこと数分、木々の間を抜けると和明は見晴らしの良い草原に出た。秋の訪れを感じさせるひんやりとした風が頬を撫でる。……早かったわね」

見慣れた黒のスーツを夜の闇に溶け込ませ、彼女はそこに居た。

「いえ、待たせちゃいました？」

「大した時間ではないわ」

落ち着いた口調でしほは答えると、風にそよぐ髪を押さえた。

「幻想的」とでも言うべきだろうか。広い草原にこうしてしほと自分だけしか居ない今の状況は、まるで世界に自分たちしか居なくなつたかのような錯覚を和明に覚えさせた。

「えっと、それで、散歩つて言つてましたけど……？」

「……少し、歩きましょうか」

和明の問いかけにしほはそう答えると、身を翻してゆっくりと歩き始めた。慌ててその後を追い、横に並ぶ。

よく見れば少し先に小高い丘がある。しほはそこに向かつているようだ。

人工的な灯りは無いが、満月の月灯りが周囲を淡く照らしている。夜目に慣れてきたのか、しほの姿もはつきりと見える。和明はしほに聞いた。

「ここって……演習場の中、ですよね？」

「ええ。北海道演習場、富士山の麓にある富士演習場と並ぶ聖地と呼ばれていて、敷地面積では日本最大。ここから歩いて行くには遠いけど、巨大遊園地の跡地などもあるわ」

「はあ……」

戦車道という競技はマイナースポーツ扱いされる事も多いが、その一方で何かとスケールが大きい。流星は戦後まもなくから続く伝統的競技といったところだろうか。

歩いていた草原はいつの間にかなだらかな坂に変わり、膝下まで伸びていた草は次第に短くなってきた。

「……この辺りかしらね」

丘の頂の少し前でしほは立ち止まり、空を見上げた。和明も釣られて顔を上に向ける。

「お……お……」

無意識に声が漏れた。

「満天の星空」という陳腐な表現しか思い浮かばないような、無数の星が輝いていた。

余りに星が多く、夏の星座を探そうにも分からない程の数の光。

星空に足を止めた和明に、しほが言った。

「冬の寒い時期は更に空気が澄んで星が見えるわ……学生時代にここで夜戦をした時、本当に感動した」

「……………」

「和明くんにも、この景色を見て欲しかった」

「!?」

見上げていた顔を戻す。

同様に星を見ていた筈のしほは、いつの間にか和明を見つめていた。夜の闇の中でも視線がはつきりと分かる。

「手前味噌になるけど、私は戦車道については様々な事を知っているわ。例えばこの演習場でどう戦車を運用し、相手の動きに対して最も効率的な戦術を選び、勝利する事ができるだけの自信がある」

「……………はい」

「でも……………逆に私は戦車道以外の事を知らない。知っている景色はいつも戦車の中か、砲塔から身を出して眺めた景色だけ」

「……………」

静かにしほは和明に身を寄せてきた。

「大した景色ではないかもしれないけど……………和明くん、この夏が終わってからも、私は貴方とそんな景色を一緒に見たいと思ってる」

「しほさん……………」

「……………駄目、かしらっ？」

ほんの僅か、彼女の声に不安が混じる。

「……………」

「あっ……………」

和明は無言でしほの手を取り、そのまま顔を近づけると形良い唇に自身の唇を押し当てた。

「ンツ……………」

抵抗はない。軽いキスを何度か繰り返した後に、和明は舌を差し入れた。しほの熱さを増す吐息が口腔内に流れ込んでくる。

「ふうっ……………ん、はあっ……………」

「ああ……………和明、くんっ……………」

しほの舌が応えるように和明の舌に絡みつく。暫くの間それを続けた後、和明は一旦唇を離した。

「つば……しほさん、俺で良ければ喜んで」

「……ありがとう」

今度はしほからキスを求めてきた。口腔内に押し入ってくる舌の動きに応じつつ、和明はスーツ越しに彼女の胸に触れた。

「ソツ、ちゅ、ああんっ……！」

「しほさん、ここも……熱くなってます……」

厚手のジャケット越しにもしつかりと伝わってくるしほの乳房の重みと弾力。

触れていたただけの手を揉む動きに変える。ぴくんとしほの身体が震える。

「あふっ、和明くん、だって……」

「ぐっ……！」

しほの手がジーンズ越しに和明の股間を撫でる。それだけで中の肉棒は如実に充血し、布地を押し上げる程に勃起してゆく。

「くっ……し、しほさん、戻ってから、しますか……？」

「嫌……ここで、して」

「うっ、ああっ……！」

我慢できないようにしほはジーンズのジッパーを下ろし、その隙間から指を差し込むと直接肉棒に触れてきた。血管を浮かび上げながら肉棒が引き出されると、ひんやりとした夜の空気に雄の匂いと熱が混じる。

お返しとばかりに和明は今度はしほの下半身に手を伸ばした。スラックスの留め具を外し、キスしたまま彼女の股間に指を這わす。スッキングの滑らかな感触と、むわっとした湿り気。

「しほさん、脚、上げて……脱がしますから……」

「え、ええ……」

「そこまです、お二人とも」

突然、背後からの声。

「え……!?!」

聞き覚えのある声であった。急速に体温が下がるのを覚えつつ、咄嗟に振り返る。

「お母様、やはり此処でしたか」

「……まほ」

おそろくは急ぎで来たのだろう。部屋着姿の西住まほは、そんな恰好でも凛々しい表情でこちらを見ていた。

和明から身を離して着衣の乱れを整えつつ、しほは珍しく動揺を顔に浮かべていた。自分たち以外の存在は彼女にとっても予想外だったのだろう。

「まほ、何故ここが……?」

「お母様が篠原さんに電話しているのは気付いていました。この時間に逢引きをされるのであれば、この辺りだろうと推測しただけです」

「……お母様。篠原さんにとってお母様の行動が良い事とは私には思えません。彼に結婚もさせず、ずっと側に置くつもりですか?」

しほが言葉を失うのを他所に、まほは静かに言った。視線をしほから和明に移す。

「篠原さんもです。お母様の……そして、私の相手をしていただいた事に感謝はしています。しかし……例えば何年もお母様とこの関係が続け、それから普通の生活に戻る事が出来るのですか?」

「それは……」

文句のつけようの無い正論であった。夢の世界から急激に現実に戻ってきたような、そんな感覚。

だが——それは同時に、和明が答えを出さなければならない問題であった。

今、自分の考えを言うべきだろうか?

「(まだ……無理だよな)」

ようやく具体的な行動を始めたばかりの状況で、結果は何も出せてはいない。そんな状態で説明したところで妄想と喝破され、信用はされないだろう。

ではどうすれば——

「……ん？」

その時、和明の視界の先で何かが動いた。焦点が自分に合っていない事に気付いたまほが尋ねる。

「篠原さん？」

「いや、ごめん、まほさん……その、丘の上に誰かいる」

「……!？」

和明の言葉に二人も気づいたようであった。息を擧め、視線を丘の上に向ける。

既に気のせいではなく、確かにそこに人影があつた。何をしているのかは定かではないが、あちこちの方角を見ながら調べものをするように見える。

「あれは……」

人影の正体に気付いたのか、しほが呟く。

その時——突然にぱたりと人影が倒れた。

「ちよ……!」

卒倒したかのような倒れ方に和明は思わず駆け出していた。ジツパーを戻しつつ、人影の位置までたどり着く。

「え？」

白と緑のカラーリングの制服に身を包んだ、ショートカットの少女。

大洗女子学園戦車道隊長、西住みほがそこには倒れ込んでいた。

第三話

北海道戦車道演習場・寄宿舍。

「ご無事ですか、西住殿!？」

「しーっ! 秋山ちゃん、そんな大声ださなくても大丈夫だから」

急病人用の休憩室の扉を蹴破らん勢いで飛び込んだ秋山優花里に、角谷杏は人差し指を口にあてて言った。

「失礼します。みほさんが倒れたと……!」

「みぽりん、大丈夫!？」

「医者はまだ呼んでるのか?」

その間にも次々と部屋に少女たちが駆け込んでくる。

「ええと……とりあえずは大丈夫。落ち着いてるから」

畳敷きに敷かれた布団で横になるみほの横で洗面器にタオルを浸していた和明は、突然の訪問者たちに声をかけた。

「(この子たち……確か、西住みほと同じIV号戦車のメンバーか)」

戦車道二ユースで見た事のある顔ぶれだった。確か優花里の次に入ってきた黒い長髪の少女が砲手の五十鈴華。その後ろのウエーブがかかった栗色の髪の少女が通信手の武部沙織。最後尾の小柄な少女が操縦手の冷泉麻子だったか。

「その……この方は?」

「明日の試合の売店スタッフさん。準備中に演習場に独りで行く西住ちゃんを見かけて、気になって後で様子を見に行ったら倒れてたんだって」

見慣れぬ和明に問いかける優花里に杏がフォローを入れる。

「そうでしたか、ありがとうございます……って、あれ?」

「何か?」

「あの……何処かで、お会いしましたでしょうか?」

納得して礼をしようとした優花里は、和明の顔を見て眉をひそめた。自分の記憶を探るように指を額にあてる。

「えっ!? い、いや、初対面だと思うけど……」

まずい。和明の背に戦慄が走る。実際、彼女の母親の好子と激しく

交わった際に彼女とは遭遇し、それどころかフェラチオや素股まで行っているのだ。何とか好子が誤魔化してくれたみたいだが、和明の顔をもし思い出したなら――

「静かにしなさい」

その時、場の温度を下げるかのような鋭利な声が優花里に向けられる。

細い瞳に有無を言わせぬ威圧感を籠めつつ、布団の横に座っていた西住しほは立ち上がり彼女らに言った。

「隊長車の搭乗員の子ね」

「貴女は……？」

「……西住流家元、西住しほ。西住殿のお母様です」

明らかに常人と異なるオーラを纏うしほに華が尋ねるが、それに答えたのは優花里だった。

『……！』

その言葉に少女たちの空気が変わった。しほに気圧されてはいるものの、こちらに向けられている気配は警戒――否、「敵意」に近いものだ。

「(そういえばしほさん、この子と上手くいってないって言ってたな……)」

夏の嵐の夜、しほが泊まりに来た時のことを思い出す。水没した僚機のメンバーを救おうと着衣のまま激流に飛び込んだみほにしほは感情のまま怒り、その後みほは西住流から逃げるように熊本の実家から出て、それきり戻っていないという話だった。その一連の流れを知っていれば確かに彼女らにとってしほは「敵」に間違いないだろう。彼女らの視線を、少なくとも外見上は平然と受け止めつつしほは言った。

「単なる疲労による立ち眩みよ。既に医療スタッフには連絡しているから、貴方たちは明日の試合に備えてもう寝なさい」

「いいえ、側に居させてください」

有無を言わせぬしほの言葉に華がきっぱりと答えた。大人しそうな外見とは裏腹に気丈な性格らしい。

しほは小さくため息をつくど、静かに言った。

「例えば……貴方達が今のみほと同様に大事な試合の前夜に体調を崩して倒れて、目が覚めた時に仲間が居たらどう反応しますか？」

「そ、それは……」

『大丈夫、心配しないで』……仮に本当に大丈夫ではなかったとしても、そう答えるでしょう」

何かに気付いた沙織がたじろぐ。そこに更に刺さるようなしほの言葉が投げかけられる。

「みほは明日の試合までには必ず復調させます。だから、貴方達は休みなさい」

「……任せていいんだな？」

麻子が視線をしほから杏、杏からみほへと移し、再びしほを見つめる。どうにも信用されていない。

しかしその警戒心は彼女らの性格がどうこうでなく、みほと友情に依るものある事が和明にも伝わってきた。本当に彼女の事を心配しているのだろう。

「……君たちの気持ちは分かる。だが、今は私たちを信じて欲しい」

その時、布団の反対側に座っていたもう一人が口を開いた。それまで気配を殺していたかのような彼女の存在に気付いた沙織や優花里たちが驚く。

「え？ え?! 貴女って確か、黒森峰の隊長の……」

「西住……まほさん!? な、何でここに？」

「詳しい話は後でする」

スツとまほは立ち上がり、布団を回り込んでしほの横に立った。

「私たちの事をどう思っているかは分かっているつもりだ。だが……みほを心配しているのは、私もお母様も同じだ。今は私たちに任せて、鋭気を養ってほしい」

しほよりはやや柔らかく、諭すようにまほは言った。

数秒の沈黙の後、麻子が答える。

「分かった。おばあの時の事もあるし、信用する」

「ありがとう。安心して、ゆっくり休んでくれ」

「……よろしくお願いします」

どうやらまほの存在が彼女らの警戒心を緩めてくれたようだ。他のメンバーも同様だったのか、先頭の華が一礼するとそれに合わせて頭を下げ、退出してゆく。

みほの友人が全員出て行った後、腰を落としつつ杏が言った。

「……すみません、家元。みんな、西住ちゃんの事を大事に思ってるんで」

「構わないわ。私があの子たちにどう思われているかは分かっているつもりです」

同じく再び座りつつしほが答える。

「ただ……正直、私も引つかかっています。医療スタッフさん、本当は呼んでませんよね?」

「……今のみほの症状は、医者や薬でどうにかなるものではありませんから」

「只の病気や疲労じゃないと?」

「ええ。角谷さん、みほだけど……この数日、調子が悪そうな様子は無かった?」

怪訝な様子の杏にしほが尋ねた。

「そう……ですね、大学選抜戦が決まってからは随分と根を詰めていたみたいで、確かにたまにふらつととしてる時がありました。熱は無かったので疲労かと思ひ、休むようには私も言ってたんですが」

「となると……やはり、アレの可能性が高いわね」

「……まさか!?!」

しほの反応に、和明はある発想に至った。しほが頷く。

「おそらく、間違いないわ」

「何か、心当たりがあるんですか?」

「……」

杏の質問にしほは少し言い澀み、顔を上げて改めて杏を見た。

「角谷さん、戦車道を始めて半年の貴女には信じ難い話になるかもしれないけど……聞いて貰える?」

「は……は……」

静かに寝息を立てるみほの横でしほは話を始めた。

戦車道を修める女性の中でも優秀な者ほど抱える可能性が高い、心と体の病。苛烈な闘争心が不完全燃焼を起こす事で発症する欲求不満。

——そして、その解消に最も効率が良い方法がセックスであるという事。

そこまでを淡々としほは語り、口を閉じた。

「……いやいや」

聞き終えた杏は何かを言おうと言葉を探し、やがて上手い返し方を思いつかなかったのか困惑したように頭を振った。

これが胡乱な第三者の話であれば杏は一笑に付しただろう。だが、眼前でそれを語るのは日本戦車道の頂点に立つ西住流家元。それが真剣に語る内容だけに信じるしかない。その混乱が伝わってくる。

実際、和明も最初に聞かされた相手が島田流家元の千代だったから信じられたが、それでもしほとの初対面時は半信半疑だったものだ。

「その話……本当なんですよね？」

「ああ。お母様は勿論、私自身も経験している」

傍らのまほがしほの話を補足する。

とうとう信じるしか無くなった杏は、ゆっくりと聞いた。

「つまりこういう事ですか？ 西住ちゃんを明日までに完調にするには、ここで彼女に……」

「ええ、完全に欲求不満が発散されるまでセックスさせる。それが最良の方法」

きっぱりとしほが言う。和明にも何となくの予感があったが、改めて言葉にされると堪えるものがある。

杏は今までとは違う感情が含まれた視線で和明を見た。居心地の悪さを覚えつつそれに応える。

「この人が……その相手を？」

「その、どうも、そういう事らしい」

「彼……篠原さんについては信頼できる男性と思ってきていいわ。私と同様の状態になった時も、彼が助けてくれた」

何とも頼りない返答を返す和明をフォローするようにしほが言った。

「参ったね……どうも」

杏は腕を組み、暫く唸っていたかと思うと観念したかのように腕を開き、胡坐の姿勢で膝に手を置くと和明に深々と頭を下げた。

「分かりました！ 西住ちゃんには後で怒られるどころじゃなくなるかもしれないけど、お任せします。それでこの試合に間に合わせられるなら」

「……すまない。出来るだけ優しくする」

大洗女子学園のトップである杏への事情説明なしに、みほへの事は進められない。彼女の理解に和明は感謝し、礼を返した。

「そういう事なら、私はここに居ない方がいいですね。他の子に西住ちゃんの容態を聞かれたら『大丈夫だから休ませてあげて』って言うておきます」

「助かるわ」

「いいえ……それでは」

そう言う杏は立ち上がり、少しだけみほの顔に視線を向け、今度こそ部屋を退室して行った。休憩室内にはみほとまほ、しほ、和明だけが残った。

「さて……と」

改めて和明は額に手をあて今回のケースに頭を抱えた。とりあえず外堀は埋まったが、今度はみほが目を覚ました際にどう説明したもののやら。果たして合意してくれるかも怪しい。

そこはしほも考えるところだったのだろう、彼女は和明に言った。

「和明くんには悪いけど、私とまほの同席は必要でしょうね」

「……ですよね」

初対面の男から「君の体調不良を治すにはセックスが必要なんだ！」と言って納得する女性はいない。何ともやり辛い状況にはなるが、二人を側に置いての行為にはなるだろう。

和明は再び布団に身を寄せ、洗面器のタオルを絞るとみほの額に置いた。

「んっ……」

その時、みほの瞳が薄く開いた。

「え……あ、あれ……？」

どうやら意識が戻り切っていないようだ。半目を開けた状態で、みほは緩やかに首を動かして和明を見た。

しほやまほの凛々しさを備えた美しさとはまた違うが、柔和さを感じるみほの顔立ちは美少女と呼ぶに足るものであった。父親似なのかもしれない。

和明は腹を括るとみほに声をかけた。

「あの、えつと……西住みほさん……だよな」

「……んんっ」

その直後のみほの行動は、和明が予測していたどの反応とも異なっていた。

「んっ……」

「え？ ちよ……!？」

寝たままみほは和明の股間へと手を伸ばし、淀みない動きでジーンズのジッパを下ろすと躊躇いなくその中へと指を進めてきた。

「んっ、あれ、何だかいつもより……」

「みほ……!？」

何かを呟きつつ、みほは手をもぞもぞと動かし和明の肉棒に触れ、それをトランクスの隙間から外に引き出す。

しほも彼女の動きには驚いたようだが、それを止めるべきかどうかを見極めているのだろう、まほと共に座ったまま様子を伺っている。

とはいえ当事者である和明からしてみれば呑気に肉棒を弄られている訳にもいかない。一旦仕切り直そうと、和明はみほを制止しようとした。

「ちよ、ちよつと待った、西住さんっ……!」

「凄い、大きい……この感じで、この形なら……こう、かな？」

「うっ、おおっ!？」

寝ほけ眼で肉棒を掴んだままのみほは小首を傾げると、少し竿を揉むようにしてから手を動かし始めた。

「いや、だか、ら、待っ……うあっ、ああっ！」

「よいしょ、よいしょっ」

和明は言葉が続けることも出来ず、腰を跳ねさせた。彼女の手の中の肉棒が急激に充血し、凶悪な棍棒のようにみほの前にそそり立つ。「うん、やっぱり正解だった……それじゃあ、ここも効くかな……？」
「ふおっ!?! う、くうっ！」

一見、柔らかく握ったまま扱っているだけに見えるみほの手の動き。しかし実際は、ごく僅かな強弱と緩急をつけ、和明の肉棒に刺激を与えてきていた。

そして、その技巧は――

「ぐっ、嘘、だろっ!?! うっ、あああっ！」

「いいですよ、このまま射精しちやってください」

心の準備が整わない間に射精感がこみ上げてくる。動揺さえ許さず、みほの指が和明の肉棒の急所を知り得ているかのように自在に動き、射精を促してくる。

「あ、ぐっ！ うああっ！」

「ふあっ……」

赤黒い龟头から迸る精液に、みほが歓喜の吐息を漏らす。

その技巧は――しほすら上回っていた。

セックスという行為は互いの気持ちよい所を探り、そして互いを昂らせてゆく共同作業である。それが100%噛み合うのが理想のセックスだが個々人の性感帯は異なるもので、例えばしほと和明は体の愛称は良いがそれでも完璧に相手の性感を把握しているとは言い難い。

しかし、みほの技巧は此方の性感を把握しているどころの話ではない。まるでオナニー中の和明の脳をのぞき込んでいたかのように肉棒のツボを押さえ、和明自身よりも上手く射精に導いてきた。

「ど、どうなってるんだ、こりや!?!」

射精後の余韻を覚えつつ和明は必死に頭を回転させる。既に誰か

と経験があり、その相手と和明を間違えた？ 否、もしそうならしほやまほが説明する筈だし、大洗女子学園は女子高の学園艦で同世代の男性との接点はほぼ無い。ではどうして――

「まだ、元気ですね……」

「ん？ なっ……!?!」

ふと下から声が聞こえたかと思えば、腰を抜かしたように足を伸ばしたベタ座りの姿勢になっていた和明の股間にみほの顔があった。パジャマ姿のまま、精液に塗れた肉棒をうっとり眺めている。

「いただきます」

「え？ いただ……うおあっ!?!」

みほの形良い唇が、かぶりと亀頭を呑み込んだ。缶コーラほどもある和明の巨根を平然と啜えこみ、喉奥まで――

だが、予測していたものと異なる感触に和明は更に混乱した。

「(喉奥に……当たらない!?)」

「んぶっ、ンッ、ンンッ……!?!」

今まで和明の肉棒を女性が啜えた際には、大抵は喉奥に亀頭があったる感触があった。だが――みほのフェラチオにはそれが無い。

少し息苦しうにしつつも鼻で息をして、和明の肉棒を完全に呑み込んでいた。

「(まさか、これ……) く、ああっ!」

――肉棒の角度を調節して、口腔内だけでなく食道まで使って啜えこんでいる？

そう和明は気付くと同時に、この後みほがどういう行動に繋げるかを理解し身を震わせた。

それはもはや快感への期待でなく、恐怖と呼んでよい感情だった。今の手淫並みの技巧で口淫をされたら――

「ンッ、じゅるっ、んぶっ！ ちゅうう……!?!」

「あ、あ、あがっ!?!」

――搾精。

みほの行為は正にそれであった。快感でこちらを制覇し、屈服さ

せ、蹂躪する。そんな舌と口の動き。痛みの直前まで責めてきたかと思えば、直後に優しく撫でまわすように龟头を、鈴口を、竿を舌が這い回る。それでいて個々の攻め口が雑という事もなく、ひとつひとつの動きが和明の肉棒の弱い所に刺激を与えてくる。

「じゅぶっ、フウツ、あむっ……!」

「西住、さんっ! ちょ、駄目、出るっ!」

「……ンツ、ンンツ!」

「あぐっ!」

再び高まる射精感に和明が悲鳴をあげると、みほはその反応が嬉しいのか更に深く咥えこむ。

何とか耐えようとしたが、既に肉棒に与えられていた快感は臨界点を超えていた。

「ああっ! が、う、ぐああっ!」

獣の断末魔のような声と共に、和明はみほの喉奥に射精した。

白濁液がみほの口を、喉を汚してゆく。

「ぶうっ!?! んぷっ、ンンツ!?!」

「……え?」

だが——その直後のみほの行動に、和明は思わず声を漏らした。

射精を受け止めたかと思っただけはみほは混乱したような反応を見せると、急に和明の肉棒を吐き出すと咳き込んだのだ。

「けほっ、けほっ……え!! あ、あれ? 味? 苦い! え? これっ

て……!?!」

「え、えっと……あの、西住さん?」

「え? あ、あれ? これって夢じゃ、え? 嘘?!」

「……西住さん?」

先ほどまで和明の肉棒を責めていた少女とは思えない程に混乱しているみほに、和明は声をかけた。

猛獣を前にした小動物のようにみほびくりと身体をすくめ、まだ精液を吐き出している途中の肉棒をゆっくりと見る。

「……けほっ」

みほが咳き込み、それに合わせて唇の端に精液の残渣が貼りつく。

「……う」

「う？」

「ごめんなさい！」

そう言うのとパジャマ姿のみほは布団の上で正座をしたかと思うと、敷布団に頭を擦り付けるように土下座した。和明が何か言う前に再び頭を上げ、懸命に何かを伝えようとする。

「えええと、どうしよう!? あ、えつと、初めまして、私、西住みほつて、じゃなくって！ あの、私、夢と思って！ いえ、あのあの、夢つて言ってもそんな夢を見た訳じゃなくって、だから間違えて！ あ、間違えたつて言ってもそんなつもりじゃなくって、だから……！」

「落ち着くんだ、みほ」

「え!? あ、あれ、お姉ちゃん!?」

みほの混乱ぶりを見かねたまほが彼女に声をかけるが、実姉が側に居たという事実はみほを更に混乱させたようだった。

「お、お姉ちゃん!? 何で、え? え? どうして、今の、見て? 嘘、そんな、ち、違いの、お姉ちゃん! あの、違うつて言ってもそういう意味じゃなくて、えつと、だから夢が……！」

「とりあえず口を拭きなさい、みほ」

「いや、しほさん! 今のみほさんに……！」

「……お母、さん?」

和明は止めようとしたが、しほがみほに声をかける。

姉どころか実母までも居た事にみほは気付き、顔どころか全身を真っ赤にして――

「~~~~~ツツ！」

――絶叫しそうになる西住みほを落ち着かせ、会話が出来るようになるまで10分かかった。

「……つまりここ最近、ずっとそんな夢を見ていた?」

「はい……大学選抜との試合に備えて練習量を大幅に増やしたんです
が、暫くしてから体が急に熱くなったり、眩暈がしたり、眠れなくなっ

たりが続いていたんです。でも……その、姿ははつきりしないんですけど、夢の中に男の人が出てくるようになって、その夢から覚めた時は体調が少し戻っていて……」

「だから、俺を夢と間違えた」と

「……………」

恥じらいで顔を赤くしつつ、みほは頷いた。これが本来の彼女なのだろう。

「……思った以上に深刻ね」

彼女の話聞き、しほは静かに言った。

「みほ、今はどうなの？」

「え？　は、はい……まだ、身体の奥に熱が溜まっているような、感じですよ」

しほに聞かれ、みほは身体を縮ませるように答えた。どうやら本当にしほの事が苦手らしい。

「お母様、これは……」

「一刻の猶予も無いわ。和明くん、まだ頑張れる？」

みほを気遣うまほの言葉にしほは頷き、視線を和明に向けた。今更隠す状況でもなくなってしまったので、ジーンズとトランクスを脱いだ下半身裸の状態だ。

「勿論、頑張れますけど……その前に西住さ、ああ、ややこしいから『みほさん』でいいかな？」

「あ、はい……ええと」

「篠原、篠原和明。まあ、その、しほさんやまほさんも今のみほさんと同じような感じになる事があって、それを治したりさせて貰ってる」「そうなんですか……」

「ああ。それでひとつ聞きたいんだ。みほさん、その、突っ込んだ質問になるけど……ええと、実際に男の人と交際した事は？」

和明は真面目な表情でみほに尋ねた。慌てつつもみほが答える。

「えっ!?　い、いえ、ありません！　さつき篠原さんにした事も、全部夢の中でしか……!」

「そっか。それじゃ……どうして分かったんだ？」

「……『分かった』?」

「俺の、まあ、これを責めてた時のみほさん、こいつの弱いところを分かっていたら? それは、何でだい?」

股間の肉棒を指さしつつ問いかける。そこが和明にとっても一番不明なところであつた。

みほはその問いかけに少し考え、口を開いた。

「そうですね……なんとなく分かったとしか……」

「な……何となく!?!」

「はい。その……お、おちんちんの形を見た時に『ここを弄られると気持ち良くなってくれそう』って感じた所が、幾つかあつて……」

「ヤバイ。この娘——本物の天才だ。」

理屈抜きでこちらの性感帯を察知し、そこを天性の才能と技巧で責めてくる。何というか——今まで和明が経験してきた女性たちとはおそらく「格」が違う。

ごくりと喉を鳴らし、和明はまほとしほに言った。

「すみません、しほさん、まほさん……多分ですが彼女、俺だけだと荷が勝ります。手を貸してください」

「……分かりました」

「まさかみほを相手にする事になるとは思わなかったが……和明さんがそう言うなら、力をお貸しします」

「あの……お母さん、お姉ちゃん?」

まだ状況を理解しきれていないみほに向き直り、和明は言った。

「みほさん、卑怯な聞き方になるかもしれないけど……明日の試合、万全の状態で挑みたいか?」

「えっ?」

「その夢で見ていた事を実際に行う事で、今のみほさんが抱えている燻りを治せる。でも、君が『初めて』だって言うなら無理強いはいしたくない。どうだ?」

傍から見れば無茶苦茶な物言いに、せめてもの説得力を載せようと真剣に和明は尋ねる。

和明が下心や冗談で言っていない事はその表情で伝わったのだろう。ほんの少しだけ考え、みほは言った。

「はい、お願いします。篠原さんを、お姉ちゃんを……お母さんを、信じます」

「……いい子だ」

どうやら、まだしほの事は信じきれないらしい。

立ち上がり服を脱ぐしほとまほの様子を横目に見つつ、和明は今夜の「戦い」の激しさを思い肉棒に力を籠めた。

第四話

——さて、どうしたものか。

「え、えっと……よろしくお願ひします」

北海道戦車道演習場寄宿舍・休憩室。

パジャマ姿で律儀にこちらに礼をしてくる西住みほに、和明はこの後の手順を考えた。

少し身を寄せ、二の腕に触れてみる。

「ひゃっ」

「っと……」

「す、すみません、篠原さん……」

それだけでみほは頬を染め、身を固くする。

夢だと思っていた先ほどの淫行の時とは異なり、今の彼女は普通に目覚めており——当然ながら、「恥じらい」が生まれてしまっている。既に和明の肉棒を舐めしゃぶり、口腔内に精を受けたとはいえ簡単に割り切れるものではないだろう。

だが問題として、このままでは彼女が「大丈夫なふり」をして途中で止める可能性があった。それでは結局、みほの中の欲求不満を解消させられないまま明日の試合に送りだす事になってしまう。任された者として、和明としてもそれは避けたかった。

「(それなら……) まほさん、ちよつと」

「はい、何でしようか?」

布団から一步引いた所で座って様子を伺っていた下着姿のしほとまほの方へと顔を向け、和明は言った。しほの下着の色は黒、まほはアイボリー。それぞれが実際似合っている。

身を寄せてきたまほの耳元で和明は提案を伝えた。

「和明さん、それは」

「多分、それがみほさんに一番効くと思うから。しほさんはもう少し待っていてください」

「ええ、和明さんに任せるわ」

「……分かりました」

まほは少しだけ躊躇を見せたが、「みほのため」というのが効いたのだろう。頷くと、みほと並ぶようにまほは座った。こちらの意図が読めないみほがきよとんとした表情でまほを見る。

「お姉ちゃん？」

「……………」

まほは答えない。

和明はまほの準備が整ったのを確認して腰を上げた。

「し、篠原さん!？」

「……………」

下半身裸の和明が立ち上がれば、当然ながら半勃起状態の肉棒を彼女の眼前に突きつける格好になる。動揺の声をあげるみほに対し、まほはひくつく亀頭から視線を逸らさず、ごくりと喉を鳴らす。

「……………みほ、見ておけ。コレが今から、お前の中の燻りを癒してくれるものだ」

やはり実妹の前ですという緊張はあるのだろう。横目でみほに視線を送りつつまほはそう言うと言とうと膝立ちになり、ぴくぴくと震える肉棒に顔を寄せた。

「あむっ、んっ、ちゅ……………」

「ううっ……………」

「お姉ちゃ……………!？」

そのまま口を開き、赤黒い亀頭を呑み込んでゆく。口腔内の熱さに和明は腰を震わせつつ、まほの横で言葉を失うみほの様子を確認する。

「まほさん、続けて……………くっ、はあっ……………」

「じゅるっ……………は、はい、和明さん……………んぷっ、ふうっ、ちゅうう……………」

和明の要請にまほは従順な態度で応え、口淫を続ける。まだ西住邸での交わりから二度目ということもありその舌の動きはぎこちなさが残るが、こちらの快感を引き出したいという健気な想いが伝わってくる。まほの頭に手を添え、優しく撫でる。

「んっ、んはっ、んんっ……………」

「お姉ちゃん……………」

みほはまほの行為から目を離せずにいる。

しかし、そこに嫌悪や忌避の感情は見られない。むしろじりじりとまほに身を寄せ、実姉が肉棒に奉仕する様子をより確認しようとしている。

その間もまほの舌と口の動きは続いていた。カリの裏側をくすぐるように舌を這わせながら、緩やかに頭を前後させる。

「んむっ、れろっ、ん、んふっ……」

「ふうっ……まほさん、そろそろ」

「っぱ……はい」

頃合いと見た和明はまほに言った。指示を受け、まほが肉棒を開放する。

「うわぁ……!」

みほの息を呑む気配が伝わってくる。まほの口淫によって刺激を与えられた肉棒は完全に勃起を取り戻し、弾けるように和明のへそ近くまで反り返った。唾液に塗れたそれは激しく脈動し、凶悪なまでの存在感を放っている。

そんな凶器めいた肉棒にまほはスツと頬を寄せ、みほに言った。

「みほ、お前も……」

「えっ?」

「一緒にやろう。大丈夫だ、和明さんはお前を壊したりなどしない」

唇を濡らしつつもその口調は優しく、妹への気遣いを感じさせるものだった。

その言葉を受け、みほは少しだけ考え――

「……う、うん、やってみるね」

四つん這いになると、和明の肉棒まで顔を寄せてきた。

「くっ……!」

右にまほ、左にみほ。二人の吐息が亀頭に吐き掛けられるだけで股間は反応を示し、びくんと竿を跳ねさせる。

先ほどの優花里らの反応も含めて判断するに、みほはしほは苦手でも姉のまほは信頼しているようだ。どうやらまほに先行させての誘導は上手くいってくれたらしい。

「私はこちらから舐めるから、みほはそちらから舐めてくれ。アイスを歯を立てずに舐めとるような感じだ」

「うう……」

「恥ずかしいが無いです。それに、お前の中の衝動はそれを望んでいる筈だ。ん、ちゅ……」

「くっ、まほさんっ……!」

肉棒を眼前に戸惑いを見せるみほにまほは優しく声をかけると、血管を浮かび上がらせる竿に軽くキスをした。更に顔を動かしつつ、肉棒の根本からキスを繰り返してくる。

その光景に、みほはごくりと喉を鳴らすと唇を肉棒の反対側に近づけた。

「あの、痛かったら言ってください、篠原さん……ンッ」

「んっ、くうっ……!」

「っ?! い、痛かったですか!?!」

和明は思わず声を漏らす。その反応に驚くみほに和明は言った。

「大丈夫。その逆で、気持ちよくで声が出ただけだから……みほさん、もっと、やってみてくれ」

「は……はい、んちゅ、はっ、ああ……」

「いいぞ、れろっ、みほ、そんな感じだ……」

痛みが無いと分かったからか、みほはより大胆に舌を肉棒に這わせてきた。キスから舌で根元から舐め上げるような動きに変わったまほの様子を真似るように舌を出し、ペロペロと肉棒を舐めてゆく。

日本戦車道を代表する西住流の美しい姉妹による同時フェラチオ。みほの欲求不満の解消という目的があるとはいえ、眼下で行われるその光景は否応なく和明の中の支配欲を刺激し、強い快感を引き出してくる。

「んっ、ふぁ、あむっ……お姉、ちゃんっ……どう、かな?」

「んはっ、あ、ああ、いいぞ、みほ……私と、動きを合わせて……ちゅ」

潤んだ瞳でみほにまほは答え、ふと唇を話すと和明の肉棒に手を添えた。言われるままにみほも同様に竿を柔らかく掴む。

「みほ……ンッ」

「ンッ、お姉ちゃ……!?!」

「んっ、んはっ……」

「お、お姉ちゃん……んっ、あむっ……」

紅潮した頬を寄せ、まほはみほに先走りで濡れた唇を重ねた。驚いたようにみほは体を跳ねさせたが、やがて緊張を解くとまほの舌に自分の舌を絡ませてゆく。

同時に肉棒に添えられていた二人の少女の手が動き始めた。息の合った動きで、唾液に塗れ滑らかになった竿を扱ってくる。

「うおっ!?! まほさん、みほさっ……凄いつ……!?!」

「ああ……ちゅ、ンンッ、お姉ちゃん……んむっ」

「ああ、じゅるっ、み、みほ……このまま、和明さんを……」

くちゅくちゅと淫らな音が室内に響く。みほとまほは顔を寄せ合い、荒い吐息と唾液を交換するように深いキスを続ける。

それでいて驚くべきことに、肉棒を扱く二人の手は全く衝突することなく擦る部分を分担して動いていた。まほも経験豊富とは言えず、みほに至っては夢の中のイメトレだけだというのにここまで合わせた動きができるものなのか。あるいは、戦車道を共に行っていた頃からの連携の賜物か。

そんな事が頭に浮かんだ和明だったが、その思考を続ける事が出来ない程に快感は強まってきていた。腰の奥から射精感が湧き上がってくる。

「ふ、二人とも、そろそろ、射精でるっ……!?!」

「っば……構いません、そのまま……みほ、一緒に……んあっ……」

「ふあ、あ、ああ……」

和明の訴えにまほは唇を離し答えると、扱く手を止めないまま亀頭の正面に顔を置き口を開けた。とろんとした瞳でみほも応じ、同様に口を開ける。

放たれる精液を懇願するかのような二人の姿勢に、和明は思わず快感の呻きを漏らす。

「ちよ、二人とも、それ、反則っ……!?!」

「遠慮せず射精して、和明さん……私たちの顔に、思い切り……」

「私も、大丈夫ですから……お願いします、篠原さん……！」

俄かに二人の手の動きが速まる。十分に昂っていた射精感がついに限界に達し、肉棒の先端に熱い滾りが昇ってゆく。

「も、もう、駄目だっ！ う、おっ！」

「んっ、はあっ……熱いつ……！」

「ふわあ……っ！」

弾けるような勢いで精液が迸った。生臭い白濁液が姉妹の整った目元を、鼻筋を、唇を容赦なく汚してゆく。しかし彼女らはそれを不快に感じる様子もなく、むしろうつとりと受け止めてゆく。

「もつと……ください、和明さん……」

「ぐっ、ううっ！ まほさん、そんな、搾っちゃー！」

「凄い、こんなに……んっ」

射精中もまほの手の動きは止まらず、更なる射精を促してくる。鈴口から溢れる精液の様子にみほは吐息を漏らしつつ、口腔内に直接飛び込んできた白濁液を嚥下する。

数十秒経ち、射精が完全に治まるのを確認するとようやくまほは和明を解放した。快感の余韻で危うく膝から崩れ落ちそうになるのを何とか堪える。

「……どうだ、みほ」

「う、うん、何だか、凄い……熱くて、生臭いのに、凄くドキドキして……」

吐息も荒くみほが答える。

その時、彼女の顔にスツとウエットティッシュが差し出され、頬に付いたままの精液を拭った。

みほの表情に僅かに緊張が混じる。

「……お母さん」

「じつとしていなさい。乾くと貼り付いて取れなくなるわ」

黒いレースの下着に身を包んだしほはそう言いつつ、丁寧にみほの顔を拭く。同時にまほに視線で促すと、ティッシュ容器を彼女に近づける。

「お母さん……あ、あの……」

身体をもじつかせながら、みほは言葉を探しているようだった。この状況において尚、彼女のしほへの苦手意識は拭い切れていないようだ。

それはしほにも伝わったのだろう。みほの顔を拭き終わると、しほは頭を下げた。

「すまなかつたわ、みほ」

「えっ!? えっと、お母さん、あの、そんな……!」

しほの謝罪が本当に意外だったのだろう。驚くみほにしほは言葉が続ける。

「過去の事を忘れてとは言えない……でも、今だけは私たちを信じて」
「……うん」

みほは戸惑いつつも頷いた。

ここからはしほの協力も必要になる。少しでもしほを受け入れてくれたみほの態度に感謝しつつ、和明は腰を落とすと彼女のパジャマに触れた。

「それじゃ、今度は俺がみほさんを気持ちよくする番だ。しほさん、まほさんは上を。俺は下を責めますから」

「ふえ? あ、あの、篠原さん、上や下って……きやつ……!」

熱い精液を受けてぺたんとして座り込むような姿勢になっていたみほの前に和明は座り、少し腰を持ち上げるとパジャマのズボンに手を掛け、それを脱がし始めた。

「みほ、上も外すぞ」

「お姉ちゃん、ンツ、ンンツ……!」

続けてまほが寄り添うようにみほに身体を寄せると唇を重ね、彼女のパジャマのボタンを外してゆく。みほの紅潮した肌が露わになり、パステルカラーの水色のブラが晒される。

「(……意外と大きいな)」

ズボンを膝下まで下ろしつつ、和明はみほの胸に視線を向けた。初見では細身に見えた彼女の身体だったが、どうやら着痩せする方だったらしい。流石にしほには及ばないものの、深い谷間を形作る双丘の

ポリュームはまほのそれに匹敵する程だ。カップで言うなら、少なくともDかEは有るのではなからうか。

「みほさん、脚、伸ばして……」

「んぱっ……あっ、し、篠原、さん、そこはっ……!」

やがてパジャマを完全に脱がし切り、下着姿となったみほの太腿に和明は触れた。まほとのカスを続けながらもぴくりと反応を示し、腿を閉じようとするみほだったが、火照った身体に力が入らないのかその抵抗は弱い。

「……濡れてる」

「そんな、言わないで、ください……ああっ!」

果たしてそのクロッチ部分はしつとりと染みを作り、ここまでの行為でみほが覚えた快感の度合いを示していた。喘ぎとも泣き声ともつかない声をあげるみほに今度は反対側からしほが近づき、ブラに手を添える。

「恥ずかしがらないで、みほ。もっと、もっと自分の中の衝動に身を任せなさい……」

「お母、さん……んっ、ふああ……!」

慣れた所作でしほはみほのブラを外した。背中の中のホックが外れると共に拘束されていたみほの乳房がこぼれる。

「おお……」

思わず和明の口から声が漏れた。

しほの乳房を「熟れた豊満な爆乳」、まほの乳房を「大きさと瑞々しさを兼ね備えた巨乳」とするならば、みほの乳房は「成長途上でありながら既に完成品と見紛う程の美巨乳」とでも言えば良いだろうか。掌にやや余るであろうサイズでありながら、重力が働いていないのかと思うほどにその乳房は形を崩す事無くみほの胸で揺れ、先端の鮮やかな桃色の乳首は半ば硬くなっており突起を主張している。

和明は思わずその胸に手を伸ばしたくなくなったが、ぐっとそれを堪えようと再びみほの股間へと視線を戻した。

「(落ち着けよ、俺……まだ早い)」

みほの抵抗はかなり弱くなっている。

しかし、これから彼女の処女を奪い、更にみほの中の欲求不満を全て解消しなければならぬ事を考えればまだ足りない。和明はそう感じていた。

もつと、もつと蕩けさせないと駄目だ。本当にみほが本能のままに、自分の中で燃えていた肉欲を誤魔化さず開放できるようになるまで。

「まほさん、しほさん、二人はそのままお願いします……俺は……」

「え？ あつ！ ああんつ！ だ、駄目です、篠原さ……んんつ！」

みほの言葉を待たず和明は彼女のショーツを引くと隙間を作り、そこに自分の指を差し込んだ。指先に伝わる湿気と熱気。滑らかなみほの下腹部の肌の感触を確かめつつ更に指を進めると、やがて湿り気を帯びた陰毛に触れる。

「あつ、やつ、ああつ！」

「みほ、上がお留守だぞ……ンツ」

「ンツ!? ん、んはつ、お姉ちゃんっ……!」

「こちらもよ、みほ……家を離れている内に、すっかり大きくなったのね」

「お母、さ……あ、ひっ、ひうっ！」

喘ぐ間もなくみほの唇にまほの舌が差し込まれ、同時に背後からはしほが掬い上げるように形良い乳房を揉みしだく。肢体を震わせつつ悶えるみほの快感を更に高めようと和明は濡れた陰毛の先、みほの女陰へと指を進める。素肌と異なる滑りある感触に指先が触れると、そこは粘りある液体で既に潤んでいた。

「ひああつ！ ま、待ってください、しのはら、さんっ……そこっ！ そんな、触ったら……!」

「構わない。遠慮なくイってくれ、みほさん」

「あ、あ、あああつ！」

そう言いつつ和明は濡れた陰唇を撫で、手探りで突起したクリトリスを確認するとそこを優しく擦った。悲鳴めいた嬌声と共にみほの体が大きく跳ねる。指先に感じる彼女の秘所の熱が更に強まり、手のひらに愛液の飛沫が飛ぶ。軽く潮を吹いたようだ。

「ふあ、あ、あふう……」

「……しほさん、みほさんの体を少し持ち上げて貰えますか？」

くたりとみほの全身の力が抜ける。頃合いと見た和明は少し体を引くとしほに指示を出した。彼女の腰が上がったところで濡れたショーツに手を添え、くるくると脱がす。

「よし……つと」

「ふえ……？」

どうやらまだ夢見心地から覚めていないようで、みほは何処か気の抜けた声を出している。和明は姿勢を変えると伏せるような姿勢でみほの太腿に手を置き、その間に顔を近づけた。

そこでようやくみほは意識を取り戻し、和明が何をしようとしているのかに気づいたようだった。

「え？ え!? だ、駄目です、篠原さん！ そんな、汚い、ですから……!」

「いや、凄くいやらしくて、綺麗だ」

「そんな、ことつ……ああんっ!」

誰にも触れさせたことの無い陰唇を舐め上げられ、みほが悶える。

乳首と同様に鮮やかな桃色の、未成熟な秘所であった。控え目な花弁を分け入るように舌を潜り込ませると、痛いほどに舌先を締め付けてくる。

「あっひっ、ああっ!」

「乳首もすっかり固くなっているわ。張りも増してきてる……」

「お母さん、あふっ、む、胸、揉まないで……んんっ!」

その一方で彼女の胸を揉んでいたしほの動きも大胆になってきた。ぐにぐにと指が埋まる程に揉まれながらもみほの乳首は更に突起を増し、言葉とは裏腹に快感をより求めるように肌を火照らせてゆく。

上目遣いでそんなみほの昂りを確かめつつ和明は更に舌を奥へと進める。やがて舌先は褻がぴたりと閉じている所まで到達した。みほの処女膜だ。

「んっ、じゅるっ、ふうっ……」

「ふああっ! 篠原、さんっ! そこ、奥、ああっ!」

「大丈夫だ、みほ。ンツ……」

「あつ、あああ……！」

あえて卑猥な音を立てつつ和明はみほの秘唇を更に責める。崩れ落ちそうになるみほの身体をまほが支え、汗に濡れた首筋にキスをする。

再びみほの反応が強くなってきた。再度の絶頂が近いことを察し、和明は舌の動きを強める。愛液の粘りと濃さが増してきたように感じると共に、閉じていた襞の隙間が気持ち緩やかになってきたように思える。

「ひ、ああっ！ 篠原、さんっ！ 口、離し、てっ！ んあああっ！」
「……っ！」

ぎゅうと舌先を締め付けられ、和明の顔に愛液が跳ねる。痺れた舌をみほの秘所から引き抜きつつ、和明は身を起こす。

「はあっ……あ、あぁん……」

みほはまほとしほの二人に支えられるようにしつつ、絶頂の余韻に浸っていた。和明は汗を吸ったTシャツを脱ぎ捨て、全裸でみほの前に立った。

「ああ……凄い、篠原さん。さっきより、もっど……」

みほの視線が和明の股間に注がれる。

先ほど射精したばかりの筈の和明の肉棒はみほ達の痴態に滾りを取り戻し、再び彼女の眼前で逞しく屹立していた。

「……どうだ、みほさん？」

「えっ……？」

「もう、満足したかい？」

今すぐにもみほを組み伏せ、この肉棒を突き込みたい。彼女の陰唇を舐めている最中からそんな強い衝動が和明の中で溢れてきていた。

しかし和明はそれを堪える。最後はこちらからでなく、みほの方から求めてこなくては駄目だ。

「……………」

「……………」

返事に困ったようにみほが俯く。

ここで彼女が「もう大丈夫」と言えばそれまで。例えみほが本当は満たされていなくても、和明は引き下がるしかない。

だが、夢の中と誤認して和明から精液を搾り取った時の彼女の様子から和明には確信があった。

みほの中で燻っている欲求不満は——この程度で治まるものではない。

和明は無言でみほの答えを待った。

「……します」

俯きつつみほが言った。

「みほ、聞こえていないぞ」

彼女の耳元でまほが囁く。みほは顔を上げ、潤んだ瞳でもう一度言った。

「お願いします、篠原さん……もつと、してくださいっ……!」

そう言いつつ、みほは自ら指を股間へと伸ばし秘所に触れた。くちゆりと淫らかな水音が鳴る。

「これだけ……これだけ、されたのに、私の中の熱いのが、全然治まらないんです……『もつと、もつと欲しい』って、体の奥から、溢れてきてっ……!」

「みほさん」

「お、おかしい……ですよね？ 私、初めてなのに、初対面の人に、こんな事、言っ……」

そういうみほの顔には快感と、愛欲と、混乱と、動揺が入り混じっていた。初めて自覚した自身の衝動に感情が追いついてないのだ。

「……みほさん」

「篠原さ……ンッ」

和明は腰を落とし、みほの肩を抱くと唇を重ねた。そのまま、しほの腕をかわしつつゆっくりと彼女の背を撫でる。みほの呼吸が整うのを、そのまま待つ。

やがて長いキスを終え、和明は唇を離すと言った。

「大丈夫だ。その、初めてだから痛くしないのは難しいかもしれない

けど、みほさんが満足するまで、相手するから」

「……はい、ありがとうございます」

少し頼りない言葉ではあったが、みほはその言葉に微笑むと体を傾け、自ら脚を広げた。

先ほどまでの責めで、彼女の秘所は十分に濡れている。和明は自身の竿に手を添えると、まほとしほに言った。

「ずり上がるかもしれません。まほさん、しほさん、みほさんを支えてあげてください」

「分かっているわ。和明君」

「……お願いします。私の時のように、みほの初めての相手になってあげてください」

二人は頷くと、みほを支えるように肩に手を置く。和明は膝立ちでみほに寄り、秘唇に亀頭を宛がった。

「ンツ……！」

それだけでみほは喘ぎを漏らし、陰唇をひくつかせる。

「……いくよ、みほさん」

「はっ、はいっ！ 篠原さ、んんっ！」

ずぶずぶと未踏地の膣内に肉棒が押し入ってくる。

みほは背を逸らし、しかし勝手にずり上がる身体を懸命に抑えつつそれを迎え入れた。

第五話

「すまない、西住隊長が調子を崩したと聞いたのだが」

「(……やっぱ、人の口に戸は立てられないか)」

北海道戦車道演習場宿舎。ロビー付近の廊下。既に外は暗く消灯時間も近い。

赤いトーガを巻いた少女、通称カエサルに声をかけられた角谷杏は内心でため息をつき、表面上は普段の軽い調子で答えた。

「だいじょーぶ。もう回復はしたけど大事を取って休んで貰ってるだけだから」

「そうか？ それなら良いんだが……会長、もう我々に隠し事は無しにしてくれよ？」

神妙な顔でカエサルが言った。実際、杏はかつて彼女らに戦車道の全国大会で優勝できねば廃校という窮状を教えずに戦車道を修めさせていた前例がある。そこを念を押された格好だ。

「もちろん、本当にヤバイ時はそう言うよ。心配してくれてありがとね」

あくまで軽い口調を崩さず杏は答える。

「(……まあ、言っても信じてくれないだろうしねえ)」

その一方で、内心でもう一度ため息をつく。

西住しほ。彼女の話が本当ならば今頃、みほは――

「さ、もう消灯だよ。明日は早朝から試合開始だからね！」

先ほどの篠原という男性に組み敷かれるみほの姿を想像しかけ、杏は頭を振りつつ陽気に言った。

――確かに姿勢こそ杏の想像にそれは近かったが、和明に余裕があるかと聞かれれば到底そんな状況ではなかった。

「くうっ、あ、あと、ちよつと……！」

「は、はいっ……！」

自身の身体の下で悶える西住みほの太腿に手を置き、ゆっくりと腰を進めてゆく。彼女の秘所は十分に濡れそぼり、更に二度の絶頂を経

て緊張は解け脱力している状態にあるが、それでも和明の巨根を受け入れるのは簡単ではない。

「みほ……!」

「頑張れ、みほ……んっ……」

「あふっ、う、うん、お姉ちゃん……ああっ!」

みほのずり上がりを押さえる、しほとまほが励ましのを送る。まほは彼女の肩を柔らかく掴んだまま首筋に舌を這わせて少しでも彼女の意識を逸らそうとする。

「み、みほ、さんっ……!」

「ああんっ! し、篠原さんっ!」

和明は僅かに腰を引き、再び腰を突き出す。ドリルの先端で固い岩盤を少しずつ崩すかのように亀頭を襞に擦りつけ、ちよつとずつ、ちよつとずつ進める。

幸い、ここまでのみほの声には苦痛ではなく快感が混じっている。こんな形とはいえみほにとっては一生に一度の初体験だ。痛みだけを記憶に残す訳にはいかない。和明はそう決めていた。

そして、その決意は確かに形になりつつあった。和明の肉棒の八割が埋まったところで亀頭がこつんとした感触に当たる。

和明は大きく息を吐き、汗に濡れるみほに言葉をかけようとした。

「うっ、はあっ……お、奥まで届いたよ、みほさっ……!」

「篠原、さん?」

「な、何だ、これっ……!?!」

和明の声に戸惑いが混じる。

「ど、どうしましたか、篠原さ……」

「ぐ、ああっ!」

「んああっ!」

それは、和明が今まで経験した女性のどの膣内とも違っていた。和明の挙動に問いかけるみほの言葉を待たず、和明は大きく腰を引いた。背を反らしみほが悶える。

そして再び肉棒をみほの奥まで突き入れて――
「うっ、うおっ!」

「和明くん？」

「あ、ぐうっ……！」

余裕の全くない和明の呻きにしほも様子がおかしい事に気づいたのか声をかける。しかし和明にはそれに答えず、腰を動かす。

「(ヤバい……これ、ヤバい!)」

口を開くだけで集中が途切れ、思わず射精してしまいそうな程の快感。和明の肉棒を襲ったのはそれだった。

ただ締め付けてくるという訳ではない。みほの膣の奥の方で、何か亀頭に吸い付いてくる。まるで熱い滑りの奥にもう一つの口があり、それが亀頭に唇を押し当て、吸い上げてくるような感触。しほやまほと同様の感触を想像して挿入した和明にとってその快感は完全に予想外であり、それ故に強烈に和明から射精を促した。

「み、みほさん、ごめんっ！ あ、あああっ！」

「ンッ！ し、篠原、さんっ！ そんな、強くっ！」

抑えようと思っても腰の動きが止まらない。優しく動かそうとしてもみほの奥で優しくも淫猥に吸い上げてくれる快感に抗えない。幸いにしてみほの破瓜の痛みは最小限に抑えられたようだが、その事を安堵する余裕は既に無かった。

まるで肉棒に別の脳があり、それが下半身を勝手に動かしているような感覚と、その肉棒に与えられる強烈な感覚。

和明は歯を食いしばり耐えようとしたが――

「ダメ、だっ！ で、射精るっ！」

「ひうっ！ あ、熱っ……！」

和明の腰の動きが止まり、どくと震える。

眩しさを感じる程の快感の中、和明はみほの膣内に精を放った。初めて受け止める射精の熱さにみほが喘ぐ。

「あ……ああっ……！」

どくどくとみほの中に流れ込んでゆく精液の感覚。快感の余韻に和明は大きく息を吐いた。同時に衝動に任されるままだった身体の自由が戻り、意識が明確になってゆく。

「……あ」

「あ……あの、もう……終わっただんでしょうか？」

我に返ると同時に、挿入されたままのみほが問いかけてくる。きめ細やかな肌には汗が浮かび紅潮しているが、まだ絶頂には達しておらず気のせいかな若干の不満を覚えているようにも見える。

「えっと、その……まだ、ではあるんだけど……ごめん」

「和明さん……その、失礼かとは思いますが、私の時に比べてかなり早いのでは？」

みほを支えていたまほが言う。女性に「早い」と言われるのは何ともみじめなものだが、実際今回の和明は早かった。しほに初めて挿入した時に匹敵するかもしれない。

言い訳がましくはあったが、和明は感じたままを言った。

「すまない、その……みほさんの中が思った以上に気持ちよくて、耐えられなかった。何ていうか、奥の方で吸い上げられるような感じで……」

「吸い上げられる？」

和明の説明に怪訝な表情を浮かべるまほ。

その時、横のしほが何かを思い出したように呟いた。

「……『蛸壺』かしら」

「蛸壺？」

「いわゆる女性の『名器』と呼ばれているものの一つね。こう、普通の女性の膣内は奥まで行ってもサイズはさほど変化しないのだけど、蛸壺の場合は先の方が狭まっていて男性は吸い上げられているような快感を得ると聞くわ」

「それを……みほさんが？」

「え？　え？」

宙に指で形を描きつつしほが説明する。状況を理解できていないみほがきよろきよろと見回す。

「名器には鍛錬で得ることが出来るものもあるけど、蛸壺は先天的なものよ。和明くんがあっさりイカされた事を考えれば……間違いなくみほは、それを備えているって事ね」

「なるほど……」

「あ、あの！」

「ど、どうしたの、みほさん!？」

何とも厄介な事になってきた。和明がそう思っていると、みほが突如として大きな声をあげた。驚きつつ彼女を見下ろす。

「あ、えつと……篠原さん、もう、大丈夫です」

「……!？」

「みほ……!？」

みほは申し訳なさそうな顔で和明に言った。傍らのまほが驚く。

「その……蝟壺って言うのを私が持つてるから、篠原さんでも相手は難しいって事なんですよね？ だったら、あの、大丈夫です。お陰で結構、楽になりましたから……」

「……みほさん」

射精を終えた肉棒が膣圧に押され抜けかけている。和明はみほの名を呼ぶと、手を彼女の腹にあてた。確かに行為を一応は終え、彼女の体温は下がりつつあるように思える。

「みほさん……嘘、だよな?？」

「えつ?？」

だが——更にその奥、みほの内側に燻ったままの滾りを和明は確かに感じ取っていた。確かに彼女の言う通り、ここで終えてもみほの体調は一応は——急に倒れたりしない程度には——戻るかもしれない。しかし、和明がしほやまほに託された願いはそれではなかった。

「すう……んっ!？」

「んはっ! し、篠原、さんっ!？」

大きく息を吸い、下腹部に再び力を籠める。腹を撫でていた手はそのまま彼女の胸へと昇り、指を跳ね返す程に熱く張った乳房に触れる。

「んあっ!？ ま、また、大きくっ! ああっ!？」

「吐き出してくれ、みほさんの中、全部!？」

抜けかけていた肉棒は再びみほの中で大きさと固さを取り戻した。大胆に、しかし慎重に、みほに痛みを与えず、快感を引き出せるように大きく、しかしゆっくりと腰を使う。

確かに和明には荷が重い相手であった。既に三回の射精を経て、そう簡単に射精しない程度になっている筈の和明の肉棒は、締め付けつつも激しく吸い上げてくるみほの感触に痺れる程の快感を送られている。急な状況でもあった訳で、しほやまほも責めはしないだろう。しかし——和明にも男としての意地があり、同時に責任を感じていた。

「あふっ、あつ、ああんっ！ しっ、しのはら、さんっ！」

「……どうやら、もう支える必要は無さそうね」

「くうっ……し、しほさん、ちよつと俺の後ろに回って貰えますか？

俺が合図したら、ぐっ、うおっ……お、思い切り尻をつねってくださいー！」

和明の背に自ら手を伸ばし、みほはより結合が深くなるよう和明を抱きしめる。手の空いたしほに和明が次の動きを頼む。

明日のみほの相手である島田愛里寿。彼女と和明はここ数日を共にし、彼女の中の滾りを時間をかけて発散させてきた。今の愛里寿は100%のパフォーマンスを発揮できる状態で試合を待っている。

これのみほだけ欲求不満を抱えた状態で戦うのは、自分がみほを負けさせるようなものだ。それだけは嫌だった。自分の精力の全てを搾ってでも彼女の全てを受け切る。そんな気持ちと和明の中に湧き上がっていた。

——あと、みほの名器をもっと味わいたいという気持ちも、多少はあった。

「ハアツ、ハアツ……み、みほさんっ、もうちよつと強くしても、いいか？」

「はっ、はいっ！ 大丈夫、ですっ！ 最初は、んはっ！ く、苦しかったですけど……慣れて、きまし……たっ！」

自分を繋ぎ止めようとするみほの手の感触を背中に感じつつ、和明はみほに問いかけた後に腰の動きを気持ち速くする。

みほの表情を伺う。和明の動きに合わせて喘ぐ彼女の表情には痛みに耐える様子はなく、潤んだ瞳で熱い吐息を漏らす。確かにみほは和明の缶コーラ程ある肉棒を受け入れ、悦びを感じているようだ。

そして悦びを感じていたのは和明も同じだった。みほの奥からは更に愛液が溢れ、破瓜の血を流してゆく。締め付けと滑り、そして蝟壺の如き吸い上げが程よく組み合わさった膣内が与えてくる快感は堪らないもので、和明の中の興奮をより高めてくる。

「あふっ、んああっ！ そこっ、揉んだら、ああっ！」

また、抽送しつつ揉みしだくみほの乳房も素晴らしいものだった。掌にやや余るサイズの乳房はゴムまりを思わせる張りと弾力で和明の指を押し返し、先端で揺れる桃色の乳首は固く突起し、時折和明の手をくすぐった。

「そ、そろそろ、お願いします、しほさんっ！」

「分かったわ、このくらい？」

射精感の強まりを覚え、和明はしほに指示を出した。しほは頷くと和明の尻に手を伸ばし、一部を摘まむとそれを抓った。

「っ?! 痛っ……いい、いえ、そのくらいで！」

流石は日々の戦車道の修練で鍛えているだけはある。思った以上の力で尻肉を抓られ、和明は悲鳴をあげかけるが何とか堪えた。実際、痛みのお陰で射精感が多少は弱まってくれた。今度こそはみほを絶頂に導かなくては。しほに感謝し、和明は角度を微妙に変えてみほの感じるポイントを探りつつ更に腰を振る。

「ひゃうっ！ しのっ、篠原、さんっ！ 何だか、体、がっ……ふああっ！」

「ああ、それが『イク』って事、だっ！ みほさん、そのまま、我慢、しないでっ！ うおおっ！」

「凄いですっ！ さっきの、指とか、舌とかより、ずっとっ！ ああんっ！」

和明のその試みは効果があったようだ。みほの身体の震えが強くなってきた。絶頂に近い。大きくゆつくりとしたストロークから、細かく早く擦るような動きへ。

「あんっあっああっ！ わたっ、私っ、もうっ！」

「ぐうっ、お、俺もっ、限界だっ！」

「ふあ、あ、は、ひいっ！」

みほの声が小刻みな喘ぎに変わる。和明は尻を抓ったままのしほに言った。

「しほ、さんっ！ 指、離してくださいっ！」

「……よく我慢したわね、和明君」

「うおっ、お、おおおっ！」

「あ、ああああっ！」

労いの言葉と共にしほの指が離れる。同時に強烈な射精感が解放され、和明の奥からマグマめいた熱い奔流が流れ出す。

みほの身体が一際大きく震え、絶頂に達したのを確かめてから和明は彼女の膈内に二度目の射精を放った。

「あふっ、んっ、奥っ、溢れてっ……っ！」

「ううっ！ す、吸われるっ……っ！」

みほの和明を抱きしめる力が強まる。同時に彼女の膈内は肉棒を締め付け、その奥の子宮口に精液が吐き出されてゆくのが分かる。

だが、まだ終わる訳にはいかない。

「……ぐっ！」

「んっ、あうっ！ またっ、中、膨らんでっ！」

そろそろキツくはなってきたが、三度和明は体に力を籠める。再勃起した肉棒により、結合部から溢れた精液がごぼりと溢れ出る。

このまま彼女をクールダウンさせないままイかせ続け、みほの中の欲求不満を全て解消させる。和明はそれを狙い再び抽送を始めようとする。

「あ……あの、篠原……さん」

その時、みほが和明を見上げた。頬を染め、絶頂の余韻を残す表情が何とも艶めかしい。腰を止め、和明は答えた。

「ふうっ……何だい、みほさん？」

「本当に、いいんですか？ 篠原さん、そんなに大変そうにして……本当に、最後まで相手をしてくれるんですか？」

「……………」

「んっ……………」

和明は無言でみほにキスをした。

「ふうっ、はっ、んはっ……」

「ンンッ、あっ、ふぁ……」

舌を絡めさせない、唇を重ねるだけのキス。それを何度も繰り返す。

「……ああ、望むところさ」

「ンッ……それじゃあ今度は、私が上になっても、いいですか？」

僅か、ほんの僅かだがみほの纏う空気が変わった気がする。

いよいよここからが本番か。和明は腹を括ると一旦肉棒を引き抜き、布団の上で横になる。

「みほさん、挿入は……」

「大丈夫だと思えます。夢の中のイメージと、かなり近いみたいですから」

みほは頷くと身体を起こし、和明の上で脚を広げると肉棒の上に乗った。零れ落ちた精液と愛液の混じりあったものが亀頭に降りかかると、室内の生臭い淫臭が更に強まる。

「みほ……何て姿で……」

まほが自分の胸に触れながら言う。実妹の自ら肉棒を求める姿に、彼女も興奮しているようだ。

ショートカットを汗に濡らし、みほは屹立する怒張に手を添えた。びくりと竿が跳ねる。

「……いきますね、篠原さん」

「ああ、どう……ぞっ!」

「んっ、はっ、ああっ! いいっ! 奥、までっ!」

和明の言葉を待たずにみほは腰を落とす。ぐちゅぐちゅと淫らかな水音が結合部で鳴る。みほは更に上体を伏せ、和明の胸板に顔を摺り寄せつつ腰を上下し始めた。

「んっ、あふっ、あむっ……」

「おっ、おっ!」

今度は上から吸い上げられるような感触と共に肉棒が締め付けられ、擦られてゆく。同時にみほは和明の乳首を啜え、それを舐めしやる。二か所からの快感に和明は思わず声を漏らす。

「くうっ……なら、お返しだっ！」

「ふあっ！ あっああんっ！ それっ、凄いつ、しのはら、さんっ、凄
い、ですっ！」

負けじとばかりに和明は腰を跳ねさせ、みほを下から突き上げる。
その度に彼女の形良い乳房は煽情的に揺れ、和明の肉棒を更に充血さ
せてゆく。

「ぐっ、ああっ、みほさんも、凄いつ！」

「あふっ、あつ、ンンッ！ 中、広がっちゃ……ああっ！」

「これがみほの本気……やはり、相当に溜め込んでいたのね」

激しく肉欲を求めるみほの姿にしほが眩く。和明は腰の動きを止
めず、またみほも夢中で腰を振る。互いに遠慮を捨てた動きに次の絶
頂は存外早く訪れた。

「あうっ！ しっ、篠原さんっ！ わたっ、私、またっ！」

「ああ、俺も、もうっ……う、ああっ！」

「……………っ！」

既に五度目。精巢の奥で次々と精子が作られているのか自分でも
驚く程の精液が噴水のように肉棒を駆け上り、みほの膣内へと放たれ
る。同時にみほも絶頂に達し、びくんと身体を跳ねさせた。

「く、うう……どうだい、みほさん？」

「ああ……あと、ちよつとだと、思います」

みほの乳房を下から持ち上げるように揉みつつ和明が問いかける。
みほは熱い吐息と共に答えた。

「んっ、あ、ん、くっ……」

ふと、傍らから別の喘ぎが耳に届く。和明が顔を横に向けると、下
着の上から秘所を撫で、自身で胸を揉むまほの姿があった。

「まほ、さん」

「あつ……！ す、すみません、和明さん。和明さんとみほの姿を見て
いたら、堪らなく、なって……」

和明が声をかけると、まほは我に返ったのか目を伏せつつ答える。
部屋に満ちる汗と精液と愛液の匂い。理性を溶かす淫臭にまほも発
情してしまったようだ。

続けて和明はしほを見た。

「しほさんは、どうですか？」

「正直……辛くなってきたわね」

口調こそ平静を装っているが、和明とみほの結合部に向けられる瞳は熱情に潤み、腰をもじもじと淫らに揺らしている。

ここまでみほととの交合のサポートに徹してくれた二人の様子に、和明はある発想に至った。

「あの、それじゃあ……」

横になったまま、三人に提案を伝える。

「えっ、ええっ？」

「……お願いします」

「和明君こそ大丈夫なの？ かなり無理をさせているけど……」

「平気ですよ、このくらい」

驚くみほ、頭を下げるまほ、こちらを気遣うしほ。

正直なところを言えば動悸が激しい。少し眩暈もする。もうちよつと持つてくれよ。そう思いつつ和明は答えた。

「それなら……みほが真ん中がいいわね」

「では、私が右でお母様は左にではどうでしょう？」

「ほ、本当にするの？ お母さん、お姉ちゃん？」

「ああ。だから、みほも……」

しほとまほは立ち上がり、手早く下着を脱いでゆく。みほは二人の様子に押されるように和明の身体の上から退くと一歩引いて背を向け、そのまま四つん這いになった。

「うう……これだと、お尻まで……」

「和明さんに最後まで相手して貰うんだろう？ ならば、そこも見せないとな」

恥じらうみほに言いつつ、彼女の右に來たまほが同様に腰を落とし、尻を和明に向ける。和明は身を起こした。

「お願い、和明くん。もう十分濡れてるから、思い切り、突いて……」

続いてしほがみほの横に座り、やはり四つん這いになる。濃い陰毛に彩られた朱色の秘唇は彼女の言う通り、既に濡れそぼっていた。

「うわ、こんなになってたんですか、しほさん？」

「仕方ない、でしょ……さつき、演習場でお預けをされて、それからずつとなんだから……」

和明の言葉にしほは少女のように頬を染めつつも腰を揺らし答える。和明は改めて眼前の光景を眺めた。

「あ、あの、篠原さん……お母さんの次で、いいですから、できるだけ、早く……」

瑞々しい尻を持ち上げ、遠慮がちな懇願をするみほ。

「和明、さん……お願いします。最初は、私に……少し突いて貰えれば、後回しで、いいですから……」

張りのある尻を震わせ、日ごろのクールな面持ちを捨てて挿入をねだるまほ。

「和明くん、また、そんなに固くなって……お願い、来てっ……!」

二人の娘の前だというのに夫以外の肉棒を求め、熟れ切った豊満な尻を揺らすしほ。

「(……なんか、拝みたくなくなってくるな)」

自分の肉棒の挿入を求める三人の母娘の淫唇が並ぶその情景に、和明はそんな事を思った。一方で射精を終えたばかりの肉棒は既に次の快感への期待で膨れ上がり、血管を浮かばせ熱を放っている。

肉棒に手を添えて角度を調節し、和明はまずまほの尻を掴んだ。

「じゃあ、最初はまほさんから……しほさん、ちょっと我慢しててくださいね」

「そんな、和明くんっ……」

「待っていてください、お母様。すぐに……んああっ!」

しほに言いかけていたまほの言葉は、逞しい肉棒の挿入で中断された。みほととの交合中にオナニーをしていた事もあり、まほの膣内は抽送するには十分な愛液の滑りを湛えていた。

「で、みほさんにも……!」

「えっ! ふあっ! 指、入ってっ!」

「あああっ! き、来てるっ、和明さんっ、和明さんっ!」

まほへのピストンを開始しつつ、和明は空いた左手でみほの秘所に

触れ、精液と愛液に塗れた膣内へと指を潜らせた。捏ねるように指を動かしつつ、それを前後させる。

予想外の刺激にみほは声を昂らせ、挿入を待ち望んでいたまほは髪を振り乱して自分からも腰を使い始める。

「ちよ、まほさんっ、ペース早すぎっ……!」

「ご、ごめっ、ごめんなさいっ、和明っ、さんっ! 腰、勝手にっ!」

「お、お姉ちゃん……ンンツ! こ、こんな顔、するんだ……!」

肉欲に溺れるまほの恍惚とした表情に、みほが喘ぎつつ呟く。

「そろそろっ……!」

「んっ、ああっ! 和明さんっ、もっど……!」

「まほ、いい加減にこちらにも……ああっ! 来たっ! 和明くんの、

太い、のおっ!」

頃合いを見計らい、和明はまほから肉棒を抜くと同時にみほの秘所を弄る手を左から右に切り替え、しほの尻まで移動して一気に奥まで突き込んだ。

しほの肉厚の膣内はそんな乱暴な挿入を嬉々として受け止め、全体を包み込むように締め付けてくる。

ここまで辛うじて母親らしい口調を維持していたしほだが、挿入が叶った事でその限界を超えたようだ。たちまちに蕩けた顔で腰を振り、貪欲に快感を求めてくる。

「あっ、熱っ! しほさんっ、これ、我慢しすぎですよっ! くっ、おっ!」

「だ、だっつ、欲しかった、のっ! ふひっ! 和明くんのちんぽっ、ちんぽっ!」

火傷しそうな程に熱く濡れていたしほの膣内の感触と熱に和明は驚きつつも大きく腰を引き、叩きつけるように再び挿入する。

「しほさんっ! ぐうっ! そんな、動物みたいな、声、出してっ! 娘さんの前でっ、恥ずかしくっ、ないん、ですかっ!」

「んひっ! だ、だっつ、和明くんっ、のがっ、ずっと、欲しく、てえっ! ひっ、あうっ!」

「お母さん……凄、激しいっ……あふっ、し、篠原、さんっ! そこっ

！」

子供のようによいやいやと首を振りつつしほが悶える。その様子にみほは指で弄られつつも興奮と驚きが入り混じった表情で見入る。

ふと、そのみほを弄る指が引き抜かれた。

「えっ?」

「みほさん、お待たせっ……ううっ!」

「ふえ、あ、ああんっ! し、篠原、さんっ! 急につ!」

しほから引き抜いた肉棒を今度はみほに。しほとは異なりゆっくりど、しかし力強く挿入してゆく。

「どうだい、みほさん……後ろからの、具合はっ!」

「んああっ! な、何か、変、です……さつきまでと、違うところが、擦れ、てっ!」

どうやら後背位の方がみほの弱いところを擦れるようだ。しかし体位が変わっても彼女の名器の具合は健在のようで、気を抜くとそのまま吸い付かれそうな錯覚を覚える。

そしてみほに暫く抽送したの後に再びまほへ。

「あうっ! さ、寂しかった、です、和明さんっ! このまま、もっと、擦ってください、さいっ!」

「和明くん、早く、また、私にもっ……!」

「了解……ですっ!」

「ひうっ! あ、あはあっ! いいっ、いいっ!」

「しっ、篠原さんっ! だ、駄目ですっ、そこ、お尻っ! ああっ!」

そして再びしほへ、みほへは指での手淫を絶やさずに昂らせつつ、冷めさせないままより高い絶頂へと導いてゆく。愛液で指先を濡らしみほの尻穴周辺を弄ると、恥じらいで顔を真っ赤にしつつも抵抗せず喘ぎ身体を震わせる。

意識が飛びそうな程の快感の中、和明は夢中で腰を振り、肉棒で母娘たちを蹂躪してゆく。挿入していた肉棒を引き抜き、快感の余韻が発生する間もなく次の膣内へと挿入を繰り返す、気持ちよい瞬間が永遠に続くような状態。快樂地獄というのがあるとしたら、このような状態なのだろう。

だが、現実には永遠ではない。抑えようのない射精感がこみ上げ、亀頭がどくどくと脈動する。

「ヤバッ、もう、そろそろっ……!」

「射精るの!? 射精るのねっ! 頂戴っ、和明くんの、精液っ! 私の中に、たっぷりっ!」

「お母様っ、一番長い時間、挿れられていてっ、それは贅沢ですっ!

和明さん、お願いします、私にっ……!」

「し、篠原、さんっ! 射精して貰えれば、たぶん、私っ! これ、でっ……!」

和明の射精が近い事を知った三人が、それぞれの言葉で膣内射精を懇願する。それは和明の中の男性としての支配欲を十二分に刺激し、射精感を更に強めさせた。

「ぐっ……う、おおっ!」

獣めいた呻きと共に和明は尻のひとつを掴むと奥まで挿入に、堪えていたものを開放した。

「あ、あ、あああっ! 篠原、さんっ、篠原さあんっ!」

自分でも驚く程の量の精液がみほの中に流れ込んでゆく。甘い嬌声と共に絶頂に達するみほ。

「ま、まだっ……!」

「あふっ、かつ、和明さんっ! そんなっ、射精したままっ、あ、んはあっ!」

全てを吐き出す前に和明はみほから肉棒を引き抜き、荒々しくまほの秘所に亀頭を振り込み込む。挿入の快感と精液の迸りを同時に受けたまほが悶絶する。

数度の脈動を射精を行った後、今度はまほから肉棒を引き抜くとしほの肉付き良い尻を鷲掴みにして挿入。

「待たせました、しほさんっ!」

「あはあっ! う、嬉しいっ! 和明くんの、精液っ、嬉しいっ!」

「あうっ、かつ、ああ……!」

しほの一番深いところまで挿入し、そのまま最後の一滴まで吐き出し切ると和明は大きく息を吐いた。

「ああ……熱い……和明くんので、お腹、いっぱい……！」

「あ、ありがとうございます、篠原さん……」

「私も……和明さん、素敵でした……」

絶頂の余韻に浸るしほ、恍惚の吐息を漏らしつつ礼を言うみほとまほ。

「いや、そんな、俺の方こそ……」

そう和明が答えようとした時、

「え？」

ふと、視界が暗くなった。

「あ、あれ？」

停電？ いや、停電でも月明かり程度はあるはずだ。これは――

体が揺らぐ。自分の頭が、勝手に床に沈んでゆく。

「和明くん!?!」

しほの声が何処か遠くから聞こえる。

そこでようやく和明は、自分の身に何が起きたのかを悟った。

九州の西住邸から大学演習艦、北海道演習場に至るまでの睡眠も満足に取れない強行軍、そこに至るまでの彼女らとの何度もの交わり、その疲れが取れない中でのこの激しいセックス――

「(なるほど……これが、『体力の限界』って奴か)」

そう思ったのを最後に、和明の意識は途切れた。

――最終エピソード「俺と家元(かのじよ)と夏の終わり」に続く。

俺と家元（かのじよ）と夏の終わり 第一話

遠雷めいた砲声が聞こえる。

「んっ……」

頭痛が酷い。全身を倦怠感が包んでいる。呻きつつ寝返りを打つ。再び砲声。それに蝉の鳴き声が混じる。

「……蝉？」

布団を被せられている事に和明は気付いた。少しずつ意識が戻ってくる。

「（あれ？ 俺、何で……）」

自分が何故寝ているのか、それを頭痛の中で思い出そうとする。演習場でのしほどの密会、そこに現れたまほ、倒れていたみほを担いで宿舎まで来て、そこで――

「っ!？」

「まだ横になっていてください、篠原様」

重い瞼を開け、慌てて身を起こそうとした和明の横から聞き覚えのある声がかけられる。

「え？ あ……菊代、さん？」

「はい。菊代でございます」

周囲を見回す和明に横で団扇で風を送っていた菊代がにこやかに答えた。西住邸の時と同じ和服に簡素に束ねられた後ろ髪。年齢的にはしほと数歳しか変わらない筈だが、薄化粧が似合うその面持ちは彼女の年齢を測りかねさせている。

どうやらここはみほ達と激しく交わった宿舎の休憩室のようだった。全裸だった筈の自分の身体は簡素な寝間着が着せられている。

混乱している和明に、菊代はにこやかに尋ねてきた。

「さて……何かからお答えすれば宜しいでしょうか、篠原様？」

「いや、あの、俺は一体……うわっ!？」

その時、壁の掛時計が和明の視界に入った。時計の針は既に昼前を

指している。当然ながら出店の営業はとっくに始まっている時間だ。

「すつ、すみません、菊代さんっ！ 話はあと、でっ……!?!」

慌てて立ち上がるうとした和明は強烈な立ち眩みを覚え、再び布団に倒れ込んだ。

「あっ……ぐっ……!?!」

「お店の事でしたらご安心ください。家元が店長様に事情を説明した上で、お休みのご許可をいただいております」

穏やかな口調で菊代は言うのと、傍らの卓袱台に置かれていた急須から湯飲みに茶を注ぎ和明に手渡した。

「さ、まずはゆっくりとお飲みください」

「はっ……はい……」

どうやら、立ち上がる事ができない程に自分の身体は疲弊しているらしい。和明は自分の調子の悪さを理解し、上体だけ起こして菊代から湯飲みを受け取った。口に含むと強い苦みと共に茶の温もりが体の中に流れ込んでくる。乾いていた体に水分が行き渡ってゆくのを感ずる。

時間をかけつつ茶を飲み干し、和明は大きく息をついた。

「……ふう。ありがとうございます、菊代さん」

「いえいえ」

空の湯飲みを受け取り、菊代は卓袱台にそれを戻した。

再び遠くからの砲声が届く。とりあえず落ち着いた和明は菊代に尋ねた。

「俺はどうなったんですか?」

「家元とまほ様、みほ様のお相手をされている最中に力尽き、気絶されました。連盟の医療スタッフを呼ぶにも事情の説明が難しい状況でしたので、看護役にわたくしが呼ばれました」

「そうですか……皆は、今は?」

「みほ様とまほ様は既に試合に挑まれております。家元は立場もございいますので、来賓として島田流家元と共に試合を観戦しております」

先ほどから聞こえている砲声は試合のそれか。和明は理解し、更に菊代に聞いた。

「試合はまだ、続いてるんですよ」

「はい。展開としては一進一退……といったところでしょうか。緒戦ではみほ様は大隊長、まほ様は三つに分かれた中隊長のひとりとして挑まれましたが、大学選抜の島田愛里寿に作戦を読まれ、秘密兵器のカール自走臼砲の奇襲もあり敗走……しかしながら、みほ様が緊急で編成した小隊がカールの位置を把握して撃破。今はちようど仕切りなおしている段階です」

「はあ……」

何とも壮絶な展開である。情景を想像すらできない内容に和明は感心すると同時に、行為の最中に気絶して今まで寝ていた自分に情けなさを覚えた。

「なんか……恥ずかしいですね、俺」

「はい、わたくしもそう思います」

「……………」

思った以上に直球な応答が返ってきた。そういえば彼女は、その穏やかな外見とは裏腹に割と歯に衣を着せぬ人だったか。

「誤解しないでいただきたいのですが……みほ様のお相手をしていただいた事、西住家に仕える者としてわたくしとしても感謝しております。ですが、最後の最後で気を失い、ご心配させたまま試合に挑ませた事は良いとは言えません。減点です」

「減点、ですか」

「ええ。それが例え、相手から求められ応えた結果であったとしても」
菊代はそう言うのと布団に近づき、おもむろに和明の股間へと手を伸ばした。

「失礼致します」

「えっ!? ちよ、菊代さん!?!」

和明が制止する間もなく菊代の手は寝間着のズボンを下着ごと引き下げ、寝汗に濡れた和明の下半身を外気に晒す。

そのまま菊代はぐったりとした和明の肉棒に触れ、指で柔らかく握った。

「うっ!?! い、いや、待って……」

「お静かに……ふむ……」

「いや、『ふむ』じゃなくて、くっ……!?」

菊代の右手が強弱をつけて上下に動く。同時に左手は和明の下腹部の辺りに触れ、何やら臍下あたりの腹筋や内腿の肉付きを確かめているようだ。

「やはり……では、これでは」

「ぎ、菊代さんっ！ ううっ！」

右手の動きが少し速まる。だが、平時であれば忽ち勃起したであろう肉棒も流石にグロッキー状態なのか、多少固くはなったものの屹立はせず、右手から解放されるとぺたりと倒れ込んだ。

「いつ、いや、菊代さんっ！ 流石に今は無理っ……！」

「ご安心ください。『無理』である事を確かめただけですのぞ」

普段と全く変わらない口調で菊代は答えると手を引き、袖から取り出したウェットティッシュで指を拭いた。吹いた紙をゴミ箱に入れ、再び話を始める。

「篠原様、確かに貴方のお持ちになっっているそれは形といい大きさといい、実に見事な逸物いちもつでございます。ですが、その主である篠原様にはもう少しの鍛錬が必要かと」

「鍛錬、ですか？」

「はい。例えば……腹回りから尻にかけての筋肉が、逸物を使いこなすにはやや足りておりません。鍛える事で持久力が増し、またより激しい腰の動きにも耐える事ができるようになれば今回のような状態になる前にお相手を務めきる事が出来たでしょう」

スツと指先を和明の腹から腰にかけて沿わせながら菊代は言った。「勿論それは、篠原様が今後も家元やお嬢様方のお相手をしていただけるなら……という話ですが」

指を離し、菊代は和明を見た。

「篠原様は、今後についてどうお考えですか？」

「それは……」

「以前、わたくしがお願いした『女性としての家元も支えて欲しい』というのは、只のわたくしの願望に過ぎません。ご遠慮なさらず、篠原

様のお考えをお聞かせ願えればと」

口調こそ静かで穏やかだが、菊代が本気で尋ねてきているのはその視線から伺えた。和明が今の関係を夏休みの終わりで卒業してしまうのか、それとも今後も続けてゆきたいと考えているのか。それは確かに西住家のそちらの世話もしてきた菊代にとつても無視できない事柄だろう。

「それなんですけど……ちよつと、聞いて貰っていいですか？」

「はい、お願い致します」

ある程度こちら寄りの店長以外に自分の考えについて語るのは初めてだ。和明は内心の緊張を覚えつつ菊代に語った。

菊代は時折相槌をうつ程度で、静かに和明の話を聞いていた。それは他人の相談や話を多く聞いてきたであろう聞き上手のそれで、彼女の今までの経験を押し量らせた。

「……なので、今の話をそのまましほさん達にもしようと思います。どうですか？」

話を終え、感想を求めた和明に菊代はふう、と小さく息を吐くと言った。

「お若い意見ですね……ご自身が言っている事がどれだけ困難な事が篠原様は理解して言っているおつもりではあるでしょうが、現実はその想像以上に厳しく、篠原様の意思など介さぬ程度に理不尽なものです。九分九厘、篠原様の思惑通りにはいかないでしょう」

口調こそ穏やかなままだが、容赦ない言葉が投げかけられる。

「……はい」

和明は一言だけ返す。その表情には落胆も、菊代の言葉への怒りも浮かんでいない。

その反応に、菊代は続けて言った。

「篠原様は、ご自身がどれだけ幸運な状況にあるかをまずご理解すべきでしょう。今の貴方は、世の男性がただ金を積みあげようという世界よりも上の世界におられます。それは一度手放せば、二度掴む事がほぼ不可能なものです。それをご自身でお捨てになられるのですか？」

「菊代さんの言う通りです。俺は今、しほさんや千代さんのお陰で信

じられないような世界に居ます……でも、今の俺の世界がこのまま続くのって、それはもつと悪いことなんじゃないかって思うんです」

和明は眼を伏せず菊代に言った。数秒の沈黙の後、彼女は薄く笑った。

「……成程、この程度の揺さぶりではぶれない位には決意をされているようですね」

「すみません、菊代さん」

「いえいえ。それが篠原様の選択なのであれば、わたくしはそれにご意見は出来ません。先ほどの暴言はお許しください」

そう言うのと菊代はスツと立ち上がり、休憩室のドアへと足を向けた。

「昨晚から何も食べておられないと聞いております。簡単なものをお作りしますのでお待ちください。家元には、お目覚めになられたとお伝えしておきます」

「頼みます」

退出してゆく菊代の背を見送り、和明は窓の方に視線を移した。

遠くからの砲声は、まだ続いている。

「そう……ありがとう。今日はそこでそのまま休むよう伝えて」

北海道戦車道演習場・特設観客席。ひな壇状に組まれた客席の前には巨大なモニターが複数設置されており、各所に据えられたカメラからの画像を同時に展開している。

その一角、戦車道連盟関係者のみに限定された客席に座る西住しほは小声でそう言うのと携帯を切った。

「……西住さん、昨晚は大変だったようね」

「何の話？」

そのすぐ近くに座る島田千代が日傘を差したまま言った。視線を向けることなくしほが返す。

「目の下の隈、隠せていないわよ？」

「……………」

しほは無言で目元に触れた。

「嘘」

「……………」

かまを掛けられた事に気づき、ようやくしほは千代を見た。悪びれる様子もなく千代は言う。

「何故かお店に彼の姿はなく、貴女はスーツに皺を付けたまま試合開始前ギリギリに到着……流石に気づくわ。何があったの？」

そう尋ねてくる千代の視線は平時の「島田流家元・島田千代」でなく一人の女性としてのものだ。しほは観念したように肩を落とし、答えた。

「……娘の相手をして貰っている最中に倒れたの。幸い大事無く、今は菊代が看病しているわ」

「また随分と無茶をさせたようね。彼がロクに休めていない事は、貴女も察していたと思っていたのだけど」

「緊急だったのよ。娘は娘で立っていられない程になっていて、無理を言っただけ頼むしかなかった」

言い訳にもなっていない言い訳だ。しほはそう思いつつモニターを見た。画面では演習場の中に存在するテーマパーク跡地にて激しい砲撃戦が繰り広げられている。

「ちゃんと彼のところの店長さんには説明したの？」

「ええ。当たり前だけど、本気で怒られた。『彼自身が望んで動いている事に僕は何も言えません。ただし、貴女方が彼を壊れてもいい玩具だと思っているのなら、僕は絶対に許しません』……そう言われたわ」

「あの店長さん、貴女のところの先代だか先々代だかのお相手だったんでしよう？ それに怒るわよ」

呆れ混じりに千代が言う。

「それで、どうするつもりなの？」

「何を？」

「和明君の事。分かっていると思うけど、大学が始まれば今まで通りにはいれないわ。西住さんなりに考えてるんじゃないかって？」

「……………」

「今更隠す事でもないでしょう？ 私の方の考えも話すわ」

「……分かったわ」

どうも今日は分が悪い。しほは改めて千代に顔を向け、自分の考えを語った。

「……」

千代は話を聞き終え——彼女としては極めて珍しいことに——その整った顔に不快を浮かべた。

「……しほ、それ、本気で言ってるの？」

「これでも思いついた中で一番良い方法を選んだつもりよ」

「和明君のプライドとかを一切無視した『その方法』が？ 西住流はやっぱり乱暴というか、優雅さに欠けると言うか……話にならないわね」

「では、貴女はどうすると言うの？ 千代」

千代の酷評にしほは問い返す。

「貴女のよりは余程受け入れやすい方法よ。彼と……」

モニター上では防衛網を敷いていた大洗勢が大学選抜の隠し玉、T—28によつて戦線を押上げられている。その光景に時折視線を向けつつ、しほは千代の提案を聞いた。

「……彼が、それを受けると？」

「悪くないと思わない？ それに、あの子も喜ぶと思うわ」

微笑みつつ千代はそう言う別モニターに視線を送る。しほがそれを追うと、テemapパーク跡地から少し離れた丘に停まる巡行戦車センチュリオン、その砲塔から身を出して指揮を執る島田愛里寿の姿が映されていた。

『こちらメグミ中隊、東通用門突破。このまま予定通りZ地点に向かいます』

「了解」

草原を抜ける風に亜麻色の髪を揺らし、島田愛里寿は部下のメグミからの通信に短い応答を返す。

どうやら超重戦車T—28を利用しての敵防衛線の突破には成功してくれたようだ。最悪の場合は自分が動く必要があるかと思つて

いたが、このままメグミ、アズミ、ルミの三人の中隊長に任せて問題は無いだろう。

「うん、いい感じ」

自分の胸に手を置き、自身の調子確かめる。闘争心の不完全燃焼を強く抱えていた時に感じていた動悸や熱さ、集中力の欠如などは全て無くなっている。自分のパフォーマンスを最大に活かせる状態だ。「あの人」の手が——いや、逞しい肉棒が、と言うべきか——無ければ、この状態に持つてくる事は出来なかつたろう。

この試合に挑むにあたり、愛里寿は母である千代と「ある約束」を交わしていた。自分が愛して止まない「ボコられクマのボコ」をテーマとした遊園地・ボコミュージアム。経営不振による閉園を目前としたその遊園地へ、この試合に勝てば出資してくれるという約束。

当初は一方的な戦力差の勝負となる予定だった本試合に対し、愛里寿はその約束をモチベーションとしてここまで臨んできた。しかし——そこにボコ以外の要素が生まれていた事に愛里寿は気付いた。

「……和明さん」

小さく、その名前を呟く。

年齢も立場も全く違う、母の縁が無ければ全く関わる事も無かつたろう青年。彼の名を口にする、心の奥が熱くなる。

それが愛情なのか、あるいは肉欲を誤認しているだけなのか、それは愛里寿自身にも分からない。

だが、自分がこうしてこの場で戦っている事への感謝と、それに応えたいという気持ち。それは確かに自分の中にあった。

「……よし」

この試合に勝って終われたなら、和明を誘いボコミュージアムに行こう。共にボコライドに乗り、スペースボココンテンで宇宙服のボコと共に眺め、ボコ・ショーで共に壇上で袋叩きにされるボコに向かって声援を送ろう。

そして、その後は——

「ンッ……！」

「隊長、どうしましたか？」

尻穴の疼きに思わず声が漏れた愛里寿を、車内の搭乗員が気遣う。
「……何でもない。内部の動きに合わせてこちらでも移動するぞ」
再び自分を「常に冷静な大学戦車道の天才隊長」の顔に戻し、愛里寿は答えた。

「相手の狙いは火力でこちらを攪乱し、各個撃破する事です」
『了解、バラバラになんかささせないわよ!』

「はい。各個に連携して動き、分断を防いでください!」

テーマパーク跡地、中央広場付近で待機するIV号戦車。ホワイトボードに自勢力の戦車を模したマグネットを貼りつつ西住みほが僚機の中隊長、ケイへ通信を行う。

思った以上に敵の動きが早い。火力に劣るこちら側が守勢に回れば削られるばかりだ。どこかで攻勢に回る契機を作る必要があるが、どうすれば――

そう考えていたみほは、ふと装填手の優花里がこちらを心配そうに見ていることに気づいた。

「どうしたの、秋山さん?」

「え?! い、いえ、西住殿が、まだ調子が戻っていないのかと気掛かりで」

「ありがとう、でも大丈夫……」

「そ、それにしても、試合開始の頃から時折不安そうにしましたから……」

「あつ……ああ、それは、試合の事で色々考えてたのが、そう見えただけだと思う。本当に夕べ休んで調子は戻ったから。ごめんね、心配させて」

「いっ! いいえっ! 滅相ありませんっ!」

遠慮がちに優花里が言う。みほは一瞬だけ「しまった」と思ったが咄嗟に別の理由を答える。全ての味方の支えとなるべき自分が周囲を心配させては隊長失格だ。

その時、通信手の沙織から声が届く。

「みほりん、まほさんから通信。全体じゃなくて個別で話したい事が

あるって」

「分かりました。こちらに回してください」

喉頭マイクに指を添え、みほは通信機を耳にあてた。

「中隊長、どうしましたか？」

『隊長、これはプライベートな内容になる。他の者に聞こえないようにできるか？』

「……分かりました」

小声で言ってくるまほの声に内容を察し、みほは砲塔から身を出した。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

『菊代さんから暗号通信が届いた。和明さんは眼を覚まし、特に体調に問題も無いそうだ』

「……良かった」

まほの言葉にみほは大きく瞳を広げ、安堵の吐息と共に微笑んだ。

『これでようやく試合に集中できるな』

「やっぱり、お姉ちゃんも気付いてた？」

『上手く隠してはいたが、それでも普段からのみほを知って入れれば丸分かりだ』

「うう……ダメだなあ、私」

自分としては完全に押し隠すことが出来ていたと思っていただけに、そう言われるとへこむものである。ため息をつくみほにまほが言った。

『勝つことで応えよう。それが和明さんへの何よりの恩返しになる』

「……うん」

昨晚逢ったばかりの、互いの事を身体だけしか知らないような男性。

だが、自分の内側でドロドロと渦巻いていた燻りを全て受け止めてくれた和明にみほは感謝を覚えていた。戦車に乗る事しか出来ない自分に返せる事は、確かにここで勝利して、彼の行為が無駄でなかったと示すことだ。

他に、何か恩返しができるとするならば――

「ねえ、お姉ちゃん。『ボコミュージアム』って知ってるかな？」

『聞いたことはある。お前が好きだったボコをテーマにした……』

「うん、そこ。この試合が終わったら、篠原さんと、お姉ちゃんも一緒に連れて行きたいなって思ってる」

『……それはいい考えだ』

通信機の向こうでまほが微笑んだのが分かる。

『敵の動きに変化が出てきた。そろそろこちらも動く。すまなかったな、こんな時に』

「ううん。ありがとう、お姉ちゃん」

通信を終え、みほは車内に戻る。彼女の様子を伺っていた優花里が少し驚いて言った。

「西住殿、お姉さまから何か良いニュースでもあったのですか？」

「え？」

「いえ、先ほどまでと西住殿の雰囲気が変わったというか……」

「……うん、あったよ。良いニュース」

優花里の問いかけに、みほは微笑みで返す。

「な、何があったんですか？」

「それは、秘密かな」

「ええっ!? そんなあ……」

「分断を防ぐためこちらも動きます。麻子さん、大通りを回避して東南部へ向かってください！」

再び「大洗女子学園連合」の隊長の顔に戻り、みほが指示を飛ばす。

砲声はまだ、止むことはない。

第二話

ジェットコースターのレールにもたれかかるように傾き、夕焼けを受ける観覧車の巨大な車輪。

各所にて行動不能になった戦車たちを回収する連盟のトレーラーが、まるで本当の戦争に晒された市街地の如く瓦礫の転がる大通りを進んでゆく。

北海道戦車道演習場・中央広場。大洗女子学園の制服を着た幾人も少女が、そして大洗の増援として加わった各校の女生徒たちが歓喜の表情で牽引されてきたボロボロのIV号戦車を囲んでいる。

そこに現れるクマの姿を模した電動カート。乗っているのは大学選抜で隊長を務めた島田愛里寿。IV号戦車の前にいた少女、西住みほの手前でクマは止まり、愛里寿が降りる。

愛里寿はポケットを探ると小さなクマのぬいぐるみを取り出した。体の至る所に包帯を巻きつけ、絆創膏を貼られた痛々しいクマ。

「……私からの勲章よ」

「ありがとう、大切にするね」

みほは笑顔でそれを受け取った。

「ふう……次からは、わだかまりの無い試合にしたいものね」

「全くね……色々な意味で」

そんな二人の隊長の様子を観客席から見守っていた島田千代の言葉に西住しほは答えた。文科省の思惑に巻き込まれた形のこの試合の裏舞台は徹頭徹尾酷いものだった。だがそれだけでなく、もう一つのわだかまりの可能性をこの試合は抱えていた。

今、試合を終えて友情を育んでいるあの二人は自分たちが同じ男性と身体を重ねている事を知らないだろう。それを知った時、彼女らは今感じている想いのまま絆を築けるだろうか。

複雑な思いを抱えつつ、しほは席を立った。千代が扇子を手にこちらを見る。

「和明君のところへ行くの?」

「流石に合わせる顔が無いわ。世話は菊代に任せてあるから、私は先

に熊本に帰ります」

「……随分と冷たいのね。今の試合を観ている、貴女も疼いているんじゃないの?」

「だからよ」

激しい試合であった。観ているだけで血が滾る試合であった。実際、今のしほの中には熱く滾る気持ちが湧き上がりつつある。

今の状態で和明に会えば、我慢しようと思っけていてもきつと自分は彼を求めてしまおうだろう。そして彼は——例え身体が疲労の極みであらうとも、それを受け入れようとするだろう。

手前勝手な理由で気絶させてしまったその日に和明に更に求める事を恥と思える程度には、しほは自分を律する事が出来ていた。

「貴女こそどうなの、千代? 疼いているなら、今にでも逢いに行きたいんじゃないの?」

「そうしたい所だけど……すぐに大学選抜のメンバーを集めて反省会をしないといけないの。特に中盤、23対9まで持っけていかれたのはいただけないわね。愛里寿抜きであそこまで脆くなるとは思わなかつたから、ちよつと強めに叱らないと」

『強め』ね……泣き出す子が出ない事を祈つてるわ」

それ以上の会話を拒否するようにしほは身体を翻す。その背中に千代の声が投げかけられた。

「彼の大学、あと数日で後期の授業が始まるわ。遠くへの呼び出しは難しくなる」

「知つてるわ。だから……『あの場所』にしましょう」

振り返らずにしほは答え、客席を降りてゆく。

残暑の暑さを残す夕日が、北海道の平野へと沈もうとしていた。

「ええ、はい、はい……はい、畏まりました。ではお帰りは、はい……承知しました、家元。お氣をつけて」

通話を終えた菊代は携帯を袖に戻すと、布団から身を起こしてテレビの戦車道チャンネルを見ていた和明に言った。

「家元は都合で先にお帰りになられるそうです。篠原様のお帰りにつ

いてはわたくしがお世話する事になりましたので、よろしくお願います」

「え？ いや、でも、出店の片づけや横浜の店への輸送とかで、俺も大
学選抜艦に乗らないと」

「それについては店長様からご許可をいただいております。『店のシ
フトも都合をつけるから、身体を休めてゆっくり帰ってきて』との事
でした」

「……面倒かけさせてますね、俺」

「こういう場合、お言葉に甘えておくべきです。下手に頑張ろうとす
れば相手に余計に心配をかけるだけですから」

気まずさを覚える和明に菊代がさりりと言う。

「さて……みほ様たちも無事に勝たれたようですし、ご夕食と致しま
しょう」

空気を切り替えるように菊代は言うのと、しほからの電話を受ける前
に持ってきていた小さな土鍋を盆ごと布団の横に置いた。調理場を
借りて菊代が作ってくれた卵入りの烏雑炊である。土鍋の蓋を取る
と、大量の湯気と共に何とも良い匂いが漂ってくる。まだ疲労の取れ
切っていない和明でも食欲をそそられる程だ。

「ありがとうございます。それじゃ、いただきま……」

「いえ、篠原様。お待ちください」

食膳の合掌を行い、早速和明は陶製のレンゲに手を伸ばして雑炊を
食べようとした。しかしそこで菊代の制止が入る。

「えっ？」

どうしたのかと和明が一旦止まると、菊代はそのレンゲを持ち雑炊
を掬い、吹いて少し冷ますとそれを和明に差し出した。

「ふう、ふう……はい、あーんしてください」

「い、いや、菊代さん！ 大丈夫ですから……」

「篠原様、『自分の身体は自分が一番知っている』と申しますが、あれ
は嘘でございませう。まだ篠原様は安静の状態です。なのでお食事の
補助もさせていただければと」

流石に二十歳近くになつて「あーん」は恥ずかしい。断ろうとした

和明だったが、菊代は雑炊をよそったレンゲをこちらに譲るつもりはないようだ。

強引に断るには実際ここまで看病してくれた負い目もある。和明はしばらく迷ったのち、おずおずと口を開けた。

「あ……あーん……」

「結構でございませす。それでは……はい」

「んっ、んむっ……」

傾けられたレンゲから程よい温かさに調節された雑炊が流れ込んでくる。ダシも上手く取っているのだろう。野菜と卵と鶏肉の旨味が調和した濃厚な味わいが口腔内に広がり、そのまま体へと吸収されてゆくのを感じる。

「はい、もう一度。あーん」

「あ、あーん」

もうひと掬い。先ほどよりは抵抗なく和明は口を開け、再び雑炊を口に含む。レンゲを口に運ぶ菊代はどこか嬉しそうで、戸惑う和明の反応を楽しんでいるようにも思える。

どうも菊代は千代などとは別の方向でこちらを翻弄するのが好きなのかもしれない。そんな事を思いつつ、和明は口を開けた。

「はい、あー……」

「……えーつと、お邪魔だったかな？」

その時、菊代の後ろから別の少女の声が飛んできた。

「んっ？」

雑炊を口に含んだまま和明はそちらを見た。休憩室のドアが開いており、ツインテール髪の小柄な少女、角谷杏が気まずそうに立っており、その後ろにはみほとまほが居る。

「どーも、一応ノックはしたんだけどねえ」

「ど、どうも、篠原さん……」

「……またですか、菊代さん。そうやって和明さんをからかうのは止めてあげてください」

みほは遠慮がちに挨拶を、まほは額に指をあて困ったようにそれぞれ言った。雑炊を呑み込んで和明が返す。

「か、からかう？」

「菊代さんは他人に雑炊やお粥を食べさせる時、いつも『あーん』をさせて反応を楽しみます。私やみほも病気の度にそれをやられました」

「あら、わたくしとした事が……ノックを聞き損じておりましたか。これは失礼致しました」

まほの言葉を軽く受け流し、菊代はスツと身を引くと盆を手に部屋の隅へと下がった。

改めて和明は杏たちを寝たままの姿勢で見上げて言った。

「お疲れ様。勝ったのは菊代さんから聞いたよ」

「い、いいえー！ 勝ったって言っても本当にギリギリで……」

「それでも、勝ちが勝ちだ」

照れつつ謙遜するみほにまほが言う。

「それで……どうしたんだい？ 撤収とかで忙しいんじゃない？」

「まあ、そうなんだけど……その前に、筋は通しておこうと思ってね」
和明の問いかけに答えたのは杏だった。おもむろに正座すると、みほやまほもそれに続く。

「え？」

「……篠原さん。正直、家元の話聞いても貴方に対しては半信半疑でした」

杏は普段の軽い笑顔でなく真剣な表情でそういうと前に手をつき、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。貴方が西住さんを治してくれたお陰で、大洗は守られました」

「いつ、いやー！ 頭を上げてくれよ！ 俺はそんな……」

「いいえ、篠原さんが居なければ、私は多分集中できずに負けていたと思います。そうなったら、友達のみんなとも別れ別れになってました。私からもお礼を言わせてください」

仰々しく礼をする杏に慌てて和明が言うが、続けてみほも礼と共に同様に頭を下げる。

「そんなこと……だって、俺がしたことと言ったら……」

「それで、私達は救われました。私自身の事も含めて、和明さんは我々の恩人です」

どう返事して良いか分からなくなった和明に対し、更に続けてまほが頭を下げた。

窮して部屋の隅の菊代に助けを求めようと視線を送るが、彼女は袖で口元を隠して笑いを堪えていた。和明の反応が面白いようだ。

どうやら、これは和明がそれっぽいな事を言わなければ収まらなさそうだ。柄じゃないなと思いつつも、和明は顔を引き締めて言った。

「いや……俺がやった事は、みほさんやまほさんが実力を出せるように手助けしただけさ。やっぱり、凄いのは勝つだけの実力を持っているたみほさんだよ」

「そ、そんなことは……」

「それに、その……気絶こそしたけど、俺も、良い経験をさせて貰った訳だし」

「……………」

寝ぼけながら和明に口淫したことを思い出したのか、みほの顔が急に赤くなる。

言葉が出なくなったみほをフォローするようにまほが言った。

「和明さん、横浜に戻られた頃にまた連絡させてください。みほが一緒にいきたい場所があるそうです」

「ああ、喜んで」

「……角谷様、篠原様もまだ疲れが取れ切っておりませんので、この辺りで」

「はい、お邪魔しました」

そろそろ水の入れどころと踏んだ菊代が杏に声をかける。杏も長居する気も無かったのか、それを受けると何処からか薄い袋を取り出し和明の前に置いた。

「……干し芋？」

「ウチの名物のひとつです。大洗に寄る事があったら是非ウチにも来てください。特製の鮫鯨鍋をご馳走しますから……それじゃ西住ちゃん、帰ろうか、大洗に」

「はっ……はい！」

「菊代さん、私は飛行船で一度黒森峰に戻ります。和明さんの事、よろしくお願ひします」

「はい、お氣をつけて」

杏が立ち上がり、みほが慌てて続く。まほは菊代に一言伝え、和明に改めて一礼してから二人を追う。

三人が去り、再び休憩室内は和明と菊代だけになった。

「さて……それでは篠原様、改めてお食事を」

「自分で食べます」

再びレンゲを手に雑炊を掬おうとした菊代に、和明は今度はきっぱりと断った。

「申し訳ありません、母上」

「二人だけの時に『母上』はいいわ。それに、大学選抜としての面子こそ潰れはしたけど島田流としては貴女単騎で十数両を撃破し、西住姉妹を相手に二対一で立ち回り西住みほには白旗を上げさせた。『大学選抜の一般メンバーの実力があれば勝っていた』という程度には島田流の強さは示したと言えるわ……皆に示すためとはいえ、さっきの全体会では厳しく言つてごめんなさいね」

大学選抜演習艦・島田千代専用執務室。精巧な彫刻が施された机を挟み島田千代と島田愛里寿は言葉を交わしていた。大学選抜としての全体の反省会を終え、

背筋を伸ばし、まっすぐに千代に顔を向けてこそいるが愛里寿の表情は暗い。そこに浮かぶのは不安と落胆だ。

そんな愛里寿の表情を晴らすような柔らかい口調で千代は更に言った。

「だから愛里寿、礼の約束の件については了承します」

「っ!? それじゃ……」

「ええ。ボコモミュージアムへの諸経費の出資、させてもらおうわ」

「……ありがとうございます、お母様」

ぱつと愛里寿の表情が明るくなり、千代は微笑む。娘の笑顔のため

にたかだか数億。安い買い物である。

「そして、そこまで愛里寿が実力を発揮できたのも和明君のお陰……彼にもお礼を言わないといけないわね」

「そういえばお母様。和明さんが向こうで体調を崩したと聞きました。艦にも医務室はありますが、乗れないくらい酷かったの？」

「一時的にね……今は、もう体調を戻したそうよ」

安心したのか、愛里寿は日頃の千代に話しかける時の少し砕けた口調で問いかける。千代は詳しい事情を愛里寿に話してはいない。只でさえ敗北で落ち込んでいる娘に「西住姉妹の二人とも和明に抱かれて調子を戻した」とわざわざ言つて更に曇らせる必要はない。千代は愛里寿に言った。

「ねえ、愛里寿。和明君の事は好き？」

「その事で、私からもお母様に聞きたいことが」

「何かしら？」

愛里寿の問いかけに、千代は意外に思いつつも表面上は何気なく聞き返す。

自分の感情をどう表現すれば良いか測りかねているのだろう。愛里寿は少し考えてから言った。

「私は和明さんとは数度会っただけで、和明さんの好きな食べ物も趣味も、何も知りません。でも……」

「ここには私達だけよ。恥ずかしがらず言いなさい、愛里寿」

「……今、私は欲求不満などを感じていません。先の戦いで自分の全てを出し切ったと感じています。それでも……和明さんに抱かれたい。そう感じています」

愛里寿の頬に朱が差す。千代は無言で娘の次の言葉を待つ。

「……………」

「お母様、私のこの感情は『好き』と言っているの？ それとも、単に欲情しているだけ？」

「……それは、とても難しい質問ね」

机の上で指を組み、千代は言った。

「プラトニッククラブなんて言葉もあるけど、基本的に恋愛と肉欲は生

物の本能的に切り離せない。好きだから抱かれない。また逆に、相手が性的に魅力的だから好きになる。これはどちらも間違っていないわ」

「じゃあ、私の場合は？」

「好きになつてゆく過程で交際し、時間を共有することで色々な事が見えてくる……その人のもっと良い所も、あるいは悪い所もね。その人をもっと好きになる時もあるれば、嫌いになってしまう時もある……愛里寿、まだ貴女はその感情が『好き』かどうか判別できない場所に居るわ。もっと和明君と接して、時間をかけて理解してゆきなさい」

「分かりました。ありがとうございます、お母様」

まあ、前の処女より先に尻穴を貫かれた後で好きも嫌いも無いものではあるのだけど。千代は内心でそう付け加える。

しかし、愛里寿が和明に好意を抱いているのであればこちらの考えとしても好都合ではある。千代は組んだ指を解き、愛里寿に微笑んだ。

「ねえ、愛里寿。相談があるのだけど……」

窓の外で鈴虫が鳴いている。

「ううん……」

常夜灯の弱い光が照らす休憩室内。和明は唸りつつ寝返りを打った。

「ううん……」

暑い訳ではない。八月末の北海道の最低気温は横浜の秋のそれに近く、むしろ涼しさを覚える程だ。

「……うう」

何度か寝返りを打ってみたが、どうにも意識が眠りに落ちてくれない。おそらくは昼間に眠りすぎたためだろう。

体のだるさは残っているが眠ることも出来ない、何とも困った状況である。一人ならば抜いてスッキリして改めて寝る事も出来ようが、今は横で菊代も寝ている。「お休みの間に万が一があつてはいけませんから」と言つて布団を持つてきて一緒に寝ることになったのだ。

まあそうでなくても未だに和明の肉棒は本調子にはほど遠く、独りだつたとしても勃たせて抜けたかは怪しいのだが。

そんな事を考えていると、ふと背中に声をかけられる。

「……篠原様、眠れないのですか？」

「あ……起こしちゃいました？ 大丈夫です、そのうち眠くなると思いますから」

どうやら唸り声で菊代を起こしてしまつたようだ。申し訳なく思いつつ、和明は安心させようと答える。

「……………」

菊代は答えない。

「(……………ん?)」

もぞもぞと背後で菊代が動く気配がする。和明の被つていた毛布が持ち上げられ、彼女の体温が急に近くなつたように感じる。

和明は驚き、菊代の方に向き直ろうとした。

「ちよ、菊代さ……んぷっ!？」

寝たまま振り向いた和明の顔が柔らかな双丘に挟まれる。同時に頭に手を置かれ、優しく髪を撫でられる。

菊代は寝間着も和風の着流しのような服を着て寝ていたが、胸元を緩め、そこに和明の顔を迎え入れたようだった。

「よし、よし……………」

抱きつくでもなく、かといってただ身を寄せているだけでもない。菊代はこちらが苦しくない程度に抱き寄せ、頭を撫でている。

寝る前にベビーパウダーを叩いていたのだろうか。サラツとした肌の感触と共に甘い匂いが和明の鼻孔をくすぐる。

柔らかな乳房であった。穏やかな弾力が和明の頬を押し返しながらも、全体としてはビーズクッションをより柔軟にしたような感触で頭全体を枕のように包んでいる。大きさも相当のはずだ。

「昔、お嬢様がたの寝つきが悪い日にはいつもこうしていました。落ち着かれるまで、少しこうしていますね」

「菊代、さん……………」

「ンツ……………」

彼女の谷間に包まれながら息を吸い、吐く。菊代の口から吐息が漏れる。

本来ならば興奮すべき場面なのだろうが、不思議なことに和明の中からは性欲が溢れることは無かった。

菊代の撫でる動きは愛撫でなく疝の虫を起こした子供をあやすそれで、また胸の谷間に和明の顔を埋めさせつつも、それ以上の行為を行う気配も無かった。

「(ああ……そうか)」

その時、和明は何となくだが理解した。

菊代は——和明を「男性」として意識していない。

和明の肉棒に触れて勃起の具合を確認した時も彼女は和明に快感を与えようとかでなく、あくまで調子を確かめるためにやっていた。おそらくは尿かぶれを起こした子供の性器を確認するような感覚だったのだろう。菊代にとって、まだ自分は性の対象ではない、世間擦れもしていない「子供」なのだ。

同時に和明は自分の意識が眠りに落ち始めている事に気づいた。頭に靄がかかり、瞼が重くなってゆくのが分かる。

「……菊代さん」

「どうしました?」

「菊代さん、は、長いん、ですか?」

半分眠った意識から出た途切れ途切れの、言葉足らずの質問。しかし菊代は理解できたのか小声で答えた。

「ええ。みほ様やまほ様のお生れになる前から家元にはお仕えしています。お嬢様がたのオムツもお取替えしていました」

「そう、です、か……なんで、しほさん、に?」

「わたくしも拙いながら若い頃は戦車道を修めておりまして。そこで今の家元にお会いして……この方の支えになりたい、そう思っています」

「それで、その……んっ、相手、探しも、です……か」

いよいよ八割くらいの意識が眠りに落ちてきた。

「はい……ですから、わたくしとしても篠原様には感謝しております。

篠原様と交わるようになってからの家元は、わたくしから見ても若返ったと見紛う程です」

「あり、が……」

和明の息が吹きかけられたことで菊代の谷間は湿気を含み、甘い匂いがより強くなる。もう九割は眠りの中だ。

「……お休みなさいませ、篠原様」

菊代の子守唄に、和明は今度こそ眠りについた。

翌朝、和明が目覚めた時には既に菊代は起床しており、朝食の支度までができていた。

会場の撤収も完了し、宿舎も次の利用までは閉鎖されるとの事で慌ただしく朝食を摂り終わると菊代は窓の外を見て言った。

「……来たようですね。篠原様、では二時間ほどで横浜までお送り致します」

「二時間って事は……」

「はい、アレでございませ」

近づくヘリの音で和明が察すると、菊代は微笑んで上空から接近する軍用輸送ヘリを見上げた。

そこからは瞬く間に横浜へと帰還し——数日は何事もなく過ぎた。

店長の厚意で一日、二日は休ませて貰ったが、店長の腰の調子も悪い中で和明は貴重な男手である。仕事に復帰し、いつもの生活リズムになってゆく中で体調も戻り、起床時に朝勃ちする程度には回復してきた。

『さて、次の話題は先日北海道で行われた大学選抜対大洗女子学園のプロリーグ想定戦について！ リスナーの皆様からもこの試合についての感想を色々貰ってるわ。まずは一人目、ラジオネーム「紅茶の園のダーズリンティール」さんからのお便り……』

店内に流れるラジオ番組「蝶野が斬る！」でも先日の試合について盛り上がっている。この試合に自分が（肉体的な意味で）深く関わっていた実感が未だに沸かない。

「ふう……店長、お疲れ様でした」

「はい、お疲れ」

店長はいつも通りだ。本番でダウンした事を責めるでもなく笑って許し、今まで通りに働かせて貰っている。

その日のシフトを終え、和明は鞆を肩にかける。

「……ん？」

その時、マナーモードにしていた携帯が震えた。画面に表示された名前は「島田千代」。

「……………」

呼吸を整え、和明は電話を取る。

「はい、篠原です」

『島田です。和明君、ご無沙汰して申し訳ないわね。体調を崩したと聞いたけど、その後は大丈夫？』

「ええ、お陰様で。こちらこそ心配をかけてすみません」

表面上は普通の挨拶。

しかし、千代は初手から和明の事を名前で呼んだ。この意味は——
『それなら良かったわ。それで和明君、もし時間が空いていればなんだけど……この後、会えない？』

「大丈夫です、特に予定も無いので。えっと……何処に行けばいいですか？」

『……「私たちの初めての場所」と言えば分かるかしら？』

千代の声に艶が増す。

「……はい、分かります」

『良かった。それじゃ、待ってるわね』

おそらくは其処にしほも居るだろう。そして、二人とも和明に対して何らかの話があるはずだ。

自分にとっても初体験の場所である高級ホテル。そこへ続く道に踏み出しながら和明はごくりと喉を鳴らした。

第三話

豪華なロビーを抜け、エレベーターに入る。外周がガラスになって
いるエレベーターからは残暑の夕日に照らされる横浜のベイサイド
の景色が見下ろせる。この街の夜はこれからだ。

やがてエレベーターは最上階付近で止まり、音もなくドアが開く。
部屋を探す必要はない。このホテルの宿泊料は全体的に高めだが、そ
の中でも本当のVIP用は一室だけだ。廊下の絨毯さえも下層階の
それより上質なのか、踏み出す足をふわりと受け止める。

「スウ……ハア……」

自然と手に汗がにじみ、緊張から鼓動が速くなる。和明は深呼吸を
行い、それを少しでも鎮めようとする。

自分の考えは纏まっている。言うべきことも定まっている。あと
はそれを、あの二人の女傑の前に言うだけの度胸と行動力、そして決
意が自分にあるかどうかだ。

廊下の最奥、他の客室との格の違いを示す花の意匠が施されたド
ア。息を吐き、ノックする。

「……………」

数秒の沈黙。奥から人の気配が近づくのが分かる。鍵の開けられ
る音。

「すみません、遅くなりました」

「お疲れ様、急がせちゃったわね」

そんな穏やかな声と共に島田千代が顔を覗かせた。流石に室内で
ベレーは被っていないが、最初に会った時の葡萄酒色のドレス姿。

彼女に導かれるまま室内に入る。個人どころか大家族が使用でき
そうな程の広さのフロアには映画サイズの大型プロジェクター、シン
プルな作りが逆に高級感を醸し出すダブルベッド、見ただけで体が沈
み込みそうな程の柔らかさが伺えるソファ、オーク材のテーブル等が
視界に入る。

全て和明には見覚えがあった。あの日——しほや千代と初めて会
い、そしてこの部屋でしほと初めて交わった。その時のままだ。

「悪いわね、仕事終わりに」

やはり最初に会った時と同じ、黒の男性用スーツに白いワイシャツという化粧気の無い姿。

ソファに腰かけていた西住しほは顔を上げ、和明に言った。

「いえ、こつちこそ……」

挨拶を返そうとした和明はその途中で言葉を途切らせた。

一見、しほはいつものクールな無表情のように見える。しかし——その瞳には強い緊張と決意が籠っていた。

「(こりや……本当に腹を括らないとな)」

どうやら彼女らもこの場に何らかの、おそらくは今後の和明に関する提案を用意してきているのだろう。それを理解し、和明は気持ちを引き締める。

そんな場の空気を緩めるように千代が言った。

「和明君、夕食まだよね？ ルームサービスを取るから、何か好きなのを言ってみて？」

「え？ いえ、特に何がとかは……」

「それじゃあ中華にして、大皿を皆で分けて食べましょうか。この中華は本当に美味しいの。しほもそれでいい？」

「……任せるわ」

しほも場に流れる空気を気にしていたのだろう。小さく息を吐き、千代に言う。

「分かったわ。組み合わせはどうしようかしら、肉まん、小籠包、フカヒレ鱻の煮物、海老のチリソース煮……ご飯ものも欲しいわね……」

具体的なオーダーを考えつつ、千代は壁に掛けられた電話機へと向かう。和明はソファに座り、改めてしほと向き合った。考えてみれば彼女と会うのは北海道での西住みほ、西住まほも交えた4Pで気絶して以来だ。

「……北海道では、本当にすまなかつたわね」

和明とまっすぐに視線を合わせ、しほはそう言う頭を深々と下げた。

「い、いいえ！ しほさん、頭を上げてください。アレは俺が自己管理

できてなかっただけで……」

どうも最近は女性に頭を下げられる事が多い気がする。テーブルに頭を擦りつける勢いのしほに和明は慌てて言った。頭を上げ、しほが言う。

「それでも、娘の事ばかり考えて和明くんの事を考えていなかったのは事実よ。反省してもし足りないわ」

「そう言ってくれるだけで十分ですよ。もう調子だつて戻りましたし」

「それなら……良いのだけど」

どうやら相当にしほは北海道で自分を気絶させるまで疲弊させた事を気にしているようだ。彼女の心配を取り払うように和明は肩を回して回復した事を示した。

「こつちこそ、その後の面倒を見てくれて助かりましたよ。菊代さんには食事の世話もしてもらいましたし」

「それだけど、菊代、和明くんに口を開けさせて食べさせようとした？」

「しました。まほさんから聞いたんですけど、そちらで病気になった時には誰にでもやってるとか」

「ええ。どうもあれが好きみたいで、私が病気になった時も困らせられたわ」

「ははっ。それ、筋金入りですね……」

しほに「あーん」をさせようとする菊代と、それを無表情に拒絶するしほの姿が頭に浮かぶ。和明は思わず顔をほころばせて言った。

その後は他愛ない話が続いた。北海道での試合内容、和明の仕事のこと、戦車道連盟が今冬に大規模なトーナメントを予定しており、しほも千代も最近は大忙しな事など。

そうしている内にドアがノックされ、ルームサービスのワゴンが運ばれてきた。ラップをかけられた幾つかの大皿に、重ねられた小皿、箸、スプーン等がテーブルに乗せられ、ラップが取られると湯気と共に食欲をそそる香りが立ち昇る。昼から何も食べていなかった和明の腹が思わずぐうと鳴り、見ているだけで唾液が沸いてきた。

「さて、それじゃ食べましょうか」

「は、はい、いただきます！」

「いただきます。和明くん、私たちは軽く食べてるから遠慮せず食べなさい」

向かい合っていた和明としほの横に千代が座り、三人は食事を始めた。

近所に横浜中華街があるとはいえ、学生である和明が知る中華料理の味は庶民的な価格の店の700円のレバニラ定食かホイコーロー定食。あとは精々レトルトの中華惣菜くらいだ。炒飯の具のひとつ取ってもそれらとは違うのが分かる。最初は二人の家元の手前がつかず食べようと思っていた和明だったが、空腹と料理の旨さが自然と箸を早めさせる。

「ふふつ、いい食べっぷりね。美味しい？」

「いや、本当に美味しいです！ 千代さん、これって何ですか？」

「フカヒレよ、知らない？」

「スープに入ってる、糸みたいなのしか……」

食事の合間の会話も弾み、和やかな夕食が行われる。窓から見える横浜の夕焼けは次第に夜景へと変わり、無数のネオンが眼下で瞬く。

——しかし、その空気の底に一定の緊張感が漂っている事が和明にも感じられた。

言葉少なに箸を進めるしほ、にこやかに微笑みつつ時折話を挟む千代。どちらもタイミングを計っているのが分かる。

とはいえ、流石に食事中にいきなり話を始める事は二人ともするつもりは無いようだ。とりあえずは目の前の飯を最大限に味わおう。和明はそう決め、エビチリを口に含んだ。甘辛いソースと海老の濃厚な味わいがとても合っている。

「和明くん、お茶のお替りは？」

「あ、いただきます」

やがてしほが最初に箸を置き、続いて千代が食事を終えた。和明は小皿に盛られた惣菜を順に片づけ、デザートは杏仁豆腐——コンビニの杏仁しか知らない和明にとっては衝撃的な味だった——を食べ終

えると食後の合掌を行った。

「ご馳走様でした！」

「いい食べっぷりだったわ。器を下げに来て貰うから、ちよつと寛くわんいでいて」

そう言うのと千代は立ち上がり、再びフロントへの電話に向かう。ソファには和明としほが残された。

「ふう……」

「……ねえ、和明くん」

食後の茶を飲んでひと息つく和明に、しほがゆっくりと声をかけてきた。

「はい、何でしょうか？」

「和明くんの通っている大学、後期はいつ頃から始まるの？」

「あと二、三日つてところですね。一年で出来るだけ単位を取らないといけないんで、割と忙しくなりそうです」

「そう、大変ね……」

どこかそわそわとした仕草でしほが言う。やがて、しほは何かを決めたように息を吸うと和明を見た。

「和明くん。それなんだけど……」

「そこまで」

その時、千代の声が二人の間に割って入った。振り返ると、戻ってきていた彼女がもと居たソファへと座る。

「ちよつと焦りすぎよ、しほ。その事は片づけが終わって、落ち着いてからって約束だったでしょう？」

「……分かってるわ」

窘める千代の言葉に視線を逸らしつつしほが言い返す。

先ほどまでとは打って変わった沈黙の中、和明も何も言えないでいた。暫くするとルームサービスが器の回収に訪れ、場の空気にも表情を変えずワゴンに皿を乗せて退出してゆく。

再び部屋は三人だけになったが、静寂は暫く続いた。

「……和明君、しほはどこまで話をしたの？」

「え？ い、いえ。まだ何も……俺の大学の後期が始まるのがいつ頃

かつて話をしただけで……」

口火を切ったのは千代だった。彼女の問いかけに素直に答える。

千代は頷き、膝を正すと和明に言った。

「そう、それなら良かったわ。和明君自身も分かっていると思うけど、大学が始まれば和明君と私たちは今のようには会えなくなる……ただ、私たちとしては貴男との関係をここで終わらせるには惜しいと考えているの」

「……それは、俺も同じです」

和明は素直に答える。その気持ちは嘘ではない。

「そう言ってくれると嬉しいわね。そこで、今日は私たちの『提案』を聞いてもらいたい」

「提案、ですか？」

「ええ。ただしほと私とでどうにも意見が合わなくてね……和明君に、それを選んで欲しいのよ。もちろん、どちらも断るという選択肢もあるわ」

ちらりと千代はしほを見た。膝に手を置き、しほは呼吸を整えているようだ。彼女の言葉を受け止めようと、和明は彼女に向き直った。

「それがさつき言おうとした事なんですか、しほさん？」

「ええ。和明くん……端的に言うわ。大学を辞めて西住家で働くつもりは無い？」

「!?」

予想していた以上に強引な提案が飛び出してきた。驚く和明の反応を予期していたのか、しほは動揺せず言葉を続ける。

「日本最大の流派として西住流、また西住家に直接雇われている者は多いわ。表向き、和明くんにはそれに連なる者として西住家に住み込みで務めてもらいたい。当然だけど食事は出すし給金も払うわ」

「表向き……って事は」

「そう、実際の務めは私やまほの相手。出張先や、あるいは本宅で私たちの欲求不満を解消させるのが貴方の仕事になるわ。場合によっては、一度に二人とも相手して貰う場合も出てくると思う」

「……………」

——もしこれが西住しほととの初対面で今までの彼女との経緯が無ければ、和明は彼女が言葉を言い終える前に頷き、相手の気分が変わる前に九州の西住邸に飛んでいただろう。

要は三食豪邸給料付きで表向きは適当に仕事をして、実質的にしほやまほとセックスし放題、しかも3P付きという環境をしほは与えようとしているのだ。事実上は西住家の女性に「飼われる」形となるため男の尊厳というものを投げ捨てる形にはなるが、捨てるものに見合うだけの待遇である。

「何ていうか……その、しほさんらしい考えだと思えます」

何とも強引かつ無茶苦茶な話であったが、それを和明は実に彼女らしいと感じた。「撃てば必中 守りは固く 進む姿は乱れ無し 鉄の掟 鋼の心」というのが西住流を示す言葉だそうだが、その言葉に恥じない豪快な突撃を思わせる提案であった。

しほの提案を事前に聞いていたのだろう。彼女が言い終わると千代は呆れ顔で言った。

「私は当然反対したわ。結局それって、和明君を西住家のペットにするような考えだもの」

「……そんなつもりは無いわ」

「つもりは無くても、実質そうなら同じことよ」

しほの反論に千代は鋭く言葉を返す。どうやら次は千代の提案を聞く番らしい。和明は千代に身体を向けた。

「しほさんの考えは分かりました。それじゃ、千代さんは？」

「私の考えはしほに比べればスマートよ。和明君に大学を辞めてもらう必要も無いし、今の生活を壊すこともない」

「……？」

「和明君に、うちの愛里寿と婚約して貰うの」

「はい!？」

こっちはこっちで予想を超えた話が飛び出してきた。さらりと口にした千代の提案に和明は思わず尋ねた。

「いやいや、婚約って!?! それこそ愛里寿ちゃんを俺の都合だけで勝手に……」

「愛里寿にはこの話は既にしているわ。『和明さんなら喜んで』だそうよ」

「……！」

「むしろうちの娘が嫌がらないって事は、和明君の方が分かっているのではないかしら？」

「うっ……！」

千代の言葉に、演習艦のトイレ内で尻穴を肉棒で抉られ喘ぐ愛里寿の姿が思い起こされる。確かに否定はできない。千代は更に言葉を続けた。

「とはいえ愛里寿もまだ13歳だから、現時点では内々の話になるわね。なので和明君には愛里寿が16歳になるまでは『戦車道ショップで偶然知り合った大学生』を演じて貰うわ。立場も年齢も違う二人が戦車道を通して知り合い、そして愛し合うに至り婚約する。ドラマチックだと思わない？」

「そうは言いますけど、只のバイト学生と島田流の次期家元じゃあ釣り合わないんじゃない？」

「……そこだけは、ちよつと和明君に頑張つて貰うことになるわね。島田流の影響下の企業を紹介はできるけど、其処で相応の働きはしてもらおう事になる」

しほの提案より不利な部分も隠さず千代は言う。内心では緊張もあるのかもしれないが、それを表に出さないのは流石は宣伝力や渉外力では西住流に勝る島田流家元の貫禄というところか。

「そしてその中で愛里寿の、また私の相手もして貰いたいと思ってる。これが私の提案」

そこまで言うのと千代は口を閉じ、和明の反応を待った。

こちらにも実に魅力的な提案であった。島田流後継者の夫としての立場が就職と共に転がり込んでくる上に愛里寿と千代の美人母娘を今後も相手にすることが出来ると言うのだ。あくまで浮気であるしほや千代と異なり、将来の妻として愛里寿と公に交際できるのも大きい。こちらにも搦め手から攻めてくる、忍者戦法と呼ばれる島田流らしい提案だと和明は思った。

「…………参ったなあ」

正直、心が揺れた。

和明がこの場で言おうとしていた考えより両者の提案は遥かに魅力的で、得るものがあり、蠱惑的だった。話を聞いただけで今まで和明が経験してきた彼女らの痴態が思い浮かび、股間が疼く。

対して和明の提案と言えば傍から見れば自己満足の枠を出ない、手前勝手な話だ。

「でも…………な」

再び心を引き締める。しほの案でも、また千代の案でも彼女らと並ぶことは出来ない。

和明は自分に向けられる二人の視線を受けながら口を開いた。

「…………お一人の話は分かりました。どちらも魅力的で、俺なんかには勿体ない話だと思います」

「……………」

「……………」

しほ、千代、二人とも無言で和明の話を聞いている。

「それで、俺の答えなんですけど…………すみません、どっちも遠慮させてください」

「…………!?!」

「ここで関係を終わらせる。そういう解釈で良いのかしら?」

しほの膝に置かれた手に力が籠る。一方の千代は形良い顎に指をあて、和明の真意を探るように尋ねる。

全てを見通すような千代の瞳を正面から見据え、和明は言った。

「俺は…………しほさんや千代さんと出会って、今までの人生で一番濃い夏を送れました。その中でお二人だけじゃなく、まほさんやみほさん、愛里寿ちゃん…………何人もの女性を知り、戦車道の世界で二人がどれだけ大きい存在なのかも知る事が出来ました」

「和明くん、だったら…………!」

食い下がろうとするしほの言葉を待たず、和明は言葉を続けた。

「そして…………自分がまだ只の学生で、貴女達と比べて余りに小さい存在だって事を知りました」

「……つまり？」

千代が静かに聞く。

「俺は……しほさん、千代さん、貴女達と並んで立てる男になりたい、そう思います。コレがデカいだけの『子供』でなく、貴女たちと対等に浮気できる『大人』に」

自分の股間を指さし、和明は答えた。

千代は小さくため息をつく。和明に更に尋ねた。

「目標としては立派だけど、具体的な行動が伴わなければそれは只の願望に過ぎないわ。戦車道連盟は通常、男性の新卒採用はしていない。何か考えはあるの？」

「はい、知っています。それなんですけど……ウチの店長が戦車道連盟の職員さんと繋がりがあって、関東圏で行われる試合のボランティアスタッフとして一年生の内から参加させてもらおう事になっています」

「……」

「戦車道連盟の男性職員の多くは整備士や現場スタッフなどの、それまで戦車道に深く関わってきた方が推薦で採用されています。まずそこから就職して……上を目指します」

「何年で？」

「……大学卒業して二年、そこまでに何らかの役職を得ます。それで駄目なら俺の事は忘れて貰って構いませんし、俺よりもっと良い相手が出てきたなら、それはそれで忘れてください」

既に行動は起こしている。この秋冬は本当に忙しくなるだろう。

千代の短い問いかけに和明は答えた。

数秒、和明の瞳を見つめていた千代はその表情を緩め、笑った。

「……ふふっ」

「千代？」

「私たちの負けね。しほ、私も貴女も和明君の事を助けが必要な『子供』だと思って提案をした……でも、彼は独りの男性として『大人』になろうとしている。それを止める権利は私たちには無いわ」

「……」

しほの顔に僅かの寂しさが浮かぶ。和明はしほに言った。

「すみません、しほさん……少しだけ、待っていてください」

「和明くん……」

彼女と激しく交わった夏の嵐の一夜を思い出す。西住しほ、彼女は世間が持つイメージほど強い女性ではない。娘の事で悩み、時として戸惑い、温もりを求める一人の女性なのだ。

だが、今の和明には世間的にも能力的にも彼女を支えるだけの強さは無い。

だからこそ、今は少しだけ別れるのだ。次に会う時に、本当の意味で彼女に相応しい男になるために。

和明の言葉にしほは瞳を閉じ——少しだけ上に顔を向け——再び目を開けた。

「私がお婆さんになる前に、上がってきてくれる?」

「絶対に、間に合わせます」

根拠は無い。不安もある。しかし和明は断言する。

しほはそこでようやく口元に笑みを見せた。

「……分かったわ。暫くのお別れね」

「寂しくなるけど、仕方ないわね……さて、それじゃあしほ、机のそっちを持ってくれる?」

しほが納得するのを待っていたのだろう。千代が軽く手を叩き彼女に指示を出した。しほは千代の意図を察したのか机の端を持ち、千代と共にテーブルを少し動かした。

「え?」

机が和明の側から離れ、手前に広いスペースが出来る。和明がその意味を理解する間もなく、しほと千代はこちらに歩み寄ると膝をついた。

「ち、千代さん?」

「あのね、これもしほと話をしていただけ……どちらかの提案を受けただけなら、勝った方が和明君を好きにしていって約束だったの」

「は、はあ……」

「ただ、和明君はどちらも受けずに自分の道を行く事に決めた。だから……」

「うっ……！」

すると千代の手がジーンズの留め具に伸びると慣れた手つきでそれを外す。ほぼ同時にしほの手がジーンズを引き下げ、和明の下半身を露わにしてゆく。

「だから……これは私たちからのお別れ会。和明君が私たちの身体を忘れないように、そして、私たちが和明君の身体を忘れないように」
「そ、それは分かりましたけど、せめてシャワーを浴びさせてください。仕事終わりにそのまま来たから汗臭い……ふおっ!？」

「あむっ、ンツ、んはっ、和明くんっ……！」

臭いを理由に中断を求めた和明だったが、突如として股間を襲った快感に思わず声をあげた。視線を下ろしてみればジーンズは既に下着ごと脱がされ、露出した肉棒にしほの唇が押し当てられている。蛇のようにしほの舌は竿に絡みつき、既に半勃起状態だった肉棒を急激に充血させてゆく。

「ああ……いいわ、和明くん、の、生臭くて、汗臭くて……れろっ、頭が痺れそうっ……！」

「あらあら……しほ、ずっと我慢してたからってがつつき過ぎよ？」

「そ、そうですよ、しほさんっ！ 千代さんだって……」

「独り占めせず、私にも味わわせて貰わないと」

「へ？ あ、ううっ！」

「ンツ。ちゆ、じゆるっ……本当ね、頭が痺れる程に臭くて、素敵……！」

肉棒に絡みつく舌が二本に増えた。

かたや葡萄酒色の瀟洒なドレス、かたや黒いジャケットに白いワイシャツ姿。公の場に出る時と同じ姿で二人の家元が和明の肉棒を舐めしやぶる。北海道以来ここ数日はセックスどころかオナニーもしていなかったこともあり、和明の肉棒はたちまち500ml缶コーラほどの大きさにまで膨れ上がり、しほと千代の顔の間に柱のようにそり立った。

「ンツ、ちゆ、ちゆうう……」

「くうっ！ し、しほさんっ、それっ！」

「あむっ……んむう、ふいほふあはぶん、ほう？」

「うああっ！　ち、千代さんっ！　袋を口に含んだまま喋らないでっ、ちよつと、強いっ……！」

しほが唇を亀頭に押し当て柔らかく吸う。同時に千代は下側に移動すると和明の玉袋を口に含み、口腔内で撫でるように舌を這わせつつ和明を見上げる。

「んッ、んぶっ、んんッ！」

そのまましほは口を広げ、和明の亀頭を呑み込んだ。唇をすぼめて締め付けつつ、熱い口腔内全体で肉棒を愛撫してくる。

「最初の濃いのはしほに譲るわ。私はこつちを責めるから、任せるわね」

しほが肉棒から口を離さないと察した千代は少し身体を引き、和明の足に手を添えた。

「え？　千代さ……ふあっ!？」

くすぐったさを伴う快感が足先から伝わり、和明は背を反らした。いつの間にか靴下が脱がされ、そのつま先を千代が舐めている。

「ぺちや……あふっ、どう、和明君？　こういうのは？」

「ど、どうって……ふおおっ！　し、しほ、さんっ！」

「んぶっ、ん、んんッ！」

しほの動きが早くなつてゆく。不意打ちだった事もあり、和明の奥から早くも射精感が湧き上がってくる。

「くうっ、も、もう、出るっ！」

「んはっ……いい、いいわ、和明くん。思い切り、んんっ、だ、出してっ！　私の中も、外も、和明くんの匂いを、忘れないように、染み付けてっ……あむっ、んぶう！」

和明が射精を訴えるとしほは口を一度離して懇願し、再び肉棒を咥え込んだ。日頃の厳格な家元としての姿を捨て去ったしほの姿は雌のそれで、和明の中の劣情を更に湧き上がらせた。

「はあっ……れろっ、んふっ……」

一方で千代はドレス姿のまま和明の足を一本一本舐めてゆく。まるで奴隷が主人に奉仕するような姿は、やはり和明に堪らない支配感

を覚えさせる。

「ぐっ、しほ、さんっ！ う、うああっ！」

「んぐっ……い！」

和明は腰を突き上げ、同時に絶頂に達した。精液が肉棒を駆け登り、しほの口腔内に容赦なく放出されてゆく。しほは艶やかな黒髪を頬に貼りつかせながらも口を離すことなくそれを受け止めてゆく。

「ンンッ……こくっ、んっ……い！」

ごくりとしほの喉が鳴り、精液を嚥下してゆくの分かる。

数度の腰の震えと共に射精が治まると、しほはようやく唇を離れた。精液と先走りと唾液の混ざった粘液が、しほの唇とひくつく亀頭の間で橋をつくる。

大きく息をつく和明に、全ての足の指を舐め終えた千代が立ち上がって言った。

「ゆっくり楽しみましょう、和明君。夜は長いわ」

「……はい、お願いします」

射精の余韻が治まるのを待たず、和明は答える。

この夜を、決して忘れないものにする為に。

第四話

横浜のベイサイドが一望できる、ホテルのVIP用ロイヤルスイートルーム。一泊するだけで和明のバイト代の何カ月分が飛ぶやら分りはしない。

服を脱いだ和明が乗っているベッドの感触ひとつ取っても軋む音のひとつもせず、それでいて柔らかくもしっかりと体重を受け止めている。

「……待たせたわね」

「さあ和明君、続きをしましょうか」

服を脱ぎ終えた西住しほと島田千代が和明に近づく。

「あ、はい……っ!?!」

顔を上げた和明は思わず硬直した。

二人は確かに服を脱ぎ、下着姿になっていた——彼女らが纏っているものを「下着」と呼んで良いのであれば。

「ふふっ、どうかしら? 今日に備えて用意してみたの」

自らのプロポーションを誇示するように身をくねらせる千代が着けているのは眼にも鮮やかな赤いガーターに黒ストッキング。しかし肝心のショーツは履いておらず、髪と同じ亜麻色の陰毛が時折覗いている。

また、上は上で確かに赤いブラを着けているのだが乳房の部分の布地は無く、ブラ紐で乳房がより強調された形になっている。

「私は反対したのだけど……和明くん、あまり、じろじろと見ないで」

「しほ、さんっ……!」

「騙されちゃ駄目よ、和明君。これ、しほが自分で選んだんだから」

「……………」

自然と唾が溜まり、それをごくりと呑み込む。

千代の横で少女のように恥じらいつつ立つしほの下着は、もはや「紐」と呼んで良い代物だった。数cmも無いような白く細い布地が水着のように彼女の股間と乳首周りだけを隠している。

否、「隠している」という表現は適さないかもしれない。彼女の豊満

な乳房や大きめの乳首を隠すには布地は余りにも小さく、乳輪はほぼ露出してしまっている。股間にしても彼女のやや濃いめの陰毛がはみ出ている状態だ。

「……凄いです。二人とも」

この極上の美女にして夫を持つ身である二人を相手に、これから夜明けまでセックスをする。何度も肌を重ねた関係ではあるが、湧き上がる期待感は常に新鮮なものだ。

既に臨戦態勢だった和明の肉棒は二人の下着姿に更に充血し、凶悪なまでの怒張となつて反り返つた。

「ふふっ、和明君も凄いビンビンね。観てるだけで濡れてきそう」

「和明くんも立派よ……この逞しいものとも、暫くお別れなのね……」
赤黒くひくつく亀頭を千代は淫靡に微笑みながら、しほは切なそうに見つめる。

「それじゃあ和明君。ベッドの上に横になつて」

「え？ あ、はい。こうですか？」

千代の指示に従い、和明はベッドの中央に裸のまま横になった。股間では血管を浮かべた肉棒が屹立し、強い存在感を放っている。

何をするのだろうか。そう思っていると千代がベッド横のテーブルから何かを取った。見覚えのある、ドレッシング入れを思わせる半透明の容器。

「ローション……ですよ、それ」

「ええ。まだ和明君にやってなかった事を、今からしてあげる……んっ」

そう言うと千代はローションの容器を傾け、自身の胸に垂らした。とろみある透明な液体が千代の形良い巨乳を濡らし、艶やかに照り光らせる。

「(ローションパイズリ？ それなら南の島でも……)」

和明が怪訝に思っている間に千代は豊かな乳房を十分に濡らし、今度はその容器をしほに手渡した。

「はい、しほも」

「分かつてるわ。ンンッ……千代、ちよつとこれ冷たくない？」

「冷たいのが温かくなってゆくのがいいのよ」

しほも同様にローションを重みある自身の乳房に垂らしてゆく。濡れた布地が彼女の肌に貼りつき、乳首が既に勃起している事を和明に伝えてくれる。

そこでようやく和明は二人が何をしようとしているのかを悟った。快感への期待で肉棒がびくんと跳ねる。

「まさか……これって」

「……フフツ」

千代は微笑みつつベッドに上がり、寝ている和明の腰の右側辺りへ来るとそこで正座した。しほも続いて左側で正座する。

「和明くん、ちよつと、腰、上げるわね……」

「は、はいっ……」

和明の腰が二人に持ち上げられ、更に寄せられた彼女らの膝に腰が乗る姿勢になった。必然的に和明の屹立する肉棒は4つの巨大な乳房に囲まれる形になり――

「うっ、うわっ!？」

和明の口から思わず声が漏れる。

「ああ……熱いわ、和明くんっ……!？」

「しほ、もつと寄せて……和明君のを、押しつぶすくらい……んっ、はあっ……」

ローションの滑りと冷たさ、そして続いて与えられる火照った肌の温もりと堪らない4つの乳圧。和明の肉棒は二人の押し付けあう豊かな乳房の谷間にすっぽりと包まれていた。

「まだ弱音を吐いちや駄目よ? ここから、なんだから……あふっ、し、しほ、動くわよ?」

「ええ……感じて、和明くん。私たちの、おっぱい……ああっ!」

「あぐっ! ちよ、これっ、凄いつ!」

千代としほ、それぞれが乳房に手を添えて寄せつつ肉棒を抜き始めた。その力には強弱があり、時に千代の乳房の谷間、時にしほの谷間、時に二人が形作る谷間へと竿が移動する。

「くううっ! しほ、さんっ! 千代さんっ!」

「ンンッ！ も、もう、暴れん坊ね……」

だが、何処に挟まれようとも竿に与えられる快感は高まり続ける。和明は堪らず自分でも腰を動かし始めた。二人の膝の上で小刻みに腰を跳ねさせると、千代が喘ぎつつ吐息を漏らす。

柔らかいだけの乳房では、ここまでの快感は得られなかつたろう。日々の戦車道の鍛錬で磨かれた、張りのある身体と乳房。それが柔らかいだけでない堪らない弾力を生み、口や手とは異なる快感を和明に与えてくる。

「はあっ……か、和明くんのごこ、凄く苦しそう……あむっ、ンッ、ペ
ちや……」

「んんっ、ごこ、こら、しほ、独り占めは駄目よ？ れろっ、んはっ……
！」

「ああっ！ そ、そんな、二人でっ！」

和明の亀頭を奪い合うように乳房を押し付けつつ、二人の舌が鈴口をくすぐり、カ리를舐め、亀頭を弄ぶ。

そしてもう一つ、和明の快感を煽るのはその絵面だった。本来ならば一介の学生バイトである自分が挨拶を交わす事すら難しいような世界に住む淑女である彼女らが、自分の肉棒に欲情し奉仕する姿。例え今宵ひと時だけの姿だとしても、それは和明の中から堪らない支配感を覚えさせた。

「おお、おおっ！ や、ヤバっ……！」

「も、もう、イキそうなの、いいわよ、いつでも、イッてもっ……！」

「んはっ……か、和明くん、出すときは、私の方に、出してっ！ 思い切り、顔にっ……！」

「しっ、しほっ。貴女はさつき貰った、でしょ？ 和明君、次は私の方
にっ……」

ローションによって滑らかでありながら同時にぐにぐにと弾力ある4つの乳房を押し付けられ、締め付けられる感触。しほの爆乳と千代の巨乳は淫らに形を歪ませつつもローションと汗で照り光る。肉棒からの快感と興奮を煽る情景に、和明の射精感が次第に強まってくる。

射精を訴える和明にしほが一層身を寄せつつ精液を懇願すれば、負けじと千代が竿を自分の方に寄せつつ射精をせがむ。

できるだけ長い間この極楽めいた快感を味わっていたかと思っていた和明だったが、ついに限界が訪れ、震える腰の上に突き上げた。

「ぐ、くううっ！ も、もう、無理っ……う、あああっ！」

「んあっ、あ、熱いつ……！」

「凄……噴水、みたいに……」

腰を突き上げたことで亀頭が4つの乳房が形作る谷間から顔を出し、直後に精液が迸った。二度目とは思えない程の大量の白濁液がまるで噴水めいて噴き出し、顔を寄せていたしほと千代、二人の顔を容赦なく汚してゆく。

「あっ……はあっ……」

「和明君、まだ、終わりじゃないわよ？ ここを、こう……」

「ンツ……かずあき、くん……もつと、出して……」

「えっ!? く、ああっ！」

乳房を支えていた彼女らの手が下から上で揉み上げるような動きを見せる。同時に射精中の和明の肉棒の根本がきゅつと乳圧によって締め付けられ、それが上へとせり上がってくる。

「し、搾られるっ……！」

「じゅるっ……ま、まだ、残ってるっ……」

「あふっ、んっ……お、美味しいわ、和明君の、精液っ……」

尿道に残った精液を搾り上げられる感触。溢れてきた粘りある白濁液をしほと千代は恍惚とした表情で舐めとってゆく。

やがて完全に射精を終えると、二人は膝を引いて和明の腰を解放した。

視界がチカチカする程の強烈な快感の余韻に、和明は大きく息を吐いた。

「ハアツ、ハアツ……！」

「ふうっ……どうだった、和明君？」

「さ……最高、でした……」

口の端に残った精液を舐めとりつつ尋ねる千代に、和明は素直に答

える。

「ふふつ、それは良かったわ……それじゃ、今度は私たちに……」

「ちよつと待って、千代。和明くん、起きられる？」

「あ、はい……」

まだ余韻が抜けきらない中で身を起こす。その手に、やはり見覚えのある小瓶が渡された。

「これ……」

「来る前に菊代に伝言と一緒に渡されたわ。あの時は意味が分からなかったけど、彼女はもう和明くんから聞いていたのね」

「伝言？」

『踏ん張りどころですよ、篠原様』だそうよ」

「……ははっ」

どうやら菊代はこうなる展開を予測していたらしい。

苦笑しつつ和明は渡された精力剤の封を切るとひと息に飲んだ。強い苦みと甘み、生薬の香りが口腔内に広がり、それは熱となって体に流れ込む。まだ吸収されていないだろうに、身体から活力が湧き上がってくるように感じる。

「……よし、もう大丈夫です」

「頼もしいわね。本当、暫くお別れと思うと本当に残念……」

和明の言葉に千代はそう言いつつ、ころんと自身の身体をベッドに横たえた。仰向けの姿勢で脚を開き、和明を見上げる。

「次は、私たちに……一番奥まで、和明くんのを届かせて……！」

同じくしほも千代の横に仰向けに寝ると足を広げ、既に濡れて染みが作られた紐をずらした。

「ねえ、頂戴」

二人の声がシンクロする。

「……はいー」

射精したばかりというのに、再び肉棒が反り返る。

赤いガーターと黒のストッキングに彩られ、亜麻色の陰毛を濡らしつつ肉棒の挿入を待ち望む千代の秘唇。

汗と愛液を吸い下着の機能を持たなくなった白布から豊満な乳房

を溢れさせ、陰毛を照り光らせつつ陰唇を震わせるしほの秘所。

どちらも堪らなく淫らで——同時に、美しかった。

順番をどうするか和明は暫く悩んだが、やがてしほの脚の間に自分の腰を定めると亀頭を孔に宛がい、そのまま突き入れた。

「すいません、千代さん。しほさんの、後、でっ……うっ、うおっ！」

「んっ、はあっ！こ、これっ、これ、欲しかった、のっ！来て、和

明、くんっ！もっと、もっと奥までっ！」

「あらあら……しほ、本当に溜まってたのね」

一応の詫びを千代に言おうとした和明だったが、その言葉を言い終える前にしほに抱き寄せられ、腰のうねりと共に激しい締め付けを受けて呻いた。

表向きは日本戦車道の覇権を競う流派の家元の乱れる姿に、千代は咎める風でもなく言うとうらの股間に手を伸ばした。

「ンツ……し、仕方ないわね……和明君、私、濡らしておくから、早めに済ませて……ん、ふうっ……」

「わ、分かり……ましたっ！」

「くひいっ！」

大きく腰を引き、ずんと杭を打ち込むようにしほの膣内へ強く肉棒を突き入れる。重く揺れるしほの乳房が押し当てられ、突起した乳首が和明の胸板をくすぐる。

北海道で経験したみほの「蛸壺」は確かに名器だったがやはりしほの熟れた秘所はそれとは別で違う。肉厚の膣内全体で強く締め付けつつも和明の凶悪なまでの怒張を全て呑み込み、それから快樂を得ようと濡れそぼる褻が無数の舌のように亀頭を、鈴口を、カリを、竿を撫で上げてくる。

「ぐっ、うおっ、し、しほさんっ！しほさんっ！」

「あああっ！和明くんっ！和明、くんっ！」

次第に腰の動きが早くなってゆく。ゆっくり味わおうと思っても止められない。心の中から湧き上がる激情が、理性を溶かしてゆく。

「俺、忘れませんっ！しほさんの、この、まんこの締め付けもっ、形、もっ！熱さもっ！絶対に、絶対に忘れずにつ、またっ、ここに戻

りますっ！」

「んっ、はあっ！ お、覚えてっ！ わたっ、私も、忘れない、からっ！ 和明くんの、ちんぽの、固さも、熱さもっ、大きさ、もっ！ っ、いいっ！ ちんぽっ、和明くんっ、ちんぽいいっ！」

「うああっ！ しほ、さんんっ！」

互いに一切の遠慮を含まない、腰を夢中で振り、激しく肉を打ち付けあう姿。それはもはや「セックス」ではなく「交尾」と呼ぶのが相応しいだろう。

汗に濡れた艶やかな黒髪を振り乱し、しほは悶える。和明も歯を食いしばり、しほの膣内を削るような勢いで肉棒を擦らせる。

「ふひっ！ ちんぽ、中で、大きくっ！ 和明くんっ！ 出るの、出るのっ!？」

「はっ、はいっ、もうっ……！」

「いいわっ、何度でも、何度でも、膣^{なか}内で射精してっ！ 和明くんっ、のっ、ああんっ！ 精液、沁み込ませ、てっ！ あひっ、あ、あああっ！」

一際しほの締め付けが強まる。和明は彼女の子宮口に亀頭を押し当て、そこで我慢を開放した。

「ぐあ、あああっ！ しほ、さんんっ！ しほおっ！」

「ふひっ！ あ、あふあ、あああっ！」

獣めいた叫びと共に和明は絶頂に達し、しほの奥にどくどくと精液を注ぐ。先ほどの精力剤が回ってきたのか精巣がドクドクと精液を増産しているのが分かる。

「ふう……んっ！」

「ンンッ！ か、和明、くん、もっ……！」

「ちよっど我慢しててくださいね、しほさん」

絶頂の余韻の中でお和明を求めしほに申し訳なさそうに言う
と、和明は勃起したままの肉棒を彼女から引き抜いた。

「……お待ちです、千代さん」

「は、早く、お願いね……あんな激しいのを見せられたら、私も我慢、が……ああっ！」

脚を抱え、精液と先走り、そしてしほの愛液に濡れて照り光る怒張を今度は千代の秘所へと突き入れる。

「あうっ！ す、凄いい、濡れてっ……………」

「か、和明君も、ああ……………す、凄いい……………前より、もっと、遅しい……………」

まるで熱した蜜を溜めた器に肉棒を突き入れたかのような感触に和明は呻く。一方の千代も和明の肉棒が与えてくる快感に悶える。

考えてみれば、大学選抜の演習艦に乗っている時も千代は愛里寿と和明の間に入ろうとせず見守っていた。挿入するのは暫くぶりだ。

「あふっ！ あ、ああっ！ そっ、そこっ、擦れ、てっ！」

「く、ううっ！ 千代さんの、まんこ、もっ、絶対、忘れませんっ！」

この、包み込むような、感じっ！ 忘れませんっ！」

「ふあ、あう、んああっ！」

正面から貪欲に快楽を求めてくるのがしほの秘所なら、千代は全体を柔らかく包みながらも肉棒のツボを押さえ、射精へ促してゆく秘所と言えば良いだろうか。

激しい締め付けという訳ではないのだが膣内の熱さはしほ以上で、根本辺りをきゅっつと締め付けてくる感じが心地よい。和明は再び腰を使い始めた。

「ああっ！ す、素敵よ、和明君っ！ 太くて、固くてっ！ あ、愛里寿に、あげたくない、くらいっ！」

「千代さんの、まんこもっ、素敵、ですっ！ エロくてっ！ あったかく、てっ！ ぐ、ううっ！」

「ま、またっ、戻って、きてっ！ 私の膣内、にっ！ 待ってるからっ、待ってる、からっ！」

「あぐっ、ち、千代さんっ！」

亜麻色の髪を揺らし千代が悶える。既に三度の射精を経て四回目です少しは疲労を覚える頃の筈だが、まるで身体から活力が衰える気配が無い。菊代の精力剤に感謝しつつ和明は更に千代の秘所に肉棒を突き入れ、子宮口を亀頭でノックする。

「も、戻って、きますっ！ 絶対ここに、また挿入、してっ！ 射精し

ますっ!」

「やつ、約束、よ……そ、それじゃあ、忘れない、ようにっ!」

「何ですか、千代、さんっ!」

「射精、してっ! 和明君、のっ、精液の味っ! ちっ、千代のおまんこ、にっ、覚えさせてっ!」

「……喜んでっ!」

腰の動きを早める。こみ上げる射精感を堪えることなく、和明はそのまま精液を放った。

「あぐっ、う、おとおっ!」

「あふっ! あ、熱っ……!」

びくんと千代の身体が大きく跳ねる。彼女の愛液より更に熱い精液がどくどくと溢れ、膣内に満ちてゆく。

「うっ……はあっ……」

千代を絶頂に導いたのを確かめ、和明は肉棒を引き抜いた。

「んっ……」

「し、しほ、さんっ……!」

そこにいるの間にか余韻から覚め、身を起こしていたしほの顔があった。恍惚とした表情で精液と愛液に塗れた肉棒に頬ずりし、舌を伸ばして白濁液を舐め取る。

「ンツ……し、しほ、ずるいわよ? 私だつて、もっと……」

そこに千代も続く。自身の肉棒を愛おしそうに求めてくる二人の家元に和明は答えた。

「しほさん、千代さん……もっと覚えさせてください。二人の全てを」

そこから何回交わったのか、和明も覚えていない。

しほの膣内に出し、千代の膣内に出し、二人の顔に精液を浴びせ、豊かな乳房で挟ませ、重ねた二人で素股を行い、最後あたりには二人の尻穴^{アナル}まで味わった。

そして気を失うように眠りにつき——初めてしほと交わった日のように、目覚めた時には二人は部屋に居なかった。

ルームキーをフロントに返しホテルを出た頃には既に昼前で、残暑

の汗ばむ陽光が街には注いでいた。

『それでは次は戦車道の話題です。プロリーグ発足を目前に控え、日本戦車道の代表的流派である西住流と島田流の両家元が会談し、今後のプロチームの結成と調整について……』

交差点のビルに設置された大型ビジョンがニュースを流し、並び立つ二人の美しい家元を映す。

篠原和明はその映像に背を向け、歩き出した。

——人の想いがどうあれ、気が付けば残暑の暑気は去り、風は冷たくなり、木の葉は色づく。

『はい！』という訳で今日も「蝶野が斬る！」始まったわけだけど、今日の最初の話題は先日行われた日本選抜チームとアメリカ戦車道チームとの初の国際交流試合について！ いやー、凄かったわね！ まあ相手は二軍で主力メンバーではなかったんだけど、それでも勝てたのは凄いことなの！ 特に見どころとしては学生ながら参戦した西住まほ・みほの二人と、大学選抜隊長の島田愛里寿の活躍ね！ 例えば序盤戦、敵の奇襲を掻い潜って……え？ そろそろお手紙紹介？ 了解、それじゃ最初のお手紙はラジオネーム「胃薬隊長」さんからのお便り……』

パーソナリティー・蝶野亜美が贈る人気ラジオ番組「蝶野が斬る！」が戦車道ショッパに流れる。今日の彼女のテンションはいつも以上に高い。

「……ふああ」

思わずあくびが出た和明に、店長が声をかける。

「眠いのかい、篠原君？」

「あ、店長……いえ、まあその、ちよつと」

「昨日もボランティアスタッフに参加してたんだらう？ ちゃんと休みは取れてる？」

「大丈夫ですよ。実際、明日は休み貰ってますし」

店長の気遣いに笑顔で答える。

「それならいいけど……無理はしないでくれよ？」

「はい、ありがとうございます」

和明は今、大学で授業を受けつつ戦車道ショップで働き、日にちを調整して近隣の戦車道の試合のボランティアスタッフとしても活動している。実際忙しいのは確かだが、これも二年までで必修以外の単位を取ってしまえば多少は楽になる。あと一年半ほどの辛抱だ。

そんな話をしている内に壁に掛けられた時計が鳴った。今日のシフトは土曜午前のみの半ドンである。

「つと……それじゃ店長、お先に失礼します」

「はい、お疲れ様。頑張つてね」

いつもの挨拶を経て、鞆を片手に街に出る。少し前まで緑だったイチョウ並木の葉は黄色味を増してきていた。もう少しもすれば通りに銀杏の匂いがするようになるだろう。

「ふう」

果たして自分は前に進んでいるのだろうか。あの一ヶ月ちよつとが余りに濃厚すぎたせいか、逆に未だに今の日常に現実味が沸かない。

通いなれた道を歩き、やがて自分のアパートへと戻る。ドアを開け、鞆を下ろし、ふうと息をつく。週が明ければまた忙しくなる。ちやんとこの土日休みは休まなくては。

そう思いつつ和明は押入れを開け、布団を出した。まずは寝るべし。

「……ん？」

その時、ふとインターホンが鳴った。

友人が来る予定などは無い。セールスマンか新聞勧誘だろうか。気持ち息を殺しつつ和明はモニターを見る。

「っ!？」

半分寝ていた眼が驚愕に見開かれる。慌てて和明は玄関に向かった。鍵を開け、ドアを開ける。

「ど、どうしたんで……!？」

「失礼するわ」

「お久しぶりね、和明君」

「ご無沙汰しています、和明さん。少しお邪魔します」

「え!? あ、あれ、お母さん!? お姉ちゃん!」

「……………」

「篠原様、お元気そうで」

「こちらの返事を待たず彼女ら——西住しほ、島田千代、西住まほ、西住みほ、島田愛里寿、井手上菊代——がどやどやと室内に上がり込む。

「……………え?」

一瞬、脳が停止する。頭を整理しようとポンポンと自分の額を叩いてみる。ストレスから幻覚が見えるようになったのだろうか。そんな考えが浮かぶ中、和明は鍵をかけ直して居間へと戻る。

「どうしたの和明くん? まだ外に誰かいたかしら?」

——幻覚のはずの彼女たちは消える事なく、居間で車座に座り和明を待っていた。

「ちよ…………ちよつと待ってください! 何で、その、揃ってここに!」

聞きたい事は山ほどあったが、とりあえず和明はその車座に加わるとしほに尋ねた。

しほは数秒、言いづらそうに顔を伏せた後に言った。

「…………しつくりこないのよ」

「はい?」

「だから、和明くんの決意をこちらでも受け止めて、貴方が上がってくるまで待とうと思っただけ……………」

そこでしほは視線を逸らし横の千代を見た。こんな状況でも千代の表情は柔らかく、しほより流暢に語り始める。

「あれから貴方の『代わり』を私たちも探してみ、実際に相手をしてみても貰ったのだけ……………どうもあの一ヶ月で私としほ、和明君のにすっかり馴染んでしまつて他だと全然物足りなくつて、余計に欲求不満が溜まるようになってしまったの。困ったものね」

「『困ったものね』って…………いや、『次に会うまで関係を一旦終わらせる』って話はどうなったんですか!」

「ええ、そこは変更なしよ。今までの関係は一旦おしまい」

「だったら……」

「だから……ここからは『ビジネス』」

和明の言葉を待たず、千代は封書を差し出した。

「今までは無償だったけど……和明君、貴方に正式に私たちの戦車道の鍛錬に伴う欲求不満の解消を依頼します。報酬は貴方が上に行くための補助。この世界、推薦状のひとつも無しで上がってゆくのは難しいわ」

「……！」

言葉を失い、和明は助けを求めるようにまほに尋ねた。

「ええっと……ま、まあしほさんと千代さんの事は分かったけど、何でまほさんまで？」

「和明さんが関係を断られたのはお母様と島田流家元だけと伺いました。私個人としても、和明さんなら信頼できるので今後も相手をお願いできればと」

「えっ!? お、お姉ちゃん!? 今日には篠原さんをボコミュージアムに連れて行くから来たんじゃないの?」

みほが驚いてまほに聞く。どうやら彼女は来訪の目的を聞かされていなかったらしい。まほはみほに真顔で言った。

「みほ、お前は私やお母様と比べて自覚症状が弱いようだ。先日の国際戦の後から調子を崩しているのは知っている。相手をして貰ったほうがいい」

「そ、それは……そう、だけど……」

まほの言葉にみほは顔を真っ赤にして下を向く。しかしそれは照れであり、拒絶の反応ではないようだ。

駄目だ、これはまほも引き下がる気配はない。和明は今度は愛里寿に尋ねた。

「その、愛里寿ちゃんは……どうして?」

「……」

愛里寿は白い頬を赤くすると、おずおずと言った。

「わ……私は、和明さん以外にして欲しくないから……」

これは告白と受け止めるべきなのだろうか。頭痛がしてきた和明に菊代が声をかけてきた。

「まあまあ、篠原様。男子たるもの、ここまで据え膳を揃って出されたなら全て召し上がられるのが礼儀かと」

「……菊代さんは、何でここに居るんですか?」

力なく和明が問い返す。

「それはもちろん、将来の後輩への応援でございます」

「こ、後輩?」

「ああ、そういえばお渡ししていませんでしたね」

何かに気づいたように菊代はポンと手を打つと、袖を探り一枚の名刺を取り出した。

『日本戦車道連盟 スカウト部門 井手上菊代』?」

「はい。ですので戦車道連盟への就職を目指す篠原様はわたくしの後輩という事になります。そうとなれば……少し鍛えさせていただけうかと」

にこやかに菊代はそう言うと、別の袖から見慣れた精力剤の小瓶を取り出した。

その時、ふと和明の頭に別の疑問が浮かんだ。

「でも、何でみんな揃ってこんなにタイミング良く来れたんですか?」

「少し前に店長様から伺いまして」

「そう、ですか……」

なるほど、あの退勤時の「頑張って」はそういう事だったか。

「……ははっ」

どうやら、まだまだ自分が「子供」を卒業できるのは先になりそうだ。

和明は笑みを浮かべ、膝をぱちりと叩いた。

「分かりました、全員相手します!」

「……そう言ってくれると思ったわ」

一見、変わっていないように見えるしほの表情。

しかしそこに心からの安堵が表れている事が、和明には確かに伝わった。

「さて、そういう事ならまずは布団を敷きましようか。和明君、他に敷布団ってあるかしら？」

「お母様、敷布団が足りないようなら買って参ります」

「お姉ちゃん！ ほ、本当にするの!？」

「あの……それより、みほも和明さんとシていたの？」

「えっ!?! 『も』って……愛里寿ちゃんも!?!」

「うん……私の場合、前が無理だったからお尻だけ……」

「お、お尻って……えっ!?! ええっ!?!」

「落ち着いてください、みほ様。わたくし以外全員が篠原様と性交済みでございますので」

「えええっ!?!」

数分前まで静寂が支配していた部屋が、賑やかな喧噪に満ちる。

季節の夏は終わったが、和明の『夏』はまだまだ続くようであった。

【俺と家元（かのじよ）と巨砲主義 終わり】

番外編・5 years after
第一話

『——それでは、次は戦車道の話題です。初の戦車道ワールドカップ参戦において三位決定戦に勝利し、メダル獲得を果たした日本選抜チーム、通称「ニジズミジャパン」のメンバーが今朝ドイツから帰国し、空港に集まった戦車道ファンの熱烈な歓迎を受けました』

(国際空港内。チームフラッグを模した応援旗やレプリカジャケットを着た女性たちの歓声を受けてゲートを通過する日本選抜メンバーの光景)

『アジア予選リーグをトップで通過し本選トーナメントでも強豪イギリスを撃破した日本選抜ですが、国内プロリーグチーム「熊本シユバルツ」において隊長と副隊長を務め、本チームにおいてキャプテン、副キャプテンとして活躍した西住まほ、西住みほ選手は報道陣に対し次のようにワールドカップの感想を述べました』

(初めてのワールドカップの感想は?)

「(まほ) 実に得るものが多い試合だったと感じています。国内リーグでは無かった発想による戦術や戦法などは、今後の日本戦車道を大きく成長させる要因となる。そう確信します」

「(みほ) まず、ここまで私たちを支えてくださったサポーターの方々、戦車道連盟の方々。また、私たちが長期不在の中で国内リーグを支えてくださった島田流の島田愛里寿さんに深く感謝します。メンバーのみんなが全力を尽くしてくれた、現時点で最良の結果を出せたと思います」

(緊張などは無かったか?)

「(まほ) 国際戦自体はワールドカップ以前から幾度も行っていましたので、緊張せず挑むことができました。ただ、メンバーの中には確かに慣れない海外の環境にメンタルバランスを崩す者もいたので、そう

いったケアには注意を払いました」

「(みほ) その……正直、緊張しました。海外が……って訳じゃなくって、初めて一緒に戦う人が多かったから……(場内に笑い)。でも、すぐに仲良くなれて心を合わせる事ができるようになってからは緊張も無くなって、のびのびと試合をする事ができました」

(ワールドカップでは「熊本シユバルツ」での試合以上に姉妹の連携がより強くなっていると感じた。秘訣などはあるのか?)

「(まほ) 私たちとしては、普段通りに戦っているだけなのですが……(少し考える)。一番肝心なのは『これをしたい』という相手の気持ちを理解し、それに対して最善の行動を取れるかどうか、そこだと思います。些細なストレスが試合では致命的な判断ミスを生みます。気持ち良い味方間の連携はそれを限りなくゼロにしてくれる。それが大きいのではないだろうか」

「(みほ) え!? えっと、私はお姉ちゃ、い、いえ! 隊長と合わせているだけで……でも、大事な事はと聞かれれば『味方を信頼する事』だと思えます。味方を信じて背中を任せる事ができる。それが強い安心を生み、100%の実力を出してくれる。そう思います」

(チームメイトの中で、互いを除いた最も頼りになった選手は誰か)
「(まほ) みほ以外、ですか……(少し笑う。聴衆の中の西住まほファンから黄色い声) それなら——」

「はあ……やつぱり、二人ともカメラ映えするなあ」

大型モニターに映るまほとみほの姿に、篠原和明はそんな感想を漏らした。

その和明の下半身から水音と共にまほが言う。

「んはっ……和明さん。最中によそ見、ですか……じゆるうっ」
「ううっ! い、いや、折角の二人の凱旋インタビューなんだから、ちゃんと見ないと……くうっ!」

血管を浮かべ反り返る肉棒に舌を這わすまほに和明は弁明したが、その言葉は途中で遮られた。

「あむっ、ひほははふあん、ふおれはは……」

「うおっ!? み、みほさんっ! 啞えたまま喋っちゃ……!」

「……ふはっ、篠原さん、それなら今の私たちの『凱旋』の相手に集中してください。ドイツに篠原さんが来れなくなつて、本当に切なかつたんですから……ちゅっ」

「くっ!」

啞え込んでいた肉棒を開放したみほはそう言うと、赤黒く脈動する亀頭に愛おしげにキスをした。和明の腰がびくんと跳ねる。

ソファに腰掛ける和明に跪くような姿勢で、全裸で柱めいた巨根に奉仕する美しい姉妹。和明は彼女らの頭を優しく撫でつつ言った。

「二人とも、ごめん……どうしてもこっちの仕事で、海外にまでは一緒に行けなかつた」

「れろっ……勿論、分かっていきます。だから、今は……」

「んはっ、あふっ、ちゅうう……」

「みほ、少しは和明さんの話を」

「っぱ……やっぱり、篠原さんのおちんちん、凄……舐めてるだけで、イキそうっ……!」

「……まったく」

既に肉棒に夢中の妹の痴態に苦笑しつつ、まほも再び肉棒への奉仕を再開する。亀頭を啞え頭を緩やかに前後させるみほの動きを妨げないように竿の根本に口を近づけ、袋や竿にキスをしつつ自身の股間を弄る。

和明はこみ上げる射精感を覚えつつ、労わるように頭を撫で続けた。

——北海道での大洗女子学園連合VS大学選抜戦から五年、プロリーグ発足から四年。この数年で日本戦車道は大きく発展した。西住流、島田流はそれぞれ熊本、群馬を拠点にプロチームを発足。他の諸流派も各地でチームを旗揚げし、ここに日本初の戦車道プロリーグが開幕した。

とはいえ何事も最初は躓きを伴うものである。戦車道という大量

の戦車と人員を運用し、一試合が場合によっては長時間に渡る戦車道の試合をリーグ戦として定期的に行う事の困難さや、地域自治体への理解の浸透の促進。戦車道連盟としても未踏の地に挑むような難行であった。

「篠原様は、実に良いタイミングで連盟の門を叩かれたかと思えます」
戦車道連盟の先輩である菊代——同時にベッドマナーの師匠でもある——は和明にそう言った事があった。

実際大学四年になってからの和明は、自分でも驚く程にほぼ全ての事がとんとん拍子に進んだ。連盟への就職は西住しほ、島田千代の二通の推薦状によりあっさりと内定し、いきなり渉外課の最前線で奔走する事になった。和明に課せられた内容は新人が果たすには一見、難しいものも少なくなかったが——

「ぐうっ！ しほさんっ、しほさんっ！」

「あ、ひいっ！ 和明くんっ！ もっと、もっとおっ！」

何故か難物と界限で恐れられる西住しほととの交渉を和明は常に円滑に果たし——

「ンンッ！ か、和明君、また、大きくなって……ああんっ！」

「ち、千代さんも、締め付け、前より強くなってませんか?! くっ、ああっ！」

同様に手練手管に長けた妖女と界限で称される島田千代相手にも何故か五分以上の交渉を成立させ——気づけば和明は新人ながら「西住と島田に充てるなら、あの男」という評価を得るに至っていた。

また同時に生活レベルも上がり、アパートのワンルームからマンション暮らしに変える事も出来た——本当の事を言えば自宅に彼女らを迎えるにあたり、音漏れする可能性のあるアパートから防音できる環境に変えざるを得なかったのだが。

その一方で、和明と縁した戦車乗りの少女たちもその立場を大きく変えていた。島田愛里寿は島田流を中心とした「群馬ボコーズ」の主将となり、西住まほ、西住みほはそれぞれ「熊本シユバルツ」の主将、副主将として活躍する事になった。宣伝の為の若きスター選手を求めていた連盟によって彼女らはプロリーグの看板選手として様々な

媒体で紹介され、ファンも増え、今では下手なアイドル以上の人気を誇っている。

特に「西住姉妹」として揃って持ち上げられる事の多いまほとみほの人気は愛里寿を凌ぐ勢いで、まほには女性ファンが、みほには男性ファンが多く定着している。

そしてその人気と話題性は、今回の戦車道ワールドカップ初出場三位の偉業によって更に高まる事は確実と思われた。

「(ファンの人に知られたら俺、刺されるかもなア……)」

「んっ……和明さん、どうしました？」

「あ？ いや、何でも……『俺は幸せ者だ』って思ってただけさ」

「ぺちや……それじゃ、私たちも『幸せ』にしてください。篠原さん」
そう言うときみほは亀頭から唇を離し、腰掛ける和明に跨がるように乗った。

「ねえ、お姉ちゃん。先にいいかな？」

「……ドイツ出発前夜のような、和明さんの独り占めは駄目だぞ？」

振り返りつつ尋ねるみほに、まほは微笑みつつ言う。

「あ、あれは、その、ドイツに行く前にモヤモヤを全部無くしておきたかったから……んっ、ああっ！」

照れつつ弁明しようとしていたみほだったが、その言葉はおもむろな肉棒の挿入で遮られた。和明はみほの脚を抱え、そのまま対面座位の形で抽送を開始する。

「ふあっ！ あっ、あんっ！ ふっ、不意打ちなんてっ、卑怯、ですっ！
！ 篠原、さんっ！」

「くうっ……みほさん相手、だと、ふうっ、こ、こうでもしないと、俺が先に、ううっ！ イ、イカされるから……ねっ！ 相変わらず、凄
い吸い付きだ、みほさんっ……！」

「しっ、篠原さんのものも、凄い、ですっ！ 太くて、固くて、熱くてっ！
わっ、私の、おまつ、おまんこっ！ 篠原さんのおちんちんで、悦
んで、ますっ！」

日頃の彼女のみを知る者には考えられないような淫猥な言葉を発

しつつ、みほは自らも腰を振り始めた。

五年の歳月は少女と大人の中間にあつたみほの身体を大人の女性へと変化させていった。その胸は美しい形を維持したままボリュームを増し、桃色の小ぶりの乳首を突起させて汗に濡れながら和明の眼前で激しく揺れる様は芸術品めいた感銘を覚える程だ。

「こつちも、本当に大きくなったよな……あむっ」

「ああんっ！ し、篠原さんっ！ そんな、乳首、舐めたらっ！ んっ
ああっ！」

和明は肉棒の抽送をみほの腰の動きに任せ、彼女の脚から手を離すと揺れる乳房を揉みしだいた。手に余るサイズでありながら指を弾き返しそうな程の弾力と張りを有する瑞々しい乳房を掴み、乳首を口に含むとみほは背を反らし悶える。

その一方で和明自身も肉棒に与えられる強烈な快感に身を震わせていた。もともと名器であつたみほの「蝟壺」は彼女の成長と日々の鍛錬によつて更にその締め付けと吸い上げを強めており、かつての和明ならば数秒も持たず射精していただであらう程だ。こうして堪えられるようになったのも菊代のトレーニングの賜物である。和明はみほの胸への責めを続けたまま唇を乳首から離し、今度はみほと唇を交わす。

「ンツ、ちゆ、みほ、さんっ……はあっ……！」

「ちゆ、し、篠原さんっ……はむっ、ンツ、れろっ……！」

吐息の熱さと呼吸の荒さが、今みほが感じている快感の度合いを伝えてくれる。絶頂まであと少しか。

和明は胸を揉んでいた手を再びみほの脚に添え、軽く持ち上げたかと思うとそのまま落とすように腕の力を抜いた。

「んはあっ！ そ、それっ！ 駄目っ！ 深いところ、当たって……」

「ああ、分かるよ……みほさんの、子宮っ……！」

「く、あううっ！ 篠原さんっ！ しのはら、さあんっ！」

ずん、と体の奥を突かれみほが悶絶する。和明はみほの子宮口にぐりぐりと亀頭を押し当て、再び彼女の身体を持ち上げ、落とす。和明の側もその度に精を求めて健気に吸い上げてくるみほの膣内に痺れ

る程の快感を覚えるが、腹筋に力を籠め歯を食いしばり懸命に射精を堪える。

「ふあ、あ、はあんっ！ 篠原さんっ！ わ、わたっ、わたしっ！ もうっ！」

「ああ！ 俺も、そろそろ限界っ……一緒にいこう、みほ、さんっ！」
「あ、ひっ、ああああっ！」

和明の背中に回されたみほの手に力が籠る。彼女が達した事を確かめ、和明は自身の射精感を開放した。我慢に我慢を重ねていた精液が尿道を駆け上がり、みほの膣内へと迸る。

「あぐっ……ひ、ああ……あったかい、です……篠原さんの、精液……素敵……！」

蕩け切った表情でみほは和明の精液を受け止め、恍惚の吐息を漏らす。暫くの間どくどくと射精は続き、結合部からごぼりと白濁液が溢れる。みほの背中を撫でつつ、和明は大きく息を吐いた。

「ふう……久しぶりだったけど、やっぱりみほさんは凄いな。最初の不意打ちが成功してなきや、多分先に俺が射精してた」

「ふえ？ あ、ああ……」

「みほさん、まほさんが切なそうにしてる。悪いけど降りて……ンツ？」

「あふっ……しのはら、さん、もっふお……ん、ちゅ……」

まほに換わるよう和明は促したが、みほはとろんとした瞳で和明にキスをねだり、抱き着いたまま腰を揺する。みほの膣内に挿入されたままだった肉棒が再び締め付けられ、射精の余韻も許さず怒張を取り戻してゆく。

「んっ……すみません、和明さん……ドイツからの帰国の日程が固まってから、みほはずっと溜まっていたみたいで……」

「大丈夫、でも……ちゅ……こうなるとみほさん、簡単には鎮まらないよな……」

「篠原さん、あふっ……おちんちん、もっど……ちゅ、んっ、ああ……！」

自身の股間を緩やかに弄りつつ、まほが言った。

西住みほ、彼女とのこういつた関係は北海道の一件から続いていたのだが——みほは決して「内気で大人しいだけの少女」ではなかった。幼い頃から戦車道漬けの日々を送り、友人に関するトラウマも抱えていた(まほから教えられたが、この件についてしほの口は重かった。彼女にとつても苦い記憶らしい)みほは初見では一定以上の距離を置こうとするが、それがある程度の距離——親友や恋人くらいの間隔——を超えるると非常に活動的な面を見せるようになり、こうしてセックスにおいても積極的に和明を求めようになった。内側に秘めた熱情はしほのそれを上回るかもしれない。

とはいえ、ここで全力でみほの相手をすれば続けてまほの相手は難しくなる。今日は重要な日だ。正直なところ、時間も体力もさほど浪費できない。

「……仕方ありません。和明さん、ちよつと失礼します」

戸惑う和明の様子にまほは何かを思いつくと、部屋の片隅に置いていたスーツケースに手を伸ばしてそれを開いた。中から黒い下着めいた物とポリ容器を取り出す。

「まほさん、それ……!?!」

「ワールドカップ中、どうしても我慢できなくなった時にみほと一緒に使っていた物です。ンツ……!」

ビキニパンツめいた下着の表裏両方に黒い張り型が取り付けられている、いわゆるペニスバンドを装着しつつまほが言った。自身の膣内に張り型を収める際に喘ぎが漏れる。

まほは張り型に手を添えると、ポリ容器を開封して中のローションをそれに垂らした。和明のサイズには及ばないものの、そこそのサイズで亀頭の形も丁寧に再現されている代物だ。

まるで男性が自慰をするようにまほは張り型を抜きローションを塗れさせると、和明の肩に腕を回したままのみほに背後から被さった。まだ桃源郷から意識が戻っていないのか、寝ぼけたような口調でみほが反応を示す。

「ふえ? お姉ちゃ……」

「みほ、和明さんを困らせては駄目だぞ? 悪いが……私もお前で、気

持ちよくならせて貰う」

「え？ あ、ああ、そ、そこっ!? お姉ちゃんっ！ あ、ひいつ！」

和明の位置から直接は見えないが、後ろの窄まりに張り型がミチミチと挿入されてゆくのが亀頭に感触として伝わってくる。過呼吸を起こしたようにみほは口を開き喘ぐが、その顔に浮かんでいるのは苦痛でなく快樂のそれだ。

「おねっ、お姉ちゃんっ！ お尻、焼けちやうっ……………」

「くうっ…………み、みほ、動くぞ…………ンンッ！ か、和明さん。和明さんも、動いてください…………一緒に、みほを…………」

「…………ああ、分かった！」

「んああっ！」

まほの言葉に和明は頷き、再びみほを抱えたまま腰を動かし始めた。同時にまほも腰を振り、みほの腸内を蹂躪する。

「うっ、おおっ!? こ、これ、中でっ……………」

まほの張り型の動く様子が分かる。動きがかみ合った時には亀頭と張り型の先端が膣壁越しに擦れ、まるでまほと兜合わせをしているかのような倒錯的な快感がこみ上げる。

「あふっ、あ、ああんっ！ すっ、凄いつ！ お姉ちゃんっ、篠原さんっ！ いいっ！ いいのっ！ もっと、もっとくださいっ！ お尻も、おまんこも、壊れる、くら…………いいっ！」

そして二人の間に挟まれる形になったみほはそれ以上に感じているようだった。快感が限度を超えて身体に力が入らなくなったのか、汗に濡れたショートカットを振り乱しつつ、まほと和明の腰の動きに任せるままに嬌声をあげるばかりになっている。その一方でしつかりと和明の亀頭を吸い上げてくる辺りは流石と言うべきか。

マンションの室内に汗と愛液の匂いと獣めいた喘ぎが満ちる。やがて喘ぎの間隔が短くなり、絶頂が迫っている事を伝えてくる。

「はあっ…………みほ、んっ、れろっ…………」

「ンンッ！ お、お姉ちゃん、ああ……………」

みほの尻穴に容赦なく腰を突き入れつつ、まほは彼女の首筋に舌を這わす。日頃の姿を捨て快樂を互いに貪る日本戦車道界のトップア

アイドル姉妹の姿は、和明の欲情を更に昂らせた。

「くううっ！ も、もう、俺も、そろそろっ……！」

「か、和明さんっ！ 私も、あと、少しでっ！」

「ふああっ！ もっ、もう、駄目っ！」

ラストスパートとばかりに和明は腰の動きを早め、まほもそれに合わせるようにズボズボと尻穴を抉るように張り型を動かす速度を上げる。まほの膣内に挿入されている張り型がみほに挿入している側の動きに反応して彼女に刺激を与えているようだ。

「あ、あ、あひいつ！ ダメ、頭、焼けっ……んっ、ふあああっ！」

「くっ、み、みほっ……うああっ！」

「二人、とも、ヤバっ……ぐ、あああっ！」

まほがみほの尻穴の一番奥まで突き入れ、身体を強張らせる。同時に和明はみほの膣内に再度精液を放った。がくがくと全身を痙攣させ、みほも絶頂に達する。

たっぷり数十秒の間、三人は繋がったまま絶頂の余韻に浸り——まほが尻穴から張り型を引き抜くと、みほはくたりと和明に身体を預けた。

「よっ……と」

「あ……あ、ふう……」

和明は軽々とみほを持ち上げると愛液と精液に塗れた肉棒を引き抜き、彼女の身体をソファに横たえさせた。染みひとつない肌を汗に濡らし絶頂の余韻に浸る姿は何とも艶めかしく、同時に可愛らしいと和明は思った。

「……ありがとうございます。和明さん」

「いや、俺の方こそ……それよりまほさんは、今ので大丈夫なのか？」

ペニスバンドを外しつつ礼を言うまほに、和明が尋ねる。

「ええ。それにこの後もありますから」

「……お手柔らかに」

まほは意味深な微笑みを浮かべた。和明はそれに苦笑を返す。

「ふあ……え、お姉ちゃん、今日って……？」

まだ半分意識が飛んだままのみほが聞く。

「……みほ、まさか一日中和明さんと『する』つもりだったのか？ 今日日はもう24日だぞ」

「え？ え？ ああつ！ そっか、時差！」

まほの言葉に自分が勘違いしていたのを気付いたのか、みほは意識を一気に覚めさせると起き上がり壁のカレンダーを見た。

『10月24日 凱旋セレモニー&島田愛里寿18歳誕生日・記念式典、横浜ベイサイドホテル 18:00』

該当の個所にはマジックでそう書かれ、更に強調するように○で囲まれている。

「ご、ごめんなさい、篠原さん！ まだ今日が23日だと思い込んでて……」

「いや、まあ、大丈夫。まだ夕方までは時間もあるし、とりあえず皆でシャワー浴びてからお昼にしようか」

慌てて詫びるみほに笑顔で答えると、和明は二人を促して浴室へと足を向けた。

——そう、今日はここからが本番なのだ。

第二話

豪華なシャンデリアが天井に幾つも吊るされ、晩秋の夕闇に包まれた外の暗さを感じさせない光を広い室内に行き渡らせる。

ホール内で立食しつつ談笑する人々の多くは高級感あるフォーマルスーツやドレス姿だが、その中にはパンツァージャケット姿の女性も少なからず確認できる。戦車道ワールドカップでまほやしほの指揮のもと奮闘した日本選抜チームの選手たち、もしくは島田愛里寿が主将を務めるプロチーム「群馬ボコーズ」の選手たちだ。

「いやいや、西住さん。この度は本当にお疲れ様でした」

「ありがとうございます、理事長。この結果は陰で尽力していただいた連盟の方々あってこそそのものです。こちらこそ負担をお掛けしました」

和服姿の恰幅の良い壮年がまほと挨拶を交わす。

戦車道連盟のトップである理事長、児玉七郎。和明からすれば会社の社長にあたる存在なのだが、その腰の低さと好々爺めいた人の好きは「理事長」と言うよりは「校長先生」と呼んだ方がしっくり来る感じの人物だ。

紙製の皿に分けられたローストビーフを口に運びつつ、和明は場内に視線を巡らせた。幾つか人の集まっている箇所、そこが本日の「主役」たちのいる場所だ。

そのひとつが動きを見せた。男物のスーツに白いワイシャツという出で立ちの女性、今回の戦車道ワールドカップにおいて日本代表の監督を務めた西住しほがこちらに歩み寄ってくる。

「篠原さん、この度は選手間の調整、本当にありがとうございます」

「あ……いえ、西住さん、こちらこそお世話になりました」

折り目正しく礼をするしほに、和明も皿を置いて「戦車道連盟・涉外課職員」として挨拶を返す。

二、三の言葉を交わし、ほんの少しだけ視線を絡ませ、しほは再び別の人物に挨拶に向かった。周囲の取り巻きは西住流の門下生や、西住流に縁しようとしている戦車道関連企業の幹部などだ。文科省が

莫大な予算を投入している事もあり、それ狙いでひと稼ぎしようと考えてる連中も出てきている。

「大変だよな、しほさん」

周囲に聞こえない程度の小声で呟く。

今のしほは西住流家元としての立場に加えて戦車道プロリーグの最高顧問、高校戦車道連盟理事長も兼任している。顔にこそ出さないが、その忙しさは尋常ではないだろう。監督として彼女もまほやみほと共に昨日までドイツに行っており、会ったのは暫くぶりだったのだが――

「あれは……相当に溜まってたな」

先ほど視線を絡ませた一瞬で和明はそれが理解できた。何と云うか、瞳の奥にゆらりと「炎」が見えたとしても言うべきか。

次に彼女と身体を重ねる時には――まあ、それが今夜なのはほぼ確定なのだが――相応の覚悟が必要だろう。そう思いつつ和明は腕時計を見た。もう少して次の式典が始まるくらいだ。

ふと和明は尿意を覚えた。式典が始まれば中座は難しい。

「……済ませておくか」

足早にホールを出てトイレへと向かう。少し歩いたところの男子トイレは幸いにして空いており、並ばずに利用する事ができた。

今日の式典は二つの意味を持っている。ひとつは日本代表の三位決定を祝う祝賀会、もうひとつが現・島田流師範代にして未来の島田流家元、島田愛里寿の18歳を祝う誕生日会。無論メインは祝賀会だが、戦車道界のプリンスである愛里寿の成人は界限において大きく祝うに足りるニュースである。

手を洗い、トイレを出る。

「おっ……と」

その時、ちようど廊下を通りかかった人影とぶつかりそうになり和明は慌てて一歩引いた。

「すみません、どうも……!」

「いや、こちらへこそ申し訳……!?!」

お互いに謝ろうとした時、同時に言葉が途切れる。

「愛里寿ちゃ……島田、さん」

「……………」

その人影、島田愛里寿は相手が和明である事に気づき、驚きを顔に浮かべこちらを見た。

——この五年間で最も大きく変化したのが彼女なのは間違いないだろう。かつて視線を合わせるには少し腰を落とす必要があった背丈は少し首を曲げるだけで合うようになり、二次性徴を経たその身体は細身ながらもしなやかな、女性らしいラインを描くようになっていた。着ているパンツァージャケットも昔の子供用ではなく大人用のもので、首には銀のチョーカーが巻かれている。

和明は咄嗟に廊下に自分たち以外の他者が居ないか確かめ、その上で公での立場で挨拶をしようとした。

「その、島田さん、今日は……」

「……………」

和明の言葉を待たず、愛里寿は顔を伏せるとホールへと小走りに駆けてゆく。

「……………」

その背中を追いかける事なく、和明は小さくため息をついた。

この五年間、和明を取り巻く状況はほぼ全てが上手くいってくれたが——思い通りにいかなかった事も当然ある。この五年で大きく変わったってしまった和明と愛里寿の関係もそうだ。その事に後悔は無いが、幾らかの「申し訳なき」が和明の心を刺す。それは和明だけでなく、母親である島田千代ですら見落としていた誤算だった。

そのままホールに戻ると、間もなく会場奥に設置された壇上に司会がマイクを手に立った。

「——えー、皆さま。ご歓談中のところ恐れ入ります。それでは只今より島田流師範代、島田愛里寿様の誕生日セレモニーを行わせていただきます。壇上にご注目ください」

賑わっていた会場内が次第に静かになり、人々の視線が壇上へと向けられる。そこには直径1mはありそうな巨大なホールケーキが置かれ、その横には愛里寿と千代、そして一步離れて理事長が立っ

た。

司会からまず千代にマイクが渡され、一礼した千代は聴衆に挨拶を始めた。

「今日良き日、戦車道ワールドカップを祝う場でこうして娘の誕生日を同時に祝っていただけの事に深く感謝致します。プロリーグ発足より四年……微力ながら私たち島田流はその一員として貢献させていただきました。そしてこれからも我が娘ともども誠心誠意、日本戦車道の未来のために努めさせていただきますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします」

背筋を伸ばし、張りがありながら柔らかい声で語る姿が何とも様になっていく。こういった場での挨拶に慣れた人間の優雅な所作に和明は改めて感心する。

千代がマイクを司会に戻すと場内にBGMが流れ始めた。誕生日にはお決まりの曲だ。同時に会場スタッフがケーキに刺さっている18本の蝋燭に火を点けてゆく。

「それでは島田愛里寿様に蝋燭を吹き消していただきます。皆様におかれましては、島田様が消されたら拍手をお願い致します」

司会が案内をしつつ愛里寿をケーキの正面へと促す。愛里寿はこくりと頷くと一歩踏み出した。

「すう……ふうう……」

大きく息を吸い、ひと息で蝋燭の炎を消す。同時に場内は万雷の拍手に包まれた。和明も壇上に向けて拍手を送る。

愛里寿は呼吸を整えると、壇上から一礼して千代からマイクを受け取った。

「皆さん、ありがとうございます。18歳の私の誕生日をこの記念すべき場でしていただいた事は、私の生涯の記憶として決して忘れません」

再び拍手。軽く一礼して、再び愛里寿は口を開く。

「18歳……本当の意味で私は成人となりました。まだまだ若輩ではありませんが、これからも群馬ボコーズを、そして戦車道界隈をより盛り立ててゆけるよう頑張らせていただきます」

そこで愛里寿は少しだけ沈黙した。マイクを握る手に力が籠り、壇上に注がれる視線の中で改めて顔を上げる。

「……については今日、私からも大事な発表があります」

愛里寿の通る声がホールに響く。

イレギュラーな彼女の言葉に聴衆は戸惑いを見せた。これは式次第には無い内容だ。

「……………」

和明は無言で壇上の愛里寿へ視線を送る。愛里寿は続けて言った。

「私、島田愛里寿は婚約を発表させていただきます」

最初は静かな動揺。そしてそれは次第に大きなどよめきへと変わってゆくと、18歳の少女の誕生祝いが婚約発表になった瞬間だ。

こうして直接聞いてもどうにも現実味の沸かない話である。和明は動揺することなくそう思った。

そこでマイクは愛里寿から千代に移った。聴衆を落ち着かせるようなゆつたりした所作で周囲を見渡す。

「本日、その婚約相手もこの会場内に来られています。篠原さん——こちらへ」

どうにも現実味の無い話である——自分の事だと言うのに。

千代の言葉を受け、和明はネクタイを締め直すと壇上へと向かった。次第に周囲の聴衆も和明が「それ」だという事に気づいたのだろう。値踏みするかのような視線を受けつつ和明は階段を上り、愛里寿の横に並び立った。

そこでマイクが初めて理事長へと渡った。照り光る頭に浮かぶ汗を拭いつつ、和明を手で示して紹介を始める。

「えー、彼をご存じの方も多いかと思いますが、改めて紹介させていただきます。篠原和明君、彼は学生時代から戦車道シヨップに務め、また大学一年生の頃から戦車道の試合のボランティアスタッフやボランティアリーダーとして活躍しておりました。現在は我々、戦車道連盟の一員として渉外課に務めており……この度、渉外課・課長補佐への昇進も内定している前途有望な青年であります。彼と島田さんは

戦車道ショップで知り合ったのが縁となり……」

自分の事を大衆の前で褒められるのは何とも面映ゆいものだ。こういった場に慣れていない事もあり、緊張しているのが自分でも分かる。

愛里寿はどうなのだろうか。和明はちらりと横に立つ彼女を見た。

「……………」

愛里寿は和明と同様に聴衆の側へと顔を向けつつ、やはりこちらが気になっていたのか横目で和明の側に視線を送っていた。それと和明の視線が合う。

「……………すう」

彼女が大きく息を吸う。息苦しいのか、ジャケットの胸元へと手を伸ばそうとする。

和明はスツと愛里寿の腕に触れた。

「……………っ！」

ぴくん、と愛里寿が反応を示し、上げようとしていた手が下がる。

「……………」という訳ですので、急な発表ではありませんが、皆様には是非とも二人の前途を祝福していただければと思います。篠原君、では君からも」

その間に理事長の話は終わったようだった。マイクを渡され、和明は軽く咳払いをしてから言った。

「只今ご紹介をいただきました、篠原和明です。自分は……………」

その後、自己紹介を終え壇上を降りてからの和明は、それこそ料理を食べる暇もなく人々に囲まれる事になった。愛里寿の夫になるということは将来的には島田流家元の夫として戦車道界隈に大きな影響力を有するという事だ。様々な質問に当り障りない回答を心がけつつ、和明はパーティーの終了を待った。

やがて司会から閉幕の挨拶があり、拍手と共に式次第が締めくくられる。閉場を促された人々が語り合いながら出口へと向かい、送迎のタクシーや専用の送迎者に乗ってゆく。

和明はその流れから一步離れたところで様子を伺っていた。そこ

に一人の和服の女性が近づく。

「ふふっ……大変だったようですね、篠原様」

「菊代さん……しほさん達はいつもこんな思いをしてるんですね。良
く分かりました」

「慣れておいた方がよろしいかと。明日からはより注目される事にな
るでしょうから」

彼女、井手上菊代の微笑みに和明は安心したように言った。本音を
隠し続けながら社交的に話すというのは、なかなか難しいものだ。

菊代は和明の耳元に口を寄せ、小声で言った。

「皆様、既に階上に向かわれました。あとは篠原様だけでございます」
「もう、ですか!？」

「それだけ期待されていたという事です。お急ぎを」

確かに言われてみればしほ達も愛里寿達も会場から姿を消してい
る。こういった場に慣れているだけに「逃げ方」も心得ているのだろ
う。和明は菊代に導かれるままにホールを出てエレベーターへと向
かった。何故か時折、あえて回り道になる廊下を使って菊代は歩いて
ゆく。

「何でこっちから行くんですか?」

「ホテルスタッフの中に何人か、週刊誌や新聞社から謝礼を受け取っ
て『スパイ』をされている方がおられます。まだ篠原様は顔バレこそ
していませんが、面倒は避けるに越したことはございませんので」
「はあ……」

和明にはさっぱり分からなかったが、菊代には見抜ける何かがある
のだろう。やがて二人はホールから階段で二階に上がり、更にそこか
ら別々のエレベーターに乗った。高速で上がってゆくエレベーター
の階表示は最上階付近で止まり、和明を開放する。

「えつと……ここだな」

廊下を歩きつつ部屋番を確認し、足を止める。

大家族用スイートルーム。海外富裕層の家族客の利用を想定した
大部屋である。和明はネクタイを緩めつつドアをノックした。

十数秒の間隔を置いて、ドアが小さく開かれる。

「……お疲れ様でした、和明さん。菊代さんも来ているのでどうぞ、中へ」

「まほさん？」

「もう私を含めて準備が出来ていますので、これ以上、開けられないんです。早く……」

「わ、分かった」

体を横にして、ドアの隙間に滑り込むように和明は入室した。背後で鍵を閉め直す音がする。

「ふう……すみません、和明さん」

「いや、まあ、その恰好だと……ね」

和明は苦笑しつつ下着姿のままに言った。瑞々しい肢体を黒のレースに彩られた上下で包んだ彼女の姿は実に艶めかしく、パーティー会場で疲弊した和明の精神を見るだけで癒してくれる。

そのまま和明は部屋の奥へと進んだ。

「……ようやく主賓の到着ね」

「あら、しほ。この場合は彼は主権者ホストと言うべきではないかしら？」

「おお……その下着を見るのも久しぶりですね、しほさん、千代さん」

ダブルベッドが複数設置されながらなお広々としたスペースを残す室内、窓からは横浜の煌びやかな夜景が見下ろせる。

その室内に足を踏み入れた和明を最初に迎えたのはしほと千代だった。それぞれが五年前、和明と二人が一時的に別れる決意をした時に記念にと着てきた下着——しほは紐めいた細い布、千代は局部を露出させた赤いガーターとブラ——を着込んでいる。あれから五年の月日を経て二人とも四十代に手がかかる程になったが、その身体も顔も「若い」を全く見せていない。むしろ年を経るごとに熟成された美しさがより増してきているようにさえ思える。

「お、お疲れ様でした、篠原さん」

「みほさんこそ、今日は本当にお疲れ」

続けてしほの背後からおおずとおおずと顔を出したのはみほ。薄いピンクのシンプルな下着が彼女に何とも似合っている。

「……………」

——そして彼女らの前に立つ。パンツァージャケット姿の愛里寿。

「……愛里寿ちゃん」

「……………」

和明の事は既に気付いている筈だが、顔をうつむかせて此方を見ようとしなさい。和明は彼女に歩み寄り、その細い肩に触れつつ言った。

「もう大丈夫……よく我慢できたね」

「……はい、ご主人様」

和明の言葉に愛里寿は短く答えるとジャケットのジッパーを下ろした。その中身を見て和明がため息を漏らす。

「やっぱり……もう、着ていたんだ」

「は、はいっ……あの場所で見せて、『私はご主人様の所有物です』って言えたなら、凄く興奮すると思つて……」

ジャケットの下のシャツのボタンはひとつも閉められていなかった。本当に壇上で愛里寿がジャケットを開放していたなら、聴衆はこの中身を見る事になったろう。

「あふっ……ご主人様、もう、我慢、できません……早くっ……」

和明の身体に顔を押し付け、匂いを確かめるように鼻をスンスンと言わせつつ愛里寿はジャケットをシャツごと脱ぎ、スカートを床に落とした。

露わになったのはレオタードめいた黒のレザウエア。しかし乳房と局部だけは剥き出しで、小ぶりの乳房の先端では薄桃色の乳首が既に固く突起し、股間は股間で亜麻色の陰毛が既に愛液で濡れそぼっているのが和明のストラックス越しに伝わる湿り気で分かる。

「(あそこで止めてなかったら、本当にしてただろうからなア……) 愛里寿ちゃん、んっ……」

「ん、ちゅっ……はあっ……!」

愛里寿の顔を上げ、唇を重ねる。今や完全に和明の雌奴隷となった愛里寿は嬉々として唇を重ね、それだけで軽く達してしまったようであった。

和明が、そして母親の千代ですら見落としていた誤算。

それは彼女、島田愛里寿が飛び級で13歳で大学入学を果たす程の天才であり、大規模な戦車戦の指揮を大人以上に行える程の判断力と才覚を持ち合わせていたが故に見落としていた事——どれだけ聡明でも、彼女の精神性は年相応の少女と同じだったという事実だ。

13歳の少女の精神性はスポンジのようなものだ。周囲の様々な事柄に興味を持ち、知り、吸収してゆくことで成長してゆく。だからこそ親は子供により良いものを与えて成長させようとするし、子供はそんな親が隠すものを見つけ、吸収しようとする。

では、そんな13歳の少女がアナルセックス等を入口としてセックスの強烈な快感を知り、特定の男性に依存するようになったなら？
ましてやその少女が天才的な学習能力と吸収力を持つていたとしたら？

——雑な表現をするならば「ドハマリ」である。

日頃、少女として年上の戦車乗りを叱咤指導している重責からの反動か、愛里寿は和明に屈服されるプレイを望むようになり、和明もそれに応えようと頑張ってしまった。

その結果——気づけば愛里寿は戦車道での欲求不満などを抜きに和明とのセックスを望むようになり、それこそ触れただけで発情する程の「和明専用の雌奴隷」となっていた。彼女の首に巻かれたチョーカーも、もともとは首輪を望んだ愛里寿に代替品として贈ったものだ。

「ふあっ……ご主人様のオチンポ様、もう固くなってます……」

「くっ……ご、こら、愛里寿ちゃん、まだ挨拶も終わってないのに……」

和明の股間に顔を埋めるようにしつつ、愛里寿は器用に和明のベルトを外すとストラップスをずり下げさせた。トランクスの中で跳ねる肉棒を愛おしそうに撫で、熱い吐息を吐きかける。

「ごめんなさいね、和明君。躰がなくなって……」

「い、いいえ、これは俺も責任がありますから」

申し訳なさそうに言う千代に答える。その間にも愛里寿は動きを

止めずにトランクスを引き下ろし、和明の赤黒く肥大した肉棒を外気に晒した。

ところがその時、ふと愛里寿は動きを止め、怪訝な表情で和明を見上げた。

「ご主人様、ここからみほの匂いがしますが……今日、したの？」

「えっ!? や、ああ、それは……」

「ご、ごめん、愛里寿さん！ 時差呆けしちゃって、明日だと思って私から篠原さんに……」

「しっかり洗った筈なのだが、愛里寿には通用しなかったらしい。言いよどむ和明をフォローするようにみほが言う。

愛里寿はみほに少しだけ不満の視線を送ったが、切り替えるようにその視線を龟头へと移した。

「怒ってません。どの道、これからは私の匂いで上書きします……ンツ、んむっ……」

「ううっ……!」

愛里寿の小さい口がいつぱいに開かれ、和明の肉棒を呑み込んでゆく。竿を唾液に塗れさせると口を一旦離して、細い指を絡ませると慣れた動きで扱いてゆく。

「んっ……それと、ご主人様。何故あの時、トイレに行くなら言ってくれなかったの？ 我慢できなくなったら、何時でも私が飲むのに……」

「くうっ……いや、それはまた、次の機会、でっ……ああ、堪らないよ、愛里寿ちゃんっ……!」

愛里寿の手淫は技量こそしほや千代の手淫に比べれば拙いものだが、それを補うだけの健気さがあった。ビクビクと竿が跳ね、先端からは先走りが滲む。

このまま彼女に任せて一度射精するのも悪くないと思ったが、今日の『式次第』はそうではない。和明は愛里寿の頭を撫でつつ言った。「愛里寿ちゃん、一度『おあずけ』だ。最初の射精は、愛里寿ちゃんの手じゃなくて……」

「あっ……はい、ご主人様」

発情しつつも和明の言葉に何かを思い出したのか、愛里寿は手から肉棒を開放するとベッドに腰掛けた。改めて和明も上着を脱ぎ、靴やスラックスと共にまとめて床に置く。筋肉質ながらも固太りしていない、精悍な身体。その中央では怒張した肉棒が強烈な存在感を放つ。

愛里寿が素直に離れたのを確かめ、本日の「司会役」の千代が言った。

「さて……それでは、始めましょうか。『娘、島田愛里寿の処女喪失セレモニー、及び戦車道ワールドカップ・本当の凱旋パーティー』をね」

「……はい」

「皆様方のお食事やお飲み物、精力剤などのご用意は全て整っております。ごゆるりとお楽しみください」

部屋の隅の椅子に腰かける菊代が微笑みつつ言った。

「(……頑張らないとな)」

和明は快感への期待と同時に強い責任感を覚えた。この部屋は今日、明日の二日間予約しており、更に和明を含めた全員が予定を調整して明日は完全にフリーとなっている。

——つまりここから24時間、五人の美女、美少女を相手に休むことなく交わり合うのだ。「18歳の誕生日に愛里寿の前の処女を奪う」というのはそれとは別で交わした約束だったのだが、ワールドカップの日程が上手く噛み合ってくれた格好だ。果たしてどこまで相手をし切れるか。

服を脱ぎ終えた和明は愛里寿のベッドに乗った。

「お待ちせ、愛里寿ちゃん……それじゃ、貰うね」

「は……はいっ……」

愛里寿は白い肌を赤くして、ベッドで仰向けになると自分から秘所に指を添え、淡い色の陰唇を広げた。

「この日を、待ってた……ご主人様、これからはケツ穴や、口だけでなく、おまんこでも逞しいオチンポ様のお世話を出来るのが、幸せで、堪りません……もう、十分濡れてますから、そのガチガチのオチンポ様を、思い切り挿入してください……私の初めては、全部、ご主人様の

もの、だから……ンンツ！」

無口でクールな天才少女、それが世間の島田愛里寿のイメージ。そんな彼女が自ら挿入をねだり腰を振る姿。それを知る男性は自分だけだという事実は和明の中から否応なく興奮を湧き上がらせる。

「……愛里寿ちゃんっ！」

「あふ、ああっ！ ご主人、さまっ！ 早く、早くくださいっ！」

組み敷くように彼女に覆いかぶさり、ひくつく亀頭に手を添えて狙いを定める。銀のチョーカーを汗で光らせつつ、愛里寿は和明の背中に手を回し悶えた。

第三話

「あ、ちよつと和明君。少しだけお尻、上げて貰っていいい？」

ベイサイドホテル大型スイートルーム。ベッドの上で組み敷かれたレザーウエアの少女と、彼女の「主人」である青年。

レザーウエアから零れる掌サイズの乳房を汗に濡らしつつ挿入を待ち望む島田愛里寿、彼女の秘唇に和明が自身の亀頭を押し当て腰を突き出そうとした瞬間、二人の後ろから千代が声をかけてきた。

「ど、どうしたんですか、千代さっ……!?!」

顔だけ彼女の方に向けた和明は、思わず言葉を失った。

いつの間にやらベッドの後方に三脚が立てられ、そこにビデオカメラが設置されている。

和明の問いかけに千代は嬉しそうに答えた。

「一生に一度の娘の処女喪失ですもの。それが親の眼前で行われるとなれば、記念撮影は当然でしょう?」

「当然って……いや、俺はともかくとして愛里寿ちゃんが……」

「ああ……と、撮ってください、お母様。私にご主人様の、か、固くて太いオチンポ様で、初めてを、奪われる所……全部、撮って……!」

「……」
やはり、何と言うか千代たちのこういう所はどこか浮世離れしていると感じる。

とはいえ多数決で撮影が決定したなら仕方ない。和明は少し腰を持ち上げた。

「ど、どうですか、千代さん?」

「ん……ちよつと遠いわね。えつと、ズームを上げて、ピントを……あらっ!」

「島田さん、その操作はこちらです」

ピントを合わせるのに苦心する千代にまほがフォローする。両方もが下着姿なのを除けばホームビデオを撮影しているような雰囲気。気の絵面だ。

「……うん、いい感じになったわ。それじゃあ和明君、改めてお願い

ね」

「は、はい」

何だか水を差された格好になったが、気を取り直して和明は愛里寿に向き直った。

「ごめん、愛里寿ちゃん。じゃあ今度こそ……うっ！」

「ソツ……ご主人様の、さつきより、ちよつと萎んで……今、戻しますね……」

和明の背中に回っていた愛里寿の両手がするりと解かれ、そのまま肉棒へと移る。10本の細い指が白い蛇のように絡みつき、しこしこ竿を扱く。

忽ちの内に肉棒は寸前までの固さと大きさを取り戻し、愛里寿の手の中で激しく脈動した。

「はあ……伝わって、きます……オチンポ様、どくどくって……！」

嬉しそうに愛里寿は瞳を輝かせる。

何とも健気な性奴隷になったものだ。和明は内心で可愛らしいと思いつながら、同時に強い興奮が湧き上がるのを感じていた。

愛里寿の指が肉棒から離れるのに合わせて、和明は竿に手を添えた。龟头を秘唇に擦りつけると、既に十二分に濡れそぼった愛里寿の秘所から更に愛液が溢れ、赤黒い龟头を照り光らせる。

「はっ……早く、くださいっ……我慢できない、だらしない、奴隷に……思い切り、強くっ……！」

「……ああ、いくよ」

和明は腰に力を籠めて肉棒を愛里寿の陰唇へと龟头を埋め込んだ。

「んくっ……！」

愛里寿の身体がびくと震える。しかし和明を抱きしめる手が緩むことはない。むしろより密着しようとして力を増してくる。それに応えるために和明は更に腰を進めた。

「ぐっ……愛里寿、ちゃんっ……！」

間もなく強い抵抗を返す箇所到達した。愛里寿の処女膜だ。結合部に目をやれば秘唇は限界まで広がっており、何とも痛々しい様となっている。和明は腰を少し進めてみた。

「はあっ、あ、くっ……!」

「(……まだ、厳しかったか?)」

愛里寿の顔が痛みに歪む。和明の心に彼女への気遣いと共に迷いが生じる。

この五年で挿入できる程度に成長した愛里寿の身体ではあつたが、それはあくまで「多少無理をすれば可能である」というだけで「スムーズな挿入が可能である」という訳ではない。これだけ濡れていてもなお固く閉じられた処女膜をここで破るべきか、もっと入念な準備をしてからの方が良いのではないか？ 和明は腰を止め、考える。

その時、愛里寿が息を吸った。

「すう……う、ああっ!」

「あ、愛里寿ちゃん、ちよっ……!?!」

直後の愛里寿の行動は予想外のものだった。

ずり上がりを堪えていた愛里寿が自ら腰を和明に寄せてきたのだ。幾ら愛液で滑らかになつているとはいえ、和明の巨根を迎え入れるには余りに早急な手段と言えた。確かに少しずつ肉棒は愛里寿の膣内へと挿入されてゆくが、同時にプチプチと密着していたものが千切れ、てゆくような感触を覚える。

「愛里寿ちゃん、そんな無茶、したら……ンツ!」

「んっ、ちゅ、んはっ……ご、ご主人、様……ううっ!」

制止しようとする和明の口が愛里寿の唇で封じられる。幾度か唇を重ね、彼女が言った。

「だ、大丈夫です、ご主人様！ お願いします、この、ままつ!」

「いや、だって愛里寿ちゃん、こんな……痛いだろ?」

「痛い、です……じんじんして、身体が裂ける、ようなっ……!」

「だったら、そんな無理しないで!」

「それが……幸せなんです……!」

背中に回された彼女の手に力が籠るのが分かる。瞳に涙を浮かべつつ、愛里寿は和明に懇願した。

「五年間、私はご主人様にケツ穴で奉仕してきました……でも、お母様や、西住さんのおまんこで、ご主人様がコンドーム無しで、んっ、き、

気持ちよさそうに射精している姿に、いつも悔しさを感じて、んくっ！ ま、ましたっ……！」

「愛里寿ちゃん……！」

「今日、18歳の誕生日に折角ご主人様が初めてを貰ってくれるのに……出来なかつたら、私、絶対後悔、する、からっ！」

「……分かった！」

——本当に健気で可愛い、自分だけの奴隷。

そんな彼女の意思を無下にするのは、それこそ男として失格だ。和明は腹を決め、自分からも肉棒をより奥へと差し込んだ。強烈な締め付けを感じつつ、怒張を更に埋没させてゆく。

「……流石は我が娘、強く育ってくれたものね」

「あ、あの、これってそういう場面なんですか？」

しみじみと言う千代の言葉に、みほが思わず問いかける。

今もビデオカメラでは自分と愛里寿の結合部が映っているのだろう。破瓜の出血は避けられなかったが、ここまで来たら行くところまで行く。すなわち、愛里寿の処女を完全に奪い、膣内射精するところまで。

「あぐっ！ あっ、ああっ！」

「くうっ……う、はあっ……！」

やがて亀頭はこつんとした感触へと到達した。愛里寿の子宮口だ。和明は大きく息を吐き、身体を支えていた手を愛里寿の身体に回すと優しく抱きしめた。

「ふう……愛里寿ちゃん、もう、大丈夫……全部、挿入^{はい}った……」

「はっ、はいっ……分かり、ますっ……ご主人様の、奥まで、来てますっ……！」

「早めに終わらせる。ちよつと、待ってて……うっ、くうっ！」

「ひうっ！ あ、ひいっ！」

処女の相手をしたのはかつて北海道でみほの相手をした時以来だが、当時のみほよりやや小柄な愛里寿の膣内はやはり狭く、強い締め付けで和明の肉棒全体を包んでくる。しかしその中は温かく滑らかで、細かく擦るだけで十分な快感が得られた。

結合部を見れば破瓜の血が愛液に混じり溢れているのが見える。出来るだけ早めに一旦終わらせ、彼女を満足させると同時に休ませたい。そんな思いで和明は腰を使い始めた。小刻みな動きに合わせ、途切れ途切れに愛里寿が喘ぐ。

「ごっ、ご主人様っ！ あうっ！ ど、どう、ですかっ!? わたっ、私のおま、んこっ、痛く、ない、ですかっ!？」

「ああ、気持ちいいよ。最高、だっ!」

「うれっ、嬉しい、ですっ! もっと、もっと感じて、下さいっ!」

まだ痛みは治まっていないだろうに、愛里寿は涙を流しつつも嬉しそうに笑みを浮かべ、自身の中を蹂躪する肉棒の動きに合わせて身体を震わせる。

普段のような我慢をしていない事もあり、射精感はすぐに高まってきた。ストロークを気持ち大きくしつつ、和明は更に腰の動きを速める。

「そ、そろそろ、出るっ……!」

「っ! だ、射精してっ、射精してくださいっ! ご主人様の、熱いのっ! コンドーム越しじゃない、生の、んあっ、ザ、ザーメンっ! 全部、注ぎこんでくださいっ!」

「うおっ、あ、愛里寿ちゃんっ! うああっ!」

卑猥な言葉を連呼し射精を懇願する愛里寿の姿に、和明は遠慮する事無く射精感を解き放つ。怒涛の勢いで精液が迸り、破瓜したばかりの愛里寿の膣内に吐き出された。

歯を食いしばりつつ、愛里寿は身体を離すことなく身を震わせ、初めての射精を受け止めてゆく。

「んっ、凄い、これっ……ゴム越しに出されるの、より、全然っ……!」

「うっ……ヤバ、止まらないっ……!」

白い肌に玉のような汗を浮かべ悶える愛里寿の膣内に、和明自身が驚く程の量の白濁液が更に注がれてゆく。

「あっ……ふあ……!」

そこでついに愛里寿の緊張が解けたのだろう。力尽きたようにぐったりと身体を横たえると、膣圧に押されるように肉棒が抜けた。

彼女の秘唇から破瓜の血が混じった精液が逆流してゆく。

「……お疲れ様、和明君」

「いえ……正直、途中で一度やめかけました。最後までいけたのは愛里寿ちゃんのお陰です」

背後から優しくかけられる千代の声。振り向きつつ和明は答えた。

「愛里寿がそこまで覚悟できたのは、相手が和明君だったからよ。謙遜しなくていいわ」

そう言つて微笑むと、千代はカメラを片付け始めた。

射精の余韻が次第に治まってゆく。和明は自分の調子を確認した。まだまだ活力は残っている、十分に連戦可能だ。

「えっと、それじゃ次は……」

「お待ちください、篠原様」

五人相手ではそう待たせてもいられない。和明は口を開いたが、控えていた菊代がそこで声をかけてきた。

「菊代さん？ 俺ならまだまだ……」

「いいえ、そうではなく……一度、逸物を洗われた方がよろしいかと」
「え？ あ、うわっ！」

そう言われ、和明は自身の股間を見て思わず声をあげた。まだ大きいままの和明の巨根は愛里寿の愛液と自身の精液に加え、まほやみほの時と比べ結構な量の破瓜の血に濡れていた。確かにこのまま他の女性へ挿入する訳にはいかないし、拭き取るだけでは不十分だろう。「ご入浴の用意は出来ております。島田のお嬢様のケアはわたくしが引き受けますので、篠原様は身体をお清めください。明後日の朝までは時間もございますし、慌てず参りましょう」

「分かりました……じゃあ、ちよつと失礼します」

周囲に頭を下げ、和明は浴室へと向かった。菊代が手で示す「bathroom」と書かれたドアを開ける。

「うお……!?!」

ホテルにありがちなトイレ併設のユニットバスを想像していた和明は、ドアの向こうの景色に再び驚いた。

ドアを開けた先は洗面台と衣類置き場を兼ねた小部屋で、更にそこ

からガラス戸を経て浴室へと続いている。どうやら部屋だけでなく浴室も大人数での利用を想定して作られているようで、ちよつとした銭湯並みの広さだ。

「流石はスイートルーム……」

変なところに感心しつつ、和明はそのまま浴室に入った。床には子供の転倒時のためか柔らかいマットが敷かれている。菊代が用意ができていると言っていた通り給湯器は既に稼働しており、温かい湯気が身体を包む。

「えつと……よつ」

壁際に積まれた風呂用の椅子のひとつを取り、幾つかある蛇口の前に座る。備え付けのボディソープの容器から適量を取り、置かれていたスポンジに付ける。

結構汗もかいてしまったし、股間だけでなく全身も洗おうか。そう思っていた和明の背後でガラス戸の開く音がした。

「うわあ……こんなに広いんだ……」

「みほ、そんなにキョロキョロしていると転ぶぞ?」

「六人家族が余裕で入れる設計になってるの、湯上りにマッサージを頼むことも出来るわ」

「へ? え? え!?!」

みほ、まほ、千代の三人が当たり前のように浴室に入ってきた。風呂に入る以上は当然と言えば当然だが、三人とも全裸だ。

完全な不意打ちに、和明は思わず股間を隠しつつ言った。

「ちよ、ち、千代さん!?! 何で!?!」

「お疲れの和明君にサービス……という所かしら」

「島田さんから提案を受けて、私達も手伝おうと思ったのでご一緒させていただきました」

「私も、その、朝から篠原さんには迷惑をかけたから……」

和明とは逆に千代たちは自分の裸身を隠そうとする気配もなく答える。

その時、ふと和明の脳裏に疑問が浮かんだ。

「ま、まあ話は分かりましたけど……しほさんは?」

まだすぐに復帰できないであろう愛里寿が居ないのは分かるが、おそらく一番溜まっている筈のしほが居ないのは何故か。

和明の問いに千代はさらりと答えた。

「しほなら愛里寿と話をしているわ」

「愛里寿ちゃんど？」

あまり接点の無い二人である。何か優先すべき相談事でもあったのだろうか。

「どちらにせよ、まずは和明君は自分を綺麗にしないとね。さ、そのまま座っていて」

「は、はあ……」

少し気になるところであったが、千代に押し切られる形で和明は再び椅子に座らされた。

「それじゃあ、私が後ろ、まほさんが右、みほさんが左ね」

「分かりました」

「は、はい！」

千代の指示に合わせ、三人が和明を囲むように展開する。

「和明君、少し目を閉じて貰ってもいい？」

「目、ですか？ いいですけど……」

何をするつもりかは分からないが——まあ、千代の指示なら少なくとも自分を危険な目には遭わせまい。和明は目を閉じ、そのまま待った。

「……………」

暗闇の中、三人の気配だけがする。

「…………あの、千代さん？ そろそろ目を…………ふおっ!？」

突如、背中に柔らかい感触が押し当てられた。きめ細やかな肌と、ボディソープの香り。

「ちよ、千代さん!?! スポンジは、ううっ!?!」

今度は左右の腕にそれぞれ別の温もりが密着する。

「ンッ……………」

「どうですか、篠原さん?！」

右の耳にはまほの艶っぽい吐息、左の耳からはみほの囁き。

「和明くん、そのまま目を閉じて、集中してみなさい……んっ、あふっ……」

後ろから千代の声が出たかと思えば、彼女は身体を上下に動かし始めたようだった。背後に押し付けられた千代の豊かな乳房の弾力と、その先端で固くなっている乳首の突起の感触がいつもよりはつきりと感じる。

「和明さん、私も……あっ、はあっ……」

「こ、こっ、かな……ンンッ……」

同時にまほとみほも身体を動かし始めた。どうやら二人はそれぞれ股から下腹部にかけてを使って腕を挟み、自身の秘所を擦りつけているようだ。三人とも身体にボディソープを塗っているようで、滑らかに和明の全身を愛撫してくる。

「うお……こ、これっ……」

未知の快感に和明は呻いた。目を閉じているせいも、それ以外の間隔が鋭敏になっているようだ。三人の甘い吐息や肌の感触、次第に濡れてきているまほとみほの秘所の襞の滑り、それらが和明にも快感を与えてくる。

「さて……肝心のこころも綺麗にしないとね」

「……はい」

「ふあ……あ、あんっ……」

「みほ、自分だけが気持ちよくなっただけは駄目だぞ？　ちゃんと和明さんにしてあげないと」

「うっ、うん……」

ふと、三人の身体が少し離れた。体温を感じるので近くには居る筈だが――

「えっ？　あ、ああっ！」

突如、和明の肉棒に強烈な快感が与えられた。イソギンチャクのような無数の触手に一斉に襲い掛かれたような感触。いや、これは――

「ちよ、ちよと待った！　三人は反則だっ！」

堪らず和明は目を開けて声を出した。

「あら、目を開けちやた」

「みほ、位置を交代しよう。次は私が……」

「ああ……篠原さんのおちんちん、まだ大きくなる……!」

三人はそれぞれの位置のまま腰を落とし、同時に和明の肉棒を扱っていた。和明の肉棒の太さと長さがあつてこそ可能な芸当だ。千代、まほ、みほの計三十本の指が時に分担して、時には絡み合つて全体を扱き上げている。

不意打ちだった事もあり、和明が堪える間もなく強い射精感がこみ上げてきた。

「ふふっ、この感じだともう射精しそうね……構わないわ、和明君。このまま射精して……」

「遠慮なく、私たちの指でイってください、和明さん……」

「篠原さん……ちよつと、速くしますね……」

「ぐっ、うっ、うおおっ!」

ローション代わりのボディソープ液と先走りが混じり、くちゅくちゅと音を立てて肉棒が扱かれ、その手の動きは泡が立つ程に早くなってゆく。

何とか堪えようとした和明だったが、三人がかりの前にそれは余りに無力な抵抗だった。

「ぐうっ! も、もう、駄目、だあっ!」

断末魔めいた叫びと共に和明は鈴口から精液を迸らせた。その最中も搾り取る勢いで三人の手は肉棒を更に扱く。

「かつ、あ、ううっ……!」

勢いよく飛んだ精液はマットを濡らし、やがて勢いが衰えると三人の手に垂れ、その美しい指を濡らしていった。

「あつ、ハアッ……!」

射精の余韻に和明が快感と苦悶の混じった声を漏らし、そこでようやく肉棒が解放された。腰が抜けるような快感に立てない和明に千代が言う。

「どうだった? こういうのも、悪くないでしょう?」

「た、確かに気持ち良かったですけど……毎回やられると大変かも、で

すね……」

「フフツ、和明さんならすぐに慣れるかもしれないね」

素直な感想にまほが微笑む。和明は千代に聞いた。

「どうしますか？ このまま……しますか？」

「そうしたい所だけど……そろそろ一度上がりましょうか。しほも支度を終えているでしょうし」

「……？」

「先に出ておくから、和明くんはゆっくり来てね」

やはり、しほが入ってこなかったのには何か事情があったのだろうか。

そんな事を思う間に三人は湯をかけて軽く身体を流し、浴室から出ていった。何だか一方的に色々とされただけのような気がするが、股間を中心に全体を洗ってから身体を拭い、和明は最後に浴室を出た。「すみません、しほさん。待たせ……」

部屋に居るはずのしほに和明は詫びを言おうとしたが、それは途中で途切れた。

「大丈夫よ、和明くん。こっちも話が済んで、準備が出来たところだったから」

愛里寿がちよこんと座るベッドの隣のベッドの上に、しほが居た。服装は和明が浴室に向かう前と変わっていない。例の紐のような、乳輪と陰毛を隠しきれていない下着だ。

しかしそれにもう一つ、彼女を彩るパーツが加わっていた。花飾りを添えられた白く半透明の布が頭に乘せられている。あれは――

「(ウエディング……ベール?)」

親族の結婚式などで見たことはあった。確か花嫁が着ける純白のベールだ。しほの艶やかな黒髪とのコントラストが何とも似合っている。

和明の視線がベールに注がれているのに気付いたのか、しほが恥じらうように言った。

「その……どうかしらっ？」

「えっ!? いや、どうって……その、似合ってます、けど……っ？」

だが、何故そんな衣装を着けているのか？

頭からの疑問符が取れない和明に、バスタオルを巻いた千代が言った。

「ふふっ、驚いてくれたようね」

「千代さん？」

「これはしほから貴方へのサプライズ。和明君には内緒にしていたけど、これも予定の内」

「サプライズ……ですか？」

確かに驚きはしたが――

「和明くん……その、五年前、貴方が私たちに決意を話してくれた時の事、覚えているかしら？」

その時、しほが問いかけてきた。

忘れるはずもない。和明は答える。

「……勿論、覚えています」

「結局、関係そのものはなし崩しに続いたけど……和明くんはあの時の決意のまま、本当に五年で私たちと肩を並べて仕事を出来るほどになった」

「それはしほさんや千代さんのお陰ですよ。俺だけじゃ、多分今もヒラの現場スタッフだったと思います」

「いいえ、きつと私たちの手助けが無かったとしても、和明くんは此処まで来たと思う」

「そんな……」

しほに正面から褒められるというのは、考えてみればあまり無かった。和明は少し赤面し、言葉を濁す。

そんな和明の反応に、しほは静かに言った。

「考えていたの。……ここまで来てくれた和明くんに、私は何が出来るのだろうかって」

そう語るしほの瞳は潤み、白い頬は赤く染まっている。彼女がここまで緊張しているのを見るのも初めてだ。

「……ねえ、和明くん」

「は、はいっ」

「……最近なのだけど……その、折を見て夫との『回数』を増やしているの。まほも大学を出たし、来年にはみほも卒業で手がかからなくなるから、あと一人くらい欲しい……って、言ってるね」

「はあ……」

突然にしほの夫婦生活の事を聞かされ、和明は余計に混乱した。何故この場でそんな話を？

そんな和明のリアクションがツボに入ったのだろう。千代が笑いを堪えつつ言った。

「んっ、フフッ……しほ、伝わってないわよ？ 和明くん、困ってるじゃないの」

「えっ？ あ、千代さん、どういう意味なんです？」

思わず尋ねた和明に、千代はやはりさりりと答えた。

「分からない？ 『アリバイ作り』よ」

「アリバイ、って……」

この場合の「アリバイ」が意味するもの。それは――

「……っ!？」

どくん、と心臓が鳴った。

ここまでのしほの言動と衣装、そして「アリバイ作り」。それは、つまり。

「ちょうど周期が合っていて助かったわ……今日が一番危ない日」

しほはそう言うと、右手を左手に添えた。

今までのどのような行為の最中でも外さなかった、結婚指輪。それを抜き、ベッドの傍に置く。

姿勢を四つん這いに変え、緩やかに尻をくねらせつつ、しほは言った。

「……孕ませて、和明」

第四話

「孕ませて……和明」

「あ……がつ……」

突然に本物の激情がこみ上げてきた時、人間は言葉が出なくなる。その事を和明は理解することも出来なかった。

ぱん、と腹に何かが強くとたつた。瞬時に勃起した肉棒が跳ね、腹を叩いたのだ。その大きさは缶コーラサイズを超え、大容量のペットボトルサイズまで膨れ上がっている。

「ぐ……あ、ああ……！」

「これは……ちよつと効き過ぎたんじゃないかしら？」

「はい。篠原様、理性が完全に飛んでしまわれたようで」

後ろで語る千代と菊代の声がやけに遠く感じる。

「あつ……あああつ！」

頭で判断するよりも早く体が動いていた。飢えた虎が獲物に飛び掛かるような勢いでベッドに上がり、むっちりとしたしほの尻肉を掴む。手に吸い付くような白い肌に食い込む布をずらし、彼女の秘所を露わにする。

どうやらしほはそちらの「準備」もしていたようだ。黒い陰毛は既にテラテラと光沢を放ち、愛液に濡れている。

「うおっ、おおっ！」

「ああ……和明。そんな、大きくしてっ、凄いつ……！」

何かを言おうとしても、獣のような声しか出てこない。ウエディングボールを揺らすしほは、まるで初夜の新妻のように頬を染め、和明の肉棒へ潤んだ瞳を向ける。

——犯したい。この牝の腔内に自分の肉棒を挿入し、存分に蹂躪し、絶対に妊娠する程に射精して、孕ませたい！　まるで全身の細胞がそう訴えかけているかのような強烈な衝動。

和明はそれに抗うことなく肉棒に手を添え、角度を下げるのに苦勞しながらしほの秘唇に位置を定めた。陰毛に滴る愛液が亀頭を濡らす。

そのまま一切の遠慮なく、和明は腰を一気に奥まで突き入れた。

「おうっ！　が、ああっ！」

「んああっ！　か、和明っ！　和明いっ！」

乱暴な挿入にもしほは嬉々とした嬌声をあげる。和明はそんな嬌声すら聞こえないかのように腰を大きく引き、再び突き込む。幾度も、次第に速度を上げて。

「うおっ、おっ、おおっ！」

「ひぐっ！　あ、あひっ！　あああっ！　すごっ、凄いつ！　かずっ、和明っ、凄いつ！」

ぱんぱんと肉が激しく打ち合う音——否、最早「ばちんばちん」と表現した方が近いような激しい音を立てつつ和明は限界まで怒張した肉棒でしほの膣内を激しく抽送する。相手が愛里寿だったなら、本当に壊れてしまっているだろう。それ程の激しいピストン。

しかししほの膣内はそんな衝撃を全て受け止めつつ、和明の肉棒を強く締めつける。無数の襞はそんな乱暴な抽送を待っていたかのようには蠢き、肉棒が奥へ進む時は逃がさないように、抜かれる時は名残惜しように龟头を、鈴口を、竿を刺激してくる。

「あひいっ！　ああんっ！　か、和明っ！　駄目っ、そんな、すぐっ！

イツ……！」

「ぐ、ああっ！」

あっさりと一度目の射精感がこみ上げ、和明は我慢することなくそれを放った。どくどくと精液がしほの膣内に流れ込んでゆく。

「うぐっ、うおっ、うおおっ！」

「んひいっ！　そんなっ！　射精、した、ままつ！　あふっ、あ、ああっ！」

吠えるような声と共に和明は射精しながら抽送を続けた。勃起が治まる気配がまるで無い。睾丸がどくどくと凄いい勢いで精液を再生産しているのが分かる。

そこでようやく和明は多少の意識を取り戻した。しかし中からの衝動を抑えるつもりは無い。ウエディングベールの感触を覚えながらしほの背に顔を寄せ、組み敷くように更に犯す。

「あああつ！ しほ、さんっ！ 何て事、言うんですっ！」

「あつああんっ！ 和明っ！ もっと、もっとしてっ！ しほのおまんこ、もっと射精してっ！」

「っ！ 今日は、全員の相手をしようと思つて、たのにつ！ そんな事、言われたらっ！ 俺っ、この後の精液っ！ 全部っ！ しほさんにつ！ 出すしかっ！ 無いじゃっ！ ないですかっ！」

「あひっ！ ごめっ、ごめん、なさいっ！ 欲しかった、のっ！ 和明との、子供っ、欲しかったのおっ！」

「あああつ！ しほっ、しほおっ！」

まさか、今日ここまでで出した精液を勿体ないと思うことになろうとは。愛里寿には悪いが、それが今の和明の本当の気持ちだった。

精液によつてより滑らかなになった膣内で肉棒を子宮口まで突き入れるたび、艶やかな黒髪を頬に貼りつかせたしほが悶える。同時に精液を更に求めてくる膣内の動きに和明も呻く。

それは既に理性ある人間のセックスではなく「交尾」だった。生殖本能に抗うことなく、ただ互いを貪り、牝が受精を求めるだけの獣の交わり。

「しほっ！ しほの、まんこっ！ しほのまんこ、今までで一番、熱いっ！ 俺のに、喰いついてくるっ！」

「ふあんっ！ か、かずっ、和明のちんぽも、今までで一番、大きくつて、素敵、いっ！ ちんぽっ、和明、もっと、ちんぽおっ！」

「うおおっ！ しほおっ！」

「ふひっ！ あ、あひいっ！ 和明っ、熱っ！ 焼け、そうっ……！」

清廉さを示す白いベールを揺らしながら犬のように舌を出し、蕩け切った表情で悶えるしほ。和明は堪らず二度目の射精を放った。

「ぐっ……おおっ！」

「んひいっ！」

和明は下腹部に力を籠め、射精後の余韻に浸ろうとしていた肉棒を叱咤するように勃起させる。膣内で再び膨れ上がった怒張の感触にしほが背を反らす。

「しほっ！ まだ、何回でも、出すぞっ！ 絶対、今晚ッ！ 孕ませて、

やる、からっつ！」

「ああんっ！ うれっ、嬉しいっ、和明っ！ 射精してっ！ 射精してっ！ お腹、たぶたぶになるまでっ！ 精液、全部出してっ！」

三度のピストンにしほは歓喜の声と共に更なる射精を懇願する。

結合部からボタボタと溢れる精液を気にすることなく、和明は三度腰を使い始めた。

「……凄い」

横のベッドに座る愛里寿がぼつりと眩く。

そんな彼女に寄り添うように、バスタオル姿の千代が腰掛けた。

「お母様？」

「よく見ておきなさい、愛里寿。あれが本当の牡と牝の交わりというものよ」

「……はい」

愛里寿の視線の先、四つん這いになっていたしほは上体を支えられなくなってきたのか犬の「伏せ」のように上半身を伏せ、腰だけを突き出すような格好になっていた。それに覆いかぶさるように和明が後ろから彼女の尻を掴み、泡立つほどのピストンで肉棒を突き込んでいる。

「どうだっ!? どうだ、しほっ!?!」

「ひぐっ！ そこっ！ そんなっ、挟られてっ！ 和明のちんぽっ！

奥ツ、一番、奥っ！」

もはや二人は周囲の愛里寿たちが見えていないかのようだった。ベッドの横に立ち二人を見ているまほとみほも、その激しさに吞まれているのが分かる。

同時に愛里寿は自分の処女を奪った時の和明が、どれだけ此方を氣遣ってくれていたかを理解した。眼前で行われている激しいピストンを、果たして自分は受けられるようになるだろうか。

「ぐおおっ！ また、射精すぞ、しほっ！」

「あっ、あひっ、あああっ！」

汗に塗れ、和明の全力を受け止めるしほの痴態。ほんの十数分前に

自分と真剣に向き合った女性と同一人物とは思えないほどだ。

和明が入浴している最中、愛里寿は菊代から破瓜の血を拭かれ、デリケートな箇所用のクリーム剤を塗って貰っていた。しほが話しかけてきたのはそれが落ち着いてからである。

「島田さん、ちよつといいかしら?」

「はい、何でしょう?」

「相談があるの、大事な話が」

そう言うとしほは愛里寿の向かいのベッドに腰掛けた。実質的な乱交パーティーの最中だというのに、真剣な表情で愛里寿を見つめている。

少しだけ迷いを見せた後、しほは口を開いた。

「島田さん。今晚……彼、和明くんの子供を作らせて欲しいの」

予想外の言葉であった。内心の驚きを隠しつつ、愛里寿は落ち着いた口調で聞き返した。

「何故、それを私に?」

「貴女が将来の彼の妻だから。許しを請うのは当然でしょう」

20歳以上の、それこそ親子ほどに歳の差が愛里寿としほには有る。

しかし、しほは愛里寿を子供扱いせず一人の女性として向き合っていた。まだ股の間に強い違和感があったが、それでも自然と姿勢が正される。

「もし、それを断ったら?」

「何もしないわ。今日は危ない日だから和明くんにはコンドームを使つて貰つて、普段通りにするだけ」

枕元のテーブルに置かれたものにしほは触れた。ひとつは袋入りのコンドーム、ひとつはウェディングベール。

「少し卑怯です、西住さん」

「卑怯?」

「私にご主人様と出会えたのは、貴女やお母様にご主人様と縁してくれたお陰です……そんな人にそう頼まれて、私が断れる訳が無いと知つての頼みなのではないですか?」

「……否定はしないわ」

しほはそう言うと言を伏せた。その態度は日頃連盟で見る「凛とした」という言葉を体現化したような姿とは異なる、悩める女性の姿だ。愛里寿は問いかけた。

「そもそも、今でなくても西住さんなら幾らでも機会があつた筈です。何故今夜？」

「彼はこの五年間、私や千代と並ぶために、ひとりの男として向き合うために頑張つて……今度の昇進で、本当に並んで働ける所まで上がってきてくれた。それに今夜、私もひとりの女として応えたいと思つた。それでは不十分かしら？」

「本当の夫を裏切るとしても、ですか？」

「ええ」

静かな、迷いない答え。

愛里寿はしほの視線を正面から受け止め、やがて答えた。

「分かりました。今晚だけ、譲ります」

「……ありがとう、島田さん」

しほは深く頭を下げると、ウェディングベールを手に取つた。菊代が手際よくコンドームを袖に収める。

浴室から千代たちが戻ってきたのは、その直後だった。

「あうっ、ンツ、ああっ！」

「くっ、ううっ！ しほっ、しほおっ！」

愛里寿がそれを思い出している間にも行為は続き、既に何度目か分からない射精が行われる。

「んー……そろそろ、でしょうか」

二人の様子を伺っていた菊代がそう呟き、部屋の隅に置かれていたクーラーボックスへと向かってゆく。

汗まみれの和明は荒い呼吸をしつつ、まだ腰を止める気配は無いようだった。

「あ……ああ……あひっ、あっ……！」

「ぐっ、ふうっ……うおっ……！」

次第にしほの反応が弱くなってきた。もはや意味のある声も出ないのか、和明の腰の動きに合わせて喘ぎを漏らすばかりだ。ウエディングベールも汗を吸い、彼女の背にべったりと貼りついている。

同様に和明も余りに強烈な快感を受け続け、視界が揺らぎ、眩暈がする程の状態になっていた。それでもしほを犯したいという衝動は冷める事無く和明に抽送を促す。

ずぼずぼとしほの孔を休む事無く犯す。結合部からは肉棒が突き入れられる度に精液が溢れ、それが惜しいと思ってしまう。

「んひっ……はっ……かず、あきい……!」

「うっ、くうっ……!」

腰を止めないまま、うつ伏せになり一層その大きさを増したしほの乳房を掴む。ずっしりとした重さと弾力が伝わってくるその豊満な乳房に指を埋め、激しく揉みしだく。

「おっ、おおっ……!」

「……っ!」

どくんと腰が震え、搾り出るように精液が零れる。かなり和明の内臓も頑張ってはくれているが、流石にこのハイペースについてゆけないようだ。

和明は大きく息を吐き、呼吸を整えようとした。

「ハアツ、ハアツ……ひゃあっ!」

突然、背筋に酷く冷たい何かが押し当てられた。反射的に身体が跳ね、肉棒がしほの膣内から抜け落ちる。精液と先走り、愛液に塗れた肉棒は流石に疲れたのか半勃起のままくたりと頭を下げる。

「そこまででございませぬ、篠原様」

「き、菊代さん!」

慌てて振り返った和明の眼前に居たのは、凍りかけのウーロン茶の缶を持った菊代だった。どうやらそれを和明の背筋に押し付けられたらしい。

「篠原様、先ほどから汗が流れなくなっております。眩暈や耳鳴りはされませんか？」

「え? ま、まあ、少しは……」

「それは脱水症状の前兆でございます。お気持ちは分かりますが、ひとまず休憩と参りましょう。お嬢様がたも手持無沙汰でお待ちしております」

「……あ」

菊代からそう言われ、和明はようやく千代達をずっと放置していた事に気付いた。自分に視線を向ける彼女らに今更ながら頭を下げる。「す……すみません、思わず夢中になってしまつて……」

「フッフ、別に怒ってないわ。でも、夢中になり過ぎて和明君が体を壊しては駄目よ？ 折角和明君の子供が生まれても、貴方がその子に会えなかつたら意味が無いんだから」

千代はそう言うのとベッドから少し離れたソファに移動した。テーブルには幾つかの缶飲料と、チーズ等が乗せられたクラッカーやサンドイッチなどが並べられている。菊代が用意した軽い食事のようだ。「一旦、お食事に致しましょう。軽くなら、すぐに激しい運動をしても大丈夫ですので」

「は、はい……」

本当に自分は相当に無理をしたようだ。ひと息ついたことで冷静さを取り戻した和明は自分の身体が相当な疲労を覚えている事に驚いた。喉もカラカラで、腹も空いている。

「家元、手をお貸ししますか？」

「……大丈夫、起きられるわ」

菊代は続けてしほに尋ねた。流石にまだ気怠さは残っているようだが、しほは頬に貼りついた黒髪を払いつつ答える。

「ンツ……」

「……」

しほが身を震わせると、彼女の秘唇からごぼりと精液が溢れる。彼女の陰毛を汚す白濁液に、相当に射精したというのに和明の股間は反応を示してしまう。

とはいえ先ずは水分補給が必要だ。和明はベッドを降り、先に座っていたたまほ達と共にソファに腰掛けた。

「えつと……いただきます」

「お疲れ様でした、和明さん」

手前の缶に手を伸ばす和明に、まほが労いの言葉をかける。

指先が痺れる程に冷えたウーロン茶の缶を開けて傾けると、キンとした冷たさと共に茶の苦みが流れ込んでくる。焼けた砂に水をかけたように乾いた細胞が水分を補給し、身体に潤いが戻ってくるのを感じる。

一方、しほも和明の向かいのソファに腰掛けた。もともと身体を隠す機能を持っていなかった細い布は汗を吸って細く振れ、彼女の両の乳房も股間もほぼ丸出した。

「(まあ……今更か)」

自分や愛里寿は全裸、千代、まほ、みほはバスタオル一枚でテーブルを囲んでいるという事実には和明は妙なおかしさを感じていた。

「お姉ちゃん、そっち、貰ってもいいかな？」

「みほ、まだ玉ねぎ入りのサンドイッチは駄目なのか？」

——日本のプロ戦車道の未来を担う美しき姉妹、西住まほ、西住みほ。

「家元、どうぞお口を……」

「自分で食べられるわ」

——日本戦車道諸流派の頂点に立つ西住流、更にその頂に立つ女傑、西住しほ。そして彼女に仕える使用人頭にして連盟の敏腕スカウトレディである井手上菊代。

「お母様、飲み物のお替りは如何ですか？」

「愛里寿は座っていないさい。私が取ってくるから……」

——その西住流と並び称され、海外での人気は西住流すら凌ぐ島田流。その家元と娘、島田千代、島田愛里寿。

「ンツ、ンツ……ふう」

ウーロン茶を飲み干し、ひと息つく。

——そして、五年前までは平凡な大学生でしか無かった自分。

本来ならば結びつく事などあり得ない筈だった彼女らとの結びつ

きを作ったのは、それまでは和明からすればコンプレックスでしかなかった巨砲だった。奇縁と偶然と、様々な要素が重なり、自分たちはこうしてホテルの一室でセックスしつつ食事を摂っている。本当に奇妙な縁だと和明は思った。

「どうされました、篠原様？ 何やら嬉しそうな顔をされていますが」

「……いいえ、何でも」

「それなら良いのですが。こちらもお持ちしております。どうぞお飲みください」

既に愛里寿と自分の婚約のニュースは戦車道界限に流れ始めている頃だろう。愛里寿の将来の夫となった自分も遠からず、この急激に成長してゆく戦車道界限の喧噪により巻き込まれる形になる。

でも、どんな喧噪でも彼女らとならば乗り越えられる。和明はそう確信しつつ、菊代から差し出された精力剤を飲んだ。

「それにしても、さっきのお母さんと篠原さんのセックスは凄かったね……私にはあそこまでは無理だと思ったよ」

「いや、みほさんの場合、あの動きをすると逆に俺だけ吸われるから……」

「ご主人様、私にもいずれはアレ位に激しくしてくれますか？」

ピロートークと呼ぶには風情に欠ける、和やかに交わされる言葉。やがてそれなりに腹を満たした和明はソファから立ち上がった。

「ちよつとシャワー、浴びてきます」

「和明くん、私も一緒にさせて貰えるかしら？」

汗が乾き始め、ベタベタが無視できなくなってきた。再び浴室に向かおうとした和明にしほが声をかける。

「ええ、もちろん。菊代さん、ご馳走様でした」

「お粗末様でした、篠原様」

和明としても断る理由はない。和明は頷くと菊代に礼を言い、浴室に向かった。皿を片付けつつ菊代が答える。

しほはその場でベールや下着を脱いで全裸となり、和明の後ろに続く。先ほどと同じ洗面室を経て浴室へと至る。

壁に掛けられたシャワーノズルを持ち、和明はバルブを回した。や

や暖かい程度の温度に調節し、再びノズルを頭の上の位置に掛け戻す。

「ふう……」

「ンツ……」

互いに確認する事無く、和明としほは一緒にシャワーを浴びる。

ふと、しほが和明に言った。

「……こうして貴方とシャワーを浴びていると、あの日を思い出すわ」「あの日?」

「覚えてるかしら? 貴方と私が初めてした日……ひと段落ついた後で、貴方はシャワーを浴びている私に『まだ相手をして欲しい』って言うてくれたわね」

「あ……!」

その言葉を契機に、和明の脳裏にもあの日の事が鮮明に思い出されてきた。最初こそ自分が主導権を握っていたが、最終的にはしほにリードされ、あっさり射精を許したのだ。

「あれから五年……本当に遅しくなった」

「しほさん達が、俺をここまで鍛えてくれたんです。綺麗で、素敵で、魅力的で……そんなしほさんが俺を求めてくれたから、俺も強くなれたんです」

懐かしむように微笑むしほに、和明は笑いかけた。

「本当に……そう思ってくれる?」

「ええ、今だって……ンツ」

「んっ、ちゅっ……」

互いの視線が交わり、自然と顔が近づき、唇が重なる。熱い吐息と共に舌が絡み合い、唾液を交換してゆく。

「んはっ……ねえ、和明。ここで、続きをしない?」

「ああ……しほ、俺も、凄く……したい」

シャワーの水音が浴室に響く。しほは壁に手を置き、尻を突き出した。おねだりするように揺れる尻の谷間から湯と愛液、そして先ほどまでの精液に濡れる秘所が覗く。

「き、来て、和明っ、奥が、凄く切ないのっ……!」

「ああ、何回でも、しよう……絶対に今晚、『命中』させるから……ぐっ
「んああっ！」

休憩を挟み、菊代の精力剤も回ってきたことで再び和明の肉棒は精力を取り戻していた。赤黒い亀頭をしほの朱色の陰唇に押し当て、そのまま腰を突き出す。

「めっ、命中、させて、和明っ！ 貴方の、子供っ、孕ませてっ！」

「あ、ああっ！ しほ、しほおっ！」

「んひいっ！ か、和明のちんぽ、また大きく、ああんっ！」

シャワーの湯が降り注ぐ中、和明はしほの爆乳を揉みつつ腰を振った。この五年間、何度交わったか分からない。それでいて全く飽きるという事のない極上の女体。凛々しくも整った顔立ちも、手に余るサイズの豊満な乳房も、肉付き良いむっちりとした尻も、それでいて引き締まった腰回りも、張りのある太腿も。

「かつ、かず、あきいっ！ 好きっ、好きいっ！」

「ああ、俺も、大好き、だっ！ しほ、おおっ！」

——そして、時に少女のように自分を想ってくれる健気さも。

「んっ、ちゅ、はあっ……もつと、舌、出して……」

「あむっ、ンッ、ンンッ……ふあ、ふあい……」

体を密着させ、しほの顔を振り向かせて挿入したままキスを交わす。キスをする度にしほの膣内は嬉しそうにきゅつと締まり、和明の肉棒から精液を搾り取ろうと襞を動かしてくる。

「ううっ！ しほ、また、射精すぞ、しほっ！」

「ふあ……だ、射精してっ！ しほの中っ！ 和明の精液でっ、ちんぽでっ、一杯に、してえっ！」

「ぐ、おとおっ！」

「ひあっ、あ、あああっ！」

和明はしほの子宮口へ亀頭を押し当て、躊躇せずに射精感を開放した。尿道を駆け登り、どくどくと新たな精液がしほの子宮へと注がれてゆく。

「あっ、あふっ……和明、もっと、して。和明の精液、もっと、欲しいのっ……！」

シャワーの湯と快楽で肌を火照らせ、更なる射精をせがむしほ。おそらくは外の菊代たちもこうなる事は予測済みだろう。

「……ああ、やろう。しほっ！」

「ああんっ！ 来たっ、和明のちんぽっ、来たあっ！」

ならば、その厚意に甘えてあと三発は此処でさせて貰おう。「詫び」は後でさせて貰うということだ。

和明はそう思いつつ、怒張を再びしほの熱く潤む膣内へと突き入れた。

【番外編・5 years after 終わり】

番外編

シヨート番外編・俺と先輩（かのじよ）と晩秋の酒

「だからね、私は言ってやった訳よ。『八九式はブリキ缶じゃない』ってね！」

「はあ……」

ワンルームマンションの一室。コタツを囲む二人の男女。卓上には空の缶ビールやチューハイ缶が幾つも転がり、中央の皿に盛りられていたピーナツとさきイカも残り少なくなっている。

「そもそも最近の戦車道って戦術やら戦法やらを重視した駆け引き主体の試合が多いんだけど、やっぱり戦車道の醍醐味は大火力の撃ち合いだと思ふのよ！ ドーン！ バーン！ ドドーン！ って派手な撃ち合いがあつてこの戦車道、そう思わない!？」

缶ビール片手に先ほどから延々と語り続ける女性、蝶野亜美。短く切り揃えられた黒髪は酒のせいかわや乱れ気味で、切れ長の瞳の焦点は半ば合っていない。

「はい、まあ、確かにそういう部分はあると思いますけど……」

「でしょう!?! だから私、プロリーグ委員会にそういう感じの試合方式も提案してるの！ 遮蔽物の無い平地で、ひたすら正面から撃ち合うの！」

「……それって、互いのチームの戦車の装甲と火力だけで決まりませんか？」

そして彼女に語られている側の男性、篠原和明は曖昧な返事をしつつ手元のレモンサワー缶を傾けた。壁の時計は既に24時を回り午前一時近くになっている。もはや終電にも間に合わない。

「(帰るタイミング、逃したなあ……)」

ほろ酔いの頭でそんな事を考えつつ、和明は亜美の話に相槌を打つた。

——和明が戦車道連盟のボランティアスタッフとして働くように

なつてから、二年ちよつとが経つ。

大学三年に上がりゼミを除いて単位をほぼ押さえる事ができた和明は、今ではより積極的に戦車道に関わるようになっていた。最初の頃はただ指示に従っていただけだったのも、試合の流れが分かるようになってからは次第に自発的に動けるようになり、年長者が居ない場面では自身がリーダーとして指示を振る場面も出てきた。

そんな中で、戦車道の選手たちとの距離も次第に近くなつていった。縮小の続いていた界限だけに同じ人物と別の場所で顔を合わせる事も多く、試合前後で会話に華を咲かせたり、時には食事を共にする事もあった。

「ねえ、今日は私の所で卓飲みとかどう？」

彼女、蝶野亜美に他のスタッフと共に誘われたのはそんなある日の試合後だった。

陸上自衛隊において一尉を務め、同時に戦車道連盟広報課の看板でもある亜美は日本戦車道における「伝説の選手」のひとりだ。単騎15両撃破、数km先を射抜いた超長距離狙撃など、そのエピソードは枚挙に暇が無い。また彼女は西住しほの弟子にあたる存在であり、西住流を体現したような豪快かつ一本気な性格は男女問わず人気があった。亜美がパーソナリティーを務めるラジオ番組「蝶野が斬る！」は既に数年続く人気番組だ。

そんな彼女から誘われて断る理由も無い。和明たちは彼女の家に酒やつまみを持ち寄り、ワンルームながら十分な広さを持つ亜美の自宅で鍋を囲み、酒を楽しんだ。

やがて宴会も終わり、参加していたスタッフ達も順々に退出していった。和明が最後に残ったのは自分が一番若く、片づけをしようと思つたからだ。

ところが、鍋を片付けた辺りで亜美は和明にこう言つてきた。

「ねえ、篠原君。もうちよつと付き合つて貰える？」

「え？ あ、はい」

どうやら、彼女の的には飲みも語りも足りなかつたらしい。

そして、彼女の「ちよつと」が数時間に渡る事を予測できなかった和明は深夜まで付き合い——今に至る。亜美の話がこの十数年に渡る戦車道の歴史を語るもので、決して退屈なものでなかったのは幸いか。

「ソツ、ソツ……プハーツ！ それがこうしてプロリーグ発足まで来れたんだから、本当、みんなが頑張ってくれたお陰よ！」

そしてその話もついに最近の戦車道プロリーグ発足に至り、亜美は缶ビールを飲み干して言った。

「大変だったんですねえ、本当に……」

「ええ、大変だったわ！ でも今はこうして、篠原君みたいな頼りになる子も出てきて助かってる」

和明の感想に亜美はそう返し、そこで初めて気づいたように時計を見た。

「つと、もうこんな時間になってたのね……篠原君、帰りの電車は？」

「えつと、もう最終は過ぎてて……」

「そう……それじゃ、散らかってるけど泊まってく？」

頭を掻きつつ答える和明に亜美はあっさりと聞いてきた。本来なら遠慮すべき場面だが歩きでここから帰るにも距離はあるし、朝までネットカフェで潰すにも、確か最寄り駅にはそういった店は無かつたはずだ。

「……すみません、助かります」

「気にしないで。割と普段から他人は泊めてるから」

そう言うとき亜美はコタツを出て手際よく押入れに向かい、一組の敷布団を抱えると和明の近くに置いた。和明も手伝うためにコタツから出る。

「篠原君は少しコタツを動かして。その辺りまででいいわ」

「分かりました。よつ……と」

亜美の指示に従い和明はコタツを動かす。その間に彼女は敷布団を広げ、枕を置いた。

「(……ん?)」

ふと、和明は違和感を覚えた。押入れにはまだ布団があるようだっ

だが、亜美は一組しか敷いていない。

自分が休んでから敷くのだろうか。そんな事を思っている内に亜美は布団の上にミニスカートのまま胡坐をかくと和明に言った。

「さ、篠原君。やりましようか？」

「はい？」

余りにあつきりと言ってきた彼女の言葉の意味が一瞬理解できず、和明は問い返した。

「あ、あの、蝶野さん、『やりましようか』って何をですか？」

「何って……そりゃセックスでしょ」

「……!？」

どうも亜美には和明の反応の方が意外だったようだ。座ったまま怪訝な表情でこちらを見上げている彼女に、和明は同様に布団の上に座り込んで言った。

「いやいやいやいや、何言ってるんですか蝶野さん!？」

「あら、篠原君つてもしかして草食系？ セックスは嫌い？」

「いや、嫌いじゃあないですけど……!？」

「そうよね、色々と『噂』は聞いているし」

「だからそうじゃなくて……って、噂？」

突然出てきた言葉に、和明は急に体温が下がるのを覚えた。ほろ酔いだった頭が急に冷めてくる。

「ええ。相当な『巨砲』を持ってるって聞いて、どこかで折を見て試してみたいって思ってたの」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 『聞いた』って、誰から？」

「スカウト部門の菊代さん。彼女、お年寄りの多い連盟では数少ない年が近い同僚だから、色々と話すことが多いの」

「(菊代さん!?)」

井手上菊代、連盟所属のスカウトレディにして西住家の使用人頭である。公私ともに和明も世話になっており、基本的に信頼できる人物なのだが——時に人の慌てる様を見て楽しむ節があったりする。亜美に自分のことを話したのも、彼女がこういう行動に出ることを予期してのものかもしれない。

「それで、どうするの？ 私、こう見えてもそつちも割と自信あるから、篠原君を満足させてあげられると思うけど？」

それにしても亜美の誘いは余りに軽い。豪快な人なのは分かっていたが、彼女はセックスを対戦ゲームかスポーツの一種とでも思っているのだろうか。

和明はそう思いつつも、亜美に対して頭を下げた。

「その……よろしくお願いします」

実際、酒を飲み交わす中で彼女の火照る肌や着崩した制服から覗くうなじ、酔いが回り艶の増した瞳など——亜美の「色気」とも呼ぶべき気配に、和明の股間は反応を示していた。まして戦車道界のトップスターにして妙齡の美女である彼女が自分からセックスに誘ってきたくれているのだ。この最高の据え膳を差し出されて断るのは男として「負け」だと和明は思った。ここで断れば、失望した彼女とセックスする機会は永久に失われるだろう。

「うん、いい返事ね。男の子はそうじゃないと！ じゃあ、時間も惜しいし早速始めましょ」

「わ、分かりました……」

そして和明の答えは亜美を満足させるものだったようだ。サムズアップして微笑むと、今度は制服のボタンを自ら外し始めた。和明も自分のシャツとジーンズを脱ぎ始める。

「んっ……ふっ」

「うお……」

亜美が制服を布団に落とし、更にシャツを胸元だけ緩めて頭から脱ぐ。黒レースに彩られたブラに包まれた重そうな乳房が「ゆさつ」という音がしそうな揺れと共に露わになる。厚手の制服の上からでも分かる胸の膨らみに巨乳である事は察していた和明だったが、予想以上の現物のサイズに思わず声を漏らした。

「ふっ。篠原君、おっぱいは好きっ？」

「えっ!? いや、まあ、はい」

「素直でよろしい！ Eだったんだけど、最近寒くなってきて出不精になっちゃったから、少し肉が付いちちゃってるかも」

言いつつ亜美は背中に手を回しブラのホックを外した。拘束を解かれた彼女の乳房が重く揺れて現れる。そのまま流れるような仕草でミニスカートを外し、艶やかな黒のストッキングへ。

見惚れているだけでは居られない。和明は亜美に視線を時折向けつつシャツと肌着を合わせて脱ぎ、ジーンズを下ろした。

「あ、ちよつと待って、和明君」

「はい?」

「噂のソレ、初見は間近で見たいから下を脱ぐのは待ってもらっていい?」

「ええ、まあっ……!?!」

答えようとした和明は言葉を失った。

亜美の身体を表現するならば「磨き上げられた肉体」と言えば良いだろうか。

本人は「肉が付いた」と言っていたがその身体には余分な肉など一切なく、重力に逆らうように上を向いた豊かな乳房の先端では桃色の乳首が天を向き、そこから引き締まった腹筋へと続くラインも見事なものだ。それでいて腰回りにかけては再びふつくらとした女性らしい曲線を描き、鍛えられた太腿へと続く。陰毛の濃さはしほと同じくらいだろうか。自分の魅力を理解し、油断なくそれを磨き上げてきた女性の身体であった。

「それじゃ、失礼するわね」

「うっ……」

腰を落としたままの和明に亜美はすり寄り、股間へと顔を寄せてきた。トランクスに酒の匂い混じりの吐息が吹きかけられる。亜美は和明の腰に指をかけると、ひと息にそれを下ろした。

「うわあ……!?! 凄いわね、これ! まだこれで全開じゃないんでしょ!?!」

跳ねるように現れた半勃起の肉棒に亜美は瞳を輝かせた。まるで新品の珍しい玩具を与えられた子供のような喜びようだ。今までに無い反応に和明は戸惑いつつも答えた。

「ええ、まあ、まだ……うっ、うおっ!?!」

和明の言葉を待たずに亜美は肉棒を握り、上下に手を動かし始めた。その動きは速いながらも此方へ痛みを与えないようとする気遣いも感じる、実に丁寧なものだ。なるほど、流石は伝説の戦車乗り。ただ豪快なだけでなく、繊細さも――

「くっ、ううっ！」

「ん、ちゅ……いやあ、想像してた以上ね。外人級の大きさなのに、苖までガチガチに固い……あむっ……」

手淫のテクニクへの感想を覚える間も許さず、亜美は湿った唇を広げ亀頭を啜える。酒が回っているせいか、その口の中は蕩ける程に熱く滑っていた。そのまま亜美は手で竿を、口で亀頭を刺激し続ける。

「んむっ……ねえ、篠原君。私にもしてくれる？ 横になって……」

「あ、はい……んぶっ？」

言われるままに横になると、亜美は姿勢を変えて和明の顔の上に跨った。いわゆるシックスナインの体勢である。

彼女の黒い陰毛に彩られた濃い桃色の陰唇は和明の眼前でひくつき、与えられる快感への期待にじわりと愛液を滲ませていた。

「蝶野、さん……！」

「亜美でいいわ。私も名前で呼ぶから……和明君、舐めて……」

「はっ、はい……ンッ、んぶっ……」

「んっ、はあっ……！」

和明は舌を伸ばし、亜美の秘唇を舐め始めた。汗に混じるアルコール臭と亜美自身の香りが混じった淫臭が、和明の鼻から脳へと突き抜けるような刺激を送る。ぺちやぺちやと音を立てて舐めている内に、亜美の奥からは粘りある愛液が溢れてきた。それを躊躇なく舐め取り、更に舌を尖らせて奥へと進ませる。

「あんっ！ い、いいわ、和明君……わ、私も負けてられない、わねっ……じゅるっ、ちゅうう……」

「くううっ！ 亜美さんっ、それ、凄っ……！」

鈴口を強く吸われ、和明は思わず口を離して呻いた。既に和明の肉棒は限界まで膨れ上がり啜えるのも難しいサイズになっているはず

だが、亜美は眉をひそめる事もなく亀頭への刺激を続ける。

お返しとばかりに和明は再び亜美へのクンニを再開する。彼女の膣内へと進めた舌先は強烈な締め付けを受けて痛いほどだ。見た目通りに鍛えられた筋肉による締め付けだろう。ここに肉棒を挿入したならどれ程の快感を味わえるのか。それを想像しつつ和明は舌を抜き、クリトリスを撫でるように舌で舐めた。

「くひっ!? ここ、こらっ、そこはっ……………」

「ここ、弱いんですね。亜美さん……………はむっ」

「ンンッ! あ、あうっ!」

びくと亜美の身体が跳ねる。このまま彼女を絶頂させようと舌を這わせる和明だったが、そこで亜美は身体を起こして切なそうに言った。

「ね、ねえ、和明君……………舌もいいけど、最初は、貴方のこれでイかせて欲しい……………こんな立派なちんぽ、久しぶり、だから……………」

「プハッ……………分かりました」

亜美の秘所が和明の口から離れてゆく。

「ンッ……………上に、ならせて」

そう言うのと亜美は今度は和明の腰に跨った。肉棒に手を添え、唾液と愛液に塗れた陰唇を亀頭に押し当てる。

「んっ、はあっ……………ちよつと、キツいかもっ……………あふっ、あ、あああっ!」

「ううっ、あ、亜美さんっ!」

肉棒を包む熱い潤みと締め付けに和明は呻いた。

強烈な締め付けであった。かつてまほやみほの処女を奪った際の締め付けも確かに強力だったが、亜美のは未踏地に押し入ったためのキツさではなく、膣圧と筋肉が組み合わさった、男根から精液を搾り取るための意思によるものだ。

「すっ、凄おい……………お臍まで、届いてる……………和明君の、ちんぽ……………」

「あ、亜美さんのものも、凄いですっ……………動いてないのに、凄く、気持ちいいっ……………」

「ふふっ、ありがとう……………でも、ここからよっ!」

「えっ!? あ、ぐおっ!」

亜美は手を頭の後ろにやり、足をガニ股にするとまるで和明の身体を台にしてスクワットをするかのように腰を振り始めた。背を反らした事で一層その大きさを増した彼女の乳房はたぶんとぶんと激しく和明の真上で揺れる。

「う、うわっ!? 亜美さっ、それ、ヤバっ……!」

「どう? 鍛えてると、こんな事も……ほらっ、ほらっ!」

だが、その乳房の揺れを堪能する余裕は和明には無かった。腰が持ち上げられる程の膣圧。それがコーラの500ml缶ほどまで膨れ上がった肉棒を包み、彼女の意思で緩んだところで初めて解放される。亜美が腰を上げるとそれに和明の腰が持ち上がり、緩んだことで先に肉棒が下がるとすかさず亜美の膣孔はそれをキャッチし、再び強烈な締め付けで持ち上げてくる。それほどの強さだというのに、彼女の中の襞の潤みは痛みでなく快楽しか肉棒に与えてはこない。

まさしく鍛錬によって磨かれた名器。それが蝶野亜美の膣内であつた。

「ふあっ! ひっ、ひうっ! お腹、凄いつ! 和明君のちんぽっ最高っ! 最高ちんぽ、もつと固くしてっ、もつと突きっ、上げてっ!」

スクワットの度に亜美は黒髪を振り乱し、舌を出した蕩け切った表情で猥褻な言葉と共に喘ぐ。ぐちゅぐちゅと淫らな水音が結合部からは鳴り、亜美の動きは更に激しさを増す。

肉棒の自由をほぼ奪われた形で「突き上げて」もないものだ。和明はそう思ったが、ここで弱音を吐く訳にもいかない。歯を食いしばり快楽に耐え、主導権を奪い返せるタイミングを待つ。

「……ふんっ!」

「んひいつ!? か、和明くんっ! あ、ああっ!」

亜美が肉棒の締め付けを弱めた一瞬、和明は腰を自分から突き上げて反撃したのだ。予想外の衝撃に亜美の身体力が抜ける。ここぞとばかりに和明は腰に力を籠めると立て続けに亜美を下から突き上げた。

「くっ、ぐうっ、ああっ! 亜美さんっ! 亜美さんっ! うおおっ

！」

「ふひっ！ か、和明君っ！ そんな、ダメっ！ わた、私っ、いつ……！」

びくんと亜美の身体が震えた、ぎゅうと肉棒を締め付ける力が強まる。どうやら先に彼女を絶頂させる事ができたようだ。だが――

「んっ、ふっ……や、やるわね、和明君……それならっ！」

「うっ、おおっ！」

達したと思つた亜美は後ろ手を解くと和明の胸板に手を置き、今度はスクワットに回転を加え始めた。

「んっ、ああっ！ 和明君の最高ちんぽっ、まだ大きく、なつてっ！ お腹、破れちゃうっ！」

亜美の淫らな腰のくねりと共に締め付けられたままの肉棒は引つ張られ、その角度ごとく快感の強い箇所が変化してゆく。卑猥なロデオダンスを続けたまま亜美は言った。

「どっ、どう？ これっ……！ 私のコレに耐えられた男性ひと、居ないんだからっ！」

「ええっ！ さ、最高、ですっ！ 亜美さんっ、俺も、もうっ！」

「いいわっ！ 射精っ、射精してっ！ 和明君の極太ちんぽから出る熱々のザーメンっ！ 膣内なに頂戴っ！」

回転を加えられながらテンポ良く上下する亜美の腰の動き。それはリズムカルでありながら時折意図的にリズムを崩し、和明の肉棒に予想外の快感を与えてくる。

何とか射精感を抑えてきた和明だったが、そろそろ限界が近いようだ。亜美の身体の震えから再度の絶頂が近いのを察し、腰の力を抜いて一気に開放する。

「あっ、亜美さんっ！ うああっ！」

「ひぐっ！ か、和明、くんっ！ 熱いの、来たっ！ 熱々ザーメン来たあっ！ あひっ、あ、ああっ！」

尿道を精液が駆け登り、噴水めいて亜美の膣内に放たれる。全身を激しく痙攣させつつ亜美は同時に絶頂に達した。そのまま彼女は上体を伏せ、和明に身を寄せる。

「あふっ……す、凄かったわ、和明君……こんなの、何年振りかも……」
「い、いいえ。亜美さんも、凄く、良かったです……んっ」

「ちゅ、ん、はあっ……」

それは素直な感想だった。うっとり囁く亜美にキスをすると、彼女もそれに返してくる。結合部からは溢れた精液が零れ、腿に垂れてきているのが分かった。

「ねえ、今度は後ろからしてくれる？」

「分かり……ました。ふうっ……」

亜美の腰が持ち上がり、和明の横で四つん這いになる。和明は身を起こし、亜美の豊かな尻を掴んだ。精液と愛液に塗れた秘所が肉付き良い尻の谷間から覗いている。

「ああ……本当に立派ね、和明君……あんなに射精したのに、もうそんなに……！」

「亜美さんがいやらしいから、俺もこんなに元気、なんです……よっ！」

「ふああっ！ と、届いてるっ！ ちんぽっ、こんな、奥、までえっ！」
既に十分に濡れている秘所へ遠慮なく巨根を突き込む。

「くうっ！ あ、亜美さんっ、締まるっ！」

「ま、まだまだよっ！ やられっ放しじゃ、ないんだからっ！」

そう言うと亜美は膣で肉棒を捕食するかのようには腰を前後に動かした。鍛えられた肉体を汗に濡らし悶える様は、正にしなやかな雌の肉食獣のそれだ。

「ううっ！ お、俺も負けませんよっ！」

「ああんっ！ い、今の、いいっ！ 亀頭で奥をこつんとされるのっ、いいっ！ 和明くんっ！ 頑張っつて、勝っつて！ わたっつ、私のおまんこにっつ、和明君のちんぽっ！ ちんぽで白旗、上げ、させてえっ！」

「うああっ！ 亜美さんっ、亜美さあんっ！」

更なる快感をねだる亜美の懇願に応えるように和明は腰を振る。酒と汗と体液の淫臭に満ちた部屋で、二人は更に交わり続けた。

「それは、また……大変でございましたね、篠原様」

「……菊代さん、ああなる事を分かって蝶野さんに教えたんですよ？」

「ご想像にお任せ致します」

後日、戦車道の地方試合において菊代と会った時に和明が尋ねると菊代は涼しい顔で答えた。

結局あの後、和明と亜美は朝まで——いや、昼過ぎになって和明の腰が上がらなくなるまで——激しく交わった。あの日の「蝶野が斬る！」でパーソナリティーの彼女が遅刻したのは半分は和明の責任で、番組中で謝っていた亜美に申し訳なさを覚えたものだ。

「ちなみに菊代さん。他の人には話してないですよね？」

「……………」

「菊代さん？」

「……篠原様、貴方様には『修行』が必要でございます」

ふと、菊代は真面目な顔で和明に言ってきた。

「しゅ、修行？」

「はい。如何に素晴らしい女性が相手であろうとも、同じ相手ばかりをさかしては攻めも一辺倒になってしまいます。篠原様はまだ奥方様を含めて四、五人しか女性を知りません。もっと多くの経験を積みまねば、自ずと衰えます」

「あの……それってつまり、『他の人にも何人か話はしていて、そんな相手が向こうから来る事が今後もある』？」

「……鋭くなられましたね。ご安心ください。ちゃんと口の堅い方を選んでいますので」

「……………」

頭が痛くなってきた。菊代は和明にいわゆる「やりチン」になれとでも言うのだろうか。

和明は菊代に反論しようとしたが、そこでポケットの携帯が鳴った。取り出し、画面を見る。

「つと……すみません菊代さん、また」

「はい、お気をつけて」

その内容に和明は腰を上げ、菊代に別れの挨拶を交わした。深々と

頭を下げ、菊代が見送る。足早に和明は場内を進み、やがてある部屋へと至る。戦車道選手用の更衣室。女性用の部屋だが、和明はそのドアを開ける。

「お疲れ様、和明君」

中で和明を迎えたのは制服姿の亜美だった。胸には幾つもの徽章が付けれられ、帽子もしっかりと被られている。

「あの、蝶野さ……」

『亜美』

「……亜美さん、確か休憩時間って30分でしたよね？」

「ええ、だから一回は出来るじゃない」

あっさりと言おうとドアに鍵をかけ、壁に手をつくるとミニスカートを自分で捲った。

「ねえ、しましょう？ 私のこと、和明君の極太ちゃんぽが欲しいって朝から泣いてるの……」

「……！」

黒いストッキングの下には、何も履いていない。薄い布地越しに彼女の陰毛が濡れて透けている。その淫猥な景色に和明の股間は即座に反応してしまう。

——あの晩からというもの、亜美とはこうして場を問わず交わるセックスフレンドとしての関係が続いている。正しい関係ではないと分かってはいるが、彼女の肉体の快感を覚えてしまった和明にとって、その誘惑は抗いがたいものとなっていた。

「分かりました……いきますよっ！」

荒々しくストッキングを引き下ろし、ジーンズを緩めて開放した肉棒を前戯なしで挿入する。

「ふああっ！ 来たっ、和明君のちんぽ来たあっ！」

それを亜美は嬉々として受け止め、腰を使い始める。

こんな調子で相手が増えていった場合、自分はどうしたら良いのだろうか。

理性が快楽に押し流される寸前、和明はそんな事を考えた。

番外編・俺と家元（かのじよ）と中華街 第一話

「あの……だからしほさん、事情は今説明した通りなんです。そう怒らないでくださいよ……」

戦車道連盟・横浜支局の休憩室。紙カップに入ったコーヒーを揺らしつつ長椅子に座る和明は、自分と距離を置いて座る西住しほにそう言った。

「篠原君、だから怒ってないと言っているでしょう？」

「(さつきから近づきにくいオーラが漂ってるんだよなア……)」

やはりコーヒーを手に座るしほは、こちらを見ようともせずにごえ答える。

和明の腕にはボランティアスタッフを示す腕章が巻かれている。今日は試合ではなく、支局で行われる戦車道イベントのスタッフとしての参加だ。窓の外を見てみれば黄色いイチョウの葉が舞い散る中、イベントを楽しむ来場者の賑やかな歓声が聞こえてくる。

「……家元、そろそろお時間です」

「分かったわ」

無言で二人の間に座っていた井手上菊代は袖から懐中時計を取り出し、しほを促す。しほはコーヒーを飲み干すと紙カップを握り潰し、ごみ箱に入れる。

「篠原君、今日は『大丈夫』だから、そのまま帰りなさい」

「(やっぱり怒ってるよ……)」

和明にそう言い残し、しほは部屋を出てゆく。彼女が「相手」すら拒むのは相当だ。和明は内心で頭を抱える。

その時、彼女の後に続く菊代がサツと和明の耳元に口を寄せると小声で言った。

「状況は把握致しました。お膳立てはお任せください」

「……助かります」

こんな時に菊代の言葉は心強い。和明はやはり小声で感謝を伝え

る。

考えてみれば——立場があるとはいえ、しほとセックスをした事は何度もあっても「デート」をした事は一度もない。それがこんな形で問題になるとは。

二人が部屋を出ていったのを確認し、和明はすっかり温くなった手元のコーヒーを傾けた。

そもそもの発端は、西住みほのある依頼からだった。

「あの、篠原さん……お願いがあるんですけど、聞いて貰えますか？」

和明の部屋。試合後のみほの欲求不満の解消の相手としてひとまず一戦を終えた和明は、彼女からそう言われた。

「お願い？」

「はい、その……デートの相手をして欲しいんです」

「デート？」

セックスの相手を散々しておいて何だが、みほから出てくるには違和感のある言葉である。和明は問い返した。

「デートって……みほさんと？」

「えっ!? あ、いいえ、違うんです! ごめんなさい、そうじゃなくって……一日でいいので、私の友達の、その、彼氏のふりをしてくれませんか？」

「友達？」

「はい。武部沙織さんっていう、大洗女子の頃からの友達なんですけど……」

胸元まで毛布を引き上げつつ、みほは説明した。

武部沙織、大洗女子学園でみほが戦車道の隊長を務めていた頃からの親友で、IV号戦車の通信手。現在はみほと同じ大学の二年で、大学戦車道でも共に戦車に乗っているという。

「それでこの前の休みに大洗女子に行ったんですが、そこで……」

問題はOGとして母校である大洗に行った時に起こった。後輩、特にみほ達が伝説を作った三年前の戦車道大会の後から入学した女生徒たちにとっては彼女らは英雄である。様々な質問攻めにあう中で、

「大学に上がって彼氏はできたのか」という質問に沙織は「大学に上がってすぐに彼氏ができて、交際して一年になる」と答えたのだ。

「それが……嘘だった？」

「はい。勢いで、見栄を張っちゃったらしくて……」

実際、沙織は恋愛願望こそ強くて社交性もあるのだが、押しが強くて逆に引かれてしまうのだそう。見栄を張った事も含めて、珍しい話ではない。

「ううん……こう言っちゃ何だけど、そこは素直に『勢いで嘘を言った』って謝った方がいいんじゃないかなあ。そりやがっかりされるだろうけど……」

「それが、その……『今度、紹介する』とまで言ってしまった……」

「……」

また随分と勢いをつけてしまったようだ。苦笑しつつ和明は言った。

「大体は分かった。それで俺が、一日だけ武部さんの彼氏役になればいいんだな？」

「はい、ダメ……ですか？ 沙織さんに相談されたんですけど、私も頼れそうなのが篠原さんしか居なくて……」

「……いいよ。日頃からみほさんには世話になってるし、俺で役に立てるなら」

少し考えたものの和明はみほに頷いた。デートとなると自分もかつての、和明の巨根に怯えて別れた彼女とした以来だが、まあ相手も初めてとの事だし何とかなるだろう。

それに実際、みほには色々之恩もあった。みほはこうして部屋に来る際には必ず大洗のお土産を持参し、また事を終えた後には簡単ながら料理なども作ってくれたりしてくれる。

幾ら和明とのセックスが体調不良の解消も兼ねているとはいえ、此方も気持ちよくなっている手前あまり五分とは和明も思えていなかった。日頃のお返しとしては丁度よい、そう感じていた。

みほはぱつと表情を明るくすると、和明に礼を言った。

「ありがとうございます、篠原さん！」

「いや、そんな……それで、日程は？」

「今度の週末で……時間は篠原さんの都合に合わせてますから、後で教えてください。それじゃ……ひとまず、『お礼』をさせて下さいね」
「え？」

そう言うときみほはスルスルと毛布の中に潜り込んだ。和明が怪訝に思う間もなく毛布の中の膨らみはモゾモゾと移動し、やがて和明の股間の位置で止まった。

「みほさん、何を……ううっ！」

かぷりと和明の亀頭が啜えられた。先ほどみほの膣内に射精したばかりの肉棒は愛液と精液に塗れたままだが、それでも躊躇なくみほは呑み込んでゆく。

「み、みほさん？ う、うわっ！」

「じゅるっ、ちゅ、ちゅうう……」

毛布を持ち上げた和明だったが、普段と違うみほのフェラの挙動に思わず声を漏らした。いつものみほならばここで舌を使ってくるころなのだが、唇で竿を締め付けてきたかと思えばそのまま強く息を吸い、頭を上下し始める。

「んぶっ、じゅるう……」

息苦しかろうと毛布を避ける。ダブルベッドの上に全裸で、和明の腰に被さるようにみほは身体を寄せて肉棒を深く啜え込んでいた。頬をすぼめ、鼻で息を吐きながらバキュームフェラを続けるみほの顔は実にいやらしく、普段の大人しげに微笑むみほの姿しか知らない者からすれば想像も出来ないような有様だろう。

「んぼっ、ちゅうう」

「くうっ……み、みほさん、いつもより、凄いつ……」

「っば……あ、ありがとうございます。篠原さんを気持ちよくさせるのに、ちよつと新しく覚えたのを試してみたくて……」

和明の感想に、口の端から唾液を零しつつみほが嬉しそうに返す。

『『覚えた』って……練習とかを？』

「はい。一方的に私だけ解消させて貰ってるだけだと悪いので、雑誌のテクニック特集とか、その、動画を見て勉強して……」

「真面目だなあ、みほさん」

「そ、そうですか？」

「ああ、俺も頑張らないと」

この三年間、しほや千代を筆頭に彼女らの「相手」を続けているが——その中でも最も油断ならないのが彼女、西住みほである。

ここ最近はずつかり甘えてくるようになったしほや、和明に無理をさせない千代。適度に自分を律し、こちらに合わせてくれるまほ。次第に主人と奴隷に近い関係になってきた愛里寿。

そんな彼女らとみほを比べた場合、みほは「大人しそうな外見と裏腹に、自分のペースを維持しつつ名器と日々成長するテクニクで容赦なく精液を搾ってくる女淫魔^{サキュバス}」とでも表現すれば良いだろうか。一見控え目に見える彼女だが、自分の中の欲求不満の解消の為には割と容赦なく和明を求め、肉棒の挿入をせがんでくる。

「篠原さんも頑張られていると思います。胸やお腹の筋肉も初めて会った時と比べて、全然逞しくなってますし……」

「そう言われると嬉しいね……ここからはどうする、みほさん？」

「えっと、続けてもいいですか？ 一度、口に……」

「ああ、いい……よっ!？」

「あむっ、ンツ、ンンツ……」

今も彼女なりに我慢していたのだろう。和明の返事が言い終わるのも待たず、再び肉棒を咥え込んでくる。頭の動きと口だけで奉仕を続け、空いた手は自身の乳房と秘所を弄ることで興奮を昂らせているようだ。

「じゅるっ……んぼっ！ んふっ……んぶうっ！」

「んくっ！」

「ふお、ふおうれふは、ふいのはらふあん……？」

「ああ……いいよ、みほさん、堪らないっ……！」

「んふっ……ちゅうう、じゅるるっ！」

「うっ、ぐうっ！」

頭を持ち上げ、亀頭だけを唇で包んだ状態から一気に降下させて肉棒を口全体を使って扱く。みほはしほ程にがっしりしている訳では

ないが、体幹を相当に鍛えているのだろう。一見ハードな動きでも嬉々としてそれを行ってゆく。

「大洗の戦神」の異名を持ち、戦車道を修める少女たちから羨望の眼差しを向けられる優しき天才。そんな彼女がじゅぽじゅぽと下品な音を立てつつ自分の肉棒から精液を吸い取ろうとする様は、幾度の交合を経てもなお和明に堪らない支配感を覚えさせる。

腰の震えが強まる。和明はみほの頭を撫でつつ、射精が近い事を伝える。

「み、みほさん、そろそろっ……ああっ！」

「あむっ、んっ、んぶっ！」

口内射精を望んでいたみほは更に口と頭の動きを激しくしてゆく。その動きは大きく、それでいて和明の反応を探りつつ丁寧に射精を促してくる。「大胆かつ繊細で、時に予想外」とは戦車道における彼女の評価だが、それはベッドの上でも同じのようだ。和明はそんなみほの与えてくる快感に抗うことなく、自身を解き放つ。

「くうっ！ で、射精るっ！」

「……っ！」

どくん、と和明の腰が跳ねた。体の奥から放たれた精液の迸りが、みほの口の中へと噴水の如く下から上へと噴き出してゆく。

「あっ、ああ……！」

「……ンッ」

びくびくと肉棒が脈動する度に精液が吐き出されてゆく。数度の射精を経て、みほは無言で口を離した。

「ふう……みほ、さん？」

「ン、ンンッ……」

口を閉じたまま、みほは身体をずり上げて和明の耳元へと顔を寄せた。

「……んくっ」

【ごくん】

「っ!？」

精液を飲み干す嚥下音。

それを和明に聞かせたみほは白濁液の残渣を口元に残しつつ、瞳に淫蕩な光を宿して言った。

「……篠原さん。もう一回、いいですか?」

「ああ……今の『音』で、また元気になってきた」

これは——今晚の彼女の相手は、覚悟が要りそうだ。

期待と悪寒が混じった寒気を背中に感じつつ、和明はみほの首筋に唇を押し当てた。

——和明がみほに二桁近い回数を搾り取られた、その数日後。

「たたつ、武部沙織ですっ! きよ、今日はよろしくお願いしますっ!」

シヨツピングモール、大洗シーサイドステーション。

ジーンズに水色のシャツに黒ベストというシンプルな格好で待ち合わせに来た和明に、ブランド物で服装どころかハンドバッグや帽子まで揃えた少女、武部沙織はガチガチに緊張しつつ頭を下げてきた。

「沙織さん……初めてのデートって設定じゃないんだから、もう少し落ち着いた格好でも良かったんじゃないか?」

「そ、そう? あの、派手でしたか?」

「いや、まあ……いいんじゃないかな」

ファンデーションや口紅の色は薄め。クリーム色のワンピースに腕と首にはアクセサリー、つば広帽子に飾り付きのハンドバッグ。大学生のデートと言うよりは保育園に子供を預けている若妻みたいな感じではあったが、和明はそれを言わずに無難に頷く。

「改めまして、篠原和明です……って言っても、何度か会った事はあるよね?」

「え!? あ、そういうえば……連盟スタッフのお兄さん? みほりん、知り合いだったの?」

「ま、まあ、ちよつとした縁があつて……」

そこでようやく沙織は、今日の偽装デートの相手が多少は見知った相手である事に気付いたようだった。繋がりについて尋ねてくる沙織の質問をみほは曖昧な笑みで受け流す。話の流れを変えようと和

明は沙織に言った。

「あー、とりあえず今日はよろしく、武部さん。それで……俺はどうすればいいんだい？」

「あ、はい！ えっと……今日この後、ここで後輩と買い物をする約束をしていて、その間……2、3時間だけ彼氏のふりをお願いしたいんですけど……」

「なるほど……ちなみに、どの程度の距離で？」

「距離？」

小首を傾げる沙織に和明は言った。

「ほら、彼氏と彼女って言っても、まともに手も繋げていないのから、まあ、その、腕をしっかりと組み込んで人前で憚らずイチャついたり……『セックス』まで行ってる仲まであるだろ？ 例えば俺は、武部さん……悪い、言い慣れないとダメだから今から沙織さんって呼ぶけど、どの位まで深い関係のふりをすればいいかなって」

「あ……」

そう言われ、沙織は初めてその事に気付いたようだった。偽の彼氏とデートするという一件だけで、おそらくは一杯一杯だったのだろう。

「どどど、どうしようみほりん!？」

「うくん……沙織さんの話だと『交際して一年』って事になってるから、最低でも腕を組むくらいはしないとダメじゃないかな？」

「そっ、そう、だね！ 篠原さん、いいですか？」

「ああ、俺は大丈夫」

有難い事と言うべきか、普通のデートよりはスキンシップが強い方が慣れている。和明は沙織に身体を寄せ、彼女の側の腕を出した。

「はい、どうぞぞ」

「うう……えいっ!」

バンジージャンプをする寸前のような顔で沙織は息を呑むと、飛びつくような仕草で和明の腕にしがみ付いた。

「ど、どうですか？」

「あの、沙織さん。それだとぶら下がってるから足を置いて、もう

ちよつと背筋を伸ばして……うん、そのくらいで」

和明のナビを受け、沙織は姿勢を直して腕を組んだ。

「どうかな、みぽりん？」

「うん……いい感じ、かな？ これなら大丈夫だと思う」

みほのお墨付きを貰い、そこでようやく沙織は緊張を緩めたようだった。

「それで、その後輩との待ち合わせの場所は？」

「あつ、はい。中央広場で……あーっ！ もう時間まであと五分しか……」

「OK、それじゃあ行こうか」

「はっ……はいっ！」

出来るだけ「頼れる年上のお兄さん」としての態度を崩さずに和明は沙織を促した。正直なところ和明自身も緊張しているが、同時にどこか自身の腹が据わっているのも感じていた。普段は人目を避けて交わる関係ばかりだったからか、逆に新鮮さを覚えている程だ。

「あ！ 西住先輩、武部先輩！」

「こんにちわ、武部先輩！ この人が言ってた彼氏さんなんですわ！」

「ああ、どうも。うちの沙織が行く度に騒がせてるみたいで悪いね」

待ち合わせ場所には大洗女子学園の白と緑を基調とした制服に身を包んだ、数名の少女が待っていた。自分もほんの数年前までは彼女らと同じ立場だった筈だが、大学四年になってから彼女らを見ると何か幼く感じてしまう。キャツキャと賑やかに迎えてくれた彼女らに和明は冗談めかして言った。

「ちよっ!?! 酷いよ篠は……和明くん！」

和明を名字で呼びかけ、危ういところで名前呼びに変える。やはりまだ恋人のふりが完全には出来ていない。自分とみほが随時フォローして、ボロが出ないように注意しなければならぬだろう。

「それじゃあ、一緒に買い物に行こう。私たちが卒業してから出来たお店とか、あるかな？」

「あ、それならいい所がありますよ！ タピオカティーの店が大洗にもオープンしたんですけど、行列ができる程の人気なんです！」

「じゃあ、そこから行くか。沙織もそれでいい?」
「う、うんっ、和明くん!」

できるだけ何気ない仕草で沙織に語り掛ける。沙織は腕を組んだまま頷き、些かギクシヤクとした動きで歩き始めた。

広場から大洗港に目をやると、少し古びた感じの中型学園艦が寄港しているのが見える。大洗女子学園の学園艦だ。

「なるほど、今日が寄港日だったから君らも買い物に出てきたんだね」
「はい、ちよつと予定外の事とかもあつて大変でしたけど、何とか間に合つて……ええつと、こつちです」

女生徒のひとりに話しかける。はきはきとした態度で彼女は答え、和明たちを先導する。やがて一同は件のタピオカティーの店の行列に着いた。後輩たちの話の通り、10分ほどは待たされるようだ。

「あの、西住先輩。IV号の旋回について聞きたいんですけど……」

「うん、そこはね。確かにアスファルト上では滑りやすくはなるけど、直前の加速や減速の調整で……」

「なるほど……あとあの、後輩から頼まれてる質問があつて……」

前に並ぶみほは二人の後輩に挟まれ、戦車の事で質問責めを受けていた。自分が会ったばかりの頃のみほならば少なからず混乱を見せた場面だったろうが、今のみほは落ち着いた態度で後輩たちの問いかけに答えている。やはりみほも成長しているという事だろう。

そんな事を考えていた和明だったが、後輩のひとりが自分を見ている事に気付いた。

「えつと……どうしたのかな?」

「あ、あのっ……篠原さん、武部先輩ともう、一年お付き合いされてるんですよね?」

黒いお下げ髪その女生徒は緊張した面持ちで和明に尋ねてきた。腕を組んだままの沙織が答える。

「うん、もう付き合つて一年になるよねー、和明?」

多少は慣れてきたのか、らしい態度で沙織が答える。少女は頬を赤くして、小声で言った。

「それなら……あの、もう、セツ……クスとかも、したり、してますか

？」

「セツ……え？ え!?」

沙織の表情が凍る。

「ここは俺が答えないとダメか。和明は少し息を吸ってから彼女に答えた。」

「ああ、まあ……人並には、つてところかな？ 何か、そっち関係で相談でも?」

「っ!」

「どうやら凶星だったようだ。他の女子に聞こえないような小声で女生徒は和明に聞いてきた。」

「……その、私、彼氏が居るんですけど、ええつと……初めての時に『サイズ』が合わなかったのか、上手くできなくて。彼氏とも最近ちよつと、気まづくなってるんです。どうすればいいとか、ありますか?」

「なるほどね……」

「何とも他人事とは思えない話だ。腕を組んだまま硬直中の沙織を気遣いつつも、和明は少女に答えた。」

「君は……どうしたい?」

「えっ!」

「その彼氏に……まあ、君の『初めて』をあげたいって、思う?」

「……はい。思います」

「君の彼氏は果報者だな」

和明は素直に思ったままを言い、言葉を続けた。

「何か道具は使ってみた?」

「道具……ですか?」

「ああ、ローションとか、ローターとか」

「っ、使ってません!」

顔を真っ赤にして女生徒は否定した。その初々しきに和明は微笑んで言った。

「ああいうのは別に『使ったから変態』って訳じゃない。例えばいきなり挿入するんじゃないかってローションを使って滑らかにしたり、互い

にローターで気持ち良くし合ったり。そういう『初めて』を補助するために使ったりもする。今はネット通販もあるから、秘密に買うのは難しくない」

「……はい」

「あと恥ずかしいかもしれないけど、ああいう時つてのは出来るだけ女の子がリードしてあげた方がいい。童貞を卒業できるって思った男つてのは、挿入する事しか考えられないお猿さんだ」

女生徒の緊張を解こうと、最後の辺りを冗談めかして言う。

「……分かりました、ありがとうございます」

全てが伝わったかは怪しいものだが、それでも彼女の悩みを幾らかは軽くできたのだろう。最初より明るい表情で女生徒は頭を下げた。

「だつてさ。良かったな、沙織」

腕を軽く揺すり、沙織に呼びかける。ハツとした沙織は和明を見上げて言った。

「お、大人だ……」

「……二つ違いだろ？」

何とか誤魔化する。周囲に聞こえていなかったのは幸いか。

そんな話をしている最中に行列の待ちは減り、和明たちの番が回ってきた。ミルクティーやミルク杏仁などをそれぞれが注文し、渡されてゆく。やがて和明と沙織の番が来た時、店員が声をかけてきた。

「お客様。カップル専用のダブルサイズミルクティーは如何ですか？」

今なら写真撮影も無料でしておりますが……」

「あ、いいえ、普通の……」

「お願いします！」

断ろうとした和明だったが、カップルらしい演技をしようと思ったのか沙織が前に出て注文してきた。

「ありがとうございます。それではこちらをお二人で持たれて、一緒にお飲みください」

嬉しそうに店員は言うのと、文字通りバケツサイズのカップに二本の太いストローが差さっているタピオカミルクティーを差し出してきた。会計を済ませてから行列を離れ、待機していたカメラマンの前に

立つ。和明と沙織は一つのカップを二人で持ち、同時にストローを啜えた。

「はい、いいですよ……チーズ！」

にこやかにカメラマンがシャッターを切る。

「ふう……」

「お疲れ様でした。プリントは10分ほどで終わりますので、少ししてから来てください」

何と言うか、こういう如何にもなカップルらしい行為は先ほどのセックスの質問よりも緊張する。ため息をついた和明にカメラマンが言った。

「……ん？」

ふと、きゅつと腕に絡む手が強くなる。和明が沙織を見下ろすと、彼女は嬉しそうに笑っていた。

「ありがとうのっ……和明くん！ 私、こういうの憧れてたの！」

「……そっか」

それは、新鮮な反応だった。

確かに自分はセックスに限って言えば、沙織らより遥かに多く経験している。だが——恋愛においては、自分も大概初心者なのかもしれない。

そんな事を思いつつ、和明は待っているみほ達と合流しようとした。容量があるだけにミルクティーもなかなか重い。早めに飲み切らなくては。

「行こう、沙織。行儀は悪いけど、飲みながら……ンツ」

「わ、分かった……んくっ」

「あつ、篠原さん！」

ふと、向こうのみほから声が飛んできた。何かの注意かと思う間もなく、横の通路から人影が足早に現れる。

「ととっ……!?!」

「っ!?!」

危うくその人影と衝突しそうになり、和明はストローから口を離して謝罪した。

「す、すみません！」

「いいえ、こちらこそ……」

相手の言葉が途切れる。服を汚したかと思い、和明は顔を上げた。見慣れた西住しほの、今まで見た事が無い程の無表情な顔。

「……え？」

しほの視線が和明の顔から沙織と組まれた腕、二人飲み用のミルクティーへと移り、再び和明の顔へと戻る。

「あ、あの……」

「……誰だか知らないけど、気をつけなさい」

和明の言葉を待たず、しほは土産用の紙袋を片手にその横を歩き去る。

突然のしほの出現は娘のみほにも驚きだったようだ。傍らの女生徒に焦りを隠せないまま聞く。

「な、何でお母さんが……？」

「あの、それがさっき言ってた予定外の事なんです。理事長は今、戦車道をしている学園艦の巡回視察をしてるんですけど、予定していたサnderラス大付属が嵐に巻き込まれたとかでウチが前倒しになっちゃって……」

彼女らの言葉がやけに遠く感じる。

「……どうしよ、これ」

ヤバい。そんな感情だけが渦巻く中で、和明はぼつりと呟いた。

第二話

——西住しほとどの予想外の遭遇の後、和明はどうかボロを出さずに「武部沙織の彼氏」を演じ切る事ができた。

とはいえ和明自身の意識はそこからは半分飛んでいたため、西住みほの適切なフォローが無ければ怪しかっただろう。

「西住先輩、武部先輩、篠原さん。今日は本当にありがとうございます……」

一通りのシヨツピングも終えて軽く食事を摂った後に解散となり、後輩の女生徒たちは礼儀正しくお辞儀をして和明らを見送った。彼女らと別れ、帰りのバスに乗ってようやく三人は緊張を解くと一斉に息を吐いた。ほぼ無人のバスの後部座席に三人並んで座る。

「……ふう。二人ともお疲れ様。もう、大丈夫だよ」

「はあく……篠原さん、今日は本当にありがとうございます……」

「いや、こつちこそすまない、割とヤバかった」

今になって浮かんできた冷や汗を拭きつつ和明は沙織に言った。

「でも本当に驚きました。まさかお母さんがあそこに居たなんて……」

「ホントだよねー。悪いことした訳じゃないのに、何だか凄く緊張したよ」

「……そう、なんだよな」

「へっ?」

「いや、何でもない。俺も緊張したって話」

怪訝な顔の沙織に笑顔を向けてごまかす。

あの時沙織の感じた緊張と、和明やみほが感じた緊張は別なものだ。悪いことはしていない。みほの友人の嘘のフォローの人助け、それだけだ。

だが——しほがそう受け止めていないであろう事は、あの時の反応からも十分に伝わってきた。間違いなく沙織とデートしていたと思われた筈だ。

内心の動揺を努めて表に出さず、和明は言った。

「まあ、とりあえずこれで大丈夫だ。今後OGとして訪問した時に聞かれたら『都合が悪かった』って言って、それで何か月かしたら『色々あつて別れた』とでも言えば逆に応援されるさ」
「そう……ですよね」

そう言われ、安心すべきはずの沙織は少し言いよどむと和明に顔を向けた。

「あ、あのっ！ 篠原さんっ！ 今、彼女ついていますか？」
「え!？」

拳を握り、沙織は真剣な表情で尋ねてきた。参ったな、と思いつつ和明は返す言葉を探す。流石に「事情ありとはいえセックス相手が横のみほを含めて五人以上居て、その中でも一番互いに入れ込んでいる相手が人妻の西住しほだ」とは言えない。

「えっと、その、何て言うか……」

「沙織さん、篠原さんは今日の沙織さんを助けるために無理を言つて彼氏役をして貰ったんだから、それ以上は……」

「みぽりん……うん、そうだよね」

横のみほが助け舟を出す。返事に困る和明の反応とみほの言葉で「とりあえず無理」という事は察したのだろう。少しがっかりしつつも沙織は素直に引き下がった。

「ごめんなさい、篠原さん。ちよつと、本物の彼氏みたいに思えてきちゃって……今のは忘れてください」

「いや、俺も本物の彼女と錯覚するくらい楽しかった。また機会があれば買い物くらいは付き合うよ。まあ、流石と一緒にミルクティーを飲んで写真を撮るのはちよつとアレだけど」

和明はそう言いつつ、タピオカティーの店で撮った写真を胸ポケットから出して眺めた。和明と沙織がひとつのカップに二本のストローで一緒に飲んでいる写真。これだけを見れば二人をカップルと思わない者は居ないだろう。

そんな会話を交わす内にバスは駅に着いた。

「沙織さん、私はちよつと和明さんに少し話があるから、先に……」
「分かった。本当にありがとう、みぽりん！ 篠原さん！」

「ああ、気をつけて！」

手を振り、改札口を抜けてゆく沙織を笑顔で見送る。

そして、完全に彼女が見えなくなったのを確認し——和明は頭を抱えた。

「ハア……どうしよう」

「し、篠原さん、落ち着いて……」

「いや、でも……しほさん、アレ、絶対に誤解したよな？」

「……それは、間違いないと思います」

頷くみほの表情も硬い。おそらくしほの激情を最も詳しく知っているのは彼女だ。

「篠原さん……とりあえず、急いでお母さんに連絡を取ろうとはしないでください。下手にすぐに弁明しようとすれば逆に言い訳と取られかねません」

「あ、ああ。分かった」

「おそらく、突然の遭遇だったのでお母さんも少なからず混乱している筈です。一日時間を置いて、落ち着いて話をできる状態で説明しましょう。次に連盟スタッフとして一緒になる機会がありますか？」

顎に指を添え、みほは素早くこの状況の最適解を模索しているようだった。流石は大洗戦車道の隊長として様々な窮地を越えてきただけはあある。和明は手帳を取り出し、予定を確認した。

「ええっと……明日、明後日で横浜で戦車道イベントがあるから、そこで会うと思う」

「そこで、少しでいいので話をしてみてください。私は菊代さんに連絡して、今日の事を説明しておきます」

「しほさんに直接、ではなくて？」

「その……あの状態のお母さんに連絡するのは、私も怖くて……」
「……だよな」

素直にみほは答え苦笑する。自分と沙織が密着していた時のしほの表情を思い出すと和明もそれに納得し、そこでみほとは別れた。

そして翌日、イベントの合間の時間に和明はしほを見つけ——

「お、お疲れ様です」

「……ええ、お疲れ様」

——近づき難いオーラを纏っていた彼女に接近できず、長椅子の端に座った。

さて、どう切り出したものか。和明が考えている内に先に口を開いたのはしほの方だった。

「……………」

「可愛い子だったわね」

「っ!？」

カップを手にしたまま、流し目でこちらを見ているしほ。和明は胸の動悸を抑えつつ言った。焦りを見せず、落ち着いて。

「……ええ。武部沙織さんっていう、みほさんの友達です」

「知っているわ。みほのチームメイトね。随分と仲が良さそうだったけど」

やはり言葉に棘がある。和明はしほの方を向いて言った。

「そう見えたのなら、上手く出来てたって事ですね……アレは『ふり』をしてたんです」

「ふり?」

「ええ。何日か前、みほさんの相手をしてた時に……」

そこから和明は言い訳がましくならないよう、できるだけ簡潔に説明した。考えてみれば、実娘とのセックスが許されていて他人とのデートに怒られるというのも奇妙なものだ。

「……………」

説明を聞き終えた後、しほはそれだけ言うのと再び沈黙した。

だが、彼女から感じる「圧」が薄まる気配は無い。

「だから、その、怒らないでくださいよ……」

「怒っていないわ。最初から」

そこからはその繰り返しになり——結局、しほと距離を詰められないまま彼女は出て行ってしまった。

自分もそろそろ休憩を切り上げなければならぬ。二日間に渡るイベントだけに、いちスタッフである和明のやるべき事は多い。

それにしても——どうすれば今回のしほとの行き違いは解消できるのだろう。そもそも、夫に隠れて和明と幾度もセックスをしているしほが、こちらの一度の嘘のデートであそこまで——

「……つとと。何考えてんだ、俺」

どうも良くない方向に考えが行っている。

みほは菊代には連絡すると言っていた。今は彼女を信じて真面目に務めるしかないだろう。

温いコーヒーを飲み干し、紙カップを丁寧に捨てると和明は立ち上がった。

「……お疲れ様でした、奥方様」

「やっぱり、ああいう場でのフリートークは慣れないわね。普段『聞き手を楽しませる』とか考えないもの」

横浜ベイサイドのホテルの一室。横浜支局から帰ってきたしほと菊代はソファに腰かけひと息をついた。イベントには二日間とも来賓として参加するため、熊本に戻らず横浜で一泊する予定だ。

何気ない素振りで寛ぐしほに、菊代は言った。

「奥方様……何故、篠原様にあのような接し方をされたのですか？」
「何故？」

「わたくしが昨晩みほ様から聞いてお伝えした内容と、篠原様のお話は確かに噛み合うものでした。作り話でないことは確かでしょう」

菊代は静かに言葉を続ける。しほは無言で菊代を見た。

「それでも、今の奥方様は篠原様を遠ざけようとされています。まだ、お怒りなのですか？」

「貴女までそう言うのね、菊代」

しほの表情は静かなままで。そこには怒りも嫉妬も感じられない。「まあ……あそこで和明くんと会った直後に衝撃を受けたのは確かよ。多分あれは嫉妬か……怒りだったと思う。それは否定しないわ。でも彼の話が嘘でないのも分かる。だから今はもう、本当に怒ってはいないの」

「では何故、それでなお突き離すような態度を？」

菊代にそう聞かれ、しほは僅かの沈黙の後に目を伏せて言った。

「その……和明くんには、やはり若い子がいいのかと思ってしまった」
「……ハア」

菊代は——彼女のしほに対する態度の中では最も敬意に欠ける行動として——絶句し、ため息をついた。

やや語調を強め、菊代はしほに言った。

「差し出がましいようですが、それは篠原様に対してあんまりな言葉かと。篠原様がただ『セックスに都合の良い相手』として奥方様と関係を三年も続けておられた訳でないことは、何より奥方様が理解されている筈ではないのですか？」

「分かってるわ。分かってるのよ」

菊代へと言うよりは、自分に言い聞かせるようにしほは言う。

「ただ……今回の事で、考えてしまったの」

「何を、でございましょうか？」

「彼がただの性欲だけで私と関係を続けてくれている訳で無いのは分かってる。それを私も理解してきたつもり……でも、結局のところ私は彼と外で連れ歩く事も出来なければ、セックス以外の事を一緒に何か出来る訳でもない。彼と武部さんが一緒に居たのを見た時、それを突き付けられたように思えた」

「それは……」

「ええ、当然の事。常夫さん夫の事が大好きなのは変わらないし、娘たちも大事にしたい。その気持ちにも嘘は無いわ。そして……そんな私の身勝手に、和明くんをもう何年も付き合わせている。それは彼にとつて、本来の彼くらの年で出会うべき相手や起きるべき機会を失わせているのではないか、そう考えてしまったの。そんな状態で、彼に相手を求める事は出来ないわ」

「……ハア」

再度のため息。

何とも頭の痛い話だ。菊代はそう思った。

結局のところ家元として、大人としての立場を崩さないような物言いをしているが彼女は、西住しほは要するに——自分も和明とデート

がしたいのだ。理屈はその感情を自分で誤魔化すために後付けしたものに過ぎない。

四十代に手のかかる、大学生にもなる二人の娘と夫を抱える大人の女性を感じるには余りにも少女めいたセンチメンタリズムである。まあ、そういった年齢を感じさせない、どこか少女めいた所を残しているのも彼女の魅力のひとつなのは確かなのだが。

「ふうむ……そういう事でしたら……」

菊代は袖からしほの予定帳を取り出し、パラパラと開いた。明日の横浜戦車道イベント二日目にもしほは参加する。そこで何か良いタ
イミングは――

「――」

菊代の視線が手帳のある個所で止まる。袖から取り出したペンで何かを書き留め、顔を上げる。

「奥方様……ひとつ、ご提案があるのですが」

「横浜戦車道フェア」と書かれた横断幕の下、大勢の来場者が広場に停められた幾両もの戦車を囲んでいる。

二日間かけるだけはある、今回のイベントは横浜市などの協賛を得た大規模なものだ。和明の割り当ては支局中心だが、赤レンガ倉庫やランドマークタワーなどでもブースが展開され、スタンプラリーも実施されているらしい。戦車を模した帽子を被った家族連れなども目立つ。

「はあ……」

そんな和やかな光景の中、どうにも晴れやかな気持ちになれないまま和明はため息をついた。「ため息をひとつする度に幸せはひとつ逃げる」という俗説があるが、それが本当なら今日の和明は相当な幸せを逃していることになるだろう。結局、昨日のあれからしほとも菊代とも会えていない。

時計は昼下がりを示している。夕方からは今日のメインイベント、横浜中華街を舞台にした、戦車道プロリーグの有名選手を中心とした特別チームによる模擬戦が行われる予定だ。

しほも参加するのだろうか。そんな事を考えつつ作業を行っていた和明に、スタッフフリーダーの男性が声をかけてきた。

「篠原君、急で悪いんだけど場所の異動をお願いできるかな？」

「はい、いいですけど……何処に異動ですか？」

「あちらの方が人手が欲しいらしいんだ。後は向こうの指示で動いて、終わったらそのまま帰参でいいから」

リーダーが示す先には見慣れた和服姿の女性が立っている。

「……分かりました。お疲れ様です」

「お疲れ様」

和明はリーダーに挨拶をしてから彼女、菊代の許へと向かった。

近づく和明に菊代はいつも通りの丁寧なお辞儀をする。

「段取りを崩し申し訳ありません、篠原様」

「いいですよ、居なきや駄目ってポジションでもありませんでしたし。それより……」

「その事については移動しながらお話を致しましょう。こちらへ」

しほの件での進展が気になる和明であったが、菊代は落ち着いた所作で和明を促し歩き始めた。どうやら時間に余裕が無いようで、彼女にしては速足だ。慌ててその後を追う。

「何処へ行くんですか？」

「そんな遠くではありません、中華街でございます」

戦車道連盟・横浜支局は市役所の近くにある。確かに此処からならば十分ほどで着く距離だ。秋の西日は早く、既に傾いている陽光が二人の影を長く伸ばしている。

「中華街？ そっちで人手が足りなくなっただけですか？」

「足りない……と申しますか、篠原様が必要と申した方が宜しいでしょう」

「……？」

どうも菊代の話は要領を得ない。

やがて幾つかの信号を渡り、前方に大きな鳥居めいた中華風のゲートが見えてきた。四方に設置された門周辺からが横浜中華街だ。

だが、近づくにつれて和明は違和感を覚えた。平時ならば観光客や

近隣の学生などが行きかい、雑踏に店の声かけなどが混ざった喧噪が聞こえてくる筈なのだ——恐ろしく静かだ。

「……あれ？ 撤収まであと何時間ありませんでしたっけ？」

戦車道の試合を演習場以外の市街地等で行う場合、自治体の許可を得た上で該当地区の住人には一時的な撤収が行われる。病人や高齢者などには自宅待機以上の十分なケアが与えられ、仮に試合中の流れ弾で家屋が破壊された場合などは新築費用が連盟から全額捻出されるので、試合開催を嫌がる住人というのは少数派だ。むしろ観光地などでは老朽化した店舗の改装費用を浮かせるため積極的に試合会場の招致を行っている所などもある。

「とある事情により、少し早めていただきました」

「はあ……」

人影のないゲートをくぐり、中華街に入る。

普段の賑やかな街並みしか知らない和明にとって、ゴーストタウンと化した中華街は何とも奇妙な光景に思えた。ここで数時間後、戦車が入り乱れて砲撃を交わすと考えると更に奇妙な感覚だ。

しばらく進み、メインストリートへ入ったところで先行していた菊代が振り向いて言った。

「さて……この辺りならば、そろそろお話して宜しいでしょう」

恐ろしく静かな街並みの中、スツと菊代は視線を周囲に巡らせた。第三者に聞かれると不味い内容。ということはいよいよしほの件か。和明の背筋が自然と伸びる。

「結論から申しますと……篠原様、既に奥方様は先日の件についてはご理解しております」

「ご理解……って、本当にもう、怒ってないって事ですか？」

「はい、ただ……」

そこから菊代は昨晚のしほの様子を和明に語った。沙織と一緒に居た自分を見た際に生じた迷い、そしてその迷い故に取ってしまった態度のこと。

「……しほさんが、そんな事を」

それは和明にとって驚きであり、同時にどこか納得できるもので

あつた。

普段の彼女は即断即決、一切の迷い無しに何事も行う女傑である。そんなしほしか知らない者にとって、この迷いは意外そのものだろう。

しかし和明は、しほがその内面で様々な悩みや迷いを抱えている事を知っている。三年前の夏の嵐の夜、アパートにずぶ濡れで転がり込んできた彼女が娘との行き違いの事や和明に対しての自身の感情への困惑、様々な事を語ってくれた事を思い出す。幼少期から戦車道ひと筋で育ってきたしほは、何処か幼さを残しているのだ。

しかし――

「あの、菊代さん。話は分かりましたけど……何故ここに俺を来させたんですか？」

わざわざこの話をするためだけに中華街内の撤収を早めさせた？ 確かに他者には聞かせられない話ではあるが、それにしても用心に過ぎる。

そんな和明の困惑に、菊代は微笑みを返した。

「いいえ、まあ……本件を早く解決する為に、最も手っ取り早い手段を使ったと申しますか……」

「手っ取り早い？」

和明の顔に疑問符が浮かぶ。

その時、背後から別の声が届いた。

「……和明くん」

「しほさん？」

聞き慣れた彼女の声に和明は振り向き――息を呑んだ。

「今回の中華街での模擬戦にはある趣向を頼まれていたわ。『車長はチャイナドレス着用』……何とも在りがちな企画よね」

長身を紫のチャイナドレスに包んだ西住しほは、薄く笑いつつ和明に言った。

チャイナドレスが本当に似合う女性というのは存外少ないものだ。体のラインが如実に浮かび、スリットが深ければ脚線美も要求される。豊かさと引き締まり、その両方が備わっていなければ完璧な着こ

なしというのは難しい。

そして今のしほは、その「完璧な着こなし」を成立させていた。紫の上質な布地には金糸で龍の刺繍が施され、足元から胸元にかけて煌びやかな輝きを放っている。スリットは両側に腰近くまで深く切り込まれ、黒いストッキングに包まれたしなやかな美脚が覗く。

布地越しに浮かぶ肉付き良い尻から引き締まった腰回り、更にそこから大きな盛り上がりを見せる乳房へと続くラインはこの上なく艶やかで、ノースリーブから伸びる両の腕には余分な肉も、シミのひとつも無かった。

息を呑む和明に菊代が言った。

「試合の準備の為に他の方々が来られるまで、あと三時間ほどございます。それまではこの街はお二人だけのもの……ただ、何も無いのは寂しいので買い物などはクレジットでのセルフで行えるようになっていますし、ランチボックス等でお食事やお飲み物もご用意しております」

「菊代さん……これって、まさか」

「はい、デートの舞台をご用意させていただきました。わたくしは外周で侵入者の警戒をしておりますので……延長は出来ませんがどうぞ、ごゆるりと」

そう言うで一礼し、菊代は身を翻すとゲートへと戻ってゆく。

菊代の足音が消え、メインストリートには和明としほが残された。「えっと……その、しほさん、ごめん。何か余計な心配をさせちゃったみたいで」

「いいえ、謝るのは私の方……今までの事も含めて、私の身勝手に付き合わせていた」

改めて彼女に近づき、頭を掻きつつ言う。一方のしほも申し訳なきように目を伏せる。

これ以上しほに気負いさせたくはない。和明はそう思い、はっきりと言った。

「好きな人に振り回されるなら、望むところですよ」

「……！」

しほの顔が上がる。

「しほさんが夫が居て、まほさんやみほさんが居て、俺よりずっと上の世界の人でも……俺は、しほさんの事が好きだと言いつつ……!?」
「ンツ、ふうっ、ンンツ……!」

言い終える前に和明の唇が熱く柔らかい感触に塞がれる。しほは熱い吐息と共に舌を差し出し、和明の歯茎をくすぐる。

「んっ、ふうっ……しほ、さん……!」

「和明くん、ちゅっ、かずあき、くんっ……!」

焼けそうな程に情熱的なキスに和明も応える。分け入って侵入してきたしほの肉厚の舌尖に自身の舌を絡ませ、互いの唾液を交換する。

「ンツ、ふあ、あふっ……ちゅうう」

「しほ、さん……ハアツ、あむっ……!」

様々な豪華な装飾が施された店舗が並ぶ中華街のメインストリートの中、チャイナドレス姿の美しき人妻と貪欲なキスを交わす。

大洗で沙織とカップルのように振舞ったのは確かに新鮮な経験だったが、これはそれ以上に新鮮であり、同時に強い開放感を和明は感じていた。今まで常に人目を避けていたしほととの関係をこうして外で人目を憚はばからず行っているという事実。それは本当にしほが自分の恋人であるかのような錯覚を覚えさせる。

「ちゅ、んぶっ、じゅるっ……か、和明、くんっ……!」

「ふうっ……あ、はあっ……!」

しほが和明の舌を吸う。和明はその流れに合わせて彼女の口腔内を舐めまわす。互いの唇の間で粘りある水音が鳴る。

まだキスだけだというのに、和明の股間は既に反応して激しく勃起していた。

「んっ……ふはっ」

「んはっ……和明くん?」

一旦、唇を離して仕切り直す。

正直、ここでもこのまま彼女を犯したいという気持ちもあった。

しかし——せっかく菊代が用意してくれた舞台だ。ただセックスするだけでは無粋というものだろう。

「行きましようか、しほさん。俺たちの初デートに」

微笑み、手を彼女に差し伸べる。

「……ええ、エスコートは頼むわ」

その手を柔らかく握り、しほは嬉しそうに笑った。

第三話

「えっと……これか」

無人の横浜中華街、とある料理店の入り口に置かれた保温ランチボックスを確認し、蓋を開ける。中には肉まんや桃まん、ゴマ団子、揚げ春巻き等の幾つかの点心が箸や皿と一緒に入っていた。ボックスの横には伏せられた湯飲みと魔法瓶が用意されており、中身は冷えたジャスミン茶のようだ。

店内は照明も点けられたままで明るい。和明はそれらを近くのテーブルに置き、後ろのしほに言った。

「それじゃしほさん、軽く食べてから回りましょうか」

「そうね、私も昼は摂れていなかったし」

和明が椅子を引き、そこにしほが座る。和明はその向かいに座った。

「ええと、いただきます」

「……いただきます」

軽く食前の合掌を行い、備え付けの酢醤油を小皿に注いでから春巻きを軽く浸して口に運ぶ。適度に水気を飛ばしてからボックスに入っていたのか皮はパリパリのままで、揚げたての香ばしさの中から豚肉の濃厚な旨味が現れて口の中に広がる。

続いてジャスミン茶を傾けると、市販品とは別格の豊潤な花の香りが脂の諄さを洗い流してくれる。確かこの店は雑誌などでも幾度も紹介されている高級店。ランチメニューすら学生の和明には二の足を踏む値段だった筈だ。

「(これ、幾らくらいするんだらうなあ……?)」

何とも小市民的な考えが頭に浮かぶ。

「……ん?」

ふと、しほが箸を進めずに自分を見ている事に気付き、春巻きを呑み込んでから和明は彼女に視線を向けた。

「どうしました、しほさん?」

「あつ……いえ、『美味しそうに食べているな』って思ってた」

そう答えるしほは何処か嬉しそうだ。彼女は窓の外の景色、無人の中華街を見て言った。

「……正直、こうやって和明くんと隠れずに外食が出来る日が来るとは思ってたなかったわ」

「はは、俺ですよ。菊代さんにここに連れて来られた時には何が来るのかと思ってきました」

西住流家元の権限を使えば撤収の前倒しの決定などは容易だったろうが、それでも実行するには慌ただしいものだったろう。菊代の陰の尽力に和明は感謝しつつ、今度は肉まんを食べる。

「温かいうちにしほさんも食べた方がいいですよ。これ、どれも美味しいです」

「ええ、そうさせて貰うわ」

和明に促され、しほもゴマ団子を小皿に移す。チャイナドレス姿で髪をかき上げつつ中華料理を堪能する姿が、なんとも様になっている。

緩やかな飲茶の中、和明としほはあれこれと会話を交わした。今回の発端となった沙織との疑似デートについて、大洗女子学園のみほの後輩たちについて、シヨップピングモールでの出来事について。

その中でしほが興味をひかれたのは、タピオカティーの店でのカットプル撮影の件だった。

「写真撮影?」

「ええ、そういうサービスもやってた店で……」

「……流石にそれは無理そうね」

しほが少し寂しそうに呟く。

なかなか恥ずかしい経験だったが、やってみたいのだろうか。和明はそう思いつつも切り替えるように言った。

「ま、まあ、折角の機会なんですし、それ以外に出来ることをやってゆきましようよ。この次はどこに行きます?」

「関帝廟あたりはどうかしら?」

「いいですね。それじゃまず関帝廟に行って、そこからはぶらぶら……って感じで」

デートコースの打ち合わせをしつつ過ごす時間。普通のカップルならば当たり前のように交わす言葉だが、それを自分たちは出逢って三年越しに初めてしている。

そして、この次にこんな事が出来る機会がいつ来るかは分からない。ならばこの一秒一秒を大事にしよう。和明はそう考え、点心を食べ切った。

「ふう、ぐ」馳走様でした」

「支払いは私のカードでしておくわ。和明くんは先に出ていて」

急に呼ばれたこともあり、和明の財布には当然ながらこんな店で払える金はない。ここは大人しくしほの言葉に従う。

やがて会計を終え、二人は歩き出した。飲食店の多い印象の中華街だが、直輸入の雑貨を扱う土産店やチャイナドレス等を扱う服飾店、八卦を使った占いの館や、ヌンチャクや棍を売っている武器屋まである。

関帝廟はそれらの中華街の建物の中でも有名な、関聖帝君——いわゆる三国志の武将、関羽を神として祀る一種の寺院だ。赤い鳥居は金の飾りが全体に施され、龍の彫刻が上には乗っている。

こんな立派な寺院まで普通に戦車で破壊して大丈夫なのだろうか。関帝廟の前に到着した和明は思わずそんな事を考える。

「この内部、及び近隣での戦闘行為は流石に禁止されているわ。流れ弾について大目に見てくれるだけでもお大尽……と言うべきでしょうね」

和明の表情からそんな気持ちを読んだのか、しほが説明しつつ先に進む。やはり無人のようだが、入り口に簡素な机が用意され、線香とライターが置かれていた。これも菊代の配慮だろう。

こういった場所の参拝の礼儀などは和明は全く知らなかったが、しほはその辺りも慣れているのか和明に礼拝のタイミングや線香の差し方までレクチャーしてくれた。

「関帝は商売の神として祀られているわ。言ってみれば、この中華街の守り神ってところね」

「不思議なもんですね。武将だったのに神様、それも武の神様でなく

商売の神様になったってのは。そういえば今年も伊勢で奉納試合をやりましたけど、戦車道の神様って居るんですか？」

「戦車道は元を辿れば流鏑馬やぶさめの流派だったのが、戦後に大量に残された戦車を利用する形で始まった近代競技なの。だから……」

関帝廟の境内を見回りつつ、そんな事を話す。日はだいぶ西に傾いてきていた。夕焼けが金細工に照り返し、煌びやかな光を放っている。

一通り中を見終え、二人は関帝廟を出た。さて、次はどこに向かうか。

「……ねえ、和明くん」

「はい？」

「いいえ……やっぱり、何でも無いわ」

ふと、しほが何かを言おうとしてそれを止めた。

何だろうと思えば、彼女の視線は和明の腕に向けられている。

「もしかすると……」

ある憶測が頭に浮かび、和明はしほに腕を寄せた。

「……どうぞ」

「っ?! い、いいえ、私は大丈夫だから……」

「折角なんです。やれる事は全部やりましょうよ」

「……」

僅かの合間、しほは悩んだようだったが——「おずおず」といった風で和明の腕に自身のしなやかな腕を絡ませ、身を寄せた。

しほの身長は実際高めで、和明と並ぶとほぼ並ぶような感じになる。頭一つほど低かった沙織の時とは些か勝手が違ったが、彼女の温もりがチャイナドレスのきめ細やかな布地越しに伝わってくるのが心地よい。

「歩きにくくない、和明くん？」

「ははっ、気にしすぎですよ。次はどうします？」

「何か買物でもしましょう。適当なお店でも回って……」

そして和明たちは何店舗かの雑貨屋や服飾店を覗いた。何か買うものを探しているではなく、何となく店を選び、商品について言葉を

交わす。

「しほさん、この扇子とか今のドレスと合うんじゃないですか？」

「ドレスの紫にこの色だと、ちょっと派手過ぎないかしら……？」

それは何気ない、世間のカップルや夫婦ならば当然のように交わす言葉。しかし——和明としほにとっては、今まで幾度もセックスをしていながら数年越しで交わせなかった言葉だ。そこに和明は温かさを感じていた。

「ソツ……そろそろ、飲み物でも買いませんか？」

「そうね。菊代はこの辺りでも用意してくれてる筈よ」

ぼちぼち喉が渴いてきた。和明の言葉にしほが先導し、通りを見回す。確かに少し離れたところにタピオカティーの店があるようだ。二人は再び腕を組み、そこへ向かう。

「……あれ？」

確かに無人の店のカウンターにはクーラーボックスが置かれていたが、それ以外のものも設置されていた。三脚に乗ったデジタルカメラだ。

「これは……？」

「和明くん、それ……」

しほが何かに気付く。視線を追ってみるとクーラーボックスに挟まる形で封筒が置かれていた。隅には小さく「菊代」と書かれている。「菊代さん？」

和明は封筒を取ると口を切った。中には便せんが入っている。それを広げると、美しい書体でこんな文章が書かれていた。

『お二方へ　お楽しみいただけられているでしょうか？　ささやかながら写真サービスを用意致しました。タイマー、連続撮影も可能ですので、記念をお残しく下さい』

更に続きには丁寧なことにカメラの操作法まで書かれている。

「……と、いづいとは」

菊代の手紙から何かを察した和明は、クーラーボックスを開ける。

果たしてそこにはバケツサイズのカップに入ったミルクティーと二本のストローが入っていた。

「菊代……」

しほは頬を少し赤くし、額に手をあてた。先ほどはやりたそうな素振りも見せていたが、やはり実際にするとになると恥ずかしいようだ。

ここは自分が先導すべきか。カップを手にすると、和明はしほに言った。

「やりましょう、しほさん」

「……ちよつと待っていて。タイマーをかけるから」

少し悩んでいたが、どうやら「やってみよう」という気持ちが勝つたようだ。自らカメラを弄り、タイマーを操作する。

「向きは……その壁でいいかしら？　和明くん、そこに立つてもらっていい？」

「分かりました。ストローは差しておきますね」

指示に合わせて和明はレンズの先に立つ。しほは位置を微調整するとタイマーをセットした。電子音が鳴り始め、しほが素早く和明の横に来る。

「……う？」

黒い粒が入ったミルクティーを前に、戸惑うようにしほは和明を見た。

数秒の間の後、あることを推測する。

「しほさん……もしかして、こういうの飲むの初めてですか？」

「ええ……和明くん、これはどう飲むの？」

「別に特別な飲み方がある訳じゃ……俺がこっちのストローで吸いますから、しほさんはそっちから吸いながらカメラを見てください」

「分かったわ……んっ……」

しほは慣れない仕草でカップの反対側に手を添え、ストローを咥えた。カメラに送る流し目が何とも艶っぽい。

タイマーを示す電子音の間隔が短くなってきた。シャッターが切れる前兆だ。和明もストローを咥え、しほに顔を寄せてカメラを見る。

直後、電子音が止まりシャッター音が響いた。

「……ふう、もう大丈夫ですよ」

「つば……ありがとう、和明くん」

「いいえ。俺も嬉しいです……このまま、温くなる前に飲みましようか」

感謝を口にするしほに和明は答え、再びストローを啜えた。しほも同時にミルクティーを飲み始める。

「……………」

「……………」

何と言うか、こうして顔が当たる程の距離でしほと同じものを飲むというのは不思議な興奮を生むものだ。和明は思った。

しほの薄化粧の映える顔立ちも、切れ長の瞳も、不慣れな感じで夕ピオ力を吸う仕草も何とも愛らしく、それこそ母子ほどに離れた年齢の女性でありながら——可愛いと素直に思う。

「ふう……ちよつと、一度置いていい？」

「ンツ……ええ」

一旦口を離し、しほがカウンターにカップを置く。

その時、初めて和明はチャイナドレス姿のしほの背後を見た。整った背中から腰にかけての綺麗なライン。そして——

「……………」

尻に視線が届いた時、和明の瞳が見開かれた。

しほの肉感的な尻がチャイナドレス越しに浮かび上がっているのだが、それは下着の形でなく、くつきりと尻肉の谷間まで形作られている。

びくと和明の肉棒がズボンの中で跳ねた。しほが振り返るのを待たず、カウンターに立つしほに近づく。

「本当に今日はありがとう、和明くん。お陰で……んっ？」

「……………しほさん」

礼を言おうとしたしほに背後から寄り添うように和明は密着した。

それは「今の彼女」を人目から隠したいという衝動と、急激に湧き上がってきた欲情の両方がさせた行動だった。

「ど、どうしたの、和明くん？」

「しほさん、今、ひよつとして……ノーパンですか？」

「……！」

しほの息を呑む気配が伝わってくる。それだけで和明は自分の推測が当たっている事に気付いた。

和明に尻を向けたままの彼女の腰にするすると指を下ろし、チャイナドレスのスリットからしほの下腹部へと侵入する。

果たして和明の指は下着を経ること無くしほの陰毛の感触へと辿り着いた。指先に熱い湿気が伝わってくる。

頬を赤く染めつつ、しほは答えた。

「え、ええ……履いてないわ。上も、下も……」

「……！」

今度は胸に触れてみる。確かに布地越しに感じるのは拘束されていないしほの生の乳房の弾力だ。

「あんっ……！」

「な、何で……？」

「こ、こういうドレスは着るのは初めてだったのだけど、菊代から『見た目のラインが崩れるのは、下着は着けない方が良い』と教えられて……それと、貴方がこちらの方が悦ぶからって」

喘ぎつつしほが言う。どうやら菊代は只のデートで終わらせるつもりは無かったようだ。

衝動のままに右手でしほの乳房を揉み、左手で秘所を弄る。

「んあっ、ああっ！」

びくんとしほの肢体が跳ねる。ただ、和明の手の動きにはまだ迷いが残っていた。それはこんな場所で始めて良いのかという理性的な判断と、しほととのデートを結局セックスで終わらせてしまっただけかという男性としての迷いだ。

乳房を揉む和明の動きにその迷いを感じ取ったのだろうか。しほは抵抗を見せず、切なそうに和明に振り向くと言った。

「か、和明くん……残り時間って、あと、どれ位だったかしら……？」

「ええと……あと、一時間くらいです」

「お願い、和明くん。ここで……して。誰も、いないから……」

そう言いつつ、しほは豊かな尻を和明の股間へと擦り付ける。窮屈そうにズボンの中で暴れる肉棒はその刺激で更に脈動する。

「くうっ、い、いいん、ですか……？」

「昨日から我慢していて、凄く、切ないのっ……ここでする事も、思い出にしたいから……!」

「……分かり、ました!」

「ンンッ!」

和明は自身の衝動を抑える事を止め、欲情に任せるままにしほの乳房を揉みつつ首筋にキスをした。しほの口からは嬉しそうな嬌声が漏れ、身体から立ち上るフェロモンめいた香りが強まったように思える。

カウンターに手をついた状態だったしほだが、彼女の手が和明の股間に伸びてきた。ズボンの上から肉棒を愛おしそうに撫で、流れるようにジッパを下ろしてくる。

「ああ、し、しほさん、堪らないっ……!」

「和明くんの、指もっ……ああっ!」

片手で器用にジッパを下ろし、留め具を外す。和明はしほの股間を弄っていた指を離すと腰を揺すりながらズボンを半分下ろした。しほの指がトランクスの淵にかかり、ずり下ろすと共に肉棒を開放させる。跳ねるように肉棒が露わになり、店内の空気に生臭い淫臭が混じる。

平時ならば観光客や学生などで賑わう無人の店舗で、チャイナドレス姿のしほを犯す。それは堪らない背徳感を和明に覚えさせた。

しほの指が肉棒の竿を包むように握り、扱き始める。次第に亀頭からは先走りが滲み、しほの手の動きをより滑らかにしてゆく。

「しほさんっ……しほさんっ……!」

「んあっ、ああんっ!」

彼女の名を呼びつつ重い乳房を揉みしだき、濡れ始めた秘唇を指でなぞり、孔に丁寧に一本挿入する。艶やかな黒髪を振り乱し悶えるしほの反応が何とも愛らしい。挿入した指を包む熱い締め付けが、彼女

の興奮を教えてくれる。

同時にしほのしなやかな指が与えてくる刺激に、和明の肉棒も強い興奮を示していた。血管を浮かび上がらせ膨れ上がった肉棒はしほの手の中で暴れ、更なる快感を求めて反り返る。

「か、和明くんっ……そろそろ、挿れて……!」

「ええ、俺も……限界です……」

もどかしそうに腰を揺するしほから一步離れ、彼女のチャイナドレスの裾を捲り上げる。太ももまでを黒いストッキングに包んだ美しい脚の間にある張りのある尻はひくつく薄茶色の窄みまでが丸見えで、和明の欲情を更に高めてくる。

和明は秘所を弄る指を抜き、自身の肉棒に添えた。暴れる肉棒の角度を下げ、しほの秘所へと押し当てる。

「それじゃ、いきます……ぐうっ!」

「は、早く、きてっ……んああっ!」

ズブズブとしほの膣内に肉棒を突き入れてゆく。その締め付けはいつもより強い。無人の街と分かっていても露出プレイに近いこの状況に彼女も興奮しているのだ。その中は十分に潤み、和明の巨根を嬉々として呑み込んでいる。

これなら遠慮は不要か。和明は息を吸い、大きく腰を引くと一気に奥まで突き入れた。

「んっ、ひいっ!」

「しほ、さんっ……いつもより、強いっ……!」

大きいストロークでの抽送を続けつつ、次第にその速度を上げてゆく。腰を止めないまま和明はしほの胸も激しく揉む。カウンターに手をつき腰を突き出す格好になった事でしほの乳房は更に重みを増し、チャイナドレスの布地越しでも乳首が突起しているのが分かる程だ。

覆いかぶさるように和明は上体を下げつつ腰を振り、夢中でしほの膣内を堪能する。一方のしほも自ら腰をくねらせ、和明の肉棒から更なる快感を貪ろうとする。

「ぐっ、ううっ！ 締まるっ！ しほさんっ！ ああっ、しほ、さんっ！」

「あっあんっああっ！ もっと、もっときて、和明、くんっ！ 和明くんの、ちんぽっ、もっと感じさせ、てえっ！」

激しい動きにカウンターが揺れ、カップに残ったタピオカミルクティーが波を立てる。ぱんぱんと互いの肉が打ち合う音と喘ぎが店内に響き、おそらく通りまで聞こえているだろう。

和明は動きを変え、ストロークを弱めつつ細かく腰を動かす。強い射精感が腰の奥からこみ上げてくるのを感じる。

「ぐっ、く、ああっ！ しほさんっ！ そろ、そろっ……！」

「ああんっ！ き、来てっ！ 和明くんっ、全部、膣内につ……射精、してえっ！」

犬のように舌を出し射精をせがむしほ、その淫らな姿に和明はとどめとばかりに腰を突き込み、一番奥で我慢を解き放った。

「おっ、おおっ……！」

「んあっ、あ、ひああっ！」

どくどくと濃厚な精液が彼女の膣内へと流れ込んでゆく。背を反らし悶えるしほの顔に自身の唇を寄せ、挿入したまま和明はしほと熱いキスを交わす。

「んっ、ちゅ……しほ、さんっ……」

「かずあき、くんっ、ンツ、ちゅっ……」

唇を重ねたまま、射精が終わるまで二人は繋がっていた。どくんと腰が震える度に精液が流し込まれ、結合部から溢れた白濁液が床に落ちる。

たっぷり数十秒の間の射精を経て、ようやく和明は肉棒を抜いた。しほは荒い吐息で崩れそうになる身体をカウンターに任せている。

「……あ」

そこで和明は、今になって事後処理の事を考えていなかった事に気付いた。店には悪いが、ペーパータオル等を借りられるだろうか。

「んっ……和明くん、そのままでもいい」

「しほさんっ！」

ふと、気怠げにしほが身を起こすと和明の前に跪いた。

「はあっ……ん、あむっ……」

「うおっ……!」

そのまま口を大きく開け、しほは愛液と精液に塗れた肉棒を咥え込んだ。息苦しそうな気配も見せず、しほは舌で亀頭から丁寧に淫液を舐め取ってゆく。

「んぶっ……ふうっ、ンンッ……」

「あ、くっ、ああ……」

しほの汗に濡れた髪に触れつつ、和明は喘ぐ。半勃起だった肉棒は再び充血し、彼女の口腔内を押し広げてゆく。

「し、しほさん……そのままだと、またっ……!」

「じゅるっ、っぱ……い、いいわ、出して。下だけじゃなくて、上にも、飲ませて……ちゅ、ちゅうう……」

「ああっ、しほ、さんっ!」

一旦肉棒から口を離し、愛おしそうに竿に頬ずりすると再び口淫を再開する。射精直後に刺激を与えられたこともあり、次の射精感は和明の予想以上に早くこみ上げてきた。

「ぐうっ! し、しほさんっ、出るうっ!」

「ふあ、あ、んむうっ!」

二度目の射精とは思えない量がしほの口腔内に放たれる。

「ンッ……こくっ、こくっ……」

「しほ、さんっ……!」

生臭い精液を躊躇することなく嚥下してゆくしほ。

それらを完全に舐め取られるまで、和明の肉棒はしほの唇と舌に拘束され続けた。

自分たちに許された時間が終わったのは、それから数分後の事だった。

迎えに来た菊代が用意したスーツにしほは素早く着替え、この後参加する戦車道イベントへ向かっていった。

「ありがとう、和明くん。楽しかったわ」

そう言い残したしほの表情は晴れやかで、一方的に気持ち良くしてもらっただけに思っていた和明に満足感を覚えさせた。

スタッフとしての仕事は終わってしまったので、和明はその後のイベントを観客として楽しんだ。

中華街でチャイナドレス姿で砲撃を繰り広げる戦車道の選手たちの姿は美しく、その中でもしほの姿は華やかにイベントを彩っていた。

——ただし、この一件は後に別の弊害を生むことになった。

熊本県、西住家邸宅。

比較的暖かい熊本の地でも風は次第に冷たさを増し、冬の訪れを感じさせる。

「奥方様、お飲み物をお持ちしました」

しほが書齋を兼ねている和室。菊代は湯飲みと急須を盆に置き、障子戸の前で声をかける。

「ありがとうございます、入りなさい」

「失礼致しま……？」

音もなく戸を開けた菊代は、怪訝な顔で室内を見た。机だけでなく、畳にまで幾つもの冊子や本が広げられている。

「……奥方様、確か今のお時間は『次の流派内の試合会場について選定』をされていたかと思うのですが？」

「ええ、そうよ」

しほの表情は静かなままだ。菊代は手近な本を手にとった。

「これで安心、彼氏と行くデート名所百選」「最高のキスができる！思い出作りスポットセレクション」「絶対に失敗しないデートコース選び」——

「奥方様？」

「案外よい場所というのは見つからないものね。菊代、貴女はどう思うかしら？」

「はあ……とりあえず、浦安のテーマパークを貸切るのは止めた方が

よろしいかと」

ひよつとすると自分は、妙な知恵を彼女に与えてしまったのではないだろうか。

菊代はそう思い、深くため息をついた。

【俺と家元（かのじよ）と中華街 終わり】

制服家元・公式実装記念 特別編・俺と家元（かのじよ）と先輩後輩

大洗女子学園。

ほんの数年前までは名物と言えば鮫鱈鍋程度の「歴史だけが長い学園艦」と評価されていたこの学園は、様々な事情と偶然が重なった事で再開した戦車道によって一躍「戦車道界の伝説的学校」として名を上げるようになった。

「戦神」西住みほによる、高校戦車道全国大会・初出場初優勝。夏の終わりに繰り広げられた「天才」島田愛里寿率いる大学選抜との激闘の末の勝利、更には新戦力を加えての冬の無限軌道杯での大勝。それらがどれ程の快挙だったのかは、翌年の同校に「西住みほが在籍している内に学びたい」と戦車道履修を求める入学希望者が殺到した事からも伺えるだろう。

同時に学校自体が有名になった事で同校の制服やパンツァージャケットも知られるようになった。クリスチャン系を示す胸元の白い十字をあしらった緑と白を基調とした清潔感ある制服、そして紺のジャケットと白のスカートで、そのままフォーマルな場にも出られるパンツァージャケット。それらは今や戦車道を志す少女たちにとってステータスだ。

「それはまあ、分かりますけど……」

スタッフ章を腕に嵌めた篠原和明は改めて眼前の二人の家元、西住しほと島田千代の姿にどういうコメントをすべきなのか困惑しつつ言った。

「ふふっ、まだまだ悪くないと思わない？」

「……そう思ってるのは貴女だけよ、千代」

愉快そうに微笑む千代に、しほが恥じらい混じりの言葉をかける。

——二人は今、その大洗女子学園の制服を着ていた。おそらくサイズは長身の彼女らに合わせたLか、LLサイズ。しかしそれでも熟れた身体を覆うには足りないのか、胸の辺りは豊満な乳房によって布地

が強く押し上げられ、裾が足りておらず臍が見える状態だ。

更に下は下で制服のスカートは丈が短めで太腿から下はほぼ丸出し。おそらく何かを拾おうと屈んだだけで尻が見えるだろう。おまけに制服らしさをイメージしたのかストッキングも履いていない素足である。考えてみれば、普段から男物のスラックスばかり履いているしほの素足をセックス中以外で観たのは初めてかもしれない。

「それにしたって二人とも、幾ら企画でも拒否すれば良かったんじゃない……」

「負けは負け、そこを誤魔化す訳にはいかないわ」

和明の言葉にしほはきっぱりと答える。だが、制服姿でそう言われなくても今ひとつ空気は引き締まらない。

現在、和明たちは大洗で開かれた戦車道イベントに参加している。もともと大洗は海水浴場などを有する茨城随一の観光地だったが、「高校戦車道の聖地」と呼ばれるようになってからは戦車道もひとつの名物となっており、戦車道プロリーグを盛り上げたい連盟の思惑とも一致して定期的に大規模なイベント——戦車試乗、エキシビジョンマッチ、プロ選手との交流など——が行われている。

そんな中、来賓として招かれたしほと千代はその企画のひとつ「最新戦車道ゲームで負けたらエキシビジョンマッチに制服姿で出場」で負け、今の恰好となったのだ。千代は愛里寿と遊ぶ機会が多かったからか意外と上手かったのに対し、しほは操作方法もおぼつかない様子だったのが印象に残った。

「エキシビジョンの相手、みほさん達でしたよね？ 何か言っていました？」

「今の篠原君と同じような顔で、コメントに困っているようだったわ。『笑うにも笑えない』といったところでしょうね」

「しほは普段から接し方が重いのよ……うちの愛里寿は笑ってくれたわ。『大洗の制服が着れて羨ましい』って。あの子、西住みほと戦うために他校に転入したけど制服には憧れてたから」

小さくため息をつくしほ。それに対し千代は手にした扇子を広げて口元を隠しつつ言う。

『エキシビジョンマッチ開始、30分前です。選手の方は指定の場所への集合をお願いします』

「さて……それじゃ行きましようか、しほ」

「……早く脱ぎたいものね」

場内放送が流れる。それを合図に千代は身を翻してしほを促す。気持ちを切り替えるようにしほは表情を変え、彼女に続く。

「あの、二人とも気をつけて」

「ありがとう、和明君。また後で」

見送る和明に千代は僅かに振り返り、流し目を送りつつ言う「と今度こそ歩き去る。」

和明も暇という訳でもない。連盟スタッフとして観客の誘導や場内整備など、する事は多い。

「荒れるかもなア……今日の試合」

そう呟き、和明は作業に復帰するため会場に向かった。

——エキシビジョンマッチは色々な意味で盛り上がった。

自分の制服姿を楽しむようにゆったりとした試合運びで、砲塔から身を出して戦う千代。

対照的に出来るだけ試合を早く終わらせようと電撃戦を仕掛けつつも、いつものように身を出すのを出来るだけ避けつつ、しかし習慣でもそれでも制服姿を時折晒しながら戦うしほ。

それに対し苦笑い混じりで応戦するみほ、まほ、愛里寿。彼女らの戦いは聴衆を——特に男性の観客を——沸かせるに足りるものだった。

『プロリーグチーム・フラッグ車、走行不能！ よって西住・島田流連合チームの勝利！』

フラッグ車であるみほのIV号戦車から白旗が上がり、試合終了を告げるアナウンスが流れる。

自分の当番を終えた和明は途中から観戦したが、それでも十二分に楽しめるものであった。

「……………」

まるで自分が参戦していたかのような緊張感が解け、思わず息を漏らす。

その時、ふとポケットの携帯が鳴った。

『千代：1時間後、大洗ホテル。部屋番は——』

簡潔な内容のメール。おそらくは戦車の中から送ってきているのだろう。

確かに今日の展開ではかなり二人とも熱くなっている筈だ。自分もそれなりの覚悟が必要かもしれない。

「お先失礼します。お疲れ様でしたー！」

「お疲れ様ー」

エキシビジョンマッチが終われば、あとは幾つかの店舗や屋台での販売を除けば撤収作業となる。和明は後続のスタッフに挨拶をして手早く会場を出た。「大洗町」と呼ばれてはいるがその面積は約24？、戦車や自動車ならばともかく徒歩で移動するにはなかなか手間である。

和明は右手に夕暮れの海岸を望みつつ、ホテルへの道を歩く。少し前にみほの友人の武部沙織を相手に彼氏役をしたり、やはりみほの友人である秋山優花里の母親、秋山好子と肉体関係を持ったりと、この街や学園艦とは何かと縁が深い。

そんな事を考えている内に、遠くに見えていた大洗ホテルが次第に大きく見えてきた。海辺に面したこのホテルから見る夜景は見事なものだろう。振り向いてみれば、大洗港に接弦された学園艦がその巨大な艦体を浮かべている。

「ご無沙汰しております、篠原様」

「そう……ですよね。中華街の時以来……でしたっけ」

「最近では地方のプロリーグの宣伝イベントも増えましたから。私個人としても、篠原様にお教えしたい事も多いのですけど」

ホテルの玄関口で待っていた、黒髪を簡素に整えた菊代が和明を出迎える。会話を交わしつつ彼女に促され、和明はホテル内へと入りそのまま奥のエレベーターへと進む。

だが何故か菊代はエレベーターで止まり、そこからは和明だけで行

かせるつもりのようなだ。

「お二人は既にチェックインされてお部屋におりますので……」

「あれ？ 菊代さんは行かないんですか？」

「些か今回は付き合っていて……いえ、私が傍に居ると没頭は難しいかと思えますので。こちらだけお渡ししておきます」

今、「付き合っていない」と言いかけたように聞こえたのは聞き違いだろうか。菊代から精力剤を受け取りつつ和明はエレベーターに入り、彼女に見送られて階上へと向かう。しほ達が待つのは何時も通り連盟が来賓用に用意した最上階のスイートルーム。ガラス越しの眼下の光景を眺めつつ、喉を焼く辛さの精力剤を飲み干す。

間もなくエレベーターは止まり和明は無人の廊下に出た。最初の頃は高級な絨毯を踏むだけでも緊張したものだ、我ながら慣れたものだ。少しの時間で部屋を見つけ、静かにノック。

「……………」

『和明君？』

「すみません、遅れました」

「いいわ。鍵を開けるから、自分で入って」

千代の声がドア越しに届く。ロックが外される音。和明は僅かにドアを開けて滑り込むように入る。

「え!?! ち、千代さん!?!」

室内に入った和明は、中で待っていた千代としほの姿に驚いた。てつきり何時もの服に戻っていると思っていたのだが、彼女らは先ほどの丈の足りていない大洗の制服のままだ。

「ふふっ、期待通りの反応ね」

「……………」

部屋の奥に居たしほが視線を逸らす。

「しほさんまで……その、何で着替えてないんです？」

「折角の機会なもの。特にしほは一度脱いだら二度は着てくれないだろうから……」『その恰好のままのが和明君は悦んでくれる』って言うて、ね？」

そう言う千代はどうにも嬉しそうだ。彼女にしてみれば絶好の、し

ほを弄れる良い機会なのだろう。

制服姿のままチェックインしたのだろうか。ロビーの客の目に晒される制服姿の二人を想像しつつ、和明はしほに近づいた。

「ど……どうかしら、和明くん？」

「……いいと、思います」

ごくりと喉が鳴る。

イベント会場では何とも違和感を覚えたしほの制服姿だが、今こうしてホテルの一室で「これから彼女とセックスをする」という前提で改めて向き合うその姿は——和明の中から否応なく興奮を湧き上がらせた。自分よりひと回り年上の、それこそ母親並に歳の離れた大人の美女二人の制服姿は酷く倒錯的で、それゆえに煽情的だった。

「ふふっ……こっちもいい反応を見せてくれますね、『先輩』？」

いつの間にか千代は和明の背後に回っており、後ろから身体を密着させるとジーンズの上から股間を撫でてきた。制服姿を見た時から半勃起状態だった肉棒がぴくりと反応する。

「せ、先輩？」

「今の私たちは高校生だもの。大学生の貴方は『先輩』って事で」

そう言いつつ千代はゆったりと股間を撫でつつ反対の手でジツパーを下ろす。和明は千代に言った。

「いや、でも、大洗って女子高じゃ……？」

「その辺りは気にせず行きましょう。それに……私もしほも女子高だったから、『格好いい男の先輩』って憧れだったの。そうよね、しほ？」

「……………」

しほは否定せず和明との距離を詰める。前後から制服姿の二人に挟まれる格好になった和明は、しほの潤んだ瞳と視線を交わす。

「……………しほさん」

「和明くん……その、呼んで、いっ……」

おずおずと尋ねてくるしほ。頬を染め、まるで初めての告白をするかのような彼女に対して拒否する事ができる男性は居ないだろう。

先輩らしい返し方とはどんなものだろう。考えつつ和明は答えた。

「ああ、構わないよ。西住」

「……し、篠原先輩……んっ」

「ん、ちゅ……」

まるで「おあずけ」を許された犬のようにしほは和明の唇にキスをした。そのまま唇を離すことなく、積極的に口腔内に舌を割り入れてくる。和明はそれに応えつつ、制服越しに押し付けられるしほの豊富な乳房の感触を堪能する。

「ふふっ、先輩の……、もうこんなに固くなってる……」

背後からは千代が耳元で囁きつつジーンズの留め具を外す。背中に押し付けられる彼女の乳房の温もりから、千代も興奮しているのが伝わってくる。

「ちゅ、はあっ、あふっ……先輩、先輩っ……」

「し……西住の、凄く熱く、なって……ちゅ……」

和明はしほと更に深いキスを交わしながら彼女の乳房を制服の上から掬い上げるように揉む。

「ん？」

その触感に強い違和感を覚え、その手が一旦止まる。指先に感じるのは布地と、その下の熱く張り詰める乳房の感触だけだ。

「西住、ブラ……着けてないのか？」

「はっ……はい、先輩と、早く、したくて……」

「本当にえっちなだ、西住は」

「んっ、ああ、あうっ！」

和明はそう囁き、しほの胸を更に揉んだ。掌の中で乳首が突起してきているのが分かる。ずっしりとした重みが心地よい。

「ご、ごめんなさい、先輩っ……」

「構わないよ。えっちな西住も大好きだ」

「んっ、ああっ！」

最初こそ戸惑いを見せていたしほだが、割とノって来たようだ。和明を先輩呼びするのも抵抗なく、制服に食い込む指の動きに喘ぎを漏らす。

ここまで来たなら自分も先輩になりきろう。和明は肉棒を弄る千代

の動きに腰をひつくかせつつ思った。その動きはいつも以上に献身的で、憧れの先輩に奉仕する後輩の女子を確かに意識させる。

「私も忘れないでね、先輩?」

「あつ、ああ……島田の手も、凄くいい……くうっ!」

甘く囁く千代の声。それと共に彼女の手は和明のトランクスをずり下げて肉棒を露出させる。既に250mlエナジードリンク缶サイズまで膨れ上がったそれは、千代の手の中で激しく脈動していた。

「んふっ……先輩のチンポ、もうこんなに大きくなってる……」

「ちゅ、はあつ……ず、狡いわ、千代……私だって、先輩の……」

「うおっ!?! ふ、二人ともっ……!」

千代に独占されたくないのか、しほが対抗するように肉棒に指を絡めてきた。まるでどちらが和明をより気持ちよくさせられるかを競うように、しかしそれでいて互いの行為を妨害しないよう繊細な動きで肉棒をしこしこと扱ってくる。和明は思わず腰を震わせて呻いた。

あるいは学生時代の二人は、本当にこんな感じで張り合っていたのではないだろうか。そんな風に思えるほどに今日の二人の責め方は情熱的だ。

和明は快感に喘ぎつつも彼女らに言った。

「な、なあ西住、島田……手も良いんだけど、二人いっしょに……口で、してくれないか?」

「んっ……ふふっ、篠原先輩、今凄くスケベな顔してる」

「ちゅ……は、はい……先輩の、舐めさせてください……」

からかうような微笑みと共に前に回り、優雅に腰を落とす千代。

濡れた唇を震わせ、従順に跪くしほ。

その艶めかしい顔立ちも、豊満でありながらも同時に引き締まった肢体も、汗ばむ肌もまさしく大人の女性のそれで——にも関わらず、その身を包むのは清楚さと清潔感を感じさせる大洗の制服で——本来なら噛み合わないはずの二つの要素が噛み合った二人の人妻の姿は「淫猥」という言葉でも足りなかった。

和明はジーンズを下着ごと脱ぎ下半身を丸裸にすると、左右に跪く二人に突きつけるように肉棒を寄せた。

「ああ……先輩の、凄いいましい……」

「早く楽にさせてあげないと……しほ、私は右からするから、貴女は左ね」

「分かったわ、始めますね、先輩……あむっ、ちゅ……」

「お、おおっ!？」

竿の左右から同時に唇を押し当てられ、和明は思わず腰を跳ねさせた。そのまま二人はまるで横笛を吹くように肉棒への奉仕を継続する。血管を浮かべる赤黒い、醜い程に膨れ上がった怒張。それがまるで極上の果実であるかのように二人は舐め、吸い、愛おしそうに頬を寄せる。

「れろっ、あふっ、ど、どうですか、先輩……?」

「あ、ああ、西住、いいよ、最高、だっ……!」

「じゅるっ……ふふっ、先輩の先っぽ、パンパンになってる……ちゅ、んんっ……」

「うおっ、し、島田、そこっ……!」

しほが竿に舌を絡める一方で、千代はカリの裏辺りを舌尖で責める。先ほどまでの手淫で十分に滾っていた肉棒は、二人の赤い蛇のような舌によって急激に絶頂へと導かれてゆく。

「ふぁ……び、びくびくしてきてる……篠原先輩、もう、イキそうですか?」

艶やかな黒髪をかき上げつつ、亀頭に吐息を吹きかけるしほ。

「ンツ、ちゅ……いつでも、射精してください、先輩っ……」

竿の根本からキスを繰り返し、精液を求める千代。

制服姿の二人の淫らな姿を見下ろしつつ、和明はついに絶頂に達した。

「ぐっ、お、おあぁっ!」

「はあっ……!」

「あ、熱い、先輩のっ……!」

越しの奥から押し寄せる射精感を解放し、和明は二人の顔に精液を迸らせた。粘りあるドロドロの白濁液がしほと千代の顔を、髪を、そして清廉な色合いの大洗女子学園の制服を汚してゆく。

「あつ……ああつ……！」

「んむっ、ちゆ、んっ……美味しい、先輩の、精液……」

「ちよっとしほ、独り占めは駄目よ？ 私にも……あふっ、先輩の精液、生臭くって、素敵っ……！」

自分でも驚く程の射精量。腰が跳ねる度にどくんと精液が鈴口から溢れる。それをしほは自ら口元を寄せ、零れる精液を舌で舐めとり、嚙下してゆく。そこに千代も近づき、奪い合うように亀頭に舌先を伸ばす。

射精が完全に治まるまでの数十秒、和明は腰が抜けそうな程の快感の中で二人の人妻に精液を与え続けた。

「こくっ……ふふっ、ぐ馳走様、先輩」

「あ、ありがとうございます、先輩……」

蠱惑的に微笑む千代と、口の端に精液の残渣を残しつつ感謝を口にするしほ。

「……っ！」

射精したばかりの肉棒が再び充血し、和明の股間を起点に反り返る。

——従順な後輩になり切っている二人とのセックスをもっと楽しみたい。そんな衝動が和明の中から強くこみ上げてきていた。彼女らと同様に先輩になりきり、和明は言った。

「おいおい二人とも、これで終わりとか思ってたのか？ 俺がこんな程度じゃ治まらないのは知ってるだろ？ ほら、いつもみたいにベッドでおねだりだ」

「……はい、先輩。しほ、いつも通りにしましょう？ そうしないと先輩、チンポを挿れてくれないわよ？」

「え？ あつ……」

和明の言葉に千代が意図を察し、しほを立ち上がらせるとベッドへと促す。和明はあえて何も言わず、シャツを脱ぎつつベッドへと近づく。

ダブルベッドの上、制服姿のまま二人は和明に腰を突き上げ、尻を向ける格好となっていた。千代が右、しほが左。

「うお……西住、それっ……!」

男が夢見る景色の中でも絶景と呼ぶに足る絵面だったが、更に和明を昂らせたのは彼女らの履いていた下着だった。

ブラと違つてショーツは着けていたが、それは普段のレース付きのやシルクでなく少女らしいコットンパンツ、しかもクマのキャラクターがプリントされた可愛いものだ。そんなコットンパンツが肉付き良いムチムチの尻に履かれ、限界近くまで布地を張り詰めさせている。

しほが自らこんな下着を履く筈はない。おそらく千代が事前に打ち合わせて履かせたのだろう。

「うう……」

「あら、しほは恥ずかしくて言えないみたいね? それじゃ、私から……」

和明の視線を受け、しほが赤くなった顔を伏せる。その様子を横目に千代は言うど、包帯を巻いたクマがプリントされたパンツに包まれた尻を緩やかに振った。

「篠原先輩、もう、パンツの中がグシヨグシヨで、辛抱できないの……お願い、先輩のバキバキのチンポで、千代のおまんこ、慰めて……! っばいズゴズゴして、思い切り出してっ……!」

「(うお……)」

流し目をこちらに送りつつ挿入をねだる千代の姿に、和明の肉棒はびくんと跳ねる。

「……………」

和明の意識が千代に向いたのを感じたのだろう。顔を伏せていたしほは此方向き、濡れた黒髪を頬に貼りつかせつつ口を開いた。

「せ……先輩、お願いします……大好きな先輩のじゃなきや、ダメなの……先輩の太くて、固いチンポが、欲しくつて、しほのおま、おまんこ、疼いて、苦しいのっ……篠原先輩のちんぽっ、ちんぽ欲しい、欲しいのっ……!」

「西住……島田っ……!」

女子高の制服を着たまま、女子向けの下着を履いて挿入を懇願する

二人の熟女。知らない者が見れば、とても彼女らが日本戦車道を代表する重鎮二人であるとは思わないだろう。同じ男に抱かれている娘にすら見せられない痴態だ。

和明は溢れる唾を飲み込み、ベッドに上がり――

「ンンツ……嬉しいっ、先輩っ……！」

「えっ……せ、先輩っ!？」

――千代のパンツに手をかけ、ひと息にそれを脱がせた。亜麻色の陰毛に彩られた秘所は彼女の言葉通りにずぶ濡れで、上の褐色の窄まりまで濡れて照り光っている。

自身の肉棒に手を添え、千代の秘所に狙いを定めつつ和明は戸惑いを浮かべるしほに言った。

「島田の方がおねだりが早かったからな……西住、お前は後回しだ」

「そんなんっ……先輩、お願い！ 私に先にちんぽっ、ちんぽおっ！んあっ、ひいっ！」

普段の鉄面皮の女傑の顔を完全に捨てた隷従の姿勢で、しほは和明に挿入をねだる。しかし和明はあえてそれを無視し、絆創膏だらけのクマがプリントされたしほのパンツをずらすと指を差し込んだ。こちらも彼女が言った通りにグショグショで、陰唇を弄るだけで指がふやけそうな程だ。

「が、我慢しなさいな、しほ……いつもの先輩なら、私たちが気絶するまで最後はハメてくれるんだから……んああっ！ 来たっ、先輩の大きい、のっ！ あふうっ！」

「くうっ！ 島田の、締まるっ……！」

何やら恐ろしい事を言われた気がするが、和明も今更腰を止める事はできなかつた。一気に千代の奥まで挿入すると、きゅっと膣全体が肉棒を締め付けた。どうやら一突きで軽く達してしまったようだ。そのまま和明は腰を使い、彼女の膣内が与えてくれる快感を堪能する。

「ああっ！ 先輩、先輩の指っ、いい、いいっ！」

一方でしほに差し込んだ手を動かし、彼女の陰唇を中心に孔を弄る。しほの本気汁が指先に絡み、愛液の粘度と熱さが増してきている。

のが分かる。

パンパンと肉が打ち合う音がスイートルーム内に響く。千代の膣内はぐねぐねとうねり、和明の巨根から快感を得ようと締め付けてくる。

「うっ、くう……悪い、そろそろ抜くぞ、千代っ……」

「え？ 先輩、そんな、もっと……んあっ！」

名残惜し気な千代から肉棒を引き抜き、今度はしほのパンツを完全にずり下げて肉棒を宛がう。濃い陰毛に彩られたしほの秘唇は物欲しそうにひくつき、亀頭に彼女の熱気と湿気を伝えてくる。

「ああ……せ、先輩っ、早く、しほのおまんこっ、埋めてっ！ 先輩のチンポで、いっぱい、してえっ！」

「ああ、言われなくてもっ……うおっ！ お、ぐうっ！」

「んああっ！ すご、凄いいっ！ 先輩の、奥、奥うっ！」

かなり彼女が昂っているのは分かっていたが、それでもなおしほの膣内の熱さと締め付けは予想以上だった。もう逃がすまいとばかりに強烈な締め付けが竿の根元を中心に襲ってくる。

和明はそれに負けじとしほのむっちりとした尻を掴み、壊れんばかりの勢いで腰を使い始めた。

「くうっ……西住っ、だいたい、お前、スケベすぎるん、だよっ！」

「ふああっ！ っ、ごめん、なさいっ！ スケベでごめん、なさいっ！

先輩、先輩いっ！」

「ごめんじゃ、ないん、だよっ！ お前の試合、見てる男はっ！ 全員お前をオカズに、抜いてんだ、ぞっ！」

「ああんっ！ ごめんなさいっ！ 先輩以外の、オカズになって、ごめん、なさいいっ！」

それは実際事実だった。アスリート女子をオカズに抜く男性にコミュニティが存在するように、戦車道の選手をオカズに抜く手合いも少なからず存在する。そんな手合いの中でしほは絶好のオカズとして扱われている。和明はしほを詰りつつ、限界まで怒張した肉棒の抽送を繰り返す。結合部からは水音が立つほどで、ベッドのシーツに愛液と先走りが混じった淫液の染みを作る。

「ダメだっ！ 罰と、してっ！ 今日、俺のチンポに、ずっと、奉仕、しろっ！」

「はっ、はひいっ！ しますっ、篠原先輩のっ、チンポのっ！ 孔にして、くださいっ！ 先輩専用の、チンポ孔、にいっ！」

「ああっ、し、してやるっ！ まずは一発、出す、からなっ！」

「んひいっ！ うれっ、嬉しいっ！ 篠原先輩の、せいえきっ、せいえきいっ！」

すっかり汗を吸った制服の裾を揺らし、理性を完全に失ったしほが悶える。和明は獣のような声と共に、一切の躊躇なく精液を放った。

「が、あ、あああっ！」

「せいえっ、あっ、あああっ！」

どくん、と腰が震え、しほの一番奥に精液が注がれてゆく。

「ああ……最初はしほに持っていかれちゃったか。先輩、次は私よ？」

「あ、ああ……お、ぐうっ……！」

恍惚としたしほの顔を横目に千代が言う。和明はしほの膣内に精液を搾られつつ、千代に領いた。

「ああ……先輩の精液、素敵、いい……」

そして——完全に「性豪の先輩に蹂躪される後輩」になりきったまま、しほは絶頂に達した。

——これ以降、和明としほ達のプレイに時折この制服プレイが加わることになった。

なお、更に後に「まほでも大きいサイズの大洗の制服」をみほが発見し、このプレイ内容が露見して家族会議に発展。結果的に和明と関係する女性全員を交えての制服プレイが開催されることになるのだが——それはまた、別のお話である。